

汝・我・に・從・へ

榎本利三郎盲合子師記念誌



今よりわれは主なり

わが手より救ひだし得るものなし

われ 行なはば

誰か とどむることを得んや

(イザヤ書四三章十三節)



目次

一	記念誌の発行に当たって	榎本和義牧師	1
二	榎本師の歩み(牧師館訪問記から)		3
三	牧師通信		63
四	教会誌「ぶどうの木」から	榎本 和義	115
五	父の死	榎本 和義	134
六	榎本師前夜式		139
七	榎本師告別式		150
八	榎本師召天記念礼拝		161
九	榎本師記念会(先生の思い出)		171
十	利三郎先生の思い出(手記)		204
(1)	遠くにおられる方々		
	李 文 珠(カナダ)	正野 隆士(岡山)	
	野口 米子(天草)	井上 文子(都城)	
(2)	大阪集会の方々		
	石丸 幸子	正岡 晶子	堀中 洋子
	川越 正		
(3)	大濠公園教会の方々		
	上野 米子	岩崎 弘	北崎やす子
	大石 祥代	正野 暢之	正野 悠子
	緒方とみ子		
(4)	戸畑教会の方々		
	伊規須太郎	岩井芙美子	
(5)	八幡前田教会の方々		
	大田 敏夫	大田 邦子	川越シヅエ
	秦 タネノ	津留崎浩行	鈴木 一幹
	高木ツルエ	野村美恵子	大口 和子
	廣田千穂子	貞 一彦	中村栄之助
	河本 信生	小松 南子	林 由記子
	正野 真宏	正野百合子	尼田 隆己
	三好 翠	石田 秀子	早田 亨子
十一	母の生涯		榎本 和義
十二	百合子師前夜式		
十三	百合子師告別式		
十四	百合子師記念会		
十五	百合子師記念会第二部(思い出)		
十六	百合子先生の思い出(手記)		
	榎本 文子(大濠)	江口 亮子(大濠)	
	正野 悠子(大濠)	河本 米子(前田)	
	秦 タネノ(前田)	正野百合子(前田)	
	廣田千穂子(前田)	尼田 隆己(前田)	
	安東 倫子(前田)		
十七	思い出の写真集		

一 記念誌の発行に当たって

榎本和義牧師

「主は言われる、『あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである』」
(イザヤ四三章十節)

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」

(使徒行伝一章八節)

父、榎本利三郎と母、百合子が主の御許に召されて、はや三年が過ぎようとしています。父が二〇〇二年四月に召されて僅か八ヶ月後、まるで後を追うように二〇〇三年一月、母が召されました。二人は昭和十五年(一九四〇年)に結婚し、爾来、六二年近くの年月を、片時も離れず、終生共に牧会・伝道に携わってきました。それだけに、時を同じくして、まるで熟した果実が木から落ちるごとく、愛して止まなかつた主の御許に帰って行きました。残された私達は、その時の来ることを予測しつつも、余りに短期間の事態にどのようなように対

処すべきか手探りしつつ、今に至っています。

このたび、両親の生涯を記念する記念誌を発刊することとしました。それは榎本利三郎牧師を通して伝えられた信仰の原点を思い起こして、残された私達の信仰形成にいささかでも、指針を得たいと願うからです。長い間、礼拝を初めとして、各集会でのメッセージを通して、信仰について語られてきました。その根幹は最初に掲げた御言にあります。

榎本牧師は、昭和七年に福岡の浜の町伝道館で行われた新年聖会にて、主の十字架の御愛に圧倒されて、ご聖霊に迫られて献身に導かれました。献身修養の生活は実生活を通して聖書の御言を実験体得することに尽きます。それによって、神の証人となることに生涯を賭けたのです。神学的な訓練を受けるわけではなく、聖書そのものを神の言葉と信じて、ただひたすらご聖霊の導きに従いつつ、実践的に神様を知り、イエス様によって生きる体験を土台として得られた信仰でした。「聖書の言葉が真実かどうか、自分で確かめてみる。ウソだったら、そう言えばいい。また、真実だったら、ここに命と救いがあると信じ続ける」と、しばしば語っていました。それだけに、生き方は一面過激でもあり、厳格なところもありましたが、同時に、聖書の言葉を通して注がれる神様の愛、

力、望、慰めに満ちていました。「神様の言葉には間違いがない」というのも、たびたび耳にした言葉です。

母はそのような父の信仰姿勢についていくだけの靈的覚醒が少なかつたので、初期の時代には大変苦勞をしたようです。六人の子供を与えられ、そのうち二人を幼少のときに亡くし、失意と不信の時期を過ごしたこともあります。戦後の物資乏しい中で、信仰のみに立って、育児と家事を切り盛りしていくのは大変だったと思います。その間、人生諸般の喜怒哀樂を繰り返し味わいつつ、神様はいつくしみ育んでくださいました。患難・試練を通して、ご聖靈の慰め、励まし、支援を受けつつ、主との御愛の交わりに導かれてきました。晩年、殊に脳梗塞を起こして回復後、母の靈性は急速に深くなり、御言に信賴し、主の御愛と恵みに一切を委ねる平安な心境を得るようになったのです。

父にとって母は、単なる妻としてではなく、牧会・伝道の同労者として、車の両輪のごとく、相互に影響を与える不可欠な存在でした。母は表だった働きはしませんでした。父の信仰を実証する者でありました。父もまた母との生活の中で自分の信仰姿勢を絶えず新しくされていきました。こうした

生涯に導かれたことが、神様の御業であると思います。そのすべてを言葉で説明することは不可能です。「来てごらん下さい。そうしたら分かるだろう」と言うほかありません。この書に集められた文章はその一端です。しかし、わずかな証言を通して、読んで下さるみなさんに、少しでも神様の不思議な、驚くべき御業を知っていただきたいと願う次第です。それは特異な、常ならぬ事件や事象ではありません。平凡な伝道者の小さな人生に過ぎませんが、それゆえにこそ、神様の御業と確信しています。

八幡前田教会、福岡大濠公園教会、戸畑教会をはじめ、全国各地にあつて、彼らの長い牧会・伝道の生涯を通して、主にある暖かいお交わり、また篤いお祈りをいただいた多くの方々に、心から感謝と御礼を申し上げます。この書がいささかでも皆様の信仰の一助になることが出来れば、なによりも感謝です。

皆様のうえに、主の豊かな恵みと祝福をお祈り致します。

二〇〇六年三月

二 榎本師の歩み(牧師館訪問記から)

榎本先生の歩みは、そのまま八幡前田教会の歴史でもあり、これまでも教会創立五十年誌にも触れられ、先生ご自身の証しも寄稿されています。従って、ここでは若干重複する箇所もあるかと思いますが、教会誌「ぶどうの木」に五回に亘って掲載された「牧師館訪問記」を通して、先生の歩みを辿ってみたいと思います。

なお、「牧師館訪問記」は明治専門学校(明専)入学の時から始まっていますので、それまでの先生の主な経歴を年表で示せば、次の通りです。

明治四二年四月二八日 愛知県豊川市国府町、商家「伊川屋」
榎本久三・しなの三男として生まれる
大正四年四月 国府尋常小学校入学
大正十年四月 愛知県立第四中学校入学
昭和二年三月 愛知県立豊橋中学校卒業
昭和二年四月 明治専門学校(現九州工大)応用化学科入学
三年生の頃より集會に近づく
昭和六年三月 同校卒業

牧師館訪問記(一)

一 はじめに

神と共に四十年、この歳月は、榎本先生の歩みであると同時に、教会の歴史でもあります。

先生の生い立ち、信仰への道程は、説教の中でもたびたびお聞きしているように、先生を「人々からでもなく、人によってもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ……」(ガラテヤ一・二)とあるがごとく、ご自身の栄光の器として選び、かつ立て給うた父なる神様の不思議な摂理と導きとを、私達に示してくれます。

希望に燃えて科学の道に歩み、キリストを拒んでいた青年を、愛を持って捉え、伝道者として遣わされました。

それから四十年、その間、ただ主の御言にのみ従い、どんな小さな事でも神以外の杖となるべきものはすべて打ち砕き、「主は確かに生きておられます」と、先生は生活の中でそれを表わしてくださいました。

先生が歩み、また経験された主の恵みと御業とを書き残したいと思ひ、新しく生れた「ぶどうの木取材班」は、七月のある夕べに、牧師館をお訪ねしました。

外は激しく雨が降りしきっておりました。しかし、牧師館はにぎやかな取材班の押しかけ訪問で、窓打つ雨音もかき消されがちでした。牧師館でお茶を飲めば飲むほど恵まれる、と言われているとおり、一同大いに恵まれ、これからもたびたび押しかけようと思いました。

過ぎこし方を懐しげに話される先生は、とても若々しく、昔の事を実によく憶えていらつしやるのには、我々若い者も驚きました。

以下は、先生のお話しを取材班でまとめさせていただいたものです。

二 明専入学の頃



明専入学試験願書写真
(昭和2年 17歳)

それじゃ、学生に入る頃から話しましょうかね。僕は度々お話ししているように、日本の真ん中にある愛知県豊川市国府町の商家の次男坊(戸籍上は三男)として生れました。

当時は、同じ兄弟でも長男が優遇されて、次男以下はあまり投資してもらえなかった。ですから上の学校へ行くのに、商業学校ならやつてやろうというのを無理言つて中学校へ行ったものですから、もうそれでやめとけと言うんです。でも私は、中学校は「帯に短かし、タスキに長し」でどうにもならんから、もうひとつ行かしてくれ、できたら高校・大学と行きたいけれども頼んで、それなら専門学校ならやつてやろうということになったのです。早速、規則書を取り寄せて調べてみると、ほとんどの専門学校は三年制でしたが、戸畑にある明治専門学校(今の九州工業大学)だけが四年制でした。私は一年でも長く学校へ行きたいと思つて、明専に行くことに決めました。

その時の中学の先生が、「君はどうして九州くんたりまで行くのか。なぜ東京へ行かないのか」と言いました。東京の方が近いのですから、同級生のほとんどが東京へ東京へと行くんです。それをわざわざ遠い九州へ行くのですから、私は余程変り者のヘソ曲りだったのでしょうか。(笑い)

試験は大阪で受けました。それにうかつて、いよいよ入学

することになったのですが、まだあの頃は、九州と言えば日本の西の果て、遠い外国のような、ひげモジャモジャの「熊襲」の子孫が住んでいる(笑い)くらいに考えていたのですから……。それが下関まで来て、(当時はまだ関門トンネルがなかったので)連絡船を待つていましたら、目の前に山が見えていて煙突が何本も見えていました。けれども、まさかこれが九州だとは分かりませんでしたね。連絡船に乗ってわずか五分か十分で門司港に着いたものですから、びっくりしました。へエ！九州にもこんな都会があるのかあ(笑い)。そこから汽車に乗って戸畑駅に着いたのですが、当時の戸畑駅は小さな田舎駅でね、汚い所でした。見知らぬ土地で、何処をどう行つて良いやら分からず不安な気持ちでしたが、改札口を出ると、明専の先輩達が荷車を引いて、「新入生歓迎」とのぼりを立てて待ち構えているんです。それで、そこへ行つてこういう者ですと言うと、「いやあ、よう来た」と言つて、早速荷物を車力に乗せて寮まで運んでくれたのです。その時のうれしさつたらね、見ず知らずの所で、そのように兄弟のように扱つてくれるのですから。それもトラックでパーツと運ぶのではなく、自分達が車力を引っぱり、汗水流して運んでくれるというのがね、とつてもうれしく、良い所へ来たなあつて思いましたね。当時の戸畑は今みたいに大きくはなく、ちっぽけ

な町でね、明専の周辺は大根畑や蓮田がずうっと続いていて、近くの松林で本を読んだり、兎狩りをやりました。また、今の戸畑病院の所が、昔は十字路池といつて大きな池があつてね、そこでカヌー遊びもしましたよ。

学校の前に「福亭」という食堂が一軒あつて、よく出入りしたもんです。店の主人とおばさんがよい人でね、お金のない時でも、心よくツケで食べさせてもらつていました。家からの送金がある頃、おじさんが学校の門の所に集金に来ていました。

それでまあ、大きな夢を画いて明専に入ったわけです。この前、河本信生さんが、「先生、明専という学校はいい学校だったのですなあ！」と言うものですから、「どうしてですか」と聞くと、日経新聞か何かに、東洋レーヨンの会長をしている田代さんという人が自伝を書いてあつたのですね。この人は明専の第一期生なんです。それでその自伝の中で明専のことが出ていたわけです。確かに私達がいた時までには本当に良い学校でしたね。

というのは、この学校を創立した安川電機の安川さんが、東大総長の山川さんに頼んで、東大の優秀な人材を集めて教授陣を充実してくださつたから、期待に違わず良い学校でしたね。

私がこの学校に入ったという事は、今になって考えると、決して偶然なことではなく、また、私が選んで来たのでもなく、背後に神様の不思議な摂理があったと思います。

三 一言の祈り

二年の冬だったと思います。風邪を引いて中耳炎をやっちゃいました。それで小倉の堺町にある曾我耳鼻科(今でもあるそうですが)に、一か月ほど入院しました。何しろ当時はペニシリンもありませんので、絶対安静して氷で冷やす以外にないのです。それでも試験が間近に迫るので、気が気ではありません。看護婦さんに「帰りたい」と言うと、「あんた、死にたけりや帰んなさい!」と言われましたね。

「そんなこと言うて・・・死にやせんでしょう!」

「だってあんた、去年、あんたと同じ学生さんが、中耳炎がもとで脳膜炎を併発して、ここで死んだんだよ。あんた、死にたけりや、勝手に帰んなさい!」

こんなに言われたんじや、死ぬのは恐いんだし、仕方なくじつと寝て、天井の節穴を数える毎日でした。

寝ている時に、普段だったら心臓の鼓動は聞えませんが、でも、鼓膜の内側に膿が溜ると、自分の心臓のトクトク・・・という音が絶え間なく響くんです。気持の悪いものですね。

その時に、死というものを考えました。私と同じ年代の学生が同じ病気で一年前に死んだ……………だったら、自分も死ぬかもしれない。いや私は死なない!と言いたいのだけれども、押し返すだけの足場がありません。だから、慌てちゃったわけです。死んだらどうしようか……………そう考えたら望みがありません。何をしても、死んだら何にもならない……………勉強したってつまらんじやないか。それじゃ今度病気が治ったら勉強をやめよう……………。ところが、もし死ななかつたら、どうする?

そうなると勉強してないと、生活の事が心配になる。こうして生きていくのか、死ぬのか、中間にぶらさがっているという宙ぶらりんの状態というものは、本当につらいもんだなど、その時思いました。

それで、死という問題が私の心に大きな不安を与えました。だから、何やつても希望がないんです。何かやっていても、ふっともし死んだらお終いだ、なんて考えちゃう。それじゃ何もやらなくて満足があるかというところ、やっぱり不安なので、そういう不安が私を駆り立てて、人間の限界というものを感じて、これは何か偉大なものにすがらなければ、私は立つて行けないのだなあ、とおぼろげながら分かってきました。その頃進められていた運動に、後藤精香という人が中心と

なつてやつている「希望社運動」というのがありました。これは、難しい理屈は言わないで、毎日の生活の物事を、明るく明るく考えて行こうというものなんです。今考えると普通のクリスチャンなら誰でも考えることを、美しい言葉で言っているだけなのですけれども、その時の私にとつては、これこそ新しい生き方と思つて、学生の中でこの運動を進めているグループに入つて一生懸命やつたわけです。

この時、例の西原中将が、この希望社運動の一方の旗頭としてやつていたのですが、この人が小倉の師範学校に来たので、明専のグループと一緒に話しを聞きに行った時に、中将閣下が「やあ！榎本君、よう来たなあ」と握手してくれて私を感激させたのは、この当時のことなのです。

そうこうしている内に、人間中心の運動というものは、やはり限界があつて、だんだん運動が行きづまってきました。

明専には、この他に常信会と言つて仏教の会もありました。これは数学の教授が真宗の僧籍にありまして、春秋二回真宗の坊さんを招いて講演会をやるので、これにも入つてみましたが、どうしてもついて行けないんです。

そうして悩んでいる内に（もう三年になつていたと思ひます）、よくお話しする奥貫教授が、理論化学を教えるために赴任して来られました。そしてその教授に習うようになったの

ですが、その当時、私は化学の委員をやつていまして、奥教授が委員長となられたため、しよつちゆう、何じゃかんじやで、お話しする機会がありました。いつもニコニコしていて、明るく、それでいて真面目で、決して先生ぶらないし、非常に好感が持てるのです。いったいこの先生はどういう考え方を持っているのだろうか、好奇心をいだいていました。

自分はうらやましくて、先生のようにニコニコしておりただけでも、それもできないし、それで負け惜しみに「男がニコニコするなんて、女の腐つたようだ。それに比べると僕は哲学者のような顔だ」（笑い）なんて言っていました。後でその教授が、クリスチャンだということを知りました。

その年の正月休みの時、郷里に帰らないで寮に残つておりましたら、教授が栗ぜんざいをご馳走するから来たまゑと、招いてくださったので、数人で押しかけて行きました。そのうちに話しが信仰の事になつたので、私も一生懸命でしたから、食つてかかつたわけです。その間、教授はニコニコしながら、キリスト教についていろいろと話してくれました。けれども、その当時の国粋主義の教育を受けてきた私は、「日本には八百万（やおよろず）の神様がいるんだから、わざわざ外国の宗教を輸入して信じなくてもよろしい」と考えて、迷論を吐いたわけです。すると教授は、「榎本君、君はまだ本当の神様

が分かっていない。だから、君が真の神様を知ることができようお祈りしてあげよう」と言ってくれましたので、私もそう思つて、クリスチャンになりたいとは思わないけれども、本当に神様という方がいるなら、それを知りたいと思つたのです。

教授は、敬虔に頭をたれて祈つてくれました。

「神様、榎本兄弟はまだあなたを知りません。どうか、あなたを知ることができるよう。また、あなたを神として敬うことができる人と変えてください。イエス・キリストの御名によつてお願いします。アーメン」と、敬虔に祈つてくださいました。

私はアーメンという言葉は、胸クソが悪くてムカムカしてくるので言いませんでしたが、「そうあれかし」と心の中で言いました。

今思えば、その一言の祈りに答えられて、私がこうして救われたのではないかと思うのです。本当に、一言の祈り、敬虔に神様を敬う人が祈る一言の祈りに、神様はどんなことでもして応えてくださいます。

その後、神様の事を知りたいと思つて、こつそり集会にも行つたこともあります。

そうこうしている内に、三年生の終り頃、西南女学院にお

勤めの佐藤さんという方と知り合いになりました。その方のお子さんが明治学園に行っていました。私が散歩をしていた時に、学校帰りの小学生が、細い身体に大きなランドセルを背負っているのが可哀想で、家まで送つて行つたのです。

西南のすぐ下の家でした。家に着くと、子供が大きな声で「お母ちゃん！お兄ちゃんを連れてきたよ（笑い）」と言うもんですから、帰るわけにもゆかず、勧められるまま、しばらくの時を過ぎしました。これが後に、しばらく下宿させてもらった佐藤さんというクリスチャンのお宅でした。

ここのご家庭というのが今まで私が経験した家庭と違って、何だか明るくて暖かい空気がするのです。これを機会にたびたび遊びに行くようになりました。今から考えると随分迷惑だったんじゃないかと思うのですけれども……。

ある時、初めて家拜に出してもらいました。みんなで讃美歌を歌つて、聖書を読んで、お祈りして、その後でお茶など飲んでいろんな話をするんです。その頃の親子の関係というもの、親に口答えしてはいけないというのですが、この家は自由活潑に親も言いたいことを言うし、子供も言いたいことを言うしね、自由な交わりを持つている。そういう家庭というのが珍しいなあと思ひました。

そのうち四年生になつて寮を出なきゃならなくなつたので、

佐藤さんのお家に下宿したいと無理にお願ひしました。下宿している間に、今、臼杵市で齒医者さんをしている息子さんの勉強を見てあげたのですがね。勉強をなかなかしないものですから、苦勞したもんです。

その頃、小倉に賀川豊彦や海老名弾正という有名な先生が来たので、よく連れて行ってもらったのですが、いっこう話が分からないんです。と言うのは、今自分の持っている人生の問題については、何も答えてくれない。神学的な話をするけれども、私とは関係がない。これじゃだめだと思いました。

四 眞の福音

ある時、奥貢教授から、「君、教会へ行ってみないか」と誘われました。

「僕は教会へ行っても救われないから、だめです」。

「どうしてかね。君はいつたいどういう教会へ行つたの？」

それで私は、今までのことをお話しすると、

「そりゃ君、君の行つた所は、キリスト教の教えであつて、イエス・キリストの福音じゃないんだ。まあ一度、私の行つている集会へ来てごらん」。

私は、キリスト教にも本物とニセ物があるのかなと思いましたが、行きたくもあり、行きたくもなしで、何となく口実

作つて断わっていました。しかし、とうとう断わる口実がなくなつて連れて行かれたのが、高見町の八幡製鉄所社宅の城さんの家庭集会でした。

座敷に上つて見ると、座布団がコの字型に敷いてあつて、皆さんすでにお揃いでした。そして、前に話した佐藤さんもそこに来ていたのですね。

教授が、「榎本君です」と紹介してくれました。するとみんな親しそうに、「ああ、あなたが榎本さんですか、あなたの事をみんなで祈っていましたよ」と口々に言うので驚きました。

お話しが始まりましたが、さっぱり分かりません。けれども何かしら心の中のモヤモヤがスーと晴れたのです。話は分からなければ、ここに何かがあるということを感じました。それで帰る時は、いそいそと帰つたのです。「これは変わったな」と、自分でも思いました。

それから、次の集会が待ち切れないようにして、出席しました。

その内、一カ月一回の集会では、待ち切れなくなつて、「他に集会がないか」と聞いてみると、福岡では毎週あつていふの事でしたので、日曜日の朝六時の汽車に乗って出かけるようになりまして。朝九時からの日曜学校に出て、十時からの礼拝、午後二時からのリバイバル祈祷会、それが終るのが四

時。ですから、一日つぶれますけれども、欠さず毎週毎週、行きました。



明専卒業写真
(昭和6年 21歳)

五 初めてのクリスマス

昭和六年三月、学校を卒業しました。けれども、当時は不景気で就職口がなく、そのまま研究室に残って、アルミニウムと石炭液化の研究を続けていました。

その年の暮近く、クリスマスが間近となった時、牧師先生から、「クリスマスに出てみないか」と誘われました。まだクリスマスが何やら分からず、サンタクロースのプレゼントとか、七面鳥の丸焼きが食べられるぐらいの知識しかなかったのですからね。

礼拝の午後、日曜学校のクリスマス祝会があり、私も幕張りなど手伝いました。その翌日の夜に、感謝会があったのですが、その席に一人のハンセン氏病の人が来ていました。その人が立ってお証しするには、

「自分はこの病気に罹った時は世を呪い、親を呪ってきました。けれども今は、ハンセン氏病様々です。なぜなら、この病気になった事によって、こんな素晴らしいイエス様を知ったのですから。そのうえ、神様の子供としていただくなんて、こんな感謝はありません」。

そして、もう喜びに溢れて、手を叩いて、「天に宝、積める者は……」と、讚美歌五二三番を歌っている姿を見た時、心打たれるとともに、自分が恥ずかしくなりました。あんな体で、あんなひどい病気をしている人が、あんなに喜んで生活をしているのに、四肢五体健康な自分には感謝もなければ、喜びもない。その上に、あいつがけしからん、こいつがけしからんと不足ばかり言っている。こういう自分の生活というもの、いかに惨めであるかということ、いやというほど思い知らされました。

そこに集っている人達も、決して裕福な人達ばかりとは思われません。けれども、そこには何となく暖かい、和やかな、そして平和な雰囲気なのです。この世の中にもこんな暖かい

所があるのだろうか、これをだんだん広げて行けば、日本中がどんなに明るくなるか分からないと思いました。

私は初めて、キリストの生きた福音を、目で見せられたような気がしました。

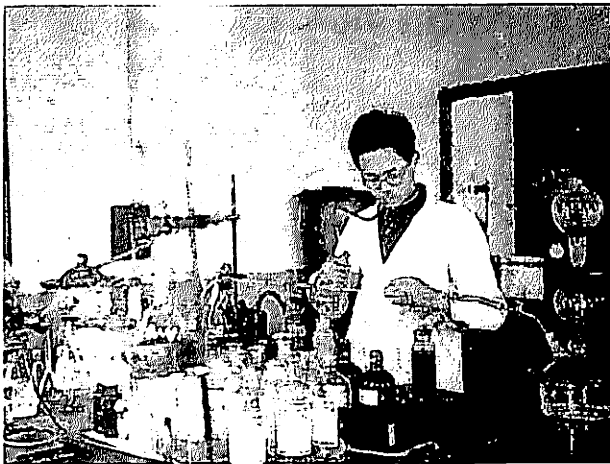
六 救いと献身

クリスマスも終わったので、帰ろうとすると、牧師先生から呼び止められ、「もうすぐ新年聖会があるから残って行きなさい。どうせ学校は休みだろうから」。

「はい！」というわけで、教会の前に学生下宿があったので、学生が帰郷して空いている部屋を貸してもらい、そこに泊って聖会に出ることにしました。その時に、よく私が説教の中心で言うように、ネコが屋根の上で日向ぼっこしながら寝そべっているのを見て、どうしてネコに生れなかったのだろうか、なまじつか万物の霊長として生れたばかりに、生活の問題、失業の問題など嫌な事ばかり、それなのに、ネコの世界は実に穏やかなのです。のんびり寝ている姿を見て、羨ましくてもまらなかつたのですね。

そういう事があって、十二月三十一日に除夜会をやって感謝会をして、翌日元旦からの新年礼拝に出ました。当時は朝、昼、晩と一日三回、それが五日までありました。

回が進むにつれて、だんだん恵まれてきて良かったのですが、鋭い神様の光に照らされると苦しくなると、とてもいたたまれなくなってきました。そこで二日目の朝帰ろうと思いい、大急ぎで荷物をまとめ、先生に「大事な実験を忘れてしまったので、ちょっと帰って来ます」と言ったところが、「バカッ！聖会の途中で帰る奴があるかあ！」と怒られちゃってね。それで、また荷物を出して聖会に出直したわけです。



実験風景「チオ硫酸塩の溶解度と平衡について」

ところが、次の二時の集会で、「主は我らの為に生命を捨てたまへり、之(これ)によりて愛といふことを知りたり」(第一ヨハネ三・一六)、あそこの御言で、神の一人子が人の子となつたばかりでなく、私達の罪のため死んで下さった。しかもその罪が何であるかという事をいやというほど示され、その罪を許すために神の子が命を捨てて下さった。しかもただ単に命を捨てて下さったのではなくて、十字架の上でなぶり殺され、私達が当然受けるべき刑罰を代つて受けて下さった。その話を聞いている間に、私の目の前に、血のしたたる十字架が、今度は血がギラギラと光輝く黄金の十字架に変わってきました。

はるか向こうに見えていた十字架が、目の前にぐっと立ちふさがり、十字架を通して神様の愛が差し迫ってきたのです。私は申し訳なくて、申し訳なくて、そんなに愛して下さったイエス様を拒んで、拒み続けていた自分は、何と情けなくて、頑なだろうと思いました。

もう、じっとしておられず、いたたまれなくなつてしまい、目も鼻も涙でクシャクシャになつて、そこに泣き伏してお祈りしました。

その時神様の前に、「こんなに愛して下さり、自分みたいな者に目を留め、命を捨てて愛して下さった方のためなら、自

分の生涯はどんな苦しみを受けても構わない、この方の前に命を捨てるのなら本望だ」、その決心を神様の前に祈りました。神様の愛に迫られて、当然、罪のために死ぬべきところを生かされているのだから、これから先は主の愛に応える生涯を送らせていただきたい、これが私の献身の決断の時でした。それから後の集会は、心碎けて謙つたものですから、もう神様の恵みは溢れるように注がれて、恵まれっぱなしでした。聖会が終ると、先生に献身の気持をお話すると、「それはどこか良い神学校をお世話しましょう」と言つてくれました。私は「お願いします」とは言いましたが、神学校へ行く気持はなかつたのです。

この福音は学問ではない、知識ではない、実際にエリシャがエリヤに付き従つて、二の分を受けたように、私もこの先生の内にある聖霊によって訓練を受けたたい。柘植先生はすでに召天しておられませんでした。柘植先生の教育方針というのが、言葉で教えるのではなく、実際の生活の中で学び取らせるというものでした。私もそれがいいと思つていましたから、「ああ、そうですか、よろしくお願いします」と言うといて、下宿に帰ると、早速バタバタと荷物を整理して、研究室には退職願いを出しました。そして、荷物を行李に詰め込んで送り出し、下宿を引き払つて、牧師先生の所へそのまま

行ったのです。

「献身してまいりました。よろしくお願いします」。

そう言ったら、先生、目をパチクリさせてね。(笑い)

「僕は、そんな器じゃない。君を家に献身させることはできません」と言うのです。

「私は先生に献身したんじゃない。神様に献身したのです。

神様が私を訓練してくださいますから、私は置いていただきます」。

今考えると、私も随分強引だったなと思いますが、私は私なりに、先生は教育できなくても、神様は先生を通して私を教育なさることができると信仰を持っていますと言うたのです。そう言われたら、先生も断わるわけにも行かなかったんでしようね。

それから、私の献身の生涯が始まったわけです。

牧師館訪問記(二)

一 はじめに

そもそも「ぶどうの木取材班」が誕生したのは、昭和四七年でした。それは、すばらしいお証しを持っておりながら、ペ

ンを取るのが苦手な方、暇のない方などを訪問し、一人でも多くの方に「ぶどうの木」に参加していただくと共に、交わりを深めたいという願いから発足したのであります。そして最初に企画されたのが、「牧師館訪問記」であったのです。

第一回は「ぶどうの木第八号」(昭和四八年四月発刊)に、先生の学生時代から献身に至るまでが掲載されました。それから続篇を早くお願いしつつも、七年がまたたく間に経ってしまいました。このたび、教会創立四十周年を迎えたこの機会に、ぜひとも続篇を載せようということになって、当時とはすっかりメンバーも代わった新しい取材班が、二月のある日、再び牧師館を訪れたのでした。

取材班と言っても、青年会のほとんど全員が参加しましたので、それはそれは、賑やかしくも楽しい取材でありました。先輩取材班と同様、夕食を共にした後、先生は修養生時代のことを思い出しながら、静かに淡々と語られました。

私達はその間に、どんな時にもただ一筋に主に従って来られた先生の姿、信仰の歩みを見、大いに教えられ、恵まれたのであります。

以下、先生のお話しを取材班でまとめました。

二 献身の時

私が、昭和七年に、(この前お話しした所とちよつとダブルけれども)新年聖会に出て、恵まれて、イエス様が私のために十字架の上であのむごたらしい死に方をして下さった。他の人じゃない、私のためだったということを知ってますね。それまで十字架というのは、何かいまわしい、血生臭いものだと思つて、避けるような気持だったですけど、その時、話を聞いている間、目の前に十字架がキラキラ光る太陽のような、輝く十字架が立っているような感じがし、その十字架が、だんだんだんだん迫つて来るような感じがしました。

その時、思わず知らず、こんなに私を愛して下さる方があるなら、私は金や地位や名譽も財産も何もいらぬ。そんなに愛して下さる方のために、自分の命を投げ出して、この方に応えて行きたい、そういう気持になつて、すぐその場で神様の前に、心の内で献身をしたわけです。

実は正直に言つと、まだ献身という意味も知らなかつたんです。とにかく命がけで、この御方の御愛に従つて応えたい。そして、こんなに愛して下さる方がいらつしやるのに私は長い事その方を知らないばかりに、もう誰も私みたいな人間を顧みて下さる人はない、私一人が孤独だとばかり思つて、本当に何と言いますか、人生は砂漠みたいなものと子供の頃から思つてたんです。しかし、実はそうじゃなく

て、私よりも、私が気づく前に、「オギャア」つて生まれる前に、もう神様の方は、私を愛して、ご自分の一人子をそんな十字架に掛けていとわれないほどに私を愛して下さつたと知つた時、もう一人ぼっちじゃないんだ。しかも人ではない、神様が私を愛して下さつた。神の一人子であるイエス様が、私のために命を捨てて下さつたから、今こうして生きていることができるんだなあつていう事が分かつて、それでも嬉しくなつて、もう地位も名譽もいらぬ、この御方のそんな愛に応えたい、それだけだつたんです。

そこで具体的にどうすればよいかということ、折瀧先生に「実はこういう気持でおります」と言つたのです。そうしたら、「急に言われても……まあ、考えておきましょう」と言つて下さつたんです。

三 エリシャの信仰

けれども、私はその時に考えたのは、旧約聖書にエリヤとエリシャの記事が出ていますが、エリシャはエリヤの僕になつて仕えた。何故かという、エリヤ先生の内には、本当に神の御霊が宿っているんだ、この御方の信仰は本当の信仰だから、自分も欲しいとエリシャ先生はエリヤ先生に付き従つて行くんです。

それは、列王紀下ですかね、お読みになると分かりますけど、ベテルから出てヨルダンまで、どんどんエリヤ先生について行く。ところが、エリヤ先生はもう年寄でした。それで、ベテルの神学校の人達が、「あんた、エリヤ先生について行つたつて、先生もお年だから、間もなく天国へ行つてしまつたらう。そんな所へ行くよりも、私達と共にここへ留まつたらどうか」つて言つたんですが、「分かつている。けれども、あのエリヤ先生の中には生ける神が宿つていらつしやるから、私は先生について行く」つて言つて、ベテルに留まらないで、出て行きました。

そして、エリコの方へ行きます。そうしてエリシャは、いろんな所を通つて行きましたけれども、いつでもエリヤ先生の中にある信仰を戴きたい、それだけで何処までもついて行くんです。そしてエリヤも、「もう私も年だから、あんたここで残つて居なさい」と言うんですが、「はい、先生、それは良く分かります。けれども、私はやっぱり先生の中にある信仰を戴きたい」、そう言つてついて行きます。とうとうヨルダン川まで来た時に、「もう、あんたはここで止まりなさい。私は、これからヨルダン川を渡る。再び帰れないかも知れないから、もうここに残つときなさい」と言われたのですけど、エリシャは、「それでも、あなたの内に主が生きてらつしやるか

ら、私も一緒にいきます」とついて行つたんです。

ヨルダン川へ行つてエリヤが上着を脱いで、それを巻いて水を叩いた時、水が割れて、その中を二人で通つている時、途中で火の馬と火の車が天から降りて来て、エリヤを巻いてしまつたんですね。エリシャはびつくりして見上げている間に、エリヤは上に携え上げられてしまつたんです。その時、エリヤの上衣が上から落ちて来ました。それを拾つてエリヤは帰つて来たんですが、ヨルダン川まで来た時、「エリヤの神よ、どうぞ、水を分けて下さい」と、水を叩いたところが、水が割れたんですね。そういう記事がありますね。

私はそれを読んでいたものですから、折瀧先生は、確かに全能なる神様を信頼している。その神様は昔の神様じゃない。あるいは聖書の中におさまっている神様でもない。今も現実に私どもが呼べば答えて下さる。本当に信頼すれば現実に支えて下さる御方を信じて下さる。私にもその信仰が欲しい。他の事はどうでもいいから、聖書が今も信ずる私達に現実であるということ、自分自身が経験することのできるような信仰でありたい。そういう願いを持つておつた。

だから、先生は「神学校を紹介してあげよう」と言うてくれたけれども、私は折瀧先生の所に行つて、エリシャがエリヤにつき従つたように、何でもいいからさせてもらつて、その

中で、イエス様にどのように従うかを学び取りたい、そういう願いが私の中にありました。

まあ、この願いが良かったか、悪かったか、そりゃ分からないけど、神様は私の内にそういう渴きを与えて下さった。だから私は強引に、折瀧先生の所に献身してまいりました。押しかけて行つたんです。それでまあ、折瀧先生が「そんなにしたつて、僕はそんな器じゃないから」つて言われたんですけど、「私は神様を信じます。神様が、そういう器として使いなさることができると信じます」。

今から考えたら、ずいぶん偉そうな事を言つたもんですけれども、そういう思い切つた信仰で折瀧先生の所に献身したわけなんです。

四 献身の意味

まあ、献身という事を皆さんはどのように考えていますか。ローマ書十二章には、「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい」とあります。これがなすべきの祭である。信者である私達は、献身するのが当たり前である、と書いてありますね。

ところが、ある先輩の方が私に言われたんですね(献身してからですが)、「榎本さん、惜しいねえ、もう少し社会に出て、

働いてからでも良かったんじゃないかね」。その時、私はその先輩の顔をこうやって、もう一ぺん見直したんですがね。この方は、一体何を考えていなさるのだろうか。聖書の中に、信者である私達は、皆献身する事がなすべき祭、これをしなければならぬんだ、と書いてありますね。それなのに惜しいとは何事だろうかと思つたんですね。

後から考えてみれば、たいいてい牧師さんになるのは、この世の中で生活に行き詰まつたとか、人生に行き詰まつて、自殺しそうになつたところを救われたから、献身して牧師さんになつた人が多いもんだからですね。まだ、そんなに行き詰まらない内に献身するのはもつたないじゃないかという意味だつたと思うんです。

私、考えますのに、神様の正しい裁きの前に立たされたらどうせんでも滅びてしまうべきはずの私が、今こうしておらしていただいている蔭には、イエス様が私に代つて十字架に死んで下さつたんだから、今、私が生きてるんじゃないかって、イエス様が死んで下さつたので生かされてるんだから、私は自分のために生きるのじゃなくて、私の代わりに死んで、甦つて下さつた方のために生きるの、当たり前だと思つたんですね。

だから献身と言うと、何か特別なことを神様にしようだ

けど、そうじゃなくて、イエス様を信じた私共は、自分の計画、自分の願いを神様に押しつけるのじゃなくて、神様の御心に従って生きていくのが当たり前だと思っんです。これが献身ということなんです。だから、神学校に行って牧師になる事ばかりが献身じゃない。信者は皆献身すべきなんです。神様に身を委ねて、神様の御心に従って行く。これが献身の生涯ですね。

私が具体的に献身したのは、牧師さんになろうとか、伝道者になろうって言うんじゃない、とにかく、何でもいいから、神様の御心に適う御用だったら、何でもさせていただけという気持ちでした。

五 修養生の生活

その頃の私は口べたですし、人に会うのが嫌いな時でしたから、献身しても、仕事といっても特別な事は何もありません。会堂や広い教会の庭の掃除やら、まあ、そんな事ぐらいですね。それを朝から一生懸命でバタバタバタ掃除したんです。

今みたいに集塵機とか掃除機とかないですから、バタバタバタバタはたいて、バツバツと掃き出してですね。そして、雑巾掛けしたり、庭の草取りをしたり、そういう事をしたわ

けですね。そしてまた、牧師さん所に子供さんが、あの当時男の子が二人おって、その子供さんのお守りをしたりするわけなんです。まあ、そういう事をしながら、生活させてもらったわけなんです。

その当時は随分、集会の多い時代でした。火曜日から土曜日まで毎朝五時半から早天祈祷会がある。そして水曜日が祈祷会、金曜日がたぶん路傍伝道をやったんですね。月曜日が、リバイバル祈祷会。そして日曜日が、八時半から日曜学校、十時から礼拝、午後二時からリバイバル祈祷会、これは二時から四時ごろまで、座ったままで、みんなで大きな声で一生懸命で、一人一人の名をあげてお祈りしたんですね。そうして、それが済んだら夜七時半から、今度は伝道集会。そういう集会がありました。

勿論各集会に出してもらえらるわけですね。それとそういう集会の準備ですね。冬は暖房を用意するわけなんです。冬の暖房っていうのは、まあ、初めの頃は平家でしたから、大きな火鉢に、七輪で木炭を起こしてですね。やかんを置いて、シューシューと湯気を出して、皆さんが入って来たら、「ああ、暖かいなあ」と言うようにしておかにかあならんのです。

それから、今度、新しい教会に変わったたら、二階なのです。二階の広い所なのです。そこで暖房は何だったんですか

ね、こんな大きな練炭ストーブ。練炭を入れたストーブが二つあったと思うんです。それを起して持って行くのが、集会の準備なんです。集会が済んだら、それをまた持って降りて、ちゃんと火を消して始末する。まあ、そういう時代でしたね。そういう事で集会の準備をして、今みたいにベンチがなくて、畳敷きなんです。だから、座布団をこうキチンときれいに揃えて並べて、そういう仕事をしたりしたわけなんです。

それですから、私は献身したからと言って、しゃべるわけでもないし、何をやるわけではないし、教会の掃除だから、人との言わんでも済むから、まあ良かったなあと思つてですね。一生懸命喜んで掃除をしようとしました。

まあ、そういう生活を約八年ですかね。勿論、掃除が済んでしまえば、自分で聖書を読む、お祈りするという時間がある。聖書を自分で読んで、自分でお祈りしないことには、何も教えてもらうという事はないんです。自分自身が直接神様にぶつかつて、神様から教えていただくというような生活だったんです。

何か必要があつて、先生これが欲しいんですがと言えば、何の事はないかも分からんけれども、それでは神様を知る機会にならないから、必要な事があつたら、一生懸命お祈りするんですね。何でも神様が与えて下さつたものでやつて行く、

そういう生活をしたんですね。だから毎日毎日が、お祈りしないことには、廻つていかなければなりません。

ある時には、一人の若い兄弟と一緒に祈りしとつたんです。その頃、靈感賦の譜付きを持たなかつたんです。買えば安い物だつたらうと思うんです。それをかうのはたやすいけれど、お金が無かつたので神様に祈つて与えていただきたいと思つて、一生懸命お祈りしとつたんです。そしたら、その兄弟が言うには、

「榎本さん、そんな所でお祈りしとつたつて、与えられないよ」と言うんです。

「どうしてか」と私が言つたんですね。

「それよりも、あそこの奥さんの傍でお祈りしてごらんよ。すぐ与えられる」と言われたんですね。

私は腹が立つて、腹が立つてたまらんですね。「何言うか」つていうわけですね。そんなに人に聞いてもらつて、あの人が必要だそうだからつて、人の同情を求めような、それじゃ信仰じゃない。そんな事は絶対に死んでも自分ではできない。そう言つて私はわざと、その兄弟とも離れた所でお祈りするようになつたんですね。そうして何でも必要なものは、神様にお祈りして、与えられただけでやつて行く。そういう生活だったんですね。

祈って聖書を読んで、夜遅くなる時は二時、三時になるし、朝五時半の早天祈祷会だと、五時には遅くとも玄関を開いて、ちゃんとみんなが来てもいいようにしなきゃならない。だから、睡眠時間なんて、四、五時間あったり、なかったりですね。

まあ、そういう時代もしばらくありました。そういう中でしたけども、聖書を一生懸命読むという事、その時代読ませていただいた事は、本当に嬉しかったと思うんですね。

折瀧先生は柘植先生の所に一年か一年半くらいしか修養生時代がなかった。それですぐ遣わされて、山陰の境港っていう所に行かれて伝道したんです。開拓伝道やったんですけどひどい迫害にあつて、その中を信仰でやり抜いた人なんです。そういう方なんですけど、

「榎本さん、あなたはいいぞ、長い修養生時代があるからいいよ。僕なんか、一年半で遣わされちゃったんだからな」って良く言われるんです。

ほめられたのか、俺は一年半で行ったのにお前はまだか、と言われている感じですね。何と返事していいか判らなかつたんですけど、今になって、本当に、よう八年間も大きな男の人を置いて下さつたんだなあと思つて、今になってしみじみと感謝するんですけどね。

そういうわけで、直接講義を聞いたという事はなかつたんです。ただ、聖書を読んで、お祈りして、神様が心を開いて下さつて、真理を悟らせて下さる以外になかつたわけです。エツケル先生という宣教師さんがしばらく北九州に来ていたことがあるんですけど、その当時エツケル先生が、

「榎本さん、どういう神学校を卒業したか」

「ハイ、私は、イエス・キリストの神学校を卒業しました」
つて言うたんですね。

そうしたら目を丸くして、「そんな神学校どこにあるか」つて言うんです。

「はい、(聖書を出して)この中にあります」と言うたら「ああそうか、それで分かつた」つて、何が分かつたか知らんけど、そう言つとつたんですけどね。

まあ、とにかく、自分自身が、聖書の御言に従つて、それを自分が本当に経験をして、その中で教えられ、学び取つたものでなかつたら、ただ理論的に、どんなに知識があつても力がない。それで、折瀧先生が、あのような信仰をもつてぐんぐん、あの大迫害の中を信仰で乗り越えてきなつた。

その信仰を、私も与えていたきたいと願つていたものですから、一生懸命お祈りしては、聖書を読んでいた。折瀧先生が、「よく聖書を読みなさい。祈りなさい」と言つて下さつ

たものだから、時間があれば座って祈り、聖書を読む。

勿論、そんな風で睡眠時間が足りないものだから、座つてすぐ、お祈りがおいねりになる事がよくあるんですけど、また、土曜日には折瀧先生と一緒に、信者の皆さん一人一人の名を呼んで祷告するわけなんです。自分が祈る時は、目を開けて一生懸命祈るけれども、折瀧先生がお祈りしなされると、心を傾け、目を閉じて、心を合わせてるんですけども、いつの間にか、やるんですね。そうすると、先生から「君のお祈りは、おいねりになっちゃったぞ」というわけですね。その時は、本当に恥ずかしいやら、辛いやらですね。そういう気持だったですけれども。しかし、今になって振り返ってみると、そういう中で、神様は私を整えて下さったんだと思うんですね。

六 真の教育

この間も、ある方が言うたんですけども、柘植先生の所で修養した人っていうのは随分大変だったって言う。何故かと言うと、柘植先生の所の修養生というのは、本当に無茶苦茶だったって言うんです。それはどういう意味かというと、とにかく何でも、身を捧げて従ったからには、神様の御心のままに一切、文字どおり身を委ねたんだから、死ねと言え

死ねばいいんだ。そのくらいに厳しい。だから白いものを黒いと言われても、「ハイ」と従わなければ駄目だ。従う点については、その位に従わなければ、本当に従った内には入らん。そういう生き方は今日のように、民主主義で、そうは言うても、こうじゃないかという、自分の意見を吐くなんてことは許されない。だから一方的に神様の前に出たような気持で、先輩の言葉に従わなきゃならないというような時代だったんですね。だから随分皆苦労したっていうんです。

しかし、その無茶苦茶という、人間的に無茶苦茶な中を、神様によつて通らしていただくということは、これは大きな恵みだと思うんですね。

というのは、イスラエルの民が、荒野を四十年の旅、これは無茶苦茶な旅路なんです。しかし、その無茶苦茶な旅路の中で、神様はどういう事でも成し得る方だっていう事を、イスラエルの民は学ぶ事ができたんですね。そうしてマナをもつて養われ、ウズラをもつて飽かしめられ、岩を割って水を飲んで、神様はどういうことでもできなさる御方であることをイスラエルの民は、あの中で学ぶことができたんですね。

だから、私共が事情が良いとこ、境遇のいいとこでなくちゃ信仰ができないというんだったら、これは本物じゃないんじゃないかと思えますね。本当に、逆境であろうと、どんな

所であろうと、良すぎても、悪すぎても、そこで主に信頼することによって、初めて信仰というものに、命が入ってくると思うんですね。

そういう様な、無鉄砲と言いますか、その方が言われたように無茶苦茶と言いますか、修養生時代なんです。そういう中で訓練された方だから、やっぱり私もそういう中で訓練されました。しかし、それが今考えてみると、本当に最高の教育だと思うんですね。

今日の神学校のように、やあ奨学金はありますよ。やあ寄宿舎もありますよ。いやなら何とかしてお気に召すようにしてあげます、なんていうような神学校だったらですね、本当に、主は今も生きていらつしやると信頼していく勇氣がなかっただろうと思いますね。

今私に、そんならおまえ、神学生を訓練しろと言われたら私が訓練してもらったように訓練できないんですね。だからそういう点で、折瀧先生は立派な教育者だったなあと思うんです。

これは信仰とは別なんですけれども、私の母は、小学校の四年しか行ってない。昔は小学校四年で卒業だったんです。だから手紙をめったに書かないのに、時たま書いてくる手紙には、折れ釘みたいな字で、カタカナで書いてあるんです。

私がかかりの年になってから、そんな手紙を書く母親を持つたつていうのは、情けないなあと思ったこともあるんですね。けれどもその母が、私を育ててくれた時のことを今考えるんですね。私が子供を育てる時に、母が私を育てた時のように厳しく、しかもちゃんと人間としての道は、こうでなくちゃいけないということを、はっきり示して育てる事が難しかったですね。それをしてくれた母親を、今は、偉い教育家だったと思うんです。学者じゃないけど、教育家だった。人間を正當に正しく育ててくれたと思うんです。そのお蔭で今イエス様を信じていることができるようになったんですから。私は母を、この世の学問はないけれども最高の教育者だと思うんです。

それと同じ様に、無茶苦茶な中で訓練して、本当に力をもつてイエス様に従う弟子に訓練をする人つていうのは、本当の教育者じゃないかと思うんですね。だから、今日の牧師、伝道師に欠けているのは、そういう中で、神様に直接ふれるような教育をする人がいないという事ではないかと思うんですね。

私が折瀧先生の所に八年おいていた間には、随分いろいろなことがありました。戦時中、まあ戦前の満洲事変なんという時代からずっと国の考え方が、軍国主義に傾いていつ

た時ですから、そういう中で、信仰を持ち続けるということ自体も困難な時でした。

防空訓練なんていうのがあって、防空訓練にも出なきゃならん。集会もしなきゃならん。あれもせにゃならんで、随分いろいろとありましたけど。そういうことが一つ一つ全部、イエス様を知る機会となつたんですね。

そういう中で、祈っては答えられ、あるいは思い切つてお言葉に信頼して、その中を突き抜けて来たことが、今日までの四十年間こうしてイエス様に従わせていただく準備期間だつたと思うんですね。そういう意味で、私の修養生時代というの、人間の目から見たら無茶苦茶であつて、神様の目からご覧になれば、一番いい教育の期間だつたんじゃないかと思うんですね。

七 野村先生とのこと

私が昭和七年に献身して、翌年の昭和八年に野村君のお父さんが献身してこられた。そして一緒に生活したんです。だから七年ぐらい一緒でした。

野村さんのお父さんは非常に素直な従順な方で、私はどちらかという、ぶすぶすした方ですからねえ。だから、かえつてそれが互いに助け合うことになつてですね。それが今日

まで長いお交わりを持つことができたんだと思うんですね。同じ釜のめしを食うた仲間というわけです。



修養生時代の先生（隣りは野村末義兄）

だから一緒にいろんな事をやりました。百姓もやるし、肥汲みもやるし、本当にやらんことはほとんどないくらい。お産ぐらいいはしなかつたですけどね（笑）。後の事は何でもや

ったんですね。洗濯、掃除、それから炊事もやりましたね。いざとなればなんでもやるんです。養鶏もやるし、まあ、二ワトリの料理なんて野村君のお父さんは、なかなか上手だったんですよ。何でもしなきゃならなくなってやっただんです。まあそういうことで、今考えてみれば、そう大した事じゃなかったように思うけれども、その当時は、信仰がともかくないもんですから、そりやあもう随分大儀な中を通るなあと思つた事もあります。

八 八幡へ遣わされる

そういうことで、八年間の修養生時代が終つて、昭和十四年の十一月三日に、八幡へ来ました。

その前に、いつ頃だったですかね、九月か十月頃だったと思います。折瀧先生から呼ばれて、「八幡の方で、専任の牧会者が欲しいと言つてきてるんだよ。君はどうするかね」と言われて、「どうするかねと言われても、私は献身したんだから、言われたとおりに従います。お導きがあれば、何処にでもお従います」と言つただんです。

「そうですか。そんなら、君に八幡へ行つてもらおうか」ということで、八幡へ遣わされて参りました。

その当時、折瀧先生が言われるには、「八幡つて所は、人間

の住む所じゃないからなあ。あんな所は風紀が悪くて、子供なんか育てる所じゃない。福岡ならまあ大学なりともあるけど、まるでアフリカの中といったような、あんな所では生活できない」。

実際、当時製鉄所の周辺では鉱粉・炭粉で赤褐色や黒灰色に汚れた労働者が裸で街中を歩いていたので、私も驚嘆しました。

アフリカ大陸には宣教師が入つて行つて伝道をやつたから、「それじゃ、私は日本のアフリカへ行きましょ」つて言つたことがあるんです。

そういうことで、昭和十四年の十一月三日に八幡に来たわけです。それから今日まで、まあ四十年ですかね。今年の十月三日で四十一年になりますね。

九 先生の信仰

修養生時代、こまごましたことは、たくさんあつたんですが、もう時間のかすみの中に消えてしまいました。

ただ言えることは、今日の様に物分りのいい人が多い時じやなかつたんです。昔は、縦割の秩序がやかましい、上の人に対しては絶対服従なんですね。だから何を言われても、「そうじゃありません。こうです」と自分の考えを述べると、言い

訳すると言われるんですね。

言い訳は許されないから、自分が思いもしないようなことを、「お前がやったんだろう」と言われても、「ハイ」って従わなきゃならない。そして自分はこうだと思っても言う訳にはいかない。そういう中で言えるのは、神様だけなんです。

祈るといことがどんなに幸いであり、力であるかということをお教えされました。

だから人に言っても分からないし、言うことも許されないのだから、神様に向かつて言う。なぜならば、全てを知り給う方がいらつしやる。この方が私を知つて下さるから、どんな誤解をされても、神様をご存知だから、神様からの報いがある。だからそれでいい、というような信仰になったのは、そのような事からです。

自分が一番信頼し、尊敬する先生にさえも理解してもらえない。そんな時になお神様が理解して下さるんだっていう、これが私の今日まで支えていたお恵みだと思ふんです。皆さんも、これから社会に出ていろんな問題の中に入ると、なかなか皆さんの本当の気持ちを分かつてくれる人っていないんです。分かつてたようでも、分かつていないんです。だから、そんな時にどこに気持を持っていくか？ 何処に持って行つたつて分かつてくれる人は一人もいないんです。

その時にイエス様だけは、「我らの大祭司は我らの弱を思い遣ること能はぬ者にあらず」と書いてありますけども、本当に、この方の所に持つて行つて、みんな祈つて信頼していくと、私共は人からじゃなくて、神様に知つていただいているからいいという、平安がいつでもあるんです。

そうでなかったら、私共は今日、伝道はできないと思ふんです。

人は誤解しかできないんです。皆さんは、自分の気持は皆分かつてもらえてると思つていても、それは分かつてもらつてると思つてるんであつて、相手は分かつてないけども、分かつているような顔をしているだけかもしれない。だから友達だからつていうんです。

こつちが本当にあの人のことを思つている。相手はとんでもないことを思つてくれるなあと、思つてるかもしれない。それでも友達だからつていうわけですね。けれどもそれでお互いに思いあつて親友だと誤解しているんです。誤解して一生を送つてもいいんじゃないか、と私は近ごろ考えるんです。だから夫婦なんて、そんなもんじゃないでしょうか。「うちの主人は私だけを愛してくれている」と思い、また主人の方は「うちの家内は私のことばかり考えてくれている」と。実際そうでないとしても、そのような誤解をして一生暮らせば、

幸福です。私、近頃そう思うのです。

だから本当のことは、イエス様だけが御存知なのです。そこまで主に全幅に信頼することができれば、世の中、楽なのです。だから、そういう訓練には無茶苦茶な中にボンと放り込まれるってことはないことなのです。あんまり温室育ちだと、訓練する機会がないので、何か問題にぶつかった時にペシヤンとなってしまうんです。

前に一度、私の子供に言われたことがあります。

「お父さんは、物分りが良過ぎて困る。うちにはおふくろが二人いて、親父はおらん」ってね。

「それならもつとガンコ親父になつときゃ良かったの」と言つて笑つたことがあるんです。

確かに昔の親爺は頑固で物分りが悪く、いろいろ言つても聞いてくれず、分かつてもらえない。そういう父親がいたということは、邪魔のように思うけれど、実はそれが子供にとって遅く生きる訓練になるんです。近頃はあまり物分りのいい父親が多すぎると思いますね。中には何を言つても分かんず屋で、頑として動かない父親がいればそれは感謝すべきことだと思ふんですね。

まあ、修養生時代に、その様な中で直接神様の声に従うことと、祈ること、そして信頼し、思い煩わないこと、一度任

せたらとことんまで任せる。そうしたら神様は現実に答えて支えてくださる、という事を体で知ることができました。

これは大きな力ですね。赤ちゃんは何でも口に持つていきますね。あの赤ちゃんの時代は口で知るので。目や耳や頭じゃ分からないけれど、口で知ることができる。丁度その様に私共がイエス様を知る時に、目や耳で知るのではなく、直接口を持つていつて自分の肌で知るので。そのように、良いことも悪いことも、皆一つ一つを神様の前に持つていく。それには、やはり聖書をよく読むことです。

私が今でも感謝するのは、その八年間の間に聖書を読む時間があつたということです。一日にしなければならぬ作業は大体決つているから、それを終えたら、後は自分の時間なので、その時間に聖書を読み、そして祈る。祈ることと聖書を読むことは、自分で学ばなければなりません。人が手を取り、足を取りしてくれない。

この間もある方が言つていたのですが、その方は昔、表具屋さんですね。表具屋さんつて、あの掛軸なんかを作るんですね。そういう所で弟子に入った。その人は、小学校を卒業して弟子に入って何をさせられたかつていうと、子供のお守りをさせられた。まだ何もできないから子供のお守りをさせるんです。子供のお守りをするために弟子に入ったんじゃな

いのにと思つたんです。朝、おんぶしたら背中が冷たくなつてゐるんです。何故かというとおんぶした赤ちゃんのおしっこで背中が冷たくなる。それでも降してもらえないんですね。まあそんな位に子守りをしたつて言うんです。しかし、その人は、ただ、ぶらつと子守りをするんじゃない、子守りをしながらよその職場で、いろんな仕事をしている人を見てゐる訳ですね。そこでその職人のやり方を見ていた。だから、よく金粉をふつたのがありますね。あの金粉をふるところを、子守りをしながら見ていた。それが後に自分がいよいよ本職になつた時に、それでやつたところが師匠さんから、「お前、いつそんな事を覚えたか」つて言うて、びっくりされたつていう訳ですね。

だから昔は教えなかつた。何も教えてくれなかつた。初めは「紙を継ぎなさい」つて言われたんです。紙をね、こう二枚継ぐでしよう。あの表装に使う紙つていうのは、継ぎ目をこんなに、沢山厚くくつついちゃあ、だめなんです。本当に薄く、ちよつとくつついたところでキチツと継ぐ、それで継ぎ方が悪いとペコペコにしわがよる。そんなになつたらもうものにならない。

とにかく紙を継ぐことからやつた。紙を継いで出来上がったら師匠さんの所へ持つていく。するとお師匠さんは、ずつ

と見てるそうです。そして悪い所があるとボンと投げて、そこにあつた物差してパシツと叩かれてですね。一体どこが、何が悪いのか分からないんです。ただ叩かれるだけなんです。

それから、持つて帰つてどうして悪いんだらうつて一生懸命考えるんですね。またやり直して持つていく。それでまたずうつと見て悪い所にきたら、またボンと放り投げられるんですね。それからぎれを貼つて、そして軸をつくらならん。そのぎれの貼り方なんか自分が実際やつてみないと分からないんですね。昼間は子守りなんかして先輩のやり方を見てるけど、夜になつたら、その裁ちくずがあるのを掃除する時に集めて取つておいて、夜、皆が寝静まつてから、電気のコードをズーツと長くしといて、箱をつくつてその箱の中に電気を入れる。外に明かりが漏れると、まだ起きてるつて人から言われるし、お師匠さんから、「お前、電気代がかかるぞ」つて怒られるそうです。だから外に光が漏れないようにして、一生懸命でその端切れで稽古したんです。

そして、作り方について自分が一つの考案をしたけれども、お師匠さんにそういうわけに行かない。それで、ある時に、何かの品物を任せられた時に、お師匠さん、実はこうこうこうした方がいいんじゃないかと思つて言つたら、そんならお前、それをして見る！というわけです。それが良ければいい

けれど、そんな事をして出来損なったら承知せんぞって言われたわけです。それから一生懸命でやって、出来上がったのをかけてみたところが、師匠さんがうなったんです。それで、それから後は何もかも皆、その人に任せてくれた。

そういう風で、昔はちつとも教えちゃくれないんです。自分で何とかそれを学びとろうと、自分がそれを自分のものにしてようと盗むような気持ちで、一生懸命になったんですね。

だから今は、あんまり教え過ぎるっていうんですね。あんまり教え過ぎるからっていうんで、「またか」っていうて学ぼうという気持ちがなくなっちゃうっていうんですね。だから、そういう点で、今の学校教育は間違っているんじゃないかって、その人は言ってるわけです。

そういう点で、柘植先生の無茶苦茶神学校っていうか、修養生の養成っていうのは、あるいは良かったんじゃないかなって私も考えたんですね。というのは、やはり教えてもらおうんじゃないって、自分が学び取る、自分が教えていただく、神様から教えていただく、聖書を通して教えていただく、自分の体で学ばなきゃならないんだっていう、そういう意欲っていうか、どうでももつていうような渴きがあったんですね。

ところが今日の神学校では、単位とらなきゃ駄目、さあ分らないから教えるから、また学校済んだら俺の所に

来い、なんてわけで、あんまり先生が教え過ぎるんです。だからなかなか生徒が本当にイエス様の所に行かないんですね。だから、そういう事を聞いた時に、私もそうだなって思うんですね。

イエス様の時代でも、そんな神学校なんてなかったし、イエス様は、決して手取り足取り、教えてらっしゃらない。ただ自分の行く所に一緒に行って、お祈りしたり、説教したりするのを聞いたたり、見たりしただけなんです。

だから、私は、今一番教育っていうものについての考え方を直さなきゃならない時が来てるんじゃないかと思っています。いつか萩に行った時、吉田松陰の松下村塾を見た時、そう思ったんですね。あそこも何人かの人が一緒になって生活しながら、その中で学び取っていたって言うんですから、やはりそういう教育が人間と人間との接触によつて初めて学ぶことができる。これが本当の教育じゃないかなと思うわけです。そういう意味で、私の修養生時代っていうのは、恵まれた時代だなあと思います。

十 思い出すこと

まあ大体、修養生時代の思い出というのはそれ位でしょうかね。そりやあもう、牧師先生の奥さんがお産で、産婆さん

を呼びに行けつていうわけで、雪の降る中、飛んで行ったこともありませんけれども、まあそういう経験も、やはり家庭において、子供が産まれそうな母親がいるという時に、いろんな事を考えてあげるために必要な事だった。

それからまた、ある時には家族のない人が、口頭結核になつて声があまり出ないようになっていた。そこに行つて世話をしあげなきゃいけない。その人は骨と皮ばかりになつて聖書が手に持てない。その聖書が持てない人が言いました。

「先生、これからあなたが伝道する時に若い方に言つてください。目の見える間に聖書を読んで、声の出る間にお祈りして、讚美歌を歌つて、神様に感謝するように。どうぞ、この事を健康な方、若い方に言つて下さい。自分が、今、本当に聖書が読みたくても読めない。神様に感謝したいけれども声が出ない。こうなつてから、心の中じゃ感謝してるけど、声を出して感謝できないという事は、本当に情ない。だから、声の出る間に神様に感謝し、またお祈りし、そして目の見える間に聖書を読んで、内に蓄えておいていただきたい。そのように伝えて下さい」つて、私に言われた事を今でも思い出してますね。

それからもう一人の方は、やはり結核の末期で、ひげをはやして、本当に重態だったんです。けれども、何とかひげを

剃つてほしいというんで、私行つてひげを剃つてあげた事があるんです。まあそういう中も通るけれども、感染しないように、その時はお祈りして、神様本当にあなたは火の垣をもつて守るとお約束ですから、この兄弟のためにひげを剃りますから、どうぞあなたが感染しないように守つて下さいと、その時一生懸命お祈りしました。顔を離しては剃れませんから、近くにくつつけて剃ります。そういう中も通りましたけど、神様はそういう中で守つて下さり、今日まで重症な菌のたくさん出る開放性の病人の中においても守つて下さつた。そういう事を通して、主が生きてらっしゃるんだつて事をいろいろと教えられましたね。

だからよくお話しする秦梅子さんという方ですけれども、結核で召される時、私をはじめ立ち会つた。天国を見ながらです、ね、「ああ美しい」と喜んで送つた時は、私は「ああ、これで私はいつ死んでも良い」と思つたんですね。この一人の人が喜んで、あの最後に来る恐ろしい死を、恐れもしないで喜んで死の河を乗り越えて天国へ行く、その手伝いをする事ができただけで、私はこれでいつ死んでも悔いがないと思つたんです。どんな大臣でも、どんな金持でもですね、人の最後に来る死を恐れず乗り越えさせてあげる、希望を与える人は一人もないけれども、私はイエス様のゆえに、その最後に

来る死の恐怖の中にあつて、その姉妹にイエス様をお伝えすることができたことよつて、本当に希望を持つてですね。目の前に天国を見ながら帰つて行つた。そのことで、私はもういつ死んでもいいと思ひましたけれども、それから四十年、こうして神様から元氣に守つていただいですね。それも修養生時代の思ひ出のひとつだつたと思ひます。

牧師館訪問記（三）

一 はじめに

早いもので、牧師館訪問記も三回目を迎えました。

第一回が学生時代の入信から献身まで、第二回が修養生時代のことでした。

これまでを振り返つてみると、神様が不思議な摂理をもつて先生を神の器として召し、そしてそれにふさわしい者とするために、いろんな中で訓練し備え給うた時であつたと思ひます。

そして今回は、時満ちて八幡に遣わされた時からであります。世は正に軍国主義が台頭しつつあつた昭和十四年十一月三日、この時から先生の公の伝道生活が始まりました。御歳

満三十才。奇しくも主イエスが公の生涯に入られた歳と同年であります。（そう言えば、長身で額が広く、面長のところも似ているような気がしますね。）

それから四二年経つた月も同じ、十一月のある日の夕方、勤め帰りのサフラン会のメンバー（中には自称組も混つていました）が……が牧師館に集まりました。

前回までは榎本先生が中心でしたが、今回は百合子奥様も話しの中に入つていただきました。それは八幡前田教会の歩みは御二人の歩みでもありますし、それにお話の中心が御二人の結婚のことであつたからであります。

美味しいお菓子をいただきながら、若い兄弟姉妹は目を皿のようにして聞き入つておりました。それは心の中で蜜のしたたりのように感じられたに違いありません。

（文中——〇〇〇——の部分は、取材班がお尋ねした箇所です。）

二 八幡駅に降り立って

先生・八幡に着いた時は、足がガタガタでしたね。と言うのは、自分に力がないでしょう。自分に力がないことを一番知つてゐるのは自分ですものね。それに、これから御用する所は年配の人ばかりでしょう。人生経験豊かな人達ばかりなものだから、そういう人に向つて何が教えられるだろ

うか。本当に足がすくむような思いでした。

―その時、お年はいくつでしたか―

先生・教えの三二でしたね。結婚した時が教えの三十二でしたから。前にもお話ししたとおり、最初河本さんのお宅で家庭集会をしていたんです。その家庭集会で皆さんが恵まれて、ぜひ八幡に専任の先生を送ってほしいという事で、私が来ることになったのです。それで私は河本さんの家しか知らないものですから、八幡駅に着いてから、直接河本さんの家に行つたのです。そこで夕食もご馳走になり、お風呂まで入れていただいて、「先生こちらですから」と、もう一度今の八幡駅の所まで連れていってもらったのです。当時、河本さんは長者町にいて、八幡駅前の所が大正町と言つてましたが、その八幡駅の東側に青果市場があつて、その前に河本さんの工場(倉庫)がありました。その倉庫は新しく建てた二階建てで、二階に上ると左側に漬物を干すテラスがあり、右側に二世帯住めるアパートになった所があつたんです。

私はそこに迎えられたわけです。入つてみると新しい壁、新しい柱、新しい畳ですね。新しい畳の香りがプンプンしてました。炊事場には新しい水屋が置いてあるしね。お茶も箸も何もかも揃えてありました。炊事場は隣と共同でし

た。お隣りは河本さんの所に勤めておられる方が住んでいたのです。それでね、水屋の中にはイリコまで入つていて……、何もかも自分でしないとイケないと思つていたものですから、そんなところまで今の河本さんのおばあちゃんが目をつけて下さつたのです。ですから印象に残っています。そこで自炊生活を始めました。



先生と河本小太郎兄

今、福岡におられる城さんが高見町におられて、その家庭集会で私は救われたものですから、挨拶に行きました。

城さんの奥さんが、「榎本さん、自炊するとね、おひやができて困るし、なかなか男世帯ではできないでしょうから、支那鍋を買って焼飯にしたらいいですよ」と教えて下さり、支那鍋も、それから中華鍋のサジ、サラダ油も一缶つけて買って下さったのです。

それからやってみると、美味しく好きでね。毎日毎日して食べてね。みそ汁と焼めしでしたね。みそ汁をつくると何日もあるから、昼はおじやにしてね、食べたものです。お漬物は河本さんに戴いてね……。

一年間の自炊生活で、料理も大分覚えましたよ。だから、終戦当時今本さん(今の中村さん)、岩隈さんが学生時代に牧師館にやってきた時に、私が手造りのうどんをご馳走したことがあります。その味が忘れられないと……。そういうことで自炊生活をして、朝は福岡でしていたように、遅くとも五時には起きて、屋上の間に上って座布団ひいて、星を眺めながらそこを祈りの場所にして、それが楽しいひとときでした。それが済んでから、六時までに河本さんの所で早天祈禱会をして、それが済むと河本さんの奥さんの手作りの朝ご飯をご馳走になっていました。

一人ですし、小さな家ですから掃除もすぐかたづきます。時間ができると、信者さんの家へ訪問に出かけました。そ

れから、皿倉山や帆柱山へお祈りに行きました。

信者さんと言っても、五、六軒ぐらいだったかなあ。早天祈禱会も河本さんの所の従業員のほうが五、六人ぐらいで、礼拝はそれに城さんの所が二人、それから吉永さん(病院長の奥さん)、若松からおばあちゃんがいらして、新見さん、新原さんが加わるんです。日曜学校に今の河本信生さん、高橋英雄さん、悦雄さん、畠山栄子さん。日曜学校の一期生ですね。

—先生、その頃の頭はどうだったんですか—

先生・坊主だったね。丸坊主だったから、結婚式の写真もツルツル坊主……。

奥様・早天祈禱会には、羽織袴でした。

先生・あの頃は着物でね、日本男子だから……(爆笑)。今の復興道路が狭い道で、そこをね、八幡駅の所から毎朝通つてくるんですよ。

—はきものは?—

先生・下駄でした。

奥様・カバンの中に、はな緒が切れていいように皮を入れていましたよ。

先生・その頃、カバンあったかな。カバンは欲しくても、これ(お金)がなくてね。たしか風呂敷じゃなかったかなあ。

カバンを持つのが長い間の夢でね

—また話しを前に戻して申し訳ないのですが、八幡駅に着いた時、足がガタガタされたとの事。その気持はよく分かりますが、その時に力となった御言を覚えておられますか—
先生・はい、それはね、やはり、私の生涯のメッセージとして与えられたイザヤ書四三章、「今よりわれは主なり われ行はば誰かとどむることを得んや」でした。この八幡に来たのも、私が来たくて来たのではなく、主が行けと言われたので来ました。私の主人が共にあって下さるから大丈夫……頭は大丈夫と分かっていますが、なかなか心はそこまでいかなくてね。

しかし、その御言で、足のガクガクもピシヤツと収まったわけなんです。これから先は、蛇が出ようと何が出ようと構わんと思つてね。河本さんが主の愛をもつて暖かく迎えて下さったから、それから寛いでね。河本さんは、まず主を第一にするという姿勢がピシヤツとなさってましたね。だんだん統制になって、八幡漬物組合が合同して一つの有限会社になって、事務所が大正町の一角にあり、社長の椅子の後に社訓というのがあって、その第一句が何と書いてあったかというのと、「神を第一にする」です。あれは素晴らしいしかなかったなあと思いますね。

三 結婚問題

先生・それで、初めの一年は特別な事はなかったですね。そして四月頃ですかね。折瀧先生から、「牧会をしようとする者は一人じゃいけない。結婚しないといけない。誰か知っている人がいるのか」と言われて、「いない」と言うと、「そんなら僕が世話してあげようか」。

「はい、お願いします。白紙でお任せします」。

今思えば無茶なようだが、献身者だからね。神様の導きならどういふ人でもいいんだ……私はそういう気持でね。とにかく神様がこの人と生涯を共にして使命を果せとおっしゃるなら、それでいいんだと、そこまで何もかも神様第一にしてという気持だったんです。そしたら家内をね、「この人はどうか」と言われました。

奥様・私の郷里の方で父が亡くなって、母が一人になったものですから、郷里に帰らなくてはいけないくなり、学校は福岡でしたんですが、卒業して郷里に帰ったのです。遊んでいるよりはという事で、二年半ほど代用教員をしていました。三年半ぐらい五島にいましたね。

—先生は、その時はまだ修養生をしておられたんですね—
奥様・はい、修養生でした。外に広い畑があって、その畑を

開墾しているんですね。そして肥しをかけたなりね(笑い)。掃除をする時は、調子外れの声で歌うでしょう(笑い)。

私の弟がね、「あの人は明専を出てるらしいけど、ちと変人だろうね」と、そんな事を話していたのです。コソコソとね(爆笑)。そうしたら、その変人と結婚しようとは思いませんでした(爆笑)。本当に神様は……。

郷里の方は村全体が真宗で、私の母もお寺の出なのです。私一人そこでイエス様を信じていくのは、とても不可能と思ひ……、十八才の時に洗礼を受けているのです。そこには教会も何もないものですから、もう細々とした信仰でしたが、一人で祈っているわけなんです。

そういう時に村の人から縁談がありました。教会もありませんし、信仰を持ち続けられなくなりますので、そうすると、体は生きていても私の魂は死んで生ける屍となりますので、また福岡へ出てきました。

私を導いてくれたのが、末永の叔母なんです。叔母は、私がね、そこまでイエス様を信じているんだったら、神様を畏れる人が与えられる様お祈りしましょうねという事で、毎日のように叔母が私のために祈ってくれました。それですから、私が信仰を持って行くことができさえすればという気持があったのです。そしたら、どこでもいいと思

いました。

そしたら、神様がこういう道を開いて下さったのですが、本当だったらそんなに祈っているのですから、「はい」とすぐに行けそうなものなのに、肉の思いがワツと迫って、イエス様、私は祈っていたけれども伝道者にまでは……というわけです。

—博多に戻られて何年目ぐらいですか—
奥様・三年目でした。

四 信仰の戦いと決心

奥様・とにかくそういうお話ですから、イエス様が与えて下さったと思うはずですが、伝道者という事がワツ！とのかかったのです。その当時、伝道者というものは「赤貧を洗う」、そんな生活をすぐ思い出すわけですね。そういうことに私が耐えていけるだろうか。私にはできません。そんな気持がいっぱいでした。

それともう一つは、伝道者の妻がどんな信仰を持っているなければならないか。自分の信仰はよく分かっているし、イエス様を信じていきたいけれど、伝道者の妻としての信仰は持っていないし、これは本当に困った事になってしまったと思つてね。

あれも心配、これも心配。まず生活の事がね。また、自分自身のことも心配。その上、主人を知りませんしね。今の若い方々のように愛していますとか言えばね(笑い)、何もかも放り投げていくこともあるけど……。ちよつと難しい人のようでもあり、変人のようでもあり、本当に困ってね……。 (笑い)。

それなら、私にはとてもだめですから、おことわりします。私はそんな器でないですからと言つてもいいのですよ。ところが、今まで祈ってきた叔母が言うには、イエス様を畏れる方とお祈りをして、こういうお話になったのだから、主が力を与えて下さるならば、伝道者の半身となる事も不可能ではないのだから……。と、叔母の方が先に信仰を持っているわけ……。ただど進めない、私自身がね。祈つて決めなさいと言つてくれるのです。その時は一生懸命、「主と私」で祈りました。

これまで、主の御旨だったら従いますと祈ってきたでしょう。祈ってきたのにいろいろな心配のために、あれも心配です、イエス様これも心配ですと訴える様にして祈りました。

そうすると、生活のためには、「まづ神の國と神の義とを求めよ」の御言が与えられるし、また「義(ただしき)者のす

てられ或はその裔(すえ)の糧(こひ)ありくを見しことなし」。

私はとても、私の信仰ではそこまで行けませんとイエス様に申し上げると、御言を与えられるしね。どうしても言い逃れができないのです。最後には、「我に属(つ)ける義人は信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ」、結論は、この御言一つになったのです。詮じ詰めればね。

ですから、イエス様有り難うございます。神様が備えて下さった道を私が拒んでいると、わが魂はこれを喜ばない。

「靈感賦」二四番

一 主よ、御旨にわれ従わん

よしや道はけわしくとも

二 我はおのが好む道を

えらみなさで主に従わん

先生・私の方の問題としては、こちらから話しをすることも聞くこともできないし、それに、お前は献身者だから神と人との前に潔くなつて、交際についても人の模範とならなければならぬ、という訳で、結婚式が済むまで物言うてもいけないし、手紙出してもいけないと止められたんです。それで困ったなあと思いました。普通のお嫁さんのように甘い夢を見て来られても―私は命をかけて行くのだから

ら—こんなはずではなかったと泣かれて、足引っぱられても困るからと思つてね。ある時、意を決して「掟に叛くことなれど」(笑い)、折瀧先生には黙つて福岡まで行つたんですよ。

そして、家内の母に会つて、実は私はこういう気持で、これから先は聖書に従つて神様だけに信頼していく。だからこの世的に幸福にしてあげることはおそらく不可能だと思ふから、その辺のことを考えられたでしょうか？

母が言うには、「榎本さん、その事については心配いりません。百合子もいろいろ心配して、一生懸命祈つて決心がつかましたので、もう心配ないと思います」と言うてくれましたので、ああそれでよかつたなあと安心して帰つてきたわけです。

奥様・主の御旨であるなら大丈夫、力も与えて下さるし、その中も通して下さる事もできる。これまで祈つて、主を畏れる人を主が与えて下さつたのなら、主には従うのが道ではないだろうか。そう思つて決心したわけです。

今から考えると、そんなに悲愴な決心をしなくてもよかつたと思ふんですけど：：(笑い)。

先生・そういう決心をしたから、こういう生活をさせて下さるんだと思ふんです。

奥様・それでも、十年、二十年、三十年と子育て時代から戦争と、いろんな中を通りましたし、大変だなと思ふ様な時でも、主がここに置いて下さつて居るのだ、またこの困難の中を通して下さるといふ気持でね。その裏に流れているもの—主の御旨でここに送つて下さつて居る—というものがあつて、迷うことがないんですね。

それですから、あの時の決心は、私の一生涯を通して—ああ神様はいい時に不安を与えて、主の御旨に従うことを教えて下さつたのだなあと思います。不安なしで来たならば、そういう時、それこそへこたれていたと思ふんです。—ギデオンの神様の御旨を知るために、何度も確かめたように、同じ事をなさつたわけですね—

奥様・そうですね。

—今のお話を伺いながら、リベカがイサクの所へ行く時のことを思い起したのですが、あの時のリベカもまだ見たこともない、行き先も分からない、それでも私は行きますと言つています。多分同じ様に真剣に祈つただらうと思ふんです—

奥様・そうですね。私は八幡という所も見ることがありませんでした。

五 結婚式

—結婚式は、いつされたのですか—

先生・昭和十五年の十一月五日でした。福岡の教会でした。

それで、いよいよ結婚するという事になって、私が郷里に知らせたんですよ。そしたら両親が大変喜んでね。そんなら父が結婚式に行くつて言うて来たんですよ。

父は—今から考えると若いなあと思うのですが—その頃としては歳だったんですよ。そんな歳で長い汽車旅は疲れるから来なくていいからと言うたんですよ。そしてら母から、お前が来るなと言うもんだから、父が張り切つていたのががっかりしちゃつて……と言つて来たもんだから、そんなら来て下さいって手紙を出したら、一週間程して出て来てくれたのです。

一週間程一緒に生活して、早天祈祷会にも祈祷会にもすべて集会に連れて行き、私の行く所へ引っ張つて行つたんですよ。何とかしてこの際伝道したいと思つて、一生懸命連れて行つて。で、結婚式を二日後に控えた日に、折角来たのだからと阿蘇山へ連れて行つたんですよ。その時父が言うには、お前はいい生涯に入った、もう何をしてくれるより安心だと喜んでくれました。それで、それまで親の言うことを聞かない親不孝を許してくれたように感じた

んですよ。

奥様・式が済むと、その翌日からもう早天祈祷会でした。

先生・家内の方は、夜更かしの朝寝型なんです、それが早

天祈祷会。

奥様：…ちよつと辛かった。五時からお祈りしてね。そして六時まで行くわけよ。



結婚式のお二人

〔取材班一同、時間の経つのも忘れて聞き入つておりましたが、ふと気がつくとも夜も大分更けておりました。話はこれから新婚生活という非常に興味深いところですが、残念ながら次回にお願いすることにしていただきました。〕

牧師館訪問記（四）

一 はじめに

「ぶどうの木取材班」が誕生したのは昭和四七年で、最初に企画されたのが「牧師館訪問記」でありました。

第一回は「ぶどうの木第八号」（昭和四八年四月発行）に先生の学生時代の入信から献身までが掲載され、第二回は八年後の第十二号（五六年三月発行）に修養生時代から八幡に遣わされるまで、第三回は十三号（五七年八月発行）に伝道開始から結婚までと語り継がれてまいりました。

そして今回は、昭和十五年十一月の結婚から間もなく第二次世界大戦に突入、空襲を経て終戦を迎えるまでの、おそらく先生にとって最も困難な時代であったと思われる頃のお話です。

今日ではとても想像もできない程の激動と困難の中で、聖書一筋、殉教の精神をもって歩んで来られたご様子を、先生と奥様は、神様の守りと恵みをもう一度噛みしめるようにして語って下さいました。

二 新婚生活第一歩

先生 この前は、結婚式が済んで、そのまま八幡に来て、翌

朝から早天祈祷会というところまでお話ししましたね。

家内は、家が倉庫の二階と聞いていたので、余程のあばら家でネズミもチョロチョロしているような所を想像してたようです。ところが来てみると、新築で畳も新しく芳しい香りがしてたんですね。

そして、翌朝六時から早速、早天祈祷会に出たわけです。

新婚生活は信仰生活の第一歩ですからね。

先生達がおられた場所は？

先生 今の河本さん宅の事務所になっている所が二階になっていて、そこに畳の間が二間あって、そこを教会として使っていました。上に昇る階段の所に、「八幡キリスト伝道館」という小さな看板を掲げておりました。家庭集会だと来にくいだろうから、会堂であれば誰でも入りやすい。そういうことで、河本さんが二階を開放して下さいたのです。下は河本さんのお店になっており、二階には高橋さんご一家も住んでおられました。

先生達は、集会のたびに通っておられたわけですね――

先生 そうです。早天祈祷会であれば六時までに行かねばなりません。

奥様 時間がないからと急ぐでしょう。私は後ろからスタコ

ラストコラ付いてゆかねばなりませんでした（笑い）。

先生 それもね、洋服なら走りやすいですけど、その時は和服でね。私も着物に袴でしたよ。

―当時の礼拝出席者はどれくらい―

先生 そうね、河本さん夫妻・長尾さん夫妻・高橋さん夫妻・よそから来られていたのが新原さん夫妻・城さん夫妻・吉永さん・南部さん・若松から高橋のお婆ちゃん……：それ位ですかね。

それに、河本さんとこの店員さんが何人か出てました。その人達には日当をあげてね。日曜日に休むと生活に影響するので、河本さんが日当をあげるからと出席させてくれたのです。そういう人達ですから、集会中は居眠り半分だったようです。

集会は礼拝と祈祷会、早天祈祷会は火曜から土曜日までが定期集会でした。

まあ、その頃の情勢が戦争直前でしたから、いろんな事で制約があり、教会設立の時も届出を出したのですけれどもなかなか返事が来ない。やっと来た時には、ただ「却下」とだけ書いてある。理由はなしなのです。それで、何故かと聞きに行きましたら、「聞かん方がいい」と言うんです。

私としては認めてもらえなくても、伝道をやって実績を作つてゆけばよいと考えてやっておりますたら、昭和十六年

になって教団がまとまるという事になり、私達も入って、やっと教団の伝道所という事になったのです。

そういう情勢ですから、新しく求めて来る人は、ほとんどありませんでしたね。



新婚旅行を兼ねて豊川の実家へ

三 戦時下の伝道

先生 それに、何度か特高に呼び出しを受けました。その時の質問は、「伊勢の皇大神宮はどう思うか。天皇はどう思うか」、そういう質問なんです。私は、伊勢の皇大神宮は

先祖を祀つてあるのだから敬意を表する。拜むとは言わん。天皇についても、尊敬するという言葉を使いました。

私ばかりでなく、役員をしてもらつていた河本さん、新原さんも呼び出されていました。当時はまだ、家族も少かつたので、朝起きてお祈りをして、早天祈祷会に出て、帰つて聖書を読んでお祈りをして、午後は訪問をしておりました。

だんだん戦争が近づくにつれ、企業も軍需産業中心になつてきました。物資も統制となり、物がだんだんなくなつてくる。その内、十六年に俵雄が生れるということになりました。それで、金物もなくなるといふことで、店仕舞いの売出しの時に、私が、俵雄が小学校に上つて遠足のためにと水筒を買つてきたという話は、この時のことなのです(笑い)。

それから、教科書も少なくなるというので、それではと、一年生から六年生までの分を買つてしまつたわけです(笑い)。戦災で全部焼けてしまいましたけれども……。

食糧も配給制になつて、卵も並んで買うようになりました。今の豊かな時代からは解らないでしょうね。

その内に戦争も激しくなつて、空襲に備え、防空演習が始まりました。灯火管制といつて、サイレンが鳴ると電灯

を消すか、カバーをして小さくして、飛行機から見えないようにするのです。

あれは、灯火管制中の祈祷会の時でしたかね。戦時中も集会は休まず続けておりましたが、俵雄が三才ぐらいだったかな。

奥様 俵雄が三才で、和義が二才の時でした。その時、私は咲子が生れるので、福岡へ帰つていたんです。それで、主人は二人の面倒を見ながら、集会しておつたわけです。

先生 そういうことで、夜の集会の時は、二人が早く寝るものですから、大丈夫と思つて、その灯火管制の時も出かけたのです。ところが帰つてみると二人がいらないんですね。びっくりしましてね、というのは二階でしょう。テラスがあるのですが、隣との間に防護柵もないものですから落ちてもしたら大変。それに階段もあつて暗いし、とても降りて行く筈もないし……それでお祈りしながら一生懸命探したんです。

隣りの奥さんも心配して探してくれたのですが、分からない。もしかしたら、早天祈祷会の時、二人を連れて行つてましたから、私を迎えに来ているかもしれないと思つて、大急ぎで戻つてみたのです。灯火管制中ですから、保安灯の豆球が所々スポットのように小さくついているのです

が、製鉄所の西門の所に来てみるとその保安灯の下に二人がポツンと立っているのですね。びっくりしましてね。その時、和義はオムツをしたままでした(笑い)。

奥様 どうも和義がオシッコで起きて泣いたらしいんです。それで俵雄が目がさめてお父ちゃんを迎えに行こうねと言つて、暗い階段をヨイシヨイシヨと降りて行ったらしいんですね。

先生 二人がいた所は、トラックが軍用のため夜でもほとんど出入りしているところです。しかも、灯火管制ですから、ライトもつけていないんです。子供が轢かれても分からな。ですから私は心配でお祈りしておりましたら、二人が外灯の下に立っていたのです。

その時、俵雄が「アンシヤ、キレイヨ」と言うんですね。その頃は管制も解除されて、電車もライトをつけていたのでしょうね。「電車、きれいよ」と言うんです(笑い)。二人が何の不安もなく、「お父さん、迎えに来たよ(笑い)。今でも印象深く憶えています。

そういう中を通つて、神様が守つて下さったと思います。

四 配給生活

奥様 あの頃は厳しい食糧統制で、しかもヤミはいけな

しよ。どうしても、配給だけで生活しなければならぬ。それで毎日毎日お米を計るわけです。次の配給まであと何日だから、今日はこれぐらい。おかゆにしたり他のものを入れたりして、できるだけお米を残しておりました。

今から考えると、そんな事しないで食べとけばよかったです。私はお腹のことは考えないで、目先のことばかり考えていたものですから、咲子の時は、今で言えば未熟児でした。洗面器で産湯を使つたぐらいですから、今だったら保育器に入っていたぐらい小さかった。それでも家庭で生んで、しかも十一月の寒い時でしたので、咲子は一人で寝ないのです。私と一緒に寝ると温いのでしよう、よく寝ましたから……。それだけ小さくて寒かったのだと思います。

先生 お乳も配給で十分ないしね。いくらか助かったのは、前が青果市場でしたから、時々リンゴなんかを分けてくれていました。十九年頃はもうそれありませんでした。バナナも入つて来なかつた。

奥様 そういう中で、聖書に記されているエリヤの「桶の粉は竭(つき)ず、瓶の油は絶(た)ざりき」とあるように、実際、今日は食べるものがないからという事は、一日もありませんでした。いよいよ駄目になると、神様がどこから不思議

なように与えて下さることを経験させていただきました。—そういう状況の中で、信仰を持つという事は大変なことです。思います。何も無い時、茶碗を伏せてではなく、上を向けて置いたという話を聞きますが、そういう事ですか—

先生 それはね、そういう信仰があるとは思われないんです。目の前には何も無いけれども、神様は何とかして下さるという、ただそれだけなんです。だけれど、神様はその時になるとちゃんと必要を与えて下さってね。

特に自分はこれだけの信仰があるんだというものは何もない。むしろ、自分には信仰はないと思われないけれども、「あなたのほかにわたしの幸はない」(詩十六・二)とありますが、幸いどころではない、生きることができないのだから、「神様！」それだけでした。

神様はその信頼に応えて下さって、一度もこらえておかないという事はなかったですね。

奥様 「桶の粉は竭(つき)ず、瓶の油は絶(た)ざりき」という事が、本当に現実でした。

主の祈りの「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」という祈りが、本当に切実なものでありました。

先生 だから、やはり一步主に従うと、後は主が次も歩ませて下さるのだなと思います。

前回の時にお話しましたように、結婚を考えた時、おひつが空っぽになっても、果たして信仰が持てるだろうか心配していた人が、神様に従ってきたら、信仰を持ったという意識はないのだが、いつの間にか神様に信頼して行けば大丈夫という信仰まで、神様が導いて下さった。

—だから、初めの一步を従うことが出発点だと思いますね。—経済的に苦しくなると、私共ですとすぐ他に収入を求めることを考えますが、そういう誘惑はありませんでしたか—
先生 私は献身者ですから、献身者はまた殉教者ですから、いつ死んでもいい。私だけではない、私の家族全員がそうだと考えていましたから、その事についてはそうありませんでした。

けれども、あれは俵雄が生まれていつ頃でしたかね、西南女学院の原院長が見えたのは……。その原先生がわざわざ来られて、今、戦時中で理科系の先生がみんな軍に徴用されていなくて困っているの、来て助けてくれないかというわけです。

私は「先生、私は伝道者です。献身者ですから他のことはしません」と言っておことわりしたんです。けれども、原先生は、何とか考えて下さいと言って帰って行かれましたが、それから二、三回来られました。その度に私はおこと

わりしていたのですが、「あんたが伝道してくれるならそんな結構なことはない。どうしてかという、今、学校では聖書を教えたり、讚美歌を歌ったりすることを禁じられている。部外者が来て教えてくれる分は学校に責任はないので、そうしてほしい」というものですから、「講義はしないで、聖書の話をしていいんですか」。「それならなお結構」ということで行くことになりました。

昭和十六年から二二年まで続きましたかね。その時の教え子の一人が岩隈さん、それから服部さんという方がおられます。

その頃は、軍需産業に学生も女子挺身隊として徴用されて、勉強はなかなかできませんでした。他の牧師さんも徴用されてましたが、私は学校に行っていた関係で来ませんでした。

神様の不思議な摂理で、神様が導いて下さったのだなと思います。すべてを神様に委ねてゆく時、危険な中でも、難しい規則の中も、逃るべき道を備えて下さる。

五 空襲の中で

先生 戦争もますます激しさを加え、二十年六月に日本で初めて八幡にB 29が飛来して、空襲を受けました。

その時は夜でしたが、サーチライトでB 29を照らし、高射砲を打つのですけど、高くて届かないのですね。高射砲の玉が、シュルシュルといって走っているのがよく見えるのです。見ててきれいでしたね。

その内に、高射砲の玉の断片がバラバラ落ちて来たものですから、恐くなって家の中に入りました。この時の爆弾が枝光に落ちて、沢山の人が死にましたね。

—先生としては、そういう危険な中で使命感から最後まで残るおつもりだったのですか—

先生 私は信者の方が一人でもおられる間は、残っておこうと思っていました。私が動くという事は、皆さんの心に不安を与えることになる。それは主の御旨ではないと考えて、そのままおったんです。信者の皆さんは心配してくれまして、たけれども……。

奥様 河本さんはね、「奥さん大丈夫ですよ。行きなさんな」と、私が五島へ行こうかと言ったら、行かん方がいいよと言わんばかりの淋しそうな顔をなさっておられました。

先生 河本さんは、生きるも死ぬるも一緒にと考えておられたのですね。

河本さん宅に漬物に使うレンガ造りの大きなタンクがありました。これに手を加えて防空壕替りに、畳も布団

類・食糧品も入れて、ここで先生達と当分生活できますから……という訳です。

奥様 入口にこういうドアがありまして、いよいよの時はここに味噌を塗ったら大丈夫ということだったんです。ところが空襲の時、味噌塗るの忘れちゃった(笑い)。

空襲を受ける少し前から、私は歯が悪くて、それが化膿して口が半分開かないような状態で、その日も寝ておりましたら空襲でしょ。バラバラバラバラ、マッチ棒のような焼夷弾が上から落ちてくる。これは大変とモンペをはいて裸だった咲子をオムツのままネンネコにくるんで、下の隣組みの防空壕に入ったのです。そしたら、主人が上から「そこにおったら焼け死ぬよう！」と言うものですから、慌ててそこを出ました。そのままいたら、恐らく死んでいたでしょう。

先生 そこにね、近くのモヤシ屋の奥さんも一緒にいて、「どうしようか、どうしようか」と言っているものですから、一緒に出してやりましたから、助かりました。

それから私は帰って、焼夷弾を一生懸命消していました。奥様 そんなことしないで、逃げればよいのですよ。だけど、そのように訓練を受けているものだからね(笑い)。

先生 それで正直にやってね、もうだめだと思ったのでやめ

て、防空壕へ行つてフタをして、その上に用意していた砂をかけてから避難したのですが、その時はもう周囲は火の海でした。

—その時のことですね、先生がよく話されるスコップでピョンコ、ピョンコ、飛んで行かれたのは—

先生 そうなんです。そこで教えられた御言は、「あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない」(イザヤ四三・二)で、「そうでした。ありがとうございます」と言うて、この御言を頼りに火の中を突き込んで行ったのです。

チョット足の甲の所をやけどしましたが、大したことなくかったです。でも、栄養不足からか、なかなか治りませんでしたね。

奥様 私の方は、それで汽車道の方へ逃げ出したわけです。俵雄は福岡の方へ連れて行っていましたから、私は咲子をおぶってカンボをかぶり、和義を連れて汽車道の溝の所に避難するように言われていましたので、そちらの方へ逃げました。

そうしたら、バリバリバリバリでしょ。もう恐くて恐くて、そこまで行けなくて、咲子を降して汽車道の土手の所が畑になっていましたが、そこに親子三人カンボをかぶっ

てイエス様、イエス様と言つてね、じつとしていたわけです。飛行機が三百機ぐらい来ているのですから、空は真っ暗ですよ。とにかくすごい爆音なんです。

それからどれくらい時間が経つたか分かりませんが、おさまったわけです。そしてら主人が来て、カンボをはぐつてから……(笑い)。

—先生でつきりやられたと思つた？—

先生 僕はね、カンボがそこにあつて動かないでしょ。これはてつきりやられたと思つてね、はぐつてみたんですよ。そしたら、和義なんかブスーとふくれたような顔をしてね(笑い)。恐怖で脳をやられたかなとチョット思いました。

奥様 泣きもしないんです。咲子は満二才ぐらいでしたが、泣きませんしね。

先生 家の方は火の手が上つて燃えていました。二時間ぐらいかかったでしょうか。それから予定の溝へ行きましたが、その内に雨が降り出した。煙幕を張つたものだから、空は真黒でね、黒い雨が降り出した。それで急いで帰つて、そこに焼け残りの木やトタンなどを集めて簡単な屋根を作つたわけです。

その頃になつて、安川電機や三菱化成に勤めていた人が家族を心配して家に走つて帰つていたのですが、咲子にお

乳を飲ませている姿を見て、「ああ、赤ちゃんが助かつている」と安心したように、普通の足取りになつて帰つていったのを思い出します。だから、赤ちゃんの存在というのは、大きなものがあるなあと思ひました。

そういう事があつて、辺りの焼跡を見まわした時に、悲惨だなあと思ひました。もうゴロゴロ真黒こげの死体が転がっているんです。それも血気盛んな兵隊さんが真つ黒こげになつて死んでいるんです。乳呑み子の咲子や和義が無傷で助かつたのは、神様の憐れみだなあと思ひました。

その時、一番悲劇だなあと思つたのは、その日の夕暮でした。私達の家の近くに、吹き降しの家に住んでいる韓国の家族の方がいまして、その人は馬車引きだったので、その日は仕事に出ていて帰つてみると、家も全部焼けてしまつている。家のトタンをはぐつてみると、そこに家族の焼死体があつた。それを見た時、彼は大声で「アイゴー、アイゴー」と、大地を打ち叩いて嘆いている。その声が……、何もかも焼けてシーンとしている静寂の中で、「アイゴー、アイゴー」という声が、夕やみに吸い込まれてゆくように響きわたりました。何とも言われないその声は、私達の心の中にもキューツと沁み込んできます。

ああ、戦争つてなんとむごいものだろうと、その時思ひ

ました。それまで戦争の悲惨さというものを身近に見たことなかったのですが、この時ばかりは、何の罪もない人達をこんな嘆きに落し込むなんて、恐いもんだなと心から思いました。

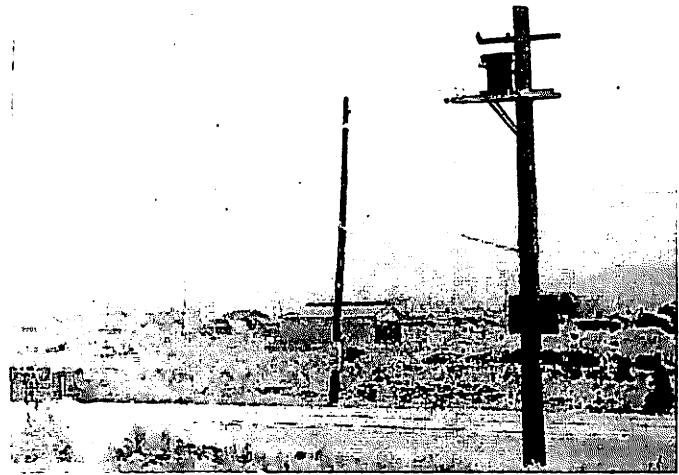
奥様 馬車の馬が焼けて、腹がパンパンに膨れて倒れているんです。この電車道も通れませんでした。

先生 それから、河本さん達はどうしているだろうかと心配して探したら、河本さん達も私達を心配して探しておられ、この下の方で会ったわけです。高橋さん一家もご無事でした。

それから、陣山の九州電工がある所に、昔は大きな冷蔵倉庫がありました。そこを河本さんが知っていて、それが残っているというので、そこで一晩泊めてもらいました。奥様 そこに行ったらお米もあるし、いろいろ食料もあつたね。お粥でしたけれども、食べさせてもらいましたよ。

先生 それから、みんなが落ち着くまで、それぞれの所に別れましようということになって、私達は福岡へ、河本さんは東郷の方へ行つたのです。

しばらく散り散りバラバラになりました。



空襲後の前田町

牧師館訪問記（五）

一 はじめに

早いもので牧師館訪問記も五回目を迎えました。今回は、終戦後の混乱を極めた時代に、遭遇するいろんな問題、困難

の中をどのように歩いて来られたか、会堂が与えられる前後までを日頃の説教では聞くことのできないエピソードを加えながら、お話ししていただきました。

ある牧師館訪問日に、サフラン会を中心としたメンバーが集りました。その日の説教の御言は、「信仰に始まり、信仰に至らせる」(ローマー・十七)でした。それは、これから話される御自分の歩みがこの御言の通りであり、どんな時にも終始一貫この信仰の姿勢を貫かれたことを、改めて教えられた次第です。

二 戦災後

先生 前回は、戦災に会ってみんな散り散りバラバラになったところまでお話ししましたね。それから私達は、家内の母と妹が福岡にいましたので、そちらへ行きました。

奥様 その時は、荷物は壕に入れたままでしたので、着のみ着のままでした。主人は私達を福岡に送ってから、また八幡に帰って壕を掘ってみると、幸い荷物は焼けずに助かっていたんです。布団も鍋も私がお嫁に持って来た鏡台までもね。随分大きな壕でした。主人が夜一人で掘ったんです。

先生 私は毎日、福岡から通って焼跡の整理をしていました。戦災者証明というのがあって、それを持っていければ汽車は

無料だったんです。汽車は多くて、なかなか乗れなくてね。よく機関車の石炭車の上に乗ったりしたものです。今考えると、よく冒険したものだと思います。トンネルに入るとボアーと(笑い)。

奥様 河本さんとも、毎日のように東郷から出てきていました。あちらも丸焼けでしたので、味噌も焼味噌になっていました。でも水アメ、砂糖とかいくらか出てきて、それをいただいたりしましたので、当時としては本当に貴重なものでした。

その頃、福岡の方には、私達一家が五人で、それに母と妹、弟と嫁、その子供、それに二番目の弟が復員して来ましたから、頭数だけでも十人、それだけの人を食べさせなければなりませんので、配給だけではとても足りない。それであっちこっち買出しに出かける訳です。

先生 私は八幡へ行つて、戦災の後整理に行かなければならない。近所の方が亡くなっているでしょ。その確認をするわけです。たいがいの方は、家の下に防空壕を掘ってその中に避難したものですから、家が焼けて中で蒸し焼になっているんですよ。一酸化炭素中毒のためか、顔色は美しくてね。この人本当に死んでいるのかなと思うほどでした。さわるとズルツとむけてね。

私達は組の共同防空壕に入ればいいと思って、荷物用の壕だけを掘っておいたわけです。

それで、その壕を掘ってみると、荷物が無事だったものですから、河本さんの荷物と一緒に東郷まで持って行ってもらって、そこから福岡まで馬車を雇って運びました。その時一〇〇円だったと思います。それも河本さんが饑別にといつて二〇〇円下さつてね、またお会いしましょうと言つたものの、饑別と言われると、このまま会えなくなるのではないかと淋しい気持ちになつたのを思い出します。

—先生はそのまま福岡に移られたわけですか—

先生 そうですね。どこにもおる所もなかつたからね。それから間もなく、西南女学院の方で、軍に徴用されていた時の将校宿舎が自由に使用できるようになつたので、それを戦災に遭つた職員の宿舎にしようというわけで、私にもどうですかと言つてくれたので、それではと、私だけが入つて、家族がいつ来てもよいようにしていました。

—それはいつ頃ですか—

奥様 二十年の秋でしたね。だから福岡には二か月ぐらいのことになりますね。それから私達の方は五島へ行きま

した。先生 福岡にいても食糧はないしね。やみ米は買わなければ

ならないし、そのお金もないしね。

奥様 その頃、千円で米一俵、大豆一俵が買えたんです。それで、それを買つて小倉で暮すか、それを旅費にして五島に行くか考えたんです。小倉に行けば米一俵、大豆一俵で財布は空になりますから、それで終りでしょ。五島(長崎県)に行けばお魚もあるし、食べることは何とかなるといふことで、五島へ行つたんです。

先生 五島から魚を運んで来た船に頼み込んで、帰りの便に荷物を乗せてもらおうというわけで、毎日築港に出かけてキョロキョロ船を物色していたらですね。見知らぬ漁師がきて、「そら、大将」と立派な鯛を二、三匹くれたんです。びっくりしてね。後で考えると、ヤミ市を取り締る刑事と間違えたらしいんですね。私の人相が悪かつた(笑)。それで思わぬ御馳走になつた。そんなこともありました。

奥様 舟に乗つて一、二時間くらい経つて、海がシケて来たものですから、そのまま進むことができなくて、呼子の港に避難しました。私達は宿屋に泊つたのですが、その時もお米を出さないと御飯を炊いてくれないんです。配給の米を持つてまわらねばならなかつた。二、三日おつたでしょうか。そして十一月二五日に五島に着き、主人は小倉の方へ帰つてゆきました。

三 五島での生活

奥様 最初は親戚の家に身を寄せたのですが、私と子供を入れて四人、それに弟が加わって五人ですよ。いつまでもいるわけにもゆかず、母が医者に貸していた家の一間を空けてもらって、そこに落ち着いたわけです。

そこでまず石油缶を切つてカマドを造り、それでいっばいお芋をふかしました。ごく原始的な台所でしたけれども、腹いっぱいお芋が食べられることが本当にうれしかったですね。

こちら(小倉)だったら、これだけのお芋を手に入れるとすると、大変な思いをして買い出しに行かねばならないですよ。

でも、五島の方は知り合いも多くて、ただみたいにして持つて来てくれるし、魚も漁に出た舟が帰つて来た時、港に行くよね、ホーイと投げってくれるんです。ただなんです。

私が娘時代、代用教員をしていた頃の教え子が漁師になつててね、それで、「末永先生！」と言つてくれるわけ(笑)。

先生 大きなカゴに魚をいっぱい入れて帰つて来るでしょ。一体いくらしたのと聞くと、「ただ」と言うものですから、びつくりしちゃつてね。どうしても信じられない。

このせちがらい世の中で、何だか別世界へ行ったような

気がしましたね。

奥様 そういう事で、子供はどんどん太りますしね、私も栄養失調が治つたわけです。

畑もおこして、いろんなものを植えましたよ。

先生 冬のある日に私が帰つてみると、シヤクシ菜がピューと伸びているんですよ。誰に作つてもらつたのと聞くと、自分が作つたと言うでしょう。これまた信じられなかった(笑)。

奥様 タキギがありませんから、山にタキギを取りに行かねばなりません。最初はそれをゆわえるのがヘタでね、うまくゆきませんでしたけど、だんだん慣れてきました。それを背負子で背負つて帰るわけです。

肥えも自分で汲み取つて、肩にかついで処理しなければなりません。それに水もなくてね。井戸が村に一つか二つしかないものですから、そこまで汲みに行くわけです。ツルベで水を汲み上げて、天秤棒の両端に水桶を乗せて、それを担いでバランスを取りながら歩くのです。これは私うまかつたですよ(笑)。

朝五、六回、夜十回ぐらい運ばないとお風呂に入れない。人数も多かつたからね。

先生 私がある時、代つて水汲みしたんです。水汲みという

のは、大体、女の仕事ということになって、男は誰もしないんです。それを女の人の中へ私が行って、ヘッピリ腰でやったもんですから、人の物笑いになりましたね(笑)。奥様 五島に来た当初は何もないんです。お膳もないし、買うにも品物がないんです。それで村中の知った所へ行つてあっちこちから調達して来るんです。鍋、釜から何でも。それで母とか妹がびっくりしてました。姉さんは心臓やね工、ようそんなに人から貸りきるねというわけです。何でも私が交渉係なんです。

—先生、奥さんにそんな力があるとは新発見したのでは—
先生 そうね、そういう外交力というのか、持つてるんですね。それにしても五島は平和な所だなぁと思いましたね。あれは秋の運動会の時だったかな。

奥様 そうですね。小学校の運動会という村のお祭りみたいなもので、総出で行くわけです。その種目に来ている人ものものを拝借する競争があつて、その中に「末永先生」というのがあつたんですね。「末永先生、末永先生！」と呼ぶものですから、「ハイ」と言つて……、その時、私、着物を着たものから、腰をまくり上げて裸足になつて走つたんです(笑)。

先生 僕は別な所で見てたらね、何か和服を着た女の人がバ

タバタ走り出したでしょ。誰かいなと見てたら家内でしょ、びっくりしちゃつてね(笑)。

奥様 私が以前代用教員をしたものですから、私を知つているわけね。それで私も負けちゃならないというわけで……(笑)。

私がいくつの時でしたかなあ、三十才ぐらいじゃなかったでしょうか。本当に健康でね。一日ぐらい風邪引かんかなと思つてました。いつも咲子をおんぶして仕事をしなくてはならないでしょ。

奥様 それから五島の思い出として、和義が海に落ちておぼれたことがあります。

冬の日に、俵雄と二人で遊んでいて、舟に乗ろうとして落ちたらいいんです。三才でしたね。それでポチャンポチヤンやつているのを、幸い近くに漁師さんがいて気付いて助け出してくれたんです。もしその方がいなかったら、助からなかつたでしょう。

先生 本当に神様のお守りですね。

奥様 それから半年ぐらい経つた夏休みに、和義が「お腹が痛い、痛い」と言い出したんです。

(丁度、主人も帰つていたんですが) 何にも食べていないものですから、翌朝トマトをあげようとしたら、「僕、

目が見えん。トマト何処にあるん」と言うんですよ。まあ、これはどうなったのかしらとみんなでびっくりしたんです。

それからますます悪くなって、母が来て脈を取ってみると、欠滞していると言うんです。医者を呼んだのですが、あいにく代診さんしかいなくて、どうも難しいですねというだけです。とにかく私共はお祈りしました。お祈りすると脈がおさまるんです。

そうこうしている内に先生が来て診て下さったところが、これは自家中毒です、だから絶対何も食べさせてはいけません、今晚一晩が山ですから注意して下さいといって注射して帰られました。

和義は何も食べてないのに水のようなものを沢山吐いて、ただ眠るばかり。それから脳症になっていろいろな事をペラペラしゃべるんです。私、ここで葬式しなければならないとしたり、真宗の土地だから困ったなあと思いました。ただ、イエス様、癒して下さいと祈るばかりでした。そうしたら、見ゆる所はそんなでしたけれど、不思議なように回復して来たんです。

先生 あの時は本当によく助かったと思えましたね。あの頃は今のようによけいにしないから、よかったのかも知れま

せん。

奥様 五島へ行った時の話しに戻りますが、行ってすぐに新円の切換えがありました、お金は全くないようになりまして。主人は小倉におりますし、私は三人の子供をかかえてお先真つ暗の状態でした。集会にも出られないし、どんな事になるだろうと不安になることもありまして。

その時、一番支えになったのは、「祈れものごとみなまならず、胸に憂いの雲とぎす時、祈れよし道は暗くあるとも、祈れすべてを主の手に委ねて」という聖歌でした。啖子をおんぶしながら、これを何度も何度も歌っては、主を見上げておりました。

和義の病気の時も、その後も体が弱っておりましたが、その時も聖歌を何度も歌いました。

わずかに残ったお金で食いつながねばならない、これから先どうなるやら、いつ帰れるやら全く分からない状態でしたが、ただ主を見上げてゆく毎日でした。

先生 五島での生活でいろいろ教えられることが多かったんですけど、まず、私共が集会に出られるということ、神様の元に近づけることが何とすばらしいことかということ、讃美歌もなかなか歌えない時の魂の苦しみ、渇きというもの

を、現実私共がなめさせていただきました。

和義が自家中毒で危篤の時、まず告別式がキリスト教でできるかということ、何とか連れて帰らねばならんと、そこまで考えたのです。

それで私は、イスラエルの民がバビロンの捕囚で異国地に連れて行かれて、そこで川のほとりで異国人から余興にお前達の歌を歌えと讚美歌を歌わせられたという記事があります、あそこを思い出してね。あくこんなだったろうなあと思いましたね。

だから今、集会に出られるという事がどんなに感謝であるか、そういう経験をしてみると分かります。そして、遠くへ行かれた方の渴きがよく分かります。それだけに何とか応えてあげたいと思います。

奥様 家族だけで讚美歌を歌って礼拝していました。時には山へ行ったりして、大きな声で歌いました。

—私達だったら、信仰を失ってしまっていたと思います—
奥様 そういうことがありましてね、五島の一年三か月というのは、神様がその都度、その都度助けて下さいました。

それから、私達が入居していた、以前診療所だった所を解体して返さなければならなくなったので、それではこの際、北九州の方へ帰ろうということになったのです。

—奥様と子供さん達が五島にいる間、先生はどうしておられたのですか—

先生 その当時、西南で非常勤講師をしていましたが、日曜日は河本さん宅で礼拝を守っていました。河本さんは焼け出されて一年後に、今の所に家を建てられたのです。

それまでの間は、家庭集会をやっていましたね。西南の教え子のお宅や、高見町社宅での集会、元八幡市長の守田さん宅、それから友の会の方でも集会を持つようになり、柴原さん、島崎さん、中原さん、それから小倉の友の会の方でも大田さん、森岡さんが救われました。河本さん宅で礼拝を守るようになってから、岩隈さん、今本さん（現中村）が学生で来られるようになりました。

四 のぞみが丘時代

先生 昭和二二年の一月に帰ってきて、現在の井堀の所にあるのぞみが丘の西南の宿舍で家族が一緒に住むようになりました。

その時はもう河本さんのお家は建っていましたから、河本さんのお宅で礼拝を守りました。

奥様 その当時が一番の思い出は、主人が病氣したことです。その年の八月十三日でしたか。

先生 それはね、すぐ下が井堀でしょ。そこで盆踊りがあるのを俵雄達が見たいというので、連れて行こうとした時に、気分が悪くなつてやめたんです。そしたら、ポツポ、ポツポ熱が出た。

奥様 体温計はないんですが、すごい熱でした。水枕もないし、とにかく井戸の水で冷やしますけど、湯気が上るほどなんです。それで西南の養護の先生にお願いして検温したら、四十度近くありました。

主人は医者にかかることを好まないものですから、私もどうしようかと思つて、ただイエス様どうしたらよいでしょうかと言いながら祈るばかりでした。

とにかく明日が日曜日で礼拝に出られないから、断りに行かねばと思いついて行きました。河本さんも「それはいけませんね」とおっしゃつて、当時としては珍しい果物を冷してあつて、それを下さったのです。私も元気づいて、一緒にお祈りをして、帰りに魚屋さんに寄つて氷を買つて帰りました。そして、頭を冷して、ただお祈りをするばかりでした。

翌日、十時すぎに思いがけず、能美さんが来て下さったのです。礼拝に出て来て、先生が病気で休みと聞いて来てくれたのです。うれしかったですね。ワア、ありがとうございますと

言うて……。

それでは三人で礼拝しようという、主人も起き出して一緒に礼拝したんです。主人は短い御用をしましたが、終つた頃からスーと熱が引いたんです。

その前日、養護の先生から尿を採つて置いて下さいと言われておりました。そしてお宅はどうして医者にかけないのですかと言われて、「はあ」とは言ったものの、私自身どうしようか迷っていました。主人に言つても、見せなくていいと言うに決まっていますし、お医者に来てもらおうかとも考えたけれども、まあ待て待てと思つて、一夜を過したのです。

その日、尿を取つたのが、ひどかったですね。真赤というか、チョコレート色というか、その中にユラユラとゼラチンのようなものが浮いているんです。何という病気が今も分かりませんが、それっきり回復に向つて、少しずつではあるが食欲も出て来ました。何か栄養のあるものを食べさせなければと思いますが、お金もありませんので、配給のタバコを持って小倉の飲食店へ行つたんです。そして、二百円ぐらいで売れたものだから、いっぱい美味しいものを買つて帰つて来ました。

先生 その時、能美さんが二日も泊つて助けてくれました。

谷間にある井戸から水を汲んでくるやら、冷やすやら、夕キギを割るやら、本当に助かりました。

奥様 主人が病気になったひとつの理由は、疲れだと思えます。私が七月十三日に豊を出産したのですが、その時、誰も看病人がいないものですから、私が寝ている間、三人の子供の世話から赤ちゃんの世話、水汲みまで全部一人ですらねばなりませんでしたからね。

五 牧会専念

先生 二二年の一月に帰って来て、その年の九月第一日曜日に会堂の献堂式がありました。河本さんが「先生、マッチ箱のようなものですけど、御用のために用いて下さい」と言うてね。

奥様 もともとそこは河本さんの土地ではなかったのですが、戦災後河本さんが買われたのです。その地主さんというのが、正野さんの親戚先になる方だと後で聞きました。私共も、この近くに教会を与えて下さいと祈ってたんなんですけど、戦災に会ってからのように与えて下さるとは、夢にも考えませんでした。ですから、河本のおばあちゃんが「教会は焼け太りですね」と言うてました。

—それは先生がおいくつの時ですか—

先生 そうですね、三六か三七才の時でしょうね。
奥様 九月に献堂式をしまして、そして西南の非常勤講師を辞めたいと言うのですよ。



終戦後間もない会堂（階下が牧師館）

先生 それまでの会堂は、河本さんの二階座敷を借りていたんです。教会と牧師館が与えられるのがうれしくてね。神様はこんなに備えて下さった。これまで伝道一本で行きたいと願って、こういう中を通って来たのだから、今度こそと思つて、背水の陣を敷いて、神様にまず従つて行こうと西南の方を断ることにしたんです。

奥様 その頃の生活費は、千円あればまあまあできました。

講師手当が三五〇円だったんです。お隣りに門司のパプテストの先生がおられたのですが、その方は社会科の専任講師になられたので、千円くらいあつたと思います。それで割りあい苦労しなかつたようですけど、私共は三五〇円を基本にしていますから、配給のお米と野菜を買う程度ぐらいです。そういう状態で、その三五〇円も今度なくなるわけなんです。

先生 のぞみが丘におつて礼拝に河本さんとこに来て、礼拝献金の中から十分の一をのけて、残りを牧師の生活費ということにしましたから、帰りに五条で降りて市場でいくらかのものを買うと、翌日からの生活費がなくなるという状態でした。

ある時、電車道にある風呂屋さんに寄つて帰ろうと入口でいくらになるか計算してもらつたら、それだけ使つたら

あと食べる分がなくなる。「回れ右」というわけで、帰つて行水したこともありました。

そういう経験もあります。だから、パウロが「我貧しきにも、飢えるにも、富めるにも熟練せり」と言っていますが、程度の違いはあつても、パウロもこういう中を通つたのだらうなと思ひました。

—先生が西南の講師を辞められることについては、やはり奥さん子供さん達の生活という責任があることも考えられたと思ひますが—

先生 いやね、それが私、冷たいですね。それを考えなかつたんです。死ぬのならね、死ねばいいんだと。神様に献身したんだ、文字通り身を献げたんだから、神様が責任もつて下さる。他の人と違つて献身者なんだから、神様の手に握られているんだから、使命が終れば神様が召されるだらうし、それならそれでいいじゃないかと考えたわけです。しかし、家内の方は、三五〇円の穴があくわけですからね。大人は何とか使命でゆくけど、子供は生活できなくなれば栄養失調になつて、どうしますかと言うんですね。奥様 非常勤講師ですから、ある時間行けば三五〇円もらへるんだから、何とかと思つたわけね。

先生 それはね、前に院長さんが、「榎本さん、あんた専任講

師になつてもらえないか」と言われたんです。けれども私は、非常勤で行くことすら、心の中で道を踏みはずしているような気がしていたものですから、「私は伝道者です。伝道することが私の使命ですから」と言うと、「榎本君、伝道は夜もあるし、日曜日もできる。昼間でも伝道の都合があれば、空けることもできるからならんか。そうしたら、これくらい上げられる」と言うわけです。それこそ喉から手が出るくらい金額なんです(笑い)。

けれども、「まづ神の國と神の義とを求めよ」、まづ神に従うのが私の使命だから、そのための証し人なんだから、私は神様に従う。「先生、折角の御好意ですけど、私はなりません」と辞退したんです。そうすると、「榎本さん、あなたがそれだけ真剣であるならば惜しいから、ひとつ学院専任のチャプレンになつてくれないか。何人かの牧会者になるのと、何百人の生徒に伝道するのとどちらがよいか。こっちの方がやりがいがあるではないか」と言うて下さったんです。「それは伝道のチャンスとしては多いかもしれないけれど、神様の導きは何処にあるかと言えば、私は証人として召されているんだから、牧会伝道にあると思いません」と言ったんです。当時はまだシオン山教会はなくて、いわば宗教主任のような形になるわけです。

奥様 その時、私は何とか専任教師になつてもらえまいかと願つたんです。けれども、主人は絶対にならんといいいます。主人も戦いだつたと思います。

先生 女の人はどうしても現実の問題と直面しますから、その点で戦いだらうと思つたんですが、しかし、私が召された使命は、証人として、神は生きていらつしやるといふ証しなんだから、それができないなら死んだ方がいいくらいの気持ですから……献身者なんだから、死ねばいいんだというわけです。

そうするとね、「あなたがその気持なら私も覚悟します!」。

奥様 まあ、覚悟しなければならなくなつたんです。私には信仰はないんですけど、付いて行かざるを得ないわけですよ。主人がシャンとして、一步も引きませんからね、その点においては……ですから信仰持つて行こうと思つたんです。

ところが、不思議なことに神様がね、そう決心したものは神様の方が責任をもつて下さるんですね。

それもね、バターの配給があるからバターを取りたいと思つても、三〇〇円くらいかかる。代用食にでもバターをつけて子供達にやりたいと思ひお祈りしていると、不思議

なことにそれだけのお金が与えられるの。それで、私がエリヤを養われた主を知ることができたんです。私には信仰も何もないんです。それこそ、主人を引き降すような私ですけれど、やっぱり何とかして付いて行こうという願いをもった者には、主が責任を持って下さるんだなあとしみじみ思いました。

アメリカの見も知らない方から、お金やら靴や衣類を送って下さるわけです。子供に着せられるものや、私が着れるものは着ますけれど、大きなものや合わない靴なんかは黒崎に委託販売してくれるところがあつて、そこに持って行けば売ってくれるわけです。赤い靴なんかは小倉のヤミ市に持って行けば売れました。その代金で神様は生活させて下さいました。

先生　それが全然期待できない、期待しないことですから、こちらはビックリ、ビックリしながらでした。

あのエリシャの時でしたか、預言者の奥さんが生活に困ってエリシャの所へ行つたところが、何があるかと問われ、ビンの中に油が少しという、油を入れる器を全部持つて来なさい、近所からも借りて来なさいと言つて沢山もつて来させ、次の日、戸を閉めて次々ついていったところが、みんな油でいっぱいになった。それで、これを売つて生活

しなさいという記事がありますね。あのとおりで思いましたね。

奥様　本当にあの記事のとおりでした。

私はそういう事を通して、主は今も生きていらつしやる、信頼する者を恥ずかしめ給わない方ですよという事を、主が教えて下さいました。



藤村莊七師を迎えて（昭和26～27年頃）

会堂ができて二年ぐらいして豊が召されて、それから、ここで末永先生に来てもらって聖会を開きましたが、その時に講師謝礼が差し上げられないんですよ。その日の礼拝献金が二千円くらいありましたので、それをそっくりそのまま先生に差し上げたのです。そうすると、その一週間は、私達は飲まず食わずでおらなければならぬんです。するとね、それだけは神様はまた与えて下さる。

しかもその週に、本当に不思議でした、どこからか書留が来て、ちょうど二千円入っていました。

カラツポにしておいて、神様は必要を満して下さる。そのことを神様は私に身をもって教えて下さいました。その後も必要を覚える時もたびたびありましたけれども、あの時与えて下さった神様、今度はどのようにして与えられるか、危機一髪の時、神様はきつと与えて下さるといふ信仰を持つことができました。子供達が大学へ行くようになった時、和義が「貧乏の中から、僕達二人を大学までやるからなあ」とか言いました。その時、私は「はあ、貧乏?」、自分としては貧乏と思っていないわけですよ。そういう気持はないんです。主が与えて下さるといふのでね。そう言われて、「ハッ!」と思っただけですけど、本当に主は真実をもって応えて下さいました。

先生 そういう中を通りましたけれども、貧乏だ、貧しいという感じを全く持たない。神様がこの中を通していらつしやるんだ、だから神様に従えばいいんだ。それだけでした。そうしたところが、さっき話したように、和義から貧乏と言われて、「ほう、貧乏か」というわけです。ないのが当り前と思つてますから、貧乏と違うんです。

一つは、国全体が物に乏しい時でしたから、貧乏ということも苦にならなかつたのだと思います。

奥様 主が与えて下さるのだから、与えられたもので食べればいいということですからね。

先生 そういう意味では、「手放しで主に信頼」ですね。

私はそれを使命とし、喜びとして行けるのですが、家内の方は大変だろうと思えます。というのは、そこまでの信仰はないでしょう。背伸びして、フーフー言うて付いて行かねばならんことになるのでね。

今はこうして笑つて話せるのですが、当時は随分悲愴だつたらうと思います。

奥様 やつぱりね。財布の中を見ては、……ふくらんだ時は信仰はいいけど(笑い)、財布がしばむと信仰もしぼんでしまふ。

先生 そういう中を通ることによって、空っぽになつたら、

やあ、神様が満して下さる、と楽しんで待つように神様がして下さる。

奥様 そうなるまで随分かかりましたね。

子供達が五才ぐらいの時から二十才ぐらいになるまで：、それぐらいになると、俵雄達に「大丈夫よ、与えられるから」と言うことができるようになりました。

子供が小さい間は、ハラハラしながらでした。今考えると、あの時が一番良かったなあと思います。

―話を前に戻すようですが、会堂が与えられて、先生が牧会に専念されるという事は、信仰上の一つの転機ではなかったかと思えます。ちょうどイエス様が公けの生涯に入られる時、荒野の試みに会われ、栄輝栄華を見せられて、別な生き方を誘われたことが記されていますが―

先生 そうですね、その事はその前に済んだと思います。講師の問題はね、講師になるかならないかというところからその問題がかかってくるわけです。また別にクラスメイトの人が自分の工場を週一回でいいから見てくださいか、そうしたらこれだけのものをあげると言うてくれた事もあるんです。それは時間的に伝道に支障があるわけではありません。誰も行くなとは言いませんし、神様も行ってはいけないとおっしゃらないけれども、私の良心がそれを許さな

いのです。そういう事をして生活をしたということがどこまでも尾を引いて、「大丈夫です」と確信持つて言えないでしょ。で、神様に従えなくなってしまうから、神に従えない道はカットしなければなりません。

そういう事で、何べんかその問題を通つて来ているから、会堂が建つた時、神様が伝道に専念できるように道を開いて下さったのだから、これにかけて行こう、ただそれだけでしたね。

しかし、神様はそれだけ信頼すれば、その信頼に應えて下さる方だという事を、現実の中で学ばせていただきましたね。



旧会堂の先生

奥様 まあ、クリスチャンの伯母の所におつていろんな話しは聞いてきてはいるが、現実、主が今も生きておられるんだということは、触れて知るほかない。

私にとってはよい神学校でした。主からじかに神学校で学ばせていただいたわけ。

私は神学校へ行つていませんし、そういう事は何も分からないんですけど、主は生きていらつしゃるといふ事を学ばせていただきました。

先生 結婚する時にね、伯母の所で一か月ばかり祈つて、御言が与えられてこういう生活に入ったのだけれど、献身者としての修養を受けていないし、神学校に行つたわけでもないの、神様が直接その中で訓練して下さいのだと思います。

六 二人の子供の召天

奥様 それから子供が天国に召された時にも、私の生涯とつて一番悲しい出来事でしたけれども、それを通して主がどんなに御愛の方であるか、また全能者であるといふことを二人の子供の死……一人は腸閉塞で生後十三日でした。が、生れて三日目に黒いものを吐いたので。

先生 お乳は飲むんですけど、しばらくすると、いやあな顔

をするんです。気持悪そうにしてバァーと吐くんです。そして黄色い便のようなものを吐くようになりました。

お医者さんは、三つのことが考えられる。一つは腸の一部が麻痺して排便ができない。二つは腸の神経ぜん動が止つている。いま一つは腸閉塞、もし腸閉塞だったらこれは先天的なものだから、今の医学ではどうしようもないといふことでした。

とりあえず、ぜん動を促進させる注射をしたところが、腸が激しくぜん動しているのが見えるんですが、便が出ない。それで、「榎本さん、これは諦めなければ仕方ありませんね。奥さんには可哀想だけど……私が行つて話しましょうか」と言ってくれたのですが、私も牧師ですから、私から話しますといつて家に帰つたんです。

—それはいつ頃でしょうか—

奥様 二三年頃だったと思います。会堂ができた翌年に豊が亡くなり、次の年でしたから……。咲子の次が豊です。生後六か月で……。それも自家中毒でした。

その子が亡くなって、次が「恵」という男の子でした。一応名前をつけていたんです。あの子がお腹にいる間に、豊の悲しみと母親の精神的な胎教が影響していたのではないかと、人間的には思います。二人の子供が同じ年に天国

に行つたんです。一人は一月、一人は十一月です。その時が非常な試みの中でした。

その頃、ローマ書十一章の「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである」(三六)、「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(三三)、この御言が私にはどうしても分からなかつたんです。「イエス様、私はどうしてもこの御言が心から信じられません」と、主に訴え祈っていました。

それが本当に分からせていただいたのは、恵が生れて亡くなるまでの間に、私が主とお話している時に教え給うたことは、「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰する」、これは神の御計画であつて、わざわざではないのだと知らせて下さつた。

豊の時は、こうすれば助かつた、ああすれば助かつた、私の手遅れでこの子を死なせた……、それが一月からズーッと私の悩みだつたんです。人間的な方法を何もしないで、手遅れさせて死なせてしまった。私が悪かつた。自分を責めて、責めているでしょ。それが思い上りであつて、主に祈つてこうなつたのだからと、その時、主がじゅんじゅんと語りかけて下さつたんです。

そして、「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。その

さばきは窮めがたく、その道は測りがたい」という御言が、全面的に「ああ分かりました。信じさせていただきます」と、本当にヨブが神の前に手を口に当てんのみ、思い上つておりましたと言つたように、申し上げたのです。主の御愛と御計画を、全面的に主を主として信じてないわけですよ、私がね。

先生 豊が与えられて、スクスクと成長してゆく姿を見て、神の恵みを感じて来たのに、こんな形で召しなされるなら、何如神様は与えなかつたか。こんな苦しい思いをさせるくらいなら与えなされなければよいのに……、そういう気持ちもあつたわけですね。母親としては無理もないことですが、だから、自分が手落ちしたんだ、あれしとけばよかつた、あれ飲ませねばよかつた、と盛んに言つて自分を苦しめるんです。

そうじゃないんだ。「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰する」、ひとつも神様は無駄なことをなさらない。神様の許しがなかつたらこの豊も生れて来ないし、召されることもない。これは何か神様が深い御旨を教えて下さっているに違いない。神様から出たことだから、今は分らないけれど、悪いことはなさらないんだ。あんたのせいではないんだと言ふんですけど、「いやそうじゃない。

私が殺した」。

それで私、その時、皮肉って言ったんです。「あんたは偉い。それだから苦しむんだ。人を生かすこと、殺すことは神様しかできない。それを自分が殺したというのは、あんたは神様より偉い」。そうも言うてみたりしたんです。

奥様 本当に、一月から十一月の恵がお腹にいる間というのは、精神的にも肉体的にも全く最低の所でした。神様の前には、私達は何を言われても従うべきなんです。それを神様が分からんものですから、人間が王様になって、神様それはいけません、こうでなくてはなりません。そう言っている間は、平安も何もありません。その所を通らせていただいて、初めて分かりました。

先生 だから、人間的な方法でさえも、もし助かるとするならば、まして神様に祈って助からないことはない。その神様に祈ったんだから、悔いはない！と私は言うんですけど、まだ何かすればと思ってるわけです。そこが食い違ってますね。奥様 主人も戦いだっと思えます。子供は天国に召されてあるんだから、ここに見ている子供よりも大丈夫だと主人は言うんですけど、私がそこまで行かないんです。

先生 そう言えば言うほど、ザクザク痛むのでしょうか。だから余計こちらに返って来るわけですね。

奥様 御利益信仰だもんですから、愛なる方なら、もつとこうしてくれても、と思うんです。

—冷静になれば、先生の信仰もよく分かります。しかし、もし私達がその場になってみると、やっぱり百合子先生の御気持になるのは当然のような気がします。それこそヨブの奥さんのように、神様をのろって死んでしまいなさいということになるのかもしれない—

奥様 それでね、十一月に恵が天国に召されてから、能美さんが来て、「奥さん、先生は一生懸命伝道しよらっしあとに、なんでこんな次から次へと災いがあるとやるか」というわけ。ちょうどヨブの所に友達が来て言ってるのと同じでね(笑い)。

その時は私自身解決していたものですから、「能美さん、そうじゃないのよ、こうこうなんですよ」と言いますとね、「アラ、案外しつかりしちよるたい」(大笑い)。それでね、能美さんも安心したと言うてね。

先生 これを通して、信仰が主にピシッと決まるように、お恵みでして下さいましたね。この経験を通過したものでしたら、後は神様は同じような中を通しなさらなかった。

奥様 御利益信仰から主を知る信仰へと導かれたわけですよ。この二人の子供を通してね。

先生 だから、この二人の子供は、私共のガイドとして、導き手として遣わされた、すばらしい使命を果して行ったんだなあと思います。今この御用をさせていただくこの信仰は、あの二人の子供が神様から遣わされて置土産としていたのではないかと思うんです。

ただ二人の子供が死んだという事のようにですけど、その陰には主の深い恵みと導きがあることを教えられました。—お話を伺いながら、神様は神の器として育て用いるために、ちようど、エリヤがザレパテあるいはケリテ川へ行つたように、いろんな中を通しなさんだなあということを感じます—

先生 私もいつもその事を思います。あれでエリヤも「吾（わが）事（つか）ふる神工ホバは活く」という信仰が与えられたんですね。

だから神が選んで御用をさせようとする時は、特別の訓練をなさるんですね。神は愛する者を鞭打ち懲しめるとおっしゃる。神様は高い期待を持つておいでなさる。私共はいつもここに目をつけていないといけないと思いますね。—水に耐えられる者は水の中、火に耐えられる者は火の中を通すと書いてありますが、何だか恐い感じもします。しかし、神様はすべてを御存知で、弱い者は弱い者なりに導い

て下さいますから、懇ろな方だと思つています—

先生 確かにそれがあります。また通すためには、逃るべき道も備えて下さいますから、それを何遍か経験すると、大丈夫と思ひ切つて従つて行けるんです。

初めはビックリシャッキリして、どうしてこんなところをと考える。しかし、私達はどうかということとは、考えなくていいんだと思うのです。どうしてかは、向うが知つておつて下さる。だから全幅に信賴することです。そうすれば本当に自由がある。平安がある。命がある。

信仰に始まり、信仰に至らせるとありますが、途中で何かと混ぜるから失敗するんです。何かどうかあれば、途中で引き返して、もう一度建て直すことが必要ですね。

先生 一度そういう試練を通りますと、後が楽になりますね。その後も子供達の進学の問題、就職、結婚というような問題もありましたが、あの時、「主が生きていらつしやる。善にして善よりほかなし給わない」ということが肌で教えられてから、祈ればいいんだ。祈つたら後は、委ねればよい。信賴して、信賴して、歩ませていただけるようになりますね。

—今日はどうもありがとうございました—

三 牧師通信

牧師通信は、先生が信徒との交わりと信仰を深めるために、昭和四三年六月から始められました。日頃教会へ行けない方々にとっては、御言に接する貴重な時となったのではないかと思います。今読み返してみると、改めて先生の信仰を伺うことができ、また、当時の出来事が記されて教会の歩みともなっており、そういう意味でも貴重な資料となっています。

牧師通信は、昭和四八年まで六年ほど続けられました。(流れを分かりやすくするために、八幡前田教会信徒宛のもの、八幡前田公園教会信徒宛のものを、分けて掲載します。)



事務を執る先生 (昭和47年頃)

八幡前田教会信徒宛の牧師通信

○ 昭和四三年六月六日 (一)

主の尊い御血汐を崇め奉ります。

風薫る青葉の五月もいつしか過ぎて、衣更えの六月を迎えました。その後如何でしょうか？主の御愛の聖手に守られていらつしやる事と思えます。

かねて主の御導きを得て、皆様お一人お一人と共に心を併せて祈り、感謝の時を得たいと願って参りましたが、その時を得る事ができませんので、ペンを執りました。主もし許し給わば、一ヶ月に一回ずつ、近況をお知らせして、主に在る交わりを深め、共にこの時代に在って、信仰の善き戦を闘いたく、願って居ります。皆様も、ハガキでも結構ですが、近況をお知らせいただけましたら、祷告の中に加えたいと思えます。

近頃の事をお知らせ致しますと、去る五月四日(土)午前四時に、二十年この教会で信仰生活を送って居られた、海江田憲法兄が召天されました。今年の新年礼拝に、大分衰弱した身体で出席されて、記念写真に加わられたのが、強く印象に残っております。御遺族の皆様もお父様の残して下さった信仰の良き足跡を継いで励んで居られます。

十七日には、大阪に居られる丸山雪夫兄宅で、集会を致し

ました。丸山兄ご一家の皆様と、大野季太郎ご夫妻、中嶋姉等が渴きをもつて集まり、生命の聖言に潤されて感謝しておられました。「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、

あなたがたの父のみこころなのである」(ルカ十二・三二)。この小さい集会が主に祝され、恵まれます様にお祈り下さい。

二六日(日)礼拝後、尼田隆己兄と須々木千代姉との結婚式がありました。式後、教会で、茶菓で楽しい披露宴がありました。新家庭のために覚えてお祈り下さい。

関西に行つておられた岩隈多賀子姉は、神学校を卒えられて、お父様のお世話をするために、帰幡されて居られます。

今本光恵姉は、主のお守りの裡に、五月上旬から関東地方へ旅行されていますが、近日中帰宅される予定であります。

去る十九日から二一日まで、午前十時と午後七時の二回ずつ、松岡忠次郎師による特別集会を致しました。一同大変恵まれました。殊に、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」(ヨハネ十五・九)と「神の造られたものは、みな良いものであつて、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない」(第一テモテ四・四)の聖言が堅くせられまして、感謝して居ります。

松岡師は今年六七才、柘植師の下で修養されたお方で、今

は、三重県上野市に住み、活水の群れ(柘植師の信仰を受け継ぐ者)の巡回伝道師として、各地の教会の御用をして居られる先生です。

今月も十六日は大濠公園教会の御用、十八日は大阪の集会、二三日午後二時半海江田兄納骨式等が、予定されて居ります。

なお、木曜会は、レビ記二三章からです。聖書に親しみ、また皆様との良い交わりの機会ともなりますので、少しでも多くの方のご出席をお勧め致します。

私共も皆様の祈りに應えられて、主の御手に守られて参りました。昨年四月、福岡大濠公園教会牧師が召天され、その代務者を依頼されまして、月一回又は二回、礼拝の御用に参つて居ります。私の母教会でもありますので、久し振りでなつかしい皆様と共に礼拝させていただき、感慨深いものがあります。早く良い後任者が与えられます様、皆様の祈りの中に覚えていただきたく思います。

長男の俊雄も、昨年四月、山九運輸機工KKに入社して、勤労課に勤めて居ります。余り忙しすぎて礼拝に出られないと言訳しておりますが、皆様の祈りに覚えてやっていたきたいと思ひます。和義は、今春マスターコースを終わり、関西学院高等部の講師を勤めながら、ドクターコースに進んで元気でおります。西宮教会に出席して、信仰を守つて居りま

す。咲子は、洋裁学校に通いながら、家事手伝いをして、家の良いヘルパーをして呉れております。誠は高校三年生で、受験に苦勞する筈ですが、のびのびとフォークソングのグループに入ってベースでも鳴らして居ります。

皆様の上に、主の豊かなる御祝福をお祈り致します。

○ 昭和四三年七月一日 (二)

主の尊い血汐を崇め奉ります。

今年には空梅雨かと思われた北九州にも、恵みの雨が降り、給水制限も解かれようとしている昨今でございます。この六ヶ月の間、皆様をそれぞれの問題の中で、主は支えて下さった事と思えます。子供の頃、一年の前半は雛節句、五月節句、七夕、お盆、夏休み、海水浴と指折り数えて日の経つのを待ち、後半は運動会、月見、茸狩り、正月と楽しい夢に胸ふくらませて、時の経つのがもどかしく思われましたが、今日此の頃は、余り忙しくて気付いたらもう六ヶ月過ぎてしまったという有様です。尤も、つらい悲しい月日は長く、楽しい月日は短いものだそうですが、皆様は如何でしたでしょうか？お伺い致します。

七日目毎に廻ってくる聖日を主の前に聖く守らせていた

だけることは、何と大きな恵みでしょうか。主の聖前に礼拝を守り、豊かな慰めと許しと医しを、生命の力と共に与えられて、六日間のこの世で、主の聖旨に従って主と偕に歩ませていただきませんが、弱くて疲れ、傷つき、汚れ、倒れますが、また聖日に聖前に近づけていただき、主の血に潔められ、許され、聖言によって医され、活かされ、聖霊によって強められ、新しくされて参ります。この事が私共の生活の中心であり原動力であり、これだけが私共の地上に於けるささやかな人生の営みを、尊く価値有らしめるものであることを、今沁々と味わって居ります。七日、七日の生活を送らせていただいている中に、私も気が付いてみると還暦に近い年になって居りました。カレブに言わせたら、「鼻垂小僧何を言うか」と笑われますでしょうが(ヨシユア十四・十一)、少しでも、主に喜んでいただける果实の有る御用をさせていたただく願って居ります。主は二千年前、ガリラヤの狭い所で数人の漁夫に福音の真理を伝え給いましたが、今はその福音が普く全世界に伝えられ、多くの果实を結び、私共もこの福音によって新しい生命に生かされました。この時代も来るべき世界も、この福音の真理によって導かれて参ります。

昨年四月から、福岡大濠公園教会の御用にも当たらせていただいておりますが、時間が足りなく成りましたので、十八

年の間出講して居りました折尾女学園を、増田孝園長先生にお願い致しまして、四月からひとまず辞めさせていただき、牧会伝道に集中する事に致しました。未だその果実は具体的に現れて参りませんが、多くの良き果が結ばれます様、皆様のお祈りをお願い致します。ささやかでは有りますが、牧師だよりもその一つかと思いますが、主の御導きを祈つて居ります。なお少しでも与えられた時を、病床に在る兄弟姉妹、人生の様々な重荷と問題の中で闘つて居られる方々のため、活かして用いたく願つて居ります。どうかお目にかかる事の出来ないお方は口頭でも、また遠方のお方や、言葉では表せない事はお手紙でもお知らせ下さい。私共の毎日の祈りの座で、主の聖前に皆様の問題、重荷を私共の問題・重荷として祈りたく思つて居ります(ローマ十二・九、十八)。六月六日付けの手紙に対してお便り下さった方々のために、この一ヶ月祈つてまいりました。今後も祈つて参りますので、皆様の近況をお知らせ下さい。また返事が遅れて居る方は、今暫くお待ち下さい。必ず差し上げたいと願つて居ります。

六月末で、木曜会はレビ記まで終わりました。大変恵まれ、私共に対する神の御愛と恵み聖潔と聖なる主の前に潔き者とされて立たしめられる途を教えられ、感謝して居ります。レビ記講義は、野村兄の労によりプリントが出来ました。

七月から木曜会でヨハネ黙示録を学び味わつて参りたく願つて居ります。出来れば毎週一章ずつと願つて居ります。黙示であつて誰にも分からない、しかし大切な黙示です。聖霊の導きを求めて、主が解き明かして下さる様に祈ります。皆様も祈つて時間を生み出して黙示録をお読み下さい。また万障繰合せて木曜会へいらつしやる様お勧め致します。主もし許し給わば、黙示録のプリントをと願つております。頭の良い方は一を聞いて十を悟ると言われますが、私は十を聞いて半分悟れたら良い方でしょう。それでプリントを何度も読んで恵まれます。黙示録の講義プリントを御希望の方がございましたら、野村兄までお申し込み下さい。必要な部数だけ印刷致しますので。追加は致しかねます。これ等の印刷を野村兄がガリ版を切り、手で印刷して下さつて居りますが、何とかタイプ印刷が出来ればと願つて居ります。学校でタイプを習つた方々もこの御用を分担していただける様に、当用漢字タイプライターか中古タイプライターを購入して、文書伝道の武器として用いたいと祈つております。このため皆様もお祈り下さい。

教会誌「ぶどうの木」第三号を作りたく願つて、原稿募集中です。正野眞宏兄が責任を持つて下さつて居りますので、正野兄まで原稿をお願い致します。「ぶどうの木」は、私共前田

教会の茶の間です。お互いの生活の中で学んだ事、失敗した事、嬉しい事、悲しい事、詩でも歌でも論文でも、主を崇める交わりの場ですから、リラックスマな気持でペンをお執り下さい。誌上匿名でもかまいません。これも自家印刷出来ればプリント代の費用位の割合でできるのではないのでしょうか。

木曜会についてご案内致します。私共の生活の中心は共同礼拝、家庭礼拝、個人礼拝であります。その礼拝の中心は聖書の御言葉です。私共はどんなに忙しくても、三度の食事を摂る事は忘れません。また、主婦は、そのため献立、予算、買出し、調理、配膳、後仕舞と、多くの労力と費用と時間と心を労して惜しみません。しかし、霊の糧の為だけだけの時間と費用と労力と心を労しておりますでしょうか？幼い時から聖書を学んだテモテの様に、子供を聖書で育てたいものです。その為にも先ず、私共が御言葉に養われ、生かされ、また、御言葉の光の中を歩み、御言葉を心の裡に豊かに貯えなければならぬと思います。

しかし、この世に在って生活の中で一人でこれを全うする事は、余程恵まれていないとできません。「ふたりはひとりにまさる」(伝道の書四・九)とあります。弱い、忙しい私共が互いに励み、励まし合って主の御言葉を、少しでも多く学び味わい貯え、主を深く知り、主に喜ばれ、また、主の愛に満た

され、その生命にふれる様にと願って、木曜会を持たせていただきました。時間を午前十時から十一時三十分迄とし、もし許されるなら、後三十分は御交わりの時として、質疑応答の為に用いたいと願っております。殊に、ご婦人の方々は夜の集会に出る事が現実には困難ですから、この集会にご出席をとお勧め致します。祈祷会、木曜会を通して、霊が整えられてこそ、聖日礼拝が正しく守られ、恵まれ、祝されるのであります。

十年余り、毎年開いて参りました前田教会夏期学校は、炊事の責任を持つて下さった、福島姉が今年からできなくなりましたので、一応中止致します。主は夏期学校を通して毎年夫々恵んで下さいました。今これ等を思い、尽きない感謝を主に献げております。梅雨が明けますと、カッと陽射しが強くなり、温度計が鰻昇りに上がります。扇風機もルームクーラーも避暑も、暑い時は助かりますが、しかし、私共はもつと積極的に、どんな暑さ、寒さ、事情の中でも、全能の能力ある手を以って支えて下さる主を信頼して参りましょう。

「見よ、イスラエルを守る者は

まどろむこともなく、眠ることもない。

主はあなたを守る者、

主はあなたの右の手をおおう陰である。

昼は太陽があなたを撃つことなく、
夜は月があなたを撃つことはない。

主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、
またあなたの命を守られる」(詩篇一二一・四〜七)

○ 昭和四三年十一月(三)

「人の心には多くの計画がある、

しかしただ主のみ旨だけが堅く立つ」(箴言十九・一二)

何とかして月一度は手紙を書かしていただきたく、祈りと願いを持って始めましたが、もう二ヶ月滞ってしまいました。今しみじみと箴言の聖言をかみ締め味わっております。皆様その後は如何でしょうか？霊肉共に主の御手に守られて、様々の戦の中を闘って来られた事と思います。前の手紙は、八月に御殿場聖会の後で、東山荘の一室で青年研修会に出席する皆さんを待っている間に書きました。

八月十三日から十五日まで、「あなたがたは世の光である」との標語で、研修会がありました。帰途、大阪集会を致しまして、十七日の土曜の朝帰幡し、翌日は福岡大濠公園教会で礼拝の御用を致しました。

大阪では小さい群れですが、乾き切った大地が水を吸い込

む様に、聖言に聞き入って、喜びと感謝をもって主を崇めて居ります。どうかこの小さい群れが主の豊かな恵みの内に、聖霊によって育まれ、主の喜び給う群となります様にお祈り下さい。九月十日から十二日まで、信州野沢温泉教会で、職研修会が開かれました。私も教育委員の一人で参加致しました。牧師先生方が集まり、改めて「説教」の意義につき学び、考える時を与えられました。当地を発った時は夏姿でも暑い程でしたが、十一日には冷えて、槍ヶ岳には初雪が積もる寒さでした。珍しいりんご畑の中を何時間も電車で走り、野沢へ着きました。

九月二三日には、東郷の八幡前田教会納骨堂で、諸聖徒記念会を致しました。主の救いに与かり、各々与えられた持ち場立場に於いて、主に従った聖徒達を偲び、私共もやがて主の前に立つ事を覚え、主に従って馳場を走る決意を新たに致しました。永年の祈りであったタイプライターを与えられて、正野眞宏兄と尼田隆己兄夫妻の奉仕で、教会誌「ぶどうの木」第三号が出来ました。素晴らしい内容で皆さんから感謝のお便りを次々と戴いて喜んでおります。皆さん茶の間の対話と
思つて、気軽に何でも書いてお送り下さい。

十月には松岡忠治郎先生に来ていただいて、二一日夜から二四日朝まで、五回の特別集会をしていただきました。丁度

メキシコオリンピックの時期でした。ピリピ三章十三、十四の「目標を目ざして走り……」で教えられ恵まれました。私共人生の目標がハッキリしているか？何が目標でなくてはならないか？勝手に目標は決めてはならない等。

次にコースはどれか？各自のコースがハッキリ決まったら走る身支度が必要です。(ヘブル十二・一)身支度が出来たら監督であり、コーチであり、先輩であるイエスを絶えず仰ぎ見つづけるのです。公平な審判者である主がこれを授けて下さいます。金銀銅のメダルではなく、主が授けて下さる義の冠を頂くため走り続けて参りましょう。

木曜会はヨハネ黙示録で教えられています。野村兄がプリントして下さい、よく味わいながら学んで居ります。どうしても聖言を豊かに貯え、礼拝を初め各集会に励みたいものです。どうしても木曜会に出られない方は、テープも録っております。御希望の方はお貸し致します。これは五対のテープです。

十一月も半ばになり、落葉の季節となりました。あと一ヶ月で、私共の救い主イエス様がこの地上にご降誕下さった記念のクリスマスを迎える事になります。今年は次の様に予定しておりますので、今からお祈り下さって、皆様の仕事を差繰って、是非すべてに御出席なさる様にお勧め致します。

二二日(日) クリスマス礼拝(午前十時)

祝会(午後二時)

二五日(水) 愛餐会(午後六時)

二九日(日) 感謝会(礼拝後)

クリスマス祝会は、日曜学校を中心にお祝い致します。幼児達の口を用いて主を崇め大変恵まれます。愛餐会は一年に一度主によって召し集められた私共の会で、会費を出し合つて夕食を共にしながら兄弟姉妹と親しい楽しい交わりを持つ時です。感謝会はこの一年の全ての恵みの感謝を主に捧げて、新しい年を迎える備えをさせていただき、恵まれる集会です。弁当持ち寄りで食事をしながら始めます。どうぞお祈り下さい。また御出席下さい。

終わりに、主の豊かな御祝福をお祈り申し上げます。

○ 昭和四四年三月(四)

「わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立つて、出てきなさい。見よ、冬は過ぎ、雨もやんで、すでに去り、もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時がきた。山ばとの声がわれわれの地に聞える。いちじくの木はその実を結び、ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放

つ。わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立つて、出てきなさい」
(雅歌二・十、十三)

三月も十日を過ぎますと、西高東低の気圧配置も少し緩んで、長い酷しい冬も衰えて春の陽射しに、木の芽もふくらんで参ります。長い、冷たい、罪の道を辿っておった私共のため、主が十字架の上に一切の贖いを成し遂げて下さって、神の暖かい愛の光に包まれた日々を、送らせていただけになるようになりました。今年も、主の贖罪を記念する受難週を、三月三十日の棕侶の聖日から迎える事に成りました。その後、四月六日は輝かしい主の復活の記念日、イースターを迎えます。皆様その後、主の豊かな御いつくしみの聖手に守られていらつしやる事と思います。今年も、二月月の旅路も騒然とした社会状況の中を、主に在って平安に守られて参りました。一月は、ご存知の様に主の御恵みによりまして、新年礼拝に続いて、新年聖会を開いていただきまして、朝(十時)、昼(午後二時)、夜(七時)と三回ずつ、年頭から静かに主の恵みに堅くされました。続いて、五日から七日まで、福岡大濠公園教会の新年聖会の御用に当たらせていただきました。冷たい日が続いておりましたが、渴いた魂を満たして、この年のスタートを切らせて下さいました。

大濠公園教会の後任者のため、祈って待ち望んで参りまし

た。その用件のため、一月十二日夜上京し、折り返し帰りました。その後、姫路福音教会牧師末永弘海師が、姫路に於ける使命を終わつたから、主の御導きを得て福岡へ来て下さる事が決まりました。しかし姫路福音教会に於ける用件の終わりに次第、福岡に来て下さるとの事で、永い無牧の状態も、遠からず解消して、主の血を以って贖い給うた教会として、福岡の地に福音の光を高く掲げる事と期待しております。

去る二月二三日の午後、長男俣雄が主のお導きに由り、皆様の御祝福のうちに、結婚式をあげさせていただきました。新しい人生への第一歩を踏み出して参りました。新婦は山口信愛教会で求道、受洗して林健二牧師の指導を受けて参りました邦子と申します。兩人共、何とかして主を中心とした家庭を願って居ります。何卒、皆様の祈りとお交わりの中に加えてやっして下さいますように、お願い致します。

三月二一日には、大分地区信徒修養会が大分教会(舞鶴町)で行われます。その講師として招かれて参ります。何卒口を開く時、聖言を賜って臆することなく、福音の奥義を語る事ができるようにお祈り下さい。

四月の四、五、六日、松岡忠治郎師による、折瀧師記念聖会が福岡大濠公園教会で開かれます。何卒主の栄光を拝するようにお祈り下さい。又都合してご出席下さい。

四月六日、イースターで受洗希望者が数名ありますので、主の御祝福をお祈り下さい。

教会の牧師館の住居表示が、六月一日から次の様に変更になります。

北九州市八幡区前田一丁目十番三号

主の御祝福のうちに良きイースターをお迎え下さいます様にお祈り申し上げます。

○ 昭和四四年四月二八日(五)

「おおよそ主にたより、

主を頼みとする人はさいわいである。

彼は水のほとりに植えた木のように、

その根を川にのばし、

暑さにあつても恐れることはない。

その葉は常に青く、

ひでのりの年にも憂えることなく、

絶えず実を結ぶ」 (エレミヤ十七・七、八)

受難週で始まった四月も、夏のように暑い日があるかと思えば、イースターを過ぎて雪が降る、思いがけない気温の変化に振り回されてしまいました。その後、皆様も主の限りなき

御恵みの中に守られていらつしやる事と思えます。

先のお便りをお願い致しました、三月二一日の大分地区信徒修養会は、祈りに応えられて天候を祝され、参会者も大分教会の会堂に溢れ、御聖霊がお一人お一人を豊かに恵んで下さいました。お祈りを有難うございました。

四月四日、主の御受難日から、イースターの六日まで福岡大濠公園教会で、松岡忠治郎先生を迎えて聖会が行われました。一回一回と集会が進むにつれて、松岡師を通して与えられる主の証詞に、新しい生命を与えられ、聖霊の豊かな慰めと能力を与えられました。

特に四日の夜は、主の御受難を記念して聖餐式に与り、主の給う限りなき平安に包まれました。八幡からも数名の兄弟が参りまして、主の恵みに共に与り、主に在る交わりの時を与えられて喜んでおります。

かねて、受洗を願って準備しておられた八名の兄弟が、例年より遅れて咲いた桜が満開の河内で、多くの主に在る兄弟の参列の下に、バプテスマを受けられ、主の十字架の贖いと復活により、新しい生命に入られました。この方々がいよいよ主を深く知り、主の御愛のうちに成長されて、主に喜ばれる幸いな生涯を全うされるように、皆様の祈りと主にあるお交わりに加えてくださる様をお願い致します。

次の方々です。よろしく。

小田善昭兄 貞一彦兄 真島洋子姉 惣津紀久子姉
後藤洋子姉 大田佳子姉 水村静江姉 正野員子姉



昭和44年4月14日 洗礼式（於・大蔵川）

牧師館の玄関前の狭い空き地に、今大阪に居られる大野季太郎兄が何年前かに、ステッキ位の桜の木を植えて下さいました。初めは、この小さい弱々しい木が果たして花を付ける様に成るだろうか、恐らく枯れてしまうのではないかと思いましたが。ある時は虫がついて葉を食い荒らされ丸坊主になり、

もう駄目ではないかとも思いました。ひどい嵐に枝も吹きちぎられて、今度はおしまいだと心配した事もありましたが、今は成長して隣家の屋根よりも大きくなり、今年も沢山の花をつけて、教会の窓から花見に丁度良く、私共を楽しませて呉れました。

この桜がこんなにたくましく、どんな嵐にも、日照りにも耐えて成長したのは、溝が直ぐ横にあつて、その根が溝の水をよく吸い上げ、屋根の間から豊かに降り注ぐ太陽の光に向かつて、勢いよく伸びたからです。

何日、何センチ伸びたかは少しもわかりませんが、幾日、幾月が経つ間にこんな大木になりました。私共も、たとえ小さい弱い信仰であつても、主に頼り、主を頼みとして生活して参ります間に・・・日毎に聖書を読み、祈り深く、礼拝を守り、各集会に励んでいる間に・・・自分では気付かないうちに、聖霊は私共の内なる人を強くして(エペソ三・十六、第二コリント四・十六)、どんな人生の嵐にも動くことなく(第一ペテロ五・十)、絶えずキリストの薫り高い花を咲かせ、福音のよき実を豊かに結ばせて下さいます。時候の良いこの季節に、先ず主に頼り、主を頼みとして、隠れた主との交わりの生活を励んで参りましょう。どんな酷しい暑さにも恐れる事なく、常に主の生命に満たされ、日照りの様な時にも、主

の愛の中に在って憂える事なく、絶えず実り豊かな生活であります様にお祈り致します。常に私共のためにお祈り下さいますして有難うございました。主のいつくしみと憐みの故に今日まで守られて参りました。今年は私にとり記念の年となります。

今月末に満六十才(世で還暦と呼ばれる年齢)になります。

主は憐れみにより、この様な者を選び、聖なる御用に召して今日まで、欠けだらけの不忠実な者を、真実をもつてお取り扱ひ下さいました事を、泌々と味わい主の賜った恵みに如何様に感謝してよいのかわかりません。主の恵みの豊かさを知れば知るだけ、この六十年間が余り早く過ぎて、主の御愛に応え奉る事の乏しい事を申し訳なく思つて居ります。

今茲にエベネゼル(サムエル上七・十二)の石を建て、主の御恩愛に深く感謝を捧げ、残された地上に於ける生命の限り、献身の生涯を全うさせて頂いていただきたく願つて居ります。何卒、そのためにお祈り下さいます様にお願ひ致します。

俵雄も主の憐れみに支えられて、小鷲田の新居から通勤して居ります。和義も、急に愛知大学から招聘されて四月から専任講師として勤めて居ります。現在、名古屋市千種区園山町三十六―一 第一園山ハウス二―一に住んで、月、水曜は名古屋校舎で、金曜日は豊橋校舎で講義をして西宮に帰り、

研究会に出て日曜礼拝は西宮教会で守り、夜アパートに帰るという生活をして居ります。今日の大学は何処も色々と問題を抱えて居りますので、その中で主の良き証人と成る事が出来ず様祈つております。咲子も家内の良き助手となつて働いて呉れております。誠は四月から浪人生活を始めました。暑さ寒さに耐えてこの一年を全うする様、素直に自己の弱さを認めて、主に信頼する様に祈つて居ります。

五月は二五日が聖霊降臨日です。昨日も今日も永遠に変わりが給はない主が、聖霊を豊かに満たして、聖業をなさしめ給う様にお祈り致します。

○ 昭和四四年六月五日(六)

「目を高くあげて、

だが、これらのものを創造したかを見よ。

主は数をしらべて万軍をひきいだし、

おのおのをその名で呼ばれる。

その勢いの大いなるにより、

またその力の強きがゆえに、

一つも欠けることはない」(イザヤ四十・二六)

人類の夢、月の世界への旅が、実現に今一步という画期的な成功を遂げたアポロ十号、七月には十一号で月着陸の予定、ソ連は明星と呼ばれる金星へ宇宙船を送り、金星と地球の間に電波の懸橋を作ったというニュースは、暗いおとずれの多い昨今、明るいニュースでした。

宇宙間のニュースは華やかですが、地上の世界は相変わらず絶望的な暗い現実であります。唯物史観に立つ神に対する不敬虔が、人間の世界に浸透して来るに従って、人間相互の不信は深くなり、その溝は亀裂となり、傷はいよいよ深く大きくなり、テモテ第二の三章一節九節に記されている様に、冷たい光のない人間の世界になります。この時代に私共はどうあるべきでしょうか？

「すべてのことを、つぶやかず疑わないで下さい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている」(ピリピ二・十四〜十五)

私共はこの時代に暗夜の星の様に、絶望的な現代社会にあつて、主の愛に満たされて世の光として、それぞれの持場、立場に遣わされております。ともすると私共は自分の身分を

忘れて、世の現実に足元に目を奪われ、心を奪われてしまい易いものですが、こんな時であるだけ今一度目を高くあげて、誰がこれらのものを創造したかを深く思い見たいものです。

夏の夜空に薄く川の流れを描く銀河系の星は、太陽系の星の様な天体の集団であり、中には太陽よりも若い、高温の気体だと考えられている星雲、目に見えない無数の天体から成り立っていると言われております。宇宙にはこんな銀河系の様な天体が無数に浮かんで居り、その広大無辺な広さは到底測り知る事は出来ません。この宇宙を創造し、夫々を規則正しく運行させ給う方こそ、イエスキリストの父なる神であり、私共の父なる神であります。父なる神の御力と勢いは昔も今も世々変わりません。その力で悪魔の業を十字架によつて打ち破り、キリストを死から甦らせ、又信ずる私共の罪を許し潔めて、神の子となし給いました。その能力ある御手で私共を救い、又今後も救い給います。

私共は信仰によつてこの大いなる神の子とされたのです。人の世界でも王の子は態度も考え方も、行動も生活も・・・すべて一国の王の子にふさわしくなければ王子ではありません。

「神に愛されている子供として、神にならう者になりなさい」

(エペソ五・一)

私共はこの大いなる神の子として愛されているのだから、借りて来た猫の様に、ケチケチ、ビクビク、小さな事に振り回されなくて、愛においても、信仰にも、行動にも、生活にもすべての中で(富んだ時も、貧しい時も、健やかな時も、弱い時も)、神に愛されている子供にふさわしく、神に倣う者となりましょう。神様は大いなる方ですが、また広い宇宙の無数の天体の一つをも忘れ給わず、その各々の名をもつて呼び、引き出し給う御方であります。

一步郊外へ出ますと青葉の色も日毎に濃くなり、麦秋から田植えへと、農家は多忙な仕事に追われている昨今となりました。その後も、主の御手に守られて居られる事と思えます。

「月日の経つのは早いもの」と昔から聞かされてはおりますが、近頃は特に早いように思われます。

いつも教会の前のベンチに大きな体を小さくして、敬虔に礼拝を守って居られた海江田兄が、天に召されて一年になりました。誰に対しても温かい、人間味溢れた応待、あの大きな体から出る処女のような小さな声、神様に対する幼児の様な謙虚さ、二十年に余る親しい御交わりであっただけに思いは尽きません。御遺族の皆様も主の御手に守られて、海江田兄の信仰を継いで集会に励んでおられます。

かねて献身して主にお仕えしたいと願っていた道が開か

れる事を祈って居りました調姉が、生涯のメッセージとしての証詞を与えられ、本人の信仰の決断で職を辞めて来られました。私共も主の聖前に今一度献身の壇を築いて、調姉が初めの信仰を終わりまで全うして(第二テモテ二・二一)の様に成りますよう、祈っております。今私共と生活を共にして修養中です。皆様この事のためにお祈り下さい。

木曜会は黙示録第二二章で終わりました。続いて同じ使徒ヨハネの伝えるイエス様についてヨハネの福音書で教えられたいと願って居ります。この機会に聖書を読み、集会に励みましょう。

長い間礼拝を守り、信仰の戦いを闘って参りました福岡大濠公園教会の兄姉のために、色々の問題を持つ方々の牧会のため、毎週火曜日午前十時から参りまして、午後一時半からと午後六時半からの二回ずつ集会を持つ事に成りました。勿論これらの集会は礼拝の代用ではありません。この集会で恵まれて喜びをもって礼拝を守るためです。皆さんの渇きが潤され、生命に満たされて、信仰もって牧師先生を待つ事ができますよう、また御用に当たらせていただく私のために、よき御用ができます様にお祈り下さい。

「ぶどうの木」第四号を発行の予定で、原稿を募集して居ります。随筆、感想、証詞、詩歌等何でも結構です。正野真宏

兄と尼田隆己兄がお世話して下さい居ります。
皆様の上に主の豊かな御祝福をお祈り致します。

○ 昭和四年七月二十七日（七）

「わたしは山にむかって目をあげる。

わが助けは、どこから来るであろうか。

わが助けは、天と地を造られた主から来る。

主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。

あなたを守る者はまどろむことがない。

見よ、イスラエルを守る者は

まどろむこともなく、眠ることもない。

主はあなたを守る者、

主はあなたの右の手をおおう陰である。

昼は太陽があなたを撃つことなく、

夜は月があなたを撃つことはない。

主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、

またあなたの命を守られる。

主は今からとこしえに至るまで、

あなたの出ると入るとを守られるであろう」

（詩篇 一一二）

この詩篇は、イスラエルの民が年々の祭りに、エルサレムへ上る巡礼の道で唱った詩であると言われております。交通機関も整わず、治安も悪い危険な旅を続けて参ります人々には、何よりも安全に永年の願望であるエルサレムに到達し、主の宮に詣で、主の臨在にふれて、身も魂も満たされて無事に我が家に辿り着く事であったと思います。

世紀の偉業と言われる月への上陸を成し遂げたアポロ十一号の発射前から、無事故で帰還の今日まで、関係者全ての人の心の祈りと願いは、無事に月面に着陸し、予定の計画を遂行して安全に帰還する事であったと思います。確率九九・九九九九九%という精密な部品の集積で作られた宇宙船での飛行でさえそうであったとすれば、交通機関と言えば、馬が速いものの代表とされた時代、道路状況も狭く険しいものが多かったでしょう。また追い剥ぎ、強盗等、生命の危険に曝されて旅した人々の不安はどんなであったでしょうか。長い危険な旅を続け、疲れた身体で今踏み越えて行かなければならない道をふさぐ様に聳える山々を前にして、どうしてこの山を越えようかとおじまどった事でしょう。私共の人生の旅路で疲れ果てた時、解決の道のない、避ける事もできない困難な問題の山々に直面して、怖じ惑う時があります。

その絶望の淵の中からイスラエルの人々は、その山々の上

に展がる大空を仰いで、天を幕の様にはり、山々を立たせ給うた創造者が、エジプトにおいて能力ある手をもってパロの下から先祖達を救い、陸を歩く様に紅海を渡らせ、四十年の荒野の旅で父がその子を憐れむ様に憐れみ、約束のカナンへ導き給うた事を思い、その同じ主が今も守り支えて下さる事を信じて恐れず、勇気を出して立ちほだかつている山に向かつて進んで参りました。イスラエルの都もうでの巡礼の旅は、また、信仰の生活体験でありました。生涯に幾度もエルサレムへの巡礼の旅を重ねた聖徒達はその体験から、

「主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。

あなたを守る者はまどろむことがない。

見よ、イスラエルを守る者は、

まどろむこともなく、眠ることもない。

主はあなたを守る者、

主はあなたの右の手をおおう陰である。

昼は太陽があなたを撃つことなく、

夜は月があなたを撃つことはない。

主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、

またあなたの命を守られる。

主は今からとこしえに至るまで、

あなたの出ると入るとを守られるであろう」

と証詞して居ります。

昔、イスラエルをこのように守り助け給うた主は、今も真心もって信頼する私共を救い守り給います。また、今後も主は同じ御能力をもって信頼する者を守り助け給います。

この前、手紙を差し上げた当時は梅雨時で、南九州は次から次へと集中豪雨に見舞われて大変気の毒でした。梅雨前線の上り下りで、何日晴れるかと思われた梅雨も、明けると急に気温も上昇して、日照りの激しい日が続いております。皆様、主に在って豊かに守られておられる事と思えますが如何でしょうか？

前に申し上げました様に六月一日から住居表示が実施されました。教会の所地、牧師住居は次の様になりました。

千八〇五 北九州市八幡区前田一丁目十番三号

書き慣れた住所が変わると、幾度となく書く度に戸惑いを感じます。もう暫らくしたら新しい住所にも慣れるでしょう。皆様の住所の変更や住居表示の実施などがありましたら是非ご連絡いただきたくお願い致します。

六月に入りまして、毎週火曜日に福岡大濠公園教会に参りまして、午後一時半からと午後七時からと二回ずつ、集会を持たしていただいております。後任の牧師を迎えるためにも、信仰に満たされて俟望む事が出来る様にとの祈りと願いをこ

めて、皆さんが励んでおられます。このためにも皆様の祈りに覚えていただきたく御願ひ致します。

I・C・Uの大学院で勉強しておられた西原文江姉が、久しぶりにお母様と来訪されました。この度、カナダのバンクーバー大学へ留学される事になり、七月一日の飛行機で出発するとの事で、暫らくのお別れで心淋しく思いました。しかし、主は姉妹の行く手を導き、恵みをもって取扱つて下さる事を祈っております。また、主のお導きにより東京神学大学の大学院に学ぶ方と婚約なされた由、喜びの二重奏で主を信頼する者に主はいかに豊かに恵み給うかを目の当たり見せていただき感謝致しました。

七月に入り温度計の水銀も鰻上りに上りました。十一日は尼田兄の家庭に女兒を与えられ、母子共主の御手に守られております。香代子さんと命名されました。主の喜び給う子供として、養育されるように祈っております。

八月三日からは御殿場東山荘で青年研修がありますが、教会の青年六名が出席致します。なお、八月五日夜から八日昼まで御殿場市二ノ丘の故藤村莊七師の宅で、御殿場聖会が開かれます。この集会に参ります途中で、大阪の丸山兄宅で集会を致します。

教会も会堂が暑いので、窓を開けると、戸外の騒音で集会

の話が聞き取れないで困りましたので、マイク、スピーカー、アンプを購入して取り付けましたので、後方の席でもよく聞こえる様になり喜んでおります。

皆様の祈りに支えられ私共一同主に守られて感謝致しております。

皆様の上に主の豊かな御祝福をお祈り申し上げます。

○ 昭和四四年十月三日（八）

「恐れるな、小さい群れよ、御国を下さることは、

あなたがたの父のみこころなのである」

（ルカ十二・三二）

今年二、三月頃の早春、下関市郊外で、古墳の群れの一部が宅地造成のため、ブルドーザーに無惨に削り取られ、文化財保護委員会が慌てて、国の重要文化財に指定し、やっと全壊を免れた事が有りました。土建会社にとっては、古いカメがいくつあつても、また、先人のどんな貴重な文化財であっても、それが黄金の小判か太刀で無い限り、ただの土塊であり、石ころと同じでしょう。これが文化国家の現実の姿ではないでしょうか。

一つの壺に私共の先祖の生活と、今日の文化の源泉を探る

貴重な資料も、利潤追求のために手段を選ばない業者のブルドーザーにかかつてはひとたまりもありません。今日の技術革新時代と言われる、早いテンポで変動して行く社会に在る少数のキリスト教信者に、どんな存在価値があるでしょうか？社会変革という機構の変貌の中で、押しつぶされて行く人間性悲劇の中に在って何ができるでしょうか？

ブルドーザーに押し潰された壺の様な不安と、自分の無力さに失望してしまいます。しかし、小さい群よ、無力な者よ、不安に怯える者よ、恐れるな、天の父は喜んで御国を下さるのだと。実に素晴らしい喜びのおとずれではありませんか？歴史は、常に時代の変革の発端は、小さい者、少数の者によつて拓かれた事を教えてくれます。第一次世界大戦もセルビアの一少年の一発のピストルの発射から起こり、ソ連の革命もレーニンによつて指導された無力な労働者により起こつたのであります。

聖書もまた一人のアダムによつて、罪と死が人類に入つて今日に及んでおります。また、一人のイエス・キリストによつて、罪と死からの救いの道が開かれました。アブラハム一人によつてイスラエルは祝福を受け、ダビデの故にユダ王国に王位に即く者は絶えませんでした。王の王にましますイエス・キリストによつて、永遠の生命が万民に与えられる道が

拓かれ、一握り程のガリラヤの弱い漁師によつて、福音は全世界に広く伝えられたのであります。

社会機構がどんなに変化し、技術科学が進歩しましても、コンピュータ時代、宇宙時代に成りましても、人間が人間である限り、私共のために十字架にかかり、三日目に甦り、今日まで世界の歴史を導き給いましたイエス・キリストを信じて神に帰るまでは、人間の真の幸福は得られません。この事は世の人々には、ブルドーザーのキャタピラの下の土器の様に、一顧の価値の無いものであるかも知れません。しかし、私共、主に信頼する者にとつては、高価な宝石(マタイ十三・四四〜四六)であり、荒野に流れる生命の清水であります(ヨハネ四・十三〜十四)

皆さん、小さい群れであること、無力な事、弱い事、愚かな事を恐れる事はいりません。むしろ、主に信頼する私共に天の父なる神は、御国をお与え下さるのです。

八月には御手紙をと思ひながら、暑さで予定がはかどらず、九月を迎えてしまいました。暑いも、寒いも彼岸までと言われて居りますが、九月一杯も残暑に悩まされて、やつとお便りのパンを執る事ができました。

その後、皆様如何でしょうか？毎日、温度計三十度を昇り放しの暑さの中を、よく今日まで守られて来たものと感謝し

ております。

祈って俟望んで参りました御殿場聖会へ出席するため、八月三日の夜発つて参りました。四日朝、大阪駅で一列車後に着く野村兄を迎えて、丸山兄宅に参りまして、午後二時と夜七時半からと二回集会を致しました。酷しい暑さの中ですが、少数ながらこの日を祈つて俟望んでおられた方々と共に主の恵みに潤されて、夜行列車で御殿場へ向かつて発ちました。途中で台風七号に遭いました。真夜中、列車が余り静かに止まって外は暗いので、窓から覗いて見ると、田畝の中で立ち往生しておりました。これも主がゆっくり眠らせて下さるためと感謝して休ませていただき、目が覚めた時はもう夜も明けて、静岡に着いて居りました。台風の荒れた跡が此処彼処に見られましたが、御手に守られて御殿場に着きました。皆様の祈りに支えられて、御殿場聖会での御用を終わり、暑さの中も守られて帰幡致しました。

九月には、二三日から二五日まで、長野県野沢温泉教会で教壇研修会がございまして、聖書についての研修の一時を与えられ、帰途大阪での集会を致しました。

十月になり大変良い季節になりました。来る十月十日から十二日まで、松岡忠治郎師により特別集会を致します。午前十時、午後七時の二回ずつ致しますので、是非差繰つてご出

席なさつて、主の大きいなる恵みに与つていただきたく願つて祈つて居ります。

十七日は大阪集会で、二十日から二五日まで静まつて参りたく願つて居ります。毎週火曜日は大濠公園教会で、昼と夜に集会を致して居ります。渴いた方々が十名位集つて来られます。

木曜会は、ヨハネによる福音書三章まで参りました。毎週月曜日に海老津で家庭集会を持ち、野村兄がこの御用に當つて居ります。主の御祝福をお祈り下さいます様にお願ひ致します。

燈火親しむ秋、どうぞこの好い季節を生かして聖書を深く味わつて内なる人を強くされるよう祈つて居ります。主の豊かなる御祝福をお祈り申し上げて居ります。

○ 昭和四四年十月十九日（九）

エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。

エホバは我をみどりの野にふさせ、

いこいの水浜に伴ない給う。

エホバはわが靈魂を活かし

御名の故をもて我をただしき路に導き給う。

たとい我、死の影の谷を歩むとも禍害を恐れじ。

汝、我と共に在せばなり。

汝の筈、汝の杖、我を慰む。

汝わが仇の前にわがために筥をもうけ、

わが首に油を注ぎ給う。わが酒杯はあふるるなり。

わが世にあらん限りは

かならず恩恵と憐憫と我に沿い来らん。

我はとこしえにエホバの宮に住まん。

(詩篇二三篇元訳)

ダビデは牧童として父の羊を飼ってユダヤの野山を歩いた少年時代から、ゴリアテとの戦闘、サウル王に仕えて忠誠を尽くしたにも拘らず、生命を狙われて野山に逃げ廻った旅路、イスラエルの王となり、ペリシテ人との戦い、バテシバによる罪の苦しい思い出、アブサロムの反逆による逃避行の惨めさ等々が、神の祝福によつて王国が繁栄し、生活に落ち着きを取り戻した晩年のダビデ王の胸の中を去来した事でしょう。

その間、失敗にも成功にも、絶えず信頼して来た神の豊かな恵みをかみしめて感謝に溢れて歌われたのが、この詩篇でしょう。

今ダビデは辿つて来た生涯をふり返り、牧者なしでは生きられない弱い愚かな羊の様な自分であるにも拘らず、神は牧

者の様に愛と憐れみを以つて導き給いました事を感謝しております。

羊が牧者に信頼して従う様に、主に信頼して参りましたダビデには、常に乏しきことなく、主に在る平安を絶えず与えられておりました。

筈も杖も我を慰む・よくよくでなければ使わない牧者の筈も杖も、羊にとつては痛いものであるが、これによつて羊は牧者の深い愛を学び知るので。愛なる主は災いや苦難と思われる出来事を通して、私共を永遠の生命へ導き給います。

人智の尽きた時、神の智慧を悟り、肉親の情愛の尽きる時、神の愛の深さ高さに今更の様に目を見張り、人力尽きる時、全能者の力に支えられ、絶望の淵に神による輝く希望が与えられます。

幾年か、日曜日毎に福岡から通つて来て皆様と礼拝を守つて居りました八幡基督伝道館の責任者として遣わされて参りましたのは、昭和十四年十一月三日でした。今年で満三十年になります。私の生涯の丁度半分を、八幡に於ける主の御用のために過ごさせていただきました。

八幡に遣わされる事が決まつて、幾日も経たないうちに参りましたので、年若い娘が急に嫁に行くために家を離れて未知の世界へ踏み出した様な、一種の恐れと不安を抱いて居り

ました。

あの聖徒パウロも若き日、同じ思いでコリントの教会へ赴任して参りました事でしょう(第一コリント二・二)。

それ以来三十年、日本の歴史が激しく変えられて、国の内外の情勢も絶えず変わり、社会革新、経済革新と絶えず揺れ動いて居ります中に、十字架の福音と活ける主の証人として一筋に主に信頼して参りました。

今、この三十年の旅路を終えて、ダビデと共にしみじみと詩篇二三篇を、主の前に詠わせていただける事を感謝して居ります。

主は憐れみを以つて、数ならぬ者を愛をもつて選び、この尊い福音の御用にお召し下さいまして、今日まで六十年、守り支えて下さった事をどんなに感謝しても尽きる事がございません。この詩篇二三篇は、また私共と一緒に主に従っていらつしやつた皆様の讚美であり、心の歌だと思えます。主を牧者として仰いでお従いして参ります時、世にある限り、この豊かな恵みと憐れみがつづいて与えられます。

「楽しい時は早く過ぎる」と言われておりますが、一年中で最良の季節と云われる十月もあと数日になりました。永い間祈って参りました松岡忠治郎師による特別集会は、十日から十二日迄、朝夕二回ずつで、「神の国は近づいた。悔い改めて

福音を信ぜよ(マルコ一・十五)のメッセージで、真の悔い改めとは何か、悔い改めに適う果はどんなにして結ばれるかを教えられ、ここに神に向かう姿勢が整えられました。

十一月七日、八日、九日と、別府野口教会の特別集会の御用に当たります。多くの人々が救われ恵まれます様にお祈り下さい。

十一月十六日は礼拝に続いて、聖餐式と教会の三十年の感謝会を持たせて頂きます。一人でも多くの方に参列して頂けましたらと思えますので、今から皆様の予定に加えておいて下さい。主の豊かな御祝福をお祈り申し上げます。

○ 昭和四四年十二月十日(十)

「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサ



レムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。私たちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった」（マタイ二・一〜三）

ユダヤにはヘロデ王が居ました。しかし、そのユダヤはローマ帝国の占領下に置かれ、ローマ人の圧制の下で、重税に喘ぎ、言葉に表せない苦しい日々を送っていました。ヘロデ王はユダヤをこのローマ帝国の圧制の中から救う事もできず、反ってローマ帝国の手先となり、自分の安全と栄華を求めて民を顧みません。昔イスラエルの民が、エジプトでパロ王の下で苦難の年を過ごした様に、ユダヤの人々には苦しい不安と恐怖の日々が続きました。ヘロデ王の王宮のある都エルサレムは王の虚栄によつて繁栄したので、エルサレムの人々も喜んで居ました。ヘロデはユダヤ人のまことの王であつたでしょうか？（サムエル上十二・二十〜二五）

東から来た博士達はその都エルサレムに来て、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか」と尋ねました。

「苦難の日々を送つて居る人々をその中から力を持つて救い、喜びと平安と、生命を与える真の王救い主として生れ

た方はどこにおられますか？」と探し求めて来ました。今、現にユダヤの王であるヘロデは、自分の安全と栄華を脅かされるので、これを聞いて不安になりました。エルサレムに住む人々もこれの繁栄を失う事を恐れました。

空にはアポロが飛び、地上では車の洪水、何の欠けた処があるかと思われる今日の状態です。しかし、これですべての人々の生活は果たして生命に満ちた、平安な喜びの生活でしょうか？科学、技術が世界を支配し、機械が人間を酷使し、物が人の心を奪い、電波は人々の思考力を乱し、生活の便宜に作つた金に人間が仕えているのではないのでしょうか？これ等は人間を幸福にすると思ひ、人類が追い求めて来た王（ヘロデ）であります。今私共は、ローマの支配よりヘロデ王の下で苦しんで居つたユダヤの人々と同じ状況に置かれて居るのでありませんか？科学も技術革新も、経済成長も、機械文明等も、人間を真の幸福に導く王ではありません。真の王は神を畏れ、そのいましめを守り、すべての恐怖と不安を取り除き平安と生命を与え、如何なる状況の中に在つても人間を人間として平安と生命に満ちた生活を得させるのです。東の国から来た博士達が、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか」と尋ねて来て、黄金、乳香、没薬を捧げて礼拝したイエスキリストこそ、その御方です。

私共をすべての敵の手から救い給う(ルカ一・七一、七四、七五)真の王であるイエスキリストがお生まれになったクリスマスに当たって、もう一度、この御方を私共一人ひとりの王として、姿勢を正してお仕えして、何物にも支配されない(ガラテヤ五・一)自由な神の子としての生涯を送りましょう。

暖かい冬かと思われましたが、師走の声を聞くと共に大陸性の高気圧に覆われて、寒い日が続く昨今と成りました。その後、主の御手に守られて居られます事と思えます。師走ともなりますと、一年を省みて、「とうとうこの一年も、何もできないで過ぎてしまった」と毎年後悔しておりました。しかし今は何ができていなくても、この一年、内に外に事の多い中を、「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」と御約束下さった主が、憐れみと慈しきをもつて、初めとなり終わりと成り給ひまして、様々な中で、その都度、神の御業をもつて守り支え、活かして下さった事を嘯みしめ、感謝に溢れております。また、平凡で無為に過ぎた様に思われる日々の積み重ねではありませんが、主の祝福によつて、素晴らしい日々である事、また幾年か積み重ねられて初めて、神の業の偉大な実を結ぶ事を知らされまして、感謝で胸が一杯になります。

十一月七日から九日まで別府野口教会の特別伝道集会では、教会員の信仰が先ず新しくされ喜びをもつて、前進を始める事と思えます。

続いて、四十年ぶりで観海寺へ参りました。私立学校教職員宿舎がありますので、其処に滞在して一週間静まる時を与えられ感謝しました。多感な学生に印象深く刻みつけられた観音寺の石橋に佇み、石の欄干をなでて、四十年の歳月に今は亡き友、彼此と顧み、感慨無量なものがありました。

十六日には城様御夫妻をはじめ、福岡大濠公園教会からも御出席下さつて、恵まれた三十周年感謝会を持たせていただきました。新しく信仰もつて来る十年、二十年の前進を始めました。

十二月七日礼拝を終わりました。福岡大濠公園教会の役員を迎えて、祈り協議し、福岡大濠公園教会の困難な事情を諒解し、専任者が与えられる迄、主任者として兼任する事になりました。何卒早く、良き牧者が与えられて、八幡前田教会の牧師として専念できますようお願い下さい。

十二日に大阪集会のクリスマス、十四日大濠公園教会のクリスマスの御用に当たらせていただきます。二日は当教会のクリスマス礼拝、午後一時三十分から、八幡中央公民館講堂でクリスマス祝賀会を致します。皆様お揃いでお出かけ下

さつて、御一緒にクリスマスをお祝い下さい。尚、二五日夜六時から、例年の様にクリスマス愛餐会を催して、楽しいクリスマスとの交わりの時を持ちたく願っております。

二八日礼拝後、辨当持ち寄りで感謝会を致します。三十年記念感謝会に、その機会を得なかつた方々のため、今年は特に三十年に亘つての感謝を捧げたく願つて居ります。

明年一月一日午前十時新年礼拝、続いて午後二時、午後七時、と毎日三回ずつ三日間の新年聖会を開かせていただきました。願つて居ります。

今から皆様の予定に組み入れて、万障繰り合わせて御出席下さいます様にお勧め致します。尚、続いて四日の日曜日から三日間、福岡大濠公園教会で新年聖会の御用に当たる事になつておりますので、特にこのためにお祈り下さいます様にお願ひ致します。

会堂の暖房も何とか暖かく、気持よくと願つて居りますが、中々良い知恵も浮かびません。理想的なのはセントラルヒーティングですが、今の会堂では無理にも成りますので、石油ストーブをもう一つ加えてみました。皆様の協力で会堂の換気を手まめにして、快適な会堂に致したいと願つて居ります。

主の豊かな御祝福をお祈り申し上げます

○ 昭和四五年二月二十日(十一)

「北風よ、起れ、南風よ、きたれ。

わが園を吹いて、そのかおりを広く散らせ」

(雅歌四・十六)

吹く風は未だ寒さを覚える昨今ですが、陽射しはすっかり春らしく成りました。西高東低の気圧配置で、北西の冷たい風の吹き荒ぶ時は、人も樹木も悉く縮み上がってしまいます。冬型の気圧配置がくずれるほど移動性高気圧と低気圧が交互に日本列島を横切つて、天気は猫の目の様に変わり易く成ります。この頃に成りますと、低気圧に向かつて南東の温かい空気が吹き込んで春をもたらしませます。

東風吹かば 匂おこせよ 梅の花

菅原道真が庭先の梅に別れを惜しんで詠んだ有名な歌ですが、東風は春の訪れを知らせてくれます。

水栽培のヒヤシンスの固い球根から伸びた緑の葉で、蕾をしっかりと包んで居りましたが、この三、四日の暖かさで、すっかり伸びて茎に一杯にピンクの花をつけ、私共を楽しませてくれます。部屋中に優雅な香りを漂わせて居ります。

神は私共をあの恐ろしい、冷たい冬の様な罪の中から贖い、今は私共を通してキリストを知る知識の香りを、至る所に放つて下さるのです。私達は救われる者にとつても、滅びる者

にとつても、神に対するキリストの香りで、救われる者にとつては命から命に至らせる香りであり、滅ぶ者にとつては死から死に至らせる香りです。

私共がどんな事情、境遇、問題の中に在る時にも——北風の吹き荒ぶ様な困難と苦しみの中に在る時も、また物事が順調に行つて言う所なしという時にも——南東の暖かい風に、花咲き、鳥歌う様な嬉しい時、楽しい時、得意の時にも——キリストを知る知識の香りを放つ者としていただいたことを感謝致します。

パウロはどんな時にも、神の僕としての態度を堅く持ち続け、好評を博しても悪評されても、その態度を変えませんでした(第二コリント六・一〜十)。私共も北風が吹くなら吹け、南風が吹くなら吹け、それに従つてキリストを知る者の香りを、高く放たせて下さるのですから、臆する事なく、どんな時にも主の愛にかたく立つて参りましょう。

「我は汝等の神エホバなり」と、御自身を私共に現わし給ひまして一ヶ月余りが過ぎ去りました。その後、皆様は主のいつくしみと憐みの中に守られていらつしやる事と思ひます。悪質の感冒が流行して、多くの方々が罹り苦労されました。私も、元旦早々九度近くの熱が出て、食欲もすっかりなくなりました。聖会中の事でもありまして、皆様が大変心配下さ

いました。その中でひたすら主に依り頼んで参りました。

「なんぢら立(たち)かへりて静かにせば救をえ、

平穩(おだやか)にして依頼まば力をうべし」

(イザヤ三十・十五)

の約束を主は真実に守り給ひまして、八幡と福岡の新年聖会の十九回の御用を、一回一回能力を与えて全うさせて下さいました。今年はいよいよ心を尽くして、この主に依り頼んで参り度く願つて居ります。体調が回復するまで約三週間かかりました。この間篤い祈りをもつて支えていただいたことを感謝して居ります。

昨年、冬の暖房費の残金とM兄の感謝献金で、昨年は壁掛用扇風機を購入しまして、夏は頭が焼ける様な思いをせずに過す事ができました。それでせめて欄間を開放できたら空気の調節が楽に成るでしょうと思つて居りました。福岡大濠公園教会から贈られた感謝献金に加えて、思い切つてアルミサッシの欄間に取り替えました。これで会堂の空気調節も良く成りますでしょう。

家庭の事情などで日曜礼拝後の婦人会に残る事のできない方のために、一月から毎月第四水曜日午前十時から十一時半までの予定で、婦人会第二部を致す事に成りました。婦人会の方はどなたでも、少なくとも一ヶ月に一回は婦人会に出

席できる機会ができました。万障繰り合わせて御出席に成る様
おすすめ致します。惣津紀久子姉の祈りに応えられて二月十
三日に無事女兒を安産されました。続いて肥立のために祈つ
て上げて下さい。

あと数日で二月も終わりますので、三月の予定をお知らせ
致します。今年は三月二二日が棕櫚の聖日で、福音書に
あります様にイエス様がロバの子に乗ってエルサレムへ入ら
れた記念の日です。この日から主の受難週に入ります。二七
日(金)が受難日で、主が十字架に架かり私共を贖って下さつ
た記念日で、二九日(日)がイースター(復活祭)で、この日イエ
ス様が甦り給いました。今年はイースターより約一週間早く
二一日(土)朝、大蔵川上流でバプテスマを致します。受洗希
望の方々は五名です。多数御列席下さって、受洗者の新しい
門出を祝福していただけましたら幸と存じます。

十五日は福岡大濠公園教会で礼拝と聖餐式の御用に参加ま
す。二二日は前田教会で礼拝に続いて聖餐式を致します。ど
うか祈って聖餐の意義を味わい、信仰もって主の尊い死と復
活に与る者と成りましょう。三月は卒業、進学、就職とあわ
たらしい月ですが、それだけ励んで主に近づきましょう。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ」

(詩篇四六・十)

主の豊かな御祝福を祈ります。

○ 昭和四五年五月(十二)

「そのとき、イエスは彼らに言われた、『恐れることは
ない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわ
たしに会えるであろう、と告げなさい』」

(マタイ二八・十)

「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエス
が彼らに行くように命じられた山に登った。そしてイ
エスに会って拝した。しかし、疑う者もいた」

(マタイ二八・十六・十七)

マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ等が朝早くイエスの
屍を納めた墓に来た時、主はかねてから言われた通り甦られ
て、そこにはもうイエスの屍は無かったので、恐れと驚きと
喜びの複雑な気持で、弟子達の処へ急いで帰る途中で、甦り
給うたイエスにお会いした。

その時、主は「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガ
リラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げな
さい」と言われたのでした。十一人の弟子達は主の言葉に従って
ガリラヤに行き、そこで甦り給うたイエスにお会いして拝し、

喜びに満たされました。しかし、弟子達の中にも、いまだ甦り給うた事を信ずることのできない者も居りました。これは一九〇〇年前の出来事でありました。しかし、「ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるだろう」とおっしゃった主の約束は、今も真実です。私共はよみがえって活ける主にお会いできたから、どんなに素晴らしい事かと思えます。

立派な教会堂の中で、主にお会いできるのではないかと、活ける主を探し求めるのではないのでしょうか。または彼処の聖会で、あの大先生の集会で、あるいは荘嚴な儀式の中で、活ける主にお会いできるのではないかと期待しますが、主はガリラヤに行けと仰せ給います。ガリラヤは弟子達が生れ、育ち、働き、苦勞し、失敗した処、そこで主に召されて弟子となった処です。弟子達は主の言葉に従って、エルサレムからサマリヤを通ってガリラヤへ行き、其処で甦り給うた主にお会いしたのでした。私共もエルサレムである教会で、臨在にあつて、主の言葉を与えられて、聖靈に導かれて、サマリヤである不信心な世に出て行き、ガリラヤである家庭に、職場に、地域社会に在つて、この世の悩み、悲しみ、苦しみ、困難、失敗の中で、先ず主の言葉に大胆に、忠実に従つて参ります時、全能者である活ける主にお会いする事ができます。イスラエルがヨルダンの岸に立った時、祭司が契約の箱を

担いで、濁流の渦巻くヨルダンに足をひたした時、流れは切れ止つて、死の川と呼ばれるヨルダンの中に命の道が拓かれました。イスラエルの民は信仰によつて、主にお会いたし様に、全能者をハッキリと知る事ができました。エリヤも日照りの続く中で、主の言葉に従つてケリテ川に行き、主の言葉に従つてザレパテのやもめ女の所に行き、人間の考えも想像もできない困難と絶望の中で、主の言葉に大胆に真実に従つて、「我が仕える万軍の主、エホバは活く」とハッキリ信仰に由つて主にお会いしました。これがカルメル山で火を下す祈りの土台となりました。

私共は小さくても、弱くても主の言葉を離れず、右にも左にも曲らずに従つて参ります時、信仰によつて甦り給うた主イエスにお会いできます。失敗、困難、苦痛、悲しみ、すべての中で主に対する姿勢を正して、主の言葉に信頼する時、総ては活ける主にお会いする機会と成り、主の証人として力強く歩ませて下さいませ。

今年三月に入つて寒さが格別きびしく成り、冬が長く続いて参りました。三月二一日の朝、大蔵川の上流で五名のバプテスマを致しました。水温が低く、川岸には薄氷さえ張つて居りました。例年、満開の美しい花でバプテスマを祝つて呉れた河内の桜も、今年は時期も早く、気温も低かったので、

蕾も固く冬枯れの姿でした。

二九日イースターの夜、野村兄、調姉と一緒に急行雲仙で岡山へ参りました。三十日午前十時から、日本イエスキリスト教団岡南教会で、正野隆士兄と藤原としの姉との結婚式に列席しました。長い人生経験からにじみ出た老牧師佐藤邦之助師の式辞は新郎新婦にとって最高のお祝いであったと思われました。新家庭の上に主の御祝福を祈りながら、翌三一日朝大阪へ着き、丸山兄宅へ参りました。

大野季太郎夫妻も昼過ぎに来られ、午後二時から集会を持ちました。夜の集会は七時半からで、尼ヶ崎から田端一家がイースターに洗礼を受けた喜びをもって駆けつけて出席されました。この一家は大阪の家庭集会の果実の一号でした。生命の福音がこの様に広く播かれ、芽生えて多くの果実を結ぶ様祈って参りましょう。

夜十時三十分発の銀河二号で東京へ発ちました。四月一日朝九時三十六分に東京駅に着き、中央線に乗り替え、阿佐ヶ谷駅に下りて筑山家を訪ね、かねて文彦兄が病気で静養中の事でしたが、会社に出勤して居られる由。色々と八幡を出てからの信仰生活の遍歴を通して、主が如何に懇ろな方であるかを教えられました。

午後二時頃、略図を頼りにやっと落合教会へ辿り着きまし

た。先着の先生方に歓迎され、部屋に荷物を置いて、伝道会総会に出ました。色々協議事項もありましたが、中で私の心に留まりましたのは、今後どうしてこの与えられた尊い信仰を次代の人々に残すのか？という事でありました。各種の神学校に学ばせて、何回かの研修会によつてこの信仰を訓練することのことでした。聖書は何と語って居るでしょうか？「わたしに従ってきなさい、そうすれば・・・」「聖霊がくだるとき、力を受けるであろう・・・。わたしの証人となるであろう」。柘植先生はそれで、寝食を共にして主に従う事によつて伝道者を教育されました。今日、最も必要なのは学者でも、説教者でもなく、主の証人ではないでしょうか？ガリラヤの漁民が主に従つて、後に聖霊に満たされ、生ける主の証人と成り、ローマ帝国を覆しました。

野村兄、調姉は一年間伝道会々友として、教役者の交わりに加えられました。五月で調姉が献身して満一年に成ります。この間、どなたかわかりません(主は知り給います)が、ほとんど毎週、「調姉のために」と、指定献金を献げられて参りましたのが約一六〇〇〇円に成りまして、調姉の聖会への旅費に用いられました。聖会に於いて多くの方々の前に、主の証人として良き証をすることができました。四日朝の御用を終わり、一足先に離京し、五日朝福岡で礼拝の御用に当たらせ

ていただきました。東京の桜の蕾は冬枯れの様に固くなつて居りましたが、牧師館前の桜は五分咲きでした。やはり九州は南国だと思ひました。この桜も四月に成り気温も平年並みに成りましたので、今は新緑の葉桜となりました。

四月十七日から十九日まで、福岡大濠公園教会で折瀧師記念会が開かれ、藤村勇師、松岡忠治郎師が御用に当たつて下さいました。八幡からも多数参席されました。五月十五日から十七日まで毎朝、夕二回ずつ松岡忠治郎師による特別集會を開きますので、今から祈つて毎回出席なさる様御案内致します。

主の豊かな御祝福をお祈りして居ます。

○ 昭和四五年七月二三日（十三）

万軍の主よ、

あなたのすまいはいかに麗しいことでしょう。

わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕ひ、

わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び歌います。

すずめがすみかを得、

つばめがそのひなをいれる巢を得るように、

万軍の主、わが王、わが神よ、

あなたの祭壇のかたわらに

わがすまいを得させてください。

あなたの家に住み、

常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。

（詩篇八四・一〜四）

「あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人はさいわいです」と、絶えず主の臨在に在つて、主を仰いで生活した人が心から詠んだ詩であります。

今日、多忙な生活の日々に追われて居りますと、いつしか自分の生活、自分の仕事、自分の家族だけがすべてに成つて、うっかりして居ると氣候の移り変わりも忘れて、目の前の事情境遇に振り回されてしまいます。何かの機会に気がついて、初めて時候の移り変わりを知る様な昨今です。

この三日程、主の御導きを得まして、別府郊外観海寺の一室で静まって居りました。朝早く、うぐいすの啼声を珍しく聞き、日頃、八幡では余り聞かれなくなった雀の啼声が、にぎやかに朝から日暮れまで聞こえて居ります。窓の外には、街では見られなくなった燕がスイスイ飛び交つて居ります。もう、梅雨の季節に成つたかと驚かされました。雀も燕も人家の軒先に営巢して生きて居ります。しかし、雀の巢が雨桶をつまらせ周辺を汚しますので、時々取り除かれ、いたずら

子に折角の巢が荒らされます。雀や燕にとって人家の軒先も安全な場所ではありません。しかし、神殿の屋根に作られた巢は、場所が場所ですから、誰でも登る事が許されませんので、雀や燕は安全に巢を造り、ひなを育てて安らかに暮らして居ります。先日も福岡大濠公園教会の雨桶が腐食してしまいましたので、架け替えました。教会の塔の屋根は雀の巢で一杯であった由、昔も今も、雀や燕にとって安全な住まいは神の殿なのでしょう。

私共も現実の生活の中で、あわただしく日を過ごしている間に、内なる魂が衰えて参ります。その魂に生命を与え、平安を与えるものは他にありません。ただ、主の臨在に近づき、より他にありません。主の臨在に近づき、生命に満たされ、主の平安に与り、聖霊による喜びを味わい知った人は、どんな問題がありましても、どんなに忙しくても、どんなに身心共に疲れて居りましても、まだどんなに遠方に在つても、主の臨在を慕い求めます。この詩篇の記者も、身も魂も絶え入るばかりに主の大庭を慕い、わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び歌います、と告白して居ります。これはまた、すべての人の深層に在る強い渇きであります。この魂の渇きを満たされるまでは、人間として真に活きる喜びを味わう事のできない気の毒な方々です。この渇きを満たし、生命と平安

を与えるのは主の臨在です。私共も切に、切に、この詩人の様に主の臨在を慕い求め、先輩の聖徒達に倣つて、生命と平安に輝いて馳場を走り尽くして参りましょう。

「ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見えますます、そうしようではないか」

(ヘブル十・二五)

この前お手紙を差し上げたのが、四月下旬ではなかったでしょうか。もう二月も過ぎます。その後、皆様主の御愛の御手に守られて居られる事と思ひます。

五月五日に教区総会が開かれ、今年には正野眞宏兄と参りました。午前中は割合におだやかに会議が持たれましたが、午後は東京神学大学の問題で荒れました。

五月十五日から十七日まで、松岡師による特別集会が毎日朝夕と二回続けて持たれました。信仰によつて一同聖霊に満たされ、一同能力を受けて、今迄の眠つた状態から立ち励んで居ります。

十六日夜集会の後で、伊藤修巳兄と緒方祐子姉の婚約式をいたしました。伊藤修巳兄は大学時代に大阪相川教会で受洗され、昭和四二年に八幡前田教会へ転会されました。現在水巻町机社宅に住まわれ、折尾女子商業高等学校に教鞭を執つ

て居られます。緒方祐子姉は熊本の学校に勤務されて居る方で、ルーテル教会の会員です。主の御祝福によって、近い将来結婚式を挙げられる様お祈り下さい。

二八日木曜会の後で、前田新兄と田嶋和美姉の結婚式を致しました。前田新兄は皆様ご存知の前田幸江姉の長男で、四年にバプテスマを受けた教会員で、国鉄に勤めて居られます。田嶋和美姉は祇園町に住まれ、求道の途上にある姉妹です。どうか姉妹がハッキリ主に在る信仰を得られて、主に祝された生涯に入られる様お祈り下さい。

二九日の婦人会第二部では家庭教育における躰の問題が色々と話され、主から託せられた子供をどの様に聖言に従って導くかを教えられました。

六月四日午前二時から、長島流石兄と大田佳子姉の結婚式が行われました。長島兄は河本さんの店に勤めて居られる青年で、近頃ずっと礼拝に続いて出て居られ求道中ですので、皆様の祈りと交わりに加えて下さい。大田佳子姉は洋裁を専門にして居られ、昨年バプテスマを受け、日曜学校の御用をして下さって居ります。お二人が祝福満ちた生涯を全うされます様お祈り下さい。

林知夫兄が先日散歩に出られて倒れ、大股骨折で厚生年金病院に入院加療されて居ります。早く癒されます様お祈り下

さい。

六月の婦人会第二部は、二六日午前十時から十一時までの予定です。

六月二八日は地区の講壇交換で若松浜町教会の佐藤牧師が礼拝の御用をされます。その代わりに若松浜町教会で礼拝の御用に当たりますので、このためお祈り下さい。

今年は主の恵みにより、久しぶりで日曜学校の夏期学校を青年会の協力で行う事に成りました。七月二三日から二泊三日で津屋崎教会で行います。夏の二日間を大自然の中で心ゆくまで主に近づき、楽しい時を与えられたく願って居ります。多数ご参加なさる様おすすめて致します。

牧師通信を楽しく読んでいただける様にと、下手ですが一字一祈りながら鉄筆を走らせて居ります。初めの頃よりいくらか読みやすくなったかなと思いますが、出来上がって見ないと分かりません。できるだけ記念切手を使って来ました。もう手持ちも無くなりました。E姉さんが長年趣味で集めた見事なコレクションを御用にお使い下さいと献げられましたので、今度も使用できます。

主の豊かな祝福を祈っています。

○ 昭和四五年十月十日（十四）

「主に感謝せよ、主は恵みふかく

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」

（詩篇一一八・一）

父なる神と主イエスから、私共に賜わった恵みはどんなに深いものであるか量り知ることはできません。また、その慈しみはどんな時代にも、どんな境遇にも、生活や立場が異なっても、絶える事ありません。

私共が神と主イエスの慈しみと恵みを知ったと思ひまして、やはり人間として（神に造られた者として）しか知る事ができません。失敗した時、罪に苦しむ時、困難の中で孤独に置かれた時、思わず知らずヤコブの様に考えてしまいます。

「ヤコブよ、何ゆえあなたは、

『わが道は主に隠れている』と言うか。

イスラエルよ、何ゆえあなたは、

『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか」

（イザヤ四十・二七）

しかし、神はイスラエルにおいてだけ神ではありません。「地と、それに満ちるもの、世界と、その中に住む者とは主のものである」（詩篇二四・一）。宇宙とその中の万物の創造者、また支配者であられます。イスラエルの民が民族の基盤とし

てこれに依り頼み、またこれに固く信頼して来た神を離れて、他の神ならぬものを神として依り頼み、創造者を離れました。そのために神は異邦人であるバビロンの王ネブカデネザルを用いて、イスラエルの国を亡ぼし（エレミヤ十七・五〜六）、民族の誇りであり、宝であるべき神の都エルサレムの城壁を崩し、神の殿を焼き払い給いました。イスラエルの民はバビロンに移され、異邦人の地に在って苦難の生活を続けました。その中で、神を離れる事がどんなに不幸で惨めであるか、泌々と味わい知った事でしょう。礼拝する神殿はなく、神の都エルサレムは荒廃して、野獣の生棲する所と成り、何処で、誰に祈る事ができるでしょうか？何処で神の言葉を聞く事ができるでしょうか？誰が落胆して居る者を奮い立たせてくれるでしょうか？こんな悲しい事はないでしょう。

私共もこの世に在って様々な患難や、悲しみ、苦しみ、絶望等に逢います。こういう事は決して嬉しいとは思われません。しかし、どんな中に在っても、本人の決断によつて、日曜日に礼拝を守る事ができ、祈祷会に出て主の前に心を注ぎ出して祈り、主の聖言を聞く事ができます。このために教会が与えられて居ります。またその状況の中で聖霊による溢れる慰めと喜びを与えられ、望みと能力を与えられます（第二コリント一・三〜七）。

イスラエルは捕囚の民となり、異邦人の地に在つて、礼拝を守る神殿はなく、神の戒めを教える祭司なく、祈る事もできず、讚美するにも人をはばかり、神を離れた生活がどんなに味気なく、空虚なものであるかを知らされました。

憐みと恵み溢るる神は、ペルシヤ王クロスを祝福し給ひまして、国は富み栄えました。この異邦人ペルシヤ王を神様は用いて、「各地に離散して居るユダヤ人の内、志の有る者はエルサレムに集つて、天地の創造主であるまことの神を崇める神殿を造る様に、また一切の必要はペルシヤの国王が提供する」旨の詔りを出させ給ひました。ここで長年、神の殿を失つて、苦難の中に在つたユダヤ人は、喜び勇んで神の殿の再建に励みました。

クロス王に対して

「わたしは主、あなたの名を呼んだ。

あなたがわたしを知らなくても、

わたしはあなたに名を与えた。

わたしは主である。

わたしのほかに神はない。ひとりもない。

あなたがわたしを知らなくても、

わたしはあなたを強くする」(イザヤ四五・三〜五)

神様は、「あなたが私を知らなくても」と繰り返し言つて居

られます。私共が神様を、主イエスをよく知らないからと失望する事はありません。神様は異邦人のペルシヤ王クロスにさえ、「あなたが私を知らなくても」「あなたに名を与えた」「あなたを強くする」と恵みをもつて祝福を満たし給ひました。私共が主を知らなくても、主の方が名を与えて知つて下さいませ。また主は私共を強くして下さい、恵み深く、慈しみ絶えない方です。

暑さ寒さも彼岸までと生活の知恵で言われて居りますが、長い厳しい残暑も彼岸に入りまして、消えて秋らしい、爽やかな昨今です。その後、皆様お変わりございませんか？

夏の疲れが時候の変わり目に出ると、昔の人が言つて居ります。夏の気温に慣れた身体が秋冬の気温に対応するため、身体中の機能が狂つて来るのでしょうか？どうぞ主の御手に守られて快適な秋をお過ごしになる様祈ります。

夏期聖書学校は日曜学校の先生と青年会の皆さん、婦人会の有志の方々の奉仕で、福岡の教会と合同で一日平均六十名でした。お祈りを有難うございました。

八月初旬には御殿場聖会に参りました。藤村荘七師によつて開かれた聖会が今年を最後に閉会するとの事で参りました。各地から百余名の兄弟が渴いて集り大変恵まれた素晴らしい聖会でした。続いて青年研修会が御殿場東山荘で開かれ、前

田教会から六名参加し、皆恵まれて帰りました。

九月十五日午後二時から長野県野沢温泉教会で、伝道会(柘植師によつて始められた教会の集り)の教職研修会が開かれました。十六日の朝の聖別会の御用がありましたので、十四日大阪へ出まして、丸山兄宅の集会を二回して長野へ発ちました。十九日の午後の全ての御用を終えて、つつがなく帰りました。

教会の改築のために祈つて献金して来ましたが、この度教会の東隣の地続きの土地が売りに出されました。現時点で教会は交通の便が良いので他へ移動しない方が良いとするならば、この土地は何とか手に入れて、更に教会が主の御用のために前進する準備をすべきではないかと、長年の祈りの課題でした。

五四坪余りで約六百五十万円が必要と成ります。役員会でも色々検討し祈つて参りました。また皆様の色々な御意見も出しましたが、結局第一期計画で敷地を確保し、第二期計画で会堂建築へと、主の導きを仰いで進んで参り度く思います。

それで今日まで建築献金として捧げられた約二百万円を、土地購入の資金として用いたく願つております。私共の教会が主に喜ばれる様に、主の御愛に応えるにふさわしく献金致しますよう。

また主からの御祝福が直接お一人お一人に豊かに与えられる様に主の御前に献げていただきたいと思います。

今教会を挙げて主の尊い御用に参加させて頂く喜びをもつて力の限りを尽くして献金を始めました。皆様もこの機会を逃さず全力を尽くして主の祝福に与る様おすすめ致します。真心をこめた献金が次から次へと、「右の手のすることを左の手に知らせるな」、主の聖言の様に、聖前に届けられて居ります。

一応借入金で賄いますが、何とか早急に返済して、更に第二期計画の建築資金を準備したく願つて居ります。

祈つて頂いて居りました林知夫兄も、百日近くの病院生活を終えて、松葉杖の助けを借りながら退院されました。

十月二日には伊藤修巳兄と緒方祐子姉の結婚式が教会で行われました。続いて三日には前田新兄と田嶋和美姉の結婚式が行われました。新家庭の上に主の豊かな御祝福を祈ります。皆様の上に、主の御祝福豊かなる様祈ります。

○ 昭和四五年十一月(十五)

「神よ あなたはわたしの神、

わたしは切にあなたをたずね求め、

わが魂はあなたをかわき望む。

水なき、かわき衰えた地にあるように、

わが肉体はあなたを慕いこがれる」

(詩篇六三・一)

「燈火親しむ秋」と呼ばれて参りました秋も更けて、冷気を覚える昨今ですが、その後、如何お過ごしでしょうか？

今日のようにあわただしい生活の中で、「燈火親しむ」静かな時を持つ事が困難に成りました。また一面、それだから是非「燈火親しむ静かな時」が必要なのではないでしょうか？

いよいよ細かく専門化され、系列化され、組織化された社会に在って、メカニズムの一部品の様に、自主的な意識や判断でなく、他からの見えない様々な圧力で、働かなければならない様にされた日々の営みの中に、人間性を回復し、主体性を確立するための一時を持たなければ、最早人間として生きる事も出来なく成って参りました。また、炊事に洗濯に買い物に、育児にと、健康を守られている事を感謝しながらも、ただ何となく一日を終わってしまうのではないのでしょうか？

こんな時こそ一大決心をもって、たとえ十分でも二十分でも、一切を断ち切って燈火の下で聖書をひもとき、主との親しい交わりの時を持つては如何でしょうか？其処では主が直接あなたに語りかけて下さいます。あなたを世界にかけ替え

のない、尊い者としてあしらって下さいます。また、あなたの悲しみも喜びも、苦しみも楽しみも、誰にも話せないすべてを、主は忍耐強く聞いて、慰め励まし、癒し、許し、論じて導いて下さいます。主との交わりの中で、聖霊はこの世で得られない尊い主の恵みをもって、潤して下さいます。こんなに忙しいので、とてもできないとお仰言らないで、先ず心を尽くして、この事を実行できる様祈して下さい。私にはできないと自分の考えで決め込まない事です(箴言三・三〜五)。私共は自分の好きな事と成れば、どんな寝坊助でも早起きします。時間が無い、ない、と言いながら、いつしかテレビで三十分、四十分と時間を費やしてしまいます。心を尽くして主に信頼して実現させて下さい。一回でも、二回でも結構ではありませんか？

実際、皆様がこれを実行してその喜びを味わい知ったならば、時間を作り出す知恵も与えられて、続ける事ができます。「たった十分、二十分では、せめて聖書を読むには一時間、二時間なければ」と思つて、とてもと断念しやすいものです。そこが信仰の戦いです。「たった三分でも、五分でもいい」聖言一句読めただけでいいのです。真剣に読んだ一句は、だから読んだ一章にも相当します。「三分で一言の祈りでも」その忙しい中から呼びかけるあなたの祈りを、主はどんなに喜ん

で下さることでしょう。その一言の祈りがあなたの心を軽くし、平安にして呉れます。

「わたしが床の上であなたを思いだし、

夜のふけるままにあなたを深く思うとき、

わたしの魂は髓とあぶらとをもつて

もてなされるように飽き足り、

わたしの口は喜びのくちびるをもつて

あなたをほめたたえる」

(詩篇六十三・五〇六)

今年もあと四十日に成りました。十二月と一月の集会の御案内を申し上げます。皆様の予定に組み入れていただき、各集会を通して与えられる神様の豊かな恵みのうちに、今年を全うし、新しい年を迎えていただきたいと願って居ります。今年には福岡の教会の都合や公民館借り入れ等の関係で、教会のクリスマスと祝会を早く致します。

十三日 午前十時 クリスマス礼拝

午後二時 クリスマス祝会 八幡中央公民館

(伝道会は休みます)

二五日 午後六時 クリスマス愛餐会

二七日 礼拝後 感謝会(弁当持ち寄り)

今から御準備下さって、各集会に御出席なさいませう様お待ち

して居ります。

本年最終の礼拝は二七日、木曜会は二四日、祈祷会は二三日、伝道会は二十日です。

明年一月の予定を申し上げておきましょう。

一月一日〜三日 新年聖会(午前十時・午後二時・午後七時)

五日〜七日 福岡大濠公園教会新年聖会

十五日〜十七日 熊谷新年聖会

一月一日新年礼拝、三日から聖日礼拝、祈祷会は六日から、

木曜会は十四日から致します

取り急ぎ集会の予定を御案内申し上げます。

○ 昭和四六年三月十三日(十六)

「主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、『これはあなたがたのため、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい』。食事ののち、杯をも同じようにして言われた、『この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい』」(第一コリント十一・二三〜二五)

過越の食事の席で、主は御自分でパンを裂き、杯を廻して、間もなく十字架上で受くべき苦難の奥義を、懇ろに弟子達に諭し給いました。主は十字架の上に、罪のあがない代として、御自分の身体を釘裂かれ、血を流し、甦り、天に昇り給いまして、永遠の贖いを全うされました(ヘブル九・十二〜十四)。

この主の十字架の御贖いの故に、私共の熱心でも、働きでもなく、また、私共がどんな状態な者であるかに拘らず、功しなくして、神の恵みにより罪を消され、不義を許され、救いに与つて、神の子とされたのであります。

私を記念するため、この様に行いなさい、と仰せに成つて居ります。情報化時代と呼ばれて居りますが、私共には、むしろ情報被害時代ではないかと思われれます。朝起きるから、寝るまで、電波に乗り、印刷物と成り、家庭で、職場で、列車の中で、路傍で・・・至る所で、コマ―シヤルからベトナム、中東の国際問題まで、純真な青少年の心を傷つけるような漫画、あくどい映画のポスター、政治家のその場限りの無責任な答弁、公害問題から食品添加物による危険、等々が否応なしに、目から耳から飛び込んできて、毎日の生活のペ―スを乱され、あわただしく過ぎ去ってしまいます。うっかりすると、何が最も大切な事かも分からなく成り、関係のない事が大事件であるかの様な錯覚を与えられ、恐れる必要のない

い事を恐れ、その場当たりな生活に流されてしまいます。こんな時であるだけに、「わたしを記念するために」と主は仰せ給います。「ついでに」ではなく、思いつきでなく、何はさて置いても、「わたしを記念するため」と仰せ給います。この十字架の永遠の贖いを、単なる一つの情報として、聞き流し、読み流さないため、絶えず記念して、主の血と肉を噛みしめて、毎日の生活の原動力を受けて、日々を永遠生命に歩んで参りましょう。

吹く風に未だ冷たさは残つて居りますが、三月に入つて急に春の気配が濃く成つて参りました。久しぶりで郊外に出て、茨の芽がもう大きく成長し、よもぎも冬枯れの下から、日増しに青さを増して、麦の背丈もこんなに伸びてと驚かされました。つい先日、年賀状を差し上げて新しい年へ踏み出したと思つて居るうちに、二ヶ月余りが過ぎてしまいました。日々の祈りの中に、皆様お一人お一人を身近に覚えて居ります。こうしてペンを執つて、お便りを書いて居りますと、御返事を戴いても、戴かなくても、親しく御目にかかつてお話をして居る様な気持が致します。二月は気に成りながらその機会を与えられず、皆様に長い間御目にかからなかつた様な気持で居ります。

昨年は正月早々流感に冒されて、新年聖会も霊肉の戦いで

したが、今年は皆様の祈りに守られて、感謝の内に御用にあたらせていただき、また皆様も年頭から「今より我は主なり」と仰せ給う方を、主として踏み出していらつしやいました。

五日から福岡大濠公園教会の新年聖会、十五日から十七日、埼玉県の熊谷市箆原キリスト教会の新年聖会の御用に当たらせていただきました。各集会とも渴いて求めて居られる方々のうちに、主が業を成就して栄光を現し給いました。帰途、大阪の丸山兄宅の集会を致しました。この小さい群のためにも覚えてお祈り下さる様お願い致します。

二月十四日(日)礼拝後、河本小太郎兄の記念会がございました。召天されて満十年に成ります。あの多忙な事業家でありながら、ダビデが詩篇八四篇に詠って居ります様に、主の臨在を慕い求めて、各集会に励んでおられました。その眞実な生活姿勢は、「語らず言わず、その声、聞こえざるに」と詩篇十九篇にあります様に、言葉少ない河本兄でしたが、今も多くの方々の脳裏に深く刻みつけられて居りまして、思い出、証言が尽きず、時間が足りない程でした。今は栄光の主の前に在って、義の冠を受けて居られる事でしょう(第二テモテ四・八)。私共も彼処で共に会う日を望んで、信仰の馳場を尽し度いものと思ひます。

今年四月から受難週で、十一日はイースター(復活日)に

当たります。今年はバプテスマ志願書を出された方は七名です。皆様が信仰によつて新しくされ、バプテスマに由つて与えられる主の豊かな御祝福に与る事ができますようお祈り下さい。

教会隣接の土地購入のためにお祈り下さいまして誠に有難うございました。このための献金を御届け下さる方が絶えません、一応三月末日で締め切りたいと願つて居ります。土地代が六百八十万という大金ですが、これが一切満たされて、幾らかでも残金が与えられましたならば、建築献金として第二期計画の準備金と致し度いと願つて居ります。最後まで主を信じて祈つて参りましょう。

三月は卒業、進学、就職と、色々人生の分岐点と成る事の多い月ですが、「エホバは善なる者にして、悩みの時の要害なり」と仰せ給う方に信頼していらつしやるよう、祈つて居ます。私も『おじいちゃん』と呼ばれる程のおいばれでもない」と若い気で(今日もそうですが)居りますが、この一年間「おじいちゃん」に慣らされてしまいました。先日テレビで芦田伸介さんも、「未だ孫の味が分からないので、おじいちゃんと呼ばれてもピンと来ない」と言つて居るのを聞きまして、昨年の私も同じ思ひでした。皆様の祈りに応えられて、泉も今日まで守られて参りました。祈つていただいておりました姪の亮子も、

昨年三月結婚致しまして、長崎県の郷里に居ります。町の保育所に勤めて居りましたが、二月に男児を与えられて感謝して居ります。三月で退職して、育児と家事に専念し度いと言うて居ります。主にある愛をもつてお祈りいただきました事を感謝致します。

三月の集会の予定を申し上げておきましょう。

毎週火曜は大濠公園教会で集会の御用に当たりますので、終日留守に成ります。木曜日は午前十時から木曜会を致して居ります。「信仰は聞くより出で、聞くは神の言葉による」とあります。聖書を深く読み、礼拝だけで無く、神の言葉を聞く機会を多く捕えて、信仰に固く立つ者と成りましょう。

二一日礼拝後は北九州地区の総会が小倉鍛冶町教会で行われます。

二四日午前十時から婦人会第二部の集会を致します。色々な事情で婦人会の例会(日曜日午後)に出席できない方々の便宜のために致します。どなたでも自由に御出席下さい。

二八日第一礼拝は休みます。当日、私は大濠の御用に参ります。

主の豊かな御祝福をお祈り致します。

○ 昭和四六年五月(十七)

「その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と心のかたくなことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。そして彼らに言われた、『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。』

信じる者には、このようなるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。』」

(マルコ十六・十四〜十八)

週の初めの日、朝早く、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、イエスの屍体を納めた墓に来て見ると、墓石はころがされて、主はもう甦られた後でした。御使は「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスをさがしているのであるが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらん下さい。ここがお納めした場所である。」と告げました。マリヤ達は死人が甦ったと聞かされ、驚きと恐怖で誰にも言いませんでした。ただ主と一緒に

居た人々が泣き悲しんでいる処へ行つて、それを知らせました、信じませんでした。

二人の弟子が田舎へ歩いて居る時、主イエスが御自身を現し給いました。この二人も行つてイエスが甦り給うたことを話しましたが信じませんでした。その後、十一弟子が食卓について居る所に主が現れて、彼らの不信仰と、心の頑ななことを、お責めになりました。甦られたイエスを見た人々の言うことを信じなかつたからです。

この事はペテロ、ヨハネ、トマス等の時代で、今から二千年前の出来事でありました。私共は「もし、私とその時代に生きて居たら、そんな不信仰になつたり、頑なにならなかつたでしょう」と思います。しかし、今はどうか？その後、使徒達は聖霊に満たされて、主イエスが死人の中から甦られた事を力強く証しました。また、その後の世々の聖徒達は、甦り給うた主に信頼し、主に触れて、「実に主は甦り給ひ、今も信仰をもって依り頼む者にその能力を現わし給う」と証して居ります。宇宙旅行時代と呼ばれ、技術革新時代と呼ばれる今日においても、天においても地においてもいっさいの権威を授けられ給うた主は、信仰を持って依り頼む者にその能力を現わし給います。

私共はペテロ、ヨハネ、ヤコブよりも多くの証を耳にし、

甦り給うた主の御業を、身をもって体験し、目に見た人々の証をより多く聞かされて居ります。それで私共は彼等よりも素直に甦り給うた主を信じて居るでしょうか？彼等より柔らかい心で、この主を信頼して居るでしょうか？

彼等の時代は未だ文化が開けて居なかつたから、今日は主に依り頼まなくても、科学技術で、経済的に、社会的に、政治的に解決できるでしょうから、その方が自然で、手取り早いかからと、思つて居ないでしょうか？仕事が忙しくて、教会へ行つたり、聖書の様な古典を読む暇なんか無いなどと、考へて居ないでしょうか？マリヤ達の様に墓の中の主に目を注いで居ないでしょうか？私共の生活の中での考え方、物の見方、価値観、生活設計、人間関係等すべての点で、主は甦り給うたと、理性ではわかつて居るでしょうが、無意識のうちには、心のどこか隅で活ける主を疎外し、無関心になつて居ないでしょうか？私共の様々な状況の中での生活態度、思考、行動姿勢等がそれを示して居ります。今日はもう一度へり下つて、甦り給うたイエスを見た人々の言うことを信じて、活ける主の前に歩ませて頂きましょう。

黄金の季節と呼ばれる青葉の五月となりました。その後、主の御手に守られて居られることと思ひます。私共も主の御手に支えられて御用に当たらせていただいております。

教会境内拡張のための隣接地四五・一五坪の購入手続きも
終わりました、このための特別献金も三月末日現在で、同封
報告書の通り豊かに与えられまして感謝いたしました。支出
合計を書き漏らしましたので記入下さいます様お願いいた
します。皆様のお祈りを感謝致します。残高(三百五十七万三
千七百十三円也)は、第二期計画の会堂改築の基金として保管
して居ります。信仰の幕屋を張り広げて、主を崇める会堂を
与えられる様お祈り下さる事をお願い致します。そのため
も、私共一人一人が証詞に満たされ、祈り深く主の御愛に満
たされて、主にお従いして参りましょう。

四月十二日早朝、大蔵川で次の姉妹達がバプテスマを受け
ました。

森岡 富栄 国分 恵子 安永 倫子 大場 美智子
水村千恵子 酒家真知子 国分 嘉子 岡山 みどり

(敬称略)

主の十字架の死と復活により、新しい生命に入れられまし
た。いよいよ深く主を知り、主の御愛の内に成長される様、
皆様の祈りと主に在るお交わりに加えて下さる様お願い致し
ます。



昭和46年4月12日 洗礼式 (於・大蔵川)

若松の浅川から礼拝に木曜会にと励んで居られた村上要子
姉は、ご主人の転勤によって、広島へ転居されました。よき
教会が与えられて、主に従っていらっしゃる様お祈り下さい。
五月二三日の礼拝の後で、受洗十年、十一年(昭和三五年、
三六年受洗者)の方の感謝会の予定に成って居ります。予定に
入れて是非お残り下さい。

六月二十日は地区の講壇交換で、今年も若松浜町教会の佐藤先生が御用に当たられます。

私は小倉日明教会で御用させていただきます。
主の豊かな御祝福を祈ります。

○ 昭和四十六年八月三日（十八）

「主に信頼する者は、動かされることなく

とこしえにあるシオンの山のようにである。

山々がエルサレムを囲んでいるように、

主は今からとこしえにその民を囲まれる」

（詩篇一二五・一〜二）

聖名を崇め奉ります。暑い日が続いておりますが、「土用半に秋風が吹く」と言われて居ります様に、秋の訪れも近いものと楽しみになります。

藤村荘七師の記念の聖会と、青年研修会に出席するため、此処御殿場に参りました。静岡沼津では蒸し暑い日でしたが、御殿場へ参りますとスーツと汗も干いて、新鮮な緑の木の間を吹き抜けて来る風も爽やかで、扇風機も扇子もありません。

この一ヶ月も主の聖手に豊かに守られていらつしやうと思ひます。木曜会では今、黙示録二章で、エペソの教会に

ついて教えられて居ります。エペソの教会は、業と労苦と忍耐を主の前に尽くし、正義感に満ちて、悪い者を許しておかず、霊眼が啓らかれて、偽りの使徒を見破り、主の名の為によく励み、忍び通した立派な教会でありました（黙示録二・一〜三）。しかし、軸が抜けた車の様に、最も大切な初めの愛を離れてしまいました。そのため、どんな立派な教会であっても、全部が駄目になりました。私共も神なく、キリストなく、世に在って、望みなき者でありました（エペソ二・十一〜十二）。そんな私共が主の愛にふれた時、恵みに感じて謙虚に主を愛し、喜んで主に全てを尽くしてお従いして参りました。しかし永い間、主の御愛の中におらしていただくと、馴れるともなく馴れて、感謝も喜びも消えて、すべて為す事が事務的となり、お勤めとなり、主に対して心のこもらない生活となり、義理や人の手前、努めて頑張つて、熱心になり、その熱心や努力を認められ、酬いられると天狗になり、他人が認めなくなり、見ゆる所で酬いらなければ、不平だらだら（口に出さなくとも心の中で）、弱い人、足らない者を審く様になります。聖書もお勤めで読み、心が固くなっておりますので、何の感激もなく、祈りに能力がなく、形式になり、聖書知識で冷たく人を審き、集会に出るのも億劫になり、他人に義理立てに、または他の面当てに、あるいは牧師のために出てあげる、

礼拝に出ても人の服装や態度が気になったり、讚美も言葉の上だけで、心も躍らなくなり、献金とは言いながら、自分の大切なお金を取られる様な思いになり、礼拝を守る事は損な事と思われて参ります。いつの間にか初めの愛よりも、お金や物や、仕事、自分や家族が大切になつていっているのではないのでしょうか。

どんな熱心も忠実も犠牲・献身も、愛に根ざし愛を基として、主の愛からほとばしり出たものでないなら、却つて災いであり、呪いとなります。

愛に由つて働く信仰だけが尊いのです(ガラテヤ五・六)。どんな素晴らしい信仰も、愛に由らない信仰は空しいものです(第一コリント十三・一〜三)。それで私共は、日々主の愛に根ざし、愛を基として生活する事によつて、キリストの愛の深さ高さ広さを知り、神に満ち満ちているものをもつて、満たしていただきたいものです(エペソ三・十七〜十九)。それで主はエペソの教会に対して、あなたは何処から落ちたか思い起こし、悔い改めて初めの業を行いなさいと、勧告を与えておられます。私共も今一度、自分を正直に主の前に省みると同時に、何処から落ちたかを思い起こしたいものです。若し、主の愛に留まつて居りますなら、愈々、恵みに感じ、感謝をもつて、謙つて主にお従いして、主の愛に応えて参り

ましよう。主の愛は永遠に変わりません。

「山は移り、丘は動いても、

わがいつくしみはあなたから移ることなく、

平安を与えるわが契約は動くことがない」

(イザヤ五四・十)

ただ、私共と主の間を妨げるものがあり、主の御愛から私共を引き落とそうと悪魔(又は悪の霊とも言う)が吼え猛る獅子の様に、私共の隙を狙つております(第一ペテロ五・八)。思わず知らず、遠く主の御愛を離れた事を知つたら、何時、何処でも、直ちに悔い改めて主に立ち返り、初めの業を励みましよう。主は灼ける様な思いと愛をもつて、今もあなたの心の戸を叩いて居られます(黙示録三・二十)。主は門を開いて待つていて下さいます(黙示三・八、イザヤ四四・二二、イザヤ五五・六〜七)。

主はあなたを能力をもつて屈服する事のできる方です。只、貴方を愛する愛の故に、自分から主の声に耳を傾け、戸を開き、主のもとに帰る迄、忍耐をもつて待つていて下さる柔らかな方です(雅歌二・七)。私共も主の愛に応えて喜んで悔い改めて、主の愛に帰り、主の愛に應える日々であり、主の愛に押出された奉仕でありたいと思えます。唯、私共が主に対する自分の冷ややかさに言訳したり、辯解して、真の悔い改め

を致しませんならば、燭台をその場所から取り除くと仰せになります。燭台は教会(黙示録一・七)です。教会はキリストの体であり、キリストはその首であります。そこで活ける主に信仰によつてお逢いし、活ける主の声を聞く、今日の私共に取つて最も大切な生命と能力の源であります(第一ペテロ一・八、九、出エジプト記二九・四二)。

エペソの教会はエルサレム教会が迫害で散らされた後、それに代わる教会として栄えました。この主の勧告に従つて悔い改める事がなかつたのでしょうか、やがて消滅したと伝えられて居ます。歴史的にも明らかに主の言葉の厳しさを教えられます。それで私共も毎日主の前に静まる時を与えられて(ヘブル三・七、十五)、主の勧めに従いましょう。その時、私共は日々新たにされ、主の愛に生かされて、生命に溢れた日々を送らせていただきます(第二コリント四・十六、十八)。

これが勝利の生涯の秘訣であります。勝利を得る者は、神のパラダイスにある生命の木の実を食べる事を許そう(黙示二・七)。この勝利とは、疑い、恐れ、言訳、辯解に勝つて、悔い改める事です。どんなに無力な者、失敗した者でも、勝利者となる事ができます。もし貴方が未だ主の愛がどんなものかご存知ないのでしたら、信仰に由つて、主を深く知つていただきたいと切に願います。と申しますのは、主は実に素

晴らしい方で、この主の愛を知らなければ、誰でも人間として真に活ける事ができません。また、主の御愛を知つて初めて、愛とは何であるかを知る事が出来ますし、意義ある人生を送る事が出来ます。信仰は聞く事から、特に神の言葉を聞いて居る間に、信仰が芽生え成長して参ります(ローマ十・十七)。ですから、励んで集会に出て、神の言葉を聞き、聖書を良くお読みいただき、祈りをもつて親しく主との対話をしていただきたいのであります。求める者に主は必ず御自身を現して下さいます(歴代志下十五・二)。どうか、あなたが第一ヨハネ四章十六節の様に、神の愛を知り、かつ信じてこの世に勝つ人生を全うされます様にお祈り致します。

主の豊かな御祝福を祈ります。

○ 昭和四八年十二月(十九)

「苦しみにあつた地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光栄を与えられる。『暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照つた』 (イザヤ九・一、二)

今年も残り少なくなり、主の御降誕を記念する日も近付いて参りました。主がお生まれになった当時、神の民であるイスラエルの一部族のユダヤは、ローマ帝国の統治の下に在りました。ユダヤの国王ヘロデは、国王でありながら、何の権力も能力もなく、民の苦悩を思わず、自己の栄耀栄華を求めて居りました。神を畏れる者なく、教をなす祭司もなく、律法もなく、長老、祭司、学者も形式化した宗教行事に明け暮れており、民は誇りもなく、希望もなく、苦しみの暗に閉ざされておりました。二十余年前、敗戦当時の虚脱状態、占領軍々政下に在った重苦しい日々を思い出します。(キリスト教主義による占領でさえ、あのような状態でした。これが全然キリスト教の影響のない異邦人の占領下では、どんなであつたでしょうか?)

しかし、時満ちて主イエスは、ユダヤ人の王、権力と能力をもつて敵を防ぎ、民を救う王として生まれ給いました。そのおとずれを聞いて、ヘロデ王もエルサレムの住民も、大いに恐れおじまいました。

しかし、主はその後三三年の間、叫ぶ事なく、声を上げる事なく、その声をちまたに聞こえさせず、また、傷ついた葦を折る事なく、ほの暗い灯心を消す事なく、真実を持って道を示し、衰えず、落胆せず、遂に道を地に確立し給いました。

私共も神なくキリストなくこの世に在って希望なく、契約に与りなく、肉の割礼ある者から無割礼と称えられ、苦しみと暗黒の中に在りましたが、今は主の十字架の尊い血に贖われて神の子とされ、甦り給うた、活ける主の御愛の手により、私共を憎む者の手から、敵の手から救い出し、常に活ける希望を持って、清く正しく、御前に恐れなく仕えさせていただいております。

この一年、国の外に内に、色々と事の多い一年でありました。ベトナム戦争、中東の紛争、パリ会談、チエコへのソ連の武力干渉、米国の黒人問題、基地問題、政治の腐敗、大学紛争、物価値上、米ぬか中毒事件等々、何一つ希望を与えるものはありません。遠い処の問題が何時私共の家庭の問題となり、生命に関わる問題になるか、予測できません。どういう理由か詳細を知りませんが、英知を誇りとし、将来の国の指導者をもつて任ずる大学生が、表現の自由を主張し乍ら、他人の自由を踏みにじり、ヘルメットをかぶり、角材を振って学生同士が叩き合うその姿には、最早解決の道も救いの希望もありません。今、日本も世界も暗黒と死の陰に在って悩んでおります。

この暗黒の中にも、ベツレヘムの空に輝いた一つの星の下に、生まれ給うた救い主イエスによって、真の平和な解決の

道がすでに開かれて居るのです。

「ひとりのみどりごがわれらのために生れた、

ひとりの男の子がわれわれに与えられた。

まつりごとはその肩にあり、・・・

そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、

・・・今より後、とこしえに公平と正義とをもって

これを立て、これを保たれる。

万軍の主の熱心がこれをなされるのである」

(イザヤ九・六―七)

クリスマスを迎えるに当り、東方の博士達が捧げ物を捧げて、幼児イエスを馬槽に拝し、救いの喜びに溢れました様に、先ず私共一人々々が主の前にひざまずいて、救い主と仰ぎ、救いの輝く光の裡を歩み、祖国のためにも全世界のためにも、すべての人を照らす真の光が照り輝いている事を告げ知らせましょう。

また、このような状況の中で、それぞれの家庭に於いても、職場に於いても、色々な問題があります。状態を見れば解決ができないではないかと、心騒ぐ事もあります。事情や状態を見る時、愚痴やため息しか出ないような問題もあります。何とか解決しなければと、あせればあせる程疲れてしまいません。

しかし、すでに主が私共のくびきと、肩の杖と虐げる者の鞭とを、十字架の上で折砕いて下さいました。甦り給うた主が今も能力ある勝利の右の手を以って、解決し守って下さいます。信仰をもってこの主に信頼致しましょう。

主イエスの恵み、父なる神の御恩愛と聖霊の深き交わりが、益々豊かにありますようにお祈り致します。

福岡大濠公園教会信徒宛牧師通信

○ 昭和四三年十二月十六日(一)

「ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたが一つの靈によつて堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために力を合わせて戦い」
(ピリピ一・二七)

日頃、皆様お一人お一人と、お目にかかり、心を合わせて、主の前に祈る時を得られないのを申し訳なく思いながら、一年有余過ぎて終いました。

クリスマス前でございますが、お手紙を差し上げる事に致しました。後任の牧師先生をお迎える事につきましては、日頃、皆様お祈り下さっている事と思えます。皆様のご希望



福岡大濠公園教会 改築前(旧会堂)の皆さん

や御意も伺いながら、主の聖旨が何であるか？主の御導きがどこにあるかを、更に求めて参りたく思いますので、お手紙でも戴けましたら幸と存じます。

今迄の概略を申し上げますと、既にこの報告致しました様に、今年春、姫路の末永先生に来ていただけたらとの願いをもって、藤掛兄と姫路に参りまして、姫路福音教会役員の方々とご相談致しましたところ、「末永師は姫路福音教会に取っては、掛替えない、言わば親のようなもので、教会員は霊の息子、娘です。たとえ床に寝た儘でも、姫路に居っていただかなければならない方ですから、例え福岡と言えどもお送りできません」と言われました、これ以上無理をする事は、教会に大きな痛手となり、主の聖旨に叶わない故帰りました。

末永師の御紹介もありまして、田添師は如何との事でしたので、役員会に御紹介致しました。しかし、私も未だ田添師と面識ありませんし、その信仰も知りませんでしたので、八月、青年研修会を機会に説教を聞き、お目に掛かりまして、立派な方でしたので、主のお導きでしたら、福岡にお迎えしたらと思ひまして、田添師に福岡の願いを申し上げて、田添師が主の導きを確信して使命を持って来ていただけるように、充分時間をかけて祈っていたく様にお願ひ致しました。しかし、福岡も今の様な状態を長く続けるわけに参りませんの

で、今、田添師に問合せております。近い内にご返事戴けるものと思っております。

なお、続いて主が選び、大濠公園教会のために備え給うた器を、祝福のうちに与えていただける様に、お祈り下さい。

この大濠公園教会が名実共に、聖書的な教会となるように祈っております。神を畏れ、愛にも信仰にも行状にも、常に主の血を以って買い給うた者にふさわしく、常に活ける主と交わり、主の愛のうちに聖徒の交わりが深められ、再び主の来り給うを俟望む教会となる様、お互いに一つ霊によって堅く立ち、一つ心になって、内に外に働く(暗闇に働く)悪の霊との信仰の戦いを戦って参りましょう。

「今の時を生かして用いなさい」 (エペソ五・十六)

教会が無牧の状態である事は、親を失った家庭の様です。余り親がついて子供を可愛がると、いつまでも独立できない利己的な子供になります。却って早く親と離れた子供達は、苦勞も多いが、互いに助け合つて家を守り、早くしつかりした大人となります。

そのように、私共が与えられている信仰(例え小さくとも、弱くとも)を実際に活かして歩むためには、最も良い恵みの時だと思えます。信仰もって歩む程に強められ、信仰が増し加えられて参ります。どうか、主イエスの恵み、父なる神の御

恩愛と聖霊の深き交わりが、益々豊かに在りますように心からお祈り致します。

○ 昭和四四年十月三日 (二)

主が血をもつて贖い給いましたこの大濠公園教会を、皆様の祈りの内に今日まで支えられて参りました。その後、後任の牧師先生にと願つて祈りの内に信州諏訪で牧会伝道して居られる小林良雄師に、お願い致しましたが、先日礼拝でご返事を皆様に御知らせ申し上げました様に、御来福下さる事ができなくなりました。

先日、野沢温泉での教職研修会に参りまして、東京渋谷教会の藤村師に御息の和義師を福岡へ送つてはいただけないでしょうかと、ご相談申し上げたところ、和義はドイツで神学をやつてどうもはじめの信仰ではないので、実は私自身心を痛めておるので、折角の御要望ですが、お答えできかねますとの御返事でした。

更に主の導きを求めて参りたく願つて居りますので、どうぞこのために、続いてお祈り下さるようお願い致します。

○ 昭和四四年十一月二日 (三)

十月三日午前十時から田中重久兄次女潔子姉と中川実兄の結婚式を致しました。新居は、

千葉県印旛郡四街道町九五三―九 中川 実 潔子

で信仰生活を続けたく願って居りますので、皆様の内にお加え下さい。田中重久御夫妻から感謝を以って皆様によりしく申して居られます。なお、六日には日頃皆様の祈りのうちに覚えていただいております、折瀧和幸兄と岡崎タケ姉の結婚式を致しました。

式後、教会婦人会がお祝いの茶会を開き、新家庭の門出を祝福して差し上げる事ができて感謝でした。新居は

三重県度会郡小俣町西本町二七七六一

折瀧 和幸 タケ

です。新家庭のためにお祈り下さい。和幸兄からも、心からの感謝をもって婦人会の皆様はじめ教会の皆様によりしくとのお便りを戴きました。

藤井雅子さんも和幸さんの結婚式に参列の予定でしたが、御身体の都合(お目出度)で止められた由です。主の御祝福によつて安産できます様にお祈り下さい。

十二日礼拝後、折瀧鶴子奥様の記念会を致しまして、主の聖名を崇めました。私は松岡師を迎えての特別集會中で参加

できませんでしたが、召天記念日の十四日には、火曜会に参りまして記念の静かな一時を持つ事が出来ました。

十一月は七日から九日まで別府野口教会での特別集會の御用に当たり、続いて十五日まで静まって祈りの時を与えられたく願って居ります。

従つて十一月十一日の火曜会は休ませていただきます。十六日は、八幡での牧会三十年の感謝礼拝と感謝会を致しますので、大濠公園教会へは、十一月二十三日の礼拝に参ります。何卒右御承知いただきたくお願い致します。

○ 昭和四五年五月七日 (四)

新緑の格別美しい季節、今日この頃でございます。その後主の御手に守られて居られる事と思ひます。

去る三月二十九日、イースターの夜発つて四月二日からの連台聖会へ出席するため上京致しました。当時、東京の桜は冬姿そのもので蕾も固く小さく成つて居りました。五日朝帰りますと牧師館前の桜はもう五分咲きでした。やはり九州は南の国だなどしみじみ感じました。

伝道会の総会で色々協議がありました。特に心に留まりました事は、私共が与えられて居るこの尊い信仰を如何にし

て次代の人に伝達し、残すかの問題でした。聖書はこの点を何と語って居るでしょうか？

「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」
(マルコ一・十七)

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」

(使徒行伝一・八)

柘植師も寝食を共にして、主に従う事によって伝道者を教育されました。今日の時にも最も必要なのは、学者でも、説教者でもなく、主の証人ではないでしょうか？ エリシヤはエリヤと共に居る事によって神の人となり、イスラエルを主に導いて参りました。ガリラヤの漁民も船も捨てて主に従い、聖霊に満たされて活ける主の証人となり、ローマ帝国を覆しました。

四月十三日は福岡地区キリスト連合婦人会の総会がこの教会を会場にして開かれました。この福音が福岡の地にあまねく広がりゆく様祈りましょう。

かねて皆様に祈っていただいておりました折瀧師召天三周年記念聖会も、藤村師と松岡忠治郎師が御用に当たられました。

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」

(ヘブル十三・七、八)

神の言葉を語った指導者達とは誰でしょうか？ アブラハムであり、サムエル、ダビデ、イザヤ等、旧約聖書の聖徒達や、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ、テモテ等、新約の聖徒達であり、その後のルター、ウエスレー、バックストン、柘植、折瀧の諸師をはじめ、今日に於いても聖書を神の言葉として教え導いて下さる方であります。

絶えずこれらの聖徒達が、どの様に主にお従いしたか？ どの様に人々に神の言葉を語ったか、またその神の言葉を思い起こし、彼等の生活の最後を見て、その信仰にならいます。聖徒達を救い恵み給うたイエス・キリストは、昨日も今日もいつまでも変わり給いません。主は私共を聖徒と成すために選び召して下さったのですから、彼等の信仰にならって神の言葉に従って歩み、聖徒達と共に、あの栄光に満ちた神の国を継ぐ者と成らしめ給います。聖霊がこれを完成し給います。このような素晴らしい希望と信仰を与えられました。

十九日夕は食事を共にして、記念会を致しました。その席

で花田勇兄が教会を代表して、ねんごろな謝辞を述べて、皆様感謝をこめて捧げられた謝恩献金一、六二六、七一五円を、折瀧家代表として道守兄へ贈呈されました。

聖会の前から教会門前が下水道工事のため掘り返され、「菜種梅雨」の雨天続きでしたが、遠方此方から兄弟が集められ、恵まれました。

高崎市にお住まいの藤井雅子さんが女兒を安産されました。「主の言を信ぜし者は福なり・・・」(ルカ一・四五)から信幸と命名されました。心からお祝い致します。

大場はるの姉が、生松原の養老院から津屋崎の聖愛ホームへ移られました。

平野姉の御令息が大山でスキー中に大けがをされましたが、今は祈りに応えられて大変良く成られたそうです。続いてお祈り下さい。

平岡くまの姉も祈りに応えられて大変快方に向かい、時折庭を散歩されます由、先日お会い致しましたら、教会にも行きたいですが、長い時間は無理に成りましようと言つて居られました。特に耳が聞こえる様に祈つて上げて下さい。

所司奥様も、大変強められなさいました。藤村師とお訪ね致しました折は、庭に降りて居られました。続いてお祈り下さい。

三宅アヤメ姉も入院して居られますので、覚えてお祈り下さい。

五月の婦人会の例会は二二日に致します。婦人会の皆様祈つてご出席なさる様、お勧め致します。

主の豊かな御祝福を祈つて居ます。

○ 昭和四五年十月三十日(五)

十月半までは夏服で快適な気温でしたが、昨今は真冬を思わせる様な寒さに冬支度に追い立てられている始末です。皆様如何でしょうか？主の御恵みの内にあの酷い暑さの中も長い残暑の中も守られていらつしやった事と思ひます。

この夏は八幡の教会と合同で日曜学校の夏期聖書学校を津屋崎で開きました。二泊三日の間、交通事故や公害から解放されて、空気も水も美しい大自然の中で主を中心として楽しく幸せな日を送る事ができました。幼い児が生れて初めて親を離れ、友達と一緒にの生活の中で自分の生活をヨチヨチと歩き出して行く姿は、見ている者には涙ぐましいものでした。この体験が一人一人をたくましく独立へと成長させてくれることでしょう。

八月には御殿場聖会の最後の聖会と成りますので参りま

した。松岡師と色々な御用に与りました。百名余りの参加者が大変恵まれて全国に出て参りました。

九月には伝道会(柘植師によって創められた群)の教職研修会が、長野県野沢温泉教会で開かれましたので参りました。

各地で信仰の戦いを戦つて来た同労の先生方にお逢いして、今私が与えられている信仰が何と尊い、主の格別な恵みであるかを教えられました。

九月二一日は福岡地区教会連合婦人会で聖愛ホームを慰問に参りました。これで当番教会としての務めを殆ど全部果たす事ができまして感謝して居ります。

いよいよ秋もたけなわに成り、最も良い季節に成りました。秋の内に冬の寒さに備える様に、この良い季節に集會に励み聖書に親しみ、祈りの内に主との交わりを深め、人生の冬に對して充分に備えて、絶えず主の御愛の中に留まつて居りたいものです。

十一月の予定を早く御知らせ申し上げて皆様の予定に組み入れて頂く筈でしたが、私の個人的な用件のため今日に成りました事をお詫び致します。

礼 拝

火曜日

祈祷会

一日 野村

三日 榎本

四日

八日 藤掛

十日 野村

十一日

一五日 野村 十七日 榎本 十八日
二二日 榎本 二四日 榎本 二五日
二九日 野村

火曜日は特別の用件の無い限り、午前十時二十分頃には教會に来て居ります。御用の方は遠慮なくいらつしやる様お待ち居ります。

十一月の婦人会は二十日になります。

○ 昭和四五年十二月十七日(六)

師走の声と共に急に寒さが加わつて参りました。その後も、主の御手に守られていらつしやる事と思ひます。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」と仰せ給います主が、初めとなり終わりとなり給ひまして、今年も主の御降誕日も間近い今日まで、恵みと憐れみをもつて守り導いて下さいました。年の瀬を迎えて忙しければ忙しい程、特に、「静まつて、わたしこそ神であることを知れ」(詩篇四六・十)と仰せになる主の前に静まつて、神の御業を俟ち望んで参りましょう。

福岡大濠公園教會の牧者を早く与えていただきたく役員の

皆様と祈り、主の導きを求めて数名の方々に当たって参りましたが、道が拓かれないまま、今日に至りました。もう皆様よくご承知の事と思いますが、八十年前、バックストン師が信仰に由り日本に福音の使者として遣わされて、当時新神学によって生命を失って居た日本の霊界へ、新しく福音の生命をもたらされました。この生命の流れは主の恵みにより、植師、折瀧師を通してこの教会に受け継がれ、私共に与えられて居るものがございます。ドイツ神学で教会が福音の真理を離れて、社会活動や、政治運動に熱中して味を失った塩(マタイ五・十三)と成り果ててしまった今日、この聖徒達に由って伝えられた尊い信仰のために戦う戦士は、まことに得難いのでございます。

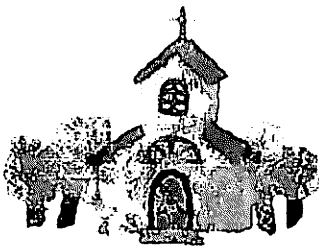
「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか(マタイ十六・二六)と主が仰せ給いました様に、主の血をもって贖い給いました教会が、信仰の生命を損する様な事が万が一にもありますならば、主の前に取り返しのつかない事でございます。この時代に、主が大濠公園教会に与えていらっしゃる使命の重く大きい事をよく御諒承下さいまして、主のご期待に添い奉る者と成るため、心を尽くし、思いを尽くし、愛を同じうして聖書を読み、

祈り、集会に励んで参りましょう。

先日(十二月七日)大濠公園教会役員代表と八幡前田教会役員一同と共に大濠公園教会の現状を検討し、祈り、大濠公園教会の要請に応えて八幡前田教会も主に在る愛をもって、私が両教会を牧会する事を諒承致しました。

就きましては、今迄は代務者でございまして後任者が決まるまでの留守番の様なものでした。これからは主がいつまでこの御用をなさせ給いますか分かりませんが、大濠公園教会の牧師として主の前に責任を持つ事に成りました。広域牧会で皆様の御期待に応える事ができかねる点が多々有る事と思いますが、主に在って全力を尽くさせていただきたく願って居りますので、皆様の祈り御協力をお願い致します。

主の御臨在で共に主を崇める時を楽しみにして居ります。
主の豊かなる御祝福をお祈り申し上げます。



四 教会誌「ぶどうの木」から

榎 本 和 義

父は生前よく言っていたことですが、なんでも良いからとにかく書いて置きなさいと。文章にして書き残すことで、主の御業を忘れず、恵みを覚えて感謝するようにとのことであつたのでしょう。と云つて、父はそんなに多くのものを書き残してはいません。父は書く代わりに説教で語り尽くしてました。教会のあかし集として「ぶどうの木」が発行されましたが、その中に残された父の原稿はそんなに沢山ありません。毎号、巻頭言を書いています。短いもので、内容も大体似たものとなつていきます。少ない原稿から以下に再録してみました。

別 離

榎 本 利三郎

十月二十日の夜、祈祷会が始まる前、ベンチに座つて静まつていた時であつた。Y姉が静かに一通の電報を手渡してくれた。別に心当たりもないので、宛名と発信局を確かめたが、

確かに自分宛にきた電報であつた。開封した途端、「ハハシス二四ヒソウギ コウキチ」と意外な文字が目に入った。「われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果し、信仰を守れり」(テモテ後四・七)、「ああ勇士は倒れたるかな」(サムエル後書一・十九)。



母・榎本しな

母も主の大きいなる憐れみにより、八十有余年の旅路を終えて、今は永遠の眠りに就いたので。何かしら「ホッ」とした安心感と、どんな最後であつたであろうか?どんな病気をしたのであろうか?等、瞬間的に頭の中を駆けめぐるのであつた。つい五ヶ月前に会つた時の様子が目に浮かんでくる。

先ず牧師館へ戻つて主に感謝して、直ぐに発つ事にする。集会はI兄に依頼し、二五日の御用のすべての準備を終え、駅に電話して寝台券の有無を問い合わせる。「高千穂」に一枚残っていたのを予約し、小倉駅へ急ぐ。十時三分、小倉を列車は離れた。寝台に横になつても眠れない。五月訪ねた時、枯れ木のようになつた母の姿に生きる一日一日が重荷のように思われた。座れば頭をガツクリ下げ、物を言えば頭を上げるがまた下がる。まるで小さなこもりのように背を丸め腰は曲がり、しわが深く刻まれて渋を塗つたような皮膚の色であつた。一息一息が残り少ない力を絞つている様で見るに耐えないようであつた。

いつしか眠り込んで目が覚めた時には、列車は姫路駅のホームに滑り込んでいた。急いでホームへ降りる。目の前を見覚えのある婦人が歩いている。まさか？と思つた時、その婦人も気がついて会釈した。やつぱりそうであつた。姫路福音教会の会員M夫人であつた。数分後、列車はひた走りに走る。しかし気持ちは、やはり、列車の速さが遅く思われる。

午後二時頃、母が父逝き後二十年近く暮らした家にたどり着いた。いつも「よう来たのん」、三河特有のイントーネイションで、笑みをたたえて迎えてくれた母はなかつた。駆け込むように座敷へ上がった。白木の棺桶が一つ、枕元の小机に、

足早く今朝着いた千葉の弟が、ローソクを灯し、線香を立てていた。棺の蓋を除けて母の顔を見る。平生より色白になつた母が首を曲げて窮屈そうに、しかし平安な表情で眠っている。「ただいま」と声をかけたら返事しそうである。しばらく物も言えない。ぼんやり母の顔を眺めていた。「お母さん、さようなら。長い間苦勞だつたね。有り難う。僕を生んで養ひ育て、主の御用に当たる者としてはぐくんで下さつて有り難うございました。さようなら」と心の中で繰り返した。母の顔が手に触れた。母は冷たかつた。「主よ、あなたの大いなるあわれみのうちに母を八二年の間、聖手をもつて守り、健全な身体を与え、祈りに応えて安らかに眠らせ給いましたことを感謝致します。願わくば、遺族の一人一人に魂の救いを成就して下さいますよう祈ります。主イエスの聖名によってお願い致します。アーメン」と祈つた。

しばらくして孫嫁のS子さんが来た。「おばあちゃんは二十日の日も元気で、夕方食事の時、どうもよく食べられないようであつたので、私が食べさせて上げると、美味しい、美味しいと喜んで食べ『今夜は早く寝るからのん』と言われて、間もなく床に入られました。おふとんを掛けて上げましたら、スヤスヤと眠られました。後で気がついたのですが、いつも夜の間に、おばあちゃんは暑がつてふとんをぬいでおられま

したが、翌二一日に覗くと、昨晚と同じ状態で眠っておられ、ただ枕が外れかかっていたので、そつと直して、朝食の用事にかかりました。よくおばあちゃんは『今朝はもつと寝ておくぞん』と言われ、八時頃まで眠る事がありました。今朝もそつとして、休ませて上げようと思いました。食事時間になつても目を覚ましなさいないので、もう起こしましよう、と、『おばあちゃん、おばあちゃん』と呼んでも返事がありません。あるいは、と思つて揺すつて呼んでも、返事がありません。脈は絶えていました。手も足もまだボカボカ暖かい程でした。お父さんは旅行で留守ですし、どうして良いか全くわかりません。医者は熱があるようだと言われ、どうして良いか全くわかりません。少しも痛みも苦しみもなく安らかに眠られました」と、臨終の様子を詳しく知らせられて、感謝の祈りがあふれてきた。「S子さん、長い間有り難う。私達は離れて住んでいて、母に何一つしてあげる事ができなかったが、あなたは私達に代わつてよく優しく母をいたわつてくださつて有り難う。どんなに母が慰められたかわかりません」とS子さんに感謝した。

若かりし頃の母の思い出が、次から次へと思ひ出されるかと思えば、五ヶ月前会つた時も「言うことなし、ただ感謝、この上は長患いをしないで、人手を煩わさないで死にたい」

と語つた言葉がまだ耳に残っているようだ。主はその心の願いに応えてくださつて、ただ感謝である。



兄弟揃って雲仙へ（1989年・平成元年）

この一文は教会誌「ぶどうの木」となる前、昭和三十九年十月に発行された文集（題名なし）に掲載されたものです。母親の父にとつて、母親の死は予想し得たこととは言え、ショックだったようです。父は説教のあかしにもたびたび母親

のことを語っています。母親から受けた感化が大きかったようです。続けて、母親の死に際して詠った父の短歌を、同じ文集から再録しておきます。

「旅路にて」

車窓風景

○ 早々と 秋訪れし 近江路に

稲干す馬の 立ち並ぶ見ゆ (10・22)

車内風景

○ 母も子も 深きねむりに おちいりて

窓辺に秋日の うららにさす (10・22)

「ひかり」号を眺めて

○ 白蛇の 這うるがごとく 流れゆく

新幹線に 夕日の映ゆる (10・25)

六十九歳の叔父を送りて

○ ふるさとの 駅のホームに たたずめる

叔父の姿ぞ 淋しくもある (10・25)

「母逝きて」六首

○ にこやかに えみをたたえし うつしえに

ははの心の みちたれる見ゆ

○ 幾たびも 山坂越えし 母なりし

おもてにふかく しわのきざめる

○ たたかい おわりし母の やすらぎに

悲しみのうちに やすけくもある

○ 物置の 上にたわわに 熟れし柿

母のすさびの あとぞしのばる

○ ふるさとの 変わらぬ山の たたずまい

母なきあとの さびしくもある

○ 母おくりて 家路にいそぐ ふるさとの

ホームに風の 冷たくも吹く

父は折に触れて短歌を詠むことがあったようです。「ぶどうの木」一号には、「旧稿から」と題して、十六首ほどまとめて

掲載しています。これらの短歌がいつ頃のものであるか、分
かりません。学生時代から、献身・修養生として過ごした頃
のものと思われれます。

(学校からの帰途、峠道にて詠める)

○病みたもう 師を思いつゝ 祈るかな

到津の山に 秋はふけゆく

○チチと啼く 小鳥の声に 秋ふけぬ

余りに静かな 峠路かも。

○登りかねつ この坂道に 今日も亦

祈りて歩まん 秋更けき日

○山拓く 人の腰すえ、煙草喫む

峠路の なつかしくもある

○青葉の頃 博多の海に たゞずめば

はるかにかすむ 海の中道

○ふるさとの 山恋しくも 思うかな

青葉の時は 過ぎて行くらし

○さえ渡る さつきの空に ひるがえる

五月のぼりの なつかしくもある

○メーデーに ドンタクさわぎ おもしろき

博多の町は 不思議な町

○ふるさとを 離れて遙か 筑紫路に

さまよう心 淋しくもある。

○これよりは 強く立たなん 人のため

国のためにも 生命も捨てゝ

○ころころと、ころがる子等の 愛らしさ

芦屋に過す 春の一日

○余りにも 淋しき心 春の日に

子等とたわむれ 今日を送りぬ

(一九三二)

○わが生命 献げしものと 知りつゝも

いつしか守る 小さき己を

○おゝ神の 聖前に立つ日 来りなば

いさみて昇らん 天つ我が家に

○おゝ神の 聖旨ならでは 雀すら

地には落ちざる 天の下かも

○身の程を 知らぬ鳥と 知りつゝも

止むに止まれぬ 神のめぐみに

「ぶどうの木」一号に、「Y・E」とイニシャルで署名した「我家の夏休み」と題した一文があります。これはNHKが募集したラジオ番組の課題に応募して入選し、放送されたものです。応募資格が主婦を対象としたものだったのでしようか、母の名前で応募しています。筆者は紛れもなく父でした。

わが家の夏休み

アルバイトして整えた、チロルハットから登山靴までひとかどの登山家の格恰して、「行って参ります」と多くの知人や友達に見送られて、重いリュックを軽々と担いで富士登山に出かける迄にたくましく成長した長男の姿を見て、言い現せない感謝で心がパイに成るのです。

中学生の弟より一足早く夏休みに成った大学生の長男は、今月はじめから夏休みになって、兄の来るのを首を長くして西宮の下宿で待っている大学生の弟と一緒に、郷里で孫の成育を唯一の楽しみに余生を送って居る祖母を、久しぶりで訪ねて程近い富士山へ登り、五湖巡りをしようとの計画です。懐中には二人の旅費一切と、リュックには必需品の他に些やか乍ら祖母への心こめたプレゼント、親戚への贈物も詰合わされて居ります。

明るく夏休みを迎えて十二年前のわが家の夏休みは、私ど

もにも、子供達にも忘れられないものと成りました。長男が小学五年、次男が四年生、三男がその年の三月に生れ、五月には次男が猩紅熱で心配をし、三男は母乳が無くて人工栄養で、当時インフレの余波を受けて、少ない収入で日々の生活が精一パイでありました。七月廿日になって、いよいよ夏休み。「○さんは海へ行く、Xさんは山へ行く、△さんは田舎へ行くって・・・」と友達の夏休みの計画を聞いて来ては、語る子供達でありました。

ジリジリと油汗がにじみ出る様な暑い此の工場町の、しかも風通しの悪い家で、一夏を過ぎさせるのは余りに可愛そうでありました。浜辺で夏は涼しい郷里では、子供を連れて私の帰るのを母は待つて居りました。然し旅費として費えるお金は一文も有りませんでした。せめて日帰りでも街を離れて海辺に連れて行き、あの広々とした海原を渡るきれいな空気を腹一パイ吸わせ度いのが、親の切ない願でありました。

「此の夏休みには海水浴へ連れて行って上げるよ」と、此の一言は子供達をどんなに喜ばせたかわかりません。寝言にまで「海だ、海だ」と言いつづけて居ました。然し毎晩子供達が寝静まるのを待つて、主人と一緒に子供の夢を叶えてやって頂き度いと祈つては、色々と計画を捻るのでありました。

近くの泳げそうな海へ日帰りで行くには、○○円かかる。

福岡まで行けば汽車賃がXX円。同じ汽車賃を出すなら一足伸ばして福岡の従妹の家に泊って近くの百道の海水浴へ行けば一週間程居れる。けれども、それには土産にいくら、お八つに幾らと、財布を前に計算をする。あれにすれば費用はかさんで割合効果が無い。此れにすれば後の生活費が底をつく。今から見れば僅かな費用であつたが、出せないで苦心惨澹したものでありました。とうとう福岡の従妹の所へ泊る事にして、寝たのは午前二時でありました。

翌日は子供達も揃って出かけました。やっと苦心の末、海で一週間の過し満足して帰つたのでありました。

数年後、次男が中学二年のある日「僕は夏休みが来ると思ひ出す事が一つある。小学校四年の夏休み、いよいよ明日は海へ行けると嬉しくて眠れなかつた。蚊帳の外では財布を前にお父さん、お母さんがお祈りしてはあれにしよう。もう止めよう。こうしよう・・・とおそくまで相談して居つたので、僕も明日行けるだろうかとヒヤヒヤして居つた」と語つたのを忘れる事が出来ません。今はその次男が兄と一緒に何の心配もなく此の夏休みを、一足一足に感謝をこめて富士を踏みしめて登っている事があろうと思うと、感謝で胸が一パイであります。

一九六三年七月

ここに触れられていることは、夏が来るたびに思い出されるものです。両親が裸電球の下で、財布を前にして、ひそひそと祈っている様子を蚊帳の中から見ていました。どんな成り行きになるか、心配しつつ、いつしか眠り込んでいました。主は祈りに答えて、一週間の海辺での夏を過ごさせて下さいました。



昭和31年頃の御一家（新年聖会の看板の前で）

次の一文は「ぶどうの木」十号に掲載された旧会堂の思い出です。両親にとつて、新しい会堂と牧師館が与えられたことも大きな喜びでしたが、旧会堂と牧師館は物資の乏しいときであっただけに、また、開拓伝道の労苦がしみ込んでいるものだけに、格別深い愛着がありました。

主の恩寵の思い出

榎 本 利三郎

旧会堂の思い出は、私にとつて「主の恩寵の思い出」であります。

昭和十二年頃、「月一回の家庭集会では満たされない、何とか八幡で礼拝を守り度い」との願いと渴きが起り、取りあえず河本商店の二階六帖二間を集会所として開放して頂き、毎日曜日、福岡から折瀧師、野村兄と私が交替で来て、日曜学校、礼拝、伝道会をし、その夜九時半頃の汽車で帰って居りました。

当時福岡まで汽車で二時間はかかりました。博多駅から十時半頃の電車で呉服町まで出て、そこで乗り替えてでしたが、電車も少ない深夜で暇取って、冬等は寒風に吹きさらされて手足がしびれる様に冷え切っていました。身体は主の愛でポカポカしていた事も、今はなつかしい思い出の一つとなり

ました。

是非定住の牧師をとの祈りが積まれ、昭和十四年十一月三日に八幡へ遣わされて参りました。河本兄が大正町に牧師住宅用として新築の家を予め用意して迎えて下さいました。集会は今迄の通り河本商店の二階で、外から直接昇れる階段がつけられました。昭和二十年八月八日の空襲で焼ける迄礼拝を守らせて頂きました。又ひどい戦災の中を信者の家族も全員無事に守られ、感激致しました。

戦災跡に佇み、「いつの日か、此の所で又聖名を崇める礼拝を守らせ給え」と祈って、初代教会の信者が散らされた様に、東に西にと夫々生活の場を求めて散って参りました。私共も家族を御里へ疎開させ、私は小倉の西南女学院が旧陸軍の将校宿舎を貸してくれましたので、そこに住んで、戦災に会わなかつた荒生田、昭和町方面で家庭集会を開きました。河本兄も戦災跡に必要に迫られ、平屋建の家を建てられましたので、早速座敷を開放して頂き、日曜礼拝を守る事に致しました。昭和二二年には家族も小倉へ呼び戻しました。

或る日、河本兄が「小さいマッチ箱の様な、箱だけの家ですが主の御用に用いて頂けますでしょうか？」と謙虚に旧会堂の現場へ案内して下さいました。私は河本兄が工場を建てたりして居られるのは知って居りましたが、教会を建て、居ら

れる事は知りませんでした。戦災住宅しか建てる事を許されない、資材の無い中を色々と苦勞をして資材を集め、当時としては素晴らしい会堂と牧師館が建てられて居りました。思いがけない時に、木の香も新しい会堂の前に立つて感激と喜びで胸がつまりました。「壁も土壁で作りました」と、建物の隅々まで心こめて建てられました。

昭和二二年九月第一日曜日に献堂式を致しました。河本兄が献堂の辞を読まれました。献堂の辞の一句一句が福音に与かった喜びに溢れ、此の建物は小さいが、福音が地の果てまで宣べ伝えられるため用いて頂ける喜びを、謙遜に述べて居られるのを忘れる事が出来ません。

会堂は三間×四間半の十三坪半、総二階で、玄関が約一坪、電車通りから向って左隅に五、六段のコンクリート階段の上にあります。玄関のドアは自在蝶番で、一寸押せば内からでも外からでも開く便利なものでした。

左の壁面に下駄箱があり、土間に質子板が敷いてあつて会堂へ入りました。会堂には白石大工手造りのベンチ十脚が二列に並んで居りました。正面講壇の向って左は腰高窓、右はドアがあつて階段室となり、そこから階段を下りると牧師館玄関の板張りになつて居りました。

窓枠、柱、建具は緑色で塗られて居りました。何年か後、

広田兄が塗替作業をして下さった事がありました。つい昨日の出来事の様になります。



旧会堂講壇前で

戦災地にポツンと建つて、目立つた建物でした。中央町の交番で道をたずねたら、教会の西、．．．南へ．．．と道標の代りにされたとの事です。

教会の看板は巾十五糎、長さ四十糎位の厚板に野村兄の筆で墨痕鮮やかに書かれた、教会と日曜学校の二枚が並べて打付けてありました。後に小さい看板ではハッキリわからないからと、当時三角柱形の看板を献げた方がありました。濃紺の地に白で「日本基督教団八幡前田教会」と書いてありました。何人かの方が看板を見て教会に来られる様になりました。

風で倒れたりして、その看板も行方不明になって居りました。やっと、今の立看板を取り付けました。

つづいて、夜看板が見えないし、門から玄関迄が暗いので、照明を兼ねて看板灯が与えられました。初めは門柱も無く、朝顔の蔓の手の様に割竹を並べて建てた柵を作った事もありました。長い間、電車道から教会玄関までの間が、雨が降るとぬかるみになり、板を並べてみたり、煉瓦や石を置いたり苦勞の種でした。玄関の処が増築されて新しい玄関が出来て間もなく、コンクリートの舗道が出来て雨の日も心配がなくなりしました。後に練瓦の門柱が出来、塀が出来ました。練瓦塀に掲示板をはめ込み、集案案内、標語を書いた事もありました。その練瓦塀の内側へ「犬の他小便するべからず」と書いた禁札が張られた事もありました。

門柱は出来ても、門扉が付いて居りませんでした。ずっと後に、丸橋兄の關係で陣山の鉄工所で作ってもらいました。

屋根材料の無い時でしたので、黒鉄板で葺いてありました。毎年タールを塗れば下手な瓦より長持ちするとの事で、毎年塗って居りましたが、何日頃からか雨が降ると漏って困りました。時には知らぬ間にふとんの上が濡れて居たこともあり、夜でも激しい雨の時は飛び起きて洗面器、鍋、タライ、バケツ、あらゆる物を持ち出して並べたものでした。

一度亜鉛鉄板で葺き替えました。此の頃まだ鉄板が貴重な頃でしたが、瓦棒を入れてかっちりして頂いたので、それから後は雨が降っても安心して居りました。屋根の一番北側一列が足りないの古い板を使いました。後に講壇正面の壁に雨漏りによるしみが出たのが、印象に残りました。

会堂のベンチは文字通り腰掛けで、脚も可成高く、奥行も広くありませんでした。然しあの当時、新しい会堂に新しいベンチが並んでいるのを見るのは、夢の様でした。ベンチが三種類ありました。黒くて重いベンチが、会堂が出来た時、白石大工が手造りで作った檜材を主としたもので、此れが十脚あり、次に手軽な黒いベンチ、これは尾倉町の長谷川建具製作所で作られたもので、主として杉材が使われて居ります。黄色いニス塗りの重いベンチが最後に作られ、主として檜材を使つて丈夫に作られて居ります。初めベンチの背の後に蝶番で板を取付け、金具で止める折たたみ式の聖書台が付けてありました。金具が取れたり蝶番が外れて困りました。最後に大野兄に頼んで、ラワンで丈夫な板をしっかりと固定してもらいました。

会堂の床が三色に分れて居りました。最初の十三坪半の床は松板でした。西側と南側へ増築した時檜板を使い、ニスを塗りました。西側は赤黒く、南側の床は教会の出入口で、二

スが剥げて木地が出て居りました。

はじめ十脚のベンチを五脚ずつ二列に並べましたが、風通しの良い集会でした。だんだん祈に応えて礼拝出席者が増えて、風通しが悪く成って参りました。更に十脚の軽いベンチが与えられました。奥行が狭いので、割合に納まりました。それでも、二、三脚は窓辺に沿って置かなければなりませんでした。

西側へ一間増築しまして、講壇に向つて左に小さい部屋が出来て、初めて個室が出来て、祈祷室にと喜びました。実際には、余りその目的には使用されないまゝ事務室ともなり、日曜学校の教室となり、献身者室となり、色々と活用されました。クリスマスには楽屋となつて、マリヤもヨセフも、牧者も泥棒も靴屋のマルチンもアंकルトムも此の部屋から舞台へ出て行つたものです。

此の頃までトイレは牧師館と共用で、だんだん不足して来ましたので、南側(玄関)へ約二間増築し旧玄関を撤去して、階段を玄関内へ取り込んで、玄関を入ると右手にトイレ、正面下部に下駄箱、左へ階段上つてスリッパ棚と下足棚がありました。下駄箱は旧玄関に在つたのを使用しました。玄関を入つて右トイレの前の壁際に傘立て、正面にトイレ行の板張、左は階段で狭い玄関で、いつも集会の時はゴタゴタ混雑して

いました。

玄関から会堂へ入る所に受付の机が置いてあつて、そのまわりが立話の心地よい処でした。

新築の板張りの東端に小さい洗面所が出来て、大変便利になり掃除も楽になりました。それ迄は玄関前の露天の水道しかありませんでした。

此の頃、ベンチの一番きれいなのが出来て、拡大された会堂に三列にベンチが置かれる様になりました。

ベンチの座布団も綿を持寄りで、布も在り合せで作り、川原さんから布地を頂いてカバーを作りました。

此の頃になると二世、三世が増えて、讚美歌の合の手に子供の泣声にぎやかに・・・説教の途中で感激の余りか子供の叫び声で後部の席では聞こえない状態になり、教会の客間兼母子室を東側に増築しました。母子共に此れで気楽になりました。

新築の会堂が汚れない様にと、掃除をしました。殊に床板を糠袋でこすつたり致しました。時には俵雄、和義等にアルバイトに磨かせた事もありました。そのうちに、内宮、山下、熊畑兄達が恵に感じて一緒に掃除してくれる様に成り、後には青年達の手できれいに掃除される様になりました。

或る日、熊畑兄が大きい声で讚美歌を歌いながら掃除して

居たのに、パタツと声が止んで静かに成ったので、どうしたのかとそつとのぞくと、鬼の様なたくましい顔を涙でクチャクチャにして、目をこすつてすゝり泣いて居るのでびつくりしました。よく聞いて見ると、讚美歌一九九「罪のこの身はいま死にて、きみのいさおによみがえり、神のしもべのかずにいる、きよきしるしのバプテスマ」、唱つて居るうち「罪の中にさ迷つて居た此の汚れ果てた者を主が救い、神の僕として下さつて、今こうして神の殿を拭かして頂いて、何と感謝して良いかわからない」。

あの会堂の床は、こうした多くの碎けた魂の感謝の涙で拭き込まれた、又と無い素晴らしい会堂だといつも感謝して居りました。私の会堂掃除の御用は夫れ以来終り、他の御用に集中させて頂いて感謝して居ります。

冬は良く早天祈祷会を坐つて火鉢を囲み、又七輪を囲んでしたものでした。クリスマス感謝会も上敷の上に車坐になつて致しました。上敷もなかなか買えないで「ぜんざい会バザー」で資金を造つて買った事もありました。

天井の低い会堂でした。講壇の上で手を上げると、天井へ届くと云う状態でした。鉄板葺ですから、夏は暑くて窓の硝子障子を全部外しても、人数が多くなるとどうにもならない暑さでした。講壇の上ではカッカッと頭がホテツて来るのが

よくわかりました。皆さんに団扇を使つて頂きましたが、ポロポロ汗が流れるのが見えて気の毒でした。それから扇風機が一台、二台と与えられ、壁掛扇風機六台で「あおぎ」捲りましたが、暑さはどうにも成りませんでした。思い切つて冷房機を入れてやつと涼しく成りました。

冬の暖房も物の無い終戦時代からですから、火鉢、七輪で薬缶をかけて、「シューシュー」と立つ湯気やその音で、目や耳で「暖かいぞ」と納得させた時代もありました。火鉢には木炭、七輪には豆炭等、ストーブには石炭と燃料の入手難に苦勞しました。品物はあつても経常費で買えない。仕方なしに、私達が暖まるのだからと暖房費の指定献金で賄いました。せめて車で燃して居る様なストーブがあればと願つて居りました。河本商店のストーブが不用に成つたが良かったらとの事で、喜んで頂いたのがストーブ暖房の始まりでした。所謂ダルマストーブなので燃え出すと、ストーブが真赤になり、周囲に居られない程暑くなり、火がおちるとパタツと冷えてしまふ状態で、絶えず「カチャンカチャン」、石炭を投入しなければなりません。何とか静かなセントラストープが欲しいと祈つて居りましたら、貯炭式ストーブが与えられ、更にセントラストープの大きいのを買う事が出来ました。集会中に余りストーブを扱わなくても良くなりました。然し石炭をたく

ので煙突掃除が大変で、少なくとも一週間に二回位しないと燃がいよいよ悪くなります。若い兄弟達が受持つて掃除してくれましたので助かりました。煙突掃除のいらぬストーブが、と折つて石油ストーブを買いました。困った事には此のストーブを置くと、子供達が倒しはしないかと気になりました。最後にヒートポンプ式の暖房機を入れて、それらの心配は無くなりました。今も扇風機冷暖房機が新会堂で活躍して居ります。

昭和十五年の一月一日新年礼拝を終ると福岡へ行き、福岡の新年聖会に出ました。昭和十六年から八幡で新年聖会を持たして頂きました。昭和二十年に戦災に会い、廿一年廿二年と聖会は持てませんでした。廿三年から今年迄、主の恵みに依つて毎年新年聖会で恵まれて、新しい年を主に従つて歩ませて頂きました。ただその間に一度、かぜで高熱のため御用が出来ず休んだ事がありました。

昭和廿六年、廿七年頃、藤村壮七師をお招きして聖会を開いて頂きました。藤村師は七十才余りで、当時特急で二四時間位かかる列車の旅をして御用に当られました。当時としてはずいぶん高齢だったと思います。その後、連合聖会等で御会いする度に「もう一度九州で御用に立ち度い」と言われて居りましたが、その機会が与えられませんでした。その聖会

で多くの兄弟が恵まれました。

献堂十周年の時、姫路の末永師が来て下さいました。数年前は松岡師が二、三回御用されました。

聖会の前後に様々な戦いが具体的に起つて参りましたが、その都度「汝等の戦いに非ず、エホバの戦いなればなり」(歴下二十・十五)と、主が王となつて勝利をとつて下さいました。

会堂での結婚式も数多く、記憶も出来なく成りました。主の御祝福のうちに主を前に新しい人生に歩み出し、主の聖前にその歩みを整えて歩む人々が、今も豊かな祝福のうちに守られて居るのを見て感謝して居ります。式だけ教会であとの消息不明な何組かの方々は気の毒な事だと思ひます。一組一組の結婚式に忘れられない思ひ出が、会堂牧師館の此処彼処に残つて居りました。

此の会堂を通して主のみもとに召された聖徒達も、忘れる事が出来ません。あの牧師館から私共の二人の子供も主のもとに召されて参りました。

会堂は尊い御用を終り撤去されましたが、あのベンチで悔い改めの涙にむせんだ事、主の愛に心のうちがたぎり立った日、声の限り主を讃えた礼拝、出演しながら感激したクリスマスと思ひ出、等々永く私共の信仰の旅路の思ひ出のオアシスと成る事でしょう。

両親の生涯で、決して忘れられない出来事は太平洋戦争です。殊に、自分自身が直接空襲に遭って、戦争の悲惨さと空しさを痛切に感じたでしょう。説教の証しでもたびたび触れられました。そのことを記した記事があります。「ぶどうの木」十九号（一九九三年三月）に掲載されたものです。

八幡空襲

榎 本 利 三 郎

その日はカラッと晴れて、空いっぱい太陽になった様な、暑い暑い日であった。

戦争末期で物の乏しい生活であったが、報道管制で、戦争ははるか彼方の事で、空襲のうわさは聞くが、その実態も悲惨さも、恐怖も知らず、わが家は平和であった。食糧買出しで体調を崩した家内と生後八ヶ月の長女が肌衣一枚で畳の上で休んで居た。次男の和義は独り静かに遊んで居た。

「ウウ・ウウ」と空いっぱい空襲警報が響きわたった。ラジオも沈黙している。……何分経っても、来襲の心配が無い。他の目標に向ったに違い無い。（今迄に、度々そんな事が有った。）退避準備をした家内も「ヤレヤレ」と一安心と思つた時、「ドカン」と大きな作裂音がした。「オヤ！」と窓から首を出すと、大きな樽状の物が上空から落ちて来る。（飛行

機はもう飛び去って影も形も無い）途中で炸裂してマッチの軸状のものが、バラバラと飛び散った。その一本一本から火と煙が帯状に燃え上っている。

「焼夷弾だ！直ぐ退避だ！」

家内も身仕度し、幼児をねんねこに包み、道路越しに地下壕へ退避する。

その間も、小型焼夷弾が所かまわず雨の様に降って来る。

カチャカチャ、カラカラ、パチパチ。鉄工所の作業場の様にかましい。一本一本の焼夷弾が火を吹き出す。向い側の家は屋根から火柱が立ち登って居る。地下壕も危ない、家内と二・三人の婦人が、恐怖でおびえて、出たり入ったり、オロオロしている。

「危い！線路へ走れ！」大声で怒鳴る。

日頃訓練された様に全力で消火に当る。万策尽きて退避を決意、道路迄出ると、目の前を黒煙と火の粉が渦巻きながら流れ、パチパチ、ポウポウ、激しく燃える炎だけが目に入る。

「シマッタ！手後れだ！」と立ちすくんだ。

その時、イザヤ書四三章一〜二節

「恐れるな、わたしはあなたをさがなった。

わたしはあなたの名を呼んだ、

あなたはわたしのものだ。

あなたが水の中を過ぎるとき、

わたしはあなたと共にいる。

川の中を過ぎるとき、

水はあなたの上にあふれることがない。

あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、

炎もあなたに燃えつくことがない」

の聖言がハッキリと心をつかえてくれました。

そうだ、日頃信頼して居る主が共に居て下さるから大丈夫。

シヤデラク、メシヤク、アベネデゴを燃ゆる火の中から救い給うた御方を頼みに、消火に使っていたスコップを手にして、火を吹く焼夷弾をホップ・ステップと飛び越え、飛び越え、全能者である主の聖手に守られて、日頃、空襲の時の非常退避所として決めていた製鉄所と鹿兒島本線との間にある側溝に辿り着いた。家族の姿が無い。あの炎と煙の嵐に巻き込まれてやられたらと思つて力が抜けた。此の目で確かめ様と線路沿いに探す。線路沿いのヒマ畑の葉の間に、見覚えのあるねんねこが見つかった。折角比処迄来てやられたのだと思つて剥ぐと「敵機は居ないかね？」と幼児を抱え、次男を脇の下に抱えた家内が尋ねた。次男は余りの恐怖にしばらく声も出さず、まばたきもしなかった。

予定した退避所へ辿り着き、一同無事に守られた事を主に

感謝した。町は未だ盛んに火の手を上げて、すごい勢いで燃えている。自分の家も目の前で火の手を上げていゝ。立派な二階建の家も（当時最高の建物）バラックも、二時間で完全に焼け落ちて皿倉山の麓まで見える。

下火になった時、取り出し易い木を引出し、扉に立掛け、焼け鉄板で小屋架けした。小雨も降り出した。幼児に授乳して居る姿を見て、三菱化成、安川電機等に働いて居る人達が心配して、線路上を走つて来たが、「赤ちゃんが助かつて居る」と安心してゆっくり歩いて行くのが目に焼き付いている。何時間か経つて、熱気のこもる町内を巡る。道路には、逃げ切れないで倒れた無数の男女の黒焦げ死体、銃剣をつけた兵士、熱さで防火水槽に飛び込み、水に浸つた所はそのまま、出た部分は黒焦げ、馬も仰向けに倒れ、腹はまん丸に、はり裂けそうに成つてゐる。屋内防空壕に入った人達は、一酸化中毒で眠つた様に死んでゐた。声をかけると「ハイ」と目を覚ますのではないかと思われたが、手を触れるとズルリと皮膚が剥かれる。蒸し焼きになつたのだ。

我が家の西隣に、韓国出身の一家が、貧しいながら平和に暮らしてゐた。主人が夕方帰つてびっくりして、焼トタンを剥いで見ると家族四人の黒焦げ死体が出て来た。総ての音が爆撃で消され、閑静とし、日は西に没し、夕焼けが名残をとど

め、夕闇が周囲を覆い、煤ける煙が棚引いている。突然静寂を破つて、大の男が地上に転がって、両手で大地をバタンバタン叩きながら「哀号！哀号！哀号……」と叫ぶ。腸をふり絞る声はどこ迄も、どこ迄も吸い込まれて行く。

たった二、三時間の間に、何十年もかかつて營々と築き上げた文化も宝も生命さえも全部灰にして何も残らない。何と愚かな悲惨な事であろうか。此の事実を忘れて又何処かで、愚かな、無益な戦争をくり返すのでは無いであろうか？

総ての人が主に立ち帰って、戦争なき平和が一刻も早く（イザヤ十一章六く九節）の様に成就する様、祈ります。

雑 詠

榎 本 利三郎

豊かなる 主のみめぐみに 今朝もまた
新たな世界に 生きんとぞ思う

梗塞を わずらいし妻の 杖となり

歩きつづける 栄光の道

目さむれば 主の臨在に 包まれる

こよなきめぐみ 涙あふるる

主のみめぐみ 豊かに賜り 八十路過ぎ

短かき夜も 長々と眠る

主のみめぐみ 豊かに給いて 今朝もまた

新しき生命に 歩みゆかなん

おりおりに うけしめぐみを 忘れじと

詠めるこの歌 埋め草となる

いたづきて いためる妻の あわれなり

われ夜もすがら 祈りつづける

忘れじと 思いて忘れる あわれなり

うけしめぐみの 限りなきかな

○ 旅 雑 感

広々と ひろがる田面の 切株も

青々芽ふく 延岡の旅

ひるさがり 列車走れば 幼児の

赤いランドセル ゆれて走るも

冬枯れの 山ふところに 赤々と

柿の果美し 豊後路の旅

伐採の 跡痛々し 山肌に

雑木にすぎる 病葉あわれ

みどり濃き 杉山に射す 夕陽かげ

色とりどりに 紅葉照らすも

日向路を 駆ける列車に 夕陽射し

辿る夢路は 果ることなし

夕陽うけ 色鮮やかに 銀杏の木

絵にも描き度し 歌にも詠み度し

マラソンに 名を知られたる 延岡の駅

人もまばらに秋風の吹く

これらの歌は、「ぶどうの木」二二二号に掲載されたものです。

残念なことに、二二二号が何年に発行されたのかわかりません。前号二二一号が一九九四年十月に発行されていますので、少なくとも、一年後として、一九九五年後半頃であろうと思います。母が脳梗塞で倒れたのが、一九九一年一月のことですから、その間に詠まれたものでしょう。また、旅雑感京都に丸山兄妹を訪ねたときか、丸山兄妹の母上が召され、その葬儀に駆けつけたときかもしれません。

「ぶどうの木」二十号（一九九三年十一月）にある「E・R」というイニシャルの投稿があります。これも父のものであるうと思われず。晩年、何度か肺炎を起こして、入院を経験しました。その始まりともいうべき入院が一九八四年十月にありました。第二回目が一九八六年（昭和六一年）暮れから、一九八七年（昭和六二年）三月まででした。以下の内容から見ると、この二回の入院中のことを合わせて語っているようです。

第一回目の入院中

点滴や 七五年の 大掃除 （十月十四日）

肺炎のため抗生物質の点滴、毎日五本ずつ、抗生物質が全

身にゆきわたり、慢性中耳炎も乾いた、肺炎を治療するには適切な手段だと思う。

然しマイペットを使い過ぎた掃除で、白木の肌が荒れ変色した様に、消化力も体力も随分消耗して、病前の状態に回復するのは無理の様だ。

T・Vなき、静けさ日本の 広さかな。(十月八日)

T・Vなき、静けき日の 長さかな。

倒れて熱にうかされ、病室で夢うつつの日々、読まず、聞かず、主とのお交りだけ、素晴らしい。気がついて見るとT・Vの音の無い静けさって、こんなに素晴らしかったのか？
T・V公害、此処まで来てしまったか！

*高熱後の病院食

「お早よう、今日はいゝ天気だから皆んな食べてしまおうぞー」
「あー、おいしい味噌汁」。一口、口に入れたが、実は出してしまった。揚げとキャベツ、美味しいのだが！高熱で口の中が荒れて、義歯がガタガタで噛めない。「あゝ歯さえ丈夫だつ

たら、モリモリ食べて、お替りしたのに」。

「僕は卸し大根だから柔かいよ！」と美味しそう、卸し大根が呼んで居る。

「そうだ、これなら歯が無くても食べられる」。

一口！「バック！」

モザモザ口中セロファンが一パイ……ペッペッペ、吐き出した。

家の鏝節は直ぐ粉々に成るのに、きつと粉の鏝節をセロファンにくつつけたのだ！

ちがうよ、ちがうよ、上手に削ると、あんなに粉に成らないんだよ。

あとに小梅二粒、小皿の上から、だまつて、おいで、おいでして居る。やつと今朝のごはんも終った。あゝ疲れた。

*足音に 耳澄ます 夕餉かな。

回復期に成ると、食事が待遠しく成る。

口よ、なぜお前はバクバク、こんな御馳走食べないのか？
ちがうよ！ちがうよ！僕もおいしい御飯を一パイ食べたいんだよ。そんなら早く食べるよ！

だつて体温が三七度六分にも上つて、だるくて、だるくて

動けないよ、此の上入れたら全部お返しだ。そんなら皆で力を合わせて、熱を一度でも二度でも引き降すことだ！さあ頑張れ！



昭和62年3月1日 全快感謝会

* 聖霊の かたじけなさや 聖声きき
今日も目覚めぬ 夢幻の国

* コン・コン・ケン、二連発の 咳苦し

* 熱下がり、点滴数え 今日の我
篤き祈りに 胸燃ゆるなり

* 高熱の 苦しき語る 我が子等の
篤き祈りに 今日を迎えぬ

* ゴキブリ、お前も師走か 病室の壁

* 昼食と 聞いて肩おとす 病人かな

* 真夜中だ 咳よ寝て呉れ おれねむい

* 窓辺飛ぶ 鳥大きく 日は沈む

夕焼の残るうす明りを、一羽の鳥が窓辺近くをかすめて巢のある森へ飛び去った。秋の日つるべ落しに沈んで行く。

* 窓越しに 白雪しげく 舞い居れば

われも飛ばんと 心はずむよ

— 敬老の日 —

* 夕餉終れば 九時過ぎる 老いの一 日 早や暮れぬ

* 老妻の 炊事場に立つ 甲斐くしさ
今日も終りて 主をほめたう

五 父の死

榎 本 和 義

一九〇九年生まれの父が、四月十一日早朝（七時半過ぎ）、入院先の病院で九二年と十一ヶ月の生涯を終わり、主の御許に召されました。



生ける者全て、この地上での命が終る時が来る事は知っています。父にもその時が来るだろうとは思っていましたが、それがいつ、どのような形で来るのか全く分かりません。分らないことは神様の恵みだと思えます。最近、すっかり体力を無くした父の姿を見ながらも、まだいつまでも生き続けるような錯覚を覚えていました。まだもう少しは、との思いがあつたのは確かです。父の死の時を思わないわけではないのですが、それはあまりにも非現実的な事のようにでした。

三月三十一日のイースター礼拝と聖餐式の御用をさせていただき、感謝でした。四月一日月曜日に、胸が苦しいと訴えて、病院へ行きました。疲れが溜まっているのだと思いましたが、しばらく入院して休養を取れば良いと思っていました。四日の木曜日には早々と退院してきました。体調は充分ではなく、週末は寝たり起きたりの状態でした。さすがに七日の礼拝は金生先生に任せて、休んでいました。

八日の朝、父のろれつがおかしいので、母が心配して、病院へ行くように勧めました。本人はあまり自覚がないようでしたが、顔面に幾分かの麻痺を起していましたので、病院では頭部のCTを撮り、胸のレントゲンも撮ってもらいましたが、頭部には顕著な病変は見られませんでした。しかし、麻痺の様子から、脳内の深いところで梗塞を起している可

能性が高いとのことで、治療を開始しました。同時に、肺炎も起こしていたため、低酸素状態になり、胸苦しさを訴えていました。抗生剤や酸素吸入で気分も楽になり、話も普通にできるようになりました。このままの状態でも元氣を取り戻してくれたらと、期待しました。翌、火曜日にはさらに状態がよくなり、本人も気分爽快で、話も弾んでいました。前日に連絡した兄や弟もやってきたので、父も大喜びでした。水曜日には落ち着いていましたので、私は病院へは行かずに、兄と弟や妹に任せておきました。電話での様子は特に悪くなつたようでもなく、夜八時頃、姪の信子が仕事帰りに病室へ寄った時は、静かにベッドに休んでいました。信子が帰る時、「さよなら」と手を振っていたようです。

九時半過ぎに、父がベッドの足元に崩れるように倒れているのを看護婦さんが発見して、急いで蘇生術を施し、手動で呼吸をさせていましたが、自発呼吸が戻りません。意識は失っていて、心拍だけが戻っていました。連絡を受け、家族が駆けつけましたが、言葉を交わすことはできませんでした。担当の医師に人工心肺につなぐかどうかと尋ねられましたが、家族で折り、相談の結果、ここは全てを神様の御手に委ねようという決め、その事を伝えました。手動による呼吸の管を抜きましたが、不思議なように、自発呼吸に戻り、血圧も平常値

になりました。ベッドの周りで、見守りつつ、讚美歌を歌い、聖書を読んでおりましたら、呼吸も心拍も血圧も安定してきました。ただ、意識は戻りません。しかし、父の地上での最期の時が、主の聖言に励まされ、賛美で主を称えて、過ごすことができ感謝でした。時は午前三時になっていましたので、取り敢えず、私は福岡へ戻りました。朝、七時四十分過ぎに兄から、父が静かに召されたことを電話で聞きました。心に穴があいて、中のもがスーッと流れ出していくような寂しさを覚えました。ああ、とうとう逝ってしまった、この思いが溢れてきました。

さつそく出掛ける準備をして、八幡の教会へ参りました。この日は木曜日がある日で、本来、私が御用をすることになっていましたが、前夜、金生先生に代わってもらおうようにお願いしていましたが、父が召されたことよって、木曜会を休会にして、集まってくださった方々と納棺式をすることにしました。八幡の教会員の方々も突然に父の死を聞かれてビックリされたことと思います。それまで、状態がそんなに悪くなっているとは思いませんでした。確かに、年齢的にも、体力的にも衰えてきたことは確かですが、たびたびの入

院でも、元気になって退院してしまいましたので、今回もまた元気になれるのだと思っておられたことでしょう。いつものように、木曜会に来て見ると、父の死を聞かされて、まもなく遺体が運ばれてくるのを迎えることになろうとは思ひもかけないことでした。

私は病院には寄らないで、教会へ直行して、父の帰りを待ちました。教会員の皆さんもじっとしておれなくて、教会の外へ出てこられて、歩道で到着を待ちました。十時半すぎに葬儀社の車に乗せられた父が、礼拝堂にストレッチャ―に運ばれて戻ってきました。父の姿はまるで眠っているかのように、穏やかな表情をして、うっすらと笑っているような感じがしました。モーニングで装われて、主の御前に立っている者のごとく、きりりと居ずまいを正して、横たわっています。六三年（献身してから七十年）の長い牧会伝道の生涯をここに終ったのだとの深い思いがいたしました。

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。」（ヘブル一三・七）

父が入院したのは月曜日でした。しかも、容態が悪くなっているわけでもなかったもので、木曜会に来られた方々は突然の知らせにビックリされただろうと思います。しかも何十年

と毎週礼拝や各集会で親しい交わりがあった関係で、まるで自分の身内を失った寂しさを感じておられたことと思います。考えてみると、主にある交わりは不思議な関係だと思ひます。地縁・血縁のつながりもなく、ただあるのはキリストの血にあがなわれて、神様の民としていただいたことだけです。父との係わりもそうです。教会の皆さんにとって、身近な家族のような存在だったと思ひます。それだけに、惜別の思いは深く、涙を流して別れを惜しんでくださる姿に、主にある恵みを覚ええました。



急遽、木曜会を変更して、会堂にて、集まってください。方々と納棺式をいたしました。はじめに父が愛した靈感賦を数曲賛美して、金生先生がヨハネによる福音書十四章一節の聖言、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」、今年の年頭から繰り返し語られたことを通して、金生先生が受けた恵みを証ししてくださいまし

た。その後、皆さんと一緒に、遺体を棺に納め、周囲を切花で飾りました。前夜式がその夜七時から、告別式が翌日の午後一時からと、決まりました。ひとまず散会して前夜式準備をすることになりました。しかし、なかなか去りがたく、棺の中の父の姿を見続ける方もおられました。

夜七時の前夜式まで、会場の準備、お花の手配、会葬御礼の準備、式次第の用意など、次々としなければならぬことが続きました。その合間には、時間や場所の問い合わせがひっきりなしに続いて、ゆつくり死者を悼むゆとりはありません。しかも、私は司式をすることになっていましたので、そちらのことも気が抜けません。まさか、父の葬儀の司式をさせてもらうとは思ってもよらないことでした。一般的には、どなたか親しい方にお願ひするのですが、母は私がするのが、父の願ひしている事だと言いますので、引き受けました。

静まって、祈りの内に導かれて与えられた聖言は、「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦い抜き、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも

授けて下さるであろう」(第二テモテ四・六〇八)でした。

この聖言は、父の生涯をずばり語った言葉だと思いました。若くしてキリストに出会い、神様の限りないご愛を知り、信じて、何としてもこの恵みに応えて生きようと願って、自身を神様に捧げ、献身の生涯に入りました。それから七十年にわたって、ひたすら、主のご期待に応えようと全力を尽くしました。その間、信仰が試されるような事態・境遇の中にも入れられましたが、頑なまでに、信仰一筋に生きてきました。

私はパウロが第二テモテを書いた時の心境こそが、父の思いであつたらうと確信しています。召されるまでの数年、家族からも、少し、休みながらしては、と強く勧められても、自分に与えられた使命を果たさなければと、繰り返し病に倒れても、立ち上がったてはまた戦線に復帰する状態でした。父にとっては、老いの一徹とか、生き甲斐を失いたくないとか、自分のために行っている気持は一切ありませんでした。使命が終れば、人の言葉や勧めによるのではなく、神様が自分を取り去られるから、何の心配も要らないと言っていました。ですから、最後の最後まで、信仰に立って生き抜いて、神様の時が備えられたのだと思います。

前夜式の時には天候が崩れて、雨模様になりましたが、百数十人の方々が列席されました。式後も、弔問の方々が来ら

れて、全てが終って、帰宅したのが十二時を過ぎていました。

翌日十二日の午後一時からが告別式でした。この日は昨夜と違って、青空が広がり、よい天候となりました。三百名近くの会葬者が集まってくださり、金生先生の司会で、私がメッセージをさせていただきました。この日与えられた聖言は「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」(ヨハネ十四・一)でした。この聖言は父が今年の新年聖会に与えられ、召されるまで、繰り返し礼拝で語り続けた言葉でした。父は自分の生涯を通して、信仰とは何か、信じるとはどうすることかを体験して得た結論が、この聖言だったのだと思います。同時に、神を信じるとは、万物を創造し、支配し、動かしている神様がおられること、しかも、その方が報いてくださることを信じることに尽きるのです。

父は全ての事が、人間的な知恵や業によらず、神様が聖霊によってご支配しておられるゆえ、畏れかしこみ従うことと、人の賞賛や報いを望まず、神様からの報いを望み見て生きることに努めて来たと言えます。

一連の葬儀を通して、もう一度、私自身、信仰の歩みを新しくされました。父を通して神様が与えてくださった信仰を、

一途に守り通していきたいと願っています。
これまでの主にある交わり、祈り、ご愛を心から感謝いたします。



六 榎本利三郎師前夜式

日時 二〇〇二年四月十一日(木) 午後七時

場所 基督伝道隊 八幡前田教会

司式者 基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

一 前奏

二 讚美歌 五三〇番 一同

三 聖書 テモテへの第二の手紙 四章一節〜八節

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くて悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。しかし、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわ

ぎをなし、自分の務を全うしなさい。わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬぎ、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」

四 祈祷 司式者

御在天の父なる神様、あなたの計り知ることのできない深い御愛と御計画のうちに、榎本利三郎牧師をこの地上に命を与え、九二年と十一ヶ月余の地上の生涯を備えていただき、今日あなたの御前にお召しいただきましたことを真にありがとうございます。感謝いたします。あなたは、榎本牧師の上に計り知ることのできない御愛と恵みを注ぎ、あなたの尊き器として御心にかなう御業のために、用いていただきましたことを心より感謝いたします。私も一人一人が、今一度、榎本牧師の上にあなたが備えてくださった恵みの数々を覚え、心と思いを一つにしてあなたをさがめ、あなたの御声に聞き従い、あなたの道に励みいくことができるように整え、お導きくださる

ことをお願いいたします。地上にあつて、もはや愛する榎本牧師と相まみえることはできませんけれど、「信仰によって今なお物語れり」と、牧師を通して顕(あらわ)してくださった恵みを覚えつつ、地上の旅路を歩ませてくださるようお願いいたします。相まみえることのできない寂しさ、悲しみの中にある者を慰め、来たるべき世を、永遠の御国を望み見る者とならせてください。また悲しめる者たちに上よりの慰めと励ましと力を与えてください。尊き主イエス・キリストの御名によつて感謝してお祈りいたします。アーメン。

五 讚美歌 三二二番

一同

六 式 辞

司式者

ただ今拝読いたしました聖書の御言は、聖徒パウロがこの地上の生涯を終わろうとするときに、自分の愛する弟子であるテモテに書き送った最後の手紙であります。この時、パウロはローマ皇帝のキリスト教迫害の下で、地下牢に閉じ込められていました。そしていよいよ自分の命を失う時の近いことが明確になりました時に、愛する、実にまだ若い自分の弟子であるテモテに、自分の生き方、信仰、歩みを語ったのが、テモテへの第一、第二の手紙として、この聖書の中に残されています。

一節から八節まで読んでまいりましたが、今もし榎本牧師

が語ることができたら、これと同じことを語っているに違いないと思います。このパウロは、今お読みいたしました後半の所に、「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた」と語っています。

榎本牧師も段々と年齢を重ねるに連れ、肉体的な弱きを覚えるようになってまいりました。初めて大きな病気をしましたのが、一九八四年の肺炎でありました。この時のことは恐らく前田教会の皆さんは、鮮明にご記憶にあると思います。礼拝の途中で高熱のためにしばし立ち往生し、大変な状態になってしまいました。そしてそのまま入院しました。それがほぼ十七年程前の出来事であります。それまで入院するような大きな病気もなく、元気で、神様の御用を努めてまいりましたけれど、その入院をきっかけにと言いますか、その頃から段々と体調を崩すようになってまいりました。皆さんがよくご存知のように、繰り返し、繰り返し肺炎を起こしては入院し、何度となくお医者さんから、「もう、今度は駄目です。もう、これは無理です」と言われることが繰り返されました。振り返ってみまして、何回くらいあっただろうかと思うのですが、どうも定かではありません。一回や二回なら覚えられますが、ゆうに五回は出入りしたんじゃないかと思えます。ここ数年は数ヶ月ごとに入院を繰り返すような戦いの中に

ありました。しかし、榎本牧師は、決してへこたれないと言いますか、くじけない。倒されては立ち上がり、倒されては立ち上がって御用に立たせていただきました。これは決して彼が強かったからではありません。

彼はそのことを、神様が自分に与えてくださる恵みであることを証詞してきました。皆さんもしばしばお聞きのように、もう駄目だと思ったそのところから、こうして生かされまた元氣を与えられて、ご講壇に立たせていただきました。毎週の礼拝の御用に立つことがどんなに大きな喜びであるか、また、それが人の力ではなくて私達を生かし導いておられる目に見えない神様の力によるのだと、何度となく語ってきたことはご記憶のとおりであります。神様は、榎本牧師を用いて、人が何によつて生かされ、何のためにこの地上にあるかということを語らせておつたのだと思います。九十歳を過ぎてここ数年段々と回復力も思わしくなくなり、あるいは気持も弱るときもございました。しかし、その度ごとに神様に対する信頼、神様が榎本牧師を愛してやまない大きな御愛を絶えず感じ続けて、いよいよその信仰の研ぎ澄まされた力は、私達の見てきたとおりであります。殊に、昨年の秋、また今年年頭一月に入院をいたしました。一ヶ月の入院生活を送りましたけれど、そういう中を通りながら、榎本牧師は繰り返し、

もう自分の使命が終わる時がくる。正にこのパウロのように、「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている」と、常に自分はすべてを神様に捧げ、神様のものと成り切つて生き続けてきました。だから、私が世を去るべき時がきた。その事をはつきりと語っていました。どんなことがあつてもおかしくない。確かに肉体は胸苦しいことがあり、あるいは呼吸が困難で苦しいときもあるけれど、心は何一つ恐れがないと語っていました。

彼は自分に与えられた、神様からの使命を最後の最後まで、この地上で最後の息を引き取るその瞬間まで、全力を尽くして走り抜いてきました。

今お読みいたしました御言にあります、「わたしは戦いをりつぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」と。私はこの言葉こそ、榎本牧師の生涯を語る言葉だと思えます。そして続けて、「今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」。神様が、イエス・キリストを信じて救いにあずかつて生きる私達に、この地上の生涯が終る時に、それで私達の人生はゼロになるのではなくて、その肉体を脱ぎ捨てて、永遠の命に生きる神様の新しい命にあずかつていくのだと、その事を望み見て、その事を信じて生きる生涯、これが榎本牧師の最後の望みであつたと同時に、また私達が

与えられている望みでもありません。「今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」、この確信こそが、どんな恐れにも不安にも悲しみにも打ち勝つていく大きな力を与えてくれる信仰です。

榎本牧師は、今その愛してやまない父なる神様の御許に帰って、「善かつ忠なる僕」と、神様から慰めとねぎらいと、そして義の冠を受けていることを私達も信じて生きたいと思えます。それは取りも直さず、私達もまたこの同じ望みに生かされているのであるということを確認することであります。

今日私達の愛してやまない榎本牧師と地上のお別れの時を持たしていただきますけれど、しかし、これはあくまでも、この地上だけのことであります。やがて私達もまた、この地上の生涯を終って神様の御許に帰っていきます。その時まで、私達一人一人が「今や、義の冠がわたしを待っているばかりです」と告白できる信仰を持ち続けようではありませんか。

榎本牧師が私達に知って欲しいこと、握って欲しいこと、それはこの一言ではなかつたでしょう。「今や、義の冠がわたしを待っているのです」と大胆に、はっきりと告白する信仰を与えられたと思います。それが私達のために生涯を費やして語り続けてくれた榎本牧師へのはなむけであろうと思えます。

これまで身近にその声を聞き、その姿を見てきた榎本牧師を見ることはできませんけれども、彼の語り続けてきた事柄は、消えることなく私達のうちに残っています。まだ私達は、この地上の生涯にあつて、いろいろな悩みや苦しみ、悲しみ、戦いの中におかれまますけれども、その一つひとつを通して、榎本牧師が何を語ろうとしてきたか、何を私達に握って欲しいと願ってきたかを絶えず思い起こしては、その牧師の願いに応えていく生涯とならせていただきたいと思えます。

ご一緒にお祈りをいたします。

七 祈祷

司式者

「わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。」愛する天のお父様、あなたが榎本牧師をこの世に送りあなたの尊い十字架のあがないにあずからしめ、あなたの御救いの中に取り入れてくださって、そればかりでなく、尊いあなたの使命に生きる新しい生涯を与えられて、この八幡の地に遣わし、主の御業を現す器となしてくださいまして、誠にありがとうございます。牧師をとおして、あなたが語り続けてくださった信仰の道をまっしぐらに生き抜くようにと、今

一度心を新しくしていただき感謝いたします。今、私どもは地上に残されて、なおこの世にあつてさまざまな戦いの中で歩まなければなりません。しかし、絶えず榎本牧師の歩みを思い起こしつつ、あなたの御心にかなう者とならしめてください。「今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」。私ども一人ひとりが確かな信仰に立つことができますようにお導き下さい。

尊き主イエス・キリストの御名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。



八 あかし（思い出）

榎本俊雄兄

長男の俊雄でございませう。父は四月一日から四日、体の調子が悪いようございまして、検査ということで入院いたしました。その四日に入院したのですが、早く帰りたいと、「自

分にはまだ御用が残っている」と言つて、金生先生に「迎えに来てくれ」ということで戻つて来ました。私が丁度出張で六日にこちらに来たものですから、食事を前の晩に一緒に行こうと言つて、父の母校である大学関連の明専会館に行こうということ、和食と洋食のどちらがいいかと聞くと、洋食がいいんだということございまして。ところが、行く段になりますと、「今日はきついつから止めとく」ということで、いつもならば必ず行く父がその時は辞退をしました。「ちよつとおかしいな」とは思いながら、翌日、土曜日でしたか、会堂のお掃除が終つた時には、皆さんにお会いしに行くんだということ、昼食もそこそこに会堂の方に行つたそうです。

私は、その日は東京に帰つたものですから、八日の夜、和義から「父が入院した」と、それも朝からよだれが出て、口がしつかりせず言葉がしゃべられなくなったということ、それで「脑梗塞（こうそく）を起こしているんじゃないか」ということで入院したんです。ところが、肺炎も併発しているということございまして、私は業務がどうしてもあつたものですから、九日の午前中の業務を終えて、その足でこちらにまいりました。それからズーツと病院に詰めましたのですが、私が来た九日の午後は相当調子が良くて、言葉もはつきり意思が伝わるわけです。九日の午後、私と初めて会つた時に、

新年聖会で、ここにあります御言、ヨハネによる福音書十四章一節以下、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。…わたしの父の家には、すまいがたくさんある」を示し、私に「これが、新年聖会の事だけではなくて、自分の一生涯をかけたメッセージなんだと、これが自分のモットーだ。これを教会の皆さんにもしっかり知っていただきたいということ、今年の新年聖会でこの御言を選んだんだ」と、私にしつかり話しておりました。

言葉は非常に聞き取れないんですけども、耳を横に持っていていきますとはつきり分かる言葉でしゃべっていました。十日午前中は「昨晚も良く寝た」と、非常に快活というか、元気で。で、言葉もはつきりしていました。ところが昼くらいから誠と一緒に居たんですが、時々意識が混濁状態といいますか、自分が病院にいるのか、それとも前田の家にいるのかが分からない。「自分は今から病院に行かなくちゃ行けない」と言ったかと思うと、今度は、逆に「家に帰りたい」と言うような発言をするようになりました。私にも、「俵雄はいつの飛行機に乗るのか」と言うのを、数分おきに四、五回言うようになりました。これは少しおかしいとは思っておりました。で、食事もお昼はそう食べなかつたんですが、夜はおかゆをお椀の半分くらいは食べました。それも「梅干が美味しい」と

家から持ってきた梅干を食べて、お野菜も少し食べました。もうお腹一杯だと言って、「ああ、大分食べたなあ」と思っておりました。ところが、それだけではなくて、お昼に残したデザートのカキを食べました。それで気持よくなつたという事で排便もする、顔も拭いてもらう、歯も磨く。大体八時くらいだったと思いますが、「これで安心だな」と、私は病院から帰りかけた……。

ただ、帰る時に心配だったものですから、「お父さん、何かあったらこのベルを押して、呼ぶんだよ」と言って、「分かった」と返事がありました。私が帰った後、信子が寄ってくれたようです。その時は気持よく寝ていたんですが、信子が来たのに気付いて起きたみたいです。その後、私どもはそれまで安心しておりました。ところが、私もホテルに帰って休んでおりましたら電話がありまして、「父が危ないみたいだ」ということで、直ぐ病院にまいりました。はつきり定かではございませんが、父がベッドから降りた所の足元に倒れていた。その時には心臓も停止し、呼吸も止まっていたということでございますが、心臓マッサージと甦生呼吸をしまして、一応取り戻したわけですが、人工呼吸というのは手動でのものですが、一分間に五、六回は自己呼吸ができるんですが、後にはできないという状態でした。私達が駆けつけまし

たら、主治医から「これを機械的な人工呼吸器を付けることはできません。付けて意識が回復し、そして取り戻せるという保証もありません。ただこれは一般に、いわゆる人工的に生かすということになるかもしれません」というお話を戴きました。

私ども兄弟と家族で集まって、「どうするか」ということで、先ず神様にお祈りしようということで祈りました。この時に今年の年頭の御言の「神様を信じなさい。神様の御旨に委ねなさい」ということが結論でありました。従って、父が元気な時に嫌っていました人工での命の維持はやめて欲しいということも尊重して、「神様の御旨に委ねよう」という決意をいたしました。それで、先生にお願いをして、今まで手で呼吸をしていたのを外していただきました。ところが、これは不思議なことに、その時に私どもは家族で讚美歌を歌って、先ほどの三一二番の「慈しみ深き…」、それから三二〇番の「主よもともと近づかん」を家族で賛美いたしました。そして和義が聖書の詩篇二三篇など、父が好きだった聖書の箇所を読んでお祈りをしました。夫々のお別れの言葉を掛けました。ところが、驚くことに血圧が一二〇と六〇、脈拍が八〇位に回復してきました。先生が不思議がる程に、先ほどまでは自己呼吸が一分間に五回くらいしかできなかった呼吸が自然にできる

ようになり、そして脈拍や血圧なども良い状態でした。時間が夜中の十二時をちよつと過ぎたくらいでありましたから、それから朝の七時四三分まで自己呼吸をきちつとやりました。で、召される三十分くらい前から、少し落ち着きまして、最後、本当に神様が天から呼ばれて、「お帰り」と言ったような感じで、本当に穏やかに召されました。

私達も父が頑固なまでに聖書の御言に徹頭徹尾従っていた人生、この七十年余りの、まあ、私の小さい頃は知りませんが、ズーツと見せてもらいました。私は非常に不忠実な僕であります。父のその生き方を見て、やはり徹頭徹尾神様に従っていくことをしていきたいと願っています。

父も確かに楽な人生を送ったわけではないと、私は思います。これは母もそうなんです。子供を二人亡くしています。苦勞や、苦難や、悲しみや、悩みのその中で、神様に徹頭徹尾従っていったという父であつたと思っております。

金生伝道師

私がかちらの教会に来させていただきました。丁度五年ほどになるんです。伝道師として来させていただきました。五年間、先生と何度となくお祈りをさせていただき、主の交わりを与えていただきました。このように支えていただきました。

その中で何度も何度もおっしゃっておられたことは、「神様に従え」ということでありました。事あることに祈って、御言に耳を傾けていく。ですから、いろんなことをしていきます時に、常に先生がお祈りをしていかれた姿を、今でも思い出します。私もいろんなことがありまして、先生にいろんなことをご相談していく。そうしてお祈りをして先生の所に行くんですけれども、その時に、最初はいいとおっしゃられたことだったんですけれども、何日かして後に「金生君、もう一度お祈りをして結果を出しましょうね」と、そのように言われたことが何度かありました。私はその度ごとに思うのは、神様に従うと言うのはこういう事だと思っただけです。まあ、人間に従う者と神に従う者、人間に従うという事になりますと、何か結果を出せばそこに従って歩んで行く、そうして結果を出していくことになるかもしれません。しかし、先生は本当に一つ一つの事柄、毎日毎日お祈りされた。そしてそこで与えられる御言に従って歩んで行かれた。使徒行伝に「人間に従うよりは、神に従うべきである」とありますけれど、まさしくその御言のとおり常に祈って導かれていった。ですから、私に対してはつきりと、「こうした方が良い」「ああした方が良い」と、そのようにおっしゃってくださいってここまで導いてくださったんだと思うんです。ですから、私もこの先生の信仰

に倣って、常に主を前においていく、主の御声に耳を傾けられる者となっていくこと、これが、本当に神様に喜ばれ、また先生も喜んでくださる信仰だと今、確信しております。

私も昨夜、先生がそのような状態であることを聞いて、慌てて病院の方に向かわせていただきました。そんな中で、先ほど俵雄さんがお証詞されていましたように、御言を読んで賛美した時に本当に血圧がパツと元に戻って、元気になられた姿を見た時に、はあ、これこそ本当に神様が働いてくださった。人に従うんではなく神様の御言に従っていく。御言を耳にしてそこに望みをおいていく時に、主が力を与えて強めてくださった。そして今朝も、丁度私が早天祈祷会で御用をさせていただきました。それから病院に行かせていただきましたら、丁度、その召される直前だったので。そこでもお祈りをして、静まって先生の前にごあいさつをした時に、それから段々と本当に糸を引くように、主に召されていった様子、神様が、本当にこの世での使命を終えられた先生を、お迎えになつたんだなあ、その事実を目の当たりにさせていただきました。

神様に従っていく時に、すべてを主がこのように良きように導いてくださって、最善の御栄光を顕してください。今確かに私自身も先生がお召されになられたことを思うと、何

となく寂しい思いもありますし、何だか悲しいといった思いで、皆さんのお顔を見ますと、つい涙が出てしまいますけれども、しかし、もう一度この主を仰ぎ見て、本当に主に信頼して歩むこと、それに立って歩んでいきたいと思うんです。

それが、先生が一番喜んで、先生が喜ぶというよりも神様が喜んでくださって、私達に期待しておられる。

私はこの事をもう一度教えていただいて、神様の素晴らしい時だったなあ、と今思っております。五年間という短い間でありましたけれど、主がこのようにいろんな御業をもって導いてくださったことを感謝しながら、これからもその信仰に做って主に従っていく者でありたいと思っております。

河本信生兄

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」。

一九三九年、昭和十四年の十一月三日八幡駅に降り立った先生、これからどうやって、何をしていけば良いのか全然分からず途方に暮れていた先生に啓示されたのが、今のエレミヤ書三三章三節の御言でありました。それから六三年間、先生は、真実に信頼すればどこまでも責任を持って応えてくだ

さる活ける神、救い主の証詞人として生涯を捧げてこられました。今、司会をなさっておられるご次男の和義先生は、本日四月十一日の「日々の聖言」の中でこうおっしゃっております。

「今朝、父が九二年と十一ヶ月の地上の生涯を終わり、天に凱旋がいせんいたしました。神様に仕え、従い、生かされた生涯でした。その人生は、多くの困難、悩み、苦しみ、悲しみの中を通りましたが、神様を信じて徹底的に聞き従う道を全うしました」。

私の両親は、先生がこの地に遣わされるまで、戦前のことではありますが、毎週福岡まで通って日曜礼拝を守っております。私も物心のつかない幼児でありましたが、一緒に連れて行ってもらっていました。その頃の先生はまだ修養生でいらつしやいましたが、教会の御用の合間にその当時の浜の町伝道館(当時福岡基督伝道館・現大濠公園教会)の広大な敷地の中の掃除をなさり、また、その片隅で畑を作り、鶏の世話までなさって多忙を極めておられました。そのお姿は若々しく澆刺(はつらつ)として、幼かった私の心にも一つの事に邁進する気概というものに触れた印象を持ちました。

先生が八幡に遣わされた経緯については、ご講壇からの先生御自身のお話や、また創立五十周年記念誌の「燃ゆる柴」の

中でつまびらかにされておりますが、私の両親はこのことに
関して、榎本利三郎先生を八幡に送って欲しい、是非とも榎
本先生であつて欲しいと熱心に祈り、願ひ、求め続けてきた
と、その祈りを神様が受け入れてくださつたのだと、生前に
話しておりました。

父の回想記に、先生が思い出としてご寄稿くださった中の
一節に、「私の父が『先生、どうか八幡にいらっしゃって、八
幡の魂のために祈ってください』と言われたが、この一言は
私にとつても大変うれしきおとずれであつた。河本兄は祈り
の人であつた」とあります。また、先生は母の記念会で先ほど
お読みいただいたテモテ四章七節を引いてくださいました。
「わたしは戦いをりつぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつ
くし、信仰を守りとおした」。私は先生こそ、この御言にふさ
わしい御方であると思ひます。

今日まで、私は先生を文字通り父として慕ひ、敬つてまい
りました。召された先生のお顔の輝き、主の御許に迎えられ
た晴れ晴れとした表情、神々しいまでの美しい気高さが先生
の勝利のご生涯を如実に表していると思ひます。先生は神様
の栄光を賛美する勝利のご生涯を、御自身の身をもって私達
に見せてくださいました。

先生本当に長い間、ありがとうございます。今、私は先

生とご一緒に心から主をあがめ、感謝いたします。

高木ツルエ姉

今日榎本先生が天国に召され、お別れをするに当たりまし
て、先生の前に心から感謝を捧げたいと思ひます。

私どもは二八年に結婚しました。それから五十年経ちます
けれど、先生が本当に最初から最後まで御愛をもつて迷える
私達を導いてくださいました。詩篇一〇三篇の御言に、「主は
あわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ
豊かでいらせられる。主は常に責めることをせず、また、と
こしえに怒りをいだかれない」とございしますが、先生はそのよ
うな御愛をもつて、何にも分らない私どもを導いてくださ
いました。

本当に神様の御言に信頼し、従いいく者の幸いを示してい
ただきました。そうしまして、最後にはヨハネによる福音書
十四章一節以下の御言、「あなたがたは、心を騒がせないがよ
い。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家に
は、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしは
そう言つておいたであらう。あなたがたのために、場所を用
意しに行くのだから。そして、行つて、場所の用意ができた
ならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。

わたしのいる所にあなたがたもおらせるためである」。

これはエス様の御言でございますけれど、先生が今、私達にこの御言をもって語っていてくださるのだらうと思ひまして、心が熱くなります。地上のご生涯を先生は立派に走りつくして、神様からの冠をいただく方でございますけれど、私達も先生が残してくださいましたこの信仰の足跡を踏み、神様の前に心砕けた者となつて、御声に耳を傾けつつ天を望んで信仰の生涯を全うさせていただきたいと思ひます。そして、天国において愛する先生にお目に掛かる日を楽しみに、地上の生涯を歩いていきたいと思ひます。

本当に先生に感謝をいたします。

司会者(榎本和義牧師)

ありがとうございます。まだまだ皆さんの中には、是非とお話したいことが沢山山山お有りと思ひますけれども、今日は時間がございませんのでひとまずここまでいたします。

九 讚美歌

三三五番

一同

この讚美歌は父の生涯であらうと思ひます。どうぞ、歌詞をはつきりと味わつて大きな声で主を讚美したいと思ひます。

十 頌 栄

五四一番

一同

十一 黙 禱
十二 献 花



一同

七 榎本利三郎師告別式

日時 二〇〇二年四月十二日(金)午後一時

場所 基督伝道隊 八幡前田教会

司会者 伝道師 金生一郎

司式者 基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

一 奏楽 奏楽者 松尾 博子

二 賛美歌 四八八番 一同

三 聖書 ヨハネによる福音書十四章一〜七節 司会者

「『あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言うておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている』。トマスはイエスに言

った、『主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道が分かるでしょう』。イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである』」。

四 祈禱 司会者

天の父なる神様、尊き聖名を崇めて感謝をします。ここに榎本利三郎牧師の告別式を執り行わせていただきますから、感謝をいたします。牧師がこの地上にあつて九二年と十一月の余りの間、主にあつて導かれて歩んだ歩みをもう一度振り返りつつ、更に主の恵みを明らかにしていただき、私達も主を見上げることでできるよう、主が恵み導いてくださることをお願いいたします。牧師がいかにして神様に従い、神様を前において歩んでいかれたかを思い起こしつつ、その信仰を受け継ぐ者となり、更に、あなたを前に置いて歩む者となることができますように、全てを導き、このところにあなたの御栄光を輝かせてくださるようお願いいたします。格別残されたご遺族の上に主の豊かな慰めを与え、また、更に

主を仰ぎ見て、主にあることをはっきりと感謝するときとすることができまますように、恵みをもって導いてくださることをお願いいたします。これからのひとときの間、すべてを導き整えてくださることをお願いいたします。

尊き主イエス・キリストの聖名によつて感謝してお願いいたします。アーメン

五 讚美歌 五一四番

一同

六 説教(式辞)

司式者

一言、お祈りをいたします。

愛する天のお父様、あなたの豊かな御愛と恵みのうちに、榎本牧師をこの地に遣わし、あなたの福音の恵みを証詞する者とならせて、今に至るまで御手をもって顧み、お導きいただきましたことを心から感謝いたします。今日、共々に集い、今あなたが備えてくださった豊かな御愛と恵みを心に覚え、感謝を捧げる時を備えてくださいましたことをありがとうございます。主よ、あなたが何を語ってくださいますか、あなたの深い御旨を、御心をわきまえ知ることができまますようにお導きください。

尊き主イエス・キリストの聖名により感謝してお祈りいたします。アーメン

私どもが今日ここに集いましたのは、愛してやまなかつた

榎本利三郎牧師、私の父でもありませんけれど、昨日早朝に召されまして、この地上での最後のお別れをするために集いました。この時を神様が備えてくださったことを、先ず心から感謝したいと思います。また、父の生涯を通して神様が私達に与えてくださった豊かな恵みを今一度心に刻んでおきたいと思ひます。

ただ今お読みいたしました聖書の御言に、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」とあります。この聖書の御言は、父が愛説した御言の一つであります。毎年教会では新年に三日間にわたつての集會が持たれます。新年聖會と申しますが、その中心になる標語、神様の御言として、今年はこの言葉が選ばれました。これは恐らく父が人生最後の遺言として私どもに残してくれたメッセージだと思ひます。

今、この講壇の正面の壁にも、その御言が記されています。「神を信じ、またわたしを信じなさい」と。神様を信じること、「わたし」というのは、これはイエス・キリスト御自身であります。イエス・キリストを信じること、これがすべてであるということです。ところがなかなかこの神を信じる、イエス・キリストを信じるということは、言葉では分かつたような、それでいてはつきり具体的なことが分からないという、不思議

議な言葉であります。「お互い神様を信じましょう」、「はい、信じます」と気軽に言いますけれど、実際に、それでは神様を信じるということはどうすることだろうか、と思います。

私の父は、この「神を信じ、またわたしを信じなさい」、神様を信じるということがどういふことか、イエス・キリストを信じるということがどういふことなのかを、身をもって実体験する。自分の生涯を通して語り続けてきたんだと思います。

皆様方のお手元の式次第に記しておきましたように、父は一九〇九年、明治四二年に生まれました。豊川市の国府町という、愛知県の小さな町でありますけれど、そこで榎本久三、しな、という両親の許に三男として生まれたのです。恐らく父は、その両親の許で成長して将来に大きな夢を持っていたと思います。非常に向学心が篤(あつく)、好奇心が旺盛でありましたので、当時としては、あまり一般的ではなかったと思いますけれど、尋常小学校から旧制の中学に進み、そればかりではなく、中学で満足しないで、その当時九州の戸畑にありました、現在の九州工業大学の前身であります、明治専門学校に進学をいたしました。

父は自分の計画した一つの夢といいますが、一つの目標に向かつて力を尽くしたんだと思います。青春の非常に大きな

夢を描き、希望を抱いてはるばる愛知県から九州の戸畑にまでやって来ました。このことは繰り返し、説教の中で証詞していたとおりであります。九州という所は、今では短い時間で往き来ができますが、当時は自分の郷里から戸畑まで来るには、一昼夜以上の長い時間を掛けてやってきます。まだ関門トンネルはありませんから、下関から渡船を使って海峡を渡つて、まるで外国に来るような思いだったそうです。初めて柳行李(こうり)に荷物を詰めて戸畑の駅頭に降立った時に、父は「これは大変な所に来ちゃった。九州は熊襲(くまの)の住む所で、これから自分はどうなるだろうか」と不安に思ったというのを、何度か聞いております。

その学校を選んで、自分のやりたい勉強をし、将来の夢を抱いてきたわけですが、学校の生活を通していろいろな問題、人生の悩みに出遭いました。その時に、彼の心を捉(とら)えたのが、その当時の学校の教授であった奥(おく)貢(みつぐ)先生、この方がクリスチャンであったということから、その先生のほかの人にはない魅力、何か大きな魅力を感じて、その秘密を探ろうとして近づき、そしてその先生の導きを得て、当時八幡製鉄所に勤務しておられた城兄弟のお宅で行なわれていた家庭集會に導かれました。これがキリスト教といいますが、キリストとの出会いのきっかけでありました。その後、父は

その家庭集會に御用として来てくださったついでに折瀧牧師から、福岡での集會に誘われました。そして、毎週戸畑から福岡に通うことになったのです。

父の卒業の年は、今のようによろしく日本が大変な不況の時代を迎えまして、極めて厳しい就職状況でした。一人の先生に目を掛けていただいて、「榎本君、君が卒業するときは僕がちゃんと就職を世話するから、ここに約束しているから大丈夫だよ」と言われていたんです。ところがいよいよ就職間近になった時に、その先生から呼ばれて、「榎本君、実は、君のためにと思って頼んでおいた就職先が、ちょっと駄目になっちゃった」。よく聞いてみるとその会社の役員の方の息子さんで横滑りが入ってきた。「そのためにどうも、君には就職口がないから自分で探してくれ」と言われた。その時の父の落胆は、非常に激しかったというのを聞いています。人間不信に陥ったと聞いています。あんなに約束をしてくれたのに、どうして？ 丁度三月の卒業の前後の時に、そういう問題にぶつかってありましたので、人生とは何だろうか、人が生きるといふのは何だろうか、激しく問い詰めておったようでありました。就職がないために、研究生としてその学校に残ったわけでありました。実験室でもうこれからは人を相手せずにフラスコとピーカーを相手に研究者の仕事をしように思ったと……。

ところが、卒業しました次の年の昭和七年であります、先ほど申し上げたような教会での新年の集まりがありまして、父が福岡の集會に出ておりました。神様がいらつしやること、そしてその神様が、私達全ての者を愛して、尊いひとり子をも私達の罪のあがないとして世に遣わしてくださいました。その十字架に命を捨ててくださったのは、ほかならない自分のためであると、父は神様の御愛を受け止めました。その当時は五日間くらい連続して一日三回ずつの十五回くらいの集會が行われていましたが、聖会の途中で、自分の心の罪深さに圧倒されました。といつても、父は別に何か大罪を犯したわけでも、何か密かに物を盗んだとか、あるいは人を殺しておつたとか、そんなことは何もありません。むしろ彼は学校でも、先生達から「真面目だね、よく勉強している」と褒められる。あまり孝行息子ということとは言えませんが、親に対しては非常に親愛の情をすごく持つておりました。ですから、母親から遠く離れて学校に遊学する時に、「様々な世間の誘惑があるけれども、お前を学校にやるのは、有り余つたお金からやるのではない。お父さんが汗水たらして朝から晩まで働いたお金の中から、その中からお前を学校にやるんだから、酒を飲んだり、ばくちをしたり、女遊びをしたりするようだったら、即刻やめて帰れ」と言われた。それに対して父は、「何、

親の言うことを知ったもんか。遠く離れているからそんなことと見ているわけない」とは思わないで、むしろ、そんなにまでして自分を学校にやってくれる両親に対して、何とかして恩返しをしなければいけない。そういう強い思いを持って自分の生活を自制し、律し、勉強に励んだのです。だから、罪と違って自分のどこに罪がある、そう思ったに違いありません。ですから、なかなかそのことを素直に認める心がありません。私は悪くない、私は正しい。悪いのは、あの就職が駄目になったのは、あの教授が口約束を守らなかつただけだ。これが悪い、世間が悪い、人が悪いと、怒りの虫と言いますが、それが父の心であつたと思います。

皆さんがご存知の父は比較的忍耐強く、温厚で、厳しくはあるけれども、優しさがあると思つていらつしやるでしょうが、私が見るところ、イエス様の救いにあずからなかつた以前の父は、短気で怒りつぼくて、正義感が強く、人を攻撃するのに勇敢な人物だつたろうと思います。

ところが、その先ほど申し上げました福岡の聖会に出ておりました時に、神様の前には私達は罪人である。その根本の罪は何かというと、自分を正しいとするその思いこそが罪であるということです。自分は正しい、自分は間違つていない、自分の力で生きていく、自分は人に迷惑をかけていない、私

は私だ！こう思う思いが実は、神を認めない、そんな罪の姿だ、そのためにこそ主イエス・キリストが十字架にまで命を捨てて、私たちの罪を赦し潔め、今一度、神様のものとして、神と共に生きる者へと造り変えようとしてくださったんだという。父はこの神様の御愛と恵みに頭から足先まで浸されたのです。聖会の途中でその心が心に迫られて、集会に出ておれなくなつて、折漣牧師の所に行きまして、「ちよつと用事ができましたから、急いで帰らなければいけませんから、聖会の途中ですけれども失礼します」と言つたところが、先生から「はか！」と叱られた。「聖会の途中で帰る奴があるか、何の用事だ」、「いや、実験をちよつと忘れておりました」、「そんな実験なんか、お前はしなくても良い、残つとけ！」と言われた。それで仕方なく？残つた。残つて最後の時に、父は神様の愛に降参したのです。本当に自分が罪人だ。今まで自分が正しく、自分が間違つていない、私の夢を実現し、私の人生は私が切り開き、私が生きる、そう思い続けてきたのです。彼はそこではつきりと、「私は罪人である」、そして私のためにイエス・キリストが十字架にかかってくださつた、「もはや我生くるにあらず、キリスト、我が内に在りて生くるなり」とパウロが言つているように、イエス・キリストによつて、今度は生かされる者となる、これが父の人生の一つの大

きな、初めにして最後の大幅換でありました。略歴の中に、聖霊のバプテスマと記されているのは、その事態、その事柄を語った言葉であります。

そして、聖会が終わるや否や、それまで住んでおりました学校の寮から荷物を全部引っからげて、折瀧牧師の所に参りまして、献身修養生、言い換えるならば、丁稚(てっち奉公)に入ったわけです。自分がこれからどうなるか先のことは分からない。しかし、「もう、私は自分で生きていくのじゃなくて、神様が私に命を与えてくださって、永遠の滅びに定められるべき者が、大きな赦しの中に与って、この新しい命を与えられているんだ。もう、こうなったら、自分の夢を実現する、自分の願いを完成するのではなくて、神様が私に『せよ』とおっしゃること、神様が『行け』とおっしゃる所、神様が求め給う所に何もかも捧げて、死んだ者となりきって従っていくのだ」。その時から、父の新しい生涯であります。

その後、昭和十四年になりました。八幡の地に遣わされてまいりました。召された河本さんご夫妻が父を招へいしてくださって、この地で伝道が始められたわけであります。

神を信じるということは、神様がいらつしやるということ、神を信じることを、また、神様を求める者に必ず報いてくださることを信じることを、これが神を信じることであります。神様

がいらつしやるという事を信じる、それは取りも直さず、私達の存在、私達の人生、私達が今日生きているということ自体が、これは神様が原因といえますか、神様が始まりであり、神様がそうしていらつしやるんだということ認めることで

です。父は自分の生涯が自分の計画と、自分の思いと、自分の夢を実現する歩みとして始まったはずであつたんですけれど、神様の存在を知り、その事を通して自分の生涯を神様のものとして捧げて、今度は神様に生かされ、神様の御目的のために生きる日々の歩みへ変わっていきます。これが神を信じるということであります。神様がいらつしやって、私たち一人ひとりに今日も生ける命を与え、食べる糧を与え、住む場所を与え、着るものを与え、家族を与え、仕事を与え、すべてのものを与えてくださるということを信じていく。

父はこの八幡の地に遣わされたから、人を頼りたくない、神様だけを頼りとする、この事を自分の生涯としました。人に媚(こ)びたり、あるいは人に何かを求めたりしない。ですから八幡に遣わされて伝道者として、よほど日夜あつちの家を訪問し、あの人この人に「さあ、教会に来てください、神様を信じてください。ああしてください、こうしてください」と、言い回つたわけではありません。神様がいらつしやって、

報いてくださる。神様が応えてくださることを信じていく。経済的にもそうでありますが、私どもも子供の時から絶えず言われてまいりました。私達が生きるのは、自分の手で稼いで生きているのではない。神様が生きる糧を備えてくださると。

私は子供の時、八幡は八幡製鉄所、今の新日鉄が非常に盛んな時でありました。今でこそこうやって空も青空が見えますけれど、その当時はこの鹿児島本線の八幡駅を中心にしてズーツと工場の煙突が立ち並んでいました。昼夜を分かたず、煙がもうもうとしていて、公害なんていう言葉は聞かれません。「この天の虹」という言葉で言われたように、いろんな色の煙が絶えず立ち昇っていました。私どもの小学校の校歌の中に、「黒煙もうもう、天にみなぎる」という歌詞がありました。これは産業隆盛の象徴だったわけです。ですから、私の友達の父親は八幡製鉄所に勤めていました。これは私の夢でありました。どうして父は牧師なんかになったんだろうか。毎日毎日お金がないのに、八幡製鉄に勤めてくれていたら、もう少し楽な生活ができるのと思った。で、時々父にそういうことを言ったことがあります。「どうして明治専門学校まで出ているながら牧師なの」と。でも父はこれこそ最高の人生、これが一番と。一番いいどころじゃない、私どもは明日の糧

があるかどうか分からなくて、私は夜も眠れない思いをしました。そんな子供の心配は放つたらかして、父は「大丈夫、大丈夫」と。「何が大丈夫か」と思いました。しかし、神様がいらつしやることを信じる、神様の報いてくださることを信じる、これが神を信じる生き方です。

だから、必要ならばお祈りをしなさい。父はいつも祈り続けていました。声を出して祈ることもあります。心の中で祈る時もあったでしょう。事ある毎に、絶えず絶えず祈ってまいりました。それは、神を信じるっていうのは神様がいらつしやるんですから、当然その神様に向かって祈らなければおれないのです。「榎本先生は祈りの人で、熱心にお祈りをなさって素晴らしいですね」というお褒めの言葉をいただきますけれど、それは父の特権でも何でもありません。神を信じるならば、祈らざるを得ないのです。祈りは絶えないはずであります。祈らないというのは神様を信じないからなのです。だから、父が熱心に祈りますねと言われるのは、取りも直さず、「神様を信じていらつしやるからですね」ということに他ならないのです。この生涯を通して、彼が私達に語り続けたのは、「心を騒がせないがよい。神を信じ」と、この一点であります。神様を信じるっていう事、それは神様が、今、この所に生き働いてくださる御方、その御方に信頼していく時に、

必ず報いてくださいます。

私の父は、聖書にそう約束されている、これは神様の御言だ、だから、自分がこの神様の御言を信じてそれに従って歩んで、それで飢え死にするんだったら、どうぞもう、聖書を信じないでくれと言えはいい。聖書の御言に従って、神様を信じて生きて、死なないんだったら、この私を見て御覧なさい、と父はよく言ったものです。私達が神を信じるっていうことは、このことなのです。

皆さん、今日こうして敬愛する榎本牧師のために、ここに集っていただきました。もし父が今ここで起き上がってちよつと言いたいことがあると言って、語るとすればこのことだと思います。「神を信じ、またわたしを信じなさい」。そうするならば、心を騒がせない、思い煩わなくてよい、心配しなくてよい、望みがあるのです。今読みました聖書の御言に、「あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから」と、イエス様は約束をしてくださいました。私達のために、滅びることのない、消えることのない永遠の住まいをイエス様は備えてくださった。「場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」とおっしゃってくださいました。何のために？「わたしのおる所にあなた方もおらせるためである」。イエス様と共に生きる、永遠の命の生涯にこ

の地上の肉体を脱ぎ捨てて移していただくことになります。これを信じるのが、神を信じること、「わたしを信じる」ことです。

父は九二年と十一ヶ月余りの地上の生涯を、何度となく、殊に晩年は肺炎を繰り返し返しては、入退院をいたしました。しかし、父が絶えず語っていたことは、今日も赦され生かされ、今度も神様が元気に力を与えて退院させていただいた、これは神様の御計画がまだあるに違いない。このことを繰り返し、言い続けてまいりました。確かに人の生き死には人の力ではありません。病氣したから人は死ぬわけでもありません。年を取ったから死ぬわけでもありません。若くても、元気であっても、神様の使命の終る時、地上の生涯で果すべき業が終わる時、私達は神様の許へ帰ります。しかし、その時まで、「神を信じ、またわたしを信じなさい」。神様を信じて生きる生涯。しかも私はしみじみと思えますのは、父の生涯を神様が備えてくださったのだと思います。

恐らく、若くして九州へ初めて出てきた時には、自分の人生がこういう人生になるとは少しも、少しどころか全く思いもしなかったでしょう。しかし、神様が父を造り生かし、御自分の救いに引き入れて、人生を造り変え、神の業を私達に顕そうとしてくださったのです。これは大きな恵みでありま

す。

ですからどうぞ、父の生涯を振り返る時に、今一度私どもも、今生きているのは、私の力や私の知恵や計画によるのではなく、私達の目には見えないけれど、万物の創造者であり、力ある御手をもって、今も生き働いてくださる神様が生かしていらつしやる。

父が、榎本牧師が、皆さんに残した大きなメッセージはこのことでもあります。私どもが今遣わされ生かされ、置かれてあるその所々、色々な問題があり、悩みがあり、悲しみがあるでしょうが、その一つひとつが神様の手の中にある。神様が私達にその問題、事柄を置いてくださっていることを信じて、神様の報いを期待したい。神様が働いて、私達に伝えてくださる御方であることを信じ続けていこうと思えます。

父の生涯はそのための生涯でありました。彼の死を生かすも殺すも、無駄にするのも、私達の今日からの残された地上の歩みにかかっています。どうぞ、この聖書の御言、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」のように、神様を信じて、イエス・キリストを信じて、絶えず神様を見上げて、この御方に従っていく地上の生涯を、私達も全うして行きたいと願います。

やがて私達も、この地上の生涯を終りまして、天国に帰っ

た時に、父、榎本牧師とまた相まみえる時がきます。その時に、「先生、先生から言われた通りのことをちゃんと守ってききましたよ」と言える者でありたいと思います。「ちよつと、君はどうしていたんだ。どこへ行っていたんだ」と言われることのない様に……。

「心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。一言お祈りをいたしましょう。

七 祈 禱

司式者

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。あなたの計り知ることのできない御計画と御業のうちに、榎本利三郎牧師をこの地上に送っていただき、あなたの御心がどこにあるか、あなたの御愛がどんなものであるかを、牧師の生涯を通して明らかにしてくださいましたことを心から感謝いたします。私どもは、まことにあなたを信じると言って、その事が分からないで迷いますけれど、今一度、榎本牧師の生涯をあなたが造り出し、生かして下さったように、私ども一人一人の生涯が今あなたの御手によって造り出されている者であることを信じ、あなたの報いを望みつつ、あなたが一つひとつの祈りと願いに応えて生き働いてくださる御方であることを信じてまいりますから、どう

ぞ憐れんでくださって、地上にある限り、なお神様の御力を日々注いでくださるようお願いいたします。

尊き主イエス・キリストの聖名により感謝してお祈りいたします。アーメン。

八 讚美歌 三八〇番 一同

九 頌 榮 五四一番 司会者

十 祝 禱 司式者

十一 後 奏 奏樂者

十二 挨拶 親族 代表

長男の俣雄でございます。本日は大変お忙しい中、父の告別式にご参列いただきまして本当にありがとうございます。

先ほどの式辞の中にありましたように、父は十一日の朝七時四三分に天国に召されました。私どもも天国の存在というのを信じておりますが、やはり心の中にぽっかりと穴が開いたような感じがあります。ただ、父が最後に遺言のように残した、「この「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、

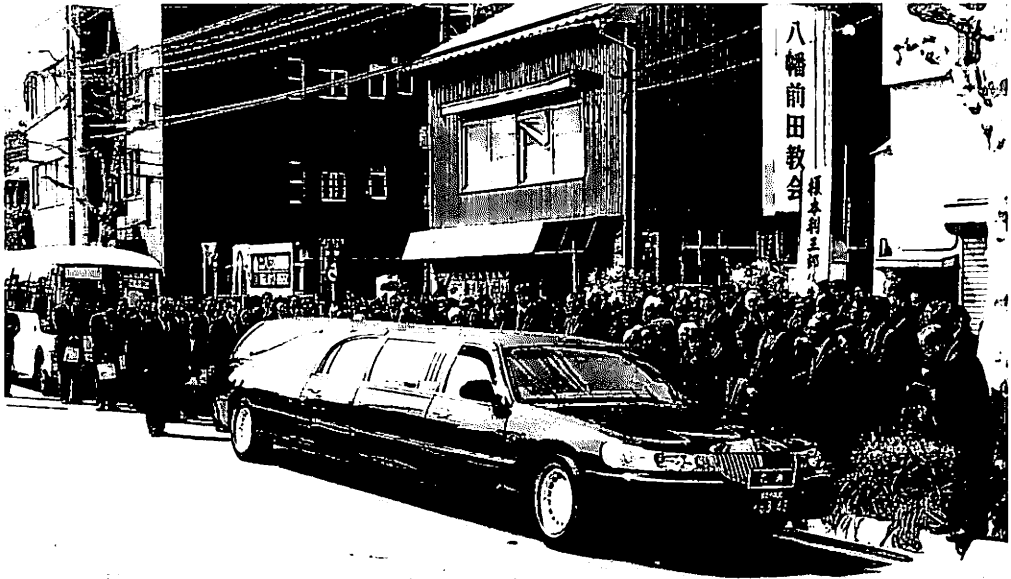
またわたしを信じなさい」という御言を、私が親孝行の真似事を二日間させていただきましたけれど、その間中、私に言うて聞かせておりました。父が召された後、看護婦さん皆さんで体を拭いてくださったんですが、その時に看護婦さん方が

おっしゃられましたことに、婦長さんがおっしゃられました、「何回も入院されておられましたけど、通常の方は熱が出る」と、わがままを言つて看護婦さんたちを困らせるのが普通です。この方は全くそれがありませんでした」。それほど父はかわいがられていたんだなということを感じますし、格別母を非常に愛しておりまして、相思相愛と言いますか、母がどうしたということをおベッドにいながら、非常に心配する父でございました。食事をしたのか、あるいはお風呂はちゃんと入れたのか、よく眠れたのか、これを自分のことをさしておいて、母のことを心配しておりました。母は母で、父に一日も逢わないと気が済まないということで、毎日病院に通うということをやっておりました。今後も残された母が、足も不自由でございますし、非常に私と同じようにやはり心に穴が開いてしまったと思います、皆様のお祈りと、励ましをお願いしてご挨拶に替えさせていただきます。

本日は、大変ありがとうございました。

十三 告 別 (献花) 一同

十四 出 棺 讚美歌 四八八番と共に出棺



八 榎本利三郎牧師召天記念礼拝

日時 二〇〇二年五月六日(月)午前十一時
 場所 基督伝道隊 八幡前田教会
 司会者 基督伝道隊 福岡大濠公園教会
 牧師 榎本和義

- | | | | | |
|----|------|---|-----------------|-----|
| 一 | 前 | 奏 | | |
| 二 | 讚 | 美 | 靈感賦 五六番 | 一同 |
| 三 | 讚 | 美 | 讚美歌(明治版) 九八番 | 一同 |
| 四 | 主の祈り | | | 一同 |
| 五 | 聖書 | | (使徒行伝二十章一七〜三五節) | 司会者 |
| 六 | 祈 | 禱 | | 司会者 |
| 七 | 讚 | 美 | 靈感賦 一一二番 | 一同 |
| 八 | 説教 | | | 司会者 |
| 九 | 祈 | 禱 | | 司会者 |
| 十 | 讚 | 美 | 靈感賦 一七番 | 一同 |
| 十一 | 頌 | 栄 | 讚美歌 五四一番 | 一同 |
| 十二 | 祝 | 祈 | | 司会者 |
| 十三 | 後 | 奏 | | |

祈禱(榎本和義牧師)

愛する天のお父様、尊き御名と御血を崇めて有難う感謝致します。あなたが選び、あなたがお立て下さり、この地上の生涯を九二年と十一ヶ月余りの旅路を終えて、あなたの御許に召されました榎本利三郎牧師。今日この所で今一度、あなたの御業を覚えて感謝を捧げ、あなたを崇める時を備えていただきましたことを、心から感謝致します。

あなたは主の僕である榎本牧師を、誠に懇ろに顧みていただき、様々な事を通して、あなたご自身の力と恵みと命を表して下さった事を感謝致します。榎本牧師はその地上に在る間、あなたの使命を全うし、その生涯を走り終わり、御許に帰りました。主よ、あなたが、今その所にあつて、豊かな慰めをもつて、その労をねぎらい、あなたの永遠の命の安きに預らせてくださっている事を信じて感謝致します。

残された私共一人ひとりが、主がなして下さった御業を心に留めて、あなたの御業を喜び感謝し、またあなたが私達人ひとりに求め給う、その御旨に適う歩みを続けて行く事ができますように、今日この所で更に新しい霊と命をお与下さるようお願い致します。卑しい者を潔め、主の霊と力をお与え下さい。尊き主イエス・キリストの御名により、感謝してお祈り致します。アーメン

説教（榎本和義牧師）

ひとこと聖書の言葉を開きたいと思えます。只今お読みいただきました使徒行伝二十章二四節の御言に、この様に記されています。「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」。

今日は皆さんが愛してくださった榎本利三郎牧師、私の父でもありますが、牧師の召天を記念しまして、このご礼拝を持たしていただけることを心から感謝しています。今、賛美を致しましたけれども、考えて見ると、記念会と言いますか、こういう亡くなった人を偲ぶ会にしては、そぐわない賛美ばかりであったかなと、思われるかも知れません。しかし、三曲歌いましたけれども、実はこれは父が愛して止まなかつた賛美の一部分であります。ご存知のように、父はあまりメソメソした事が好きではありませんでした。いつも明るく、テンポの良い歌が好きだったんですね。明治版の讚美歌はそうでありますし、先ほど歌いました靈感賦五六番もそうですし、今の一二一番もそうです。非常に歯切れが良く、潔く、そして喜びと感謝に満ちているという…、これが父の絶えず心に抱き続けて来た生き方、あり方だったと私は思います。恐ら

くここで、私共が「ああ悲しいな、寂しいな」などと、沈んだ様子を見るならば、「何を……どこにお前の信仰は有るんだ」と、こう言われてしまふに違いないと思えます。

最近、私は父が六二、三才の頃のメッセージテープを聞いておりますが、その中にこんな話があります。家族の者が集まって、「お父さんが死んだらお葬式は誰に頼もうか」と相談をしている。「自分の葬式についてそれだけ準備万端されているなら、私は安心だ」というような事を言っていました。その位の歳の頃から、父はもうこの地上の生涯が終わる事を、それは当然の事として、計算に入っていたのだと、私はそれを聞きながら思いました。本当に、父の目指していたものは、この地上でいつまでも長生きする事では決してない。家内安全、無事息災、自分の家庭の幸せだけが、うまく行けば良い、あるいは自分の地上での地位や名譽や、何かそういうものを手に入れば、その人生は素晴らしい人生だと言うような考え方は、毛頭なかつたとしみじみ思います。

では父の生涯の中で、何を命とし、力としてきたか。その事を考えてみる時に、どうしてもこの事を外す訳には行かない事柄があります。それは父の信仰の発端であります。神様の御愛を知ったという原点ですね。自分という者がどんなにしようもない人間であつて、神様の前に罪多く、滅ぶべき者

が、一方的な主の御愛に、十字架の贖いに預かつて、救われた。その事が生涯を貫いた、変わらない一つの大きな土台でありました。

この事はそれからの彼の生涯のすべての事に、繋がってくる訳です。彼はご存知のように生まれたのは、愛知県豊川市国府町の非常に古い、代々永く続いていた榎本家の次男でした。父の時代には雑貨屋をやっていました。皆さんも良く聞いておられるように、そのお店に行きますと、赤ちゃんの産湯を使わせる道具から、棺桶に至るまで全部扱っているお店だったそうです。で、その先祖をたどっていくと十五代位遡りますと、榎本重太夫と言う名前を持つ、人形師の家系なのです。三河地方には「からくり人形」と言うものがありました。人形に仕掛けをして、手を動かしたり、お茶を運んだりする、ああいうお人形を作る家だった訳です。それがずうつと長く続いていて、ある時から商売に変わったそうです。そして、その先祖代々が、ずうつと長く真宗のお寺さんにかかわって来ました。しかも、ちよつと端っこで信仰を持っていた訳ではなくて、長泉寺というお寺ですけれども、その代々の寺総代を勤めて来た家です。だから、そういう意味では、真宗の信仰深い家庭であった。それだけに宗教心に富んでいたと言えます。ですから若い時から、人生とは何だろうかという

事を、絶えず疑問に思い、その事を何とか知りたいたいと思っていた。そういう熱意があったようであります。ですから、仏教の話も聞く、キリスト教の話も聞く、いろんな所に行つて、いろんな話を聞いたようですが、どうしても心に納得が行かない。仏教の伝統的な家柄の中にながら、子供の時にちよつと、キリスト教に触れたと言いますか、いわゆる近くで行われていた日曜学校のような所があります、子供集会に行つてカードを貰つた事が一度か二度ある、そういう話を聞いています。しかし、全くキリスト教と縁もゆかりもなかった、そんな家柄に生まれ育つて来て、初めて主イエス・キリストに出会う。この聖書の神様の恵みというものに、初めて出会つたのであります。そして、その十字架の御愛に、本当に心を潤され、自分の人生が全く変わつてしまいました。

父がよく言っていた事は、よくまあ、あのような環境、生活の中から、自分がこうして神様の救いに預かる事ができた。その選びと召し、なぜ私であつて兄弟でなかつたか。父の兄弟、あるいは親戚一族には、まずキリスト教の信者はいません。父一人がこの救いに預かつている。その不思議と言いますか、神様の選び、恵みをいつも繰り返し、繰り返し感謝していました。自分のような者が、どうして救われたのだろうか。どうしてこのような者が、イエス様の救いに預かる事が

できたのだろうか。それは自分の努力や、自分の熱心な業や何かによるのではない、ただ神様の一方的なご計画があり、神様が選んで下さったのである。その事が彼の生涯の原点だったのです。

そして、次に、その神様の御愛と恵みにどう応えて行くか。これが次なる、父が絶えず求めて続けて来た生き方であり、原動力であったと思います。神様の愛に応える、応答して行く生涯。恵みに応えて行く。これは皆さんが耳にタコができるほど聞かされたことだと思えますが、神様の愛に応える生涯、恵みに応答して行く生涯を生きることでした。

と言いますのは、父がイエス様の救いに預かり、十字架の贖いに預かって、罪を許され、神の子とされた事を喜んで感謝している。じゃあ、そんな大きな愛を注いでくださった神様に対して、私は何をもって応えるべきであろうか。その応答として、自分の生涯を神様に捧げて行くことは、実に自然な結果でした。

私は父の生涯を振り返って見て、また、私自身が父から与えられて来た一つの信仰のあり方として、この一点、神様の恵みと御愛に感謝し、喜んで、それに自分を捧げ、応えていく生涯。この生き方、これが私自身受けて来た大きな父からの遺産であると、私は思っています。また、皆さんに対して

も父は常々、絶えず繰り返し語り続けたことではないでしょうか。人の為に生きるのではない。自分の為に生きるのではない。神様の限らない、一人子を賜う程の大きな御愛が注がれてある。その愛に対して、自分はどれだけの事をしているのだろうか。応える術も何もない、ただこの身を捧げるだけ。そして、後は神様の御心のままに、主が導かれる所に従ってという、この一途な思いを貫き通して行く。それが今お読み致しました二四節の所に、「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとつて、少しも惜しいとは思わない」とパウロは語っていますが、同時に父の切なる思いも同じでした。

二四節の中ほどに、「主イエスから賜わった、神のめぐみの福音」と記されています。イエス様から受けた神の恵みの福音、とは何の事か。それは取りも直さず、今申し上げた、一人子を賜うほどの大きな愛が、自分のような、こんな汚れ果てて、滅ぶべき者の上に注がれているという、この福音です。この福音を証しする。この喜びを、この恵みを、この望みを証しして行く事、これが、父が生涯をかけて、神様の御愛に応える勤めとして、受け止めた事柄でありました。

先ほどの十七節以下でお読み致しました記事は、聖徒パウ

口がエルサレムに帰って行く途中の事でありませう。エルサレムに帰りますならば、そこに自分を殺そうとして待ち構えるユダヤ人達の集団がある事も知っていました。エルサレムに行けば、どういう艱難や苦しみが起こって来るかも分かっています。しかし、どうしてもそれは神様から与えられた、自分のなすべき勤め、使命であると感じていた彼は、そこへ向かつて行く訳です。その途中で、丁度船旅でありましたから、ミレトという港町に入った時に、その近くのエペソの教会の人達を招いて、最後のお別れをした時の記事です。

私はこれを読みながら、これはまさに父が私共に語っているような思いが致します。もう私はこの地上に、あなた達と二度と顔を合わせて見る事はありませんと、パウロはそう言っています。その中でパウロが何て言っているかと言うと、二四節にあるように、「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら」、ただこの一言です。主イエス・キリストを通して、神から賜った恵みの福音を証しする。神様の証人として、神様の恵みを伝えて行く者となる。その伝えると言うのは、口で言うのではなくて、自分の生涯をかけて、その福音に生きる事によって、自分の生涯を通して表して行きたい。その原動力として、絶えず神様の愛に根ざし、愛を

基とし、愛に促され、愛に励まされて、始めから終わりまで、絶えず主の御愛に留まり続けることであります。

私は子供の頃、その事が良く分かりませんでした。何であんなことをするのだろうか。何であそこまで、あんなことをしなければいけないのだろうか。そう思ったことがあります。昔、この教会に一人の信者の方がおられて、その息子さんが道を外して、何度となく警察のご厄介になる。刑務所に入る。刑務所に入ると、必ずその息子から手紙が来る。私が小学校の頃でありましたけれども、手紙が来る。「この度は罪を犯して、私はとうとうこういう状態です。もう心から悔い改めましたから、どうぞ身受人になって下さい。保釈になることが決まれば、先生、よろしくお願い致します」。私もその手紙を見ました。その手紙には住所が書いてない。そして桜のブルの印鑑が隅っこに押してある。刑務所から来た手紙はそのような検閲済みの印判が押してある。で、父は「またか」と言いながら、直ぐに出所の時を聞いて、それに準備をする。夏でしたけれども、「着る物がないから、何か着る物を持ってきて下さい」。父は自分の着ている物を脱いでですね、半袖の開襟シャツやズボン等を持って、そして出所する小倉拘留所の方に、身受けに行く訳です。それは一度や二度ではありませぬ。何度でもです。私は「何でそこまでしなければいけないの

だろうか」、そう思いました。そうやって身受けされた人は、小倉駅まで来ると、「先生お世話になりました。私は今からちよつと行く所がありますから、もうここで失礼します」。教会には一度も来た事ありません。ただお母さんがご主人も亡くして、女手一つでその息子を育てて来たのですけれども、そういう失敗だらけで、本当に気の毒な境遇の中に居られました。私はそういう姿を見ながら、父が何でそこまでするのだろうか。時にはその人を家に連れてきて、泊まらせようという話を聞いた時、私はもう嫌だと思いました。そんな刑務所に居る人と一緒なんか嫌だ、と思ったのです。ところが、父はそういう事に頓着しない。それをしたからと言って、報いがある訳ではありません。その出所した人が、盆暮れに何かするということもありません。なしのつぶてであります。年賀状一つ来ません。来るのは拘留所に入った時だけ。でもそれを見捨てられない。それはその人に対して、何か義理があるからとか、可哀想だとか、哀れんということじゃないのです。絶えず祈り続けて、そこで神様が、今私に求められている事だったら、ここは主に従うべき事、主に従うべきと言うか、従わざるを得ない。そうせざるを、じつとして居られない、これが絶えず父を動かしてきた力、だったと思います。

信仰に生きる生涯は、イエス・キリストの御愛と恵みに、神様の御愛と恵みに、絶えず潤され、感謝、賛美しながら、その愛を大きくしていく生涯です。皆さんの中には、私は榎本先生からいろんな事をしてもらった、あんなに親切にしてもらった、あんなに優しくしてもらったと、思っておられる方がいらつしやるでしょう。きっと私だけをとっておられるかもしれない。それは誰に対してもそうしていたのです。ただ、人に対してしたではありませんで、絶えずそれは神様がその事を求められたからです。

また、ある時こういう事がありました。それは私の子供の頃の事でありませうけれども、教会に一人の人が赤ちゃんを連れて牧師館を訪ねて来ました。その人は黒崎の商店街のある所で、店員として勤めていた人です。まだ昭和の三十年頃その前後だったと思います。そのお店のご主人と深い関係ができてしまつて、そして言うならば今の不倫ですね、それでとうとう子供までできてしまつた。子供ができたなら、ご主人の奥さんが意地悪をして、そこに居たたまれなくなつて、飛び出して、帰る所がないということでした。父はお人好しだと思ふんですけども、我々の家族ですら食べるに困っている時に、その人を置いてやっている。そして、まだ小さな赤ちゃんでしたが、その子を何とかして乳児院に入れてあげよう

と、あっち走り、こっち走りして、乳児院にお願ひして預かってもらいました。そして、そのお母さんに仕事をと、一生懸命に仕事を探している内に、その方が一週間くらい居ましたか、「ちよつと出かけてきます」と言つて出て行つてしまつて、居なくなつてしまいました。どこへ行つたか、音信不通。

父はその方の事を心配して、心当たりを探していたら、どうも噂で、下関に居て飲み屋さんで働いているらしいと聞いて、下関のバーなどのある所を、一軒一軒探し回つて居るのです。その結果がどうなつたのか、私は知りませんが。そういう事でも、誰かその人を助ける為とか、何とかの為ではないのです。神様のためにそうしなければいけない、止むに止まらない、自分の内側からつき動かしてくるものがある。押し迫ってくるものがある。それはただ一つ、神の恵みの福音、この主イエス・キリストを通して、神様が注いで下さつたこの大きな御愛に、どう応えるべきか。何として応えるべきであるのか。この事に集中している。だからその思いが穢れる事を嫌いました。神様の御愛に応えないで、主の恵みに感じることもなくて、ただ人の為、世の為、誰かの為にするのだったら、それはするな。神様の前に、喜ばれる事を、徹底して求めて行く。潔い者となる事を、父は求めた。その潔いという事は、主の御愛に対して真実に応えることです。

だから、父が良く取り上げた聖書の言葉に、ホセア書の記事があります。ホセアは不倫の妻に苦しんだ預言者です。それは神様の愛に背いて、離れて行くイスラエルに対する神様の切なる思いを知るようにとの実地訓練だったので。ホセア書を通して、父は、神様の愛に対して、一分一厘、わずかでも不純な思いがあつてはならない。愛に真実に応えていくという、神様の前にある自らの潔さ、あり方を追い求めて来た生涯であります。父が絶えず主を前に置き、主の愛に励まされ、導かれ、その愛に応答して行こうとする。どうやったら主の愛に応えられるだろうかと求め続けた生涯。それを振り返つて、私自身の信仰のあり方を問われています。

私共が父に、ああしたら良い、こうしたら良い、こうすべきだといろんな事を言ひましても、頑として聞きません。頑固者だと思ひました。分らず屋だとも思ひました。しかし、父にとつては当然な事なのです。人の言う事じゃなくて、主の御心がどこに、神様の愛に応えて、自分に与えられた使命を全うするにはどうしたら良いか。ただそれをひたすらに求め続けたからです。

ですから、今お読み致しました二四節に、「神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」。だから、神様がそ

れを求めるなら、命を失おうと、何がどうなろうと構わない。主のご愛に応える、この事だけに全力を尽くした。晩年何度となく、病に倒れては病院に入り、家族は心配しまして、繰り返し、「もうそろそろ引退したら良いんじゃないの。若い人に任せたら良いのじゃないか。ああしたら、こうしたら、もう辞めときなさい」と言ったものです。でも頑として言う事を聞きません。私は今しみじみと思うに、ああ本当に彼の、主を前に置いて生きる生き方、どうしても自分に命が与えられている限り、果たさなければならぬ、果たさざるを得ない、神様の愛に迫られていながら、それを中途半端に止める訳には行かない。その代り、倒れても、入院したら、その事を喜ぶ、感謝する。退院したら、それで喜ぶ。また二度目も三度目も四度目も、繰り返しても、また戻って行く。

あのパウロがルステラという町に伝道に参りました。その時にそこで一人の人の病気を癒しました。お祈りしたら病気が治ったのです。町中の人はびっくりしまして、これはもう神様だ。そしてパウロを祭り上げて、礼拝を始めようとした時に、彼はそれを拒んだ。そこへパウロを殺そうと狙っていた連中がやってきて、彼を石で撃ち殺そうとしました。もう瀕死の状態になって死んでしまう。死んだような状態で、町の外へ引きずり出され、捨てられました。しかし、しばらく

したら、そこからまた起き上がった。起き上がった、またその町へ戻って行くのです。一度死ぬほどの痛い目に遭ったら、そこは避けて、早く他の所に行きたいと思うでしょう。パウロはそんなことを絶対しない。もう一度自分が打たれた町に戻って行く。父も、繰り返し、繰り返し病に倒れながらも、また戻って行く。退院してしばらくは、二、三日は静かにしています。その次の日くらいから、「僕がやるから……」と出てくるのです。それはその事柄の背後に、どうしても引けない思いが絶えず有る。それは、神の恵みの福音を証しする使命を、放棄することができない。これは徹底した歩みですね。

またそれは私達の地上の生き方でもあると思います。私共も、今この同じ神の恵みの福音に預かっている者であります。その主の御愛にどう応えていくのか。これが私達の今求められている事だと思えます。どうぞ私達も、こんな者が救いに預かり、十字架の命をもって贖って下さった神様が、今日も命を与えて下さっていらっしゃる。その命を私達は、どう使っているのか。父の生涯は、常に神様の愛に根ざし、愛を基とし、愛に励まされ、促され、そして何としてもその主の愛に応えて行くことでした。

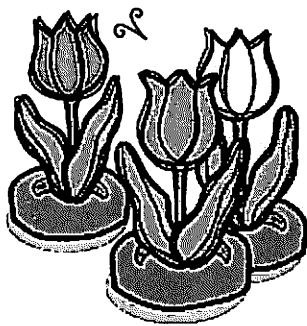
この時のパウロもそうであります。エルサレムに行く事は、

身の危険が、死が待ち受けていました。周囲の人々は止めました。パウロに、「行かないで下さい。あなたには死が待っています」と言いました。止めた人達も御霊によって、パウロを引き止めました。しかし、パウロはこの二二節にありますように、「今や、わたしは御霊に迫られて、エルサレムへ行く」と語っています。彼自身も御霊に迫られている。言い替えると神様の力に押されて、死をも厭わないで、前進せざるを得ない。先へ進まなければならなかったのです。聖霊が片方では引きとめ、片方で促し、どっちが正しいのかと迷います。神の御霊は、私達一人ひとりに、私達がすべき事を求められます。それを神の御霊の導きに従って、それに力を尽くして行くか、それを捨てて、拒んで他の道を選び取るか、絶えず一人ひとりが問われている事柄であります。パウロに問われていたのは、どんなに死の危険があろうとも、エルサレムに行くべき事、これが、今、神様が、私に求められている事であると、確信していましたから、どんなに引き止められようとも、それを受ける訳には行かなかったのです。

私達も絶えず、主の御霊の御声に従い、神様のご愛に感謝して、喜んで、主が行けとおっしゃる所、主がせよとおっしゃる事を、たとえ、自分の命を失おうとも、友達を失おうとも、あるいは家族の大反対に遭おうとも、主の愛に応える生

涯、これが父と同じ生き方をする秘訣、その道ではないかと思えます。つい私達は人を見、世を見、結果を見て、事を決めようとなります。そうではなく、絶えず神様の御愛と恵みだけを見上げて、その愛に私はどう応えて行くか。今、自分が神様の恵みと御愛に生かされているかどうかを、神様の前に絶えず問い続けて行く生涯、これを私共も生き抜いて行きたいと思えます。

やがて、自分の行程を走り終える時、私達も喜んで主の御許に帰って行く事ができます。父は、十分に最後の最後まで、悔いる事なく、主の御愛に応える事のできた生涯を歩み抜いてくれたと思えます。どうぞ私達も、この主の御愛と恵みに生かされる生涯を全うして、やがて、主の御前に本当に喜びを持って、感謝して立つ事ができる者になりたいと思えます。ご一緒にお祈りを致しましょう。



祈祷（榎本和義牧師）

「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」。

愛する天のお父様、今朝、尊い御言を備え、この地上に生きる私共が、何の為に生かされ、何の為に生きる者とせられているかを、もう一度堅（か）とうなしていただきまして、誠に有難う感謝致します。榎本牧師をあなたが選び、あなたの十字架の救いに預（ま）かしめ、限りなき大きな愛を注いで、彼をしてあなたの福音の証し人としてお立て下さいました事を、誠に有難う感謝致します。榎本牧師はその生涯をかけて、あなたに与えられた、この素晴らしい恵みの福音を生き抜いて、私共に証詞を立てて下さいました事を感謝しつつ、今、地上に残された一人ひとりが、この恵みに生かされる生涯を、全うする事ができるように、またそれぞれ遣わされます所々、主の御愛に絶えず目を向ける事ができますように、あなたの御愛と恵みに応答して、真実な歩みをする事ができますように、助け導いてください。

尊き主イエスキリストの御名に依り、感謝してお祈り致します。アーメン



九 榎本利三郎牧師記念会

以下は、二〇〇二年五月六日(月)に行なわれた榎本利三郎師記念礼拝の第二部「記念会」でのお証詞の内容です。



お証詞をされる百合子先生

司会(金生伝道師) 先生が靈感賦を歌う時によく言われていたことは、靈感賦は自分達の証詞の歌なんだということでした。確かに、讚美歌もいい歌ではあるんですけど、先生が好んで歌われた歌は、やはり靈感賦が多かったと思います。ですから今日はこの記念会において、先生の信仰に倣うということも合わせまして、靈感賦をいくつか賛美したいと思います。

靈感賦五八番 「エスはわがものなり 我は血に洗われ」
お祈り・食事の後

司会 記念会のお証詞の時に移らせていただきます。

今日、皆さんご存知のように、これだけ多くの方がお集まりいただいておりますので、なるべく多くの方にお証をしていただきたいと思っております。三分ぐらいのつもりで、お証をしていただきたいと思います。

百合子師 お証詞させていただきます。私は主人と結婚いたしましたして、六一年になります。それこそ、もう、朝から晩まで一緒におりまして、静まりに行く以外に、離れることありませんでしたから、その中で、イエス様がどんな御方かというのを、身をもって学び取らしていただきました。主がどんなに私共を愛してくださっているか、命を捨ててまで、私

共を愛してくださる神様、そして主イエス様の御愛を、本当にこの六一年間の間に、私に知らせていただきました。本当にすばらしい生涯でございます。ありがとうございます。

榎本誠兄 葬儀から前夜式からずっと教会の皆さん方にはお世話になりました、本当にありがとうございます。別に親族代表というわけでもないのですが、長男の俵雄は、今日は都合が悪く参加できませんで、親族代表としては和義がさつき説教しております。

信仰のことに付きましては、多分、皆様の方がお証詞なさると思いますので、僕はそれ以外の所で、牧師館におりまして、父と息子の関係で五一年間付き合っていたいただきましたけれども、教会の皆さん方はもつと長く、付き合っていたらっしやいますので、思い出深いことが多いと思います。

ここ一年半くらい食が細くなりまして、あれだけよく食べていました父が、電話をする度に、「食欲がない」「食べたくない」と言うものから、帰る度に、「食べる、食べる」と言うのですが、僕などが来て、一緒に食事をしますと、無理をして食べてくれますが、やはりなかなか食が進まない。段々数え切れないくらい入院を繰り返しましたけれども、ここ一年半くらい、かなり衰弱が激しくなっております。特に昨

年ですか、入院した時に、心臓と肺と両方に来たことがございまして、それ以来、目立って本人も、もう神様の御許に帰る日が近いのではないかと思ひ始めたようです。恐らく、教会に一步足を踏み入れると、どんな体の状態であっても、いつもと変わらない父だったようですが、やはり牧師館あるいは、僕が離れていますので、時折、電話しますと、かなりきついということ、ここ一年もらしておりました。早く召されたいと、僕にもらしたこともございます。子供としましては、あれだけエネルギーがたっぷりだった父が、こういう弱音を吐くようなことを聞くのがつらくて、信仰のない私ですが、いつも逆に、電話で父に聖書の御言を言うのですね、「そうだ、お前の言うとおりで」と、初めて褒めてもらいましたけれども、そういう形で、ここ一年半くらいの父を見ていますと、神様の使命をいかに最後まで全うするかという事に掛けていたやうなものがあります。

三月に、ようやく時間ができて、退院明けということもあって、久々に前田の礼拝に出させていただきました。そのとき、父の御言がやはりこれですね、新年聖会の御言。で、話している内容というのが、まさしく自分の告別式の司式をやっている内容でして、終つて夜、父に「今日の礼拝は、自分で告別式をやっているじゃない」と言ったら、「そうなんだ、こ

这一年間ずっと、自分の告別式、教会の皆さん方に最後のお別れをしているんだ」と、要するに言い残すことがないようにしたいと、そういう思いでずっといたようであります。

四月に入りまして、和義の方から父が倒れたという電話がありました、飛んでまいりました。病院へ駆けつけましたところ、思ったより元気そうに見えました。二日間ほど看病させていただいたんですけれど、そんな中で、息が苦しい、あるいは意識が朦朧(もうろう)とするような中で、誰かれとなく名前を挙げては、この方はどうしてる、あの方はどうしてる、あるいは我々の家族だとか、いろんな方のことを、自分の心配ではなく、一生懸命心配していました。その都度、お祈りを小声でしながら、眠りについいたり、目覚めたりということをやっております、そういう状態でまた回復するのだろうかと私は期待しておりましたし、祈っておりますけれども、十日の夜、九時半ぐらいですか、病院から戻って、夕食が済んだ頃に、病院の方から電話があったと咲子から連絡がありました、急いで、車を飛ばして駆けつけたのですね。この辺の話は、私など、身近で見えておりましたので、少しお話ししておいたほうがいいかと思いますが、父はベッドから降りてどこかへ行くこうとしたらしいのです。そこで倒れて、私が駆けつけました時には、当直の先生が処置をなさっていて、

テレビでやっているER状態(救急救命室)、まさしく口の中にパイプが通っている状態で、看護婦さんが大きなボールのようなもので、強制的に呼吸をさせているという状態でした。当直の先生の話では、実は数十分前に倒れて、心臓停止、それから呼吸も停止していた状態だったから、最悪のことを考えておいていただきたい、という風なことを手短にお話くださって、その後、冬野先生が見えまして、いろいろ処置をしてくれました。その後の事は葬儀の時に、俵雄が話したとおりなんです、手動による強制的な人口呼吸を外していただいて、皆で讃美歌を歌い、祈りながら、その中で外していただいたのですが、そのあと不思議に自立呼吸が始まりまして、血圧も上がり、脈拍も元にもどるという不思議な状態を体験いたしました。そのまま一晩付き切りでございましたが、その間ずっと祈っておりましたけれど、ひよっとしたらこのまま、父のことですから、しぶとく復活してくるのではないかと(笑)、そういう信仰を持ちたいなと祈らせていただいたのですけれど、小田義昭兄と俵雄と私とうちの女房とで付き添っていたのですが、夜が明けまして、一晩無事に済んだね、と感謝しておりました。

早天祈禱会を終られて金生先生ご夫妻が見えて、金生先生ご夫妻がお祈りして、父は聞こえているかどうか分かりませ

んが、その頃から急に、それまで一晩中、生理的な現象だということですが、かなり息苦しうでした。非常に荒い呼吸をしていましたが、その荒い呼吸がだんだん深いゆっくりとした呼吸に変わりました、それから心臓のモニターをしておりましたが、そのモニターの山が、だんだん間隔が広がって、看護婦さんが何回も血圧を測られたのですが、静かに血圧もさがり、主治医の先生も飛んで来られているいろいろな処置をしていただいたのですが、その頃から、七時過ぎぐらいでしょうが、金生先生にお祈りしていただいた後、金生先生の来られるのを待つておったかのように、安らかな寝息を立てるようになって、側で見えておりました私も、まさしく今神様が御手に抱いて天国へ召してくださいっているな、というのがよく分かる、目の前でそれを見せていただいた気がいたします。非常に痩せこけていた頬も、不思議とふつくと戻って、お棺の顔を皆さんも見ていただいたように、穏やかな、いつもの父の顔に戻っていたというのは不思議な気がいたしますけど、神様の御手の業をまさしく示していただいたなと思っております。

ですから、そのとき思わず父に向かって言ったのは、「お父さん、お疲れ様でした。ご苦勞様でした。ゆっくり休んで」と。それと、この父の信仰、神様にいかに最期まで手を抜か

ずにお従いするかという、その父の生き方が決して間違っていないなかつたことを教えてもらったことを感謝いたしました。父は自分の死んだ時の姿を通してまで伝道したなと思っております。これまで不信仰を父から言われていたのですが、父の信仰を大体分かっていと思うのですが、いやまだ分かっていないところがあったと、ここまですごい信仰を父は持っていたのだと。また、それを支えてくださった神様が確実にいらつしやうって、支えていらつしやうと教えていただき、感謝しています。

悲しみというよりも、私の場合は感動が続いています、これから主を見上げて、お従いして行きたいと願っておりますので、お祈りに加えていただきたいと思います。ありがとうございます。

司会者 先生が今年に入られてから、よく礼拝前、礼拝後にお祈りにいきますと、同じようなことをおっしゃっておられた。ヨハネの十四章一節を通して、「これが、神様が私に与えてくださったメッセージだ」、それを証詞していかなければ、この何年か、病気になって入院され、また退院される度に、「まだ宿題が残っている」とおっしゃっておられました。最後の最後まで、神様がその御用をさせていただいたことを教えてい

ただき、感謝でした。

それでは皆さんの思い出をお話していただきたいと思いますが、先生は、いろんな言葉を残されておられると思います。その一つには、恵みに感じて、という言葉をよくおっしゃっておられました。私達も今日お証詞をさせていただくに当たって、私達自身が本当に恵みに感じてお証詞をさせていただきたいと思います。

正野眞宏兄 トップバッターの特権を生かして、一つだけお話したいと思います。

今、私もリタイアいたしましたして、時間がありますもんですから、朝静まる時を持たせていただいておりますが、出エジプト記十九章十七節を読みました時に、その箇所はモーセがイスラエルの民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、彼らは山の麓に立ったという箇所がございまして、私は信仰とは、聖書を読み、お話を聞くだけではなくて、主に触れるということがいかに大事であるかということ、学ばせていただいたのですが、その時ふつと、榎本先生の事を思い出しました。考えてみますと、榎本先生自身が、ただ単に聖書の解釈をするんじゃないかと、私達を生ける主に触れさせてくださったことを感じるんです。

私は、別の教会に行き、途中から前田教会に来させていだいた者ですが、最初に来た時の印象は、ここは違う、何かしら、主に触れるような、そんな印象を大変強く持ちました。この教会から、ほかの教会へ行かれた方がいらつしやいます。が、他所の教会で満足できないというのは、多分この主に触れるというところが、なかなか得られない、ということがあるんじゃないかと思えます。私自身がこの教会へ導かれて、榎本先生を通して、聖書知識だけじゃなくて、主ご自身に触れさせていだいた。それを先生が導いてくださった。モーセがイスラエルの民をホレブの山に導いて、神様に触れることができたように、私も小さな信仰ではありますけれども、このイエス様御自身に触れさせていだいたことを心から感謝しております。先程の話にありましたように、先生ご自身が主に触れて、ここだよ、ここにいらつしやいと、私達を導いてくださったことを、大変有難いと思っております。

バックストン先生が、柘植先生の「ペンテコステ前後」の巻頭言に書いておられる言葉に、一番大きな恵みは良き牧者が与えられることだ、という趣旨のことを書いておられます。私達は自分で教会を選ぶということが、なかなかできないのですが、本当に幸いにもここに足を踏み入れさせていただいて、私達を活ける神に導いてくださった、まことに神の人と

言うのでしょうか、榎本先生に出会うことができたことは、本当に大きな神様の恵みだったなあ、と感謝しております。

私達自身が、この主に触れて、この方を知らない方々に、ここに神様がいらつしやるよ、だからここに行きましよう」と導いてあげることができるような信仰、そういう榎本先生の歩みに倣っていきたいと感じております。

司会者 今、正野さんがお証詞しておられたように、「切れば血の滴る現実で」と先生がよくおっしゃっておられました。が、本当にその主に触れる生涯を送られたのだなと思います。

安東篤良兄 ご無沙汰しております。私も榎本先生の思い出として一番に残っているのは、福岡に行った時、福岡は、榎本先生が当時、月に一度くらいの礼拝と毎週の火曜会にお見えいただいたて、御用をしておられました。ある時、教会学校の夏期学校のご相談申し上げた時に、愚痴っぽく、前田にいた時には駆け込み寺みたい、すぐ相談に行けたんだけれども、こつちにいるとなかなか八幡まで行けないから、とお話した時に、ここはあなたに与えられた一番いい訓練の場です、そこで直接神様から聞くようにと、あなたに備えられてるのですから、そこを大事にしなさいとおっしゃって

いただきました。それで、本当に、先生から学んだことは、それからズーツと東京の方まで回ってきましたけれども、一番大事なところを、神様と直接お話ができる、神様と祈りをもつて交わりができるという基本的なところを教えていただいたのは、本当にすばらしい宝物であります。私が今あるのも榎本先生の信仰の導きだと思っております。

安東倫子姉 同じく安東です。私は榎本先生が大濠の火曜会に来られて、午後と夜と御用していただいて、子供達も先程歌いました靈感を、託言や供子がまだ舌が回らない時から、榎本先生にお会いして、抱っこして高い、高いをしていただかないと帰らないという感じでした。それから、東京の集会、大阪の集会にも出させていただいた時に、利三郎先生は、主の御用であれば、手飯手弁当でそちらに福音を伝えに参りますという、そのお言葉どおり実行されました。いつもおっしゃっていたいただいた言葉に、信者にとつて、クリスチャンにとつて呼吸することはお祈りです、ですから、いつもお祈りして集会に出て、御言をいただいでください。そして、耳が聞こえる時に、大きな声でお話も聞かせていただきますし、賛美し、また、目がよく見える時に聖書を毎日ひも解きなさいという言葉が、いつまでも残っています。本当に、先生はご

自分のおっしゃったことを実行なさった方だと思つて、今更ながら、先生の所へ導いていただいた主に感謝しました。

堤善弘兄 私は八幡に来まして、四十年になります。私はその頃、この電車が通るところで、前田町で止まりますので、「神は愛なり」と書いてある看板を見ながら、ああ、ここに教会がある、と思ひながらここを通つていました。そして、ここにお世話になつて、三七、八年にはなります。この燃えるような、そして、本当に「死に至るまで、彼は従順であつた」と、あの熱烈なる信仰の歩みを、私に授けていただき、牧していただきました榎本先生に、本当に感謝いたします。

私、七十歳を越えまして、私の人生何だつたかなあと考える時に、何にも目的もなく、融通無碍(むげ)という言葉を利用して、いい加減に生きてきたことを、最近、後悔しておりました。ところが、榎本先生の生き方をずっとお話を聞きながら、そして、牧されるそのお言葉を耳にしながら、やつと、「主を前に置く、わたしは動かされることがない」ということが、最近分かりました。本当に、榎本先生ありがとうございます。ここで初めて信仰の、神捕らえ給うとよく分かりました。本当に感謝です。

野村美恵子姉 指導していただいて五十年余りを過ごさせていただきましたけれど、本当に信仰に立つたというのは、主人が召された後と思ひます。考えてみたら、主人がいる時は、主人の傘の下にいたような感じで、自分自身で立つていなかったと思うんです。一人になつてからの歩み、それについて、先生が真剣に指導してくださつたな、としみじみ思ひます。先ず、先生が、告別式の前にここに運ばれて来られた時に、ご遺体が輝いているのを見まして、「燃える柴」という言葉が浮かんだのです。榎本先生が「燃える柴」になられた。私達のためにいつも光り輝いて、歩みを導いてくださると思ひました。

それは先生がお召されになつた時の感想ですけど、私が先生によつて導かれて、今も一番感謝していることは、隣の公団に住ませていただくようになった時のことです、先生がおっしゃってくださいつた言葉によつて、ここに住む勇氣と力を与えていただいたと思ひます。

本当に、待ち望むことの鈍い者で、半年ほど待つたら入れるというのに、もう待ち切れずに、ほかの方に足を向けて、私はもう入るところ決まつたから入りますと先生に報告した後で、公団に入る許可書が来たものですから、私は慌ててしまつて、どうしましようかと相談した時に、先生が「どうして

そんなに変わるのかね」とびつくりされたようでしたけれど、一応電話を切った後ですぐ先生が電話してくださって、「電話したのは、あなたが人の事に心を使うから」とおっしゃって、「公団に入る方が先のことを考えたらいんじゃないですか」と言うので、その時ハッキリと「はい、そうします」と先生にお答えして、何があっても、どういう事があっても、公団に移ることを決心させていただきましたという事で、ここに入る事ができました。先生がわざわざ電話してくださって、「人の事に気を使わんで」ということを、今だに心の中にあって、何かある時には、前の私だったら、誰か彼かに声を掛けて、考えやすいものでしたけれど、今は先ず神様に目を向けて、祈って、道を定めていただいで歩く、それが本当にできる、そういう風になしていただきましたので、決断をするきっかけを与えてくださった先生に感謝しています。

先ほどから、和義先生のお話を通して、先生が神様の御愛に應える生活を全うしてくださいました。私もよく祈りの中で、主の御愛に應える歩みができますようにと祈るのですが、お話を聞いております時に、主の御愛に應えることが、どんなに厳しいことであるか、おいそれと主の御愛に應えて歩むなんてことは言われないような気がしたんですけど、やっぱり、どんな小さい歩みでも、たどたどしくても、主の御愛に應え

ていける生活をさせていただきたいと願いますから、先生の教えを思い出しながら、本当に輝いて話してくださいる先生の言葉を思い出しながら、歩ませていただきたいと思っております。



尼田兄 私は尼田隆己と申します。自己紹介をしなければいけないくらい、この教会から遠ざかっております。昭和三六年四月に受洗いたしました、それから大体十五年くらい、たどたどしい信仰ではありましたが、信仰生活ができました。昭和五十一年に神様を見失って、現在に至っております。榎本先生が召され、走り去った信仰の姿を見て、信仰の道が確か、安全であること、自分ばかりの道を歩んできた自分とは随分違うことを、告別式で示されました。それは天と地と申しますか、どうすることもできない……(涙)、告別式で和義

牧師がこの御言、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」という言葉も分かりました。だけど、踏み出せないのです。一步が踏み出せないのです。そういう気持で告別式を終りました。明くる土曜日は、

写真の整理や、今そうやってとどまつて、踏み出せないでいる自分の姿を榎本家の人々にお証しするために、それぞれに手紙を書いて、やつと夜十一時ころ、風呂に入ることができました。そこで、先生のことをいろいろ思い出しておりましたところ、前夜式で、正野眞宏さんが私に漏らした言葉を思い出しました。それは、「尼田さんと一緒に受洗した人が、ここには沢山いるよ」と「そのうちに感謝会をしないとイケないね」という言葉でございました。私はその時よく分かりませんでした。その時は、踏み出せないでいる自分を見て泣くばかりで、風呂の中で、「何もしなくてもいい、神に記されている。覚えられている」と、一瞬でございました、本当に感謝する以外にありませんでした。そういう姿の私を、「あなたは私の宝だ」とも言ってくださいました。助かりました。本当にありがとうございます。

林由記子姉 先生、ありがとうございます。まだ先生が召されたとか、とても信じられないような気がします。今でも、

牧師館で静養されていらつしやるかな、という思いがいたします。先生にはどんなに長い間、心配していただき、祈っていただいたことか、数えることができないくらい沢山のご愛をいただきました。本当に有り難うございました。

この記念会を迎えるに当つて、心にあります聖書の御言を讀ませていただきます。へブル人への手紙十三章七節、「神の言をあなたがたに語つた指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならないさしい」。本当に先生は、ご集会において、ご礼拝において、まず御言に従うということがどういうことであるかを、一つひとつ示していただきました。懇ろに諭していただいて、日々の生活の中でどのようにお従いしていくのか、また神様に信頼していくというのが、どういふことなのかも教えていただきました。その教えを通して、今日あることを感謝しています。どんなに感謝してもし尽くすことはできませんけれども、ただ今は、先生にありがとうございます、と申し上げるだけでございます。さきほど、誠さんがおっしゃられましたけれども、「どうぞ、先生、ゆつくりお休みください」というのが、心にいっぱいです。とにかく、先生に、ただただ、ありがとうございます、お礼の気持ちでいっぱいでございます。ありがとうございます。

高木ツルエ姉 先生の信仰の歩みにつきまして、もう和義先生が言われたとおり、先生は私共に対しても、神様に対しても、歩いてくださいました。私達が、よく問題をもって、牧師館にお訪ねして、お祈りしていただくのです。そうしますと、先生は必ず御言をもって、お祈りしてくださいました。私達が不信仰になりますと、すぐそのお言葉を思い出して、そのお言葉に信頼して、信仰の道に立ち返らせていただきました。よく私達は牧師館を訪問しまして、先生方から祈っていただき、また指導していただきまして、先生方の毎日の生活を見せていただきました。その時に、神様にお従いすること、神様を恐れて神様の道に歩くこと、その事を先生方の生活を通して示していただきました。ご自分の身を顧みないで、私達のために尽くしてくださいました。

この教会の信仰が、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」ということでございまして、先生は絶えずこのことを通して、私達を信仰の道に導いてくださいました。早天祈祷会の時に、ガラテヤ書二章一九節ですか、パウロの信仰を通して、「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあ

って生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をさげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」と、この事を強調してくださいまして、私達の心の内にとどまるように教え、導いてくださいました。

そして、神様の御愛につきましては、ヨハネ第一の手紙四章の、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。神様の御愛はここにあるんですよと、噛んでふくめるように、示していただきました。

先生の記念会に出席させていただく時に、先生がいつもお祈りしてくださいましたし、御言を持って私達を導いてくださったということ、どんなに私の信仰生活の力になったことか、今も心から感謝しております。

先生、百合子先生がよくお祈りしていらっしゃいました。信仰をもって祈らせていただいています。今、皆さんが神様を信じ、神様をあがめ、先生の祈られたとおりの生活をなさっておれるということを思いまして、私も信仰を持たせていただきました。家族の救いのために祈らせていただいております。幸いなこの教会に導かれて、心から感謝しております。ありがとうございます。

正野悠子姉 記念会で、この懐かしい教会へ導いていただいて、本当に畏れおののいている者でございます。私は卑しい、不忠実な者ですのに、限らない勿体ないような神様のお恵みに与った者でございます。

話は前後しますけれども、榎本先生からちよつとした会話の中で伺ったお言葉が、心の隅と言いますか、魂の内にえり刻んでいただいたお言葉がございます。

それは、「私はこの八幡の地に伝道者として遣わされたのではない。私は主の僕として、この地の多くの魂の救いのために、祈りの御用で遣わされたと信じている」とおっしゃったお言葉、何でもない会話の中でお話しになった言葉でしたけれど、それがずっと私の内にございました。それでもなかなか榎本先生のような歩みができない。不忠実な、不真実な者でございます。

先生が主の愛に感じて、ここに伝道をなさった、主の証詞人としてお立ちになった故に、こんな卑しい、本当に死を目前にしたような者が、生まれて初めてキリスト教会の礼拝に導かれ、「主は我がために命を捨て給えり。それによりて愛ということを知りたり。我らもまた兄弟のために命を捨つべきなり」という御言のメッセージを、榎本先生の口を通して語ら

れたお言葉を聞かせていただいた瞬間に、ご聖霊によりまして、私の魂に入っていたいただき、そこから生きる力を与えられ、神様の限らない御愛を戴いて、今日という日を迎えさせていたいでございます。

その間、昭和四年のある時、この言葉を味わっている時に、私は主に導かれてこのように死んでいたはずの者が生かされているのに、何か主の御愛にお答えしたいな、と祈りながら静まっている時に、もう一度このお言葉にお迫りをいただいで、ふつと自分自身が辿ってきた生い立ちから、児童伝道に何か役に立てていただきたいと、不純な動機を持ちまして、献身という意味も分からず、修養生という意味も、何にも分からないままに、自分勝手に仕事を辞めて、榎本先生の所に、「よろしく願います」と押しかけたような者でございます。その時に、榎本先生は何にもおっしゃらないで、私の不純さも、内にある穢れた野心もお見抜きになつておられたと思いますけれども、一言も、教訓めいたこともおっしゃらずに、「あなたが私達と一緒に死ななければいけない時には、一緒に死にましょう」と言つて迎えてくださいました。それから私は野心がある故に、どうしても先生方の生活の中に入つて、先生方が喜んで、どんな中にもつぶやくことをなさらず、毎日、一日の生活が最高の一日だと言つて、喜び輝

いてお二人で主を崇めていらつしやる。何でもないお掃除をしたり、お食事の用意をしたり、日常茶飯事の中に喜び輝いていらつしやる姿が、どうしても私には不思議でなりませんでした。というのが、教会に来てメッセージを伺ったり、特別なことをやっている時は、神様に従っているような思いがするんですけれど、実際の生活に入りますと、そこからかけ離れた生活を私は送っている者ですから、どうして先生方はお忙しい中を毎日毎日そのような生活ができるのか、と思つたものでした。

昭和四二年から、大濠との兼牧をなさつたと、私は記憶しておりますけれど、それから二年足らずの後に、私が勝手に先生方のご家庭に入らせていただいて、今思いますと、恐れおののくような、なんで私みたいな者がこんな恵みにあずからせていただいたんだろうと、もったいなく思います。その時には、意味もよく分からないままに、入らしていただいたものですけれども、その内に先生方のご生活、主に従つておられるご生活に触れ、拝見させていただき、また、その中で一緒に、主に従うということがどういふことか、何にも教えろという教訓めいたことは、一言も先生方のお口から伺つたことがございません。お掃除の仕方何にも知らない、それこそ野生派の私で、何にも分からない者に、手取り、足取り

して、教えていただき、愛の労をとつていただいて、今日なんとか家庭生活を送らせていただけけるようにまで、していただいた者ですけれども、そういう中で、ある時、先程お話ししました「私はここに伝道者として遣わされてはいない。主の僕として神様が遣わしていただいたので、ここで主に従わせていただいていることが、本当に感謝だ」ということをおつしやつたことが、魂に深く刻まれて、その御言によつて、先生方を見る目というのですか、そういう目で見せていただいた時に、最後に先生の御召天に到るまでのご生涯を通して、私にハッキリと神様がメッセージを与えておつてくださいます。それは、マタイによる福音書の一六章二四節でございます。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい。…わたしのために自分の命を捨てるならばそれを得」というお言葉をまったく踏み従われたご生涯だったな、と思ひます。

少し長くなりますが、特別私が卑しく愚かであるが故に、神様から実際に見せていただいて、教えていただいた一つの事をお証詞させていただきたいと思ひます。それは、大濠公園教会の後任牧師が、神様が榎本和義先生をお送りになるまで、十八年間という榎本先生の兼牧の時期がありました。その間、六年間は大濠の方に私共を導いていただきました、あ

ちらで、大濠の教会で御用なさっている榎本先生のお働きを、メッセージを聞かせていただき、先生の歩かれるお姿を見せていただく中に、その前の十二年間というものは、この教会で黙々と祈って後任の牧師を神様がお起こしになるまで、人から何と言われようと、あるいは誤解、曲解を受けられたと思います。あるいは、本当に野心家だと先生のことを誤解なさる方もおられたかもしれせん。そういう戦いの中を黙々と神様の御業が現れるまで、祈って、祈って、主に従う道だけを黙々と歩き抜かれた先生の証詞のご生涯というものは、私はもう頭が下がるというよりも、主に従う道がこれだな、ということ、生涯の宝として、私の内に教えていただきました。伝道会からも多分、神学校を卒業なさる方の推薦もあられたでしょうし、あの方、この方という推薦の声もあつたようですけれども、祈って、祈って、祈って、主を待ち望んでいかれた先生のお姿を忘れることができません。そのお姿の中から、私に神様がお与えくださったメッセージは、詩篇の六二篇一節、「わが魂はもだしてただ神をまつ。わが救は神から来る」。この事を教えていただきました。どんな中にあつても、状態がどんなに悪化しようとも、ただ神様を信じて、最後の最後まで、神様の御業が現れるまで、待ち望まれて、その結果、神様がすばらしい御業を顕していただき、神様の

聖なることをハッキリ顕してくださいました。その事実を十八年間、前田教会におらせていただきながら、また、牧師館で修養生として置いていただきながら、また、残された六年間を大濠の方で、榎本先生が黙って待ち望んでいられるお姿を見せていただきながら、教えていただきまして、もう一度、先生の最後のお顔を拝見させていただきながら、自分を捨て、自分の十字架を負って神様がおいてくださったところで、主の僕として、忠実な歩みをしていかなければいけないのだな、ということ、を学ばせていただきました。

いつも、いつも、口で、心でつぶやき、横を見、人を見、人の声に耳を傾けるといふ、本当に不忠実な、不真実な、卑しい者でございませうけれども、先生の最後を通して、神様の前に壇を築かせていただきました。ここから、もう一度、改めて、自分を捨て、自分の十字架を負うて、主が導きたもうところに、黙って神の救いを待ち望みつつ、お従いさせていただきます。切に祈り、また願っております。

榎本先生、また百合子奥様には、こんな者のために、本当に、長い間、ご忍耐を持って、お祈りいただき、また、ご指導いただき、お導きいただいたことを感謝いたします。この教会の皆様には陰にあってお祈りいただいております。このまま、これからも何とか主の御前に少しでも真実な歩みを、

ここから、改めて、始めさせていただきたいと願っておりまして、どうぞお祈りのうちにお加えくださいますようにお願いいたします。

廣田壽兄 一九四八年ですか、終戦のあと、三年くらいして入信いたしました。そして、大阪からこちらに参りました。二年間してからでしたから、一九五〇年、誠さんがお生まれになる以前のことになります。初めて転会しまして、向こうの教会では随分鍛えられたつもりでおったのですけど、こちらに参りまして、純福音に接しまして、はあ、これが本当の教会なんだということを知らせていただきまして、初めから鍛え直された気がいたしました。以来、五二年間お世話になりました。心から、先生に感謝を捧げたいと思います。

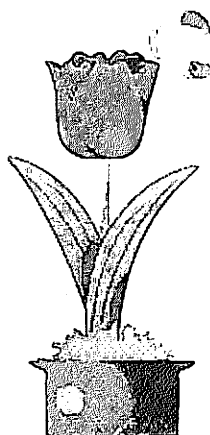
先生が亡くなられた一週間後の木曜会でしたか、和義先生が見えなくなった父が、生前以上に身近に覚えさせられる、存在感が明らかになる、ということをおっしゃいました。また、寂しさはあるけれども、悲しみはない、そのようなことをおっしゃいましたのが、非常に印象深く、現在も覚えさせられております。今も、その華やかに生けられた花の奥に、先生が座っておられるような気がしてなりません。また、ホールの方から、コツコツと靴を履いて、聖書を抱えて、この

真ん中を通って、講壇に登られる姿が、まだ焼きついております。エマオの道すがら、弟子達に現れた主が、お話になりました、後で気付いた弟子達が、「わが心、内に燃えしにあらずや」と申しましたように、私の中に生きて共に働いてくださるということを実感いたすものです。今後も、必ず先生が共にいて、見守ってくださいるであろう、また、導いてくださるという確信に歩いております。

一つひとつ申し上げることができませんが、十年間ほど教会を離れて、転勤しました。東京と川崎でございましたけれども、先生が御用があつたらどこでも行くよと言って、時々東京の方へ来ていただいて、集会を持っていただきました。大濠公園教会からも沢山行っておられます。また、ここからも沢山出ておられます。その方々が関東一円から集まりまして、ご集会に与りまして、渴いた魂が癒されたことを思い出します。

このようにして、先生のことをお話すればキリがございません。大きな病氣もいたしましたが、その都度、百合子先生と一緒に見舞っていただきまして、御言をもって祈っていただき、癒されたことを感謝でございます。このように、たくさん恵まれました。恵みにいかにしてお応えすることができるか、ということが、私自身、また教会に与えられた今後の

課題ではないかと思えます。今日も、懇ろにお話いただきまして、よく悟らせていただいたのでございますけれども、先生の命をかけて果たされましたこの歩みの後ろに、弱い歩みではございますが、続かせていただきたいと、このように願うばかりでございます。



花倉洋子姉 三十何年前でしょうか、洗礼を受けさせていただきました。榎本先生と出会い、お付き合いが始まりました。からの年数は四十年以上になります。先生が亡くなられたというのを、連絡網の順番に従って、水村の叔母から電話をもらった時、私は本当に打ちひしがれてしまいました。三月・四月はいろんな事があって教会に近づくことができませんでした。落ち込んで、悲しくって、苦しうって、厚い雲に覆われたような心の中です。今風に言えば、ブルーになっ

した。その時に、榎本先生の亡くなられたというお電話は、上から突き落とされて、その深さが余りに深く、例えばようがないくらいに、寂しかったです。先生のお誕生日は四月二八日で、九三歳になられるというのに、何日か前に、何でもなになったんではないかと思いましたが、先生は本当の信仰、神様にお従いするという事はこういうこと、というのを長い、長い年月に、植えつけてくださっていましたので、信仰をもつて生きる者達は天国で榎本先生に会えるから、天国に入れるように、最後まで走らないといけないのだ、信仰を持って走らないといけないのだという思いが甦ってききました。

でも、咲子さん、寂しいだろうな、あんなに先生に愛されて過ごす時間が多かった咲子さんが寂しいだろうなと、咲子さんのことをすぐに思いました。萩原の団地で一緒に住んでいた時に、信子ちゃんがまだ赤ちゃんで、一歳と何ヶ月かになったばかりの時に、榎本先生が咲子さんと一緒に信子ちゃんを抱っこして、電車から降りてこられて、萩原のお店の前を通っていらっしやいました。すぐ声を掛けていただいて、私はおじいちゃんとお孫さんの信子ちゃんと咲子さんの姿を見て、いいなあ、私は父親が四十五歳で亡くなって、私の子供を父親に抱っこしてもらったことがなかったの、咲子さん

いいなあ、榎本先生のことを父親みたいなもの私も妹もよく言っていました。父親代わりみたいな方と。でも、本当の父親ではないのかな、やっぱり。咲子さんはうらやましいなあ、あんなにおじいちゃんが前田教会から電車に乗って、沢山の荷物を持って、咲子さん大変だろうな、信子ちゃんが体が大きかったから、重たいだろうと、先生はとつても優しい方だったので、そうされたのだと思います。お召されになられたことを聞いて電話を切った後、いろんなことを考えて、私はすぐに「あなたがたは、心を騒がせないがよい」、先生は最近この御言を何回も、何回も引用されていたな、今年の標語だったな、と思い出しました。

心騒がせて、二月までは心も体も元気だったのに、主人の兄が肺がんで三月に亡くなって、それから落ち込んだ主人を見ながら、どこかの迷路に入ってしまったように、綺麗な花を見ても綺麗と感じないし、青い空を見ても青いと感じないし、おいしいといって差し出されたものもおいしいと感じないような三月でしたから、教会にも行かないといけないのだけれど、と思いながら、いろんなことがあって、重なりたりして、九週間前田教会をお休みしていました。いろんなことを思い出したら、先生がご自分のご家族を心からお言葉に言い尽くせないような愛情でお子さん方を育てられ、百合子先生

を愛され、愛されている一つの光景は、ああ、思い出した、木曜会の時に、百合子先生の手を自分のズボンの後ろのところに持たせて、階段を一步一步ゆつくりと下りていらしたな、というあの光景が浮かんできました。

四十年以上の沢山の先生の思い出があるんですが、私が二〇〇〇年の一月四日に、私の姉と兄と九重の山に登山した時に骨折しました。それで四十日間入院したんですけれど、手術をする手術室に行く寸前に、先生は金生先生とご一緒に私のベッドの横に立ってくださいって、お祈りしてくださいって、御言を与えてくださって、励ましてくださいました。五時間ほどたつて、手術が終つて、手術室から出てきましたら、お帰りになっていらしたはずの九十過ぎた先生が待合室で待つてくださったのですね。私は、先ほど誠さんから、体が大分疲れていらした、きつくなつたと漏らしていらしたとお聞きしましたけど、ご自分の体がきつなくても、食欲がなくても、一人ひとりのために一生懸命祈ってくださいって、その家庭、その家庭、本当に、私達の想像のつかないようなお祈りを、ずーとしてくださっている。そんな方に出会っていたんだな、感動とか感激とかいうよりも、何てすごい先生の溢れるばかりの広さ、深さ、高い思いをその時に知らされたのです。

主人も、それは本当にびつくりしていました。先生の後輩

にあたる主人なんですが、榎本先生に主人の受洗をしていた
できたかったです。それは私の計画であり、私の願いであり、
私の希望するところであるので、神様がどのようなご計画で
その道を開いてくださるか、楽しみにしたいと思います。だ
って、さつき、尼田さんが何十年か経って、神様が、よく帰
ってきたね、って言うてくださる大きな、大きな愛の神様が
忘れることなく、導いてくださっているのですから、榎本先
生によつて、受洗させていただくことができなくなつたかも
しれないけれど、私はそのことを主人に強要するのじゃなく、
希望もつて折る課題を与えられたことを今一度、思います。

洋子ちゃん、信仰は議論から生まれるものじゃないよ、と
家庭集会の時に言われた言葉を思い出しました。議論をして
も、議論は議論で終わるのよ、その証拠に、あんなに神様な
んかいなと言つていた兄が、神様を信じる、神様に従い、
救いにあずかることができる一人となつたことを、榎本先生
の信仰は、言葉ではなく、上手に何かを言うのではなく、言
葉は少なくとも、純粹な、眞の信仰を示してくださいましたの
だと思います。

長くなりましたけれど、百合子先生と咲子さんと悠子さん
と下松洋子の四人は、前田教会で真武先生という折尾女子学
園の宗教部の先生の奥様から、オルガンを教えていただい

いました。讚美歌がどうしても弾きたいな、と思つたので、
中学一年から習つたんです。教えていただいても、覚えが悪
くつて、何度となく、覚えないわねつと、言われましたけれ
ど、それがやつぱり、素敵な音楽はいっぱいあるけれど、心
から賛美が出来る讚美歌が一番だと思います。この場をかり
て、榎本先生は明治生まれの方で、差し出がましい女がお好
きじゃなかつたと思いますけれども、ここで一曲オルガンを
弾かせてください。

榎本文子先生 私ども、結婚して三一年、十四年間父との関
係は、嫁と舅との関係でした。舅としての父は、本当にやさ
しく、思いやりがあつて自慢の父でした。父は褒めることが
上手でして、私がパンなど焼くと、文子が焼いたパンはスイ
スで食べたパンの味がするよとか、そういう優しい父でした。
主人が献身しましたと共に、北九州に帰つてきました。献
身者の妻として生きて行くんだけど、二つ言つておきた
いことがある。その一つは、決していい牧師夫人になろうと
か、人からいい人と言われようとか思わないで欲しい。文子
は今のままでいいから、そのままでもいい。ただし、神
様がヤギを送つてあなたを訓練するから、それでいい。もう
一つは、いつも身奇麗にしていなさい、これから塩を舂める

ような生活をする必要があるかもしれないけれども、いつも身奇麗にしていると、貧する時も、富める時も、皆さんに気付かれないで済む。今、牧師館は生活が大変そうと思われて、その結果捧げられる献金は、神様に捧げられたものではなく、人に捧げたものだから、この点は気を付けなさい、と言われました。

私は、献身するとき「お父さん、厳しく訓練してください」と言ってしまったのです。毎週日曜日の礼拝が終わると、北九州に来て、伝道集会、翌日、教役者会をして福岡へ帰るといふ生活を続けました。父は毛筋ほどの不従順があつてはならない、肉と情に死になさい、ということ、ここまで厳しくなれるかと思うところがありました。父が、勘違いして主人をきつくしかる時があつて、お父さんそれは違いますと、喉まで出かかった言葉を、主人が黙つて聞いているものからです、ぐつと飲み込んで、悔しくて涙が出てくるような経験をしました。

車に乗つて帰る時に、あんなに優しくつた人が、献身してきたら、こんなに親子といえども、ここまできつい言葉が出るかしらと思つた時期もあつたのです。主人が按手札を受けてからは、もう一切細かい事も言われなくなりました。ただ、父は、ああ言えばこう言う、というか、どうという言葉が返つ

てくるかが予測できなくて、私はよく主人から、親父の前であんなことを言うから叱られるんだよ、と言われたこともあつたのですが、文子はそのままでいいよと言うので、のびのび思つたままを言つては、こちらが投げるボールを、父は速球で、しかも顔面に向かつてボンと打ち返すようなところがあつて、悔しくて泣くというより、そこまでいくと、クソーと思うのです。

父が召されて、いろいろ思い出していたら、私にとつて特大級のヤギは父でした。何て言いますか、押し甲斐があると言いますか、ぶつかり甲斐のある父でした。こちらが思いつきりぶつかつていくと、鋼のような存在で、打ち返されてこける状況だつたのですけれど、でも思い返してみても、一度も父が怖いと思つたことはありません。父から叱られるから、父の前でいい子になろうと思つたこともなく、完全な愛は恐れを取り除く、どんなに父に思つたことをずけずけ言つても、父はそれを許し陰で祈つてくださる方だという甘えがあつたのか、主人から、あんなこと父に言つて、というようなこともありました。

昨日も思い出したんですが、父は人から何か先に言われることが嫌いでして、例えば教会が五十年を迎えるので、お父さん五十年誌を作りませんかと言うと、そんな事せんでもい

いよ、とポーンと跳ね返されるのです。そして何ヶ月か後に、あの話はどうなったかね、と言われるんです。福岡で主人が言ったことで、人から恨まれたことがあり、「お父さん、人から憎まれました」と言ったところ、父が、「和義も一人前になった。牧師は人から憎まれてこそ、一人前なんだ。あの先生は優しく、親切な先生と言われている間は半人前だ」と。

金生先生が献身なさった時、私は子供がいないので人のお世話はできませんと言った時、神様は平等な方だな、文子は一生子育ての苦労をしないで済むかと思つたが、これから始まるか、といって笑うようなところがあつたり、二人のお嬢さんをお預かりする時は、父がいい御用をさせていただくと励ましてくれ、行き詰つたりして、父の前で泣いたりすることがあると、文子、家拝をしない、そうすればここにおいていただくのが神様の憐れみだからということが分かるから、家拝をしないとい、いろんなところで、父の助けがありました。父が召されて、ある意味で、私は戦友をなくしたような寂しさがあります。

ここ数年は父が何にも言わなくなりました。ただ喜んでくださるばかりで、昨年も名古屋の一麦教会のヤングミセスの御用をさせていただいて、そのテープをきいて、何か言つてくださるかと思いましたが、いい御用をさせていただいて、

神様がここまで成長させていただいて感謝だね、と父が喜んでくれるようになりました。

父は負けず嫌いで、「そう、そうなんだ」というのが口癖で、私が十九年ぶりにアメリカに行つて、お父さん、アメリカの町を車で走るといろんなファーストフードの店があるのですが、それらの店が全部日本に入っているんですよ、と言いましたら、父の返ってくる言葉が、「そう、そうなんだ」と言うんです。ここ二年くらいは、このような言葉も口にしなくなつて、最後に「そんな事、せんでもいいよ」と言つたのが、この会堂の改装でした。私が一番後ろまで、母子室と台所をなしにして、会堂を広げませんか、と言つた時、父が「そんなことせんでいい」と言われて、その時は良いことなんだがと思つたのですが、主人も何も言わないから引つ込めていたら、金生先生の結婚式が終わつて、十二月くらいに主人に電話があつて、会堂を広げたいのだが、大工さんに話してくれないかと言われました。ああ、またお父さんが、と思つたんです。父はいつも肩をぐつと押し出して、向かつてくるようなところがあつたので、何でも言えて、跳ね飛ばされもしましたけれど、その中を通して、神様だけに目を向けていく訓練をしていただきました。

私は立ち直りが早いので、みんながびつくりするんですけ

れど、一日二日落ち込むことがあるんですが、直ぐ御言を思
つて立ち直られるんですね。どんな中に置かれても……、そ
れを身に付けたのは父のお陰だと思えました。もう、本当に
何かあるとポーンとひっくり返るようなことがあるんですけ
れども、その中を通して人の慰めではなくって、神様に報
いを求めて、神様から力を与えていただくという訓練を徹底
的にしていただきました。今、本当に父の信仰を受け継いで、
伝道隊にふさわしい歩みをしていこう。本当に最後の父を見
た時に、「本当にお父さん、ご苦労様でした」と言うのが、心
からの言葉でした。

この記念会があると思うと一週間やはり眠れなくて、本当
に私は父からいろんな言葉を、失敗が多いものですから言わ
れましたけれども、それも本当に愛からきていたんだなとい
うことを教えられ、失敗を通して、神様に徹底的に目を向け
て、主に報いを求めていくという姿勢を植えつけていたのだ
いは感謝だと思えました。父も元氣だったから、私を体を
張って鍛えてくださったんだなと思います。

金生先生は一度も直接叱られることはありませんで、金生
先生に何かあると、主人が福岡から呼び出されて、「金生君は
どうなつとるんかね」と言われます。私は「前田の献身者じ
やないの、何であなただが叱られなければいけないんですか」

と言ったことがありました。去年くらいからは、父はもつと
金生先生に言いたいことがある時には和義を叱るようにして、
金生先生に聞かせて注意をしていました。ここまで回りくど
くするようになったのも、父がそれだけ弱られたんだなあ
と思えました。子供を叱るのもそれなりの体力がいるんだな
と、父はそこまで叱る力もなくなってしまうんだなあと思
って、もう一度教えられました。

私は、大阪集会のある時は名古屋から通って、いつも甘え
て、「ご馳走してください」と、福岡に御用に來られた時も、
いつも「ご馳走してください」と言うと、父は最高の美味し
いものをごちそうしてくれて、本当にそこでいろんなことを
話するのが楽しみでした。私がクリスマスや父の誕生日な
ど、お爺ちゃんのご馳走だからと、フランス料理を頼んでも、
父は何も言わなくて、ニコニコしていました。でも、去年く
らいから、主人が大阪集会に行くのと父が福岡に出て来てくだ
さって、御用をしてくださり、うなぎが好きだから、うなぎ
を食べに行く時は、「お父さん、私がご馳走をして上げます」
と言って、私が支払いをするようになったんです。そうする
と、夜になって主人が帰ってきた頃に電話が掛かってきて、
「文子から今日もうなぎをご馳走になったよ」と喜ばれる。
今までは、父が九十歳までは親だからと何でも父がしてくれ

ていたのに、去年くらいから本当に、子供たちからしてもらうことを喜ばれるようになって、私はそれも寂しいなあつても、父が本当に弱つてこられたんだなあという事で、心の備えをさせていただいていました。

今年の一月に入院をなさつて退院された時に、父が「これまでと違つて力が出ない」と言われた時に、「ああ、お父さん、随分弱られたんだな」と思いました。

去年から毎日父の説教テープを聞いていましたので、本当に一つ一つ心の備えをさせていただいて、父のメッセージが残っているというものは何と幸いなことだろうと思いましたが、七二年から始まつて、今七六年あたりのテープを聞いていますが、本当に力強く語るメッセージに励まされ、内側から新しくされています。今も父が持つている信仰、これを受け継いで行かせていただこうと思つて、新たな思いで、「本当に、お父さんありがとうございます」と、ただ、それだけです。これ以上の人はもういないのではないかと思うんですね。私も戦う相手がいなくなつて、今は本当に寂しいんですけれど、もし父が生きていたら、「お父さん、お父さんのために記念会します」と言つたとしたら、「そんな事をせんでいいよ」と言つて、何日か後に「文字、アレはいつになつたかね」と言われるんじゃないかなあと、それくらいにいつも心の中で、

父が生き続けているということは感謝なことだなあと思いますが。金生先生、私どもも、これから父の信仰を受け継いで、信仰を持つて歩ませていただきたいと思つております。皆様も本当に陰にあつて、また更にお祈りをしていただきたいと思ひます。よろしくお願いいたします。



大田邦子姉 お証詞を聞かせていただいて、私も一つひとつがそうです、アーメンと申し上げております。

私は神様と縁もゆかりもなく、神様と言えば神社くらいで、本当に榎本先生を通して、この聖書にある真の神様にお会いすることができ、救いにあずかつて、このような幸いな身分とされて今日にいられますまで、約五十年です。

家庭集会で榎本先生のお話を伺つて以来、神様からグング

ン導かれて、神様が御業をもって導いていただきました。私も本当に大きい問題を持って神様から訓練をしていただきましたが、榎本先生の潔い、非常に大胆な信仰をもって、その時々々に導きをいただき、神様の御旨がどこにあるか、御言をもって導かれ、それがまたそのとおり、いやそれ以上の御業をもって、神様の御栄光を現わしてくださいました、また神様御自身を知らせていただきました。

一番最初に先生とお会いして導かれました時に、「まず信仰を持って祈って、一步踏み出しなさい」。あまりにもわが家には問題が多かったものですから、「問題を避けるのではなく、まず御言を戴いて、一步踏み出しなさい。そしたら次の一步は神様が歩ませてくださるから、信仰をもって歩みなさい」と、それが今だに頭に残っております。

家庭集会から教会に來させていたでしてしばらくして、「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」、この御言に引く掛かったんです。あの頃の私はわがままで、一般的に言つて自主性を重んじる方で、それで「自分を捨てて」とは、何かそこで変な理屈っぽい反論したことを覚えております。榎本先生から、「まだ自分があるから、そうなるんですよ」と何遍もおっしゃっていたでございまして、「自分を捨てること」が今だに課題でございますけれど、先生にお話しを伺

いますと、本当に視点が違うんです。本当にもう凄いです。「ただ御言を戴いて、その結果はどうなるか分からないけれど、とにかく御旨がどこにあるかを問いつつ、全てをお委ねする、それこそ自分に死んで明け渡しなさい。いったん明け渡したら引き戻してはいけない、紐を付けて委ねたらいけない」とおっしゃって、そういう事もいろいろありました。

それからもう一つは、娘が病氣をして入院しました時に、家族は私のほかは男ばかりの六人にして、台所など大変な時であつたんですけれど、その時に私も祈って、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえつたイエス・キリストを、いつも思つていなさい」と、もう御言を一生懸命に求めながら、それで榎本先生に電話して、「いよいよ忙しくなりまして、おばあさんの出番です」と言つたら、「いいえ、あなたの出番じゃありません。イエス様の出番です」とはつきりとおっしゃられて、全くその通りですと申し上げるほかありませんでした。「神の全能の御手の下に自らを低くしなさい」と、自分で分かっているつもりでも、自分が出てきます。

病氣の問題にしても、「生きる死ぬるは問題ではない、命は神様の御手のうちにある、だからお委ねして御旨を求めていきましよう」と、本当に一つひとつが今でも私の力となっております。

「極端なまでの信仰」と先生がおっしゃったとおり、この地上でのご使命を全うされて御国に凱旋されましたけれど、神様は先生の上に生きて働いて、私達にその御業を見せていただいた時に、聖書にある信仰を持って歩まなければならぬと教えられます。昨年先生は一回一回が遺言です、これが最後ですとおっしゃっておられました。

最後は、一分一厘ごまかしの利かない人間の最後に、神様がすごいプログラムをもって御手のうちに導いていただきました。最後のイースターの礼拝でございましたか、御用をされました時に、私は壮絶な感じがしまして、聖餐式の時に、御言が「地の果てまでわたしの証人となるであろう」をもって締めくくられて、先生ご自身も清められ新しくなり、私達も魂を清めていただき、新たにしてください、もうそれからも神様は次々と御業をもつて導いてくださいました。

もう一つ忘れられない事は、私と先生とは主治医が一緒なんです。二年前に私もちよつと体調を崩して一週間ばかり入院をしまして、榎本先生も丁度入院していらして、同じ屋根の下で療養をしていたんですけれども、その時に、奥様が毎日お見えになりますし、金生先生もお見えになりますし、本当によく何もかも裸になってお話をさせていただいた、今考えて見ますと、本当に至福の時だったなあ、と思うんです。

たまたま榎本先生と二人になる時がありまして、その時も燃えてお話をなさり、それこそテープに録っておきたかったくらいでした。人間は創世の始めに立ち返って、生かされている者として、そこに立ち返らないと駄目だ。一人ひとり神様から命を与えられ、使命を与えられている。私達は神様をミニミニに捉えているけれど、そんな神様ではないからと、それこそ後でお障りがなかったかと思うくらいに燃えて、「私はそれを切に祈っています」とおっしゃられました。それが私の大きなお恵みだったんです。

今はもう、先生はもういらつしやいませんけれど、信仰によつて今も語ってくださいている。今まで先生が語ってくださいたり、導いてくださったことが、今まで以上にはつきりと甦らせてくださるんです。

何かの問題でふつと、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と、神様の前に自分をおいて、求めれば必ず応えてくださると言われる榎本先生の信仰を通して、教えていただいたり、強めていただいたり、本当に感謝しております。今も甦って生きて働いていらつしやる主と共に、また榎本先生と共に歩ませていただく日々でありたいと願っております。

河本信生兄 これは皆さんご存じないことだろうと思えますので、お話しをしておきたいと思えます。

先生については、とても恐ろしい話があります。戦争中の事なんですけれど、キリスト教は敵性宗教であるということ、で迫害されて、まして牧師さんということになると、思想上、宗教上、対米スパイ容疑ということで、特高(特別高等警察)から危険人物としてマークされるのが普通でした。説教の中でも、先生はしばしばその事に触れていらつしやいますけれど、先生は大変危険な立場におられたんです。それは先生もご存じない、ごく最近分かったことです。で、次から次に牧師さんが検挙されて、残り少ない牧師さんに先生はなつておられたんです。当然、監視、尾行が始終付いていたんです。なぜそういうことが分かったかといえますと、私の父の甥が小倉の憲兵隊の副司令をやっております、父は、日ごろから、その人は夏川典三(すけぞう)という人で、先生より三歳年下の人なんです。まだ生きています。この人に父が「典ちゃん、先生を捕まえたらいかんぞ」と、いつも言っていました。「先生を守つてやれ、検挙したらいかんぞ」って、言つとつたけれど、そんな一個人の意思でどうにもなるもんじゃなかつたけれど、その典三兄は私にとって従兄弟になりますから、彼と一年に一回か二回くらい会つて話をするんです。ごく最

近言つたことですが、「おじさんは、あんな事を言つたけれど、それは無理な話よね」と言つていました。けれども特高にブレーキは掛け続けてはおつたんだ。自分の立場としてできるだけのことはしておつたんだと言つていました。特高というものはどういふものであるかを調べてみたんですが、要点だけを言いますと、共産党撲滅を口実にして、国民のあらゆる政治的、思想的、宗教的自由を奪い、治安維持法による検挙者だけでも五万二千人に上つたといふんです。その典三兄は憲兵ですから、特高からの情報がいつも提供されていたわけです。だから、憲兵と特高とはどういふ位置関係にあるのかと、これも調べてみましたら、憲兵は軍隊内の犯罪にかかわる捜査、取り締まり、傍聴などを目的にしておりましたけれど、これが段々と権限が強くなつて、その実権が軍事警察や軍事情報警察以上に、一般警察の公共保安維持の権限にまで拡大されて、国民の恐怖の的となつたとあるんですね。よく映画なんかで憲兵のすごさなんか出てきますけれど、内地ではあまりなかつたと彼は言つておりました。

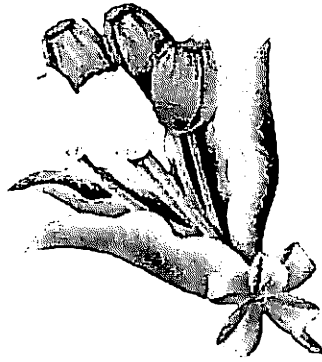
けれども、榎本利三郎牧師を捕まえるXデーは決まつておつたんだと、それは八月九日だつたと言う。八幡の空襲があつたのは八月八日ですから、「空襲がなかつたら捕まつていたのか」って尋ねたら、「そうだ」と言つています。「捕まつたらど

うなるの「って尋ねたら、「まあ、大半の牧師は転んだな」と言うんです。だから、宗旨替えをするわけです。大体そうすると楽だと言うんです。せいぜい罰としても勤勞奉仕から、よく戦時中に軍事工場に連れて行かれて労働をさせられる。大半はそれで終つたみたいだな、と言つていましたが、「榎本さんは一本気やったからなあ」と言うんですよ。彼は「わしがおじさんの所に行つたら、たまたまその時にキリスト教の集まりがあつて、『典三、お前も聴いていけ』と言つて、聞かされた」と言うんです。「俺はクリスチャンでないのに何で聞かないけんの」と言つたけど、「キリスト教を悪者にするけれども、先生は日本のために祈っているんだから、悪いこと何もないじゃないか。お前も聴いて行け」と言つて聴かされたと言うんです。だけど、「それはおじさん、違つやろう」と思つたけれども、おじさんですから、戦時中に食べ物を融通してもらつて食べさせてもらっているから言えないわけです。なぜ牧師が悪いかと言うと、天皇陛下を神としないから悪いと言うんです。ほとんどの牧師は「いいですよ」と言つて變つたと言つて言つて、「榎本さんとは、何度か接触もあつたし、わしはよく知っているけれど、あの人は頑固だから變つらんやろうな」と言うんです。「そうなつたら、どうなるの」と尋ねたら、「よくつて腕の一本や二本くらいは、へし折られるやろうな」、そ

して「まあ、氣違ひになる人も居るわな」って、「蟹工船の小林多喜二を知つとるやろう、あの人は拷問で死んだわな。拷問で死んだのは数限りなくおるよ」、「そんなものは表に出てこないんだよ。榎本さんは、多分そうなつてゐるよ」と言うんです。

それはたつた一日違いですよ。焼け野原になつて八幡は中央町からこつちは何にもなくなつた、先生のお話にもよく出ますね。「今晚寝る所がないという程、心細いことはなかつた」とおつしゃつたけれども、そんな目に遭つたけれど、命には替えられない。ここにいらつしやる皆さんのほとんどは、その後先生の伝道を受けてクリスチャンになつたわけでしょう。そうしたら、神様の御手のお働きというのは、ものすごいですよ。だから、ダニエルのことを思うんですね。それとか、エジプトの大軍が背後まで迫つてきて紅海に追い詰められて、もう、どうしようもない時に、そんな土壇場の時に本当に救われたんですよ。だから、先生は身をもつて証詞をなさつたという、前夜式で私はちよつと申し上げたと思うんですけれど、本当にその話を聞いたのは、ごく最近です。うちの父が召されて五十年経つて、初めて彼、典三は私に言いました。「実は本当のところはこうだつたんだ」と、本当のところは一日違ひだつたんです。八幡大空襲で何十万人も死にましたよね。

だったら、「榎本利三郎一人がどうなるうとも、そんなことは吹っ飛んでしまうわ」と、そういうところで先生は危機一髪助けられて、そして私達は救いにあずかったと、こういう事なんです。ものすごい神様のお働きを感謝したいと思います。



石井二三子姉 平成四年の話になりますけれど、うちの三男坊が腎臓移植で済生会病院に入院していきまして、丁度私達親子三人教会に行こうと約束をしていたんです。ところが、二月四日が退院の日になっていましたけれど、その退院を待たずに、肺炎みたいになってしまいました。先に卒業式とかいろいろと控えておりましたけれど、二週間あまりで亡くなってしまうんです。亡くなってしまったら、さあ、どうしよう、主人が何もかも分からんようになってしまいました。葬儀屋さんに頼もうと「積善社」に頼んだんです。そしたら、

長男が出てきて「お父さん、それは違うんじゃない。教会でなかったね」と、それからが大変で、また積善社を全部断わってしまいました。今度は、木田姉妹に教会の方に話してもらおうように、それからの始まりです。この教会に名を連ねるようになってきましたのは……。

三月四日に亡くなりましたものですから、その日の夕方、榎本先生がお出でになりました。その時が初めてなんです。先生のお顔を見られたのは。そしたら、三月四日だから花なんか咲いていないものですから、丁度家にシクラメンがピンクと赤が咲いていました。「お花はありませんか」とおっしゃったので、「シクラメンの花しかありませんが」といいましたら、「それでいい」とおっしゃるから、それを持って行って、「何か青い葉っぱはありませんか」とおっしゃいましたけれど、またその青い葉っぱがないんです。表に椿の葉に似た青い葉っぱがありましたもんですから、それを持ってきたら、先生が「これから首飾りを作ります」とおっしゃって、綺麗な綿花の次にシクラメンの花をピンクと赤を代わりがわりにして綺麗な首飾りを作っていたいたんです。そして椿の葉っぱみたいなのは、王冠にしようと思わずに作ってくださいって、それを見て私はびっくりしました。私達も悲しかったんだけど、先生にそういうことをしていただくのを感動しました。もう、

とても有難くていつまでも胸に残っております。先生のお元
気な時に一度お話ししようと思っていたんですけれど、とうと
うそれもかないませんでした。

それから、一年二年と毎年遠くに行っている子供たちも帰
つて来て、先生と、その日には偲ぶ会みたいにしていただい
ておりました。八年くらい続けたんです。そして、今度は
主人が病気になってしまいました、主人が一ヶ月間闘病生活
をしましたが、その間も榎本先生はいつもお出でいただ
いておりました。それで、結局主人も亡くなってしまいました
たんですけれど、とにかく手厚い柔らかい慈愛といますか、
私達にはできない先生の御愛で有り難いばかりでした。主人
も教会に行きます時には、大学の講義を聴いているみたいだ
ぞと言いながら、私を引っ張って行っておりました。そして
ら、大学の講義つて九十分と聞いておりましたので、ああ、
やっぱりそうかなと思つて、この十年間くらいそう思つて来
ております。主人は病状が進んで、もう物も言えないようにな
っていましたが、先生の顔を見たら、私達は何かデーンと
座つていていいような気分になっておりました。とにかく、
先生のような代わりは誰もできないと思うんです。とても私
達は有り難く思つておりました。

そしてつい今年です。三月二三日がその三男坊の十年目に

なりますのと、主人の一年と両方を合わせて、先生にお願
いしました。先生はその時に、病気が上がりでしたけれど、
ニコニコと、そして息子達が「先生お幾つになられました」
と尋ねましたら、「いや、年は忘れてしまいました」とおっし
やっていました。それから、私はまだ息子達のお骨を持つて
おりますもんですから、「先生、お骨はどうしましょうか」と
聞きますと、「あなたのいいようにで、いいですよ」とおっし
やったものですから、お骨はまだ持つているんです。

今先生の息子さん達のお話を聞くと、この一年半くらい前
から弱つたとおっしゃいましたので、「まあ、うちの記念会で
はいっぱいの力を出していただいたんだなあ」と思つて、有り
難く思つております。そしてその帰りがけに、私も「先生、あ
りがとうございました」と言いましたら、いつもなら一言二言
おっしゃるんだけど、その時に限つて何もおっしゃらず
に、ただにつこりと微笑んで私の顔を見ておられたので、私
も次の言葉が出ずに「お疲れ様でした」と申し上げたんです。
それから何日かしてから先生の訃報に接しまして、ただただ
もう、びっくりするばかりでした。本当に先生、それと先生
のご家族様ありがとうございます。

金生栄子姉

榎本先生との出会いを与えてくださいまし

た神様の聖名を心から賛美いたします。私が先生に初めてお目に掛かりましたのは二年前の四月のことでした。本当に僅か二年間なんですけれど、先生から多くのことを教えていただき、また見せていただきましたことを本当に感謝しております。

その二年前の三月に主人とお見合いをして出会いが与えられまして、結婚のことを祈っております。そして、主人がそのお見合いの時に、教会五十年誌「燃ゆる柴」と「ぶどうの木」何冊かを持ってきてくれていましたので、私もそれを読ませていただきました。そして、榎本先生と初めてお目に掛かる機会が与えられたわけなんですけれども、九十歳を過ぎても現役で牧師をされているということで、初めはちょっと怖いというか、厳しい先生なのかなというイメージを持ちながら先生にお目に掛かったんですが、しかも先生は肺炎で入院をなさっておられた時でしたけれども、わざわざ外出許可を取ってくださいって、牧師館の方で私を迎えてくださいました。本当に最初に抱いていたイメージとは全然違っていました。温和で本当にこやかで神様に従いとおしてこられた、その柔らかなお姿に触れさせていただいて、私も安心したと言いますか、初対面ですのにたくさんのことをお話できまして、交わりの時が与えられました。

その時に、私が先生に申し上げたことがありました。それは「ぶどうの木」の第二十何号でしたか、私の主人が八幡前田教会に遣わされた時に、任命式と任命感謝会が持たれまして、その感謝会のお証詞がその「ぶどうの木」に載っていたんですね。主人がまだ前田に遣わされる前に先生が年配になつてこられたので、教会のどなたかが「先生、後継者のことはどうお考えなんですか」と尋ねられた時に、先生が「私の知ったことか」と言われたということが、その証詞に載っていたんですね。私はそれを初めて読ませていただいた時に、「ああ、素晴らしいな」と思ったんですね。やはり先生も牧会一筋で来られておられたでしょうから、今後の教会のこととか、いろいろ考えられたと思うんですけど、全部を神様に任せていらつしゃつて、教会は主のものだ、主の教会なんだということを本当に一番良くご存知で、神様に任せているから大丈夫なんだというところを、「私の知ったことか」と言う、その一言に託されたんじゃないかと思うんです。で、私はその言葉を讀ませていただいた時に、「ああ、素晴らしい信仰の先生だな」とって本当に思ったんです。で、それを「先生、あの時に『私の知ったことか』とおっしゃられましたけれども、先生の信仰が一番現れていますね。そういう風に私は感じて素晴らしいなと思いました」と言う風にお伝えしたんです。そしたら、先生は、「あ

あ、それが分かってくださったらもう、大丈夫ですね」と言ってくださって、「十年の知己を得たような気がする」と言って、そこまで言っていたきました。私は、本当に先生は、手の届かないほどの信仰一筋で来られたご生涯を貫いてこられているので、本当に私なんかまだまだ及ばない者ですけれども、こんな素晴らしい先生の教会で私も信仰を持って主の前に歩んでいきたいなと、本当にそのように願われました。

結婚が導かれました、前田教会に遣わされたんですけれども、結婚式は十月でした。その一ヶ月前の九月に献身式をこの所で持たせていただきました。先生が「栄子さん、あなたの献身式を致しましょう」ということで、おっしゃってくださいましたんですけれども、その献身式の時に先生が開いてくださった御言が、ヨハネの福音書二一章二三節でした。「あなたは、わたしに従ってきなさい」と。私はその三年位前に召命としてその御言を戴いていたんですけれど、もう一度その「あなたは、わたしに従ってきなさい」、その御言をいただいて本当に力を得たといえますか、「ああ、神様がこんな者をも召してくださいました」と、確信を本当にいただくことができました。そして、先生が礼拝なり木曜会なり、また個人的にお交わりをいただく中でいつもおっしゃっておられたことは、「手触るように、主を知りなさい」ということ、そして、「私達は使命があ

って生かされているんだ。使命が終ったら、神様の御許に召される、それまでは使命があるんだ」ということです。でも「神様がそれを成し遂げてくださるから、委ねて安心してお従いしていけばいいんだ」ということ、そして「私達は神様の御声を聞いてお従いすることが全てなんだよ」って事を、本当に何度も何度も教えてくださって、先生がそのように生きてこられ、そのお姿を見せていただけただけことを感謝しております。

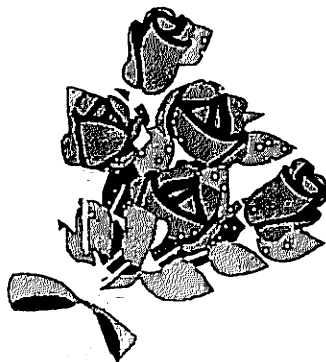
今年に入りまして先生が、ヨハネの福音書十四章一節を何度も何度もメッセージで語ってくださいまして、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と。私はその御言を聞かせていただく度に、「ああ、先生の死期がもしかして近づいているのかな」っていう風な感じを受けておりましたけれど、実際に四月になりました、先生が入退院を繰り返し返される中で、段々先生の召天が近づいているのかなと、私も本当に心が動揺していました。まだまだ「先生に教えていただきたいことが沢山あるな」と思っておりましたので、本当に心が動揺する度にその御言でやはり励まされて、「ああ、神様がすべてのことを導いておられるから、安心して委ねて行ったらいいんだ」っていう事を確認させていただきました。

私にとつてもう一つ恵みであったのは、先生が召天される

日に、病院に行かせていただいて、最後のお別れをさせていただいたことでした。四月十日の夜ですね。いよいよ先生がお召されになるんじゃないかということで、主人も病院に向かわせていただいたんですけれども、私達には小さな子供がおりますので病院に行くことができませんでした。もし朝まで先生の状態が保たれるのであれば、私もお目に掛かりたいと神様に祈っております。早天祈祷会が終わりまして、病院に向かわせていただいた時、先生は既に血圧が六〇くらいであつたと思いますけれども、まるで私達を待つていてくださったかのように、本当にお別れをさせていただくことができず、先生に「ありがとうございます」と、そのようにお伝えして、私達が着いて僅か二十分か二五分くらいでしょうか、本当に先生が安らかに神様の御許に召されていかれました。私は本当にその最後にお目に掛かることができたその時、信仰のバトンを先生から受け取らせていただいたような、本当にそのような思いがいたしました。「これから、あなたたちに頼むよ」という風に先生が、バトンを渡してくださったんじゃないかなと、本当にそのように受け止めさせていただきました。

四月に入っておりますか、私は特に祈っておりますのは、エリヤがいよいよ神様の御許に行くという時に、エリシャがエ

リヤに「あなたの霊の二の分を私に分けてください」と、求めたその祈りが、私の祈りなんです。「主人にも私にも榎本先生の霊の二の分を、私達にどうぞ分けてください」と、今も神様に求めております。先生が残してくださった信仰という素晴らしい遺産を私達も受け継いで、共に与えられた生涯を全うしていきたいと願わされています。私達のためにもお祈りいただきたいと思えます。ありがとうございました。



小松南子姉 皆さんが感謝されましたように、私は思う

ように感謝できませんけれど、この機会を逃せばまた後悔が残ると思ひまして、マイクを借ります。神様の摂理によりまして前田教会に近づけていただきまして、榎本先生にお会いできたことは、主の憐れみであり、恵みだと感謝いたします。靈感賦二六番に、「今に至るこそ主の恵みなれ」とありますけれど、今に至るこそ先生のお陰であると、本当に心から感謝

いたします。初めて先生にお会いした時は、四五年位前で、私がまだ十八、九の何も分らない本場に小さな者だったと思うんです。その時の講壇に立たれた先生は、本当に威厳に満ちたお偉い、近づき難い先生で、何か本場にちよつと怖いなど思うくらいのところがありましたけれど、神様の御愛と十字架の救いを語られた時の先生のお言葉、また愛を持って私達に示してくださる神様の愛を聞いた時は、本当に涙が出て素直にそれを受け取り、また先生のお優しさをしみじみ感じさせていただきました。

二、三思い出を言わせていただきますと、一番の先生の思い出と言えば、私が結婚と同時に教会を離れて赤間に住んでいました。が、何年かした時に先生が訪ねてくださったんです。その時は本当にびっくりして、私の様な者をも先生が覚えてくださった、祈ってくださいったんだと知って、本当にうれしくて感動しまして、その時の先生のお姿は本当に今でも鮮明に忘れることができません。

それから、先生が初めて肺炎で化成病院に入院されました。本当に皆さんの祈りだったのです。先生が長いこと入院されて、そしてそれが良くなられて外出して、日曜礼拝を守られた時の先生のお姿を見た時は、本当にうれしくてただ感謝でした。それがまた強い印象に残っています。

それからもう一つは、私にしては一番つらい思い出なんですけれど、告別式に出ることができなかったということ、本場にもう、祈って祈って旅先にいたんですけれど、とうとう先生の告別式に出られないということ、もうつらくって、何とかして帰りたいと思っていたんですけれど、それが無理ということ、先ず御言を与えられたのが、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と、先生がいつも、いつも言ってくくださった御言と、それから「エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなつた」ということ、「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである」ということ。本当に先生は死なれたんじやなくて、神様の御許に帰られたんだと、そうして御言で慰めて来ましてから、どうしても気持ちが落ち着かずに、こんなにお世話になつた先生にお別れもできなく、感謝もできなかつた自分が本当に申しわけなくって、それで、牧師館にお邪魔させていただきました。その時に、先生のこの笑顔のお写真を見た時に、今までの気持がスーッと消えてしまつて、「肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである」とつていうこと、そしてすべて神様の手の内にあるんだから、自分を捨てて、全てを神様に委ねなさいということ、先生が

そのお写真で語りかけてくださって、本当に自分の今までのつらい気持がスーッと取れました。

今までも何度か主の御旨が分からなくて、牧師館にお邪魔させていただきましたが、先生が祈ってくださいまして、帰る時にはそれがもう、本当に往きと帰りとはうそのような気持で帰ってりましたが、その時も本当に重荷を下ろして帰ることができました。そして思ったことは、先生は私が弱いのご存知で宿題を残してくださいだったのでなあと思つて、これからは、自分の思い、願ひではなくて、ただすべてを神様に委ねて、神様の御心に従つて歩んでいくように、先生が教えてくださいくださったんだと思つて、これから宿題としてこれからの歩みを整えていきたいと思ひます。

最後に御言をもつて先生にお別れをしたいと思ひます。テモテへの第二の手紙四章、「わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりつぱに戦いぬぎ、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待つているばかりである」。先生はそのとおりだったと思ひます。本当に先生、ありがとうございます。

金生一郎伝道師

先ほど文子先生からお証詞がありましたように、榎本先生は私に対しては本当に優しくいろんなこ

とを教えてくださいました。私が本当に教えられたことの一つに、先生が「自発的に信仰を持ちなさい」という事をおっしゃってくださいましていたんですね。私はどちらかといえば、受身的な言葉をよく使っていましたので、特に最初に来た時、「思わせられます」とか、そういった言葉をよく使っておりました。神様からこういう思いをいただいてという思いで使っていたんですけれども、「そうじゃない」とおっしゃられたんです。「神様から教えられてこう思いますと、お証詞をしていきなさい」とおっしゃっておられた。また、お祈りの事に関しても、最近だったんですね、「お祈りいたします」じゃなくて、「本当に神様を前において、『お願いします』と、真剣にお祈りしなさい」ということをおっしゃっておられました。言葉尻でいろんなことを曲げてしまっているんじゃないかなということも、今回そのことを通して教えていただいた。もう一度、どこがいけないのかなと思つた時に、「自発的に主に従つて行く」ということが欠けてしまうと、結局信仰を守り通すどころか、途中で曲がつてしまふ、そういう風になつてしまふんじゃないだろうかということも教えていただいた。最後だったんですね。ですから、本当にいろんなことを教えていただきながら、神様から与えられる御言に自分から従つていく、本当にこれが私達に対して与えられた使命としてこ

れからも歩んでいきたいと思っております。

司会者 では最後に霊感賦の三二番を賛美いたしました、和義先生にお祈りをしていただいて今日の記念会を終わりとしたいと思います。

お祈り（和義牧師）

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。

愛する天のお父様、今日こうしてあなたが遣わし、あなたがお立てくださいました榎本利三郎牧師をこの所に偲ぶことができ、また、あなたが備えてくださった恵みの一つひとつを心から感謝して、あなたがほめたたえさせていただきましたことを心からありがとうございます。どうぞ、残されませんでした私ども一人ひとりが、いよいよこの牧師を通して与えられた信仰に堅く立って、主を主とし、あなたをあがめて、あなたの御声にのみお従いしていくことができますように。「おのれを捨て、おのが十字架を負うて、我に従え」、「汝は我に従え」とおっしゃいます。主よ、あなたを信じてお従いしてまいりますから、どうぞよろしく願ひて、あなたの御業に必ずからしめてください。

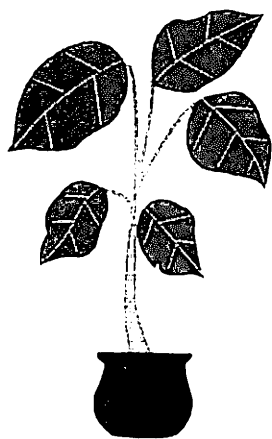
こうして兄弟姉妹をあなたが豊かに恵んでいただき、また、願ひていただいて本当に心から感謝いたします。

尊き主イエス・キリストの聖名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。

金生伝道師

それでは、これももちまして今日の記念会を終わりにさせていただきます。今お証詞できなかった方は、

そのことを残しておいていただきたいと思ひます。何かに書くなりしてまた出していただきたいと思ひます。そしてそういったお証詞というか、主のお恵みを残しておきたいと思ひます。私が八幡に遣わされて「燃ゆる柴」を読ませていただいて、本当にこの教会がどういう歩みをしてきたのかについて、のがよく分かりましたように、先生の信仰をもう一度振り返る時を持たせていただきたいと思ひます。



十 利三郎先生の思い出(手記)

榎本先生、百合子先生を偲んで

李 文 珠(カナダ・トロント)

一 「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおつて都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さ
いわいである(黙示録二二・十四)

この一年足らずの間に、榎本先生・百合子先生が共に神様の栄光に輝く御国にお帰りになりました。霊にあつては悦ばしい筈ですが、肉にあつては淋しい限りです。ご家族の皆様をはじめ、教会の方々にはご不在の先生ご夫妻をどのように偲んでいらつしやることでしょうか。

昨年の新年聖会の一部始終の録音を、尼田隆己兄が一字も添削されずに(溜息の音まで)活字にされた、大変に貴重な出版物を送っていただきましたが、皆様が先生のご健康を案じて、くれぐれもお体を大切にしてください、隠退されてくださいと心から懇願されていらつしやるご様子が手に取るよう

でした。教会員の皆様の深い敬愛の情に包まれて、御国に帰られた榎本先生ご夫妻を、神様は善にして善をなし給う筈と信じます。

天国にお帰りになる最後の聖日まで、御用をされたと伺います。そして、新年聖会には「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ十四・一)と、イエス様が弟子達の心の準備をされた時のように、皆様を懇ろに準備されたと伺います。

パウロ先生が愛弟子テモテに宛てた手紙の中でこう言っています、「わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう」(第二テモテ四・六〜八)。

これはまた、榎本先生の御口から、そのまま出ることのできたお言葉でもあると信じます。

榎本先生、百合子先生、天国の純白の衣をまとわれ、水晶のように輝いている命の水の川と、その両側にある命の木の十二種の果物を、毎月楽しんでいられるでしょうか(黙示録二

二・一)。

二 一粒の麦

私共家族が前田教会に導かれたのは、一九五一年の三月でした。第二次世界大戦が一九四五年に終わった時、兄は小学校六年生、私が二年生、妹はまだ学校には行っていなかったと思います。

その後、兄は旧制の八幡中学(現在の八幡高校)に進みましたが、スポーツの大好きな兄は早速野球部に入り、甲子園目指して頑張っております。母はソウルのゼブランス医学専門学校(現在の延世大学)で看護学と産婆学科を卒業して、父と結婚後、八幡で産婆を開業しております。父は阪急製菓会社の九州総荷役所長として、九州方面の注文と発送の責任を取っております。

ところが、母が戦争中の過労と食糧難、三人の育児(母は私達子供の衣料を全部自分で縫ったり編んだりしております)で、それに自分の仕事等の影響でしょうか、まもなく結核で倒れてしまいました。父を始め家族の全部が母の看病に夢中になっていくうちに、今度は兄が肋膜炎で倒れてしまいました。その頃、漸くストレプトマイシンという抗生物質が出回ってきたばかりでしたが、両親が兄のために医者に相談したと

ころ、「たくあんに砂糖をかけるようなものですよ」と言われたとの事で、母が一体どういう意味なのかと思案にくれたのを思い出します。ペニシリンはバクテリアしか効果がないので、肋膜炎には何にもならないということだったのでしょう。清い空気を求めて、転地療法するほかないとも言われたそうです。

それで香月の池田という所に粗末な伏せ屋を応急に建てて、家族全部が引っ越すことになりました。池田という所は、その頃は農地や池に囲まれた静かな、空気の清い所でしたが、転地の甲斐もなく、兄は一年足らずの内にイエス様の御国へと召されることになりました。

この時、父はどのように告別式などをしたものかと、感つたと思います。と言うのは、父も母も若い時に洗礼を受けて、クリスチャン生活を守っていたにもかかわらず、戦争中、戦後にかけて母教会もなくなり、信仰生活とも遠ざかっていったからです。兄と私はと言いますと、黒崎小学校の前に病院があつて、そこのお坊ちゃん(兄の旧友)だったので、このご家族がクリスチャンの方達で、私達子供のために教会学校を続けてくださっております。何しろ戦争中なので、日曜学校と呼ぶことができず、その代わりに火曜学校と呼んでいました。生徒は後藤さん、妹のきよみさん、私の兄と私で、

たったの四人でした。しかし、その病院が空襲を受けて、辺りが焼け野原になってしまった後は、私達はお互いの安否も分らない状態でした。

そんな霊的空白状態の中で、兄は神様に召されたのですが、召される数日前に、嘆きつつ看病している母に、「先にイエス様の所へ行つて、お母さんのために場所を準備しておきますから安心して」と言つて、慰めたそうです。

近所の方達のご親切から、町のお寺のお坊さんと呼んで上げてあげましょうと申し出たようですが、その時父の頭に浮かんだのが、電車で往き来する時に見ていた前田教会の看板でした。聖霊のお導きだったと思います。

長年の信者でもない私共にもかかわらず、事情を知つて、榎本先生がすぐにおいでくださいました。三月二六日でした。庭にある季節の花を集めて、兄のお棺を見事に飾ってくださいました。母はお花に囲まれた兄の顔をあまりに美しいので、画家でもありませんでしたが、何とか記憶に止めておきたいと、クレヨンなどで一心に描き続けておりました。

その時、榎本先生が私共に下さったお言葉は、ヨハネによる福音書十二章二四節でした。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶよう

になる」。

これはイエス様がご自分の死によつて全ての人類が救いを得ることができるとを指して言われたお言葉ですが、私共の家庭では、兄がまさにその一粒となつて、私共を救いの生涯に導いてくれることになりました。

こうして、永い間イエス様から離れた生活から、私共は再び呼び戻され、前田教会へ「持ち運ばれ」、榎本先生のお説教と聖徒の方々のお証しを通して、少しずつ、少しずつ信仰が芽生え、成長することになりました。無条件に私共を受け入れて下さった榎本先生の人となりによつて、その後の私共のつたない信仰の歩みは、どれだけの安定性と平安を与えられたか計り知れません。

その兄の告別式を榎本先生がしてくださいました時に、先生のお供をされておいでになつたのが、高木敏夫兄でした。その後も、高木兄や伊規須兄が、榎本先生とご一緒に訪問してくださいましたことを覚えています。このお二人は、私にとってイエス様のおそばに近く仕えられた愛弟子ヨハネとペテロのように思われました。神様は、前田教会を数多くのこのような真実な聖徒で祝福してくださいました。

榎本先生、その節ばかりでなく、その後もいろいろな節に、本当にありがとうございます。

三 「我らの国籍は天にあり」(ペリピ三・二十)

福岡教育大学の英語科をよい成績で卒業したものの、何しろ国籍が韓国なので、公立学校には応募もできない仕組みになつておりました。

榎本先生が心を痛められたのでしよう、また不憫に思われたのでしよう、何とか西南女学院に話してくださつて、面接ということになりました。校長に面接のため、先生がわざわざ私を連れて行ってくださいました。校長との面接中、どうも私の国籍が韓国だということを知らない様子なので、「私の国籍は韓国なのですが」と告白してしまいました。校長の当惑したような顔を思い出します。

今トロントで、世界中のいろいろな国の人達が差別なく、平和にみな実力に応じて、代議士、弁護士、県知事と、何でもできる社会に三五年近くも住んでみると、どうしてあの頃は、韓国人であることがそんなに劣等なことだと思ひ、罪悪感さえ覚えて告白しなければならぬような、一大事だと思われたのか分かりませんが、とにかく、西南女学院での就職は駄目になってしまいました。

面接後、待つていて下さつた榎本先生にその事を申し上げましたら、悲しそうな顔をされて、それ以上何もおっしゃいませんでしたが、その時、先生が以前に説教された言葉が心

に浮かび、希望と勇気が与えられたことを覚えています。

「私の国籍は天にある。私の救い主はイエス様、西南女学院の校長ではない」と。

榎本先生、私のために本当にお骨折りくださつて、ありがとうございました。

四 「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だ

けが堅く立つ」(箴言十九・一二)

西南女学院への就職が駄目になつた後、電車の中で、家庭教師をして明治学園に入学するお手伝いをした森田俊幸君にばつたりと出会いました。「先生、僕の英語の先生がお産で休暇を取られることになつたので、明治学園に来られたら？」と、丁寧に招いてくれました。数年見ない内に、すっかり立派な若者に成長しておりました。早速、主事であられた福島順三先生にお手紙を差し上げたところ(勿論国籍のことも含めて)、折り返し面接に来るようにとの電報を戴きました。福島先生は、後にローマ法王よりナイトの称号を授与されるほどの方ですが、善良、寛容、謙遜、柔和、慈愛、公正などの美德、人徳をそのまま人物にしたような方でした。私がカトリックではなく、前田教会の会員であることも、「もし私共の信仰が本当の信仰であるならば、同じ信仰であるはずです」

とおっしゃって励ましてくださいました。

明治学園で四年間の教鞭を取りましたが、学生にしつかり学んで欲しいとのあまりの熱意から、少し要求し過ぎたかも知れないと後悔することもありましたが、でも後に、私のホームルーム三十人余りの教え子の中から、四人が東大に合格したとの電報が来た時(その頃は、国際基督教大学の大学院で教育哲学の研究に没頭しておりました)、少し慰められる思いでした。

その後、国際基督教大学の大学院での課程が終わり、卒業を前にして、七つの進路が開かれていたことを覚えています。その内の一つを選ばなければならぬのですが、国際基督教大学の講師として残るようになるとの主任教授から薦められたことと、博士課程への入学試験をパスし、合格通知を受け取っていたことが、その項目の中にあつたことを覚えています。どの道も大変魅力的で、自分で判断が付きかねたので、どの道に進むのが神様の御旨でしょうかと伺うために、榎本先生にお手紙を差し上げました。待ちに待っても、先生からは全然お返事を戴くことができませんでした。

多分、主の御心がなりますようにと、陰でお祈りくださっていたのだと思います(先生は信徒の方々の名前を一人ずつ上げていつも祈っていらつしゃったということを知りました。

先生はどなたにも口癖のように「祈っています」とおっしゃっていましたが、本当にそうだったのです。

結局は、主人とめぐり合い(彼はその当時、韓国の従軍牧師という兵役から休暇を取って、東京神学校で、特にヨハネ伝の研究論文を書いていました)、それに続いて、私のトロント大学大学院への入学許可、主人との婚約となり、一九六九年の春、単身トロントへ行くことになりました。

最初、榎本先生に七つの進路の事でご相談申し上げた時には、トロント大学で勉強することも、結婚することも、その中に入っていないかつたのは確かです。まず第一に、私の結婚相手が現れるなど、想像もしていませんでしたから……。

神様の思いは、私の思いとは全然違ったものでした。また、その後の私は、トロントが何処にあるのかも知りませんでしたし、カナダで知っていることは、首都がオタワということだけで、六年生の社会学科の時間に世界各国の首都を覚えさせられた時に、何だかタワシのような名だなど思いながら暗記させられたことを覚えています。今にして、どうして榎本先生がお返事を下さらないのか分かりません。もしあの時、榎本先生がお返事を下さって、「講師として就職しては？」とか、「博士号の勉強」を薦められていたら、私の人生は随分違ったものになっていただろうと思います。

この箴言の聖句は、榎本先生がよくお説教の中に引用されたものですが、私の七つの計画のどれも実現せず、予想もしなかつた新しい道が開かれ、実現したことを思うたびに、この聖言の真理を実感いたします。

榎本先生、いつもお祈りのうちに覚えてくださいます、本当にありがとうございます。

五 「傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消す」

となく、真実をもって道をしめす(イザヤ四二・三)

サフランの花を実際に見たことはありませんが、モロッコ、イラク等の料理をする時、乾いた花びらをほんの二、三片きざんで入れると、お料理全体が美しいオレンジ色に仕上がるような花なのですが、ほとんど五十年前も前に、前田教会の若い女性の信者の方々のためにサフラン会が発足されました。

さて、このサフランという名前は、ソロモンの雅歌の中で、ソロモン王が自分の花嫁の美と清らかさを歌い、その園の中にある薫り高い花の一つとして数えているところから来たものですが(雅歌四・十四)、この雅歌はソロモン王と花嫁の愛の賛歌とも言えるのですが、若い女性の集いにこれ以上に対応しい名前があるでしょうか。このサフラン会で何よりもすばらしかったことは、榎本先生が私共のお証しにニコ

ニコと耳を傾けながら頷いてくださったたり、「よかつたですね」と励ましのお言葉を下さったり、そして必ず一人ひとりのお証しに対して、お祈りしてくださったことです。

イザヤがイエス様の誕生を預言して、「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は『靈妙なる議士』とあります。」「議士」というのは、「カウンセラー」という言葉で言い換えると、今の私達にはもつとはつきりするのではないかと思えます。イザヤはイエス様の一つの肩書きはカウンセラーだと言っているのです。私共がよく知っているように、カウンセラーの一番大事な仕事は、相談に来る人の話に同情の心をもって耳を傾けることだと思えますが、榎本先生はまさに私共の偉大なカウンセラーであられました。

先生からご覧になれば、私の信仰の歩みは幼稚で、成長は遅々としたものだったと思えますが、一度も、どなたにも忠告されたり、矯正されたり、批判されるということはありませんでした。私達を傷ついた葦を取り扱うように、またほの暗いろうそくの灯心を消さないように注意しながら、持ち上げるように、一人ひとり丁寧に愛をもって、あしらってくださいました。

榎本先生は、この聖句を通して、イエス様のお優しさを教

えてくださったのですが、先生ご自身も全きイエス様の足跡を辿られたのだと思います。

榎本先生、私達の心をそのように労わり、深くあしらってくださいまして本当にありがとうございます。

六 「あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のように

愛しなさい」(エペソ五・三三)

私の母は、いつも榎本先生は百合子奥様をご自分以上に大切にされる方だ、と申しておりました。



トロントの李文珠姉自宅前で

一九七八年、和義先生がインディアナ大学に留学されていた時、先生ご夫妻が米国旅行のかたわら、和義先生の所へ寄

られ、またトロントの私共の所へ足を伸ばしてくださいました。十年目の再会でしたが、お二人とも少しもお変わりなく、楽しい時を持たせていただきました。

その時、ちよつとダウンタウンの方へお散歩がてら、見物にお出かけになったのですが、百合子奥様が手にちよつとした物を持っていらつしやつたのを、榎本先生がすつとお取りになつてご自分で持たれたのです。奥様が少しの重荷でも負われぬようにとの細心のお心遣いがちよつとしたことにも現れて、本当に麗しいと感激いたしました。

百合子奥様もまた、優しさを絵に描いたようなお人柄でしたから、お二人はエペソ人への手紙の中の聖句をはるかに超越した結びつきを保たれていらつしやつたと思います。

このような結びつきを、こちらの人達は、*marriage made Heaven* と呼びますが、私達のために何とすばらしいお手本を示されたことでしょう。

先生それに奥様、お手本、本当にありがとうございました。

七 「しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、

温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、

偽りがない」(ヤコブ三・十七)

榎本先生のことばかり書いたようですが、私にとっては、

百合子奥様なしに榎本先生だけを離して考えることは、到底不可能だと思えます。先生のお宅は何かのことで訪問すると、いつも先生と奥様が一緒に私共の問題に耳を傾けてくださるのが常でした。そして、いつも主にあつての知恵をもつて導いてくださいました。ささやかな事でも、大きな事でも、いつも同じように思慮深い知恵に満ちていらつしやいました。

やはり先生ご夫妻がトロントに来られた時のことです。ハンナがまだ幼稚園に行つていた頃で、子供達のお母さん達が集まつておしゃべりをしていた時に、子供のサンドイツチのパンの耳を切り落とすか、そのままにしておくべきかで、皆それぞれ意見を出し合つていたのですが、納得の行く解答が出ないままになっていましたので、夕食後の団欒の時を過ぎていた時に、「どちらがよいでしょうか」とお尋ねいたしましたら、いつものようにニコニコしながら、「それは子供によつて違うでしょうね。食欲の旺盛な子供にはそのままでも良いでしょうが、食欲のない子供には、少しでも食べやすいように、また食欲の妨げにならないように、耳を落とす方が良いでしょうね」とおっしゃいました。一人ひとりの子供を良く知つて、その必要に応じて子供に一番良い方法を決めるといふ事は、その後の私の育児の一番根本的な原則となりました。この社会で、平等ということは、皆が同じ取り扱いを受け

るといふ考えで育つたハンナは、私が時々サムエルとハンナにすることが違つているのに気がついて、理由を聞くことがありました。この原則を説明しながら今日まで参りました。ハンナとサムエルは一度も兄弟喧嘩をしたことがないので、二人とも子供ながら私の説明を納得してくれたのかも、れません。

「上からの知恵」というのは、パウロ先生がピリピ人への手紙の中で、「あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによつて、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができるように」と祈つてゐるように、心が愛に満たされる時、神様から与えられる判断力のことを指しているのだと思ひます。

ですから、百合子先生の知恵は、私共に対する愛から発していますから、自然に「清く平和で、寛容、温順であり、あわれみとよい実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い」の全てに、完全であられたのだと思ひます。

私は幸いにして、このような愛を私の母の中に見ることができ、母の墓碑銘に「慈母」の称号を捧げましたが、百合子先生はまさに、私共と皆の慈母であられたと思ひます。

百合子先生、慈愛をもつて私共を導いてくださいます。ありがとうございます。

八幡前田教会での信仰の原点

正 野 隆 士（岡山）

「我は全能の神なり、汝、我前に行（あゆ）みて完全かれよ」

（創世記十七・一）

昭和三二年だつたと思いますが、私が高校三年の時、両親は食堂を開業するため、黒崎に引っ越ししました。母が東郷教会に在る時代から、榎本先生の説教プリントを見ており、その信仰に飢えておりましたので、早速、前田教会へ行くようになりました。私も高校生会、そして社会人と五年間、前田教会へ繋がらせていただきました。

当時の私の信仰は、十九歳の時に洗礼を受けましたが、まだ幼く、芯を外したものでした。先生のメッセージは単純明快で信仰一本、命を懸けての生き方を尊敬していました。しかし、私の信仰の目は開かれず、出世欲の目が燃えている有様でした。

ですが、この期間に植えつけられた聖言（特に文語訳）と信仰の根が、その後の主の奇しきお取り扱いにより、主に立ち返ることができ、信仰の原点になったと確信し、感謝にたえません。

主は大学受験や就職試験をことごとく失敗させ、自分の知恵や力では何もできないことを知らしめ、ほとほと万策尽きて、神様に祈り求めるようにしてくださいました。

「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる」〔ヨシユア記一・九〕

この聖言を通して、神様が如何に偉大な方であり、愛と慈しみに富んだ方が、どんなに落ち込んだ自分にも共にいてくださることを知りました。さらに、この私がどんなに自分勝手な罪深い人間だったかを、具体的事例を通して示してください、悔い改め、十字架の血潮により許されました。

喜びが溢れ、この主と共に歩む人生こそ、最高の幸せと実感しました。それは今も変わらない喜びです。ここに榎本先生が話されていた、信仰の原点があったことに気付かされました。とても感謝です。

実社会に出ると、様々な困難な問題や判断に困ることも多くあります。そんな時、聖書や先生から適確な答えをいただいたのは、とても感謝なことでした。特に企業経営に携わるようになってからの判断基準は、とても重要です。

ある時、こんな質問をしました。「先生、聖書には、『金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易

しい』(マタイ十九・二四)とありますが、私の立場は、極端に言えば、金儲けに命を懸けているようなもの。それでは地獄へまっしぐらになってしまいます。私は何を目指して経営すべきでしょうか?」。

「隆士さん、聖書の次の箇所には、何と書いてありますか?」。

「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」。

「ああ、そうですね。人間の知恵や欲を基準に商売をしているのは、神様の基準から外れてしまうのですね。主から事業経営の目的や運営の方法を教えてくださいませんか?」。

「そうですね……」。

その教え方は、決して講義をするようではなく、強制でもなく、聖書からヒントを与えて自分で考えさせる。そして、最大の目的は、問題を解決するのが目的ではなく、信仰に立つことだと教えられ、感動しました。

こんなやり取りが、経営の基本的理念「全員参加の愛の経営」や、「経営とは環境適応業ではなく、真理適応業である」など、経営姿勢や人生の生き方に繋がっていることを、うれしく思います。

これからも、残された人生を先生や私の母の信仰を模範として、主の福音のため、生かしていただきたいと願わされま

「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者であるイエスを見つめながら」(ヘブライ十二・一〜二 新共同訳)

(日本イエス・キリスト教団岡南教会員)

思い出

野 口 米 子(天草)

故榎本利三郎先生が召されて、皆様、前田教会員の方々、さぞお淋しいことと存じます。私も、先生には不義理ばかりして、すまなく思っております。先生の思い出はたくさんありますが、思い出すままに書かせていただきます。

昭和五十年当時、全くのラジオ・マニヤだった私は、放送局にちよいちよい投稿して楽しんでいました。昭和五十年の初め頃でしたか、放送局の誘いについつい乗せられて、戦中、戦後の食糧難の有様をハガキに書いて投稿しました。二、三日して、放送局の係りの人から電話があつて、採用するから、

金曜日の朝にラジオに出てくださいということでした。

私はハガキを読まれるものと軽く考えていましたので、驚いて断りの電話をしました。なかなか分かってもらえず、一週間のシリーズで最後の金曜日に出てもらうとの事でした。もともと上がり性で自分の声が電波に乗ると考えただけで胸がドキドキしてしまいました。そうして、藁をも掴む思いで（先生、藁にしてごめんさい）、榎本先生に電話してお願いしました。すると先生は、快く放送局にハッキリと断ってくださいました。あの時は本当にお世話になりました。

私の二人の娘たちも大蔵川の上流で受洗させていただきました。主人の母親は九七歳で召されました。子供は五人いますが、一人もクリスチャンになっていません。嫁と孫二人とで信仰を受け継いでいますので、いくらか心安まって天に召されたと信じています。

「汝ら、心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

(ヨハネ十四・一)

我が家の玄関の壁に、故野村先生の達筆による色紙の額が飾ってあります。引越しの記念として先生方が下さったものです。永く、永く飾って、主人がまことの神様を信じる事ができるように祈っております。本当にありがとうございます。

榎本先生との出会いと想い出

井 上 文 子(都城)

「人は自分の愚かさによって道につまずき、かえって心のうちに主をうらむ」箴言十九・三

「きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら、荒野における試練の日に、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにはいけな」(ヘブル三・七、八)

聖句に反することばかりの弱い者ですが、その都度、すばらしい御言に目を留めさせて教え示されるお恵みを、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

榎本先生の思い出を書くことについては、前田教会の週報や金生先生からお聞きしておりましたが、祈りながらも、なかなか書けませんでした。十二月も残り少なくなるにつけ、一筆書かせていただくことを許され、時を与えられたこと、感謝申し上げます。榎本先生には、生前より、弱い魂のためにも愛の労をお取りいただいたこと、心よりの感謝に耐えませんでした。

また、「ぶどうの木」に初めてお証しさせていただいたことも、本当によかったと改めて感謝するものです。ありがとうございます。ございました。重複するかと思いましたが、遅ればせながら失礼させていただきます。

以前(昭和三九〜四十年頃)、家事手伝いのために福岡に導かれたことも、先生との出会い、また主にあつての交わりの時だったこと、「後、知るべし」で、本当にもつたないお恵みだったと、懐かしく思い出すことです。

お店は旅館でしたが、ある時、上お手伝いさんが台所に来て、びっくりした大きな声で、「先生がお見えになった」と私に知らせに来て、玄関に立派な紳士が見えているから早く、私を押し出すように言うので、私も突然のことでびっくりし、慌てて行きましたところ、榎本先生が立つておられました。あの時何をおっしゃったのかは、今は定かではありませんが、その時の先生との出会いが、忘れられないお懐かしい思い出となりました。

あの頃、大濠公園教会の御用においでになっていたと思います。ある時お電話を下さり、天神の地下でお食事をご馳走になったこともありました。ご存知の小心者ゆえ、初めての都会でのことで、うれしいような、恥ずかしいような、今となっては懐かしく、先生のあの時のお姿を想い起こし、本當

に何者なれば、また主になればこそと、感謝が甦ります。

あれからしばらくして、田舎に帰ることになりましたが、お店の人々、特におばあちゃんやんが、帰る時に涙を流してくださったこと、無知な者にも、助け人があの時も与えられていたこと、いろいろと教えられたこと、よくしてもらったことなど、今はすばらしい思い出です。

この時も、先生ご夫妻には、お祈り、ご指導いただきまして、一ヶ月位してから、北九州(八幡)に家事手伝いとして行くようになりました。いずれにせよ、数限りないご迷惑とご心労をおかけしたこと、申し訳なく、遅ればせながらお詫びしたい気持ちでいっぱいです。

神様の憐れみにより、また皆様のお祈りによつて、今日まで守りの内に生かされていることをしみじみと思い、心より改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

最後に、私事で申し訳ありませんが、両親のためにもご多忙の中、遠路より榎本先生においでいただいたこと、本当に申し訳なく思いましたが、しかし、両親も先生を通し、お導きに預かりましたこと、重々感謝に耐えません。憐れみにより、落ち着き、平安を与えられ、父の最期の姿を見て、先生がお帰りになる時、母が「私の時もお願います」と頼んでいたこと、後の告別式の説教を通して知り、共々にびっくりし

ました。でも感謝でした。

「わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である」

(第二テモテ二・十三)

神様の憐れみにより、無智な者を含め、家族一同、お恵みに預けられたことを心より感謝申し上げ、忘れることのできない先生との想い出を、つたないペンながら、取らせていただきまして感謝です。ありがとうございます。アーメン。

榎本先生とのお交わりをいただいて

石 丸 幸 子 (大阪集会)

一 先生との出会い

私は十三歳の時、愛媛県の田舎で母を亡くし、寂しい思いをしておりました。

その頃、友達の家の座敷で開かれていたキリスト教の集會に誘われました。私はいつも心の中に何のために生きるのかを、自問していたので、女の牧師さんの生き生きとした笑顔とお話に、内容は解らないけれども、大変惹かれました。

十五歳の時、松山へ引越し、そこで近くの改革派教会へ

行くようになりました。

二十才で受洗し、二六才で結婚して、四国から九州へ渡りました。

二年後、社宅に引越して前田教会を知り、牧師館へお邪魔しました。榎本利三郎先生はイエス様にびったりくっついておられているように感じました。先生も百合子奥様も、大変にこやかで暖かく、一度でこの教会に來させていだきたいと思いました。

二 木曜会

木曜会は、日曜礼拝と共に大変私の心の支えになり、先生の信仰生活を身近に教えていただいた有り難い集會でした。皆様もご存じの事ですが、心に残っている先生のお話を書かせていただきます。

(一) 先生が故郷を出られる時、お母さんが言われたこと

「いやな事を言ってくれる人の言葉は、よく耳を掘って聞きなさい」。

(二) 「あなた方は、家庭の牧師さんとして遣わされているのですから、そのように生活しなさい」。

(三) 「いつも祈り深くしていなさい。神様の小さい細い声を聞き過ぐすと、いくら悔やんでも間に合わなくなりま

す」。

(四) 「病氣や悩みの時こそ、神様が何を教えて下さるかを期待して聞きなさい。聞く姿勢をとるなら、いつでも神様は語ってくださいます」。

(五) 「お金、健康、家族、みんな大切ですが、いつか必ずそれらも役立たない時がきます。自分自身も、いよいよという時は、何の力も希望もありません。その事をしっかりと心に止めて、今この恵みの時、救いの日に、神様を手ざわるように知っておく事が大切です。朝顔は、棒を立ててやると屋根まででも、どんどん登っていく。私達も神様に依り頼んでいけば力を与えられ、神様によって、どんどん登って行くことができます」。

(六) 「私達の今は、例えばトンボがまだ水の中のヤゴの時代を生きています。泥水の中で生活をしている。しかし、やがて水から上がって、スイスイ空を飛ぶトンボのように、私達を全く新しい住まいに住まわせて下さるのです。今この時も、イエス様は信じる人と世の終りまで、共にいてくださいます」。

(七) 「目の見える内に聖書を読み、聖言を蓄えておきなさい。必要な時に思い出させて、平安や勇気を与えてくださいます」。

(八) 「自分をいくら見詰めても、自分の中からは良いものは出てきません。神様を見上げ、お祈りをして、聖書を読み、主に信頼しましょう」。

(九) 『一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている』(ヘブル九・二七)とあります。神様は、イエス様をこの世に送り、私達の罪を許すために想像を絶する十字架の苦しみを受けて、贖ってくださいました。神様はイエス様を甦らせて、『もう罪が許されているから、悔い改めて神様に立ち返り、イエス様を信じなさい』と妬けるような思いで手を差し伸べて下さっています。私達のこの世の命は滅びても、永遠の命を戴くことができます。心を頑なにしないで、信仰を持ちましょう」。

三 大阪集会

月に一度の大阪集会は、利三郎先生により三七年間、先生が九十歳までの永きに亘り、私達を支え励まして下さいました。九州から大阪まで日帰りで来られる御姿には、一心に神様にお従いされる先生の意気込みを強く感じました。

先生は、失敗と見える事柄でも、お恵みと受け止めて感謝されるので、恵みに変ってしまうのです。聖書にある神様に

従えばこの様に成りますと、ご自身が歩まれた事実で証して下さいました。集会に来られた方は、喜んで帰られます。

前田教会の説教テープも、皆で聞くように郵送して下さい、信仰をしつかりと支えて下さる先生の大きな御愛を戴いて来ました。時々先生にお電話させて頂いた頂きましたが、先生のお声を聞くと、悩んでいた事柄がスーッと消えて、嬉しくなるのは不思議でした。この世にない慰めを感じておりました。

四 おわりに

四国の田舎に居た者が、北九州の榎本利三郎先生のご指導にあずかり、大阪でも直接お言葉を聞く身の幸を思い、今また榎本和義先生の御奉仕を受ける恵みを、奇跡のように感じております。徹底して主に従われた先生を、見習って歩めるようにしなければと、自分に言い聞かせております。

私が信仰を捨てないで今あるのは、先生のお祈りと背後でいつも、先生を、支えてお祈りくださった、百合子奥様のお陰であると感謝しております。

教会の皆様のお祈りを感じて、終わらせていただきます。「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アアメン」

(ローマ十一・三六)

利三郎先生の思い出

正 岡 晶 子 (大阪集会)

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日なり」

利三郎先生の思い出を書きとめたいと思いつつ、今日までの集会のノートを読み直し、いろいろの御言を思い起こし、恵みを数えることのできましたこと、主に感謝致します。

はじめて、大阪集会へ石丸幸子姉より導かれたのは、一九八三年コロナホテルでの集会でした。その時の御言は、その年の新年聖会の御言でした。

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日なり」

(第二コリント六・二)

「今はエホバを求むべき時なり」(ホセア十・十二)

「今はエホバの働き給うべき時なり」(詩篇一一九・一二六)

今思い返せば、主はこの御言を用意して、私を待つていてくださったと思います。今日こそペンを取ろうと思いつながら、テープをかけると、この御言の先生のお話でした。まだ折ることもできない私を主は憐れんでくださり、十年の長血を患った女と同じ状態で、あちらがいいと言われれば、あちらへ、こちらがいいと言われれば、こちらへ、と振り回され、私の

力ではどうにもならない、ここしかない、と集会へ導いてくださいました。

集会に出させていただくようになって三ヶ月位した頃、「人はパンのみで生きるにあらず、神の口から出る一つひとつの言葉によって生きるのである」(マタイ四・四)、まことにそのとおりです、とはつきり思いました。

もつと、神様のこと、イエス様のことを知りたいと思い、先生に洗礼を受けたいと申し出ました。先生は一年間、聖書を読んで、テープを聞きましようと言ってくださいました。

その頃、主人の母(ほとんど寝たきり)の介護、主人の仕事の独立、子供の引きこもり、大きな波が一度に押し寄せてきた状態の中、一本の藁にすがる様な思いで集会を待ちました。

集会では疲れのため、よくうたた寝をしましたが、先生は主が眠らせてくださっているのだから、寝ていいですよ、と言ってくださいました。本当に気持ちよく眠れました。集会に出ると、必ず、ホッと心が休まり、何があっても大丈夫！と安心することができました。今日はどんな御言が語られるのでしょうかと期待し、祈りつつ、集会に出させていただく時、主は必ず祈りに答えてくださいます。その時、その時の問題を、御言を持って励まし、解決して下さいました。皆さん一人ひとり問題が違うはずなのに、どうしてこんなに平安にな

るのか、不思議でした。帰り道、石丸幸子姉と「不思議やね」とよく話しました。

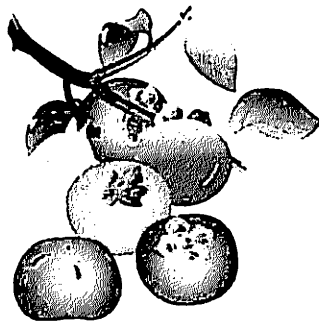
受洗は一九八四年四月九日、大蔵川にて、松尾博子姉、石丸道子姉、石丸到兄と共に、「わたしたちは今や神の子である」、神の子としていただきました。この受洗のため、石丸道子姉、到兄、私と三人で牧師館に泊めていただきました。百合子奥様のお料理がとてもおいしく、御汁のおだしの味、しゃぶしゃぶのとてもおいしかったことが忘れられません。また、その時、先生はことごとくお祈りをされ、お孫さんが帰られる時も、祈って送られるご様子に、クリスチャンはこの様に生活するのだなと驚き、このように生活をしなければいけないと思いましたが、なかなか今もできません。先生は百合子奥様が何をしたいか、先々わかり、奥様のお手伝いをされている様子が今も目に浮かびます。

受洗をさせていただいてから、毎年聖会に出させていただき、里帰りの様に、皆様が待っていてくださり、先生と奥様が本当の親のようで、自身の親には少し申し訳なく思っています。聖会で歌われる霊感賦は、魂が生き返るようで、松尾博子姉の心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、神に捧げ奏されるオルガンに合わせて、先生の歌われる大きな声、皆さんの元気な声、私も「はい、そうです」と心に思いな

から、歌うすばらしさは、聖会でなければ味わえません。ここから、一年がはじまる、この日がなければ、新しい一年は生きることができない、そのような思いで、一年、一年、聖会の御言によつて、ここまで生きることができました。

事あるごとに、思い出す先生の話された御言、耐えられない試練は与えられない、耐えられると神が見込まれている、私にしかできない神様の使命が与えられ、生かされている。大きな問題の時こそ、大きければ大きいほど、「わあっ、すごい！」と思う大きな恵みが与えられる。御言に従った人にしか分らない恵み。御言に従った時、神様は全責任を持つてくださる。手ざわるように、主を知らせて下さる。一步踏み出せば、あとは神様が歩ませてくださる。事情、境遇ではない、御言に従った時、結果は神様が出してくださる。主は何と言われているか、全幅に信頼し、御言を丸のみにする。人からどう言われようとも、神様は何と言われているか、人ではない神様に喜ばれる信仰、全宇宙、万物を創られた神様、今も生きて働いておられる御方が、行けと言われる所へ行く、自分が嫌でも、神様を通れと言われれば、通ればよい、そうすれば、神様が責任をもつて、通らせてくださる。戦中、戦後の経験を通し、はつきりと証をしてくださった先生のお言葉に、間違いはないと思いました。

二〇〇二年の聖会の御言、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。標語を書く方に、「神を信じ」を一つにと言われたとのこと、イエス様が、天に帰られる時、弟子達に語られた二〇〇〇年前のことではない、利三郎先生の九四歳の生涯を通して、御言が真実であること、主はまことに今も生きておられることを証ししてくださったこと、心より感謝申し上げます。ハレルヤ。



主に感謝して

堀 中 洋 子（大阪集会）

主なる神様、今に至るまで大阪集会を備え、遠い所より榎本先生、今も和義先生が来てくださり、全てを整え導いてい

ただいているお恵みを感謝致します。

今から十四年ほど前になりますが、辛い問題があつて教会に行きました。そして受洗させていただきました。しかし、現実起きる事柄に心疲れ、平安な日々はありませんでした。そんな時、大阪集會に石丸、正岡両姉妹が誘つてくださったのです。思えば、ご集會で榎本先生とお会いできたことは神様のお恵み、今もとても嬉しくて感謝です。また初めて歌う靈感賦の言葉一つひとつに、心を慰められました。

ご集會に集うごとに、先生から神様抜きにしていることが罪であること、そして、イエス様が今も共にいて、働いておつてくださっていることを聖書からはつきり、またご自身のお証しより、やさしく教えてくださいました。祈る日々、辛い問題の中、自分、自分で頑張つて来たことの苦しみから、少しづつ解放されて行きました。先生のおっしゃった「辛い問題も恵みだよ」、「えっ？」との思いでしたが、集うことに聖書のお言葉が聞きたくて、然り、然りと頷いていました。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であつて、それは神のよしとされるところだからである」(ピリピ二・十三)。

主の愛と憐れみにより、生かされていることに気づかされ、主を待ち望む喜びの恵みの御座となりました。

ご集會後、大阪駅構内でお茶を飲みながら、御言を説き明かし、お祈りしてくださり、恵みに恵みを加えていただき、感謝でした。

「彼らは互に言った、『道々お話しになったとき、また聖書を説き明してください』と、お互の心が内に燃えたではないか」(ルカ二四・三二)。

大阪駅でのお別れは、「上を見上げるんだよ」、「ハイ」でした。先生が天に召されてはや一年になりました。最後のご集會のテープより、

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかつたならば、わたしはそう言つておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行つて、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」(ヨハネ十 四・一〜三)。

先生から私への遺言、

「今わたしはみもとに参ります。そして世にいる間にこれらのことを語るの、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためであります」(ヨハネ十七・十三)。

「主を見上げるんだよ」、御言に立ち返る時、心の不安、恐れは取り除かれ、望みが湧き上がり、主を喜ぶ者としていたできました。深い主の御旨に言い尽くせない喜びを感謝いたします。

榎本先生への追想「パウロの足跡を辿って」

川 越 正（大阪集會）

（その一）

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に做つてはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」（ローマ十二・一〜二）

これは一九九〇年六月三〇日発行の「榎本牧師の八十年史」のヨーロッパ紀行文の中で、ローマ市内の聖ペテロ寺院、郊外のカタコンベ（地下墳墓）などを見学された時の感想の一

節です。「ローマ皇帝の迫害の中で、信仰を守り通した聖徒達の足跡を見たこと、多くの信者が猛獣と戦わされ、殉教させられたことなどを遺跡見学を通じて学ばされた」。続いて自問の言葉、「今、そのような迫害もない恵みの日に置かれている自分の信仰は、これでいいのか」。そして標記の御言が記され、先生の記述は終わっています。

二〇〇三年三月二十八日から四月九日に亘ってパウロの足跡を辿るため、トルコに「使徒行伝と黙示録の世界」を訪ねました。それは、「あの人（パウロ）は、異邦人たちに、私の名を伝える器として、私が選んだ者である。わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならぬかを、彼に知らせよう」、「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救をもたらすためである」という主イエス・キリストの召命に全身全霊をかけて、（上記の御言のとおり）自分の体を神に喜ばれる生けるいけにえとして捧げ、福音を異邦人に伝えたそのパウロの足跡を辿り、その事を通じて、先生も紀行文の中で述べておられる「耳で聞くより、本で読むより、御言に直接生命をかけてお従いした者の足跡を見たり、建物・彫刻・絵画などを見聞するその喜びは、他では得られない」、そういう体験を得たい、そして現地に行かなければ見えないものが見えてくるだろう、そういう目的以外にトルコの

キリスト者との交わりも主目的でした。本文の目的はパウロの足跡を辿ることで、「見えなかったものが見えるようになった」ことを記し、そこから先生の辿られた足跡を自分なりに辿りたい、ということにあります。

さて、私共のツアーは、三月十九日から始まった米・英両国によるイラク戦争(今となつては大義なき戦争)の九日後の出発というところで、様々な影響を受けましたが、神の導きと憐れみにより、最後まで守られ、感謝のうちに終えることができました。

今、「パウロの足跡を辿って」思うことは、召命を受けた伝道者パウロの何とすごい従順さ、覚悟、伝道の業であり、生涯だつたのだろうかということ。広大なトルコの地は日本の二・一倍の面積(ちなみにイスラエルは四国程です)、そこを一日四十キロから五十キロ歩く。それも人家のない、ほこりだらけの土または石舗装の道を、小アジアの暑い太陽に焼かれながら日本と違い高木がほとんどないため木陰で憩うこともできず、盗賊の出没に注意を払いながら(アンティオキアとタルソス間の道沿いには盗賊対策の砦の遺跡がありました)歩かなければなりません。

(その二)

冬のアナトリア高原は標高一二〇〇メートルと高く、雪が降るためにキリキアの峽門は六月まで通れなかったそうです。そして橋のほとんどない川を渡る時は、あのローマ帝国の骨格を築いたユリウス・カエサルでさえ、羊の皮に空気を入れて膨らませた浮き袋につかまって渡ったと言います。

トルコの山は高木がほとんどないために、山に保水力がないので、雨とか雪が解けるとその水はすぐに流れてしまう。訪れたアンティオキア市内を流れているオロンティス川も雪解け水が一杯で、濁流となつてすさまじい勢いでした。パウロが「川の難」と言ったのは、こういう状況なのかという思いで、その川の流れを見ました。

車窓からの眺めからは、人家・集落は少なく、あつてもその距離が遠く、畑も耕作していない平原、丘や岩山、未だに冠雪している山、石ころだらけの不毛地が続きます。だから、たまに川の流れや田の水を見ると、心がなごみ、ホッとします。そして農耕民族の血を感じました。

そういう風景を見ていて、どこで食事？飲み水は？どこで休んだ(寝た)？着るものはどこで補充・買い足した？を考へざるを得なくなります。イエス様の、「何を食べようか、飲むか、着ようかと心配するな」という御言に従わないと耐えることができず、主からの使命を果せなかったと思いました。

それでも、「度々眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたことも」と、パウロが嘆いている事が足跡を辿ってみてよく分かりました。「毎日が死の連続です」、この言葉も。彼は毎日死の床につき、朝ごとに生かされた(生き返らされた)、そう思われました。「明日は明日のこと、労苦はその日で十分」という御言を、彼は実感したことでしよう。

そういう現世的な労苦を経て、ようやく目的地に着いても、「同朋の難、異邦人の難・」と、行く先々で迫害に会う。「私を信じる者は迫害を受けます。その時は次の街に逃れなさい」。しかし、その事で福音が広まったのです。初代教会は幾多の迫害に会い、殉教者が増えるのに、信じる者はそれにも増して増えた。「爆発する伝道！」と表現している書物もあります。

「生きているのはわたしではない。キリストがわたしのうちに生きておられる。私が肉において生きているのは、神の子に対する信仰による」。また「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。私の願いは、世を去ってキリストと共にいることです」

このパウロの主への従順さは、当時の信者にも波及していたのでしよう。二世紀の異教徒の言葉、「キリスト教徒がどのように愛し合っているかごらんさい」、「彼らの団結振りは

驚くばかりだ。ぐらつく足場の上に立っていると思うと、結束もいっそう強まるのだろう」という驚嘆の言葉を讀むと、初代教会のキリスト者の信仰の強固さを見る思いがします。先生の自問の言葉はそういうことをも含んでいるのかなと思います。

パウロは、「人間の法廷で裁かれても、一向に気にしない」と言っています。イエス様も言われました、「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません」と。パウロがルステラで迫害にあい、石打にされ、死んだと思われて町の外に放り出された時でも、彼は立ち上がって、再び町の中へ入って行った。そのパウロの不屈の魂、頑健な体、「キリスト・イエスに捕えられている」という全き信頼を見ます。外にそういう状況の中で、「なおいろいろの事があつた外に、日々私に迫って来る諸教会の心配ごとがある。だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか」、「あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか」、そういうパウロの優しさ、愛がありました。それは、「しかし、働いたのは、実はわたし(パウロ)ではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」。彼は「靈の導きに従って」歩んだ。そのパウロの大胆な信仰、愛を説き、教会を立上げ、キリスト教神学の礎を築いたのでした。

(その三)

諸教会に対する励まし、論し、調整、いつたいパウロはあの書簡に表わされている神学理論を、いつ与えられ、どこで確立する時間があったのか。度々投獄されたが、そこでの時を活用したのだろうか。そしてパウロは様々な艱難をも乗り越えて迫害に耐え、偶像の溢れる地、トルコ、ギリシャ、ローマ、そしてイスラエル、地中海、エーゲ海をも含め、何万キロにのぼる伝道旅行を果し、「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです」という輝かしい言葉と、「ミレトにおける涙の惜別の言葉」をもってエルサレムへ旅立つことができた。

私はこの旅を通じて多くの事を学ばされ、見えないものが見えるようになりました。何より「霊の導きに従って歩む」ことを、また「働くのは共にある神の恵み」と感じる信仰の謙虚さを学ばされました。感謝です。

以上の、パウロの足跡を辿った旅から学んだ、学ばされた事を通じて、先生への追想を記します。「燃ゆる柴五十年誌」の戦時下の伝道の章に、軍部、政府からの迫害の様が記されています。パウロが「人間の法廷で裁かれても問題ではない・・・」と語っていますが、先生も恐れることなく、牧会な

さいました。むしろ、そういう迫害・弾圧により、信仰がより強められたのではないのかと思います。

それは、ローマでの遺蹟を見られた時の自問からの、私の勝手な推測ではありますが、学校の講師を辞任なさったことも「神は耐えられないような試練にあわせられることはない」との御言に従われたのだろうと思います。現世的・この世的なことと先生が判断された、そして自ら退路を断られた。「霊によつて体の仕事を絶つならば、あなたがたは生きてます」、パウロの表現を借りると、先生は「霊の導きによつて歩まれた」。それで日常生活が破綻したとしたら、それはそれで神の御旨だから従うという信仰を、そこに見るのです。

大阪集会についても、未だ新幹線が開通していない昭和四三年から、福音への飢え渴きを覚えていた四〇五名のために大阪集会が開かれました。「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」という御言を実践された。

私の二人の子供が、集会室のテーブルの上で寝かされていた光景を、今思い出します。その二人とも、今恵まれ信仰を与えられました、また集会は神様の憐れみで現在和義先生の奉仕のもと、十五名を超える参加者を数えるまでになりました。先生の蒔かれた一粒の麦は、実を結び大きく育つていま

す。当初は四く五名のために、往復二日間を要したわけです。

その集会を先生は三十余年の間、御用された。先生に今そのご苦勞を感謝するねぎらいの言葉を私が申上げたと仮定すると、先生は「働いたのは、私ではなく、私と共にいて下さる神様で、その恵みですよ」とおっしゃると思います。「私は靈の導きによつて歩んだ、働かされたんです」とも。「わたしは今日も明日も、次の日も自分の道を歩まねばならない」というイエス様に従われて、道(眞理)を歩まれた。

私は以前、新年聖会の三日目の夜の感謝お証会で、「説教を先生の遺言と聞きました」と述べたことがあります。だけど、私が言うまでもなく、先生は講壇で説教(御用)されるたび、常に遺言であるという気合いを込めておられていたと思います。「生きているのはわたしではない、キリストがわたしのうちに生きておられる」という御言に確信を持って従われた。そして「死ぬ事もまた益です」と思っておられたと思います。

(その四・まとめ)

今、最も深く考えさせられていること、それは先生のローマでの遺蹟を見られた時の感想(初代教会の信徒達の迫害に会つても棄教せず、主の御許に行ける嬉しさに喜んで殉教したその歴史の遺蹟を見学され)「今、そのような迫害もない恵

みの日に置かれている自分の信仰はこれでいいのか」という自問の言葉です。

それは家庭集會、開拓伝道、そして不況下での生活、戦時体制に向かう中での思想統制・弾圧、敗戦後の不況、講師職の辞職による牧師職への専任 e t c。私にはその他窺い知れない事柄もあつた事でしょう。そしてヨーロッパ旅行の当時は、先生の各教会ともキリスト教会として地域社会に認められ、伝道隊としてもその働きを認められ、重きを置かれる存在となり、教会員も靈に満たされ、・・と先生として自らの今があるのを信じられない、というような思いでおられたのではと思う。

世的には、厳しく、辛い狭き門を選択されただけに、かつて体験された迫害への思いが、初代教会の弾圧、殉教の歴史を見聞されることにより、蘇つてきたのではないか。

今回のツアーでも、同じような見聞を私共も致しました。トルコでは、プロテスタント教会は今、非合法の存在です。教会の看板の設置も、十字架もダメ、集會も警察の監視下ということでした。私個人もそういう状況を見、聞き、十字架を堂々と掲げられるということの意味合いを考えました。先人達の犠牲、献身、そして血のあがないとしての十字架の重み・大事さを、継承すべき信仰の象徴として、人間として最

も大事な基本的人権の一つとしての宗教の自由を守るものとして十字架がある。先生はあの文章以外何もおっしゃいませんが、今はもう・・「主を信じる者は迫害を受けます」という御言に従うことの重みを感じます。同じく、「自分の体を神に喜ばれる生けるいけにえとして献げなさい」の御言にも。

今回榎本先生とパウロ様の足跡を辿るといふ大それた企てを自らの能力を顧みず自分に課したので、たいそうな苦勞をしました。それでも御二人の艱難には比べ様ありませんが。

榎本先生よりお袋と共にバプテスマを授けられ、そして先生のお引き合わせにより妻と知り合い、結婚式を執り行なってもらった者として尽きせぬ感謝を込めて！この文章を恩師、榎本利三郎先生に捧げます。



夕映えの覚え

上野 米子（大濠）

御聖名を崇めて感謝申し上げます。

産毛で掃き清められたような、澄んだ青き大空には真綿で画いた白い薄雲が、風もないのに静かに流れて行きます。

夕映えの色うつくしく、木々の緑を通して斜光の夕べの安らぎを戴かせておられます。また、夕餉の用意は包丁の音もリズムをきざみ、安らぎを与えてくれます。八十余年の歳月に思いを馳せ、独り昔の思い出を辿っております。いろいろな事がありました。一つひとつを通して願ひする時、「主はわたしの光、わたしの救だ、主はわたしの命のとりでだ」との御言を覚えます。この夕刻のひと時は、私の安らぎの大きな一つの恵みであることを覚えます。

心の糸

先生の思い出を、心の糸でつないで見ました。

○ ぶどう園と孫たち

献児式、成人式、結婚式とお恵みをいただきました。ひとりの孫は一児を与えられ、今、任地に帰りました。すべて、

主によるこばれる神の恵みと覚え、感謝申し上げております。

○ ウォークマンと先生

唐人町の地下鉄駅から大濠公園教会に向かう道で、イヤホンを耳につけた先生は、讃美歌を聞きながら歩いておられ、讃美歌のお声も良きお導きのお声ですと申され、私の耳にイヤホーンをつけてくださいました。御言はいつも先生と一緒です。

○ 同期の桜と和らぎ

先生が教会にお出でくださる時、「やあ、同期の桜」と私の肩を叩き、ご挨拶をいただきました。先生の奥様と平野つた姉、私、上野は同じ年度、大正四年四月から一ヶ月から二ヶ月の違いで生をいただきましたので、「霞ヶ浦海軍少年航空兵」を思い出したのだらうと私は思いました。このような御愛と和らぎを先生はお持ちなのです。

○ 迷い

かつての日、迷いのあつた時、私は先生にご相談を申し上げたところ、「それはあなたの信仰如何です」と、たった一言お言葉が返りました。その後、心のトゲとなり、私に宿って

います。痛みは感謝です。

○ 悔いの日々

神の御愛をいただきながら、悔いの日が多くございますが、「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導く」とのお言葉を載いております。

○ 信仰

先生はお説教の終わりに、「汝ら、心を騒がすな。神を信じ、また私を信じなさい」と申されます。「信仰を持ちましょう」と結んでおられます。感謝です。

信仰とは

岩 崎 弘（大濠）

信仰とは、

一種の決断である。これを科学的に説明せんとすれば、百年経つてもできはしない。カール・ヒルティ

信仰とは、

自転車のペダルを踏んでいる状態。止めれば倒れる。

榎本利三郎牧師

牛乳を飲んでゐる人と飲まない人では、病氣の時に大きな差が生じる。信じる人と信じない人との違い。

折瀧鶴治郎牧師

天国に 旅立つ朝の その日まで 買い物ぶくろ 忘れずに

神の加護を祈りながら、人様に迷惑をかけずに、百寿に至りたいものです。

利三郎先生の説教を、大濠公園教会で二、三度、妻の勧めで拝聴しました。また、師にお願いして、先代の折瀧牧師との約束による義母の納骨の儀を、当教会の墓地でしていただきました。

師の祈りを、妻の臨終の前日、病院のベッドでされた思い出があります。

神様の「愛」に

北 崎 や す 子（大濠）

「秋来ぬと 眼にはさやかに 見えねども

風の音にぞ 驚かれぬる」

本当に涼風に頬をなでられて、心地よくうれしい秋の今日の日まで、命賜ったこと、確かに神様の大きいなる御愛と御憐みの賜物です。省みますと、私十九歳の春、妹も女学校を卒業しますので、家には母と兄嫁と父の妹（叔母）と私と妹と、五人も女がいて、することもなく、兄が三三歳の時、学校に勤めておりましたが、豚のお産とて、雨の日に豚舎を行ったり来たりしたのがもとで、肋膜炎に水が溜まり、勤務先より自宅に帰り、十二年間も寝て、姉が介護していましたが、食事の仕度は姉、私と妹は掃除。家の中と庭とを交代で、母は手伝いの男の人と野菜作り、毎日十人以上の家族の食糧を自給自足の時代ですから、田んぼが忙しい時はご近所のおばさん達を手伝ってくださって、私共が田に入るのは夏休みにも田の草とり機を稲の間に押すと、一列ずつ土を掘り返し、田の草が水に浮きあがりました。それは手伝いの男の人と一緒にしました。夏暑いと庭の大きな木の陰に籐椅子に体を横たえて

本を読んだり、我がまま勝手しても誰も咎める人もなく、我儘のし放題という現状でしたので、若い時にこれではいけない、少しは人様の中に入って、苦勞しなければ、と思いましたが。それともう一つは、母がいつも申しました。九人の兄弟の長男の嫁として、兄の病気でどれくらい心配しておられるか分かりません。私がお世話になるのはお姉さんです。私達女五人皆他家に行ってしまうでしょう。皆でお姉さんを大切に、というのが母の言葉でした。時には、あなたは目上の人を使う言葉と友達に使う言葉の差が分からないのですか、と叱られました。どうしてですかと尋ねましたところ、あなたがお姉さんに使っている言葉は友達に使う言葉ですと、十八歳の時、やさしい母から叱られました。以後、その母の言葉は今でも判然と私の頭に残っています。

それから考えました。家に居て我がままばかりしては駄目だ、一年だけでいいから他人様の御家でいろいろ教えていただかないと、と思い始めましたので、毎朝父の枕元で許しを乞いましたが許してもらえず、家に居ればいいとの言葉ばかり、とうとう一週間目の朝、私の方から、「お父さん、可愛い子には旅をさせよという言葉がありますでしょう」と言ったら、父が笑い出して、そこまで言うのだしたら、一年だけ暇をあげるから行ってよろしい、但し、他人様で辛抱できません

んと言つて戻つて来て家には入れないよ、と言われて、「はい」と言つたものの、誰も世話して下さる方もありません。毎日することもなく新聞を隅々まで読んでおりましたところ、求人の方が眼につきました。家事見習い求む(高女卒以上)と書かれていたので、ここに行つてみようとして一人決心しましたけれど、福岡に一人で行つた事もないし、と考えておりましたところ、実は十七歳の時、女学校を卒業して、直方高女を卒業したのですが、遠いので近くの福丸高校の専攻科にお裁縫のお稽古に通わせて貰い、毎日袴をはいて、片道一里以上のジャリ道を往復しておりましたので、足が痛く、飯台の下に足を伸ばしていたのを父に見つかり、行儀が悪いと叱られておりましたので、一応九大病院に行つてみよう、大した事がなければ末永様のお宅に伺つてみよう、十九歳の私の一大決心でした。その結果、足は大した事はないけど使い過ぎとの事、そこでその足で西公園の末永様宅にお伺いしました。以後一年余り置いていただき、何かと貴重な教訓を戴きました。

キリスト教など嫌いだと、何も分からず三人の手伝いで三週間に一度お休みを戴き、礼拝に行きませんかと文子奥様に御声をかけていただいても、なかなか行けませんでしたが、しばらくすると、奥様のお姿の美に美しい女神様のように、

決して人が悪いとおっしゃらない、悪いのは私と、こんなに人を責めないで生きていけたら人と争う事もなく、最高の人生が送れると分かった時より、初めて教会にお供させていただき、榎本先生、野村先生、もちろん折瀧先生にも、また末永雪お婆様にもお会いさせていただき、私の心が少しずつ信仰というものをありがたく、このようにして末永の文子奥様の、また雪お婆様のお姿、いつも神様の御前に己を低くして生きておられるお姿に深く感動いたしました。同じ一生、生きていくには、人が悪いという前に、自らをしつかりみつめて、「我は全能の神なり 汝わが前に行(あゆ)みて完全かれよ」とおっしゃる神様の御前に真実に歩ませていただきたく願いつつ、まだまだ謙遜心の足りない自らを省みて、文子奥様より戴きましたお手紙は、今日は一に謙遜、二に謙遜、三に謙遜と教わりましたよと書いて下さいました。

それを実行なさいましたこと、一言申し上げますと、私引き揚げて来てお伺いしました折、えび茶色の立派な帯締めを、御自分のを外して私の帯の処にあてて、この帯によく似合うよ、私少し派手になったので締めて頂戴とおっしゃいました。私どもだつたら、少し派手になったから、あなたにあげるよ、と目を上にして言うのではないかと「神は高ぶるものをふせぎ、謙る者に恵みを与え給う」、何度も伺った御言ですが、恥

ずかしながらなかなか我が強くて、いつも読物を拝見する毎に悔いています。

一言、うれしかったことを書かせていただきます。

文子奥様は日曜学校の先生をされていただきましたので、「金言」のカードを三十枚近く私が書かせていただきました。その日に書いたのは、「受くるより与うるは幸いなり」という御言でした。私が奥様のお供で礼拝に出させていたたく朝、もう日曜学校は終わり、子供さん達は遊んでおりました時、一人の子が、「そのボール、私に頂戴」と言いますと、「いや」と言いましたが、その後すぐ「上げるよ」。今習ったでしょう、「与うるは受くるよりも幸福なり」と。それを聞いて、私は奥様に頼まれて書いたけど、そのカードを貰った小さい子が早速実行して、と思わず嬉し涙が出そうでした。

何かしら長々と書きましたが、大切な先生がわざわざ文子奥様に頼まれたからと言つて、私の家までおいで下さいましたこと、引き揚げて来て、宮田に服部先生とおっしゃる牧師さんを訪ねて来られて、若宮と宮田は一里余りの近くだからとおっしゃって来て下さいました。夢ではないかと思う程うれしくて、でも私の家は仏教の信者で、先生を余り快く受け入れていたわけではありません。

ただ昔の藁葺きの家でしたが、これからは麦藁がなく瓦葺

にしないとどうにもならないだろうと、瓦に葺き替えて間もない頃、土壁の二階に上がっていたら、先生とお話させていただきましたこと覚えております。本当に大変な時でした。何もしたことがなくても、田んぼは自分で作らなければ持つ事ができなくなる、それが戦後の農地解放です。どんなに沢山の土地を持つていた人でも、自分で農業をしない限り小作人のものになってしまいました。両の子持つていても、した事ないこと、田植えや稲刈り、人の半分よりできません。

しかし、その苦しみ味わわせていただいたお蔭で、孫と一緒に睡ぬりしてくれる嫁の苦しさ、腰の痛さ、孫がママ行こうと昼食後、嫁が前の畳の上に横になっているのを見て、「ママは腰が痛いので、暫くしたら行かれるから、あなた三人でいってお仕事して」と言えました。母が姉を思いやってあげたように、自分に苦しんでこそ人の苦勞もよく理解できると教えられました。

お父上様においでいただいた頃は、苦しみの絶頂の頃でしたが、「これ皆汝を苦しめ、汝を試みて遂に幸を汝に賜わんとてなりき」とてもうれしゅうございました。

そして今の留守居の気楽さ、この幸いを戴くために様々な苦しみを与え給うたこと、今はただ感謝です。皆様おっしゃいます、この大きな家(田舎の農家)で一人で淋しくくないです

かと。しかし寂しいと思つた事ございません。「我、世の終わりまで汝と共にあらん」との御言を信じて、また私の命は神様より戴きましたもの、神与えまた取り給う。全てをお委ねして。

次々に咲く花々、只今、野桔梗の薄紫のやさしさ、白雪草の緑と白の、えもいえぬ美しさ、年中次々に咲く花々、「全てかくの如くなるを得しは、神の恵みによりてなり」。全ての榮を主に帰して感謝の一言につきます。

うつし世の お若い日より身を捧げ

天に召されるその日まで

一粒の麦と なり給う

迷えるわれらの靈(たましい)を

誠の道に導かれ

いとも安らに逝き給う

長い間のお疲れも

神のみもとに安らけく

残るわれらのふみ迷う時にも

どうぞ教え導きくださいませ

天国に旅立ちあそばされた榎本先生にお捧げ申しあげます。

榎本利三郎牧師を偲びて

大石祥代（大濠）

尊い主の御血と御名を崇めて感謝します。

昭和四二年十月に折瀧先生がお召されになりました。私も入信致しまして十年位経っておりましたが、折瀧先生が、お召されになった後の今迄の信仰はどうなるのかと、少し不安に思っていました。でも祈れば必ずお答え下さる主がおいでになる事を信じて、日夜お祈りしておりました。何度か榎本先生のお噂はお聞きしておりましたので希望はありました。

その後、前田教会から名代として御出になる事が決まりました。その時の喜びは例え様ありませんでした。安心と喜びで、神様にどれだけ感謝のお祈りをした事か判りません。そして榎本先生、野村先生、伊規須先生と、御三方の交代で御出でになりました。

主の臨在にふれ、祈り求めて喜んで、教会に励む事ができました。それ迄は、婦人会も孤児になったようで、一抹の淋しさがありません。

それでも姉妹一同で讚美し、お祈り、また詩篇の交誼を致して、主は、「二、三人の者集まる中に我も在るなり」と御言

の如く力づけ、励まされて一度も欠かした事もなく続けられました。また、年に一度の旅行もみんなで話合い祈って、希望の地を示していただき、本当に楽しい婦人会でした。榎本先生もその中に奥様御同伴にて御出でになる事が多くなり、益々元気な婦人会になりました。また先生は夜の祈祷会にも御出でになり、本当に恵まれました。

お帰りは博多駅までお送りさせていただき、途中の語らいも印象に残っています。御子息の結婚のお話とか、同じ年代の子供の親として参考になりました。御講壇では聖書の御言を徹底してお語りくださり、春の雨の様に渴いている心に染み入るようで、先生の御出でになる日を楽しみに励む事ができました。

中でも婦人会の旅行の折には、長老の姉妹方の荷物を何時も持つて下さいました。先に立つて歩かれる先生は、背筋がシャンとして、とてもお元気でした。私共羊は飼い主である先生の後よりガヤガヤと従っていました。熊本の垂玉温泉の旅行の時など忘れもしません。駅で降り、山道を登り、旅館にたどり着いた時も、矢張り荷物を持って先頭に立たれ案内してくださいました。

思い出は懐かしく、忘れる事はできません。九州の名所、名所を楽しみにした婦人会の旅行でした。羊飼であられる先

生のお姿が目には浮かびます。またその中で長崎旅行の時でした。その折、夕食の後でのお話の中で、「前田教会ではお祈りする方もありますが、大濠教会では祈る人が少ないです。これは普通の集会では祈られますが、聖日礼拝の祈りです。皆さんも祈って下さい。祈る事によって信仰にも力が与えられ、恵まれ喜びに変わるのです。難しく祈る事はありません。ただ神様の前に感謝の祈りを声に出して祈れば良いのです」と仰いました。私もお話を聞いたら心の中で祈りました。どうぞ、主よ、私にも祈る力と勇気をお与え下さいませ。心をこめて主の前に在って感謝のお祈りができますように、とお願いました。このような者に勇気と祈るべき事一つ一つを教えてください。曲りなりにできるようになります。考えてみれば、人様の前では恥ずかしい事ですが、外間にとらわれず、ただ主の前に、心から祈らせていただいています。これも、ひとえに榎本先生の一言でした。あの事がなかったなら、まだそのままになっていたのではないのでしょうか。先生が何時も仰っておられましたように、お祈りができた後には心が晴れやかになり、御聖言が魂の奥深くしみ込んで一杯になります。これも主が共に在って御導き下さるので感謝です。

「主はわたしの牧者であって、わたしには足りないことがない」

「主はわたしの魂をいきかえらせ」

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れませんが。あなたがわたしと共におられるからです。

あなたのむちと、あなたのつえは私を慰めます」

(詩篇二三篇一、三、四節)

尊き主の御名によりて、書かしていただきました。

榎本先生の思い出

正 野 暢 之(大濠)

強く心に残っていることがあります。それは、私は一つの悩みをかかえて、なかなか解決できませんでした。

思い切って、牧師に相談に行きました。自分にはこんな悩みがあり、問題があります、と打ち明けましたが、先生はしばらく黙っておられました。そして、一言、「暢之さん、まず、神様の御旨が何であるかを知りなさい」と言われました。他にも何か言われると思っていました、「祈りましょう」と言われ、祈ってくださいました。

私の期待していたことは、先生がいろいろと相談にのつて話をしてくださり、具体的に言われるものと思っていました。ただ御旨に従いましょうと言われただけだったので、がつかりしました。心の中は、もやもやしていらいだつこともありませんでした。そして、日が過ぎていく内に、神の御旨に従うことは、何だろうとの問いが心の中に、起こるようになります。それから、いろんな事にぶつかりながら、神の御旨を求めようになりました。集会の中で、お証をする機会が与えられた時、神の御旨に従うこと、神の御声に聞き従うことが、最善であることをお証しすることができました。そして今もなお、神の御旨を求め続けています。

悠子が妊娠した時、予定日が過ぎてもなかなか兆候がありません。産婦人科に行ったところ、胎盤がゆがんでいるから、子供が降りてこないのです。ですから帝王切開する以外ありません、とのことでしたので、悩んでいましたが、榎本先生は「神がきよめたものを、清くないなど言ってはならない」と言われました。神様が帝王切開することも、清めておられるから、安心して受けなさいと言ってくださいました。それで、安心して受けました。すると、悠子の胎盤がゆがんでいたのでなく、へその緒が子供の首に巻き付いていたので、出ようにも出ることができなかったのです。もし、三日

遅くなっていたら、子供は亡くなっていたのです。神に感謝しました。自分の考えで普通分娩をしていたらと思うと、恐ろしくなります。神の御心に従うことは、こちらの考えを押し付けることではなく、神の御旨に従うことが最善の道であることを、知ることができました。

思い出

正 野 悠 子（大濠）

私は、昭和四四年春から、五十年三月まで、榎本先生ご夫妻の下で修養させていただき、神様の限らない恵みにあずかった者です。先生ご夫妻のご生活には、聖書のお言葉に従っての、僕と成り切つての歩みでした。奥様を助けて炊事、洗濯、掃除なんでもなさる方でした。私は、それまで、そんな男の方を見たことがなかったので、本当に驚きました。

ある夏の水曜日の夜、祈祷会の御用を終えられ、階下の牧師館に下りてこられた時、お風呂を沸かそうとしていました。私が、石油の風呂釜が故障していることをお伝えしましたら、さつと、奥から作業着に着替えられ、頭にタオルを被って出

てこられて、修理にとりかかられました。よく時間は分かりませんが、多分十一時頃から沸かせるようになったのではないかと思います。薄暗い所で釜を分解して、手は油まみれに汚れながら、一言のつぶやきもなく、黙って修理し続けられる先生のお姿を忘れることができません。人には見えない隠れた生活の中で、主に従われる歩みがあればこそ、講壇からの、あの力強い証しのメッセージが語られるのだと、深く教えられました。

毎年大晦日は、普段よりずっと忙しくされていましたが、聖会出席を望まれる遠方からのお客様(渴ける魂)の接待のために、真夜中過ぎまで、色々と心配りされて、お待ちでした。でも、次の元旦十時から、お疲れや睡眠不足の表情を、微塵もお見せにならず、輝いたお顔で、メッセージを取次がれるので、驚きでした。「二四時間説教準備中」と伺っていた意味が納得できるようになったのも、暫らくしてのことでした。

大濠と前田の兼牧だけでも大変な御用ですが、続く三人のお子さん達のご結婚、会堂改築と多忙極まりないご生活の中、休養、静まりの時もお持ちになれないのに、暗い表情をなさることなく、生き生きと、喜び溢れておられるお態度に、唯々、敬服しながら、ご聖霊の働きに委ね、従順にお従いする歩みを学ばしていただきました。人間の修養・努力では絶

対になしえない生活です。黙々と主にお従いになり、聖言に委ねられた先生のお態度は、最後の一瞬までお変わりになりませんでした。

榎本先生のような方に、お祈りいただき、ご指導をいただいた一人として、こんな小さな欠けだらけの者ですが、ご聖霊に従順に、お従いして、常に喜び、絶えず祈り、全てのことを感謝する歩みへと、主のご聖別をいただき、恐れなく主のみに立たせていただきたいと願い、祈っております。

出会い

緒方とみ子(大濠)

出会いとは、不思議なものだと思っていました。神様のご計画の中に私がいて、神様の御心に従わされていることを、近頃つくづく亡き人々との思い出の中で感じています。

そんな私が、感謝な事に神様から呼び出されて、受洗して今年で二五年になります。

榎本利三郎牧師(先生)と初めて出会ったのは、私の父(一九〇五〜一九七七)が召天して、戸畑の実家での葬儀の時だったと知ったのは、写真の中からでした。父は二十歳の時に受洗したそうですが、神様から随分長く離れていて、晩年になって神様を求めたそうです。半身不随の体で、よく戸畑伝道所(現在の戸畑教会)に通っていました。私は十歳の時に母(一九五八年没)その五年ごとに、兄一人を亡くしていますので、父からよく言われていたように、無神論者でした。

父から誘われたこともありましたが、義母(一九九二年没)と二人で、父を送り迎えはするものの、「宗教は年寄りがするもので、若い私には関係ない」と、耳を貸しませんでした。

そんな私でしたが、父が召天して、軽い気持で夜の集会に行き始め、八幡前田教会で榎本利三郎先生の説教を聞くようになつたのですから、神様の御業とつくづく思います。しかし、なかなか聖書が難しく、お祈りもできない私でした。

受洗の指導を受ける時に、先生の質問に答えきれず、黙っていたら、先生が優しく「答えのないのが答えです」とおっしゃられて、私はホツとしたことを覚えています。

お祈りができるようになつたきつかけは、野村先生から、「とみ子さん、お食事のお祈りをお願いします」と言われて、ドキッと、何を祈ったのか言葉も忘れましたが、それから

祈れるようになりました。鈍い頭を叩いてくださったのは、神様だったようです。御言も分かるようになりました。信仰の熱い先生方に囲まれて、教会生活を楽しましました。各集会にも、よく通わせていただきました。本当に皆様のお祈りの賜物であると、心から感謝しています。

利三郎先生、百合子先生には、結婚してからも、よく牧師館で私達の喧嘩話を笑顔で聞いていただきました。感謝しながら、北野町に帰ったものです。

「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」(ルカ二三・四三)

一九八九年十一月三日(金)に、八幡前田教会創立五十周年感謝記念礼拝があると聞いて、私はぜひ主人と一緒に出席したいと祈っていました。そして、主人の念願だった「萩・津和野」の旅をも実行したいと、祈りました。

一九八五年に結婚して、初めて二人で行く旅でしたから、「泊まる場所は決めていた方がいいのじゃないの?」と言いましたが、主人はいつも会社の支所に予約なしで泊まるものですから、行けばある、くらしいものでした。

三日は八幡前田教会礼拝、四日は萩・津和野、五日は戸畑教会礼拝」という、すばらしいスケジュールでした。

神様は秋晴れの天気を与えてくださり、福山通運(株)の休暇もすんなり戴き、一四五名の皆様と八幡前田教会で出会えました。

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、

あなたに示す」(エレミヤ三三・三)

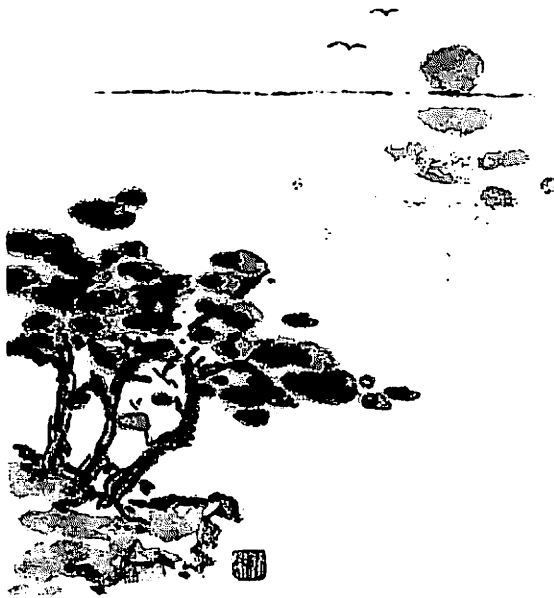
感謝記念礼拝で恵まれ、夕方から主人の憧れていた「萩」へと、車を走らせました。ところが、主人はいつもトラックを運転していますので、小さな道は苦手の様子、おまけに行つたことのない道を走っています。夜、遅くなつて「萩」に着いたものの、案の定、泊まる宿はなく、「どうしても、宿で手足を伸ばしたい」と言うので、探しましたところ、足元を見られて、布団部屋に通されました。それでも、文句は言えませんでした。きれいな好きな主人にとって、かなりシヨックな部屋でした。

「津和野」にも行きましたが、腕に自信があると思つていた主人は、「昨夜の暗い狸道は、二人でなかったら、怖くつて走れなかった」などと白状しました。

そして、二泊目は、戸畑教会近くの宿に早目に行き、感謝して泊まりました。

主人(二〇〇〇年召天)との長い旅行は、これが最初で最後でしたが、私は今、証しの文章を書けたことを、神様に感謝して、多くの亡き人を偲んでいます。

「ふたりの者がもし約束しなかつたなら、一緒に歩くだろうか」(アモス三・三)



「メッセージ」

—聖徒を追悼するにあたって—

伊規須 太郎 牧師（戸畑）

最後の晩餐の席で主が弟子たちに残されたメッセージ
「あなたがたは心を騒がせないがよい 神を信じ また私を
信じなさい」……これが第一声だった

榎本先生が生涯の最後において 霊肉共にすがれた
メッセージ それは私たちに残された唯一のメッセージでも
あった……先生は 天のメッセージを
指差しつつ帰られた訳である

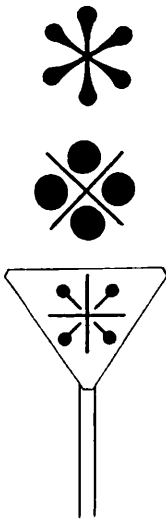
エノクは 三百年神と共に歩み 神に喜ばれ 神を喜ぶ生涯
を指差しつつ 帰天した
エリヤは 「主に注目せよ 私に目が止まっているならば
霊の二の分を受け継ぐことはできない」と突き放した
主のご昇天のとき 御使は「同じ有様でまたおいでになる」
と告げた それは 手を高く上げて至高者を指差すお姿で

あった……ご自身は神の本質を現しておられた

私達が最後までよりすぎるべきメッセージもこれ
残すべき思いもこれ 望みのよりどころもここにある
世々受け継いでほしいと せつに願う

義人たちの列伝に「みな信仰をいだいて死んだ まだ約束の
ものを受けていなかったが はるかにそれを望み見て
喜び……」とある 古来 道はここにしかなかった

預言書に「聖なる大路 汚れた者は通ることができない
愚かな者は迷い入ることはない あがなわれた者のみ
そこを歩む」とある……迷い込む事がない不思議な道
そこには見慣れない標識？……アステリスクとも違う
コメジルシとも違う？……これは十とXの合成だ！



榎本先生にも様々な思いはあられたに違いない……が
それもこれも根こそぎ委ね はるかに約束を望み見つつ

喜んで故郷に帰られた

主はすべてを引き取って、いま私たちを顧みておられるへブルの書に「多くの証人に雲のように囲まれている」とある意味が分かった。榎本先生の願いと望みの視線は、主を通して私たちに注がれている。もはや榎本先生と直接交信はできないが、主を通して、一方通行のメッセージが来ている………と言える。

榎本先生を偲びて

岩井 芙美子（戸畑）

季節の移り変わりは早いもので、榎本先生が天にお召されになられて、はや二ヶ月が過ぎました。ここに先生が私に関わってくださったことを短くまとめ、先生への追悼とさせていただきます。筆を取りました。

私が神様によって引き出されたのは、大田の姉の誘いがある。昭和三七年度の夏の頃、戸畑伝道所でした。その時のお言葉は今でもはっきりと覚えており、そこには榎本先生ご夫

妻が御集会のたび毎に出席され、祈っておられました。私は小さくなって、伊規須先生のお母様コト様の隣に座らせていただいております。いつも子供達と一緒にお茶を戴いております。

それから十月頃と思いますが、再度姉から声をかけられ、八幡前田教会に行き、戸畑で初めてお聞きしたお言葉と同じだったので、神様は私を事を全てご存知で、私が如何に重荷を負うて苦労していたかをお見通しであったと知り、感謝したのでした。

その頃は、主人の商売も思わしくなく、二人の子供を抱えて、どうして生きて行けばよいのかと、さまよい続けておりました。けれども私の心は頑なで、神様のおっしゃること自分の考えとは遠く離れており、帰りには先生の顔を逃れるように家路に着いたものでした。

そんな中である時、「自分が正しいと思うところに、あなたの罪がある」と神様に指され、また「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と示されて、私は一晩中泣き明かして悔い改め、自分が如何に汚い者であつたかを悟り、改めて神様に感謝で頬を濡らしたものでした。

それからは、どんどんお言葉が耳に入り、家にいてミシンを踏む時も、買い物に行く時も、紙片に書いた御言が私の宝となりました。そして、十二月の感謝会の時に、林正二郎様のお証しを聞いて、私もそのようになったらいいなと思っておりましたところ、神様は思わない所から、私にお仕事を下さいました。それによって日毎の食物に満たされ、私達は生きる事ができました。

そして、昭和四一年四月十一日、「あなたはわたしに従ってきなさい」とのお言葉で、大蔵川で先生の御手によって受洗させていただき、これまでの一切の罪を許していただいて、私は新しく生まれ変わらせていただきました。これはまさしく、神様のご慈愛と先生始め皆様のお祈りの外は何もございません。ただありがとうございましたと、感謝のみでございませ

それから、教会に行く事と仕事の事に熱中し、主はいつも共にいまして、私のような者を日毎に支え続けてくださいました。

昭和五四年、母コウの召天の折、先生はわざわざ三度もお尋ねくださり、手を置いて祈ってくださいました。私も母のこれまで犯してきた罪のために、イザヤ一章十八節のお言葉で共に祈らせていただき、曲がった腰はまっすぐに癒され、その顔は、あたかも基督の花嫁のように輝いておりました。

五八年、長男の結婚式を生まれ育ったこの教会でと、ご無理の中を先生に木曜会のたび毎に祈っていただき、私はもう駄目かと思わざるを得ない中、「われらは神によって勇ましく働きます。われらのあだを踏みにじる者は神だからです」とのお言葉に励まされ、家では聖書を開いては祈り続け、遂に先生にお許しを戴いたのは十日前、主を待ち望むことの尊さを思い知り、先生に感謝したものでした。先生のお祈りがどんなに深かったかは、本当に知る由もございませんでしたが、お陰さまで、十日の間に一切の手筈を整えさせていただきました、野口先生をはじめ多くの方々からご祝福を戴いて、お式と披露宴までと感謝は尽きません。

五二年、次男の大学入学の時も大きな戦いがあり、私はただ祈るばかりでした。そして、仕事の道すがら、私がふと右肩に目をやりますと、そこには真つ白な衣の御使が寄り添って、「平安あれ」と、二度御声をかけてくださったのです。安東ご夫妻からも、「静まって、わたしこそ神であることを知れ」との、力強いメッセージを戴いたと申しております。

日々、仕事に追われ、また主人の病気と様々な苦難の中を通りましたが、その度毎に、先生からは聖書を読むことと座して祈るべきことを教えていただき、これは私の大きな収穫となりました。

六一年、伊規須先生が按手の礼を受けられ、私達は戸畑教会に籍を移しました。二四年間、榎本先生一筋に歩ませていただいた私でしたが、これからは戸畑教会の一員として、主にお仕えさせていただこうと決心し、榎本先生とは一切お交わりを閉ざしてまいりましたが、その後も、先生からは度々お励ましの電話を頂戴し、そして先生が召される前、佐藤須磨姉の告別式の後、お疲れの中わざわざ、少々かすれたお声でお電話を戴いたのが、私との最後のお交わりとなったのでした。

四月十一日、木曜日の教会掃除の時、伊規須先生から榎本先生が天にお召しになられたことを聞いて、まさかと思わずにはおられませんでした。本当に信じることが難しい思いでした。

その夜の前夜式と十二日の告別式に出席させていただいた私にご遺体に向かつて、「ラボニ」と呼びかけさせていただき、これまでお祈りに加えていただいたことを、ただありがとうございます。ございましたとお礼を述べるのみでございました。

「きよく正しく、恐れなく仕えさせてくださる」と、常に指導くださった先生、それは全くご慈愛に満たされたお顔でございました。先生は信仰の確信に満たされつつ、走るべき行程を走り尽して、天に上げられました。もはや直接、先生

にお目にかかることはできませんけど、古い写真の整理をさせていただいて、金生先生のご結婚式の時の毅然とされたお姿の中にも笑みを浮かべられた先生ご夫妻を忘れることのないようにと、テレビの上に掲げさせていただきました。先生ご夫妻から受けた御恩恵は、これからも焼き付くことだと思います。

「主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高くされる。

貧しい者を、ちりの中から立ちあがらせ、

乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、

王侯と共にすわらせ、栄誉の位を継がせられる。

地の柱は主のものであつて、その柱の上に、

世界をすえられたからである」。

「十字架の血、すべての罪より我らを潔(きよ)む」。

しかり、アーメン。



先生、何時までも元気で

私達のそばにいて下さい

大 田 敏 夫（前田）

お見せしたいほど沸きに沸いた昨夜のサッカー、日本対ロシア戦、残念ながら先生はもう見られなくなりましたね。

椅子に座ってボンヤリ南の空を見る、久し振りの霧雨の中に煙る帆柱山のとつぺんに、先生のにこやかなお顔がこちらを向いて笑っておられる様な気がしてなりません。

「先生、何時までもお元気で長生きして下さい」。

「ありがとう、あなたも」。

先生と私は六つ違いです。礼拝の済んだ後、椅子に座って皆さんを見送られる先生と、何時もこんなご挨拶を交わして握手していただく、先生の手は温かった。今でも、壇上の金生先生の後の椅子に先生が座っておられる様に感じるの、私一人ではないでしょう。ものは言えなくても、先生、何時までもお元気で私達のそばにいて下さい、これは皆なのお願いです。

さてしばらく時間を戴いて、先生にお世話になった昔を振

り返ってみましょう。

■ 昭和四三年、お恵みにより今の幸神に新しい根拠地を与えられる。先生から木目の香のする壁掛けをお祝いに戴いた。口語体による旧約聖書 詩篇三篇の聖言、私達の一生の宝として、これを眺めて毎朝のスタートです。

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。

エホバは我をみどりの野に臥させ、

いこいの水浜にともない給う。

エホバは我が靈魂をいかし、聖名のゆえをもて

我を義しき路にみちびき給う。

たとい我、死の陰の谷を歩むとも禍害を恐れじ、

汝、我とともに在せばなり。

汝の笞なんじの杖、我を慰さむ。

汝、わが仇の前にわがために筵を設け

わが首に油を注ぎ給う、わが酒杯は溢るるなり。

わが世にあらん限り必ず恩恵と憐憫と我にそい来らん。

我はとこしえにエホバの宮に住まん」。

信仰の先輩、妻が見つけた一九六八年五月二六日の「みぎわ

第二二号」は、野村先生直筆のガリ版による三四年前の懐かし

い思いの深いものです。

その日のお説教の聖言は、詩篇三三篇でした。

〔消息〕大田邦子姉ご一家は先日、八幡区幸神の新宅に

移転されました。

岩隈多賀子姉は神学校を卒業、帰幡されました。

〔祈り〕次の方ご安産をお祈り下さい。

河本米子姉、正野百合子姉、下川薫子姉、後藤洋子姉、

〔報告〕本日午後一時から、尼田隆己兄と須々木千代姉の

結婚式を致します。

■ 平成三年五月二日

七六才でやっと、五月六日の受洗を前に、五月二日個人伝道を戴いた時の聖言、今でも忘れることができません。

「今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない

霊の乳を慕い求めなさい」(第一ペテロ二・二)

■ 平成三年九月八日

朝のお説教で、五十年前、先生がはじめて八幡に牧師として遣わされた時、若かった私は駅に立って任の重さに足が震えた。しかし、主のお使いで来たのだ、主に従って行けば良いと思うと、やっと落ち着くことができた、述懐された思

い出のお話。

その日の聖言

「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、

わたしもまたあなたがたをつかわす」(ヨハネ二十・二一)

■ 平成三年九月九日

野村先生、天に召される。十五日のお説教は野村先生を偲んで。「虫けらのように小さい者と常に自分を低くされ、主の前に罪深い者として、懺悔の一生を貫かれた野村先生の信仰態度を賞でられた。

野村先生の愛歌 讚美歌 五三一番

一 心の緒琴に み歌の通えば

調べに合わせて いざほめ歌わん

ああ平和よ 奇しき平和よ み神の給える奇しき平和よ

三 主イエスを君とし かしこみ仰げば

心に溢るる 天つみめぐみ

四 御そばにはべれば 平和は絶えせず

なみかぜ騒がじ ころの海に

■ 平成三年十一月四日午後、

正野さんの司会で野村先生の記念会が開かれた。

讚美歌五一三番「天に宝積めるものは、げにも幸なるかな」

榎本先生のお祈りに続いて皆さんのお証し、一様に六十年間の信仰の歩みを通して、先生の謙遜、忠実、誠実な人柄を慕い称えられる。先生は本当に偉大なるキリスト者であり、加えてあの名筆、それは多くの遺物を残して天に行かれた。

「彼は死ぬれども、信仰によつて今尚語る」(ヘブル十一・四)
六十年間もの長い間、信仰を共にされてこられた榎本先生の追憶のお話しは、私達の胸を強く打った。野村先生は、今からこれからも、皆さんの心の中に何時までも生きておられるだろう。幸せな方だったなとつくづく思う。

野村先生さようなら。

■ 平成四年二月九日午後、信徒会の聖言

「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」。

信仰の道を進んで行くと、楽な道と苦しい道の二つの道の分かれ道にさしかかります。さてどちらの道を選びうか、この時、私(先生)は優先的に神様に従う苦しい道を選びました。しかし、今は神様の恵みにより、こんな幸せな毎日を送ることができて感謝しています。イエス様を救い主と信ずることが信仰の基本です。あえて苦しい道を進んで、これに打ち勝

つて世の勝利者となりましょうと教えられる。

先生に質問した。信仰の弱い私は、この分かれ道にさしかかった時、どうしても楽な道を選びます。同窓会に出席した時、回りには誰ひとりクリスチャンはいません。といつて私はクリスチャンですと言う勇気がありません。ついついそれを黙って、皆さんと一緒にお酒を飲みます。まだ自分を律するのに精一杯です。信仰がまだ弱いからでしょうか。

この質問に対し先生は、それは強い弱いの問題ではなく、イエス様を信じるか信じないかの問題です。そんな教え方をした筈はなかったのですがね、と叱られた。

また、高木さんからは、大田さんは受洗告白の言葉と違つて、今はすっかり元の大田さんに戻つてしまつてガツカリしていますとなじられた。今私は反抗期か、何だか迷いの中に立っているようで情けない。さてさて、もう一段勉強しなければ。仕事の面では反対に苦しい道を敢えて進んで来た私ですがねえ！

* その後、友人の葬儀が福岡の教会であつた時、大きな声で讚美歌を歌つて、以後クリスチャンであることが皆さんから認められ、神様に感謝しました。

■ 平成四年の新年聖会 三日目

「わたしたちは、すでに神の子なのである」(第一ヨハネ三・一)
今日は聖会三日間の総仕上げ、総集編とも言えるお説教がこの聖言を中心にトコトン展開された。今日の先生は聖霊に満たされたのでしょうか。声も一段と大きく、最後の靈感賦五六番アンコールに至っては、手を振り、体を踊らせて、喜びを全身で現された。三日間、八三才の先生は本当にお元気だった、乗りに乗ってこんな嬉しそうな先生を私は初めて見た。感謝の新年聖会だった。

■ 靈感賦 五六番

歌えど尽きせぬ 主のほまれ みさかえ ハレルヤ
もろとも声あげ ほめたたえん みさかえ ハレルヤ
神の子供よ 叫べよ歌え 輝く道に 我らは進み
天つみどのに まもなく入らなん みさかえ ハレルヤ

■ 平成四年四月二十六日

四度目の肺炎を見事に克服されて、三週間ぶりに講壇に立たれる。先週の復活祭イースター聖日の聖餐式には退院が許されず、行事はすべて中止、テープによる辛なお説教となる。昨年は正月早々、奥様の脳梗塞、先生の三度目の肺炎と、スタートから大変だった。

神様が尚この世に使命があると思われたら癒して下さる

だろう。もしそうでないと天国に召されるだろう。すべて主にお任せして病床に三週間を過ごしましたと心境を語られた。受難週の後、先週復活祭。先生もあたかもイエス様の歩かれた道と同じ道を歩かれて、今日蘇って私達の前に姿を現されたことは、本当に感謝だった。夢のようです。

「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか」(イザヤ五三・一)

■ 平成五年二月十一日

私達の結婚五十年、金婚式の日、木曜会に出席、あまりにもピツタシの聖言にビックリ。

■ 靈感賦 八四番

われは日々登らん めぐみのたかみに
神に祈りつつ はげみて登らなん
神よなが愛と 喜びやすきの
たなびくたかみに 我をすえたまえ

■ ヘブル人への手紙十章三二節〜三九節

「あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい(朝鮮での丸平水産時代はそうだった)、さらに獄に入れられた人々を

思いやり(私達も終戦引上げの時は獄に入れられた)。自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ(引揚げに際し、一切の物は捨てざるを得なかった)。だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない(無我夢中で再起を期した)。その確信には大きな報いが伴っているのである(今こうして元気で生かして戴いていることは何という感謝だろう)」。

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」。

神様有難う御座います。これからも、あなたを信じ、あなたに従い、感謝の生涯を送ることを誓います。

終わって、先生に今日のことを報告、お祈りを戴くことができ、思わぬ楽しい記念日を送ることができて、本当に感謝だった。

■ 平成六年五月一日

東郷墓地での納骨式 墓前礼拝での感謝。

「しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう」(ピリピ三・二十

〓(二一)

それより先、榎本先生にご相談、お許しを戴いて三月十一日、それまで山口の端の坊というお寺にあった大田家祖先の墓の移送を決意し、お寺の承諾を戴きました。

これでやっと六十年間別々になっていた父と母との遺骨を一緒にすることができて感無量です。長い間の親不孝をお許し下さい。

今日の墓前礼拝でこの聖言によつて、しんみりと榎本先生のお話を承る。皆さんが讚美歌四八八番を歌っておられる間に、十五年前に納めた母の遺骨の部屋に祖先の遺骨を納めることができました。神様本当に有難う御座いました。

讚美歌 四八八番

遥かに仰ぎ見る 輝きの御国に

父の備えましし 楽しき住家あり

われらついに 輝くみ国にて

きよき民と 共にみ前に会わん

■ 平成六年六月七日 入院

六月十四日第一回の手術、六月三十日に第二回目の手術、ガンに犯されていた胃を全摘、それは途中で心臓停止数回発生、生命を取り止めるために、繋ぐのが精一杯、十二時間に

及ぶ大手術となり、以来二年間に亘り、四回、三〇九日間の入院、十回の手術、その間、榎本先生に何度お見舞いをいただいたことでしょうか。今すべてを癒されて感謝の限りです。

六月十二日の聖言

「神は愛なり」「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には 愛が全うされていないからである」(第一ヨハネ四・十八)
「わが行く道 いついかになるべきかは 露知らねど
主は御心なしたまわん 備えたもう主の道を

踏みて行かん一筋に」(讚美歌四九四番)

「主に任せよ 汝が身を 主は喜び 助けまさん

忍びて 春を待て 雪は解けて 花は咲かん

嵐にも聞にも ただ任せよ 汝が身を」(讚美歌二九一番)

「望みはうせ 詮方つきて 心弱り 思いしおれ

再び立つ 力すらも なき時にも 神を信ぜよ」

(靈感賦三三番)

七月十九日の聖言

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る」

(イザヤ四三・十九)

この日に先立ち、七月十五日検査の結果、繋いだ善の食道と小腸とが繋がっておらず、近く第三回目の手術をして、小

腸を取り除き、植物人間になるより外に生きる道がないと宣告される。

七月十八日、榎本先生に最後と思われるお見舞いとお祈りを戴く。ところが、その後体調悪く、手術ができず延期されている間に、奇跡が起きた。

七月十九日、思い切った検査の結果、奥さん繋がって居ました、もう三回目の手術は必要ありませんと主治医のお話を聞いてビックリ。以後、紆余曲折を経ながらも、順調に回復全快、今日に至りました。ただ神様に感謝あるのみ。

「ひとたびは死にし身も 主によりて今生きぬ

みさかえの輝きに 罪の雲消えにけり

昼となく 夜となく 主の愛に守られて

いつか主に結ばれつ 世にはなき交わりよ」

(讚美歌五三二番)

■ 平成七年二月五日

勇士、天馬をかって空高く、愛の人、高木先生を送る。

夫は神様を信じ、喜び勇んで天に召された。

生憎とその日、私は二度目の入院でなお病床にあり、翌六日の告別式に出席できませんでしたが、これはその日のご挨拶状の奥様のお言葉です。

死とはこの世との別れ、辛く悲しいもの、だれが喜び勇んでの境地になれるでしょう。改めて、榎本先生の薫陶を受けられた高木先生ご夫妻の信仰の深さを見せていただきました。暫くして、奥様からテープをお借りして告別式の模様を承る。榎本先生の式辞、それは七年間の苦しい闘病生活を乗り越えられた中での、高木さんの真摯な信仰生活を余す所なく称えられたお言葉でした。尊敬する榎本先生に送られて、高木先生は幸せだったな、と思う私です。

高木先生の愛唱聖句

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三・十六)

愛唱歌 聖歌 四九八番

一 主にすがる我に悩みはなし 十字架のみもとに
荷をおろせば

歌いつつ歩まん ハレルヤ ハレルヤ

歌いつつ歩まん この世の旅路を

二 恐れはかわりて祈りとなり 嘆きはかわりて

歌となりぬ

三 主はいと優しく我と語り 乏しき時には 満たしたもう

四 主のみ約束に変わりはなし 御許に行くまで

支えたまわん

■ 平成十年十一月三日

秋、美しい桜のようにパツと散った林さんを偲んで。

兄は走るべき行程を走り尽くし、信仰を守り通して、喜び勇んでイエス様の元に召されて行きました。

秋の気高い菊の香りと共に、美しく咲くコスモスの花に彩られる文化の日、その昔は明治節の佳き日だった。午後八時四十五分、日頃尊敬してやまない林正二郎さんが天に召さる。若くてまだ六三才、ああ！。

五日の告別式、信仰に堅く立った一孝君のしつかりした挨拶が式場に響き、参列者の胸を打ちました。わが子のような林さんを先に送られて、榎本先生の御胸中いかばかりか。お別れに覗く棺の中、「よう、今日は！」目を開けたら、今にも飛び出しそうに眠っている林さんは、つやつやく優しく、美しく、昨日までとちつとも変わらぬ安らかなお顔だった。高木さんと違って、入院されてわずか一ヶ月たらず、あつという間の、どうしても信じられない、正に突然の出来事でした。人の命のはかなさ、神様の御命令の厳しさ、次の御言がヒシヒシと胸に迫ってくるのです。

「あなたは人をちりに帰らせて言われます、『人の子よ、帰

れ』と。あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうのごとく、夜の間のひと時のようです」(詩篇九十・三〇四)

咲くということは、笑顔で生きることです。そして神様があなたをそこに植えて下さったことが、間違いでなかったことを、周囲の人に知らせることです。この渡辺和子さんの言葉通り、林さんはこの詩の通りの生き方をされた方でした。教会は林さんの目に見えぬ場所での御奉仕に、どれだけ美しくされたことでしょうか。榎本先生はじめ皆さんと共に、心からの感謝を捧げたい私達です。

愛歌 讚美歌三一二番

- 一 いつくしみ深き友なるイエスは 罪とが憂いを
とり去りたもう 心の嘆きを 包まず述べて
などかは下さぬ 負える重荷を
- 三 いつくしみ深き友なるイエスは 変らぬ愛もて
導き給う 世の友われらを 棄て去る時も
祈りにこたえて いたわり給わん

こうして先生御在世中の出来事を振り返ってみますと、思い出は尽きませんが、そろそろ筆を置くことと致しましょう。先生が度々肺炎で入院された頃、心配で教会の後はどうなるのですかとお尋ねしたところ、「私の知ったことじゃない。す

べて神様にお任せしてあります」と平然としておられ、内心ハラハラしていました。

先生が召されて二ヶ月、前田教会はご覧の通り、和義先生、金生先生のご指導の許に、先生のご遺志を継いで立派に昔と変わりません。主喜ちゃんも皆さんに可愛がられてスクスク成長されるでしょう。神様の御業の素晴らしさ、先生の信仰の深さ強さ、見上げるばかりです。どうぞご安心されて、盛会となった天国前田教会での御用にお励み下さいますようお願いして、讚美歌四〇五番を歌いながらお別れいたしましょう。先生本当に有難うございました。

「神共にいまして 行く道を守り

天の御糧もて 力を与えませ

また会う日まで また会う日まで

神の守り 汝が身を離れざれ」アーメン

榎本利三郎先生に導かれて

大 田 邦 子(前田)

「我限りなき愛をもて汝を愛せり

故にわれたえず汝をめぐむなり」(エレミヤ三二・三)

主の聖名を崇め、心から感謝致します。

教会ではお父様と尊敬申し上げ、杖とも柱とも頼みとしていました榎本利三郎先生が、九二才十一ヶ月の地上でのご生涯、ご使命を全うされて、輝いて御国に凱旋されました。あまりの素晴らしい鮮やかなご召天に、神様のご栄光を拝させていただき、御業を崇めるのみでございます。

時はアツという間に駆け抜けて行きます。目を追うことに、何かにつけて淋しさを拭い去ることはできませんが、先生の存在感の大きさ、信仰の偉大さを覚える日々でございます。もう先生のお姿を見ることはできませんが、見えない故に、かえって身近に覚え、イエス様と共に在して時間空間を越え、間髪入れず応答して下さいます。

かつて導かれました御言を、御霊によつて思い起こさしめて、「恐れないで、一步を踏み出しなさい」と、背中をバーンと叩いて押し出して下さいます。

先生の遺言でもありました、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。

この御言は、先生の全てでもいらしたと思えます。万物の創造者でいらつしやる神様に創られ、命を与えられ、その人

にしか果すことのできない使命を与えて、ご支配の中に生かされます。その神様を越えて何一つ動かすことのできない、その手に支えられているのだから、何も心配しなくてもよろしい、神様の御愛を信じ続け、委ね切つて歩みなさいと、強く励ましていただきました。

先生のご生涯、すべてを献げ切り、主の御愛にお答えしたいと恵みに感じて、御言にのみ立つて、真実を尽くしてお仕えして歩まれた信仰の姿勢を通して、今も生きて働いて下さる神様のご真実を、この目で見させていただきました。

「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである」

榎本先生は常に語っておられました。

- 聖書を読みなさい。
- 一にも二にも祈りなさい。
- 従うこと、白を黒と言われても、ハイと従いなさい。
- 集会に一回でも多く出なさい。
- 三度の食事と同じ様に、霊の糧をもつて養われる日々でありなさい。
- この世と妥協することなく、御言にかける日々でありなさい。

また、こうも仰言っておられました。

○ 聖言にかけ、信仰をもって踏み出すのは、丁度研ぎ澄

まされた刃の上を踏み締めて歩くのと同じ命がけです。

○ アブラハムの信仰を通し、人生は綱渡りと同じです。

目標の一点を見つめ絶対に下を見ない、状態に動かされない、お約束の聖言を確信し、ただ主のみを仰ぎ見つ一步一歩歩む時、その処を通つた者にしか、味わうことのできない、神様のご愛と力を知らせてくださいます。

○ この世では何一つ頼りになるものはありません。頼りになるのは、聖書だけです。

○ 祈つて神様の導きを求めて行く時、御霊が御言をもつて道を示してくださいます。この世では一番当てにならないような御言ですが、一番真実なのが御言です。見えない神様ですと。

「もし信じるなら神の栄光を見るであろう」

先生の信仰のすごさ、厳しさ、真実さ、具体的に結果をもつて見せていただき、圧倒されたこともありました。

一時は榎本教になっていたのかも知れませんが、先生は時々お説教で、「榎本教になってはいけません、信仰は神様と自分、一人ひとりです。その間に何物をも挟んではいけません」と諭されたこともありました。

イエス様との出会いに感謝

かつては神様と無縁の者、罪人である自覚など全くない私でした。イエス様との出会いは、縁あって東京から朝鮮に嫁ぎ、そこで敗戦、今まで持っていた生き方、価値観、すべてが変わり、混沌としていた頃、我が家の家族も、満州、北鮮、南鮮各地より引き揚げ、家庭の事情も複雑となつて、事毎に真意の通じない口惜しさ、腹立ちさ、悲しみ、こんなみじめな自分が嫌で、どうすることもできず、ただ悶々としておりました。そして、真実が欲しい、偽わりのない人間関係が欲しいと願っていた頃、小倉金田の家庭集會に誘われ、そこで榎本先生のお話を聞かせていただきました。

今はその時の御言もお話の内容も覚えておりませんが、何回か回を重ねる中に、私の求めていたのはこれだと、心に止まりました。渴きが与えられ、はじめて恐る恐る教會に近づかせていただいた時には、今迄に味わつたことのない喜びで一杯でした。帰りの電車の中から見る八幡の街の景色は、はつきりと美しく見えました。自分でも驚きでした。今思えば、心の中の暗雲が消え、イエス様が素直な新しい心を与えて、この様な体験をさせて下さったと思います。感謝でした。

それから教會に近づかせていただき、自分がどんなに罪深く汚れた者であるかを知らせていただき、神様の御愛と恵み

憐みを少しづつ分らせていたただくようになりました。でも信じたくても信じられないという壁に、何度もぶつかりました。分かったら信じようという姿勢でした。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」

(マタイ十六・二四)

信仰の原点、捨てて与えられるというこの御言がよく分かりませんでした。これまで三十年余り歩んで来た人生、依頼心が強く、我侷でした。私に周囲からもっと自主性を持つて歩まなければとよく言われましただけに、自分が生きていると思ひ、生かされていることが分かりませんでした。

敗戦後の様々な問題も、結局は人ではない、事情境遇でもない、自分中心の私が変わらなければいけない、でも自分では変れない、やっとな気付けさせていただきました。

ご相談にお伺いすると、「己があるのでは…」と問いかけられ、いつも上なる御方を指さし、「自分に死んで、全てを明け渡しお委ねしましょう」と立ち返らせていただきました。随分時間がかかりましたが、受洗の恵みに預かりました。

先生と奥様と懐かしい過ぎし日の思い出話しが弾んだ時、奥様が、「大田さん随分変わられましたね」。

私、「恥ずかしいです、もうその頃の話は止して下さい」

先生、「大田さんを見ていたら、信仰が持てます」と。
イエス様の救いに預かり、生きる者としていただきました今、言い尽くすことのできない感謝で一杯です。

母の召天

「主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました」(詩篇一三九・一―十三)

私は生まれて四才まで福井県小浜におりましたが、母は姉兄達に「お寺さんでは救われなから、教会に行きなさい」と教会に行かされたそうです。

「母さんは先祖の仏様、お墓を守らなければならないから行かれない」と、この事は八年前、小浜に墓参に帰った時、姉よりはじめて聞かされ、本当に疑いたくなる様な言葉で驚きました。

母は救いを求めていたと思います。苦勞の多い四四年の短い人生でございました。もう早く召されましたので、直接聞くことはできませんが、今、私がイエス様の救いにより、幸いな生涯に生かされております主の恵みを覚え、神様の遠大なご計画に襟を正すのみでございます。

先生にこの事を申し上げましたら、生まれる前からこの御

言の通りですねと、主を崇めさせていただきました。

福音

「すべて信じる者に、救を得させる神の力である」

(ローマー・十六)

姑が九三年十ヶ月の地上での生涯を終えて召されました時、まさしくこれが福音だと、具体的にこの目ではつきりと見せていただきました。子宮癌でもう年令的には外科的治療は望めなく、放射線治療他で約五ヶ月の入院治療でしたが、家に帰りがりますので、病院側と相談して十二月に帰宅、自宅療養となりました。

やはり癌との戦いは辛そうで可哀想でしたが、大変喜んでおりました。神様の憐みでクリスマス、お正月を何とか過ごし、もうそれからは寝たきりとなりました。

「私はそんな悪いことしていないのに、どうしてこんな病気に……」と、口にするのもしばしばでした。

これ迄の厳しい人生九十余年、神様仏様を頼みとし、「お経、お経」と言い続けて来ました母が、突然、

「邦子さん、私でも天国に入れて貰えるかしら……」

「榎本先生に来ていただくね」

「お忙しいのにすまんことね」と、素直な返事。

耳を疑いましたが、俄然主が御業をもつて事を行って下さいました。すぐに先生にお願いし導いていただきました。

最後に先生が懇ろに、

「イエス様が私達のために十字架にかかられ、すべての罪を許して、帰っていらつしやいと招いておられるのです、有難うございますとただ信じさえすれば、天国に入れていただけるのですよ、信じますか」と言われると、

母は「ハイ、有難いことです」とはつきり、そして先生のお祈りの後、先生の「アーメン」に続いて、母も「アーメン」としっかり言いました。

人の力ではどうすることもできない死期の迫った厳肅な時だけに、私は溢れる涙をどうしようもなく、感謝すると共に自分の不信仰を悔いました。

先生がイエス様のお話をされ母の手を握られた時、先生が「お顔が穏やかになられ、何かしわまで伸びましたね」と。

老いて、九十度位に腰が曲がっておりましたが、アレヨアレヨと言う間に伸び、身も魂も潔められて栄光の身体とされ、御国に帰らせていただきました。ああこれが正しく福音だと主の御業に、襟を正すのみでございました。

奥様も、「おばあちゃん、私達も後から行きますから天国でお逢いしましょうね」と優しく声をかけて下さいました。

翌日から次第に意識が薄れ、十日後召されました。

納棺式の時、戴いた御言です。

「良き名は良き油にまさり、死ぬる日は生るる日にまさる」

(伝道の書七・一)

姑は地上での生涯を終え、天に召される時が一番幸せだったと思います。天国を身近に望みを持たせていただきました。

(昭和五四年二月十五日)



我汝に呼び求めよ、我汝に応えん

両親を早く亡くしました私の親代りとして、その後の面倒を見てくれた兄は、私が嫁いだから結婚しました。兄嫁は純粹でしたが、気性の激しい性格で、次第に病いがちになり、純粹なだけに、人間として生き方を模索していた様でしたが、逆に自己中心が激しくなり、人を裁くようになりました。やはり魂の平安を求めていたと思います。

キリスト教、生長の家、創価学会等を尋ね求め、最後に創価学会に入信、お題目をあげる日々で生甲斐を得ていたよう

でした。その内、私に入信を迫り、熱心にテープや手紙を送って来るようになりました。

私はもうイエス様の救いに与り、たどたどしい歩みながら信仰を持たせていただいておりますが、私も対応し切れず、榎本先生に直接ぶつかり導いていただきました。

結局応じなかった故に、「邦子さんは兄さんにあれだけ世話になっておりながら恩知らず」と言われ、絶交になりました。

「汝我に呼び求めよ、われ汝に応えん。」

汝が知らざる大いなる事を汝に示さん」。

ここから神様が御業をもつて臨んでくださいました。ある日突然、思いがけない処から、兄が癌で入院中、しかも転移もあり、余命幾ばくもないとの知らせ、私はすぐにでも駆けつけ看病したい、主人も意識のある中に会いたいと願っていましたが、絶交状態なので、ひたすら祈りました。

また榎本先生にご相談、この時は先生ご自身も退院間もない頃でいらしたのですが、厚くまじさを省みず伺いました時、毅然として導いていただきました。

「全てが御手の中、神様がお兄さんをご様な中をお通しになるのも、大きな使命を与えてのこと、生きる死ぬるは問題ではなく、肉の思いでなく、主の御旨がどこにあるかを祈り

求めましょう。すべてをお委ねして待ち望みましょう」と。

神様のことを思わず、肉の思いに立ち易い私達、先生の厳しさに身の引き締まる思いでございました。そして帰り際に付け加えられた一言、

「お委ねしたら業を行われる神様の手から引き戻してはいけません。委ね切ることですよ。紐付の委ね方は駄目ですよ」私に念を押されました。今も常に立ち返らせていただく先生のお声です。

それから間もなく、姉より直接の電話、「兄さんが危篤状態だから看病させてあげる」と。何でもいい、神様に感謝、すぐに看病に駆け付けました。この時、姉も病いに伏せ、目も不自由となっており、代って甥と姪が看病しておりました。

そして再び姉一家との交わりの時が与えられましたが、やはり姉には心の平安も感謝もなく、悩んでいる様子が見えませんでした。本当にイエス様の救いを証しする時を与えられ、心おきなく看病することができました。兄は亡くなりました。

榎本先生の「事毎に主の御旨を問いつつ、全てを委ねよ」の
お導き、ご栄光を拝させていただき、感謝で一杯でした。

間もなく、今度は病がちでした姉の容態が悪化し、東京から伊豆下田に移って入退院の繰り返し、人工透析などしているとの事、そして姉が私に会いたがっているので、手伝い方々

来て欲しいと姪より連絡。丁度新年聖会だったので、終わって、これは主の御用だと感謝して飛んで行きました。

会うなり姉が、「待っていた。本当に来てくれたのね」と涙して喜んでくれました。

ここから姉と二人の子供、姪、甥と日夜生活を共にしながら看病しました。姉が本当に変わっていました。肉体はポロポロでしたが、心の目も開かれ魂も砕かれて、私の拙い信仰の証しにも耳を傾け、また二人の姪、甥も「叔母さんはどこか違うよね」と、時々口にしていました。

以前、姉が「私の知っているキリスト教とあなたのキリスト教とは違う」と言ったことを思い出しました。私が、イエス様の罪の許しと神様に生かされていることを話し、

「聖書の御言にお従いして歩むだけ、教えではなく救いなの、だから福音なのよ」と言うと、

姉が「いい信仰に入ったわね」と優しい言葉が出るようになりました。

姉が次第に悪くなり入院、ベッドの上である時、

「もうお題目なんか上げておられん、私の信仰より邦子さんの信仰の方が上ね。鏡子(姪)、研一(甥)の魂を頼むね」と、遺言となりましたが、この言葉を残して亡くなりました。この姉のお蔭で、私も真剣にイエス様を求め、榎本先生のお導きで

信仰に立たせていただきました。

先生と奥様に時々、姉の容態を報告させていただいた時、「最悪の時こそ神様が業を行って下さいませ。主の道に歩みましょう。救いは間近ですよ。待ち望みましょう。祈ってませ」と励まして強めて下さいました、御言通りの勝利でした。ここでも具体的に御業をもって愛なる神様を知らせていただきました。

今も続いて姪達一家が求めています。主に望みを置き、信仰をもって祈っております。
(平成三年一月)

イエス様の出番です

一年が終わろうとしていた十二月八日、降って湧いたような出来事。朝、年金病院で診察を受け帰りに買い物、お昼には帰るからと元気に出掛けて行った一美からの電話。元気がない声で申し訳なさそうに、

「即入院で帰れないの、身の回りの品は届けて貰いたい。週明けに再手術の予定だから、お願い……を持って来て」と。一週間前から眼に異常を訴えていましたが、診察の結果、通院治療ということで、よかったねと感謝しておりましたのに。我が家の家事の大黒柱が突然姿を消し、私にバトンタッチとなりました。一美の眼の癒し、全てに知恵と力を与えてく

ださいと祈りました。

「汝我に呼び求めよ、われ汝に応えん」の御言が与えられ、いよいよ私の出番と身の引き締まるのを覚えました。年末年始に向け、俄か主婦業、時期が時期だけに、何より家族五人、特に男四人の食生活、健康管理、重い責任がのしかかって来ます。状態を見て、一瞬不安がよぎります。でも全てをご存じの主は、

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい。これがわたしの福音である(第二テモテ二・八)と呼び掛けて下さいました。

榎本先生にお電話、経過をお話しし、お祈りをお願いしましたところ、「神の能力ある御手の下に己を卑(ひく)うせよ、時に及びて神汝らを高うし給わん(第一ペテロ五・六)、主が顧みて下さいますと、励ましと力を与えていただきました。

私もこの事は、主が許して恵もうとして、通して下さることを謙虚に受け止め、自分にも言い聞かせるように、「先生いよいよ私の出番です」とハッキリ申しましたら、即座に、「いいえ、あなたの出番ではありません、イエス様の出番です」と温和なお諭し。たった今まで、自分なりに主により頼んで歩み始めたつもりでしただけに。脳天をガーンとぶたれたようなショックでした。後は何をお話しさせていただいたかよ

く覚えていません。謙虚に受止め、全てを御手にお委ねしますと口では言いながら、すぐにしゃしゃり出る自分が本当に恥ずかしくなりました。イエス様ご免なさいと立ち返らせていただき、新たにされて感謝のスタートとなりました。

あの日は降って湧いたような出来事の日でした。夕べには、一日を終えてマリア様の祈り、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」と、家族が心を一つにして主の前に祈ることができました幸せ、謙りを教えられ、今でも新たに蘇って来ます。すべてイエス様の出番です。榎本先生のお導き心から感謝しました。(平成四年十二月)

主は王となられた、

世界は堅く立って動かされることはない

常に自分の健康を誇っておりました主人に、癌の宣告。それも、「早期癌で外科的処置で一部切除、全摘はありません。すぐに回復しますから大丈夫です」と言われて行われた一回目の手術は、神様の憐れみで大変順調に回復。ところが退院間近になって、「申し訳ありませんが、切除部分の検査の結果、進行硬化癌が見つかり、それもかなり深く広がっているのです、術後間もないですが、もう一度手術させてください、万全を期してやります」と再手術となりました。

甦って今も生ける主が共に在し、支えられ、守られ、御業をなして下さいました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなした。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ」(イザヤ四三・二) 再手術はオペ室入室から十二時間かかりました。疲れ切ったご様子の院長と主治医の説明では、

「胃全摘、その間、心臓停止四〇五回、出血多量、輸血、血圧も四十に下がり、食道と小腸を繋いだものの、命を取り止めるために、確認できず不確実、全ての機能が限界、最悪の手術となりました。このようにアクシデントのあった方は、麻酔から覚める時、七十%が死亡、その上、術後間もない再手術、その上ご高齢のため大変厳しいです」と。

死の宣告を受けたも同然、私の体からサツと血の引くのを覚え、身体を支えるのが精一杯。

「主は王となられた、

世界は堅く立って、動かされることはない」

生きるも死ぬるも主のご支配の中、「あなたは私のものだ」と迫られ、全て御手にお委ねしますと心が定まり、耐える力を与えてくださいと祈りました。感謝でございました。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」

胃の部分切除から始まり、一回目の胃の全摘、心臓停止、繋いだ筈の食道と小腸が離れ、吻合場所から化膿、骨髄炎となり、肋骨二本切除、オペ手術室での十回の手術、切り刻まれた身体。ところが最後の二か八かの三回目の望みのない大手術が、御業をもって奇跡的に回避され、主のご栄光を拝させていただきました。

その間に病室での気管切開、褥創の皮膚移植手術、緋骨神經麻痺で尖足、握ること、立つことは勿論、歩くこともできませんでした。

榎本先生もご用多し中、幾度となくお越しいただき、お祈りしていただきました。「……大田敏夫兄の身も魂もみ手にお委ねいたします」と、御国に帰る魂の備えもしていただきました。

「たとえわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざいを恐れません。あなたがわたしと共にられるからです」(詩篇二三・四)、この御言で支えられました。

状態が悪ければ悪い時こそ、時間空間を越えて神様らしい業を行って下さいます。「病を癒すのは医療ではない、主です」と、先生が実感こめて仰言っておられました。

「わたしは主であつて、あなたをいやすものである」

(出エジプト十五・二六)

「ご主人は厳しい時には意識がなかつたので分からなかつたでしょうが、一番恵まれたのは奥さんですね」と、本当にすごい恵みの時でした。

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る」

(イザヤ四三・十九)

奇しき御業の数々をもつて、今も生ける主に触れさせていただき、主の顧みとご愛を新たに、しっかりと心に止めさせていただきました。

一九九四年六月十四日入院 一九九五年十月二日退院

延入院日数 三〇九日の戦いでした。(平成六年六月)

私の眼症

「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するものである」(ローマ十一・三六)

二〇〇〇年の新年聖会も終り、いよいよ眼の状態が悪く、複視それも放射線状に交錯、千々に乱れ、聖書の一ページがやっと、そのうち読めなくなり、テープも聞けない状態になりました。

榎本先生が御歳を召されてから、お説教で、「聖書はいつでも読めるのではないですよ。読める時によく読んでおきなさい。読めない時が来ますよ」と、今まであまり気にも留めてい

ませんでした。このお言葉を実感しました。

年末より、かかりつけの眼科医は、眼筋の疲労からでしようとして様子を見ていましたが、これは眼からではなく、脳からかも知らないので、大きな病院で検査を受けてください、何処の病院にしましょうかと問われました。即座に産業医大にお願いますと、心に決めました。

実は、早天祈祷会で一緒だったE姉が私の眼の状態を見ておられて、「眼科は産業医大がいいですよ」と声をかけてくださっていました。私も祈っておりましたが、この時のために主が備え、時期を得た助けをいただき感謝でした。

ここからいよいよ戦いが始まりました。念頭に与えられたメッセージ、「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」。恵みの原点に立ち返らせていただき、新たにされてのスタートでした。

一月末検査の結果、甲状腺眼症と診断。これは難しい病気です、完治はないです、でも七十%の方は楽になります。厳しい宣告でした。

片方の眼筋が腫れ、動かない状態なので焦点が定まらず、歩くのも一步一步、一段一段と、慎重に足を運ぶ有様、その上、脳からの指令が動かず、集中力、思考力は全く駄目、頭痛、吐き気などパニック状態となり、日常生活が苦痛で、

休み休みでやっとでした。一番つらかったのが、台所に立って包丁を使うことでした。今まで考えもしなかったことです。常時、眼帯を持参して何とかしのいでおりました。

「汝の能力は汝が日々にも求むるところに従わん」。

主とのお交わりの中、この聖言に励まされ、常にイエス様を呼び求める日々でした。

榎本先生にご報告し、お祈りをいただきましたところ、先生はお見通しで、即座に、「神様がストップをかけてくださったのです。大田さんは今、交通渋滞を起こしている状態だから、脱線しないように、しばらくゆっくりお休みなさい。神様がブレーキをかけてくださったのです。『主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ、主を待ち望め』、お委ねして待ち望みましょう」と、懇ろに導いていただきました。

「治療方法は年齢的なこともあり、手術は避け、薬と放射線治療をします。毎日両眼筋に照射、眼筋にステロイドの注射片目ずつ。土、日曜以外は絶対に続けてください」との宣告。丁度一ヶ月かかりました。

二月に入って治療開始、初めから雪の日が続き、風の日もあり、またステロイドの注射の処置がうまく行かず、痛みと涙で辛い日もありました。途中、風邪を引いて体調を壊し、萩原中央病院で点滴を受けながら通った日もありました。主

を仰ぎ見ながらも、状態を見て揺さぶられます。イエス様が「信仰薄い者よ、なぜ疑ったのか」と御声をかけ、

「我生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」と立ち返らせていただき、ただ寄り頼んでまいりました。

二月とは言え、春遠からじ、よく晴れた日はバスを降り、病院に向かう坂道を登る途中、眼を上げると、眼前に広がる真つ青な青空に思わず足を止め、

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす」
(詩篇十九・一)、

今という時も、万物の支配者で全てのものを責任持つてくださる御方の御手の中で生かされ、持ち運ばされ、顧みられていること、

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。」

人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」

との御言に迫られ、感謝で涙したこともありました。

主治医や先生方、看護婦さん達からも、頑張ってくださいと随分励まされました。聖書を開けど、字がウロウロして読めない、思考力も集中力も回線が閉ざされた感じで、テープも聞けない。でも、私の弱さを全て知り尽くされた主が共にいまして、御臨在を味わせていただいた日々でした。

治療も終りに近くなつたある夜、神様の光に照らされ、聖

書の小さな字が、二、三字ですが、くつきりと眼に飛び込んで来ました。えっ見える！イエス様、感謝です。思わず声が出ました。瞬時のことでしたが、神様に触れさせていただきました。眼と頭がとても軽く感じ、

「しかし、苦しみにあつた地にも、やみがなくなる。

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。

暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照つた」

(イザヤ九・二)

クリスマスの時の御言を体験させていただきました。

六十年前、あの大東亜戦争が始まった頃、B 29 の襲来、空襲警報が鳴り響き、街は灯火管制が敷かれ、灯りが消され、真つ暗な夜空に、幾筋かのサーチライトの光の中に、B 29 を捕らえ追っていた時の情景が思い起こされ、その頃は、神様とは無縁の者、今は神様のものとしていただき、許され、生かされ、望みを持たせていただける幸いを噛み締めたこともありました。

恵みの時

主の御手に守られ、支えられて、一ヶ月余りの全治療を終えることができました。さすがに力尽き、今度は内科医通い、老人性結核ではないかと疑われ、堤先生の助言もありまして、

入院することになりました。その時、神様のご計画の中に、こんな恵みの時が備えられていたとは、夢にも思いませんでした。

丁度時を同じくして、榎本先生が同じ病院にご入院中でいらしたのです。驚きと感謝で一杯でした。毎日お見舞いにお見えになる百合子先生、金生先生とすばらしいお交わりの時を持たせていただきました。

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」。

まさしくその通りでした。入院中は、先生が病院着でのお付き合いですねと、笑ってお話が弾んだこともありました。先生とのお交わりの中で一番心に残って焼きついていることは、祈る課題を与えられたことです。

「今、私の一番の祈りは、天地創造の神様に造られた全宇宙の一人ひとりが、創世の始めに立ち返らなければならぬ時間です。神様が妬けるような思いで待つておられます」と、力を込めてお話くださいました。

また、残念そうなお顔で、「全宇宙の支配者でいらつしやる神様を、小さく、小さく、ミニミニにしてしまっている。常によい御方として受け止めているのか」と、そして厳しい一言、「イエス様の十字架の救い、何をもつても贖われるこ

とのできない罪を許された信者一人ひとりが、もつともつと喜び、感謝があつても良いのに、足りないです」と、嘆いておられました。

厚かましく、私が「感謝しています。喜んでいきます」と申し上げましたら、苦笑いされたお顔が忘れられません。本当に貴重な思い出の一週間でした。

神癒

二年余り、礼拝後の神癒会に出させていただきました。二月の神癒の時の御言、

「恐るるなかれ、ただ信ぜよ。全て疲れたる者、また重きを負える者は我に來たれ、我汝らを休ません。汝の病、十字架に移転せり。アーメン」

この御言を戴いた時、即、「得たりと信ぜよ、さらば得べし」と、心が定まりました。見る所の状態は変わりませんが、イエス様が私の病気を引き受けてくださって、新しくされたのだから、神様が備えてくださった道にお委ねして踏み出させていただき、気持も眼も大変楽になりました。

このことを先生に申し上げましたところ、「それが信仰ですよ。よかったですね。お委ねして行きましょう」と励ましてくださいました。

ところがその後、私が付け加えた一言、「もうあまり無理をしないよう心がけます」と言うと、「それは違います。『行け』と示された時は、恐れなくて、『主を待ち望め、強くかつ雄々しくあれ』とおっしゃる主が共にいてくださるのですから、大胆に歩みましょう」、そして先生の名言、「倒れるまでは立っている。神様が死ねとおっしゃれば死ねばよい。潔く、大胆に信仰に立って歩みましょう」と、目を覚まさせていただき、今一度、先生の信仰に触れさせていただきました。

二月の検診の折、三回目のMRを撮りましたところ、眼筋が肉眼でも分かるくらいに腫れが引きましたと、結果を神様が見せてくださいました。私自身の目の動きが、大分軽くなりました。眼鏡にプリズムを貼って調整、楽になっての日々です。今も生きていらっしゃる主御自身を、知らせていただいております。これが先生から直接導かれた最後でした。

感謝の思い出は尽きず

神様からの光を受けての輝くご生涯、先生の最後の御用がイースターでした。

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒行伝一・八)

地上での全責任を果たされ、ご使命を全うされ、このメッセージできつちり締めくくられました。聖餐式では聖餐に与り、私達も清めていただき、本当に厳肅な最後の聖日礼拝でございました。

神様に献げ切つての先生のご生涯、イエス様が模範を残され、御足の後を踏み従うようにと御声をかけてくださっておりますが、その信仰をもう一つ具体的に先生を通し、この眼で見せていただきました。私達は、本当に幸せでございます。

かつては滅びの中におりました者が、イエス様の救いにより罪許され、主の御愛と恵みの中に生きる者としていただきました、先生のお導きを心から感謝いたします。先生の信仰に倣い、受け継ぐ者とならせていただきたく願っております。

イエス様、ありがとうございます。榎本先生、奥様ありがとうございます。御国を目指し、喜び勇んで、信仰を持って歩んでまいります。感謝の思い出は尽きません

陰にあつて祈つていただいております榎本和義先生、文子先生始め、金生先生ご夫妻、主にある皆様方のお祈りを心から感謝申し上げます。

「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」
(第一コリント十五・十)

榎本先生を偲んで

川越 シツエ（前田）

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ十四・二)

絶えず教えられた御言です。本年、特に年頭から、私達一同に信じる力をと、先生の切なる思いの教えだったことを、繰り返し思い出します。

先生は長年変わらず接して、教え導いてくださいました。

私共は、どれほど祈っていたいたことか。苦しい時の気持も聞いてくださり、それぞれの子供達に至るまでも、信じる力と平安を得て、心から感謝しました。

先生はしばしば入退院の繰り返しでしたが、その都度、元気に御用をしてくださいました。そんな事がまだ続く、そんな思いもありました。四月十日、先生召天の知らせ信じられず、悲しいばかりで、涙が止まりませんでした。

思えば、三月三日の日曜礼拝に続いて、聖餐式の御用をされました後、玄関ホールに出て椅子に腰掛けられ、主喜ちやんを抱っこされて、ニコニコされている姿を見ていましたので、十日足らずして召されるなんて、思いもせぬことでし

た。後になり、病が重かったことを聞かされました。

神様一筋に生きられ、信仰を全うされた六三年余り、先生そのすばらしい人生を通して、私共に教えてくださった御言を守り、いつも心に思い、信仰に励みます。

一日でも長く、神様の御前に出させてくださいと祈り求める毎日です。アーメン

榎本先生の思い出

秦 タネノ（前田）

「わが行く道いついかに なるべきかは

つゆ知らねど 主は御心 成し給わん

備え給う主の道を 踏みて行かん 一筋に」

八十の坂を越え、体力の弱さを格別に実感し、常に祈り、神の掟を学ぶ毎日でございます。腰を痛め、入院、退院また入院。こんなに続くと、私はどうなっているのかしら？と、無きに等しい者をあえて選んだと申される主の御心が、ぼやけることもありました。本当に、弱い者ですね。

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受け

て自分の内に宿っている聖霊の宮であつて、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである」。本当に緊張させられました。主よ、お許しくださいませ。

その日、病院に榎本先生がおいでくださり、心からのお祈りを戴きました。唯唯、感謝でございました。私はその時、先生にぼやける思いをお話しましたところ、先生はすかさず、「秦さん、お歳ですから」と笑われて終わりでした。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」。

主に守られて退院いたしましたして、間もなくのことです。思いがけず、榎本先生が金生先生と共においでいただきました。榎本先生は肺炎のため入院なされ、退院なされて間もない頃でございましたのに、ご自身のお体も十分な回復なきにもかかわらず来てくださつて、「あなたの事が気にかかつていたのだが」と、ご愛のこもつたお言葉を戴き、心からのお祈りくださったこと、心熱くなる思いで、生涯忘れることはできません。本当に感謝でございました。

「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」。

榎本先生とお話した後は、いつも必ず心に平安を戴くのです。また、いつの日か覚えていませんが、ご忠告いただいた

ことがあります。それも、何を言ったのか定かでないのですが、「秦さん、そんな事は聖書には何も書いてありませんよ」でした。いつも神(聖書)に委ねられたお姿です。黒いものも、神が白いと申されるならば、その通り信じてお受けするのが「従い」であると。エツと思つたことなど、今にして思えば当然のことでございました。

「すべての道で主を認める」み思ひの深さを、さらに感謝をもつて、先生を偲ばせていただきました。

無から有を生み出される主に、全てをお委ねいたしましたして、許される日々を、常に主を前にして、祈りつつ過ごしたいと願ひ、思い出とさせていただきました。

**私にとつて、永遠の生命の導き手であり、
生涯の師である榎本利三郎牧師**

津 留 崎 浩 行 (前田)

一 この町に神の人あり、尊き人にしてその言ふところは皆
必らず成る(サムエル前書九・六)

この言葉に出会つて大変感銘を受けたのは、ほんの二、三年前です。けれども、榎本先生に対してこの言葉を感じ始め

たのは、もう三十年前にもなります。

その間、様々な問題・悩みに出会いましたが、榎本先生に相談して、先生が「こうしなさい。こうしたら大丈夫です。神様が守ってくださいるから、思い切って行きなさい」と言ってくださって、怖くても何でもその言葉に従った時に、先生の言葉どおりに成らなかつたことがあります。それ等のことで、主が今も現実に働いて下さる事を知りました。

冒頭の御言に接した時に、榎本先生が正にこのような方だと思い、「この方こそ私の師だ」と心に定めました。その後も大小さまざまな問題に出会うごとに、何回となく先生に相談して祈っていたいただきましたが、祈りが答えられなかつた事が一度もなかつたのです。

一九七八年(昭和五三年)に胃ガンになりました。その事が分かつてから、半年間は悩み苦しみました。榎本先生は私のために懸命に祈ってくださいました。

九月に入院しましたが、恐しくて恐しくて、毎日不安がつきまといました。しかし、不思議なことにある日、スカッと恐れがなくなつたのです。イエス様が先生や私の祈りに答えて憐れみを施してくださいましたお陰で、死の恐れが全くなつてしまいました。手術の前も嬉しくて嬉しくて、お見舞いに来た友人も、「手術前にえらい喜んでますね」と驚いたくら

いでした。私は信仰の歩みのただたどしい者でしたが、この事を通して、切なる祈りに主は必ず聞いてくださるといふ信仰が与えられたのです。そして、これが、私にとって大きな信仰のステップとなりました。

「苦しみに会いたりしは我に良きことなり、これによりて我、汝の律法(おきて)を学びえたり」(詩篇一一九・七一)。

今しみじみと、この御言が真実であることを思います。現実の生活の中で、主は先生と共に、忍耐深く、忍耐深く、導いてくださり、私を育ててくださいました。

私だけでなく、他の方も同様に経験なさつたことと思いますが、榎本先生に「どうしましょうか」と相談して、先生の言葉通りに従つて、その通りにならなかつた人はいないと思います。中途半端に従つたら駄目ですが、言われたとおりにするならば必ずそのとおりになるのです。

榎本先生に相談して、神様の御旨を教えてください、その御旨に従つた時に、最善にならなかつたことはなかつたのです。本当に主は榎本先生を用いてくださいました。ですから、先生は確かに主の器であり、預言者のような方だと言えるのです。そして、エリヤのような先生に対して、私はエリヤの如き者でありたいと願ひ、「先生は神様がお立てくださった器だから、お従いしよう」と、こけつまろびつながら、今

日まで来たわけです。

榎本先生を一言で言うなら、サムエルやエリヤのような預言者のような方であった、ということに尽きます。

二 まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡て

これらの物は汝らに加はるべし(マタイ六・三三)

この有名な御言は、榎本先生が「これは私の生涯の御言です。私はこの御言によって、いつも支えられてここまで来ました」と、よく説教の中でお話されていました。

一つの証ですが、先生は戦時中に教員が足りなくなった時に、授業中に主をお伝えすることを条件に、西南女学院に理科の先生として赴任されました。戦争が終り、新しい会堂が与えられた時点で、「今こそもう一度、一切を捨てて、主の御用だけの生涯に入らないといけない。神様だけにより頼む生涯に入らせていただく」と、教職の仕事を辞められました。

「学校の教員の給料は喉から手が出るほど欲しかったのですが、御言にかけて、教員としての収入の道を断ち、主に従いました」と、先生は証しておられます。神様が生かしてくださらないければ、それは使命の終わりの時と心に定められて、ご自分を実験台にして、神様だけを当てにして進まれたのです。献身の生涯に入られた時もそうだったでしょうが、この

時も大変な戦いだっただと思えます。終戦後といえば、普通の仕事をしていても物の無い時代でしたが、「神様はちゃんと私達一家を守ってくれた、四人の子供も神様が養ってくださった」とお証していただきました。様々な問題の中にも、先生はこの御言に立つて歩んで支えられていたのです。ですから、この御言を読む時、先生の顔が目の前に浮かんでくる思いがしてなりません。

三 汝は我に従へ(ヨハネ二一・二三)

教会五十年誌「燃ゆる柴」の中にも書いておられますが、榎本先生は一九二七年一月二日、主のお選びによって聖霊のバプテスマをはつきりとお受けになりました。その時に先生は「この方こそ救い主だ。この方に従って行こう」と決心なされたわけです。一日にしてその決断をなさったのです。先生の生涯は、御旨に従って、御旨に従って、歩き抜く生涯でした。

よく私が先生のお宅にお邪魔した時のことです。私が塾をやらせていただいた頃は、午前中が空いていたものですが、先生の所に出かけたのも午前中が多かったのですが、いろいろとお話して、「では、最後にお祈りしましょう」という時に、先生が小声で最後に、「神様、これから今日は何をいたしましたようか」と、神様に相談しておられるのを聞いたことがあります。

す。その時私は、御旨に従うということについて、まだまだ主の導きを強く感じていないということが分かりました。主の前に謙ることを知らなかったのですが、榎本先生はそうではありませんでした。いつでも神様の前に自らを低くして、御旨を伺っておられたのです。

先生は神様がすぐ目の前におられるような姿勢でお祈りされていました。私はよく、先生が「今日はこれをさせていたいただきたいのですが、これでいいでしょうか」といったことを、お祈りの中で真剣に神様と話し合っておられるのを聞いて、お祈りとは神様とお交わりだ、ということを教えられました。いつも榎本先生は、「汝は我に従へ」の御言に立って、毎朝主の御旨を伺っておられたと思うのです。

ある時、私は先生に「選択肢が二つあって、どちらを選んだらよいかわからないときは、どうしたらよいでしょうか。しかもタイミングが悪くて、先生に相談に行く時間もないような時は、どうしたらいいでしょうか」とお尋ねした時、先生は、「その時は、まず自分のしたくない方を取りなさい」と教えてくれました。自分のしたい方を選ぶのは己があるからだ、と先生はおっしゃりたかったのでしょう。それで、私が自分のしたくない方に歩み始めると、状況がパツと変わっていったことがあります。神様は私が従うか従わないか

をじつと見ておられて、最終的には私が進みたかった方に導かれた、ということも何度か経験させていただいたものです。榎本先生は、いつでも主に問うて御旨にお従いしておられました。ですから、神様は先生を、大きな力をもった預言者のように育ててくださったと思うのです。

ある日の祈禱会で、先生は「神様は実に祈りを聞いてくださる。まるで百発百中のように聞いて下さいます。本当に感謝に絶えない」とお話されていました。もちろん、ご自分のことも祈っておられたでしょうが、お祈りのほとんどは教会の皆さんのことだったと思います。皆さんから、「このことについて、先生、お祈りしてください」と、まるで祈禱師のように頼まれるわけです。しかし、先生は決して断るようなことはなさらなかった。ほとんどの場合、お祈りの依頼を受け入れて祈られたのでしょう。そして、「百発百中、神様は聞いてくださった」と証しされる。私は先生のそのお証しを聞いて、先生はいわゆる神様の御手を動かす方なのだと思えました。

エゼキエル書二二章三十節には、「我一人の人の國のために石垣を築き、我前にあたりてその破壊處に立ち、我をして之を滅さしめざるべき者を、彼等の中に尋れども得ざるなり」との御言がありますが、神様の手を動かすような、力のあるお祈りをする人を、神様は求めていらっしやる。それは、傲

慢でも高ぶりでもなんでもない、お従いしていく時に、私達に望みとして与えるのだと神様はおっしゃっておられる。祈って祈って、神様の御旨に従っていく時に、神様がいつのまにかそのような力を与えてくださるのだと思うのです。榎本先生は、そのような祈りの力をもった方だったと思います。

ケズイックでの教役者の集会で、バックストン先生は「あなたの祈りには力がありますか」と尋ねられたそうです。それは、神様に喜ばれる教役者の一つの条件ではないかと思うのです。神の手を動かす力を、神様は与えようとして待つておられる。常に従っていくならば、そして、必要に応じて求めていくならば、教役者はもちろん、平信徒にも神様が与えてくださるのです。

歴代志下十六章九節には、「エホバは全世界をあまねく見そなはし、己にむかひて心を全うする者のために力を顕したまふ」という御言もありますが、これと同じことなのですね。神様の前に踏みとどまって、祈り求めていく、これを実際に行ったのが、モーセです。ですから、神様がなさろうとすることに対して、それに命をかけて押し止めようとしたモーセの信仰を神様は求めていらっしやいます。榎本先生は、正にそのような方でした。

ある時、榎本先生が「どうしても神様に働いていただかな

ければならない事もある」とおっしゃったことがありました。「神様の首根っこを捕えるようにしてお祈りをしたようなこともありました」と。恐らく、自分のことよりもむしろ、他の人のことで非常に大変な問題だった場合に、どうしても神様に聞いていただかなければならないことがあったのだと思います。先生から「神様の首根っこを捕えてでも」と言った言葉をお聞きした時は、私も大変驚きました。この先生は大胆なことをおっしゃるなあ、とびっくりしたのです。しかし、それは神様との信頼関係ができている証拠なのだと思ふことができました。いつでも御旨に従ってこられた先生だからこそ、そのような祈りをするのができたのだと思いました。

四 我もし死ぬべし、死ぬべし(エステル四・十六)

「モルデカイ命じてエステルに答へしめて曰く、汝、王の家にあれば、すべてのユダヤ人の如くならずして免かるべしと心に思ふなかれ 汝もし、この時にあたりて黙して言はずば、他の處よりして助けと救いユダヤ人に興らん、されど汝と汝の父の家は亡ぶべし、汝が後の位を得たるは、かくの如き時のためなりしやも知るべからず、エステルまたモルデカイに答へしめて曰く、汝往き、シュシャンにをるユダヤ人をことごとく集めてわがために断食せよ、三日の間、夜昼とも食ら

うことも飲むこともするなかれ、我とわが侍女(こしもと)等もおなじく斷食せん、しかして我、法律(おきて)にそむく事なれども、王に至らん、我もし死ぬべくば死ぬべし、ここにおいて、モルデカイ往てエステルが凡て己に命じたるごとく行なへり」(エステル記四・十三〜十七)

ここはアブラハムに始まって、モーセも、また神に用いられた他の人物達も皆経験した所だと思えます。非常に意味の深いところで、神様がすべての信者に語りかけておられる御言だと思ふのです。ともすると、従うべきところを断つていたり、うやむやにしたり、「ちよつと待つてください」と言つてすぐに従おうとしないなど、私もしょつちゅう失敗して、神様に申し訳ないことをしてしまうことがあります。私自身、謙つて祈りの中で神様と交わりをする時が、まだまだ少ないと思ひます。この御言からしみじみ心が刺されるのです。ですから、神様の前に悔い改めて悔い改めて、いつでもイエス様を前にした信仰を持っていかなければならないと思ひます。榎本先生はよく、「信仰は、死ぬ覚悟でイエス様に従うことなんだ」とおっしゃっておられました。父なる神様の方からまず、私達をエデンに取り返すために、あらゆる手段を尽くしてください。しかし、どうしても帰つてこないために、御子を十字架につけるまでして、神様の方から近づいてくださ

った、しかも、イエス様は肉の身体をもつて一番下まで降りてくださいました。「一番下まで」という言葉を、よく榎本先生がおっしゃっておられました。「一番下まで」とは、罪人の下の下まで降りて、罪をかぶつて、私共を支えて下さつたという事ではないかと思ひます。

私が信仰に入つた頃は、本当に命を与えてくださる信仰を教える教会は少ない時代でした。折瀧先生の所に行つてはじめて、「これだ」と実感し、折瀧先生をエリヤだと思ひましたが、私自身は極めて不熱心なエリヤで、勝手気ままなことをして多くの年を過ごしました。その後、榎本先生のお導きを受けるようになった時、「この方こそ神様が私に与えてくださった新しいエリヤだ」と思つてお従いしてきました。一日の内の少しの時間でも、毎日神様との交わりを持たせていただき、喜びを与えていただくようになりました。榎本先生との出会いを通して、私はイエス様に生涯を変えていただいたのです。ですから、都合のいい時だけの信仰ではなく、命をかけて従う信仰を、榎本先生から学ぶことができました。

今日までの自分自身の生涯を振りかえつてみて、イエス様がよくも、私のような者をもあきらめないで育ててくださったものだと本当に感謝いたしております。昨年は病氣の中で、何の恐れもなしに死線を越えて、神様が確かに生かしてくだ

さるといふ経験をさせていただきました。神様は必要とあれば生かしてくださるし、また、必要であれば、喜びをもって天国に迎え入れてくださる。開かれた道を歩くだけです。榎本先生を通して、このような信仰に導かれたことを深く感謝している次第です。

この一文は、金生栄子先生のお立会いの上、私の口述を録音し、一郎先生や栄子先生のご努力で一語一語コピーしていただいた、大変なご苦労とご愛の労によるものです。主が豊かに御二方を御祝福下さいますよう、感謝と共に祈りいたします。イエス様の御名によって、アーメン。

追記

私が初めてイエス様にお会いしたのが、文語体の聖書を通してでした。また、その後もしばらくは、文語訳の聖書で折瀬先生の集会に出させていただきました。今でも、どうしても文語訳から離れられません。ですから、この証しの中でも、文語訳を使わせていただきましたことをお許しいただきたいと思えます。尚、榎本先生の思い出は尽きませんが、主の導きをいただいて、次号にでもまた証しを載せていただけたらと願っています。

神は愛なり

鈴 木 一 幹 (前田)

榎本先生の思い出として、昭和三五年頃を振り返ってみることにしました。

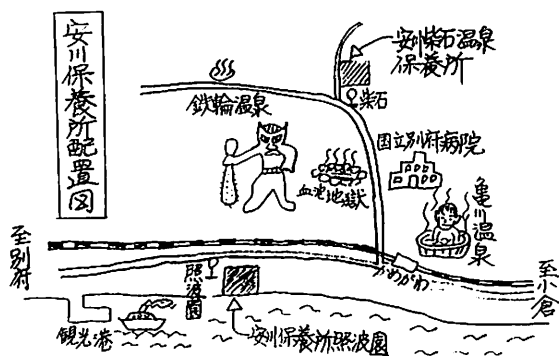
当時、私は安川電機本社総務部厚生課保険係に在席していました。その頃の会社は、主力のモーターの増産とともに、オートメーションシステムの開発と生産に全力が注がれ、製造現場は勿論、事務部門においても多忙を極め、毎日の残業は勿論、日曜日も休日出勤を命ぜられ、たまの日曜休日には職場の親睦を兼ねての魚釣りや旅行等に出かけ、全く教会の礼拝には出席していませんでした。その頃は、安川の小鷺田社宅に入居していて、家から毎週の日曜日の礼拝には、母が孫娘三人(小学校二人と幼稚園一人)を連れて、日曜学校に通っていました。母が毎週の礼拝に出席して、神様に私の事も祈ってくれているから、必ず神様は私を守ってください、私は教会には行っていないが、神様を信じているから、必ず良いようにお導き下さる……などと、自分勝手な解釈をし、自己満足をしていました。

当時の私の担当業務の一つに、別府市にある二ヶ所の温泉

保養所の運営管理がありました。

一ヶ所は、JR日豊線亀川駅前の国道十号線沿いに、約一キロ南に行った所の停留所「照葉園前」にある保養所照葉園と、もう一つは、亀川から山の手約二キロの距離にある柴石温泉保養所がありました。

私が日曜出勤日の夕方帰宅すると、母から「今日、教会で礼拝の後、榎本先生から『安川の別府保養所を四泊五日(月曜から金曜日まで)利用したいので、一幹さんをお願いしてみてください』と頼まれた」との事でした。



当時の保養所の利用は二泊三日以内が原則で、土・日曜日を除く平日は、家族の利用が若干ある程度で、ほとんど空き室となっていました。

従って、先生のご利用は平日であり、特別扱いできるのではなかるうか、先生が保養所にお泊りになることは、会社としてもまたとない好機である、このご滞在の機会に先生にお願いして、保養所従業員に一時間でも信仰を中心とした精神講話をお願いできれば、この上もなく有難いことだと思いました。

早速、その夜、先生にお電話でお願いしましたところ、先生は「お話しする対象は、どのような方々ですか」とのご質問がありました。私は「海岸沿いの保養所に十二人、山沿いの柴石保養所に六人、計十八人で、これに寮母さんを入れて十九人です。寮母以外はいずれも高卒、短大卒のお嬢さん方で、特にご両親のご希望で花嫁修業を兼ね、保養所で実習勤務している方々が対象です。」「現在の保養所の寮母さんは古富さんという方で、安川入社前は、女子高校の家政科の教師をされていた方で、入社後は女子寮寮母をされていました。別府保養所開設時に転勤して、現地保養所の寮母となられ、毎日、勤務員の指導、特に立居作法、洋裁、料理(実務は調理師や板前が別に通勤で勤務していた)などを教えていました。ま

たお茶・お花は亀川在住の先生方にそれぞれ週一回お願いし、来所指導を願っています」と、説明しました。

先生は「よく分かりました。お引き受けいたしましたでしょう。保養所の都合の良い日に、寮母さんと打ち合わせて決めさせていただきますましょう」と、引き受けていただきました。

先生は次に、「私の勝手なお願いですが、できるなら静かな部屋をお願いしたいと思います」との事でした。

鈴木、「分かりました。先生のご利用日程が決まれば、事前
に吉富寮母と協議してみます」。「私としては、柴石保養所の方が静かで、温泉付の離れ棟が三棟あるので、この内の一棟にお泊りいただければと思います。海岸沿いの保養所は前側の国道を電車や自動車が走り、幾分騒音が聞こえ、食事は食堂で利用していただいております、柴石の方は、各離れに運び込みとなっております」。以上、説明申し上げました。

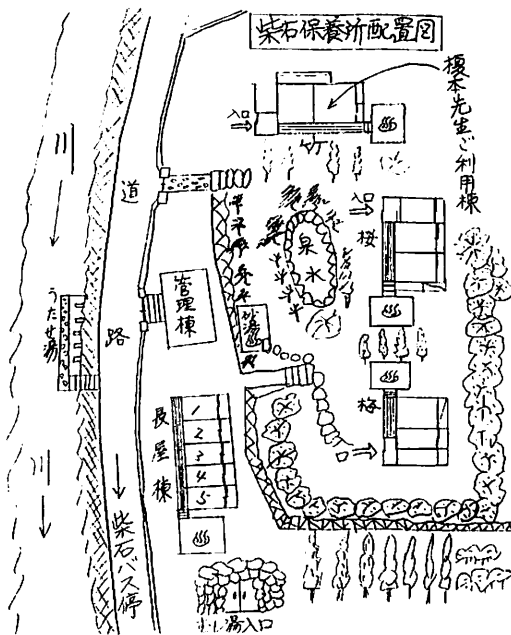
先生は大変喜ばれ、「是非、柴石保養所の方にさせていただきます」との事でした。

保養所の吉富文字寮母さんは、別府に行かれる前は、八幡西区八千代町にあった安川電気八千代寮に勤務され、黒崎岸の浦のバプテスト教会に行かれていたクリスチャンでした。

翌週月曜日、早速会社から吉富寮母に電話をし、滞在中の都合の良い日に従業員に一時間程度で講話をしていただ

くようお願いしてあることなどを伝えましたところ、吉富寮母は「大歓迎です」との事でした。

それから先生は、ほぼ毎月一回、柴石保養所をご利用され、竹の棟に宿泊されました。その後一カ年が経過後からは、三ヶ月に一度、その後は半年に一度くらいで、昭和四五年頃までご利用になりました。



第一回目に行かれた時、吉富寮母からの電話で「昨日は午後一時から約一時間半ほど、私共従業員十九名に「神は愛なり」

の御言についてお話をいただき、一同大変感激していました。今後のお話は何を聞かせてくださるかな、などと皆で楽しみにしています」との事でした。

吉富寮母は、別府市内の教会の礼拝に行かれていましたが、榎本先生のお話をお聞きするようになってから、従業員の内の希望者数名が、寮母に連れ立って礼拝に出席するようになったとの事でした。その後の話で、当時、教会に来ていた男性信者(大分県庁にお勤めの方)と結婚し、退職された方も現れ、そのお嬢さんのご両親(当時、三菱化成の部長さん)も大変喜ばれ、会社にお礼の挨拶に来られたのを思い出します。まことに祝福され、感謝にたえません。

また、従業員が先生の部屋に掃除や食事の搬入等で訪問した時、先生はいつも静かに机に向かって正座し、黙祷をされ、またはお祈りをされ、そのお姿に一同感心していたそうです。今、昔を偲び、先生のお人柄と終身神に仕えられた、その偉大なお姿を思い、感激すると共に、私共に与えられた数々のご指導に、衷心より厚く感謝申し上げる次第です。

榎本先生の思い出

高木 ツルエ(前田)

私共が、信仰の父とも仰ぐ榎本先生が、はかり知ることのできない神様のご摂理により、平成十四年四月十一日、御国にお召されにられました。

そして、十一日午後七時には前夜式、十二日午後一時より告別式、五月六日(月)午前十一時より召天記念礼拝が行われました。教会員一同、言い尽くすことのできない感謝と讚美をもって、聖名を崇め、心から礼拝を捧げさせていただきました。

和義先生が、使徒行伝二十章二四節の「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」の御言によって、御用をしてくださいました。先生の信仰生涯を見せていただいたような思いで、涙があふれました。先生は、一方的な神様の御愛と選び、十字架の御血による救いの恵みを全身全霊で受けとめ、その御愛にどう応答して行くかが信仰生涯の原点であったと、和義先生は証しされました。先生はまた、私達

に対しても常にその事を繰り返し、繰り返し、論じてくださった事をもう一度、心に受け止めた記念礼拝でした。

かえりみますと、私は神様のお導きにより、昭和二十七年十二月二十八日、榎本先生司式のもと、八幡前田教会にて高木と結婚式を挙げさせていただきました。信仰生活を踏み出したのですが、どのように神様にお従いしたら良いか、何もわきまえない私達に対し、先生ご夫妻はご自分の歩みを通し、また子供に対するように教え、論じてくださいました。私達も何とか先生方の信仰の歩みに習いたいとの願いを持って、礼拝にまた各集会に近づいては、神様に祈り求めるようになりました。

ある日、お掃除の後、牧師館でお茶を戴いている時、先生は民数記二二章二一〜三五節の御言をもって、懇ろに語りかけてくださいました。

「高木さん、弱い奥さんがあなたに対し口を開く時には、よくよく祈って、神様の御旨が何処にあるかを悟らせていただくようにしましょうね。また、奥さんも心を合わせ、神様に喜ばれるようにお従いして行きましょうね」と優しく論し、励ましてくださいましたことを、今でも鮮やかに事ある毎に思い起こします。全ての事に未熟な私達に対する先生の思いやりと御愛に対し、心が熱くなり、感謝しつつ、守らせていただいています。

また、昭和三二年一月六日の伝道集会で、ルカ二三章の先生の御説教で御聖霊に迫られ、神様のはかり知ることのできない御愛と、私の罪のために御子イエス様が十字架の上に死んでくださり、贖いの道を開いてくださったことを、新しく受け止め、涙と共に讃美歌二四九番を賛美しました。

集会後、神様と先生の前に告白しますと、先生が私のために神様の前にとりなしの祈りと感謝を捧げてくださいました。そして、私の新しい信仰の歩みの出発を、慈しみの眼差しをもって励ましてくださったことを、昨日の事のように思い出し、いつも感謝を新たにしています。

その後、私達の家庭にも様々な事がありました。娘の結婚、孫の出産、入学、卒業、恭の小学校三年の夏の交通事故、主人の召天と、事ある毎に先生ご夫妻にお祈りしていただき、御言によって信仰に立ち返らせていただき、神様のお恵みと憐れみの中に、今日まで守られてきました。

先生はいつも、ヨハネ十四章一節「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」のお言葉で信仰のうすい私達のために祈ってくださいました。特に今年の新年聖会では、その御言をもってご自分の遺言として私達に与えてくださいました。私も御聖霊の助けによって御言を握り締めては、信仰の導き手であり、またその完成者であ

るイエス様を仰ぎ見つづつ信頼しますと、全能の御手をもって道を開いてくださいました。

先生はお召されになられました。牧師館では百合子先生が祈りと隠れた御用をなさっていてくださり、金生先生、栄子先生が心を尽くして御用に当たられています。また大濠公園教会の榎本和義先生が、月一回の聖日礼拝の御用と毎週の木曜会の御用のため、福岡よりお出でくださっています。

神様のこの懇ろなるお取り扱いを思う時、ローマ十一章三六節「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アアメン」の御言によつて、私達の望みは大きく、神様の御愛と生ける主に感謝しつつ、お従いできる者となるようにお祈りして、待ち望んでいます。

榎本先生を偲んで

野村美恵子（前田）

先生最後の聖会テープ（平成十四年一月一日新年礼拝と午後二時の集會）から流れる懐かしい先生の声、「あなたがたは、

心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」。たびたび教えていただいたこの御言は、先生の遺言として忘れることはないと思います。

神様が私達一人ひとりに使命を与えて、生かしてくださいている。それならば、自分の思うままに生活するのではなく、神様の御心に従って歩くのが、人の本分である。また、神様はどういう御方であるのか、聖書にある神様を信じる信仰に立つこと、そして最も大いなるは、神様の御愛を深く悟り知ることである。一人子を賜ったほどの主の御愛を覚えて、その御前に自らを置き、常に自らを低くして、主に依り頼む日々を主は守ってください。何という幸いなことでしょう。

「今に至るこそ、主の恵みなれ」靈感賦二六番を賛美しながら、主にあつて先生に導かれた五四年間、様々な問題の多い中を通してまいりましたが、何と言つても、私が教会の傍に住まいを与えられたことは、最大のお恵みでした。

民間住宅か、公団住宅かと、少々焦り気味で迷っていた時、「長い目で見たら、公団の方がよいのではないですか」と答えられました。すぐ後で、また電話をかけてくださったのです。「電話をしたのは、あなたが人に気を使い過ぎるから心配になったからですよ。教会に近い方がよいと思います」と言われました。この一言で、本当に私の心のもやもやしていた全ては

消え去りました。一足違いで民間と契約して一か月分の手付けを払っていた直後に、公団から許可が来たからでしたが、もう何もかも白紙に戻し、ただ感謝して転居させていただくことができたのです。

「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」

(マタイ十六・二三)

今もこの御言に戒められたことがたびたびです。そして一人ですっかり主と共にある生活の幸いを深く味わいつつ、将来を待ち望んでおります。

いつ頃か覚えませんが、若かった頃の思い出を一言……。

戸畑区沢見の加藤雷典兄弟のお宅で木曜日の夜、家庭集会が始められました。榎本先生は八幡からバイクで来られましたが。集会が終わったら、しばらく雑談の後帰宅しますが、いつもバイクの後ろに乗せていただいたものです。沖台通りまで十分あまり、早く帰られるので非常に助かりましたが、冬の寒い時は大変でした。衣服の中まで刺し通る寒さを思い出します。

母や妹に幼い子供達を預けて出かけるので、やはり気を使いながらも、少々の無理を押し通して集会に励んでいた頃を、懐かしく思い起こす時、多くの助け人を主が備えてくださり、現実お世話になってきたものと、今更のように感謝いたし

ております。

先生も、こんなお若い時から五十年以上も、私達をご指導くださり、これからもなお、主と共にあつて励まし、教え導いてくださることを信じております。

先生、ありがとうございます。



榎本先生の思い出

大 口 和 子 (前田)

私は小学校に入学するために、小倉の延命寺から福岡の浜の町へ、城さんの奥様のお導きによりまして、浜の町の基督伝道館のすぐ近くへ引っ越ししました(徒歩三分位)。そこから日曜学校へずっと通わせていただきました。榎本先生は

男子クラスの受持で、集会のない時間は、頭にタオルをかぶってキリツとして、箒と打ち払いを持って甲斐甲斐しく掃除をなさっておられました。

折瀧先生の下に献身なさって居られましたので、その頃のお姿が目には浮かびまして忘れることができません。クリスマススの練習時等は、学校から帰ってすぐ教会に行きました。学校よりずっと楽しく通わせていただきました。当時は畳に座布団を榎本先生方がきれいに並べてくださいます、座って各集会が開かれておりました。私は早天にも母について出席いたしました、学友がちり紙でお人形を作ってくれますので、私も真似をして母からちり紙をもらって人形を作り、静かに遊んでおりました。終わって帰ります時、婦人会の方々が大人しいですねと言ってくださいるのが嬉しくてたまりませんでした。

榎本先生は折瀧牧師のお子さんのお守りもよくされていきました。榎本先生は神様と折瀧牧師によくよく仕えられたと思います。私は五年生の終りまで日曜学校に通わせていただきました。

それからは福岡盲学校に転校いたしましたので、近くのナザレン教会に属させていただきました。福岡盲学校を卒業後も、ナザレン教会に通っておりました。

私が二五歳にもなっていたでしょうが、三菱化成の社宅に住まわせていただくようになってから、前田教会の榎本牧師に十三年ぶりにお目にかかることができ、早速所属させていただきますまして、日曜礼拝に毎週出席させていただきました。

その頃はまだ会員も少なく、クリスマススの時、座布団を四角に並べまして、七輪に先生が火を起こして、それを会堂に持ってこられました、ぜんざいをこしらえて、みんなで美味しく戴きました。そして、私のオルガンに合わせて「神のお子のイエス様」の讃美歌を家族全員で歌ってくださいました。とても嬉しゅうございました。当時は両手で弾くことができて、それは私が昔伝道館で高取先生がオルガンを受け持つて弾いておられるのを聞きました、私も大人になったらあのように讃美歌を弾けるようになりたいと、小さい時から思っていた事を神様が叶えてくださいました。それで本当に感謝せざるを得ません。

今、両手では六曲しか覚えておりませんが、シロアム会を通して、最後まで右手でも全うさせていただきましたらと練習を続けております。讃美歌を弾きながら、この世を去って逝きたいと思っております。

結婚いたしましたからは、先生御夫妻に強引にマッサージさせていただきました、しよっちゅう牧師館にお邪魔させて

いただきまして、大変お世話になりました。私達を本当に愛をもって導いていただきました。お陰さまで、主人も教会に行くのを楽しみにしておりました。そして讚美歌を精一杯歌うと清々するといつも申しておりました。私が昔、職人生活をしていました頃、旅館や料亭などにマッサージに行く時等、どんなに心配して祈っていたでしょうか。正に第二のお父さんとして私の家族をわが子のように、祈り育み導いてくださいました。お陰様で今日の私があるのでございます。

先生が九十歳になられてのことですが、ある時、誰かお忘れましたが、不満を申しましたら、「分からのだからね」とおっしゃってくださいました。その後、私は例えばシロアム会の一人に対して不満がありましたも、先生のお声が「分からのだからね」と聞こえてくる様で、すっかり忘れる事ができました。本当に素晴らしいお言葉だと感謝しております。

それから、ある時お電話しましたら、聖書をしっかりと読んでくださいねと御遺言を戴きました。それで通読しております。四五〇五十頁でも一気に読むことができますようになり、途中でちよつと休憩をと思いましたが、止めることができず、食るように霊の糧を戴いています。午前中は二十頁位で止めておりましたけれど、天国で今も先生がつまらない私のために祈ってくださいるのだと思わずにはいられません。

神様が、ポインタという犬を大人しく休ませて、この証しを書き上げて下さったことを、心から感謝しております。

榎本先生の思い出

廣田千穂子（前田）

戦後間もない昭和二五年、新しい会社設立のメンバーに加わって、大阪から九州、八幡市へやってきました廣田は、大阪の高石教会のような元気な教会を、と探しておりました。

電車の窓から見える小さい教会、大きな看板の八幡前田教会の文字に元気がいっぱい感じましたのでしようか、前田教会へと導かれ、信仰生活を守っておりました。

私は、キリスト教のことは何も分からず、廣田と出会い、廣田を理解するにはキリスト教を知らねばと、小倉の鍛冶町教会の門を叩き、教会内に初めて迎え入れていただき、原先生をはじめ教会員の方々の暖かい雰囲気を感じ、日曜礼拝を待ち遠しく思う日々でした。その内、廣田との結婚のお話があり、前田教会で結婚式を挙げさせていただければと、二人で榎本先生にお願いに伺おうということになりました。

榎本先生に初めてお会いしたのは、昭和二七年の早春だったと思います。五十年近くも前のことで、記憶もだんだん遠くなっていますが、その時の牧師館の情景と榎本先生のその時に言われたお言葉は、鮮明に覚えております。私共は、それぞれ勤めを終え、夕方、牧師館をお尋ねしました。ちょうど夕飯時で、丸い食卓を子供さん達が囲まれ、百合子奥様はお世話をされていらつしやいました。

榎本先生、百合子奥様は、それは優しい笑顔で、「さあ、どうぞ、どうぞ」と迎えてくださいました。何もかも包み込んでくださるような先生のお顔に、かなり緊張して伺った私は、スツとその席へ入ることができました。

先生は私共の話を聞いてくださり、「この事が主の御旨に適うことか、祈っていきましよう」。信仰の浅い私は、これはどういうことだろうか、また廣田がたびたび祈っていますよ、祈りましよう、と口にするので、クリスチャンは何事でも祈るのだ、教会でのお祈りだけでなく、どんなことも祈って御旨を待ち望むことの大事さを教えられました。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」

(第一テサロニケ五・十六〜十八)

榎本先生は、「まず祈りましよう」、「祈っていますよ」と、心が弱った私に、何度声をかけていただいたことか。祈りつつ、一歩一歩歩ませていただく生涯へと導いてくださいましたことは、感謝でいっぱいでございます。



神には何でもできないことはない

貞 一 彦 (前田)

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい」

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変

ることがない」

憐れみ深き父なる神と救い主イエス様の恵みによりまして、前田教会に來ました。それ以來、福音に預かり、この人生を誤りなく導かれ行くことになりました。まことに榎本先生に巡り合うて、幸せ、ありがたく思います。

思えば、私如きは、「ふんぶんたる輕薄、數うるにあらん」と世の人は嫌い、卑しめてあり。あわや試練となるべきありき、でしたが、來る者拒まず。御二方は大いに親愛の情を寄せられ、時には身に余るお世話を戴きました。數々のご厚情有り難く、決して忘れてはなりません。

もうお二人にはお会いできませんが、その信仰に倣つて歩んでまいりますれば、会うことができます。神にはできないものはない。その御言は、このたびの御二方の告別式に参列いたしましたして、強く感じ入りました。

ここで語りは不健全と、非難があるでしょうが、諺に顔は心の指標とあります。どんな顔を作つても、目だけはごまかせないということです。榎本先生ご生前は、実に優しい目をしておられました。

またまた語りはおかしくなるようですが、以前、四福音書的慈愛に満ちた牧師と書いたくだりのある本を読んだことがあります。その時、いささか変な修辭の山盛りではないかと

思われましたが、全く主にある牧師、聖徒が持つ慈愛の総称では。なぜなら、主と同じ御姿に変えられるとあります。榎本先生は目をつぶつておられましたがお顔は輝いておられ、驚きました。詩篇に主を仰いで光を得るとあり、御国で太陽のように輝くと主の御言にあります。年の始めに百合子先生は眼を半ば開けられ、優しく、樂しげな風情さえ感じました。死を滅ぼした方にお会いしたのではないかと、思われました。生前の百合子先生は見るからに優しく、それは主にあつて、洗練された優しさでした。

早天祈禱会から榎本牧師を偲んで

中 村 栄 之 助 (前田)

七月一八日、この日の早天祈禱会の聖書箇所は、使徒行伝十四章九〜十五節でした。

バルナバとパウロの行なつたしるしと奇跡に対し、世の人々はパウロ達を神のように崇め、礼拝する。これは愚かな行為ですから、生ける神に立ち返りなさいと奨めている。人

の行なつた素晴らしい業を崇めることではなく、その背後に働いている神、天と地とその中の全てをお造りになつた、今日も生きて働いておられる神に立ち返りなさい。パウロを通して、神に立ち返りなさい。成長させて下さるのは神のみですと教えられました。

私は榎本牧師を通して信仰に導かれ、バプテスマを授けられました。

ある時、牧師館を訪問した時のことですが、女房(光恵)はいよいよ目が見えなくなり、現実を見て、落胆し、私の主人が頼りですと申し上げました時、先生のお話では、「主人を頼りにしてはいけません。神様だけを頼るのです。ご主人は死にます。今いても、やがてはいなくなるのです」と諭されました。

榎本牧師が召天されて、女房と話すのですが、「百合子先生も同じことを言われてきたのでしようね。寂しさは世間の方達と同様でしょうが、決して失望しない。望みは天の父なる神様でしょう。慰められる方はイエス様だね。涙を拭って下さるイエス様が、これからも最善をなして下さるから大丈夫だね」、「全てのこと相働いて益となる」と話しています。私達も先生ご夫妻の信仰にあやかりたいと願ひ、祈り求めております。

「わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬぎ、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」(第二テモテ四・七、八)との和義先生のお証と、先生の最後の御言、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ一四・一)を握り締めて、動かされることのない信仰生活を過ごしたいと祈っております。「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、私は動かされることはない。」(詩篇一六・八)

追 憶

河 本 信 生(前田)

十五、六年前の寒い日でした。ちよつとお願いがあります、夕食後、牧師館に来て欲しいと先生から電話です。気になつたので、食事もそこそこにお訪ねしました。

四方山話の後、実はね、紳士録に掲載しないかと売込みがあつて、一度頼んだけれど、思い直して取り消した、すると違約金として法外な請求をされ、今夜集金に来ると言うので

す、あなたに立ち会ってもらいたいとおっしゃる。支払うことはありません、断りましょうと、夜中まで待つていました。

宵の口に二度ほど訪問者がありました、別の用件でした。その後は音沙汰なしでした。今話題の振り込め詐欺のようなものだったのでしよう。名簿屋に引つかからないよう、これからは胡散(うさん)臭い奴には私が相手します、と申し上げました。ハイ、そうしてくださいと、先生。率直な純真なお方でした。

昭和十四年まで、両親に連れられて毎日曜日、福岡市中央区浜の町の伝道館に通いました。幼児にとつては、遠足気分です。

汽車に乗ると、アイスクリームを買ってもらえた。あのパニラ風味が懐かしい。帰りには、寿軒の駅弁が待つていた。豊かな物質文明の今の日本からは想像もできない贅沢だった。当時の八幡は、先生が遣わされる際に、先輩の牧師さんから、「八幡は人の住める所ではない。酔っ払った労働者、鉄粉で茶色になった人、粉炭で黒い人、裸で街路を彷徨する人、まるで荒野のような所だ」「燃える柴」―先生の手記から―と言われたそうです。けれども、住んでいる私には別に問題視するほどのこともなく、当たり前の日常でしたが、福岡はモダンで洗練された町で、憧れでした。

博多駅から市電です。呉服町で左に大きくカーブして、川端の玉屋デパートの前を通り、中洲、天神を過ぎる頃には、もう浮き浮き気分になっていました。伝道館で修養生として励んでおられた先生は、痩身、坊主頭。いつも姿勢正しく、きびきびした立居振る舞いで、謹厳実直を絵に描いたような青年でしたが、寄り付き難い雰囲気ではなく、温かい人柄が滲み出ている、憧憬を覚えていたものです。

礼拝の間は、折瀬先生の義ちゃん、和ちゃん達と遊びに夢中になっていて、気がついた時には、信者さんが帰ってしまつて誰も居なくなつていたことがあります。当時、精々四歳くらいだった。もう帰る時間だから、両親を懸命に探して、玄関脇で先生と野村先生にバツタリ出会いました。お二人から、「お父さんもお母さんも、もう帰ってしまったよ。あなたはここに置いて貰いなさいって言つていたよ」と、からかわれました。私はもう吃驚してしまいました。頭の中が真っ白になって、大声で泣き出しました。「汽車ト電車ニ、イッパイ乗ッテ来タンヤ。ドーシテ帰ルカ、道ガ分カランヤナイカ。オレ、捨テラレタンヤロカ」。止めたつて止まるもんじゃありません。お二人の周章狼狽振りが、なぜか今でも思い出されて、可笑しくなります。先生には、そんなお茶目な一面もありました。

大正町に住居を構えられて、八幡での伝道が始まりました。場所は八幡駅から東へ二百メートル、三号線と交差する手前くらいでした。河本の家からは凡そ一キロ離れていましたが、私一人ではしばしば遊びに行きました。先生はお祈りの合間に、相手になって遊んでくださった。屋上のバルコニーで日曜学校の歌を歌ったり、おやつを戴いたり……。屋上から見える鹿児島本線の線路越しには、製鉄所の大きな煙突が、モクモクと七色の煙を吐いていました。

先生が自宅から集会の通われる道すがら、白人や黒人の捕虜の一群と遭遇することがありました。収容所から製鉄所まで、作業するために行列を作って往復するのです。行列を指揮しながら列の外を歩いていたりリーダーの大男に、先生の方から話しかけられたことがあります。異国の言葉です。その人が丁寧な物腰で応答する様子を見て、すっかり感激してしまいました。

八幡においでになった次の年、先生は結婚なさいました。立証人は私の両親、結婚式は浜の町伝道館で行われました。

先生、きれいなお嫁さんで良かったですね。百合子先生は、若い時から優しい、美しい人でした。人の痛みを心から理解

し、受け止め、慰めてくださった稀有なお方でした。

昭和二十年八月の八幡大空襲で家は全焼してしまい、宗像郡東郷で生活することになりました。私は十歳になっていました。日本全体が最も窮乏しておった時期です。

アメリカ軍がやってきて、進駐軍と呼ばれていました。その圧倒的な物量と品質は羨望的でした。田圃の中を貫通して走っている往還と言っていた国道を長い車列をなし、威風あたりを払って走行する進駐軍、とても恰好良かった。

戦災後しばらく、福岡に仮寓しておられた先生が、その頃東郷に訪ねて来てくださいました。一緒に畦道を歩きながら教わったのが、米国歌、National Anthems America。

歌詞は、なるほどアメリカ、というものだけど、メロディは、オリンピックやMLBで演奏される「星条旗よ永遠なれ」ではなく、どういいうわけか英国国歌のものでした。

My country, tis of thee,

Sweet land of liberty, Of thee I sing:

Land where my fathers died,

Land of the Pilgrims, pride,

From every mountainside

Let freedom ring.

先生、何処から仕入れておいでになったのでしょうか？ま

るで前田教会のことを歌っているように、私には思えます。と言えば、牽強付会に過ぎるでしょうか。

浜の町伝道館の八年間、その修養生としての生活は、服従と忍耐の八年でもあったのではないのでしょうか。隠忍自重、刻苦勉強、まことに辛酸のうちに長い長い光陰をお過ごしになった。イエス様に信頼し、御言に従う以外、まるで先が見えないのですから（第二コリント五・七）

剛直なお方であるだけに、逆風もまた強かったことでしょう。ご自身に敵しい先生は、その中で信仰と克己とを具現なさった。

晩年の母が語ってくれた事柄をもう一つ。八幡に伝道館が置かれることになった際に、遣わされる器として、当初、先生は予定されてなかったそうです。その事を知った父は、即座に折瀬先生を訪問しました。辞を低くして翻意を促し、是非とも榎本先生に来ていただきたいと、熱心に、懸命にお願いしたのです。主の御心に適って、こうして八幡の地に福音がもたらされるようになりました。

主の御名を賛美いたします。

榎本先生との出会いと別れ

小 松 南 子（前田）

「わたしが世を去るべき時は来た。わたしは戦いをりつぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである」

（第二テモテ四・六〇八）

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい」（ヨハネ十四・一）

先生は最後の最後まで、命の燃え尽きるまで、信仰の奥義を私達に示して、神様の御許に帰って行かれました。長い間、私達を導き、信仰と愛と希望の足跡を遺して、神様の許へ帰って行かれました。

主の摂理によつて前田教会へ導かれ、榎本先生にお会いすることができましたことは、ただただ主の憐れみにより、恵みによるものと、深く深く感謝し致しております。

先生に初めてお会い致したのは、何も分からない、世間知らずの娘の時でした。講壇に立たれた先生は、威厳のある、近づき難い、お偉い先生だなあと感じておりましたが、神様の御愛と十字架の救いを力強くお話くださる時は、涙が

とめどなく流れて、先生のお優しさと愛の深さを感じ、父親を早く亡くした私には、お父さんとしての憧れを持っておりました。

四五年間の長い間、いろいろお世話になった思い出は、書き尽くすことができませんが、大好きな大好きな先生の最後のお別れができなかったことが残念で、つらいつらい思い出になってしまいました。この書面にて、お詫びと感謝を申し上げさせていたただきたいと思えます。

昨年の暮れから、旅行を兼ねて娘や孫に会いに行く計画を立てておりましたが、一月から先生が入退院を繰り返されておられましたので、一抹の不安もありましたが、先生は不死身だという思いがどこかにありましたので、……主の御旨なら旅行に行かせてくださいと、日々祈っておりました。

しかし、礼拝、聖餐式では、長い時間、力強く、整然としたお姿に驚かされながらも、心配と不安で、心痛む思いでございました。

先生の悲報を聞いたのは、九州を出発して五日目でした。伊豆を旅して、横浜の娘の所に夜着いた時でした。娘は私の連絡が取れず、神戸の娘と祈りながら頭を痛めていたそうです。先生の事は祈りながら旅をしておりましたが、お亡くなりになったことを聞かされると、もう頭がパニックになっ

ておりました。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」との御言が与えられ、「主よ、どうしたらよいでしょうか」と祈っておりました。

「エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなつた」。

「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである」。

御言によつて心静まることができ、主の導きを待つことができました。

主人や子供達と相談した結果、帰福しても時間に間に合うかどうか。またその足で東京へとんぼ返りをしないといけないこと、神戸の娘が会社を一日お休みを戴いて、日帰り出席させていただくので、お母さんはその所で、先生を偲んだらと慰めてくれますので、そのようにさせていただきました。

娘曰く、「お母さんが辛いこと、悲しいことはよく分かるけれど、全てが神様の手の内にあつて、神様の御心なのだから、お母さんが感謝しながら旅行を続けることが、先生も喜んでくれるのよ……」と、子供に力づけられて、旅行を続けさせていただきました。

しかし、帰りましてから、寂しさと申し訳ない気持で、落

ち込むばかりでした。

「肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである」。

「すべての道で主を認めよ」。

いろいろな御言で慰めを得るのですが、どうしても気持ちの整理ができず、先生のお遺骨とお写真でもと思い、思い切つて牧師館にお伺い致しました。

今までも何度か、こういう時、牧師館にお伺いして、先生にお話を祈つていただくと、主の御旨と確信して、喜びと感謝をもつて帰つておりました。

応接間に通され、一人で先生のお写真の前にお詫びと感謝のお礼を申し上げると、先生は写真の中で笑つておられました。「私が入院すれば泣き、退院すれば泣く。別れともなれば大声で泣かれるだろう。それでは困る。あなたが留守の間に、私は天国へ行きます」。

主も、先生も私の泣き虫を良くご存知で、信仰があるようでない私、肉によつて歩むのではなく、霊によつて歩むのですよ、宿題として残しておきますよ……と、笑つておられた。

先生、長い長い間、本当にありがとうございました。先生が残してくださった信仰の足跡を、私達も一歩一歩辿りながら、またお会いできる日を楽しみに致しております。

感謝

林 由記子(前田)

神様の深い一方的な御愛とご計画によつて前田教会に導かれ、信仰の弱い者をも、この所までお導きいただきましたことを、心から感謝いたします。

私は結婚を期に、前田教会で信仰生活を育んでいただきました。様々な歩みの中で、利三郎先生、百合子奥様の陰にあつてのお祈りと、お導きをいただきました。今振り返つてみて、しみじみと、何というお恵みだったか、感謝が溢れてまいります。先生方の歩みを通して、多くの事を教え諭していただきました。とても書き尽くすことはできませんが、心の中に強く残つていて、今も信仰を新しくしていただいている事を、感謝しつつ、お証しさせていただきます。

結婚して前田教会の礼拝、集会に出席させていただくようになり、最も教えられたことは、先生の神様に対する信仰とその姿勢でした。それは、いつも「御言に命をかけてきました」と、力強くおっしゃつておられたことです。尊いお証しを通して、お話していただきました。結婚して、いろいろと内にと外にと試みの中にあつた私は、集会に近づくたびに、どんな

に力が与えられ、励まされ、強めていただいたか分かりません。日々の歩みの中で、神様は懇ろに私自身の魂を整えてくださり、「御言に信頼すること」を訓練してくださいました。

ある時(当時は前田のアパートに住んでいましたが)、右にすべきか、左にすべきか分からなくて、先生にご相談に牧師館にお伺いした時のことです。丁度、義母が体調を壊していた時でした。もう一度実家へ帰るかどうか、私共は心の中では、「帰ろう」と思っていました。しかし、主の御旨が分からなくて、先生にご相談しました。私の考えは、神様も喜んでくださるに違いないと……。今思えば、肉の思い、考えが主となっていたのです……。

私共の話を聞いてくださった先生は、しばらく沈黙しておられ(お祈りされておられたと思いますが)、はつきりと「それは甘いですね」とおっしゃいました(それまでのいろいろな事の次第を、先生はご存知でした)。「帰ってきて欲しいと、まず神様の前に悔い改めなければ、今帰っても同じです」、また「神様は愛なる御方ですが、厳しい方でもあります」と教えていただきました。私自身、本当に神様は愛なる方、だから、この問題もきつと良い考え……と、思っていましたので、とてもショックでした。

「神に対する悔改めと、主イエスに対する信仰」(使徒行伝二

十・二一)の御言にありますように、まず神様の前にどうあるべきか、先生は論じてくださいました。この事は、生涯忘れることのできない奥義として、悟らせていただきました。この問題につきましましては、数年過ぎて、先生のおっしゃったとおり、主は最善の道へと導いてくださいました。ハレルヤ!

お祈りについて、忘れられない、教えていただいたことがあります。先生はよく、「私は伝道のためには、指一本動かしていない。家内と二人で、ただ神様にお祈りしていただけで、こんなにも多くの人を、あちらこちらから送ってください」と、感謝しておられたことも、「信頼して祈る時、主が働いてくださる」と励まされました。また、先生はよく「神様は時間、空間を越えて働いてくださる方」と話され、祈る時にいつもこのことが思い出されて、力を与えられ、平安を与えられ、希望を与えられています。

また、信者さんから、お電話で「祈ってください」と相談された時は、「僕は受話器を置いた後で、すぐに祈るようにしています。何かをしてからとなると、お祈りが後回しになってしまいますから」と、この事も、ついつい「後でお祈りしよう」となりがちな私に対して、すぐその時、その場で祈ることを教えていただきました。感謝です。

信仰について、最も思い出されるのは、「信仰は綱渡りのようなものです。サーカスとかで綱渡りする人は、ずっと先の一点を見て渡っています。しかし、足元を見たら、フラフラして渡れません。信仰も同じように、先の一点、イエス様だけを見つめていたら大丈夫です。足元ばかり見ていると、フラフラして動かされません」。このお話も、事ある毎に、どんなに励まされ、力を与えられたか分かりません。

先生方には、沢山のご心配もおかけしました。いつもお二人で信者さんのため、毎朝祷告を捧げてくださっておられたこと、その尊いお祈りのお陰で、ここまで支えられてきました。ありがとうございます。

教えていただきました数々のご指導を、心から感謝します。折に触れて、今も鮮やかに思い出され、信仰を新しくしていただいております。

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならなさい」(ヘブル十三・七)の御言のように、信仰の薄い者も、少しでもその歩みに習う者にしていただきたいと、お祈りしています。

百合子奥様には、いつもお優しい笑顔で接していただき、その笑顔にホッとさせていただきました。信者一人ひとりに

お心を掛けてくださって、先生の陰にあつて、その御用をなさっておられました。

奥様のその歩みと御用を通して、先生のよき助け人として、神様は素晴らしい器を備えられたことを、しみじみ教えていただきました。お二人で一直線に信仰に立つて、神様にお従いして行かれました。まことにその信仰の姿勢をはつきりと目の前に見せていただき、どんなに励まされ、希望を与えられたか分かりません。ありがとうございます。まだまだ沢山の事を教えていただきました。感謝しても、し尽くすことはできません。やがての再会を待ち望みつつ、私も置かれた所で、主の御言に立つてお従いしてまいります。

先生、奥様、本当にありがとうございました。感謝でいっぱいです。

榎本先生との出会い

正 野 眞 宏(前田)

柘植不知人師の伝記である「ペンテコステの前後」の序文に、バックストーン先生が「地上の教会に賜う神の最も良き賜物は、

聖靈に満たされたる牧師と教師であります」と寄せています。生涯で良き師と出会うことは幸いなことと思えます。なぜなら、人間は羊のように弱く迷いやすい者で、どういう人と出会うかによつて、人生が変わるものだからです。私も榎本先生との出会いがあつたからこそ、今の自分があると思えます。榎本先生との出会いは、ある意味で人生最大の出来事であり、神の導きと恵みであつたと、心から感謝しています。

榎本先生との出会いは、今から四三年前の昭和三四年七月、当時、両親がそれまでの商売に行き詰まり、新しく食堂を始め、そのため黒崎に引越してきたことによりです。それまで、私達は東郷教会へ行つていましたが、母は榎本先生の説教プリントを見て、感激したことがあつて、引越したら八幡前田教会へ行くこと決めていたようです。私は、教会はどこも同じという思いがあつて、近くの教会へ行つていましたが、母の話聞く内に、一度行つて見ようと出かけました。

説教を聴いて驚きました。それまで一度も聴いたことのないような力強さと神の臨在を感じたのです。まさに信仰は理屈や言葉の巧みさではなく、「霊と力との証明による」(第一コリント二・四)ものです。先生は神に対する罪を明らかにし、十字架による救いを明確に示してくださいました。それまでの私は、自分は信仰を持ってない者だと思つていましたが、文

字通り理屈抜きに信じさせてもらいました。先生を通して、御霊が私に迫つてくださったのです。そして昭和三六年、紫川上流で洗礼を受けました。

先生は、言葉よりも自ら神に従つて見本を見せてくださった方だと思います。先生の歩みの中で一番印象深いのが、戦後の苦しい生活状況にあつた時、会社の重役をしている旧友から技術者として助けて欲しい、給料はこれこれと当時としては喉から手が出そうな金額を示されたが、先生は、自分は神に召された者であるから、生活のためには働かない、神が養つてくださるときは断られたことです。信者の少ない当時の状況から見ても、牧会に差支えがなければ、働いても誰も文句を言う人はいないと思えますが、先生は講壇から神は生きておられると説教しながら、自分は姑息な方法を取ることはできないと、一点の妥協もなさらなかった。もしここで妥協していたら、その後の先生はなかつたと思います。命を神に捧げて従われたからこそ、先生の説教に力がありました。先生がいつも言われていたように、自分を実験台にして、主は信頼する者をはずかしめ給わない方であることをお証ししてくださいました。このようにして信仰を養われた私達は、実に幸いと言うよりほかにありません。

残された私達は、先生から与えられた信仰を一層働かせ、

一人でも多くの方にこの福音を証しすると共に、これを次の代まで伝えて行かなければならないと思っております。

榎本先生の思い出

正野百合子(前田)

私が前田教会に行くようになって、三七年になりました。

先生の説教には御言が次々と語られ、信仰とは御言に聞き従っていくことだと教えられました。クリスチャンとは、外見の優しいとか、柔和、良い行いなどが大切なことではなく、信じて歩く時に、後でイエス様に似るものとしてくださると教えられました。そして若い時に聖書を読みなさい、御言は覚えなくとも必要な時に思い出させてくださり、力を与えてくださいますと。

また全ての人には神様から使命が与えられていて、皆が同じ事をするように造られたのではないと。遣わされた所で主に
お従いするのは、主婦は家庭の健康管理という尊い仕事
なのですからねと。

榎本先生の生涯は、神様にお従いするとはこういうことで

すよと、模範を残してくださったように思います。すべてのことを祈って成され、病気になるけれどもそこで感謝され、回復されてからは、まだ使命があるのでしようと一生懸命の御用をされました。

平成十三年十二月二三日のキャロルに先生は体が弱っておられ、とても無理と思っておりましたが、参加されたので驚きました。アパートを訪問された時は階段の途中でハアハアときつそうで、もうこれで帰られると思いましたが、最後まで参加されました。

また平成十四年の新年聖会は最後の聖会になるかもしれないと言われ、ヨハネ十四章一節の「あなたがたは、心を騒がせないがよい、神を信じ、またわたしを信じなさい」と繰り返し説教されました。

最後の御用は三月三十一日のイースターの聖餐礼拝でした。命の限り御用をされ、四月十一日に召されました。最後のお別れの時の先生のお顔は輝いて威厳に満ちていました。これらのひとこまひとこまが、私の心に残っています。

私も先生の信仰に倣って歩んで生きたいと思っております。

告別式にて

尼 田 隆 己 (前田)

私は尼田隆己と申します。昭和三六年に榎本利三郎牧師のもとに受洗し約十五年間信仰生活を送り、五一年に神様の前を離れ、今日に至っていました。

この度、榎本牧師の告別式で、主に仕える人の生涯がどんなに真実と勝利に満ちたものか、はつきりと悟ることができました。後で示されたのですが、マラキ書三章十八節「その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者との区別を知るようになる」と有りましたが、全くその通りでした。私は告別式で自分のいる所と、先生を先頭に皆さんのいる所が違うことをはつきりと悟ることができました。それは本当に天と地のように離れ、主に従って歩む道は、いかに平安と真実に満ちているか、はつきり示されているのに、私は今の自分の道から戻ることができない。榎本牧師の信仰に倣い突き進んでいく決意の表明を、讚美歌三八〇番「立てよ、いざ立て 主のつわもの、見ずや、み旗のひるがえるを」と皆さんの主の戦士としての自信と決意の前に、一人取り残されて、罪にまみれ、神から遠く離れている惨めな自分、そして

一步も動く事のできない自分をどうする事もできませんでした。カメラのファインダー越しに皆さんと対峙していて、手を伸ばせば皆さんの肩に触れられる距離なのですが、本当にその距離の遠さを、寂しく感じました。

私は咲子さんと時々通りすぎりにお会いし、その度ごとに「教会に戻る様に」お誘いを受けていたのですが、その陰に榎本牧師の篤く長い祈りがあつた事をこの告別式で実感しました。また多くの兄弟姉妹が二六年間も離れていた私を、兄弟として何のこだわりもなく、自然に接してくれているのを見て、兄弟姉妹もまた長い祈りをもって支えてくださった事を理解しました。またそばに何時もいる家内についても、どんなに複雑な気持だっただろうと、取り返しのつかない気持で一杯です。またさらにその奥に有る神様の、一人子を十字架に付けて私を愛してくださった妬けるような思いも頭では分かっていのですが、神様との距離は遠いものでした。

榎本牧師の生涯を賭けての尊い教えと祈りを前にしても、なお神様に近づく事ができませんでした。和義牧師を通して「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と呼び掛けられている事も分かっている。いろいろ理屈を言わないで、自分を投げ出し神様の前にひれ伏せば、いつぱんに楽になる事は分かっているのに、それが

どうしてもできませんでした。

告別式の翌日、写真の整理と榎本家の人々に宛てた、今の心境の手紙を書き終え、十一時頃風呂に入っているいろいろ考えていた所、前夜式で正野眞宏兄が言った言葉が思い起こされました。それは「尼田さんと一緒に受洗した人は誰々で（榎本和義牧師・正野眞宏さん・正野隆士さん・正野悠子さん・伊規須富夫さん・旧姓小野道子さん・もう一人若くして召された方、永谷悦子さん）ここに沢山いるよね。そのうち感謝会でもないよね」という言葉でした。

神様の前に近づけなくてたまたまずんでいた私に、「突然」「何もしなくて良い。もう神の子として生まれ変わっているのだ。その名が記されているのだ」、今までの罪を悔い、茫然自失としている私に、「何を言っているのだ！私の子ではないか！これ以上何がいるのだ！」。

本当に天からの確信が一瞬にして与えられました。全く神様との距離が無くなり、一体となったと感じました。本当に感謝しました。今までにない深い確信と大きな喜びと感謝でした。アーメン

私達が神様の前に近づけるのは、全くの神様の一方的な恵みで、自分の努力や熱心で、信仰が持てているのではない事がはつきりと分かりました。功ない私を、こんなに年を取り

ポンコツになった自分を、神様は「自分の宝だ」とまでおっしゃって下さった。深い確信を与えて下さった。

今から後、主の導きに従って、利三郎牧師が生涯を通して示して下さいた道、神様の十字架の御愛と恵みに感謝し、押し出されて行く生涯を全うする事ができるように、自分の状態ではなく、御言によって歩んで行きたいと願っています。



榎本先生との想い出

三好 翠（前田）

私が榎本先生と出会いましたのは、四十年位前になります。三好の父に連れられて教会へ行き、真ん前の席に座り、説教を聞いておりました。

初めて先生と会話をしたのは、先生が「三好さんといつも一緒ですが、あなたは誰ですか？」と聞かれたのが最初です。それから、結婚式をさせていただき、父と日曜礼拝を守り、：でも、いろんな事情で私達は小倉へ。その後、主人の仕事の関係で関西へ転勤。大阪の社宅から奈良へと、忙しい時を過ごしていました。

主人と私は、相次いで手術をしました。そんな中で、榎本先生よりお手紙を戴いたので。ズーツと三好の家とごたつていましたので、先生が事情を知ったのでしよう、そういう内容の手紙で、皆で仲良くというような、先生の心の中に私達の事があつたなんて知りませんでしたので、びつくりしたというのが本心でした。でも、返事も書かずじまいでした。それから六年間の関西生活も終わり、また小倉へ転勤し、ここでの生活が始まりましたが、教会へと行くことはありませんでした。

数年が過ぎ、時折、三好の父から教会に誘われたのですが、頑なな私の気持は、足を運ぶことはありませんでした。でも、両親が年と共に気弱になり、娘ではなく、翠さんと暮らしたと言つてくださった時は、本当にうれしく思いました。

榎本先生が仲良くと言われた事が、やっと訪れたのです。神様は私達のことを、ズーツと待つていてくださったのです。

主のなさる事はこれだと、私は思いました。父が亡くなり、私達が榎本先生に相談した時、近くの教会を紹介しようと言われましたが、神様が示されたのは、前田教会でした。それから六年半、先生が「翠さん、話は分かれますか？時々教会へ来ても、分かりませんよ」とおっしゃいました。私は仕事をしていましたし、日曜日が休みの仕事ではありませんでしたので、始めは月一回くらいでした。

時々、先生が「翠さん、どうですか」と声をかけてくださった、あの優しさが思い出されます。特に忘れられないことは、主人への先生の言葉ですが、先生はご自分の時間が少なくなっているのが分かっていたのでしようか、「私の後に金生君が残りますので、これからもよろしくお願いします」という言葉でした。

会堂掃除の後の先生と過ごした時間は、私にとって大切なものです。最後に、納棺式に主人と出席させていただきました。先生の手にふれ、その暖かさが今も残っています。

先生に出会い、結婚式、受洗と、していただきました。先生に出会うことがなければ、今の私はなかったように思います。これも神様の示された道で、私のような小さき者を守り、支えてくださった神様に感謝しています。

「すくいの主を ほめたたえまつれ

みことばをもて わが身を励まし

悩みに 勝たしめ給う

みいつ たぐいなし」(讚美歌九番)

先生との出会い

石 田 秀 子 (前田)

先生との出会いは、折尾女子商業高校の時です。聖書の時間に教えていただき、また、日曜日は近くの教会に出席しなければならなかった関係で、八幡前田教会の第一礼拝に毎週行っていました。が、神様を信じる心はなく、学校を卒業と同時に、教会へ行くことはありませんでした。

二十年後、人生の様々な試練に遭い、また、鮮やかな罪を持つた罪人の頭であった私が、神様の不思議な摂理により、再び前田教会へと導かれました。

それから求道の道が開かれ、各集會に出席するようになりました。その頃の私は、どうして自分は生きているのか、これから後も生き続けなくてはいけないのか、分かりませんで

した。思い切って牧師館を訪問し、先生に導きを求めました。

先生は、聖書の創世記第一章を通して、神様がいらつしやること、その神様が天と地と、その中の全てのものを創造され、今も生きて働いておられ、万物を規則正しく運行なさっていること、神様はご自分の形に人を創られたこと、神様の命の霊を吹き入れてくださって人は生きた者となったこと、そして、神様が創られた全てのものを治めるようにと、人間を創ってくださったこと、それゆえ、自分が生きているのではなく、その人でしか果たすことができない神様の使命を与えられて生かされている、だから、人と比べることはいらない、一人ひとり果たす使命は異なることを、懇ろに教えてくださいました。その時、私は本当に死ななくてよかった、と心から思いました。

神様を信じ、主イエス様の十字架の贖いを信じさせていただき、御救いに預かり、全ての罪が許され、神の子供としてくださった御恩寵を、心から感謝します。

洗礼を与えられて二五年、様々な問題を通し、その度ごとに先生ご夫妻の懐に飛び込み、話を聞いていただき、御言を通して、信仰に導いていただき、お祈りをしていただきました。先生のご都合も、時間も顧みず、牧師館を訪問させていただいて、どんなにご迷惑をお掛けしたのか。どんな時で

も、愛をもって迎えてくださり、御愛と忍耐をもって導き、折っていただいたことを思い、感謝に耐えません。

月に一回「牧師館訪問」があり、初回からこの集會に集わせていただき、先生ご夫妻の神様に対する信仰のあり方、歩みを直接お聞きすることができた素晴らしい時が与えられました。この集會が待ち遠しくて、(いつも今日は早く帰ろうねと言うのですが)帰る時間を忘れるほど楽しい集會でした。先生ご夫妻の優しいお人柄と御愛にいつも触れて過ごしたひと時が、どんなに貴重な時であつたかを深く思い、温かいお交わりを戴いて、靈肉共に豊かに満たしていただいたあの時を思い出し、本当に良き時を過ごさせていただいたと感謝しています。

一九八四年九月二三日、鳥取信和教会の聖會の御用をなされた時、私は一つの問題があつて、主を求めて聖會へと導かれました。その時の御言は、

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ十 六・三三)

「世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」(第一ヨハネ五・五) でした。

夕方の集會の合間に時間がありましたので、鳥取砂丘に連れて行ってくださいました。その日は祭日で天気もよく、大

変な人出で車も渋滞して動きがとれず、このままでは集會に間に合うだろうかと、私は心配でハラハラドキドキ、料金のメーターは容赦なく上がり、時間は刻々と迫っているし、座席に腰を浮かすように乗っている私に対し、先生ご夫妻は、「大丈夫よ、神様がちゃんと時間通りに帰らせてくださるから、安心して乗っていなさい」と言われ、悠然と乗っておられました。先生が言われたとおり、運転手さんの機転で山越えしてくださり、きちつと時間通りに着き、滞りなく御用をなされたことを思い出します。先生ご夫妻の神様に対する揺るがない信頼に圧倒されました。私もその時、語られた御言を通し、信仰に立たせていただきました。

信仰と聖靈に満たされた先生が、命をかけて牧會なされた教會で、今も教會生活をさせていただけの幸いを心から感謝し、先生の信者一人ひとりに対する思いやりとその御愛、祈りをもって導いてくださった忍耐と慈しみを覚え、教え導いてくださった信仰のあり方、その歩みを忘れることなく、しっかりと持ち続けて行きたいと切に願っています。先生ご夫妻は、私の人生においての恩人であり、宝です。導いていただいたかけがえのない日々を思い、本当に幸せだったと、心からありがとうございますと感謝申し上げるのみです。

榎本先生、百合子先生の思い出

早 田 亨 子（前田）

私は昭和三十年、折尾女子商業高校に入学しました。そこで初めて榎本先生にお会いし、初めて聖書を聞き、讚美歌を歌いました。十五歳の時でした。不思議な方にお会いし、不思議なものを手に持っているという感じでした。

それからちようど五十年、神様の御愛と許しで、そして先生のお人柄に引かれて、長い信仰生活を続けることができました。感謝です。

一、二年生の間は、教会に行くことは授業を受けることだと考えていました。三年生になって、学校と教会の連絡係になりました。度々自分自身の悩みを聞いていただいたりしました。それから、土曜日の教会掃除は、今も忘れられないほど楽しいものでした。他の先生方ともお話でき、仲のよい友達もできました。先生は黙って見守ってくださいました。また、掃除が終わる頃、百合子先生が、そっとスイカやジュースを置いていってくださいました。それも楽しみの一つでした。

皿倉山のハイキング、子供のようにしゃぐ私を見て、先

生が「今永さん、一步一步ゆっくりと、同じ歩調で歩くのが良いのだよ」と言われました。その事はすっかり忘れていたと思っていたのですが、急いで走りすぎ、落胆している私の心に度々浮かんできて、叱ったり、慰めたりしてくれました。

ある日、絵が好きだった私に、「今永さん、聖書を絵に書いて見らんね」と、声を掛けてくださいました。「全部ですか」「そうだよ」と言って、紙代と絵の具代のお金を下さいました。私は家に帰って、二冊の聖書をバラバラとめくったり、手に乗せたりして、ため息をつきました。「死ぬまで書かなくっちゃ」と思ったものです。

「先生、蛇は人間のような姿をしていたのですか」「天使はどんな姿ですか」「塩の柱って、どんなものですか」「ノアの箱舟って、どんな形ですか」等等、私の質問に、先生のお答えはいつも同じでした。「お祈りをしなさい。神様が教えてくださいなさいよ」でした。私は家に帰り、お祈りして、頭に浮かんだことをすぐ迷わず絵にしました。

今はどうだろう。神様がなさること、言われることに、そして人に対してもブツブツ不平ばかり言っている。もう一度、「ハイ」と言ってみよう。先生が召される二年程前、聖会が終わって帰ろうとしている時、「早田さん、若い時の信仰に戻りなさい。今の君の信仰は間違っているよ」と言われました。私

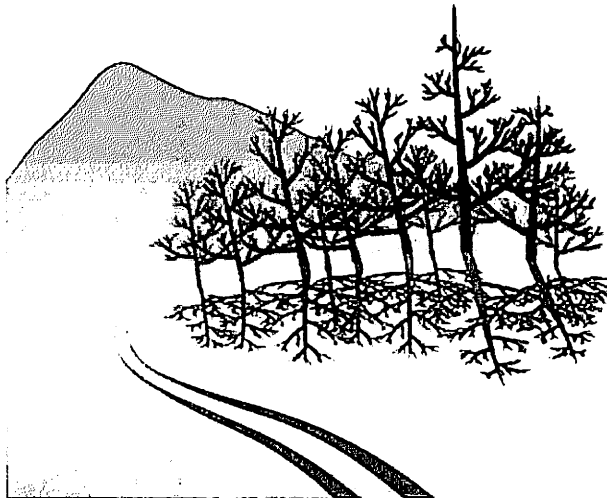
は例の通り、「だって、もう長い間お話ししたこともないのに」と、ブツブツ心の中で言っていました。しかし、帰りの電車の中で静かに考えていると、若い頃、何の迷いもなく、神様にお祈りして、「ハイ」とすぐ受け入れた頃と比べると、大変な違いだと気づきました。そして、この歳になっても心配してくださり、声を掛けてくださったことは、感謝以外に何もないことだと気づきました。

今六五歳になり、振り返ってみて、いろいろな苦労はあったのですが、神様がその度に助けてくださり、イエス様の優しさに触れ、幸せな生涯だったと思えるようになりました。先生が優しく、時に厳しく、神様を離れて幸せはないということ、学生の時から教え続けてくださったこと、大いに感謝しています。

結婚して、時々思い出したことを、それは百合子先生のこと。そつとおやつを置いていってくださったように、いつも先生の後ろにそつと立っておられて、ニコニコとしておられた姿でした。そして先生が私を見つけると、本当に心配そうに「どうしてたね」と言われる姿でした。

もつといろいろなことがありました。みな感謝ばかりです。それから同級生五人揃って、今も信仰生活を続けています。石田さん、植木さん、高橋さん、中原さん、私。神様のお導

きで、教会に行けばお会いできます。学生の時のように、皆が榎本先生を慕っておられたのも、長い信仰生活の一つの要因ではないかと思えます。ありがとうございました。



十一 母の生涯

榎 本 和 義

「神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう」

(詩篇三九篇十七節)

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ローマ十一章三三節)

二〇〇三年の元旦は穏やかな日中で、例年のごとく、新年礼拝に始まって新年聖会へと続きました。前月、旧年の年末はいろんな事が立て込んで慌ただしく過ぎてきただけに、主の恵みを受ける期待をもって新年聖会に臨みました。前年の一月二十八日に正野謙一夫妻の結婚式に招かれて、母も一緒に出席しました。その後、三十日に八幡前田教会で林磨璃子姉の葬儀があり、私が出かけて司式をしましたので、その時も、母に会い一年の感謝をしたのが最後となりました。夕食を一緒にしようかと誘われたのですが、私もクリスマスから行事が続いていたので、新年聖会も気になっていましたから、

聖会が終わったらゆっくり食事をしようと約束して、福岡へ戻りました。それから数日後に召されるとは夢にも思わなかったもので、一緒に食事をしてあげばよかったと悔やまれました。普段、あまり強く言わない母が、是非にと勧めたことを思い合わせると、なにか心に感じるものがあつたのではと推測されて残念な気がします。

三十一日の夜、電話があり、母と話をしました。その中で、新年礼拝に出られそうもないと言っていたので、無理をしないで牧師館のスピーカーでメッセージを聞きなさいと勧めました。しかし、礼拝が終わる頃、やはり着替えて会堂へ出てきたそうです。新年の記念写真に皆さんと一緒に写っています。

二日になり、聖会も二日目、午前の聖別会に備えていた時、九時四十分頃でしたか、同居していた孫の信子さんから電話があり、母の死を知りました。思いがけない事態にどうすればいいのか、戸惑いつつ祈り、とにかく聖会を中断できないので、午後の聖別会が終わる次第、八幡へ行くことにしました。話を聞くと、一日の夜おそく風呂に入りたいたいと言うことで、信子さんが見ておくから入るように言ったけれども、母は信子さんに先に風呂に入り、休むように言ったようです。母らしいと思います。母が風呂に入ったあと、信子さんは昼

間の疲れから、眠ってしまい、そのまま朝になり、母の寝室を覗くといいないので、風呂場に行くと言槽で亡くなっていたとのことでした。信子さんは大変ショックを受けてしまい、気の毒なことであつたと思います。以前にも、浴槽で失神する事があつたので、気をつけていたのですが、人の力ではどうしようもありません。神様がその時を備えられたのですから。電話で知らされたとき、「神のなされることは皆その時になつて美しい」との御言に励まされました。父なきあと、母ひとりになり、妹の家族が全面的に支援してくれていました。

午後の聖別会が終わるとすぐに八幡へ出かけました。母はすでに身繕いもおわり、居間に寝かせていました。その顔は苦しみもなく、安らかで、しわも伸びて幾分若やいだ感じがしました。お祈りをして、その後のことについて大まかに決めました。三日の夜に前夜式、四日に告別式をすることとしました。兄や弟の到着を待つて、納棺式をするように金生先生にお願いして、夜の聖別会のために一旦福岡へ戻りました。その夜はいろいろなことが思い出されて、よく眠れませんでした。

三日は聖会最終日ですから、午前と午後の聖別会だけにし、夜の聖別会を取りやめにしました。その後、前夜式、告

別式と続きましたが、詳細は省略いたします。振り返ってみますと、二〇〇二年四月に父を亡くして、ずいぶん寂しい思いをしていたのだらうと思います。夏を過ぎた頃から、微熱が続くようになりました。殊に夕方から発熱するようでした。何度か病院でも各種の検査を受けましたが、原因が分からず、本人も気にしていません。今から思うと、精神的なもので、鬱状態による発熱だつたのではないかと思えます。母の弟妹が訪ねてくれると、楽しくて発熱もありません。あれこれと思ひ考えると、もう少しなんとかできなかったかと悔やんでしまいますが、それは人間の思うところであつて、神様は最善なことをしてくださつたのだと感謝するだけです。他人の手を煩わせないで、すつと天に召されたいと願つていたとおりました。寝たきりになつて、下の世話を受けるなど、耐えられなかつただらうと思ひます。

ここで母の生い立ちを振り返つておきます。母は大正四年七月七日に、父は末永二六、母はリエの長女として、長崎市の県立長崎病院で出生しています。郷里は長崎県五島列島にある上五島、浜の浦という漁業を中心とした村里です。母リエは父二六の後妻として結婚し、長女百合子を出産しました。そのとき父は、はや五十代になつていたようですから、大変

可愛がつてくれました。父、末永二六の家系は代々松浦藩の代官として、浜の浦村に任官していた武家でした。明治になり廃藩置県などによって職を失い、分家筋にあたる末永二六も雑貨商を営んだり、田畑の小作料や牛を飼うなどして生計をたてていました。最初に結婚した妻ナツには子供がなく、やがて病死して、後添えとしてリエと結婚しました。二六には弟、壽と夭逝した妹とがいました。弟の末永壽は早くに郷里を出て、福岡に来て苦勞を重ね、やがて成功し、博多駅の弁当屋「寿軒」を開業しました。二六は百合子の他に二男一女を得て後、体を弱くして、長年寝たり起きたりの状態で過ごし、やがて昭和七年九月に他界しました。



父：末永二六

母リエは浜の浦から東南に数キロ離れた佐野原郷の出身で、旧姓も末永でした。リエの父は末永唯然、母はマキと言

い、父は浜の浦の円福寺に生まれ、浄土真宗の仏門にあり、言うならば開拓伝道者として佐野原という山里に定住したようです。後に、唯然亡き後、一家は長崎市へ移住することになります。母は祖母のマキに大層可愛がられて、幼児期には佐野原にたびたび泊まりがけで出かけて、楽しい時を過ごしました。晩年、私が両親を連れて郷里の浜の浦を訪ねたときも、是非、佐野原にも行きたいと言っているので、車で連れて行きました。今では知っている人もいない所へ出かけて、懐かしく往時を偲んでいました。母は小学四年生のころ、長崎に移り住んだ母親の弟、末永正雄一家を頼って長崎に生まれました。そこで小学校を終え、長崎市立女学校へ進みました。



母：末永リエ

父親が亡くなり、母親が女手一つで四人の子供を養育する

のは大変だったと思います。残された遺産や小作料、預けて飼育してもらった数頭の牛を売りながらの生活でした。母に続いて、弟の順亮も長崎に出て学校へ通うことになりました。彼は叔父の家ではなく、近くに下宿していました。福岡にて成功していた弟、壽は雲仙に旅行しており、叔母と一緒に、長崎まで足をのばして、わざわざ母が世話になっていた母方の叔父、正雄を訪ねています。長崎で小学校を終わり、県立女学校へ進みましたが、福岡に出てくることになりません。壽叔父叔母の世話になり、福岡女学院へ入学しました。



女学生時代

しかし、一年ほどして、叔父夫婦は将来のことを考えて、技術を身につけさせるために川嶋裁縫女学校へ転校させます。当時、この学校は和裁の勉強ばかりではなく、女性としての身だしなみなど、躰けも厳しく、評判のよい学校だったよう

です。福岡に出てきてからは、叔父叔母の住む西公園下にあった屋敷に寄宿していました。叔父は昭和四年三月に召されましたが、叔母は昭和三年に召されるまで信仰生涯を全うされました。

ここで福岡の叔父叔母について触れておきたいと思えます。雪叔母は十八歳で末永壽と結婚します。叔母は姉の猪城ふじに誘われてメソヂスト教会へ通うようになり、三二歳のとき、ふじ姉と一緒に洗礼を受けています。叔父はキリスト教には縁がなく、叔母が信仰を持つように勧めても躊躇していたようです。しかし、やがて叔父もキリストを信じる者となります。叔父の入信について、叔母が書き残したものを引用しておきます。

「信仰に入りましたのは、明治三三年頃でありました。(私は先に導かれていました)。末永家は旧藩時代に代官をつとめていまして、キリスト信者を(旧教徒)庭先に引き出して、裁判をいたします有様を幼な心に見せつけられて居りました為、よい教えと解つても信ずる気には成れなかつたようでした。ある日、夢の中で『何時まで二つの間に迷うのか』と神の御声の如くひびきました由、その時より断然決心をさせ

て頂きました。洗礼は一応兄（注…末永二六のこと）に話した上でと、帰郷を思い立っておりました矢先、兄の来訪を受けて堅い決心の程をあらわして語りました為か、別に止める事をいたしませんでした。日曜日を待ち兼ねて、福岡メソヂスト教会にて故川瀬牧師の司式の下、洗礼を受けました。無限の御愛をもって此処までお導き下さいました御恩寵を新しく思い起こして、感謝の念で心一杯でございます。

（末永壽記念誌「父の思い出」より）



叔父：末永 壽(二六の弟)

この後、叔父夫妻は熱心にして敬虔なキリスト信者としての生活が始まりました。やがて、自分の屋敷を提供して「浜の町基督教伝道館」（現在の福岡大濠公園教会）を始めることに

なり、折瀧鶴治郎牧師が招かれたのです。福岡へ出てきてからの母は、叔父夫妻に大変大きな影響を受けました。殊に、雪叔母を尊敬していました。母を福岡へ呼び寄せたのも、なんとかイエス様の救いを得させたいと願ったからだと思いません。叔父夫婦には十人の子供が与えられ、それぞれを信仰に基づいて養育し、その中の一人であった末永弘海師は姫路福音教会で牧会伝道者として生涯を全うしました。その他にも、幾人かの娘達は牧師夫人となりました。中でも、母が身近に感じていた牧師夫人は従姉の竹田照子（竹田羔一牧師夫人）でした。父との結婚の話が出たとき、しばらくの間、神戸の竹田家に滞在して、牧師夫人としての心構えなどを見聞きましたようです。

壽叔父の長男、敏毅は生まれてから暫く末永二六の養子となつた時期があります。そのため、後に生まれた母やその弟妹を自分の家族のように思っていたようです。それ故に、壽叔父の亡くなったのち、家督を継いだ敏毅は、二六の子供達を援助しようと思ったのでしよう。母の弟、順亮も福岡に出てきて、商業学校へ進学することになります。母の信仰は女学校時代に伝道館で養われたものです。女学校を終えた母は、郷里に残っている母親や弟妹のもとに戻って、村の小学校で

代用教員として働くことになりました。それはまた信仰生活から離れることでもあったのです。しかし、若い母は二年間の短い勤めではありましたが、生涯忘れられない楽しい思い出ともなりました。その当時のことを思い出して繰り返し話していました。戦後、郷里に疎開していたとき、かつての教え子達が漁師となり、食糧難の中でずいぶん助けられたとのことです。

やがて郷里で結婚の話が持ち上がり、具体的に話が進み始めたようです。そのとき、母は福岡での信仰生活を思い起こして、郷里で結婚して生涯を終わることが不安になり、福岡の叔母に相談し、結婚話を中断して福岡へ戻ってくるのです。これは母にとって、生涯を左右する大きな決断だったと思います。雪叔母に結婚するなら信者の人を望んでいることを伝えたととき、その為に祈りましょうと、叔母から励まされました。郷里にいた母親と弟妹は、自宅を人に貸し、田畑を小作に任せ、福岡へ出てくることになりました。魚の町にあった末永家の借家に住むようになり、母も久しぶりに家族と一緒に生活をしました。母は末永家で家事見習い、また繁忙期の駅弁「寿軒」で仕事を手伝うなどしていました。

父との結婚についても、実際の伝道者の生活ぶりが分から

なかつたので、不安があつたようです。このときも、雪叔母が良き助言者となつて母の決断を助けてくれました。



結婚前

すでに単身で八幡に遣わされていた父と、昭和十四年十一月に、河本小太郎夫妻の介添えで結婚式を伝道館にて行いました。結婚式を終えて、すぐに八幡へ出てきて、当時大正町と言われた所に用意された新居に入り、結婚生活がスタートしたのです。時代は太平洋戦争へと進んでいきます。そんな中で、昭和十六年に兄が誕生し、翌十七年に私が生まれ、一年置いて昭和十九年に妹が生まれていますから、まさに戦争の只中での子育てだったのです。福岡に母親や兄弟がいましたので、手助けを受けることができました。八幡の空襲によ

って焼け出され、福岡の城西橋の近くにあった末永の借家に移りました。しかし、そこもやがて福岡の大空襲にあい、遂に母親や弟妹と共に五島の郷里、浜の浦へ戻ることになりました。父は一人で西南女学院の宿舎(望みが丘)に残って、礼拝や家庭集会を続けていました。

戦後の混乱した社会も少し落ち着き始めた頃、母と子供達は父の居る宿舎に戻ってきました。昭和二年九月に前田町(旧長者町)に会堂と牧師館が与えられるまでですから、そんなに長くではなかったと思います。戦災によって焼け野原と化した八幡の町に新築の教会が建てられたことは、神様の業というほかありません。表通りを路面電車が走っていましたので、多くの人の目に留まったことと思います。その後、昭和二年に三男豊が生後六ヶ月で自家中毒のために亡くなりました。母にとつては大変ショックでした。殊に父の神癒の信仰について行けず、自分が死なせてしまったとの自責の念が長く続きました。しかも、昭和二年の十一月に生まれた四男恵は生後僅か一三日で、先天性腸閉塞で天国に召されたのです。立て続けに二人の子を失って、「神様は何をなさるのだろうか、どうしてこんな目に会うのか、私が悪かった」と、悶々と悩む日々が続きました。その為からでしょうか、体調

を崩しやすくなり、休みがちな生活になりました。昭和二六年三月に五男誠さんが生まれましたが、幼少の頃は病弱だったので、母は大変心配して心休まるときがありませんでした。



誠さんを抱いて

しかし、誠さんが幼稚園に通い始めた頃から、少しずつ気持ちも晴れて、元気づいてきました。この間、神様は不思議なことに母の助け手を送って下さいました。池田操姉(広瀬)、大口和子姉(筑山)、伊規須泰子姉(東)など、いろんな方々が泊まり込んだり、通ってきたりして、家事・洗濯・掃除などを手伝ってくれました。子供達も大変お世話になったものです。この当時の母の写真をみると、とてもやつれて、沈んだ表情をしています。情緒不安定な時期もあり、ニュースで幼児や

子供の死、虐待などを聞くと、涙を流して悲しんでいた様子を覚えています。今、振り返ると、それは辛いことでしたが、母の信仰が目先の御利益を求める姿勢から、人の思う善し悪しを越えて、万物を御心の儘に導かれる主を信頼する信仰へと導かれたのです。また、この後、子供達が高校入試から大学入試、卒業、就職など、様々な問題を通る時、力となるべき信仰を堅くするための試練だったのです。

子供達がそれぞれ成長し、中学・高校へと進んできました。それに伴い、さまざまな問題も抱えてきます。ことに兄と私とが一年違いですから、大学進学が続きます。順調に進んでくれればいいのですが、何年かの足踏み、また経済的な不足など、心労が絶えなかつたと思います。昭和三五年頃から、少しずつ元氣になってきました。過去を引きずっているわけにはいかない、差し迫った現実の問題が目の前にあつたのですから。この頃は、自分の子供だけではなく、献身者や他の方々のお世話もあつて、忙しくなりました。最初に東俊郎兄、続いて調悠子姉、伊規須太郎兄など、その他に姪の末永亮子さんを郷里の五島から預かるなど、牧会者としての母の役割が大きくなりました。この頃は、どうにも祈らなければおれない事態が次々とありましたので、父と母は一緒にいつも祈

っていました。誠さんが大学に入学して一区切りが過ぎましたが、次はそれぞれの結婚が控えていました。子供達は結婚して家庭を持つようになりましたが、子供に代わつて新しい御用が与えられました。昭和四二年から福岡大濠公園教会との兼牧をする事になったのです。その為、毎週火曜日は朝から出かけて、午後の集会和夜の集会が終わり、夜十時過ぎに八幡へ戻ってくる生活です。その他にも、月に二回の礼拝、婦人会や訪問など、いつも父と一緒に行動する生活になっていきました。車はありませんから、列車に遅れないよう走つて八幡駅に向かうこともありました。幸い、母は乗り物で眠ることができましたので、博多までの列車の往復は休憩時間だったようです。このような多忙な生活が二四年間続きました。そのような忙しい中であつて、母の楽しみは大田邦子姉のお宅で開いてくださる洋裁教室に出かけることでした。時間がなく、思うように作品ができませんが、それでもやり始めると止まりません。父がもうその辺で止めなさいとよく言つたものです。決して上手にはできなくても、若い時にやつたことを思い出して楽しんでいたのでしょう。

昭和四九年に新しい牧師館が完成し、快適な住まいが与えられて大変感謝していました。牧師館の建築から、新会堂の

建築と続きました。大勢の人たちに炊き出しをして、賄うのは大変だったと思いますが、つぶやくこともなく、また、神様は元氣を与えてくださって、弱って休むことなく頑張っていた姿を思い出します。振り返ってみると、この頃の母は人生で一番充実したときではなかったかと思えます。昭和五二年に、私がアメリカに留学しましたので、これを機会に翌年、両親が初めてアメリカに来ることになりました。サンフランシスコ経由でシカゴの空港に夕方到着しました。乗り継ぎなど心配しましたが、元氣にゲートを出てくる二人を見て、安心したことを思い出します。母は大胆で、物怖じしないところがあります。英語が通じるかどうかなど気にしません。もっぱら日本語と笑顔でやっつのけます。四人でポストン、ニューヨーク、ワシントンと回り、カナダのトロントに李文珠(文江)姉一家と鈴木道成兄姉一家を訪問して、一緒にナイアガラの滝を見に行きました。その時、鈴木姉がおにぎりとお漬物の塩焼きを持って来て下さって、滝を見ながら食事したことが忘れられません。母はしばしばその話をしていました。このアメリカ旅行は大変印象深く、残された日記にも克明に書き留めています。

アメリカ旅行に触発されたのか、是非ヨーロッパも見たいと願っていました。ことに、父は西洋の文明に直接接してみ

たいと願っていましたが、なかなか時間が取れません。私が帰国してから、積極的に勧めました。その結果、昭和五五年九月にイギリス、フランス、イタリア、スイスなどを回るツアーに参加しました。これも両親にとって、神様からの大きなプレゼントだったと思えます。この時をはずしては旅行できなかつたでしょう。昭和五九年には福岡大濠公園教会の新改築に取りかかることになりました。九月から工事が始まりましたが、十月に父が最初の肺炎のため入院する羽目になりました。このとき、父は礼拝の最中に気分が悪くなり、発熱と嘔吐で説教が中断するほどでした。ところが、母は孫の運動会で出かけて留守だったため、呼び戻すのに一騒動だったそうです。母は情に脆く、子供や孫が喜ぶならと、自分を犠牲にする人でした。この日も孫が喜ぶからと出かけたのです。後日、思い出しては笑い話にしていました。十一月に父が退院して来ましたので、私は大学の学園祭の休みを利用して、父を見舞いにきました。そのとき、帰り際に、自分は九州へ戻ることもないだろうから、二人仲良く老後を過ごして欲しいという意味のことを言い残して名古屋へ戻りました。ところが、神様のなさることは、人には分からないものです。一ヶ月ほどして、十二月の末には主に大きな御愛をもって迫られ、お正月が過ぎた時には、生涯を神様に献げ、献身者とし

ていただく決断に導かれました。これは両親にとっても、喜びではありましようが、それ以上に驚きだったと思います。母は、私が父の病気に同情して、そのような決心をしたのではないかと、大変心配していました。何度も、お父さんのためにだったら、そんなにしなくて良いのよと、言っていたのを思い出します。

昭和六十年三月に、私は福岡へ遣わされました。それから、少しずつ、両親の福岡通いも減少して、母も時間的にゆとりが出たように思われましたが、神様は大きな次の御用を備えておられたのです。

昭和六一年の年末、父は肺炎を起こして、三菱化学病院へ入院しました。高熱が続いて、大変苦しい状況でした。母は毎日病院に出かけて、看病をしましたが、母は余り上手く病人の看護することができません。父が苦しくて動けないとき、食事の補助をしようとすると、父は私や兄にさせようとするので、母は気分を害して、やっぱり血は汚いよなどと言っていました。私も子供の頃、よく病気をしましたが、母が看病するより、父にしてもらったほうが安心だったことを思い出します。母は相手が望むようにするより、自分がいいと思うことをする方でしたから。二月半ばに退院しました。母も大変喜んでいました。その後、四月に水村光義兄が献身して、

修養生となり、教会に生活するようになりました。しかし、この事は母にとって大変負担だったようです。まず年齢が開きすぎました。両親は七十代後半でしたから、祖父母と孫のような関係で、叱ることもできず、と言って、言うべきこと、教えるべきことは伝えなければと思いつつ、伝わらない世代の違いを実感したようです。父も二度の肺炎を通して、弱さを覚えるようになり、以前のように、しっかりと指導できなかったのです。母は食事の好みも、若い人とは違うことをしみじみ語っていました。母は、これから登ろうとする人と、下り坂を半分以上おりてしまった者が一緒に生活するのは無理だったとも言っていました。

一九九一年の新年はいつものように新年聖会で始まりました。この年は子供達全員が揃って聖会に出ていました。孫達も交えて新年の記念写真をとりました。今振り返ると、このとき母は元氣のない様子だったと思います。聖会が終わり、疲れが出て、マッサージを受けに、整体院に治療を受けに行ったりしていました。あとで聞いたことでしたが、その頃、お風呂に入ろうとして、片足が上がらなくて困ったなどと述懐しています。恐らく脳梗塞の前兆だったのでしょう。一月十日の夕方おそく、母が倒れたとの知らせがありました。萩

原中央病院へ救急で入院しました。私が駆けつけると、本人は情況が飲み込めないようで、すぐにも家に帰れると思ったようです。しかし、事態はそんなに簡単ではなく、左側の麻痺が少しずつ進行していました。幸い、治療を早く受けたので、重度の障害にはなりませんでした。数日して、病状が安定してきましたら、さっそくリハビリが始まりました。兄は仕事の合間を見つけて、母を見舞い、リハビリの手助けをしました。それは大変役に立ったと思います。ベッドから起きることが出来るようになり、車椅子、また歩行器で歩けるようになり、少しずつ快復に向かいましたが、時には焦る思い、また見える状態で失望するなど、気持ちの変化は大きくて、本人もイライラした時もありました。母が入院中、父が肺炎を起こし、同じ病院で二人とも入院する時期もありました。そのとき、母は喜んで父の病室を訪ねて、おしゃべりを楽しんでいました。父は三週間で先に退院しました。母はさらにリハビリを続けて、三月八日、二ヶ月の入院生活を終わり、退院しました。退院に備えて、浴室を改装し段差をなくし、手すりをつけ、また、二階へ昇り下りするため、昇降機も設置しました。これによって大変助かったようです。家庭に戻っても、すぐには思うように動けません。随分もどかしい思いがしたでしょう。父が全面的に生活支援をするようにな

りました。それに伴い、福岡の教会の御用は全面的に私が引き受けることになりました。幸いに、津留崎姉が週に何日か、お手伝いして下さって大変助かりました。また、妹の一家、咲子さんや子供達が毎日来てくれて、母の介助をしてくれました。

こうして、これまで長く馴染んでいた生活習慣が、短期間に変わってしまいました。新しい情況を受け入れ、慣れるまでに不自由なことが多かったので、母は決してつぶやかず、嘆かず、前向きに取り組んでくれました。自分で出来ないことが多くなりましたが、むしろ出来ることを見つけては喜んでいました。長い間、家族やいろんな人々を世話することを喜びとして生きてきましたが、これからは人から援助を受け、世話を焼いてもらう立場になったのです。この事は、母の信仰をさらに深めてくれました。御心のままにと、主に委ねなければなりません。自分の手足で自由にやれないのですから。「ありがとう」「感謝だね」という言葉が絶えませんでした。父は母を不憫に思ったのか、母の片腕、片足となつて、片時も母から離れず、全力を尽くしていました。しかし、父も高齢化して、頑張りがきかなくなり、肺炎をおこして何度入退院を繰り返しました。

母の故郷を思う感情は生涯消えることがありませんでした。一九九六年四月に、私と家内とで、母の郷里、五島に行ってみようと計画しました。それを聞いた母は、自分も是非行きたいが、足が不自由だから、無理だねと諦めていました。四月二四日の夜中に博多埠頭から出るフェリーで車と一緒に出かけることにしていました。その日、お昼過ぎに電話して、今夜から五島へ行くてくるからと話したら、母はどうしても行きたいと言います。それなら、今から福岡まで車で送ってもらって出てきたら、一緒にフェリーで行こうと誘いました。父が母一人で遺ることを許さないのではないかと思いましたが、母はさつそく用意して、夕方、福岡へきました。それで二泊三日の五島旅行が実現したのです。今考えると、母も私たちと同じ二等船室にごろ寝させての夜行便で気の毒だったと思います。どうして、母だけでもベッドのある船室へ移してやらなかったのかと残念です。しかし、母は嬉々としてこの旅を楽しみました。船が途中で寄港するたびに、乗客の乗り降り、話し言葉を見聞きしながら、「懐かしい、懐かしい」を連発していました。車を持ち込んでの旅行でしたから、母の行きたいところへ連れて行くことができました。郷里、浜の浦は勿論、その他、母の思い出の地を訪ねて大変楽しい旅でした。私にとってもこの旅行は母との楽しい旅の思

い出です。帰宅後、父に楽しい旅の話聞かせたようで、翌年一九九七年五月二日から二四日まで、再度、父と母を連れて五島旅行をしました。このとき、母はもうこれで満足したから、もう来ることはないと言っていました。子供の頃の楽しい思い出と、早くに郷里を出てしまったことから、格別郷愁に駆られたものと思います。

母は脳梗塞を患ってから、快復し、一度、带状疱疹で短期入院しましたが、それ以外に召されるまでこれと言つて大病もせずには守られました。しかし、身体の麻痺、ことに足の麻痺はゆっくりではありますが、進行してしまいました。そのため外出も躊躇するようになりましたが、なんとか現状を維持しようと、散歩に心がけていました。

二〇〇二年四月八日朝、母は父の話しぶりが普段と違うことに気づきました。ろれつが回らない状態だったようです。すぐに病院へ電話して、金生先生に送ってもらい入院しました。その時、玄関口に出てきた母に、父がもうこれで会えないかもしれないので、手を差し出して握手しようとしたそうです。母は、そんなことを言つてと、敢えて手を出さなかつたのです。まさか三日後に召されるとは思わなかつたからです。後になって、母は少し悔やんでいました。しかし、父

が最後まで現役の伝道者として、その年のイースター礼拝と聖餐式も執り行つて召されたことを大変感謝していました。父が召されてから、母が淋しいだろうと、父の遺品はすべて生前のままにしておきました。時折、まだ父は入院していて、そのうち帰ってくるような気がすると言っていました。

結婚に際して与えられた御言は「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」という、ヘブル人への手紙十章三八節でした。母の生涯をこうして振り返って見るとき、神様の憐れみによつて、信仰に生かされた年月でした。また、母が通つた道は、信仰なくして歩めませんでした。失望しそうなとき、力をなくして萎れたとき、この御言に励まされ、慰められて、主を見上げて生きたのです。

晩年、大病をしてから、母は神様の御愛と恵みを日々深く味わうようになりました。繰り返し語つた御言があります。哀歌三章二二〜二三節です。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」。

文語訳によると、「われらの尚ほろびざるはエホバの仁愛

(いつくしみ)によりその憐憫(あわれみ)の盡ざるに因る。これは朝ごとに新なり なんぢの誠實(まこと)はおほいなるかな」となっています。死ぬかと思われた大病をとおして、今、生かされているのは、只、主の恵みと御愛によることを、祈りうちに覚えて、感謝しつつ生きたのです。神様に導かれ、イエス様の贖いによつて救われ、聖霊の力に支えられて、七年と五ヶ月の生涯を全うしました。



召される前日、皆さんと記念撮影

十二 榎本百合子師前夜式

日時 二〇〇三年一月三日（金）午後七時

場所 基督伝道隊 八幡前田教会

司式者 基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

一 前奏

二 讚美歌 五二七番 一同

三 聖書 ヨハネの黙示録七章十三く十七節

司式者

「長老たちのひとり、わたしにむかつて言った、『この白い衣を身にまといている人々は、だれか。また、どこからきたのか』。わたしは彼に答えた、『わたしの主よ、それはあなたがご存じです』。すると、彼はわたしに言った、『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであつて、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張つて共に住まわれるであらう。彼らは、もはや飢えることがなく、か

わくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となつて、いのちの水の泉に導いて下さるであらう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとおつて下さるであらう』」。

四 祈禱

司式者

愛する天のお父様、あなたの豊かな御愛とあなたの恵みを覚えて、心から感謝いたします。あなたが愛して下さった榎本百合子をこの地上に命を与え、ご慈愛をもつてその生涯を導き、八七年と六ヶ月の旅路を終えて、あなたの御許に召していただきました。あなたの備えてくださった数多くの御愛と恵みを覚えて心から感謝申し上げます。

あなたは、姉妹のうちにあなたの霊を与え、あなたの御救いに預からしめ、尊いひとり子イエス・キリストのいさおしによつて、あなたの子供とし、あなたの民として顧みていただき、懇ろにお導きいただきましたことを心から感謝いたします。地上にありしとき、さまざまな困難、艱難、悩み、悲しみを通りましたが、あなたはいつくしみを注ぎ、恵みを与え、力と命にあずかせて今日まで導いてくださいました。今一度思い起こして心から感謝いたします。

今、あなたの御懷にその魂を受けてくださつて、永遠に住

まいに入れて下さったことを信じて、ありがとう感謝いたします。なお、地上に残された家族の者、友人、知人、主にあたる兄弟姉妹一人一人が、寂しさと悲しみを覚えておりますけれど、御言をもつて慰め、天に望みをおく者とならせてください。これから執り行われる地上での最後のお別れの営みを、初めから終わりまであなた御自身がお導きください。あなたの御栄光を拝する者とならしめてくださるように切にお願いいたします。

尊き主イエス・キリストの御名によつて感謝してお祈りいたします。アーメン。

五 賛美歌 一三八番

一同

六 式 辞

司式者

一言、式辞を述べさせていただきます。

先ほどお読みいたしました聖書の御言の十七節に、「御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となつて、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとして下さるであろう」と記されております。

皆さんが親しく長年にわたつてお交わりをいただきました榎本百合子、私の母であります、この度突然神様の御許に帰つてまいりました。私はその知らせを最初に受けました

時に、「あ、主の時がきた」という思いが一番にしました。伝道の書に、「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」とあります。どんなことにも、生れるにしても、死ぬにしても時があると。力ある御手をもつて万物を支配して下さる神様の手の中に人は生きていくということを、そのとき厳粛に受け止めることができました。確かに母の生涯を振り返ってみますと、実に不思議な導きを持つてこの八七年と六ヶ月の旅路を導かれてきたと思います。

生まれまされたのが、母が以前から語っていましたように、九州の西の外れにあります五島列島の上五島であります。キリスト教とは何の縁もゆかりもない、漁業の小さな村に生まれました。そこから神様の計り知ることのできない御計画の下に福岡へ、さらに北九州へと引つ張り出されたのです。恐らく母の生涯の計画の中に、こうなろうという思いは一度もなかつたと思います。母は父親が五十歳を過ぎたくらいの時に与えられた子供でしたから、しかも女の子であつたことで、父親は非常に溺愛（できあい）すると言いますか、可愛がられたわけです。ところが、早くにその父を亡くし、その後、福岡におりました叔父を頼つて、福岡に出てきました。幸いに叔父夫婦、末永壽（ひさし）と雪という二人が、事業家であると同時に大変熱心なクリスチャンでした。母が召される数日前

に、いろいろと話をしていました時、たまたま名前の話になりました。で、「どうして百合子になったの」と尋ねると、母が、「和ちゃん、私はね、浪子になるところだったのよ」と言ったのです。武雄と浪子といえば、大正初期に非常に流行った小説の人物です。お父さんは、初めて生まれた我が子に浪子と付けようと思ったそうです。ところがその時、叔父末永壽が、電話がまだありませんから、「名前はちょっと待て」と電報を打ったそうです。父親は一体何事かと思つて待つていたところ、追っかけ次なる電報が来て、「百合子とせよ」と言つてきたそうです。叔父がどうして「百合子」を選んだかと言うと、マタイによる福音書六章の「野の百合花は如何にして育つかを思へ」との御言によつていたのです。叔父夫婦の信仰の願いが、その名前に込められていたのだという。そこから、生涯を振り返つて、しみじみと、自分はこうしてイエス様の救いにあずかつて、生涯を神様の手の中に生かされた。この名前のように文字どおり、自分で紡ぐこと稼ぐこともしないのに、神様はこの年になるまで飢えることなく、乏しいこともなく、むしろ有り余る程に神様は祝福を与えてくださった。この名前が私の生涯そのものなのだと言つていました。私も、「なるほどその通りだな」と思います。福岡のクリスチャンであつた叔父と叔母の祈りがあつて、この名前が付けられたの

だと。後に、叔父と叔母を頼つて福岡に出てきまして、今の福岡大濠公園教会の前身であります浜の町伝道館を通して、主イエス・キリストを救い主として信じ、信仰に導き入れられました。

その後、伝道者であつた父と結婚をしまして、福岡からこの八幡の地へ遣わされてきました。母はイエス様の救いに与つた喜びを絶えず持ち続けてきた生涯でした。八幡の教会の皆さんはよくご存知のように、「私の遺言書」というのを書きます。これは決して遺産分けとかを書くわけではありませんが、自分が召された時に、どのような葬儀をして欲しいかを記しているものです。母が書いたものを読みますと、先ほど賛美いたしました一三八番の讚美歌が愛唱歌の一つとして書かれていました。イエス様の受難を歌つた賛美であります。イエス様の死、十字架の死が自分にとってどんなに大きな恵みであつたかということを賛美した詩であります。それから、三つ愛唱歌が記されていまして、その一つが一三八番、そしてもう一つが三三〇番であります。これもまた、主のいさおし、神様の十字架の恵みについて、また復活の主について証詞した賛美であります。それともう一つが三三二番、これも同じであります。どの讚美歌をとつても、罪人であつた自分がイエス様の十字架にあがなわれ、罪が赦され、主の恵みに

よって今日を生きることゝ歌つたものです。この感謝が母の生涯を貫いていたことを、私は改めて教えられます。

十一年ほど前、七六歳の時に、脑梗塞(こうそく)を起こしました。倒れて、一命を取り止め、そして神様の憐れみによつて、もう一度、生活を始めることができましたが、いろんな面で後遺症が残りました。不自由を強いられる中にありました。母の病後の生活をズーツと見ていまして、私の心に深く残っていることがあります。普通の生活をしている者にとつては、見ていると痛々しいような、あるいはもどかしいような生活を強いられながら、母は一度としてそのことについて苦情を言ったことがない。「どうしてこんなにできないんだろうか」とか、「どうして私は動けないんだろうか」とか、「私の足はこんなんで……」というつぶやき、そういうことを一言も聞いたことがありません。逆に、母はいつも歩けることを喜びました。歩くといつて、スタスタ歩くわけじゃありません。つかまりながらでも、あるいは杖を突きながらでも歩けるといふことを喜んでいました。

病院から退院してしばらく経ち、手があまり利かない、片手がちよつとまだリハビリが十分でなかつたころがありました。物をつかむ力が出ないので、食器を握つてもポツと落とすようなことがありました。私どもは「動かないんだねえ、

まだそこまで力がないんだね」といいますと、母は、「いや、そんなことはないよ。ちゃんとこれでもおにぎりが握れるのよ」と。私達が「これは駄目じゃないの、これはできてないね」と言うと、必ず母は「いや、そうじゃない、こつちの方ができるからいいんだ。これができているじゃないか」と、できることを探しだして感謝し、「これができているから、私は幸いです」と。

私はこうやって牧会伝道をしておりまして、お年寄りの方々に会います。「先生、年をとつて、これができなくなりました、アレができなくなりました」と言われます。「でもこうやって、歩いて来られるからいいじゃありませんか」と言つても、「いや、時間が掛かつて困ります」と嘆かれます。ところが私が知る限り、母は一度もそういうことを口にしたことがありません。

その母の思いの根本に、死ぬべきはずの者を、こんな取るに足らない者を、神様はひとり子を給うほどの大きな愛をもつて顧みてくださつておられる。神様が今日も「わが恵み、汝に足れり」と、「私の恵みはあなたに対して十分だよ」とおっしゃつて下さる。そのことを感謝して受けることができたのです。ですから、「できる」ことを喜ぶのです。できないことをあげつらうならば幾らでもあります、その中から、「このこ

とができる、感謝ではないか」、「このことをさせてください
たから感謝ではないか」と感謝していただきます。

私は母の姿を見ながら、随分教えられ励まされたことを、
今でも忘れることができません。

そして、今晚はあまり詳しくお話しすることはできません
けれど、母のこの八七年の生涯を振り返りますと、決して平
坦な旅路ではなかったことは確かです。同年代の方々にとつ
ては、戦前、戦中、戦後という、日本の歴史が激しく揺れ動
いた時代を生きたわけですから、母一人が苦しかったわけで
はありません。しかし、何といっても伝道者の妻として、父
を助け、父と共に主の業に預かって行こうとする時、どうし
ても普通の主婦が受ける以上に、さまざまな問題に遭わざる
を得なかったことは確かであります。殊に父の信仰の行き方、
これは皆さんもご存知のように、非常に一直線で、ある意味
では狭いと言えば狭い、厳しいと言えば厳しい、そういう信
仰に母が付いて行こうとするその努力は、大変であっただろ
うと思います。しかし、その中で、神様の力と知恵と御愛を
信じて、一つひとつの問題を歩み抜いた生涯であったと思い
ます。

今お読みいたしました聖書の御言に、「彼らは大きな患難
を通ってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、そ

れを白くしたのである」とあります。「小羊の血で洗い、それ
を白くする」、これは主イエス・キリストの十字架が自分の罪
のためにあるということを認めて、その主の御愛と恵みを力
として、それを励ましとして生き抜いていくこと、これが「小
羊の血で洗う」生涯です。

母は、若くしてイエス様の救いに与って、そして八七年と
六ヶ月の旅路の間、主の十字架を見上げて、主の十字架から
滴り落ちてくる主の御愛の血潮を絶えず受けながら、自らの
衣を白くして、そして主の御前に立つ備えをさせていただ
いたことを感謝せざるを得ません。

そこにありますように、十七節に「御座の正面にいます小
羊は彼らの牧者となつて」と、「正面にいます小羊」、これは取
りも直さず主イエス・キリスト御自身、イエス様が、母の牧
者となつて、そして「いのちの水の泉に導いて下さる」。確か
に母の生涯を通して、イエス様は、事ある毎に導き手となり、
力を与え、そして永遠の命にまで、導いてくださったことを
はつきりと知ることができます。その先にありますように、
「また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さる
であろう」。神様は、母の流した涙の全てを拭い取って、素
晴しい永遠の命の安らぎの中に今導き入れてくださったこと
を、神様に心から感謝せざるを得ないし、また、大きな慰め

を受けることができる者であります。

私達も、突然のごとくに天に帰ってしまった母を思うと、確かに寂しくはあります。しかし同時に、私は希望を与えられます。「ああ、そうだ、このように生きることだ」、やがて私もこうして神様の前に立つ時がくる。それまで本当に母が歩んだように、感謝して、主の恵みを絶えず喜んでいきたいと思えます。

どうぞ、皆さんも母がこの生涯を通して証詞しているメッセージを受け止めて、新しい命に日々歩んでいきたいと願っています。

七 祈祷

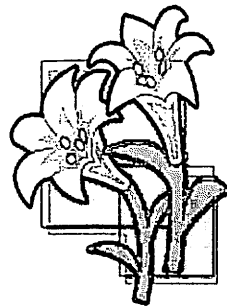
司式者

「御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となつて、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとして下さるであろう」。

愛する天のお父様、あなたの計り知ることのできない御摂理の許に、母をこの地上に送ってください、私どもの命の中継ぎとして大きな使命を与え、その業を成し遂げて御許にお召しになりました。まことにその生涯を振り返るときに、あなたの恵みに満ちあふれたものであることを覚えて心から感謝いたします。どうか主よ、今寂しさと悲しみにある私ど

も一人一人を慰め、新しい望みと命をお与えください。また、母をとおして頭（あらわ）してくださった、あなたの御慈愛と恵みを私も一人ひとりが受け止めていくことができますように、心の思いを整えて新しくしてくださいように、切にお願いいたします。

尊き主イエス・キリストの御名によって感謝してお祈りいたします。アーメン。



八 あかし（思い出）

司式者

それでは、ここで二、三の方に母の生前の思い出を語っていただきたいと思いますが、教会の婦人会の方、大田姉妹に一言お願いいたします。

大田邦子姉

昨日、百合子先生がお召されになったことを伺い、本当に

頭の中が真っ白になりました。「なぜ?」、「どうして?」ということでしたけれど、昨年のクリスマスマスの祝会の時に、八幡前田教会の十大ニュースの先ず第一の出来事として、榎本利三郎先生がお召されになったことが取り上げられて、「何か背骨が抜けたみたいですよパイ」と、博多にわかで言わせていただきました。で、また、百合子先生が昨日お召されになったとの突然のお知らせに、もう、心に穴が開いたという状態と言うよりも、本当にふ抜けの状態で昨日と今日、聖会に出させていただけのが精一杯で、何も手に付きません。

榎本先生と奥様とのお交わりと導いていただきました。約五十年近くになります。しかも、先ほど「何か思い出を」と、お電話をいただきましたが、もう、あまりにも沢山の思い出ばかりで、何をどう申し上げていいか分かりませんけれど、丁度聖会で恵まれましたので、そのことに付きまして、年末がくると思い出す事がございます。

たまたま、主人の仕事の関係でお客様があり、今のようにごこかへ連れて行くというんじやなくて、自分の家でしなければいけないので、大変、料理に困りましたが、少しばかり習っておりましてので、「料理を一緒にさせてください」ということで、私が牧師館に伺って奥様達とご一緒に料理をさせていただいておりました。年末になると、どうしてもおせち料理

をいたします。今のように買えば直ぐ手に入る状況ではないものですから、また、おせち料理をするととなると、どうしても時間も掛かりますし、年末でお忙しい時に、よほど工夫しないと、もう、元旦にかけて徹夜になるようなこともしばしばございました。そしたら、榎本先生が、説教の中で「家内が忙しく料理をしてくれているのはいいけれども、先ず聖会に備えて、そういうことよりも陰にあつて祈り、備えをして欲しい」とお話なされ、私もハツとしました。つい、この世的なことに振り回され、またほかの事においても、奥様と二人でそちらにウエイトが掛かっていると、先生がちゃんとそれを導いて、立ち返らせていただきました。それから、お正月の三ヶ日は聖会第一に備えましょうということ、いまだに年末が来ますと、榎本先生と奥様の事を思い出します。年頭の大事な聖会に対する姿勢、備えを整えていただき、本当に感謝でいっぱいでございます。

それと、思い出しますのは、先生方の全国的なお集まりの時のことです。榎本先生も説教の中で、「自分の信仰は、極端なまでに真直ぐだから、家内も大変だっただろうと思う」とおっしゃっていらつしやいましたけれど、奥様もちよつとそんな風におっしゃっていらつしやったことを覚えていきます。そういう牧師ご夫妻の方々のお集まりの中で、奥様がどなたか

から、「榎本先生の夫としての評価は、どのくらいでいらつしやいますか」と尋ねられた時、「主人は、私にとって百パーセントです」とお話しになったそうです。しかし、そうなるまでには、最初のうちは主人の信仰に付いて行かれず、お子様を亡くされ、奥様も体調を崩されたこともあって、その時は四十%くらいしか思われなかったけれども、様々な中をお通りになることよって信仰が整えられ、「今は私にとつて、全て百パーセントです」とお答えになった。私は、「ああ、素晴らしいなあ」と思うと同時に、榎本先生の陰にあつての奥様の御用に深く教えられました。

また、お体がご不自由になられても、和義先生がおつしやいましたように、「どうして」と、愚痴など一切おっしゃらずに、炊事場に立つて、もたれながらも、台所ができることが感謝ですと、いつもにこやかにしておられたお姿に、本当に励まされました。

まだ沢山ございますけれど、私も天国に行かせていただくのは、そう遠くはないと思えますので、天国を望み見て、先生と奥様の歩みに倣つて歩んでいきたいと願つております。

司式者

どうもありがとうございます。続いて野村姉妹にお願い

いたします。

野村美恵子姉

昨日の朝、突然百合子先生がお召されになったことを聞きました時に、本当に心が転倒するような、「あなたがたは、心を騒がせないがよい」とおっしゃるのに、本当に心が騒いでお祈りすることもできかねるような、ちよつと震えもくるような状態でびつくりしてしまいましたけれど、聖会で次々と御言を戴いて、今はこうして落ち着かしていただいています。

本当に百合子先生の思い出は沢山ありますけれど、突然のことであれもこれもとなかなか思い出せない状態であります。

先ず、百合子先生が礼拝の時に、この辺の席にお座りになつて、お祈りしておられましたことを思い出します。「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と、また「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい」と、このお祈りをいつもしておられたようです。百合子先生のお祈りは本当に簡単でしたけど、私達がそれをお聞きしました時に、安らぎをいただくような感じでした。私達は、同じお祈りの御言を言わせていただくような感じですが、祈っているだけかなあ、と思うくらいなのに、どうし

百合子先生のお祈りは、こんなに心を打つんだろうかと思
うようなお祈りをしておられました。

私達の若い時の子育ての頃を思い出しまして、百合子先生
が、うちの仰一は小さい時は体が弱かったものですから、「仰
ちゃんは体が弱いから、これを食べさせたら……」と言われ
て、その頃はまだ本当に物の乏しいころでありましたし、先
生方もお子さんが沢山いらつしゃつて大変なのに、本当に戴
いていいのかしらと思うような気持ちでしたけれど、「食べさせ
て上げなさい。元氣が出るから」とおっしゃつて、本当に惜し
みなくいろんなものを戴きまして、百合子先生の優しさ、暖
かさがにじみ出るような御愛を感じさせていただきました。

私が結婚して教会に來始めた頃は、こんなお優しい方がい
らつしゃるのかと思うくらいに、本当に驚いておりました。
その反面、自分はいつもとげとげしたようなことを反省させ
ていただきました。本当にびつくりするような、体全体から
ほとばしり出るような優しい愛のあるお方で、本当に慰めら
れ、励ましていただいて、教会に足を運ばさせていただいた
ことを思い出します。

それから、私が婦人会の御用をさせていただくようになり
ましてから、いろいろと先生との思いの食い違いで、私なん
かも、「どうしたらいいのかなあ」と思うようなこともありま

したけれど、ある時、信者の方が、何かお善哉なんか炊き
たいからとおっしゃつていらっしゃる人がいて、その以前に利三郎先
生の方は、「今は、物が沢山あるようになったから、そういう
ことはやめて、お弁当を持つてくるようにして、あまりゴチ
ヤゴチャするようなことはしないように」と、おっしゃつてい
たので、「どうしていいか分からないなあ」というような状
態で、百合子先生にご相談したら、「主人はあんなに言つてい
るけれど、いいですよ」とおっしゃつて、すぐ執り成しが本
当に行き届いていました。そしてそれが済んだ後でも利三郎
先生も喜んでくださいます。そして、奥様の執り成しが本当に素晴
しいなあと思ひまして、いろいろと教えられることばかりで
した。

私がお家をお借りする時も、百合子先生が、集会の後に、雑
談している時に、突然、「野村さん、マンションに入ったら」
とおっしゃつて、「はあ？」と思つて、「何で？ マンションに入
ったら、家賃が高いのに、私は入れないわ」という感じで、ど
うしておっしゃるのかと思つたら、俵雄さんの方のお宅が空
いているから、「その後にお入りになりませんか」と言つてく
ださつて、そんな事を打つようにさつとおっしゃるから、
びつくりするようになりましてけれど、その時も私達には考
えられないような、お家に入れていただいて、主人も喜んで

感謝して過ごさせていただきました。

本当に先生方には、もう、言い尽くせない思いがいっぱいあります。先生が弱られるちよつと前、五、六人の者が木曜会の後でしたか、牧師館に訪問させていただきまして本当に楽しい時を過ごさせていただき、百合子先生も必ず一緒にいてくださつて、時間を忘れて話し合う時を備えていただいていたことに感謝しております。榎本先生が私達のお父さんであるなら、百合子先生は私達のお母さんと思うくらいにお慕ひしております。

本当にいろいろと教えられてまいりました沢山のことを、私達も寂しくございますけれど、これからは、先生ご夫妻が歩いてくださいました御愛を思い出しながら、また、教えを思い出しながら本当にお従いしていきたいと願っております。本当に沢山のものをいただきました。

司式者

それでは、家族を代表しまして、兄俵雄の方から一言思い出を語ってもらいます。

榎本俵雄兄

長男の俵雄でございます。思い出を申し上げる前に、皆さま

んお休みの中、また雨が降って足元の悪い中、この前夜式に多数ご参列いただきました。本当に感謝申し上げます。

先ほど和義が申し上げましたように、私も二日の朝、母が召された知らせを電話で聞きまして、その時に感じたのは、和義と同じように、神様が業を行ったということでした。それは、今日最後の聖会に出ました時に、この真ん中の標語にありますように、「私は神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」という御言であります。この御言は、過去にあつた聖会の標語でもありまして、もう、お召されになつた野村末義先生が書かれたものが自宅にも掛かつていました。

これは父が召された時にも、厳しい病状の中で、私が何で、病院に泊り込まなかつたのかという反省がございました。今度の母の時にも、「聖会に今回来ないのか」という問いに対して……、と言いますのは、十二月の二十日に私がこちらに出張で来て、母の所に寄つた時に、母がそう申しました。「まあ、仕事の関係でちよつと無理だ」と言つて断つたわけです。それを断わらなくて、来ていればというような後悔があつたわけです。しかし、そうじゃないなと思ひました。それは、「わが手から救い出しうる者はない」とおっしゃる。「わたしがお

こなえば、だれが、これをとどめることができよう」、神様が天に召してくださった、その業を始められたんだということ、痛切に感じました。これが召された直後の思いでございます。

その次に思い出したのが、十二月三十一日に、新しい年を迎えるに当って、この一年間を神様に本当に感謝したいと電話をしました。その時に、私の孫の二人が昨年クリスマスに幼児洗礼を受けました。その報告をいたしました。私達は、五香教会に行っていますから、その教会で、新年礼拝があるので、私達も明日は行くんだという報告をいたしました。母が結婚をしたのが二五歳で、父が三一歳の時だったと思います。六十年間、父と母は添い遂げたわけですが、その時の電話の中で、母が「結婚する時に、私は、子供、孫まで含めてイエス・キリストを信じる家庭を作れるような結婚をしたいと願っていた。その願いどおりに家族が神様にお従いし、孫までそういう風に変わってきた」と言って、喜んでくれたのを思い出しました。

思い出は沢山有り尽きないわけですが、私が小さい頃の事を二、三申し上げます。一つは、母の優しさ、あるいは、暖かさというのは当然感じておりました。ただ、半面厳しさというのございました。その厳しさの一番は、神様の前にう

そをついてはいけないということでした。それを小さい頃に、一番指導を受けた覚えがあります。それからもう一つは、神様に感謝しないで食事に手をつけると、非常に厳しく叱られました。そういう厳しさを母は優しさの半面に持っていたという風に思います。

それから、二つ目に特に印象に残っているのは、私ども兄妹六人いるわけです。今元気にしているのは四人でございますが、咲子の次に、豊、恵という男の子が続けて天国に召されました。その時の母の嘆きというのは、まあ、私達も小さかったのですが、ひしひしと感じました。父の信仰は神癒の信仰を持っていましたので、医者に治してもらうんじゃない、祈って神様から癒されなければという信仰を貫いていたものですから、病院に連れて行くということがなかなかできなかったようにございます。ただ、そういう中で本当に神様の摂理であるということ、母は受けとったように感じます。その女性として自分が腹を痛めて産んだ子供を天国に送ったということに対して、その悩みを乗り越えて本当に信仰をもつて、神様から愛され、そして感謝の中にその生涯を終えたということを、本当にその時に思いました。

それからもう一つ、先ほど和義も申し上げましたように、本当に最後の最後まで神様に感謝をしていると言うんですか、

その憐れみと恵みの中に私は生かされて、そしてこんなに幸せなことはないんだということを言い続けておりました。子どもから見ても確かに不自由な手、不自由な足、そして自分が少しづつぼけ始めたというのが、記憶がまばらになることがあると自分で認識をしておりました。従って、常に面倒を見てくれていきます咲子、それから信子ちゃん、牧子ちゃんにですね、母は、「これから自分はボケて、もつと迷惑をかけちゃ困るから、早く天国に、お父さんの所に行きたいわ」と言っておりました。その願いどおり、神様は俄然、天国に連れていったという風に感じております。

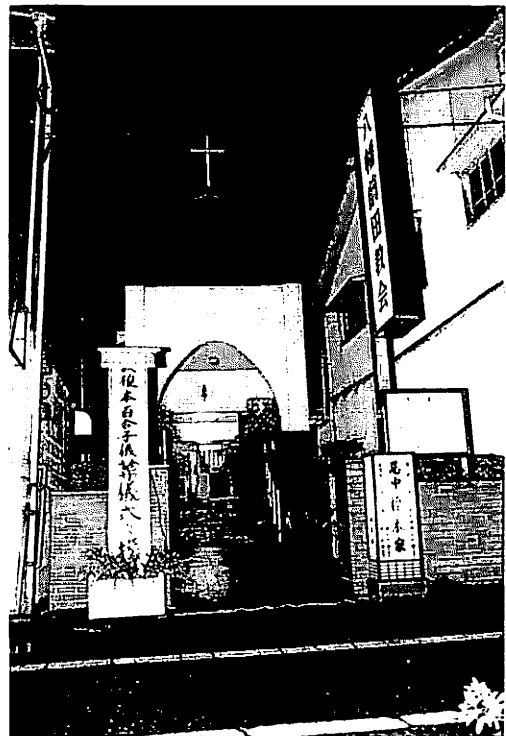
本当に母の思い出は尽きないわけですが、私達も、いさおなくして神様が選んで、神の子としていただいた、そして、そういう私どものために、イエス様が十字架にかかって血を流してくださったという母の信仰を受け継いでいきたいと願っております。どうも本日はありがとうございます。

- 九 讚美歌 三三〇番 一同
- 十 頌 栄 五四一番 一同
- 十一 黙 禱 一同
- 十二 献 花 一同

- 一 奏 楽 奏楽者 松尾 博子
- 二 讚美歌 四八八番 一同

十三 榎本百合子師告別式

日時 二〇〇三年一月四日(土) 午前十一時
 場所 基督伝道隊 八幡前田教会
 司式者 牧師 榎本和義



三 聖書 ヨハネの第一の手紙 三章十六く十八節

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによつて、わたしたちは愛と知ることを知った。それゆゑに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。世の富を持つていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるのか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもつて愛し合おうではないか。それによつて、わたしたちが真理から出たものであることがわかる。そして、神のみまえに心を安んじていよう」

四 祈 禱

司式者

永遠にいます、愛する父なる神様、私達は今ここに集い、計り知ることのできない深い御旨によつて、この世を去つた母、榎本百合子の告別式を営もうとしています。どうか、私達の執り行ふところを全て御心になうように導いてください。

慈愛の父、御子イエス・キリストは、死をもつて死を滅ぼし、復活によつて永遠の命の道をお開きくださいました。その恵みによつて、母は世に在つた時、慈愛の御手に導かれ、主の救いを与えられ、永遠の命を継ぐべき者とされたことを

感謝いたします。既に母、榎本百合子の霊は、肉の束縛から

解き放たれて、主の御許に受け入れられ、平安と祝福とのうちに移されたことを信じて、聖名を崇めます。どうかこの世に残されて、嘆きのうちにある者を憐れみ、上よりの慰めを豊かに与えてください。また、この母と共に信仰の道を辿つてまいりました私達にも、深く自らの終わりを思わしめ、主の来るべき日のために備えをなさしめてください。

御子イエス・キリストの聖名によつてお願いいたします。アーメン。

五 讚美歌 三三〇番

一同

これは、召された母が、愛して歌つた讚美歌の一つです。

六 説 教

司式者

一言、聖書の御言を通して、神様が母に与えてくださった恵みが何であつたかを、確認しておきたいと思ひます。

母は、この地上に命を与えられて、八七年と六ヶ月の旅路を歩み、二日の早朝突然、神様の御許に帰つていきました。私どもにさようならの一言も言わないでと、文句の一つも言いたくなるのですが、それ以上に今賛美いたしました母の愛唱歌三三〇番の歌詞をみますと、母が望み見ていたものが何

であつたか、よく分かります。早くそこへ移つていく、これは母の切なる願いでもありました。

昨晚も前夜式で少し触れましたが、母が生まれ育つたのは、五島列島、九州の西の端の小さな島でありました。そこには、キリスト教、イエス様と出会う機会というものは少なく、ほとんどなかつたのだと思います。神様は実に不思議な方だと思いますけれど、母の叔父、末永壽(ひさし)という人が、若い時に郷里を生まれて、福岡の地に来て事業を起こしていました。この叔父の結婚した相手が雪と申しますが、この方が若い時にイエス様の救いにあずかつておられ、結婚してから、叔父を熱心に信仰に導き、やがて叔父もイエス様の救いにあずかつて、本当に喜んで、新しい人生を歩んでおりました。この叔父夫婦は、自分の本家である兄の家族、二六、リ工、という二人にも何とかしてイエス様の救いにあずかつて欲しい、信仰を持つて欲しいと切なる願いを持つてよく祈つておられました。やがて、母が生まれ、成長するにつれて、五島列島という所では、まだ大正の時代でありますから、教育を十分に受ける機会がないだろうということで、叔父夫婦が母を福岡へ呼びました。そして福岡で勉強をさせてくれたわけです。その裏には、何とかして信仰にあずかつて欲しいという叔父夫婦の願いがありました。その祈りに神様は応えて、

母は若くしてイエス様の救いにあずかりました。恐らくそのとき母の心をとらえたのは、今読みました神様の御愛だつたと思います。

やがて、伝道者となつた父と結婚して、八幡の地に遣わされてきました。それから六一年あるいは六二年になりました。うか、召されるまで、この地で神様の御愛を知り、神様の愛に応えていく生涯を歩んだのです。私ども家族は、母の許に六人の兄妹として生まれました。そのうちの二人は生まれて一人は半年、一人は一週間ちよつとで召されるといふ、母にとつては痛恨な出来事を味わいました。また、戦前、戦中、戦後さまざまな混乱の中にあつて、大変苦勞をしてきたことは確かであります。私ども子供の時からそういう母の苦勞を側で絶えず見てまいりました。

いろんな事があるわけですが、恐らく皆さんの受けている母からの印象というのと同じだと思ひますが、私から得たものを一つだけお話ししておきたいと思ひます。その一番大きなものは、愛を知ることです。母は実に愛に満ちた人であつたと思ひます。それは母の性格や性質がそうだつたという以上に、今お読みしました十六節の御言にあるように、「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さつた。それによつて、わたしたちは愛ということを知つた」と記され

ています。ここで言われている愛は、神様が尊いひとり子であるイエス様を、自分の命ともいうべき方を十字架に滅ぼして、罪人である私達、神様から離れて我まま勝手な自己中心な人間の欲と情に生きる私達のために、罪を赦すあがないの供え物として、命を捨ててくださった、この御愛に母が触れたからにほかなりません。先ほどお話しましたように、自分の愛する子供が幼くして召されたことを通して、更に深く愛する者を失うということの悲しみと同時に、神様がひとり子を与えてくださったという深い思いと重ね合わせて、母は神様の愛を受け止めたものと思います。

戦後、昭和二十年代から三十年代初期にかけて日本は非常に物資の乏しい時代を過ごしました。当時、私どもの家族も五人か六人家族だった。そのほかにも教会の若い方が一緒に生活をしておられ、大勢で生活していました。しかし、食べるものに事欠くような日々が続いていました。育ち盛りの子供たちは何でもいから食べたい。そういう時に、何か到来物、何か珍しい物、甘い物とか、そういう物を戴くと、皆で分け合って食べます。ところが、家族の分、六等分すればいいものを、母はいつも五等分するのです。私はいつも一つ足りないと思うんですけど、母は「いや、私は食べたくないから」と言う。私は「どうしてこんなに美味しいものを食べたく

ないのだろうか」と思ったことが何度かあります。恐らく母も食べたかったでしょうが、私達が喜ぶことをしようとしたのです。自分の欲しいものをあえて拒んで、それを子供に与えようとする、母の姿を不思議に思うと同時に、「母は自分のしたいことをやめて、或いは欲しいものを絶って与えてくれている」ということを感じるようになりました。

その時、初めて愛というものが、何か報いを求めるものではなくて、代償として何かを得るものではなく、一方的に与えるものなんだということを、私は母の生活態度を通して教えられました。とかく世の中で「愛」と言っても、それは好きな人を愛し、自分の都合のいい人を愛し、自分に利益になる人のためにならどんなことでも尽くしますが、何一つその報いが無い相手に対してでも、命を惜しみなく与えてくださる、これが神様の愛なのです。母はその神様が与えてくださった愛に対して、自分もわずかでも報いていきたいと願っていたのです。今お話しましたことを、お聞きになって、「それは、親が子供を愛するのは当たり前だ」とおっしゃるかもしれませんが、必ずしも親だから誰でもそうできるとは限りません。親だから子供を愛したと言えるかもしれませんが、恐らく生前の母に接してこられた皆さんは、それが家族だから、血のつながりのある親子だからそうしたとは言えない母の姿を、

一度や二度体験なされたことと思います。牧師館には、いろんな方々がお見えになりました。その度毎に母は、決して家族だけを可愛がるとか、他所の人を粗末にするということは決してしません。常に同じであります。食の乏しい時であります。わづかなものを分け合つて私どもが食事をしております。突然、若い方が仕事の帰りとかに訪ねてきますと、「まあ、上がんなさい」と言うわけです。私なんかは「今上がられたら困る」と思いました。こつちの食べるものが減るんじゃないかと……。そういう時に、母は躊躇（ちゅうちゆう）しません。「上がっていらつしやい。さあ、入りなさい」。そして、子供がひしめき合つて座っているテーブルを空けて、そこへその人を招き入れます。そして、「さあ、食べなさい」と自分の食べようとしていたものを、お皿に入れ替えてその方に出す。その方は恐縮して、「奥様、まだ食べていないじゃないですか」と言われると、「いや、もう私は先に済ましたから」と言う。私は母の姿を見ながら、「何という人なんだろうか」と思っておりました。一度や二度なら、そうすることができるかもしれません。それは一回限りのことではないのです。イエス様の救いにあずかつてから召されるまで、その姿勢はズーッと変わりませんでした。

十年少し前に、まだ父も健在であった時に、夕食を一緒に

しておりました。ご飯を炊飯器で炊きまして、美味しく炊き上がつて、私どもが「炊き立てのご飯がいいね、美味しいね」と言つて食べました。その時に、父が「僕も炊き立てのご飯がいいよ」と言つたのです。結婚して五十年くらいたつていたのですが、母は「いや、いつも炊き立てを食べさせているじゃないの」といいました。その時、炊き立ての炊飯器と、保温にしていた炊飯器と二つあつたのです。母は「どつちも炊き立てだ」と主張しました。「いや、今炊いた方が美味しいよ」と「じや、こつちの保温していたご飯は炊き立てじゃないのね」と母が言うんです。「いや、それは炊き立てと言わない。朝炊いたものを夜まで保温してただけだよ」、「そうね、私は知らなかったよ」と言うのです。父は「僕はこの炊き立てのご飯が好きなんだよ」と言う。それで母が「まあ、あなたはそんなこと今まで一言も言わなかったじゃないの」と。いつも私は炊き立てを食べさせていた。朝炊いたのを夜食べさせていた。その時にしみじみと母が、「ああ、そうだったのね、これは私の癖なのよ」。戦後、物のない時に、誰かが訪ねてくるかも知れない。みんなが空腹の時代でありました。だから、来たら何か食べさせて上げたい、そのためにおかずはなくても、ご飯さえ炊いておけば間に合う。お塩であろうと、あるいは梅干であろうと直ぐにご飯を出してあげれば、本当に喜ぶに違い

ないからと思つて、毎日朝起きるなり、食べるか食べないか分からないけれど、とにかくご飯を炊く。そういう習慣が続いていたのです。家族が少なくなり、子供たちが独立して出て行つて、父と母の二人つきりになつても、なおその習慣が続いていたのです。私はその母の言葉を聞いた時に、「ああ、これが母の生き方なんだな」。誰が来てもいい、どんな時にもすぐ間に合つて、相手を喜ばすことができる。自分が食べたいからとか、自分が楽しみたいからではない。自分を捨てて、イエス様が自分のために命まで捨ててくださったのに、私が何を惜しむ所があるだろうか。これは母の生涯のメッセージであります。

今読みました聖書の御言の後半のところに「それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。母は自分の肉体の命を捨てたわけではありませんが、生涯を通してイエス様の御愛に応えていく。そのためにあの人にもこの人にも、本当に家族と分け隔てなく、物を惜しまず、能力を惜しまず、与え尽くした人生であつたと思います。

今、母の生涯を振り返る時に、私自身が母の歩みのわずかにも足りないなということ、ひしひしと感じさせられます。もう一度心を新たに、私自身も神様の御愛が注がれている者であることをしっかり受け止めておきたい。私どもは自分の

打算で、損得利害で、何かの報いを心のどこかで求めながら生きていたのではないのでしょうか。実にその意味で、私はよき母を得たと、心から感謝せざるを得ません。私のために、また、家族のために、教会の主にある兄弟姉妹の母となつてくれたことを、心から喜びたいと思います。

母はいつもあの人この人のために尽くしているようでした。子供の頃に、私は母に苦情を言ったことがあります。「どうして、そんなに人にばかりするの」と。子供でありながら、ほかの人と平等になるものですから、それが不満だった時代があります。ところが、母はそうせざるを得なかつたのですね。孫達に対しても、あるいは教会の皆さんお一人おひとりに対しても、絶えず愛を注ぎ続けて、自分の命を惜しみなく与え続けてきた生涯でした。神様が母をそうやって神様の愛を持ち運ぶ器としてこの地上においてくださったのです。その恵みを私は心から感謝したい。また、私達も母の信仰に倣つて、「兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。主の御愛を、神様の御愛を絶えず新鮮に感じ、受け止め、感謝と感激をもつて主に仕えていく旅路を歩ませていただきたいと切に願います。

母は救いに与つた恵みを生涯証詞し続けて、主の御許に喜び勇んで帰っていきました。また、母は幸いだったと思いま

す。格別愛する娘の家族と共にその晩年を一緒に過ごすことができて、愛された母でもありました。また、多くの人々から愛された母でもありました。決して一方的に愛し続けただけではなくて、神様はこの世に在りし間も母を顧みて報いてくださったことを感謝しています。

この地上のお別れの時に、こうして皆さんに集まっていただいて、母との交わりを喜んでくださることを心からお礼を申し上げます。どうぞ、私どもも今寂しくはありませんけれども、母が願っていたことは、神様の愛に応えていく生涯、己を捨てて、自分の命を捨てて、惜しみなく施し、報いを求めない愛、神様の愛を顕していく者になりたいと思えます。

七 祈 禱

司式者

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。

愛する天のお父様、あなたの限らない御愛の中に、母榎本百合子を愛して下さって、新しい永遠の命を与えていただき、この地上の旅路を導いてくださったことを心から感謝いたします。

母はあなたの御愛に感じて、何としてもあなたの御心に従いたいと全力を尽くしてまいりました。その旅路は、様々な悩み苦しみ悲しみもありましたけれど、あなたは、折に適う助けを与え、その時々に応じて知恵と力を与え、全てを備えて顧み、導いていただいたことを心から感謝いたします。今母の魂はあなたの御懷にあり、永遠の休みを与えられていることを信じ、心から感謝いたします。

どうぞ、主よ、母の歩みましたこの地上の生涯を、良きこととしてお受け入れくださって、あなたの御栄えを顕してください。あなたにお願いいたします。この地上に残され、なお悲しみにあります子ども一人ひとり、慰めて神の愛を深くわきまえ悟ることができませうように、また、その御愛に応え奉る母の信仰に倣う者とならしめてくださるよう切にお願いたします。

あなたが備えてくださった豊かな恵みを心から感謝しつつ、尊き主イエス・キリストによってお祈りいたします。アーメン。

八 讚美歌

三三二番

一 同

九 頌 栄

五四一番

司 会 者

十 祝 禱

司 会 者

十一 後奏

奏 楽 者

十二 挨拶

親 族 代 表

長男の俣雄でございます。聖書にイエス・キリストに倣う者となりなさいという御言があります。また、私達が光の子となつたんですから、光の子らしくしなさいという御言もございませう。このとおり母はこの人生を歩んできたなあ、という風に感じています。私達も、この母の信仰の足元にも及びませんが、父と母の信仰を受け継いで、天国で相まみえるときを楽しみに願っております。

本当に本日はありがとうございます。

今日は父の時と同じように、お棺のふたを開けて、私どもの母でもありました。教会の皆さんの母でもありますし、是非お別れをしていただきたいと思ひます。

最後になりましたが、教会の皆さんに前夜式から、今日の告別式にいたるまでいろいろなお手伝いいただきまして、感謝を申し上げます。山九の皆さんにも受付など寒い中をしていただきました。本当にありがとうございます。

十三 告 別 (献花)

一 同

司式者 それでは、ただ今から奏楽のうちに告別献花をさせていただきます。棺のふたを開けていただいて、そこにお

花を手向けてお別れをしたいと思いますので、よろしく願ひいたします。

十四 出 棺

讚美歌四八八番と共に出棺



十四 榎本百合子師記念会

日時 二〇〇四年一月十二日午前十一時

場所 基督伝道隊 八幡前田教会

司式者 基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

一 前奏（黙祷）

二 讚美歌 五〇五番

三 主の祈り 一同

四 聖書 ヘブル人への手紙十章三二節〜三九節

五 祈禱 司式者

愛する天のお父様、尊き聖名を崇めて心から感謝いたします。あなたが愛して、この地上に命を与え八七年と数ヶ月の旅路を終えて、御許に召された榎本百合子の一周年を記念して、この所に集うことができましたことを心からありがとうございます。感謝いたします。あなたの計り知ることのできない深い計画と御思いを堅くし、この地上の旅路をあなたが顧み、御手のうちに支え導いてくださいました。あなたの御愛と恵みを中心から感謝いたします。

今一度この所に集い、あなたが彼女の上に与えてくださいました豊かな恵みを感じ、共に主の聖名を崇めることができ、また天にある望みをより堅くしていただくことができ、すように、御言をもつて慰め力づけ望みをお与えくださることを、切にお願いいたします。愛する者を天に送り寂しさを深く感じますけれども、主よどうぞ、あなたの御国を鮮やかに悟らしめ、主にある望みを堅く持つことができますように、命と力をお与えください。なお、地上に残された私ども一人一人が、あなたの恵みに生きる者となることができ、すように、願ひ導いてください。

尊き主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。

六 讚美歌 三三〇番 一同

七 説教 司式者

ただいまお読みいただきました聖書の御言、二八節に「わが義人は、信仰によつて生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」とあります。

「わが義人は、信仰によつて生きる」、これは母の生涯のメッセージの一つであります。皆さんが愛してくださいました母は、昨年一月二日早朝に神様の御許に帰ってまいりました。その時は、一体どうしてこんな時にと、あるいはもう少し長く

居てくれたらよかったのにと思いました。しかし、こうして一年過ぎて振り返って見る時、「神のなさることは皆その時にかなって美しい」と、この御言通り、あの日あの時、あの年にして最善にして最高の生涯の終わりであったな、と深く教えられ、覚えさせられる今日この頃です。母の生涯を振り返った時に、正に信仰を抜きにしては語ることができない、そういう生涯だったと思います。

母は、生まれた時からこの信仰を持っていたわけではありませぬし、クリスチャンホームに育ったわけでもありません。度々お話しますように、五島列島の上五島浜の浦という東シナ海に面した漁村に生まれました。そこは、キリスト教とは縁のない世界でした。また、百合子の母親は、お寺の住職の娘でした。しかも母が一番生涯で思い出していたふる里、近くに「佐野原」という小さな村があり、そこが母親「リエ」の在所でした。そこにはおばあさんに当たる方がおられて、母は子供の頃よく遊びに行つて、そのおばあさんにかわいがつてもらいました。その時の思い出が、生涯にわたつて母の慰めといえますか、心のふる里になっていました。

母は、そのおばあさんからいろんな話を聞いていたんです。何を聞いていたかと言うと、仏教説話なのです。私も子供の頃に、母がよく話してくれた話に仏教にまつわる道徳的な教

え、そういう話がありました。今でも鮮明に覚えている話があります。それは、北陸に越前吉崎という所がありまして、そこに嫁と姑(しゅうとめ)が仲違いして、大変なけんかをして、とうとう嫁さんを脅してやろうと思つて、お姑さんが鬼の面をかぶつて、お嫁さんがお寺の「講の会」に出て帰ってくるところを、そのお面をかぶつて暗闇から飛び出したのです。お嫁さんを懲らしめたのだけれども、ところが、その鬼の面がお姑さんの顔にくっ付いてしまつて取れなくなつてしまつた。その当時、私は小学一年か二年生くらいでした。その話を聞いて怖くなつて、そんな事があるのかと……。後になつて私が大学を卒業する年だつたと思いますが、福井にいる友だちを訪ねて行きました。彼が、その吉崎に私を連れて行つたわけです。なんと子供の時に聞いた鬼の面があるじゃないですか。そこにちゃんと「肉付きの面」と書いてある。私は母が話してくれた事を思い出しました。仏教にまつわる説話というもの、そのほかにもいろいろとありました。恐らく母もそういう環境の中で育つてきて、仏教的な教えというものも、母の考え方に大きな影響を与えてきたのだらうと思います。

やがて母が小学校四年生の時に、母方の叔父を頼りに長崎へ出てきました。女学校へ入る頃まで叔父さんの世話になり、その後、今度は父方の叔父を頼りとして福岡に出てまいりま

した。と言うのは、母は早くに自分の父親を亡くしましたから、親族が、さまざまな手立てをもつて、お世話をしてくれたのです。しかし、親戚でよくしてもらったのですが、やはり家族ではありません。他人の中での生活でありますから、大変気苦労があつたらうと思います。福岡の叔父は、ご存知のように「浜の町伝道館」の発祥である末永壽(ひさし)という人です。その叔父夫婦が熱心なクリスチャンだったから、世話になつてゐる以上、教会にも行かなければならない。この叔母に当たる末永雪(ゆき)という方がいますが、この方は敬虔な篤い信仰を持った方で、母に大変大きな影響と感化を与えてくれました。また母も叔母を尊敬し、信頼していました。そういう方の導きによつて、信仰を持つに至つたわけです。

やがて、その当時献身して修養生であつた父と結婚しまして、昭和十四年に北九州の地へと遣わされてきました。父との結婚、伝道者の妻になることは、母には想像のつかない世界だつたらうと思います。今まで、牧師と言いますが、伝道者の世界を知りませんし、そういうものを見てもいなかつた。見ていたとしても伝道館時代の折瀧先生のご家族のことくらいであります。そういう母が、父と二人で河本さんの要請によつて、ここで教会伝道の活動に入つたのです。それから六十年近くの年月を父と共に歩んでまいりました。ですか

ら、母と父というのは、分けて考えることができないわけです。普通のお宅ですと、ご主人は会社に行く、奥さんは家庭に居て、というそれぞれが別の世界を持つて結婚生活が行われますが、父と母の場合は、ある意味で特殊だと思ひますけれども、夫婦が一つとなつて主の許に養われてゐる。しかも、その中で、戦いが多かつたのです。と言うのは、今読みましたように、「信仰によつて生きる」ということを、身をもつて体験していく生涯。「信仰によつて生きる」、経済的に保証され、あるいは何かこの世の社会的な地位や仕組みの中に安定した一つの基盤の中に立つて生きるではありません。「信仰によつて生きる」というのは、取りも直さず、聖書に記された神様を信じて、神様の手の中に生かされ、そして導かれてゐることを、日々体験していこうとする生活、ここには、目に見えるところの保証、そういう支えていくものはありません。恐らく掴み所のない生活であつたらうと思ひます。

そこへもつてきて、ご存知のように父は一本気な所があり、以前、河本かつ姉の記念会をしました時に、信生さんがかつ姉が父や母のことについて語つていた言葉の中に、「榎本先生には、一本気で頑固なところがある。私達に厳しいところがある。それを救つて下さるのが奥様で、こんな優しい奥様は金のわらじで探しても見つかるものではない。あんた達は感

謝しとかな、いけんよ」と言っていたと、記念誌の中にも記されていますが、私はそれを読む度に、かつ姉は実地的確に見ておられたなあと思います。父はそういう一本気で筋を通していく生活、それに付いていく母にとつては、非常に苦しい戦いであつた。しかし、その歩みを通して、母は信仰に生きる者の生き方、そしてその目的である主の栄光の姿に自らを変えられていく者にと、絶えず追い求めてきた生涯だつたと思います。

私自身が教えられることが幾つかあります。母は常に変化を求めるといいますか、自分の状態を絶えず、これでは駄目、もつと、もつと神様の標準に近づかなければいけない、そういう渴き、願いを絶えず持ち続けた人であつたというのが、私の印象です。どんな時にも、「こんな私だから仕方がない」、「私はもう変わりようがないのよ」という姿勢を見せたことがありません。それは、私の個人的な印象かもしれませんが、「お母さん、こんなところがあるじゃないの。お母さんこんな風にしたらいいんだよ」と言うと、大抵は「そうね、じゃ今度一つそうしてみようかね」と、常に前向きに自分を何とかそういう者に変えていこうとする、そういう熱意を絶えず生涯持ち続けた人であつたと思います。ですから、いろんなことに興味もあります。料理にしる、どこか外に食べに行きます。そ

うすると珍しい美味しいものがあると、「美味しい。これどうやって作るんだろうか。材料は何？ 味付けはどういう風に」と、そういうことが気になる。そして最後に言うことは、「じゃ、帰ったら私も作ってみよう」と。実際に作つたことがあります。また、それは作れないこともあるでしょうが、いつも、そういう風に何とか自分も……。自分の性情、性格のことについても、絶えず聖書の御言を通して、光に照らされる度ごとに、「本当に自分は、こういうところがまだできていないわ。自分はこのようにありたいのだ」と、常に求め、何とかそうなるろうと努めます。いつも母に「こういうことの、こういうことをして」と言うと、「ああ、そうね。それはいいわね。じゃ、私もしてみようか。私もそうありたい」という渴きを絶えず持ち続けていました。それは召されるその瞬間までと言つてもいいと思います。これは、一つの信仰に生きる生き方ですね。段々と歳を取つてまいりますと、皆さんもご経験だと思えますが、「まあ、私は仕方がない。私は何十年生きてきた、これ以上変わりようがない。あんたたち何を言つてんのよ」と、若い人達から何か言われると自分を守ろうとする。ところが、母は決してそういう風に否定的にならない。むしろ肯定的にそのことを受け止めて、何とかそういう自分になりたい、という願いを持ち続けてきた人でした。

また、二つ目のことですが、信仰によって生きる生き方は、物に執着しない。物事に拘泥しないと言いますか、一つの事に捕らわれない、そういう自由さを持ち続けていました。それは初めから母がそういうものを持っていたわけではなかったと思います。長い父との信仰生活を通して、もちろん、戦中、戦後のあの激しい時代の流れの中で、物をいくら抱えてみても、それを握ってみても、やがてそれは空しく過ぎ去って行くものであることを実体験してきました。ここにいらつしやる皆さんも同様だと思います。ところが、母はそればかりではなくて、自分の持っている物を惜しみなく与える。私はそのことを通して、愛ということを母から教えられたものであります。自分の食べるものであろうと、持っているものであろうと、そばにそれを必要とする人がいるならば、惜しみなく与える。これは、母の一つの信仰の生き方だった。だから、困った人が来られて、あれをして欲しい、これをして欲しいと言われると、母はそれこそ自分の着ているものまで脱いででもやるくらいの人でした。それでいて「乏しい」思いを持たない。いつでも「いっぱいある。いっぱいある」と言うのが母の口癖なのです。父がよく笑っていました。「いっぱいあると、お母さんはああ言うけれども、本当は無いんだよ」と。だから、自分のために何かを惜しむということをしない。

どんな事柄においてもそうでした。

信仰に生きる生き方、それは、神様の報いと神様の備えてくださることを信じて、そこに絶えず心を開いていくこと、そして手放して与え、空っぽになることによって満たされる喜びを味わっていたのです。

そして三つ目でありますけれど、泣き言を言わない。母が一九九一年だったと思います。最初に脳梗塞を起こして倒れました。そしてリハビリをいたしまして、ひとまず退院いたしました。しかし、どうしても手が不自由になりました。座って話している姿にはどこにも悪い所がないようですが、足も随分動かない、そういう不自由な生活を強いられました。しかし、私は召されるその時まで一度として、「ああ、私は何でこんな風になってしまったのだろうか。何で私はこれができないのだろうか。もっとあの時こういう注意をしとけばよかった」と、悔やみ事を一度も聞いたことがないのです。これはよく福岡の教会でも皆さんにもお話をしてきました。ある時、「お母さん、手も不自由になったし、もう生活が不自由で困るね」と言うと、「いや、そうでもないよ。こうやっておむすびを握れたのよ」と言って喜んでゐる。私どもから見たら、嘆いて当然、「本当にこんな状態になってしまつて、私はもう役にも立たなくなつてしまつて……」と、多くの先輩方の嘆

く姿を見ますと、母はそういう事を一言も言わなかった。これは幸いな生涯だと思えます。そして、常にできることを感謝している。歩けることを喜びました。歩けるには歩けるんだけれども、さつさと歩けるか、一足一足、ぼつちり、ぼつちりかという違いはあります。我々は自分の歩み方を見て、もつとシャンシャン、サツサと歩けば良さそうなものを、歩けないからかわいそうという思いで見ますが、母はそうは思わない。「寝たきりになるところが、こうして神様が、歩かせてくださるのだから感謝します」と、そのようにいつもどんなことでも、できないことを見るんじゃない、できることに目を留めて感謝していく。私は、母から教えられることが多くありますが、殊にこの三つの事柄は、私自身が絶えず励まされ、自分を顧みる糸口となっています。

この三八節に「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。信仰によって生きる生き方を、具体的に歩む。そして、言わず語らずにそのことを深く教えてくれた母に、今心から感謝しています。また、私達もその信仰に倣って、言葉だけではなく、自分の生活をかけて、信仰に生きる生涯を全うさせていただきたいと思えます。ご一緒にお祈りをいたします。

八 祈 禱

司 式 者

「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。

愛する天のお父様、今朝尊い御言を備え、あなたの深い御愛と恵みを教え悟らしていただきまして、まことに感謝いたします。母の生涯を通して、あなたが、私どもに求めておられること、あなたが、私どもになそうとしておってくださることがどういふことかを、もう一度、確かにしていただき心から感謝します。

あなたの尊い十字架のあがないによって、御救いに入れられ、キリストの体としてこの地上の生涯を全うしましたが、母は様々な悩みと困難、苦しみと悲しみ、失望の中にありましたけれど、そのことを通して信仰に生きる生涯を歩ませていただきました。キリストの栄光の形へと整え、清め、新しくしてくださいまして、あなたの御許にお召しいただきましたことを心から信じて感謝いたします。残された遺族、この母の生きた信仰とその愛によって励ましを受けることができますように、また絶えず、あなたの求め給う標準まで、日々清め整えていただきますように切にお願いたします。主が注いでくださった豊かな恵みを心から感謝して、尊き主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

九 讚美歌 二六七番

十 頌 栄

十一 祝 禱

(昼 食)



一 同

司式者

司式者

十五 百合子先生の思い出(記念会第二部)

榎本誠兄

どうもご無沙汰しております。皆様のお変わりないお元気
そうなお顔を拝見しまして、非常にうれしく思っております。
今日は母の記念会ということで、多くの皆様方にお集まりい
ただいて、私が申し上げることではないんですが、昨年葬
儀の時もお話しましたように、私より母との付き合いの長い
方がたくさんいらっしゃいます。そういった皆様方の様々
な思い出がお有りになると思いますので、そのお証詞を樂し
みに今日は参加させていただきました。

私も母が召されました早や一年、その間、昨年度は私も仕
事はお休みをいただいていたんですが、昨年の四月から仕事
に復帰いたしました。途端に忙しくなりました。母のいろん
な写真だとか、こないだお話ししましたテープだとかも聴くゆ
とりもなく、というか、まだ非常に悲しみが強いものでは
ら、仕舞い込んだままにしておりました。何の手も付いてお
りませんが、ただやはり肉の思いもそうなんですが、父と母
が残してくれた、今日も御言の中にありましたが、「わが義人
は、信仰によって生きる」ということで、私どもがいかに父と

母の祈りに支えられていたか、ということを感じさせられませんでした。今更ながらのお恥ずかしい話ですが、ここで自分たちの足で歩まなくてはならない。私と神様と直接結び合つて、向き合つて歩ましていただきたい、という渴きが非常に強くなりまして、良い教会を与えられたいと祈つておりましたが、お陰さまで、昨年は渋谷教会に二十数年振りにお邪魔しまして、それからズーッと礼拝を守らせていただいています。

そういうことで、母が祈り、父が常々語つていてくれたことが、ようやく私どもに身近に分かるようになってきたな、という風に感謝しております。様々な中にありますが、やはり父母の信仰を見倣つて、私どもも神様第一に、前に置きながら祈りの中に歩ませていただきたいと思つております。今日はどうもありがとうございます。

榎本ケイ子姉

皆様ご無沙汰いたしております。先ほど大田さんともお話いたしておりましたが、私達が結婚する時に、河本かつさんのかしわ御飯と大田さんのケーキといろんなお料理を、皆さんが本当に信仰を持って、本当に何も分からない、我ままな私達でしたけれど、皆さんが盛り上げてくださつて、良い結婚式をさせていただきつたことを今思い出して、本当に感謝し

ております。

母とも、嫁姑という立場なんですけれど、母は人間として本当に尊敬できる人で、身内の私から言うのもおかしいんですけど、嫁姑という不愉快さは一度も感じたことはなくて、本当にいつも優しく、そして孫たちにもいつも優しく接してくれて、私も本当に幸せな嫁だったと思つております。

そして、私達が十年間フラフラしていましたけれども、皆さんがいつもお祈りの中に私達を加えてくださつて、それedyつと私達も神様から救われて、今二十年になりますけれども、両親を初めとして皆様がお祈りの中においてくださったからこそ、今私達がこうして子供たちにも孫にも恵まれて、今があるということを本当に感謝しております。ありがとうございます。

それでまた、ここでこうして私が不慣れな者ですけれども、今まで思つていたこの感謝の気持ちを、皆様に伝えられる場所を母が与えてくださったということもまた感謝しております。本当に皆様、ありがとうございます。

吉野栄子姉（百合子先生の妹さん）

皆様に姉の事をいっぱいお世話いただきまして、何とお礼を申していいのか分かりません。私と姉は十歳違うんですけ

れど、本当に母の代わりだったような気持なんです。私は、一番末っ子だったから、親兄弟から恵まれて、可愛がられて育ったものですから、姉が亡くなったと聞いた時は、急に奈落の底に落とされたように感じ、私はどんなにして生きていけばいいのかしらと、今だにまだまだ落ち込んでいますけれど、まあ、それでもやっと一年の日を迎えられたと思つて、皆さんからこんなに慕われていました姉の足跡をちよつともこれから先、踏んで行けたらいいなあと思つています。本当にありがとうございます。

末永直敬兄（百合子先生の弟さん）

生前、妹達四、五人で姉に面会にまいりましたが、その度にとでもうれしそうな笑顔で私達を迎えてくれました。そして、昔話に花を咲かせながら楽しいひと時を過ごしたのですが、その時の様子が頭から離れません。本当に残念であります。生前中は、皆様方に変お世話になったことを深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

江口亮子姉

私は、姪になります。中学二年から短大を卒業するまで、お世話になりました。家族が多い中に私まで入り込んで、本

当に伯母は大変だったろうな、と思います。私は、何にも分からなくて本当の子供以上にかわいがっていただき、また、大きな顔をして一緒に住んでおりました。結婚して五島にいる間、ちよつと教会から離れておりましたが、何となく神様のことを思つておりました。それはやはり伯父や伯母が、祈つてくださったんだなあ、つくづくそのことを今感謝しています。

それから、こちらに来て、大濠公園教会に行かしていただいていますけど、木曜会と一緒に一年くらい来ましたが、その時はもう伯母がとても喜んでくださつて、本当に「ああ、よかったなあ」と、今感謝しています。

近年はこの叔母達と一緒に、月に一回伯母に会いに来ていました。その時は本当にうれしそうで、昔話に花が咲いて、ああ、テープにとつておけばよかったなあといつも思いながら、それがとても残念でなりません。本当に今、私もこうして教会に行かしていただいて、神様を信じていくことができたのは、本当に伯父と伯母のお陰だと感謝しております。本当にいろいろとありがとうございました。

金生一郎先生（司会）

今お話がありましたように、私も教会におらしていただい

て、時々亮子さん達とも、また、百合子先生の弟さん、妹さん達が来られた時に、百合子先生の笑顔がすごく変わって、いつも喜んでいらつしやるんです。本当にニコニコされていたことを、今もう一度思い出させていただきまして、懐かしい思いがいたします。皆さんの中にも本当にいろいろとあると思います。これから手を上げていただいたら、そちらにマイクをお持ちいたしますので。是非いろんなお証詞を共に分かち合いたいと思います。

野村美恵子姉

百合子先生がお召されになって、本当にもう一年が経ってしまったというような感じがしませんので、でも今日はその額で笑っていらつしやるあの笑顔、本当にお会いしているような気持で見させていただいております。

去年の聖会中に突然の衝撃を受けて、本当に落ち込んでしまった私達ですけれど、神様の豊かな恵みによって、一年間保っていたいただき、目には見えませんが、百合子先生の残された足跡をいつも思い出しながら、生活の中で「ああ、百合子先生だったらこうなさるだろう」というようなことを直ぐ教えられました。いつも一緒にいてくださるような感じでごしております。もう、一年経ってしまった、何ヶ月たった

ということを離れて、いつも一緒にいてくださるような感じで、写真が有っても無くっても、心の中で共に歩いて、イエス様と、また百合子先生の信仰がいつも私達の前に歩いてくださるので、本当に感謝しております。

和義先生の話にありましたように、本当にもう何でも分け与えてくださるという、百合子先生の優しさに、私が一番に触れたのは、私が結婚して信仰生活に入らしていただいた時、まだまだ自分の信仰は何もないし、分からないし、普通の生活と何ら変わりのない中で、教会生活の歩みはどうなんだろう、という不安もあつたし、結婚生活は、これからどうなるんだろうというような不安の中でした。終戦後でしたから、様々な不安の中になりました時に、百合子先生が陰になり本当にいろいろと優しく指導してくださいました。私の子育て中も忙しかったり、乏しかったりの中でしたけれど、先生の本当に惜しみなく与えてくださるその優しさを、今でも忘れることができませぬ。食べ物であれ、何であれ、「これ子供さんに上げなさい」と言つて、バターとかそのころ何にもない頃にあるのに、本当に喜んで分けてくださつて、「これを食べさせなさいよ」と言つて、子供の具合が悪かつたりすると、もう本当に、何て言つていいかな、先生の溢れるような笑顔をも

って分けてくださっていました。本当に私達のお母さんというような感じで、ズーツと接してくださいました。

そして段々弱られてからのことを思い出すのは、お召されるなる少し前、大分歩くのも弱られて大抵お家で座っていらっしやっただすね。婦人会の事でちよっとお尋ねしたいとお伺いしたら、じっとしていらっしやっつて、「お元気ですか」と言つて入つて行つたら、「足も動かないから、ちよつとこまできてください」というので上がつて行つたら、お話をいろいろとしまして、「寂しいですね」と言つたら、「寂しいですよ」と素直におっしゃいました。

利三郎先生が最後に入院されるために玄関を出る時に、「これが最後か分からんから、握手しよう」とおっしゃった時に、私は手を引つ込めてしまつて、黙つてしまつたら、寂しそうに行つたけれど、やはりそれが最後だった。あの時、手を握つとけばよかつた、手を握られんやつたとおっしゃっていました。「本当にそうですね。私もやはり、主人が召される時は手を握られんかつたですよ。握ろうとすると、天国に行こうとする魂を、自分が引つ張るみたいで、私も手を握られんかつたですよ」と言つたら、「本当にね」とおっしゃっていました。「今は、寂しいのは寂しいけれど、主にあつて毎日がこうして平安で、孫達に取り囲んでいただいて、本当に感謝し

ております」と言つておられました。私も利三郎先生が天国に召された後に、「先生ともつとお話したかつた」と言つたら、「野村さん、それは神様が『せんでもいい』とおっしゃったんですよ」ということで、すべてそういう風に神様との執り成しの中の対話ということで、上辺だけでなくて心からそのまま、私もそのまま受け止めていました。

皆様も言われるように、百合子先生のお優しさ、それは誰がまねをしようとしてできるものではなく、神様と絶えずお交わりをしておられた先生の姿だなあと思います。今は目に見えませんが、一人ひとりの心の中に百合子先生自身が届いてくださっているということを、本当に感謝しております。一年間こうして寂しかったけれども、本当に私達は、「見えるものにはなく、見えないものに目を注ぐ」と、それと同じように先生方お二人とも見えなくなりましたけれど、私達には、見えるもののようにいつも一つ信仰につながらしていただいていますから、本当に主に感謝しております。

高木ツルエ姉

教会のお母さんであり、いつも皆さんに笑顔をもつて接してくださいました百合子先生が、御召天なされた時のことを思い出しました。それは、二〇〇三年の聖会二日目の朝十時

前でございました。私は、何も知りませんでした。牧師館に行つた人のお話を聞いて、「百合子先生がお召されになられたようです」ということをお聞きしました。その時、皆「どうして! どうしてですか!」と教会は騒然となりました。その時に、十時の聖会を控えておりましたので、正野さんにお祈りをしていただきました。正野さんがお祈りしてくださいましたのは、ローマ書十一章三六節「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである」との御言をもつてお祈りをしてくださいましたので、皆さんは落ち着いて十時の聖会を待ち望むことができました。

本当に百合子先生には、昔からいつも私達皆に分け隔てなく接してくださいました。「ぶどうの木」三十号二〇〇三年の新年の写真で、その事をいつも思い出すんですけれど、三回に分けて記念写真を撮りましたが、その間本当に笑顔を絶やさないうで、記念写真に写ってくださいました。そして、その次の日の事ですから、本当に私はびっくりしまして、もう声が出ませんでした。

そして百合子先生がお召されになりました、一年経ちまして、この一年の事を思います時に、私は、本当に百合子先生の信仰によつてこの一年を支えられたと思います。それは、百合子先生は、天に上つて神様の所にいらつしやいますけれ

ど、私はまだ地上の生活をしております。それで私が御前に行つた時の備えを、百合子先生がこの一年の間して下さつたんです。そしていつも百合子先生が私に語ってくださいましたのは、コリント第一の手紙十五章五八節の「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立つて動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあつては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである」と、このお祈りをもつていつも励まして下さつたんです。私の家もいろいろな事がありますから、その事でお祈りをいただきますと、百合子先生は本当に励ましてくださいました。エレミヤ書二九章の「災をあたへんとにあらず平安(やすき)を興(あた)へんとおもひ又汝らに後と望(のぞみ)をあたへんとおもふなり」の御言でいつも祈ってくださいました。ですからいつもその御言に励まされて、百合子先生が御召天なさいましてこの一年間、一緒に百合子先生のお祈りを通し、また御言を思い起こしましては、本当に私自身が神様の御前に立つ備えをしていただいたということを思いまして、本当に感謝しております。いつもこのぶどうの木三十号の写真を見ては、百合子先生が「高木さん、高木さん」と呼びかけているように感じて感謝しております。今、天国で安らかに私達を見守ってくださいていらつしやると思ひまして感謝しております。

ありがとうございます。

金生先生

昨年のお写真の時、聖会の前三一日に週報を作らせていただいて、先生の所にお伺いしたんです。またお祈りをしてもらって、それから静まったのですけれど、その時に百合子先生に「明日、写真ですね」とお話ししたら、「いや、私は足が悪いから、撮ってください」と言われたんです。私はそれで、「ああそうなんだ」と思っていたんですけど、そして当日、写真を撮る用意をしていたら、百合子先生が出て来られまして、私達と一緒に記念撮影をされました。それは本当に神様が与えてくださった素晴らしいお別れの時だったと思うんです。前日までは、百合子先生も「今年がいい」と思っておられたけれども、それが不思議なようにその時を与えられて、牧子さんや咲子さん達が連れて来てくださって、私達にとつて良いお別れの時を与えてくださった。もし、それが無ければ最後に一緒に一緒だったのはいつだったかということが、私達にはほんやりとしてしまいますけれど、そういつたことのないように、神様は、素晴らしいプレゼントとしてその時を与えてくださった。ですから、今高木さんがおっしゃられましたけれども、ぶどうの木三十号にその写真を載せていただいたという

ことは、神様が私達に対して、百合子先生が信仰のお母さんなんだということ、はっきりとお証詞してくださったよい機会だったと思うんです。



廣田寿兄

今、先生に了解をいただきましたけれど、古い写真をひも解きまして、話の中に出てきますので二枚だけ前に掲げさせていただきます。

百合子先生がお召されになりました、はや一年になりました。昨年の新年の記念礼拝には、本当にお元氣なお姿で一緒に写っておられましたのが、本当に突然のことでございまして、ご遺族の方々には申すまでもなく、教会員一同寂しい思いをいたしました。新年を迎えました。記念会がもたれまして百合子先生を偲びながら、先生の信仰に学んで今、皆さんか

らお話しがありましたように、今後信仰を深め、神様の御名を崇めていきたいと思つているところでございます。

前に掲げられています大きな写真をご覧いただきますと、前夜式からズーッとこの写真が掲げられていましたが、ご覧のとおり本当に優しくさわやかな笑顔の方でございます。この写真を見ます度に、日常、本当に優しいこの笑顔で接していただき、お導きいただきましたことを、本当に昨日のことのように思い出します。いつも変わることがございませんでした。私は写真を担当させていただきました。利三郎先生の前夜式も葬儀も撮らしていただいたんですけれども、最後のお別れの時に、車いすでお棺の中をのぞかれた百合子先生のお顔、そして、車道に出てのお見送りのお写真を拝見しました。ちつとも変わらないような優しいお顔でお別れされました。その事が思い出されてなりません。

私は昭和二五年に仕事の関係で関西からこちらにまいりまして、それから五十年ばかりお世話になったわけでございます。本当に優しく丁寧にお導きいただき教えていただきました。十年ばかり東京の方に転勤になりました。前田教会を空けたことがございましたけれど、利三郎先生に東京に来ていただいで集会も持つていただきましたし、つながりの絶えることがなく、本当に良きご指導をいただいたことでございます。

す。長らくお導きいただきまして思い出は数々ございまして、一時間話しても尽きません。

特に今日、私がお話し上げたいのは、教会ということでございます。先ほどの説教でもお話がございましたが、百合子先生は、榎本先生と一体となって教会の牧会のために尽くされたと申しますか、主の恵みに感じてやつておられたことが、本当に思い出されます。私は、金生先生がお見えになるまで礼拝の司会に当たらせていただいたことがございました。その関係もあつて一番前の席に座らせてもらつておりました。講壇に近い席ほど恵まれる、と言いますが、百合子先生はいつも右の端の一番前の席に座つておられました。私はその隣に座らしていただいておりました。そして、毎週熱心に祈りを捧げられました。その祈りが「お立てくださいました御しもべを、どうぞ御霊に満たして」と本当に篤い祈りを捧げられました。私は、隣におりまして祈りに合わせておりましたが、本当にご自分が先生と一緒に講壇に立つたような本当に篤い祈りを捧げておられました。いかに牧師夫人は先生と一体となつてこの講壇を守り、牧会を続けてこられたんだな、ということを教えられたことでございます。

それから、牧師夫人の会があつたそうでございます。先生がよく講壇からお話になりましたけれども、「私は十年おし

め洗いの御用に当たりました」との話もございましたけれど、これは何を意味するだろうかと、現実をさらりとお話になつたに過ぎないんですけれども、皆さんがとても驚かれて感銘を受けられたそうでございます。私はこれをしっかりとかみ締めまして、「ああ、これはイエス様が、『わたしの羊を飼いなさい』とおっしゃったことなんだなあ」と思いました。そして私の羊を養いなさいと言われたのは、羊飼は、先生もよく言われましたけれど、一日二四時間、一年三百六五日休む間がないのが羊飼であり、子供を育てる親でございます。そして休みなき牧会を先生と一緒にたつて続けられてこられたことを、その時にしみじみと教えられたことでございます。

それから、榎本先生は言うべき事はその時に与えられる、という信仰に立つてお話をなさいました。そして主に押し出されて、もう、時間を忘れて十分十五分熱が入ってくると夢中で話しておられるんですね。そうした時に、後ろの方でうちわが上がったということで、奥様は一体となつてお話になつておられて、タイムキーパーの役をなされておつたんだなあという気もいたしました、牧師夫人は大変だなあということとを、その頃から感じておつたことでございます。

それから和義先生のご献身の時でございます。「エホバ、エレ」、「主の山に備えあり」と言うことで、お証詞がありまし

た。またその時に、榎本先生もそうでしたね。いろんなことを聞きますと、「それは私でなしに、天に聞いてくれ」と言われました。「俺の知ったことか」という有名な言葉になりましたけれど、本当にそうして「天に聞いてください」とおっしゃる。全く主に信頼して、主の器としてお働きになったということとを、本当に身にしみて感じたところであります。そして和義先生のご献身の時も、神様が備えてくださったということとを全く信頼して、委ねておられたお姿を拝見して、お証詞を承つたことでございます。百合子先生は、榎本先生と全く同じ姿勢で臨んでおられたということとを、しみじみと感じました。先ほど榎本先生が頑固一徹で筋を曲げない、ということとお話になりましたけれど、優しい百合子先生、(前に飾られている百合子先生のお写真を指して)この写真を見ますといつもそう思いますね。優しいこの笑顔の底に、主にあつて信仰にあつて、非常に強いものを持つておられたというように思うのでございます。それを何十年間続けてこられたことに、深い敬意を表したいと思えます。

それから、教会でいただくお茶の数ほど恵まれるということも前田教会で言われていますが、前田教会にはいろいろな名号がございます……。私はそのころ独身でございましたが、独身をいいことに牧師館にも度々出入りさせていただき

ましてお世話になりましたし、また木曜会の後のお茶の会や、土曜日の会堂掃除の後でもお茶が outcome しまして、たくさんお茶をいただきました。お陰で恵まれました。その中で五島の名物と言いますか、教会の名物と言いますか、「五島うどん」が時々振舞われました、アゴ、飛魚ですね、それでだしを採られて、そしてそれに生卵を割りまして、ねぎや柚子胡椒を入れて鍋焼きうどんのような熱々のうどんをいただくのですよ。これがまた、美味しく喉越しがいいものですから、いくらでも食べられるんですね。あまり仕事をしていないのに、その喉をよく通ること、そんなような経験がありました。そういつたことも腕を振るって食べさせていただいた事を思い出します。その時に、靈感賦一三六番でしたか、食事の感謝がございましたですね。それを教えられたのもその頃でございました。「感謝せよ、神の恵みを」という歌詞でございました。

古いアルバムをくって昨日も探っております。教会五十年の歴史が、何百枚も綴っております、皆さん方の若い頃の、子供さんを連れて来られた頃のまだ頭が真っ黒でふさふさとしている写真がたくさんございました。また、今亡き野村先生や高木先生、そのほか正野さんのお父さんや三好さん、あらゆる方の若いころの写真がありました。見とれておりましたら、風呂の時間を忘れてしまいました。その

中から持ってきたのが、この二枚でございます。右の方のお二人の写真(ご夫妻お二人で写っているもの)は、創立三十年の時のものでございます。昭和四四年十一月二五日で、十年に結婚され、八幡にお遣わされになられて三十年の記念会の後でお撮りした写真でございます。これを見ますと、三十年間いろいろな戦いの中にあつて牧会の中を歩んでこられました姿であります。写真は不思議にその人の歴史を物語りますし、真実を表すものであります。よくご覧いただきましたと思います。それからその左側にあるかわいい写真(子供さん四人が写っている)がございますね。これは、昭和三十年のクリスマスの時に写したものでございます。何とそこにおられます誠さん、皆でマコちゃんマコちゃんと呼んでいました。四歳でございます。次に俵雄さんの武勇伝、会社での経営者になられるまでのいろいろな働き、また千葉での教会での活躍。また咲子さんの百合子先生の晩年の手とも足ともなつて杖のようにして、本当にいい介護をされました。そういつたことを思い出すわけでございます。本当に感謝です。和義先生は、申すまでもなく皆さんご存知のとおり、急転直下、献身の転向をなされました。その時に、先生が創世記の御言を引かれまして、「主の山に備えあり」ということでお証詞なさいましたように、本当に神様のお導きによつてこ

のようになつたと。その後ろには、ご両親を初め教会の皆さんの深い祈があつたこととございますけれど、本当に素晴らしい牧師先生として両方の教会の牧会をし、私達を導いてくださつていらつしやいますことは、本当に感謝でございます。今日のお導きを主に感謝し、また百合子先生のいろんなお導きに対して心から感謝をささげて終わりにしたいと思ひます。先生の信仰を継承して後に続けたいと思つています。

金生先生

今、廣田さんが五島うどんのことをお話されていましたけれど、私もよく五島うどんを戴きました。それともう一つ思ひ出すのが、お赤飯を戴くんです。私達の感覚では、お赤飯にはゴマ塩なんです、先生の所ではゴマと砂糖が生まれて、五島出身の江口さんに聞くと、「五島ではこれが普通です」と言われて、百合子先生も五島を思ひ出しながら作つておられたのかな、と思ひ出しました。

河本信生兄

今まで皆さんが異口同音におつしやいました、百合子先生といえは笑顔、優しさ、廣田さんのお話によつてすべて語り尽くされた感があります。何も付け足すことはありませんけ

れども、先ほど和義先生が説教の中でお話になりました、私の母が百合子先生と利三郎先生の事を申し上げたことについて、もう一つ追加させていただきます。

母は非常に肝つ玉の据わつた女性でありまして、言いたい放題を言い残して召されていった人であります、彼女が「悲しむ人と共に悲しむことは容易である。けれども幸せを分かち合うこと、本当に喜んであげることには至難の業である」と言うようなことを言つていました。成る程そうだろうな、妬みはしても、一緒に喜ぶことはなかなかできないことです。彼女はいろんな面白いことを言つておりましたので、家内と毎日のように思ひ出しては、感心したり笑つたりしておりますけれど、その中にそういう事がありました。

百合子先生は、本当に私どもの悲しみも喜びも我が事のように受け取つてくださり、ほかに類を見ない御方でありました。また、理非曲直(間違つたことと正しいこと)にシビアであられた方であります。間違つたことには非常に厳しい姿勢で対しておられました。これは優しさの下にある人間としての誠に毅然とした態度でありました。先ほど和義牧師の説教の中で、百合子先生のお祖母様からの仏教の教えによる道徳律についてお話になりましたけれど、そういうことが行動の規範になつていたんだなあとということを思わされます。すべ

てが神様によつて備えられていたことだったということを感じ、感謝し、また驚嘆するわけでございます。

それともう一つ、百合子先生が本当に柔和な態度で、いつも集会で前の方に座っておられましたけれども、そのお祈りとお証詞は、簡明で非常に心を打つものでありました。言うことが非常に的を得ている、百パーセント神様に信頼しておられたことがよく分かりました。非常に印象に深く残っております。百合子先生と利三郎先生は、今も私どもの家族の心の中に共に生きていてくださいます。本当に感謝しております。

林由記子姉

私は、四三年に結婚してこちらの教会に導いていただきましたけれど、いろんな面でご心配をお掛けし、切に祈つていただいたことを、本当に感謝しております。どんなに先生方が信者一人ひとりのために心を懸けて祈っておられたことが、本当にその事を忘れることができません。いろいろなことで牧師館をお訪ねした時に、奥様はいつも先生と一緒にお話を聴いてくださつて、ニコニコとして笑顔を絶やさないで聴いてくださいました。そしてどんな時にも、「よかつたね、よかつたね」と言つて、心から喜んでくださいました。本当にいろ

んな面で心を懸けて祈つていてくださったなあということが、今もよみがえつてまいります。いつもいつも優しく、ニコニコとされ、奥さんのお顔を見せていただくとホツとするような思いで、いっぱいございました。また先ほど廣田さんのおっしゃつたように、教会のお掃除の時にも有名な五島うどんを初めて私も戴いたんですけれども、奥さんが本格的に作つてくださつていらつしやるので、おいしくて本当にいくらでも食べられるというようにとても美味しく戴きました。それから、時々五島うどんを目にすると買って帰つて作りました。

いろんな面で信者一人ひとりに心を配つてくださつて、祈つてくださつていたんだなあということが、本当に今でもどんなに感謝してよいか分かりませんが、百合子先生の信仰に倣つて、少しでもその歩みに倣う者になりたいと願つております。ありがとうございます。

大田邦子姉

本当に奥様がお召されになつて一年なんて思えません。今も生きていらつしやると思います。と言うのは、百合子先生がお倒れになつてもちつとも変わらない信仰と、信仰の姿勢と、にこやかなお顔、百合子先生の印象と言えば、素晴らしい

牧師夫人でいらつしやるし、教会のお母様でいらつしやるし、そして身も魂も美しくいらつしやるということ。いろいろのお交わりをさせていただいておりますと、素直で従順で、榎本先生が「先ず、主にお従いしなさい」と、もうその通り、奥様が本当に従順に素直に、事ごとに歩んでいらつしやるお姿が思い起こされます。

そして、奥様のこととして、先ほども和義先生もおっしゃいましたけれど、先ず思い出される御言が、「わが義人は、信仰によって生きる」。それと、エレミヤ書三三章の「事を行ふエホバ、事をなしてこれを成就とぐる」エホバ、其の名をエホバと名のる者かく言ふ、汝我に呼び求めよ」と、ヨハネ書二十章の「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」です。

「どうしても、私達は見ないことには信じられませんよね」とよくおっしゃってくださっていらつしやいました。うちの母が不思議な神様の御業でもって救われて天国に帰らせていただきましたけれど、その時におっしゃったのが、やはりこの「あなたは私を見たので信じたのか。見ないで信ずる者は幸いである」と、本当になかなか信仰が持たなくて、榎本先生や奥様に相談に伺った時にも、「大田さん、なかなか見ないで信じるということは、難しいわよね」とおっしゃってくださっ

て、でも、最後に神様が御栄光を現わしてくださいって、天国に召された時に、奥様が「よかったですよね」、そして「信仰の弱い者には、弱い者のように具体的な事実をもって見せてくださいますよね。神様は懇ろな方ですよ」と、事ごとにそれをおっしゃっていらつしやいました。本当について見る所にかされる信仰になりがちな私に、本当に奥様が「お互いに見ないで信じる者に成りましょうよね。でも、神様はそれをすべてご存知で、分からない者には、神様御自身が生きていらつしやるということを、御業をもって現わしてくださいますよ」とおっしゃってくださいました。

それと、「わが義人は、信仰によって生きる」と、榎本先生ともども、本当に神様の聖書にある御言の標準に達するまでと、そこに目を向けて歩んでいらつしやいました。

榎本先生もおっしゃっていらつしやいましたが、自分の極端な信仰には家内も大変だったと思うと。また奥様も特に小さなお子様を天国にお召された時に、本当に信仰が持たなくなつたとおっしゃって、「なぜこんなに早く召されるんだつたら、与えてくださらなければよかったです」とおっしゃって、榎本先生にも大分盾を突いたとおっしゃっていらつしやいましたけれど、それを通して、榎本先生は講壇から、私達にも神様の御愛を分かせていただきました。だから本当

に通らなければ分らないところを、神様が厳しいけれども教えてくださる、とおっしゃっていました。

榎本先生は晩年、入退院を繰り返していらつしやいました。その中、奥様が十一年か十二年前ですかお倒れになった時に、榎本先生は、朝に夕に病院にいらつしやつて、とうとう先生もご一緒に入院ということになられた時に、奥様が「私うれしかったです。もう、主人が来てくれました」とおっしゃつて、ちよつとびつくりしたんですけれど、でも先生がそれほどまでに朝に夕に病院にいらつしやつてご看病されて、力づけてお帰りになつて、「先生、よくおできになりますね」と申し上げたら、先生は「いや、私は家内がいないと困りますから」と、奥様も先生も、本当に主にあつて一つになつてお姿は素晴らしいと思ひました。

ふと思ひ出しましたが、奥様が、先生の腰のベルトにつかまつて、リハビリを兼ねての散歩をしていらした時に、通りすがりの方がその姿を見て、「本当にお年になられて麗しい。自分達もこうありたい」と言われたという。それを聞いた時に、私達も年老いて、入り口に立たせていただいています。先生ご夫妻に倣う者となりたくないと願つております。

今年「神はそのひとり子を賜つたほどに、この世を愛して下さつた」と、その御愛を深く強くおっしゃつていただいで、

四日の礼拝の時、和義先生が「私どもは創世の初めには輝いていた者が、罪を犯したばかりにこういう姿になりました。だから今一度創世の初めに立ち返つて、輝く者となりましょう。そのために十字架が立てられたのです」と、それをフツと思ひ出しまして、本当に先生も奥様も輝いてお召されになりました。私達も、ただ、神様の御霊によつて清められ、日々新たにされ、もう残る所どのくらいこの地上に置かれるか分かりませんけれど、本当に自分が弱つてくると、つい目が神様から離れやすいものですが、この度も聖会で恵まれました、そうだ、外なるものは本当に弱つてきましたけれども、内なる人は十字架によつて輝いて、先生ご夫妻に倣つて、また神様が善にして善をなし給う主がしてくださいますからと思つて、大きな望みを持たしていただきました。特にこの記念会があるという事を伺ひまして、なおのこと、先生ご夫妻の歩みを振り返らせていただいで、本当に感謝でございました。

先ほど野村さんがおつしやつたように、最後に入院される時、先生がもうこれが最後かもしれないからと、握手しようと手をお出しになられたら、手が出せませんでしたとおつしやつておられました。それから、先生が入院される度に、今度は最後か、今度はもう最後かと思つたんですけれども、まだ地上での御用があつて返されて感謝ですとおつしやつてい

らっしゃいましたが、召される時には、もう涙も出ませんでしたとおっしゃっておられました。とにかく、私達のようにサラリーマンではありませんし、三六五日、二四時間一緒におりましたから、本当にもう言葉では言い表せません。涙も出ませんでした。だけど、今は思い起こしながら、寂しいですけれど、主が共にいてくださいますから、とお話してくださいました。本当に、私どもの先を歩んでいただいて感謝です。

奥様のお召され方については、もう言葉がございませんでしたけれど、和義先生がおっしゃったように、神様は一番良いことをなし給う。お風呂に入られて身も奇麗にされて、身も魂も清められて召されたんだからと、少しずつ私も冷静さを取り戻させていただきましたけれど、本当に感謝でございました。

それと、誠さんの奥様がおっしゃったように、誠さんたちが結婚される時、何もなかったし、百合子奥様が「どうしましよつかね」とおっしゃられて、じゃ、お弁当を作りましょうかと、私は上手じゃないんですけども、ケーキを作って三段重ねのお弁当を皆で用意することができました。それこそ、百合子先生はお召されになる少し前に、「あの頃はよかったですね」とおっしゃってくださいました。本当に懐かしいと言

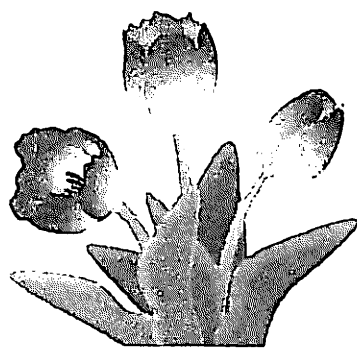
ますか、いろいろ失敗もございましたけれど、本当に懐かしい思い起こします。

それと、高木さんが結婚の事でご相談に行ったら、榎本先生が、「ただ、主にお従いして示された道を歩みなさい」と、また「神様の御旨であるならば、相手様がどうであろうと」とそういう風におっしゃったらしいんですね。そしたら高木さんが「先生は、美人ですべて揃っている奥様だから、そんなことが言えるけれど……」とおっしゃったとか、今そのことをフツと思ひ出しました。

私達夫婦も、だんだん先生方のお年に近づかせていただきましたが、本当に輝く者でありたいと願っています。老いは未知の日々です。よく忘れるし、こうなっていくんだなということを確認する日々です。私は昔旅をした時に素晴らしい夕日を見まして、ああ素晴らしい、本当に人生もあのような最後であつたらいいな、と思ひました。夕日が湖面をキラキラと照らして、静かで美しかったです。

和義先生が、私達が老いて弱って行くこの時、主が十字架を立てて、光を与えてくださっているのだから、この御方の光を受けて輝いていたい。また、イエス様を目指して生きていきたいとおっしゃってください、本当に力を与えていただいて、この記念会を通して今一度新たにさせていただきまし

ことを感謝いたします。



金生先生

私が来てから榎本先生は、毎年のように入退院を繰り返されて、私は萩原中央病院には自分自身はかかったことはないんですが、行けばハツと目を向けられるような時を過ごさせていただきました。大田さんのお証詞の中にありましたように、百合子先生が、本当に先生の所にお見舞いに行かれています。百合子先生もきつそうだから、「私が行ってきましようか」と言っても、「いや、私も行きます」とおっしゃって、一緒に行ったことをもう一度思い出しました。それ程、先生と一緒にいることが喜ばしいことであつたんだと思うんです。で、家内と結婚した年だつたと思うんですけども、冬

に先生が入院をされたことがあつたんですね。百合子先生は、その時に梨を準備して欲しいとおっしゃられたんです。梨が熱を下げるのによく効くと聞かれていたそうで、私と家内ではいろんな所を回り巡りながら、梨を買って行ったら、それをジュースにされて持っていったのです。それ程先生のことをよく思つて、ご自身のお体も大変だつたと思うんですが、それだけ一生懸命に看病されて歩んでいかれたんだなということとを、もう一度思い出させていただきました。

大田敏夫兄

今、萩原病院の話がありました。そこで、私も二、三回奥様とお会いしたんです。「奥さん、一緒にお茶を飲みましょう」と言つて飲んだときのお話ですけれど、「もう、うちの主人が大阪集会に日帰りで行き来して、本当にかわいそうな。どうして和義を代わりにやらんのかね」と言つておられたことを思い出しました。私と奥様とは、年が同じなんです。大正四生まれ、奥様が七月生まれ、私が三月生まれで、ちよつと私が見さんなんですね。そういつたご縁と、奥様が五島生まれで、私の携わつてきた会社の車えびの仕事も、種子島、台湾とウロウロしましたけれど、最後に五島に落ち着いて今やつとるわけです。五島という所は、本当に美しい所です。あそ

こで生まれた方だったから、よほど心も美しい方だったんだ
と思っただけです。今車えびも瀬戸内海が非常に美しい綺麗な
所ですけれども、もうあそこではなかなか順調に育たないん
です。五島は、まだまだ本当に美しい所です。五島に二、三
回行ってきましたけれど、あそこで生まれて、あそこで育つ
て、幼稚園も行かれて、それから長崎、福岡と行かれたそう
です。本当に優しい奥様で、私は信仰が薄いもんですから、
信仰のお話はできませんけれど、まあ、俵雄さん、和義先生、
誠さんと立派な男のお子さんを残しておられますけれど、最
後にいちばん力になってもらったのは、咲子さんと、信子ち
やんとか牧ちゃんとか、女のお子さんだったのです。だから、
やはり子供というのは女の子をつくつとかないけないかと、
これは金生先生と栄子先生にお願いですよ。男の子ばかり
じゃ、やはりいざという場合に困りますよね。本当に咲子さ
ん、信ちゃん、牧ちゃんご苦労でございましたね。おばあち
やんがお召されになって、一番悲しんだのは咲子さんとお孫
さん達と思います。

去年のお正月に記念写真を撮りましたが、私は奥様の横に
座って、お互いに米寿、八八歳ですからね、長生きしましよ
うねと言いつつ、その後に咲子さんの腰をつかまえて帰られた様
子を、今まだ思い出します。今その「ぶどうの木」の写真を見

ていますが、たまりませんね。ま、奥様、お風呂で倒れたと
聞きました時に、榎本先生が天上で、「はよ来い。はよ来い」
と言われたらどう思うと思いますが、今頃は、仲良く話し合っ
ておられると思います。本当にご苦労様でした。ありがとう
ございました。

石田秀子姉

一言、感謝させていただきます。百合子先生、榎本先生、
に常に交わりをいただいで、愛の労をいただきました。もう、
どんな時にも先生方の懐に飛び込んでいって、どんな時間
帯であっても先生方に受け入れていただいで、お話をご夫婦
でよく聴いていただき、私がわんわん泣けば、先生がちり紙
を取ってください、心が鎮まるまで待つてください、お
話を聴いて共鳴してください、また、信仰に立ちましよう
ということでお祈りをしてくださいました。どんなにご迷惑を
お掛けしたか分かりませんし、どんなにご愛をいただいたか、
その事で今まで生かされてきたと思います。本当に先生ご夫
妻には、どんなにか多くご愛をいただいたかと思つていつも
感謝しております。さまざまなきがかりましたので、常に
先生方の所に飛び込んでいけた、また、それを受け止めてく
ださったということ、素晴らしい先生ご夫妻にお目に掛かって

どんなに私の人生が変わったか。今あるは本当に先生方ご夫妻のお祈りによつて生かされていると思います。

引越しの時も、「その時に二人で行こうと思つていたけれどね、邪魔になつたらいけないから、後で祈つてあげるからね」と言つてくださり、後で来てくださいます。御言をもつて励ましてくださいました。詩篇八四篇十一、十二節「主なる神は日です、盾です。主は恵みと誉とを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです」との御言をいただきました。「本当に良かったねえ」と心からそう言つてくださつて、本当に感謝でした。

それと晩年になられて、先生の腰のベルトを掴んでこの辺りを毎日散歩しているお姿、私も介護の仕事に携わらせていただいている者ですけれども、そのサポートの最初は先生でした。後は咲子さんと牧子ちゃんが、本当に麗しい姿で毎日散歩されていたお姿、今もその辺りを見たら先生がいらつしやるんじゃないかと、いつも思います。本当にあれ程の介護はとでもできるものではありません。百合子先生の歩みの一歩がどれ程時間が掛かるだろうか、私達が、ちよつと用事でその辺に出かけて帰つてきまして、まだ公団の前を「あら、あそこまでしか行かれないのか」と思うくらいに、本当に

ゆつくりゆつくりとした歩みで散歩なさつていたことを、本当に咲子さんが、牧子ちゃんと二人で介護なさつていたお姿が本当に焼き付いております。「前田小学校の横の公園で歩いているんよ」とおっしゃつて、私も犬の散歩の時によく会つておりました。「あつ、先生」とか言いながら、うれしいものです。すから飛んでいって、「先生、足の運びがいいですね」とか言いながら、見せていただき、「はい、二人がこんなにしてくるからねえ」と言つて、本当に幸せなお姿を見せていただきました。本当に幸せな先生だと思ひます。あんなに娘さん、またお孫さんから愛されて、あれだけ介護していただいたなんて素敵だなあと思つて、いつも見せていただきました。

私は、母が早くに亡くなりましたから、百合子先生をお母さんと思つておりました。そして、どんな時でも、何時でもいいんだよ、先生が三六五日、二四時間立てられているんだから、夜中でも遠慮なく電話しなさい、何かあつたら来なさいと、それ程に言つてくださつておりました。本当に、どんなにご迷惑をお掛けしたか分かりませんが、それを受け止めていただき、交わつていただいて共に泣いてくださり、共に喜んでくださいました先生方のお姿が、いつも思い出され、励みにしております。

信仰のことでは、足元にも及ばないものですけれど、ただ

先生方の御愛をいただいた者として、先生方の足跡を踏んで行きたいといつも思っております。本当にどんなに感謝してよいか言葉が出ませんけれど、私は、先生方ご夫妻にお目に掛かったことが、生涯の私の宝ですし、先生方から愛されたことを、本当に良くしていただいたことを忘れないで、これからこの地上に生かされる間、いつも先生方のことを思っ
て歩いていきたいと思っております。どんなに感謝してよいか分かりませんが、本当にありがとうございました。

正野悠子姉

今日は、百合子先生がお召されになられてもう一年にもなるのかしらって思うような、何か複雑な寂しさと、先生のご生涯を思い起こしては、もう一度神様にお従いする姿勢を私自身問われている思いを致しております。今日はこうして先生の歩かれた足跡を、和義先生のメッセージを通して教えていただいで、襟を正させていただきます、ここから本当に神様に喜ばれる道を一步一步進めさせていただきたいと決心している者でございます。

百合子先生については、たくさん思い出と教えていただいた事柄がございますから、その一部をお証詞させていただきます。私は四四年から五十年まで、結婚しますまでの六年

間、榎本先生の所でお世話になった者でございます。先生ご夫妻の私生活、牧師館でのご生活を通して主にお従いしているお姿を目の当たりにしまして、それこそ二四時間見せていただいた者でございます、そのいただいた恵みは、本当に限らないものがございます。

その中で百合子先生について、今日は一つ思い出をお証詞させていただきます。初めにご家庭に入らしていただいた時に、後で考えると、随分身勝手なことをしたなという肉の思いがいつも私の内にございまして、申し訳ないな、ご迷惑を掛けるな、という思いが心の中にございました。

そんな中で百合子先生は、牧師夫人としてのお立場で他人を受け入れるということがどんなに大変なものであったかと想像いたします。言葉では何もおっしゃいませんでした。本当に教会でお目に掛かっていた先生と一つもお交わりにならないんです。(前に掲げられている笑顔の百合子先生の写真を指して)そのお写真の笑顔が、絶えずご家庭の中で、もうそのままのお姿だったんです。私は若い時に両親と離れたという事もございまして、少し愛に飢えているような、また何かひがみっぽいそういうものを持った性格ですから、いろいろな面で素直に受け取れない時がありましたけれど、百合子先生は、お交わりなくあの笑顔で温かく私を包んで受け入れて

くださいました。何も分からないのに、おぞうきんの掛け方から手を取るようにして教えてくださいました。そして毎日の生活を百合子先生と一緒にさせていたのですが、スムーズにさせていただけのままで、随分ご忍耐になられたと思いますけれども、一言もつぶやくこともなく、暗い顔をなさることもなく、忍耐を持ってご指導いただきました。

お魚屋のおばさんが、牧師館の玄関に毎朝売りに来ていたんです。そうすると、「悠子さん、あなたが好きだから締め鯖をしようね」とおっしゃってくださったり、こんな他人の好物にまで心を掛けてくださるなんて、本当に一つひとつの事に愛があふれていらっしゃるお姿、生活の歩みが、私には不思議な思いがしておりました。どうしてこんなにまで愛をもつて私みたいな者をも受け入れてくださるのかしらという思いと、私もいつかはこんなになれるのかなという思いが交錯しているような毎日でした。そんな中で先生方から、本当に優しくご忍耐をもつてお受け入れいただきご指導をいただきました。

百合子先生の語録集が作られるなら一番に申し上げたいのは、先ほど廣田さんがおっしゃってくださいましたけれど、「十年間、オムツ洗いの世話をさせて戴きました」というお言葉と、私が先生と二人ではたき掛けをしている時の、思わず

百合子先生がお語りになった、「私はね、一人ひとりのために祈らせていただいているのよ」という一言が心の中に止まって、それからズーツと深くその事について教えられていきました。祷告なさっているということについてのお言葉は、それが初めてで最後でした。

「ああ、そうなんですか、お忙しいのにいつそんなことがおできになるんですか」とお尋ねしたら、その事についてはあまりはつきりおっしゃらないで、「できるだけ毎日続けているのよ」という言葉を聞かせてくださいました。それから私は、ああ、ほかの方のために祈りをさせていただく祷告というのは、どうということなのかということ、祈りながら、聖書を学びながら、私自身個人的に神様から教えていただいているうちに、ああ、私にできることは何にもないけれども、この世の中の何か人のために何か良いことができたらな、そういう夢も持っていましたけれど、私には何もそんな力はないけれど、お祈りをさせていただくということは、神様の御愛にお応えする最大の愛の業なのだという風に、百合子先生のその一言からズーツと神様が私に臨んでくださいます、祷告ということの尊さを神様が教えてくださるきつかけとなりました。それから、私はこの御用だけは神様が喜んでくださるんだから、お仕えさせていただきたいという願いを、ズー

ッと抱かして今日まで至らせていただいています。なかなか不真実な者でそれを欠かすことなくということは申し上げることはできませんけれども、そういう深い感銘を受け、またご指導いただいた一言です。

それから、百合子先生は、言葉が変ですが、裏表がおありにならない。教会でおっしゃっていることも、牧師館で私が台所に行っている時に、先生とお二人で会話していらつしゃる会話の中にも違いがなく、いつも神様の前にあるということとを意識していらつしゃったんじゃないかな、と私は思うんです。本当に裏表のない、ありのままを教会の感謝会でもおっしゃるし、どこでも、どなたにでも同じようにおっしゃっていらつしゃったあのお姿は、私なんか人に知られたくないと思つたらもう言いませんけれども、百合子先生はそれがおありにならなかった。常に裸でいらつしゃいました。それはやはりいつも神様の前にいつも自らをおいていらつしゃつた、ということを深く教えられてまいりました。

それから、日常の普通の生活の中からフツと入ってきたお言葉の中に、「悠子さん、悪いけれど私を『先生』と呼ばないで、私は教会のおばちゃんだから、『奥さん』と呼んでくれない」と、心から私に頼まれた言葉がございました。「あら、そうですね。でも百合子先生は、榎本先生の奥様だから先生と

お呼びしないと」と私が言ったら、「いや、私は先生と呼ばれるような人間じゃないから、どうぞ奥さんと呼んで」と言われましたので、できるだけ切り替えようとはしましたけれど、なかなかその切り替えが効かずに、皆さんと同じように、つい百合子先生とお呼びすることが多くございました。その言葉の陰に百合子先生におありになったのは、私自身の推測ですけれども、多分ご自分が、常に神様の前に自らの姿を見ては、罪人であるという、神様の御愛によって赦(ゆる)され、生かされている者であるという、そのお立場からお出にならなかった。常に自分は神様の前には罪人で、神様から赦されて、今こういう所におかれている者だ、そのことをその言葉に表していらつしゃったんだな、その後その言葉を思い起こしながら教えられてまいりました。

いつもご集会から帰られて、何かの会話の中で、「今日の御言でこういう風に教えられたの。私はこんな所があるのよ」と、正直に私にまでその内面的な事までお話くださるそのお姿に接しまして、「ああ、本当に神様にお従いするという歩みは、これなんだな」ということを教えられました。なかなか私は、その道は歩けない者なんです。今、和義先生がメッセージの中で、いつも自らを切り替えて、御言の前に切り替えて、切り替えて進んでいかれたことをお証詞くださいましたけれ

ど、私も本当にそう思います。私も段々歳を取ってまいりまして、「ああ、私はこれだけ信仰生活を続けさせていただいた」という思いを持つことは、本当に恐ろしいことだなということ、この頃いつも警戒させられているものですから、百合子先生の歩かれた歩みを通して、メッセージや御言をいただいたら、自らの中にちゃんとそのまま受け止めて、それに対して切り替えて、悔い改めてお従いさせていただく者でなければいけないということ、百合子先生の歩かれた道を通して本当に教えられております。

お写真の美しい笑顔を拝見しますと、この会堂の改築が昭和五十年でございませぬけれど、あの時に、その前年度の秋から解体工事や大工さんや工事の方の出入りで大変な時期がございました。その中でもあの笑顔で接せられて、今も思い起こしております。私なんか、疲れたら思わずしかめ面になつてしまふんですけれども、先生はやはり絶えず絶えず祈つていらつしやうたからこそ、あの歩みをなさることがおできになったんだな、ということをお教えられています。

百合子先生ってお名前を浮かべたら、「常に喜べ、絶えず祈れ 凡てのこと感謝せよ」という御言をお体で、お顔全体でメッセージを送ってくださる感じがいたします。榎本先生についてはまた今度機会がありましたらと失礼させていただきます。

ますけれど、でも本当に足元にも及びませんけれども、百合子先生の生活の中でお歩きになられた、本当に信仰に生きてそれを全うされましたご生涯の何分の一でも、同じように主にお従いする道を歩かせていただきたいと、先生の告別式の際に、先生の最後のお姿に接しながらご挨拶しながら、長い間本当にご苦勞になられましたね、と本当にいろいろな戦いの中で、主にお従いくださってありがたいございました、と言葉をお掛けしました。

私も今から、ここから悔い改めて先生が歩かれたように、「我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり」というメッセージをその時にいただいたんですけれど、その御言に少しでも近づくように祈りながらまいりますというお約束を、先生の前ですることができました。

本当に私もこれからは、「常に喜べ、絶えず祈れ 凡てのこと感謝せよ」というこの御言に添える歩みを、時々刻々お祈りしながら続けさせていただきたいと願いながら、この記念会に出席させていただいたことを心から感謝申し上げます。

正野眞宏兄

皆様が素晴らしい思い出を語っていただきましたので、特別なことはございませぬけれども、先ほど廣田さんがおっしゃ

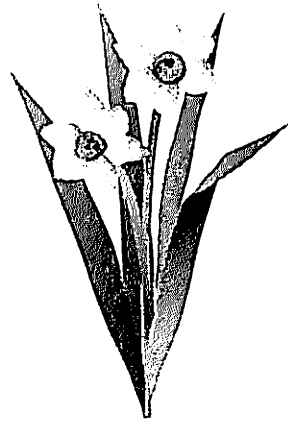
いましたように、牧師館に通ってお茶を飲む回数ほど恵まれると言われます。私はそんなにお伺いしたわけではありませんが、榎本先生にお会いするとなると、どうも、こちらが袴(かみしも)を着て、何か心構えしていかないと、こちらの不信仰を見透かされるように、そこをズバーツと言われるのが怖くて、恐る恐る行くわけですけれど、玄関に入って百合子先生の実顔といひましようか、何もかも私達の弱さを全部包み込んで受け入れてくださる、というその優しさに釣られて入りやすい、そんな感じを持っております。これは皆さんもお感じになっていくことだと思います。

私は、この優しさはどこから来ているんだろうと思いましたが。お若い時の百合子先生は存じ上げませんが、持って生まれたものなのか、いやそうじゃなくて、さつきからお話が出ていますように、やはり先生の信仰、つまり御霊によってそのような優しさが身に付けられてきたんじゃないだろうか、ということをおぼろげに思っています。それは多分、戦前、戦中、戦後のまだ信者さんも少ない状況とか、戦後の厳しい経済環境の中をお通りになって、榎本先生は命を懸けて主に従っていくという、一方奥様は子供さんを抱えて毎日の生活がある。その中で、見える所によらず信仰によって歩いてこられて、正に命を懸けて、信頼して歩いてこられた。そして

神様が、その信頼に応えて霊肉ともに恵んでくださり、その中で御霊によって練り潔められた、そういうものがお顔に出ておられるんじゃないだろうか。さつき和義先生も言われていましたけれど、「内には、たんとある、たんとある」と言われていたという事でありませけれど、本当に心が主によって豊かに平安が与えられたがゆえの言葉であると思います。それが神の器として、また御霊の実を結ぶものとして主が整えられたのではないだろうか。皆様のお話を聴きながらそういうことを思わされてまいりました。

榎本先生は、榎本先生らしくお姿が整えられ、また百合子先生は、百合子先生なりに御霊が仕立ててくださった。とすれば、小さい者でありますけれど、私は私なりに、正野真宏は正野真宏なりに、御霊が仕立ててくださる。私が榎本先生に倣って、榎本先生になろうとしてもそれはなれないわけでありませけれど、御霊が、私なりに仕立ててくださるに違いない。先々私が召された時に、子供達は私をどのように褒めてくれるか分かりませけれど、それはどうでもいい話でありますけれど、後は、榎本先生、百合子先生が歩かれたように、私もその足跡を同じように主に信頼して一足一歩歩いていけば、後は御霊がどのように整えてくださいますか、先に百合子先生がその見本を見せてくださったような、そんな

感じを持ちました。今日は大変うれしい気持ちになりました、「これからも主を見上げて信頼して歩ましていただきたい」、そういう風に思いました。



正野百合子姉

私は昭和四二年に結婚して、こちらの教会にこさせていただきました。私達は、お見合いだったんです。主人は百合子と名前が付いているから、みんな百合子先生のようにお優しくと、少しは考えたのかなあと思っております。結婚しまして、それが大違いだったもんですから、正野のお母さんが、「牧師先生ご夫妻は、本当に教会の皆さんの模範のようなご夫妻だから、あなたたちもそれを見習いなさいね。私達を見習うんじゃないのよ」と言ったんです。正野のお母さん達はさておいて、先生ご夫妻は本当にそうだな、本当にいつも柔和で、私達に優しい言葉を掛けてくださって、声を立てておおらか

にお笑いになるんですね。そのお顔を見るだけで私達は慰められ、また励まされたことか分かりません。

教会のご集會に近づきたいと思いつながら、丁度四四年十月三一日にのぞみが生まれたんですね。その年のクリスマス愛餐(あいさん)會に、その頃、毎年この時期に愛餐會というのがあつておりまして、それに出席出来なかつたのですね。したら、百合子先生が、主人にお弁当を言付けてくださったんです。たくさんいらつしやる教会員の一人一人にそういう風な優しさを表してくださいまして、私は何を戴いたか思ひ出せないんですけれど、本当にうれしくて「まあ、本当にこういう先生なんだなあ。だから見習つていけないといけななんだなあ」ということが分かりました。

先ほども皆さんが言われていましたように、「十年間オムツ洗いのご奉仕をしました」とおっしゃつたということで、私達は、家庭にあつてする仕事は面白くない、詰まらない地道な仕事で、いつも喜んでするという事はなかなかできないんですけれども、百合子先生がそういう姿勢で家庭の仕事を思つていらつしやつたんだな、と思つて本当に私達もいろんな所に遣わされておりますけれど、そこで神様の御用としてそれを受け止めてするのが本当の道だな、ということをお母さんに深く教えられました。両親が病気で倒れた時も、「あ、私は

この使命が与えられて、ここに遣わされているんだ」ということを何度も思わされて、励まされたことでございました。

また、最後に一昨年になりますね、忙しい暮れの二八日に息子が結婚したんですね。皆さんがお忙しいというのに、本人達は早くしたいと言うものですから、百合子先生に、体調がそれ程よろしいようにお見受けしなかつたものですから、まあ、ご無理かな、と思いましたが、ご出席いただけますでしょうかとお願ひしましたら、「ハイ、喜んで出席しますよ」とおっしゃってくださって、本当に感謝したんですけれど、その後何日もたたないでお別れをすることになりました。「ああ、本当に最後まで牧師夫人としてやるべきこと、皆さんが喜んでされる結婚式、本当に喜ぶ者と共に喜んでくださった」と思つて、後でしみじみと感謝しました。

本当にいろいろな思い出をいただき、その一部でしたけれど、感謝と共にお証詞させていただきました。

大口和子姉

座つたままで失礼をいたします。百合子先生は、私が小学生時代、福岡伝道館の折瀧先生の教会に属しておりました時、クリスマスの日でしたでしょうか、テルコ先生と百合子先生とミエコ様と三人で、讚美歌一四六番の「ハレルヤ、ハレルヤ、

ハレルヤ 戦い終わりで、御栄え受け給う」と、一番、二番、三番とお一人ずつでお歌いになられました時の、お優しいお姿とお声を今も忘れることができません。もう、一生忘れることができません。本当に懐かしく思い出しております。

それから随分年月が経ちましてから、福岡から黒崎の大畑社宅に引越してまいりまして、その時に、母が前田町の榎本先生ご夫妻様がおられるから連れて行こうと言ひまして、何十年振りにでしょうかお目に掛かることができ、先生方も大変喜んでくださいます。早速前田教会に属させていただきました。それから日曜礼拝に毎週集わしていただきました。

そのようなことも、百合子先生の本当に笑顔が忘れられません。そして、母が召されましてからは、第二の母親のようにして、私達大口の家族を、大変はぐくみ導き、教えてくださいます。本当に今でも父母と皆さんに申し上げるくらいに本当にお世話になりました。それで、牧師館によくお尋ねいたしておりました。ある時、百合子先生が、私の顔色が悪いからソファアにお休みなさいとおっしゃいまして、休ませていただきましたら、「生きるのも死ぬのも、主の御手の内にあるのですからね」とおっしゃってくださいまして、その時の御言葉も、お声も忘れることができません。本当に素晴らしい、いつもいつも笑顔で迎えてくださって、本当に百合の花がパ

ッと開いたような、清らかな笑顔が本当に一生忘れられません。まだまだ思い出は尽きませんけれども、今日はこれで失礼をさせていただきます。

金生先生

まだまだ皆さんの心の中には、思い出が沢山あるんだと思いますけれども、それはまた、別の機会に「ぶどうの木」にも、恐らく記念誌ということになると思いますので、そちらのほうに、特にお話するのが苦手だと言われるお方は、書いていただいたら思いのままにお証詞できると思いますので、よろしくお願いいたします。

では、今日の記念会は終わりに、一言お祈りをしたいと思えます。

天のお父様、こうして榎本百合子先生の記念会を、今日この所で執り行わせていただきましたとして感謝をいたします。百合子先生が、どのように主にお従いして信仰に立って歩いていかれたか、その一端をもう一度、はつきりと見せていただきますとして、感謝をいたします。「常に喜べ、絶えず祈れ 凡てのこと感謝せよ」と、本当にその御言のとおり、私達も信仰をもって歩んでいくことができますように、これからも主が

恵み整え導いてくださることをお願いいたします。今日集われた一人ひとりの上に主の豊かな慰めを与えていただき、また祝福を与えていただきますようにお願いいたします。尊き主イエス・キリストの御名によって、感謝してお願いいたします。アーメン。



十六 百合子先生の思い出(手記)

母からの教え

榎 本文 子(大濠)

献身するため名古屋より北九州に戻り、教会に一時泊りました。翌朝、母から「昨日までの私達の関係は嫁と姑でしたが、今日からは、主に仕える同士としてお付き合いをしましょう。そこであなたにお願いしたい事があります。人間としてのお父さんを決して見ないでください。お父さんを見ると躓きますよ。お父さんの背後にある神様にいつも目をとめてください。次に、これから私があなたにして上げる事で、嬉しいと思つた事は、あなたより若い年下の人達にしてください。川は川上から川下へ流れていきます。私はこれまでに充分神様からお恵みを戴いているので、川の流れを逆流させて、私に對して親孝行しようとか、母の日だから、お誕生日だからとプレゼントをしたり気を使つたりしないでください。あなたより若い人達こそ、子育てでお金がいるのです。その人達にいろいろしてあげてください。」と言われました。この言葉は

今も私の心に深く刻まれています。主人と結婚して三二年間、一度として母からいやな思いをされたことはありません。いつもにこやかにやさしく包み込んでくださいました。

金生先生が献身された時、一緒に教会で生活する事になりました。子供を生み育てた経験のない私は、半年ほど苦しみ悩みました。「私にはできない」と。その時、母から「他人を預かり生活するという事は、おしめを換え、ミルクを飲ませ、生活をさうけだすことですよ」と言われました。私はこの言葉で自分に死ぬ事を教えられ、半年悩んだ事が嘘のように気持ちが新しく変えられました。金生先生との八ヶ月の生活を通して、子供がいなくてもいつも自信がなく泣いていた私が、たくましくなり、その後の十一年間、いつも人様のお子様を預かつて生活してきました。

一番印象に残っていることはMさんのことです。いろいろと私の予想を超える事を起こし、母に泣いて「お母さん、あの子とはもう一緒に暮らせません。私にはできません」と訴えたことがあります。その時、母から「文子さん、Mさんはいつでも出て行ってもらえます。でも今あの子を出すと、Mさんはだめになってしまいますよ。もう少し辛抱してごらんなさい。私も祈っていますから」と言われました。こんな事が三回ほどありました。母の祈りの援護と助言がなかったら、

私は到底やり遂げられなかったと思います。牧師館の台所にいながら、母はともクールに人や物事を見ていたように思います。子供達を預かるとき、母に必ず報告しました。その度に「いい御用に預からせていただいて感謝ですね」と言われました。そして「おしめを換え、ミルクを飲ませる事からはじめるのですよ」と、一人ひとり、新しい気持ちで接するように教えられました。今は、母の姿を目にする事は出来ませんが、いつも私の心の中に生きています。何かあると「お母さんなら、どうされますか？」と、母に問いかけている自分があります。「わが義人は信仰によって生きる」。生涯を誠実にイエス様に従い、生きてこられた母の歩みに習いたいと思います。

伯母の思い出

江 口 亮 子 (大濠)

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、
人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」

(詩篇八・四)

私は今、大濠公園教会で礼拝を守らせていただいている者です。私は時々、私のような者が、神様を信じ、神様のお恵みの中に過ごさせていただいていることを、不思議に思うことがあります。

そもそも私の先祖を遡ってみると、キリシタン禁制の折、幕府の命令とはいえ、踏み絵をさせていた小さな村の代官でした。そのような者の子孫である伯母(百合子)を、神様は牧師(榎本利三郎先生)の所へ嫁がせていただき、私をも呼び寄せて、主イエス・キリストの救いへと導いてくださいました。神様の不思議な、そして大きな摂理を思わざるを得ません。

私は中学三年から六年間(昭和三五年〜四十年)、伯母の家である榎本家に住まわせていただき、お世話になりました。当時は伯母の家族も多く、教会の方も何人かおられ、とても賑やかだったことが思い出されます。

五島の小さな田舎から出てきて、キリスト教のことも、神様のことも何にも知らずに、八幡に来ることだけがうれしくて、楽しくて、祖母から「八幡の伯母ちゃんがおいでと言っているけど、どうするね」と言われた時は、二つ返事で「行く、行く」と、喜んで出て来ました。

私の小さい頃は、夏になると、榎本の家族が五島へよく遊びに来ていました。また、祖母に連れられて、八幡へは度々

行っていましたので、従兄弟達とも兄弟のようによく遊んでいましたし、伯父や伯母がとても優しく、大好きでしたので、祖母と別れて暮らす淋しさや悲しさも、さほどのことでもなかったようです。

今にして思えば、経済的にも一番苦しい時に、食べ盛りの子供が私を入れて五人、そこに教会の人の出入りも多く、普通の家庭では考えられない状態だったので、伯父も伯母も「来る人は拒まず」、喜んで迎えていました。さぞかし、大変だったことと思います。もつともつと、お礼を言うべきだったと悔やまれます。伯父はどんなに大変な時も、「主の山に備えあり」、天に宝を持っているから大丈夫だと、口癖のように言っていたのを思い出します。信仰はとても厳しかったと見聞きしていますが、私は「優しい伯父さん」としか思い出せません。伯父が召される一年前だったでしょうか。木曜会に出席させていたでいる時、聖書のお言葉で分からない箇所があったので和義先生に聞いていたら、「そういう神様の話が一番好きだ」と言っていて、ニコニコしている伯父の顔が印象深く残っています。

私の好きな聖書のお言葉の一つに、「母はこれらの事をみな、心に留めていた」(ルカ二・五一)があります。私もなるべく物

事を心の内に留めておきたいと思うのですが、なかなかできません。伯母は、よく人の相談事やいろんな話をじつと聞いている人でした。多くの助言をしたり、押し付けがましいアドバイスなどはしなかったと思います。でも、話に来られる方は、安心したような、そして安堵した様子で帰っていかれていました。今思うと、伯母はマリヤさんのように、「これらの事をみな、心に留めて」祈っていたのだと思います。

また、脳梗塞で倒れ、その後遺症で足が不自由になりましたが、その事で愚痴を聞いたことがありません。率直に自分の状態を受け入れ、なるべく人の世話にならないように努力していました。

伯父や伯母が晩年になってからですが、伯母の弟夫婦と妹と私の四人で、一ヶ月に一度八幡に出かけて、兄弟寄りをしていました。伯父が召されてからは、この一ヶ月に一度の逢瀬を、伯母は一層楽しみにしていたようです。少女時代の事、代用教員をしていた時代、運動会の出来事、若い頃の話、戦争の時の事、姉弟妹が仲良く昔話に花を咲かせ、時間の経つのも忘れて、笑い転げていました。

まさか、こんなに急に天に召されるとは、誰も思っていないのでした。シヨックは大きかったです。もつと頻繁に八幡に出かけて行っていたらよかったのにと、皆で悔やみま

した。

いつだったか、私が五島にいる時、「ここにおつたら、神様からドンドン離れてしまふ気がするから、早く五島から出たい」と言いましたら、伯母も若い頃から神様を信じていたそうで、自分も五島で代用教員をしている時、結婚の話が持ち上がり、ここにいたら神様から離れてしまふと思つて、福岡へ戻つてきたのだと話してくれました。

もつと信仰のことや、いろんなことを聞いておけば良かった、聞きたかつたなあと思います。

伯父や伯母に、深く深く感謝します。また、お二人の祈りによつて、神様が私を導いてくださったこと、イエス様の救いに預かることができたことを、心から感謝して終わります。

百合子先生の思い出

正 野 悠 子（大濠）

百合子先生は、ご自分のことを「教会のおばちゃんだから、先生と呼ばずに、『奥さん』と呼んでください」と私に言われましたが、尊敬する信仰の師ですから、先生と呼ばせていた

だきました。

先生は真の家庭婦人でした。忠実に家事をなさる方で、修養生として教会に入らせていただいて、まず驚いたのは雑巾の数でした。手作りの雑巾掛けに十数枚干してあり、拭く場所によつて決めてありました。

製鉄所の煙突からのほこりで、絶えず汚れていましたから、お掃除が大変だったのです。板張りも、教会への階段も黒光りしていました。お料理もノートを見て、分量どおり作つておられました。五島のご出身でしたからお魚好きで、下関から新鮮な魚をしょつて、戸別に売りに来るおばさんから、玄関先で活きた飛魚や鯖を買つて、ご自分で上手にさばいておられました。時々、「あなたが鯖の茶漬けが好きだから」と言つて、私のために作つてくださることがあり、「私にはできないことだなあ」と思っていました。

榎本先生が御用でお留守の時は、押入れの掃除や片づけをされていまして、私は横でアイロンかけのお手伝いをさせていただきます。いただいたりしていましたが、その時は、昔の思い出話や主から教えられたことなどを話してくださいまして、すばらしい恵みの時でした。

「十年間、オムツ洗いの御用に仕えさせていただきました」と話してくださいったのも、その時でした。洗濯機もない手洗

い、まして紙オムツもない時代に、母親業にとつて大変な重労働だったはずの仕事で、「主から託せられた御用」として受け止め、努められたと伺い、私は恥ずかしい思いでした。

と申しますのは、私は家事を軽んじる思いが強かったからです。それから、私は神様の前に悔い改めて、主からの御用として家事を受け止め、面倒に思っていました拭き掃除も、主がさせてくださる御用だと自分に言い聞かせて、お仕えるようにしましたら、とても楽しくできるようになりました。

ある時は、榎本先生の書齋兼応接間の障子にハタキを掛けながら、思いついたように話してくださいましたことに、「先生とお二人で、毎日、信者さんの個々人の名前を挙げて、恵んでくださるようにと、祈っている」ということでした。「祷告」という事を初めて知ったのは、その時でした。主が喜ばれる事ならと、私も一念発起、教会の祷告簿を戴いて、始めさせていただくようになりました。主の前にさせていただく唯一の愛の業と信じて、続けさせていただき、今に至らせていただいていることは、人生の大きな宝です。(子供達にも、引き継いで行きたいと願い、祈っています。)

ある時は、ご自分の内にある、どうしようもない汚れに苦しまれ、唯々、祈っておられた時、初めて主の十字架の血潮の贖いの尊さを悟られ、解放されたお証しも伺いました。

また、榎本先生のメッセージが、信者さんに「肉的にはなく、霊的に受け取られ、恵まれていただくように」と、礼拝や集会中は祈り続けられていると話してください、驚きました。

夏、榎本先生と御用でお出かけの時は、「薄紫の大きな花柄のアンサンブル」を着て行かれ、とてもお似合いで、裕福な家庭の奥様のように見えました。一度だけ、夏の日の祈禱会に、ご長女の咲子姉とお二人で、浴衣姿で出席され、女性らしい、可愛い方だなあと見とれていた記憶もあります。

時折、頭痛を起こされて、休まれましたが、教会の御用がある時はスツと起きられ、支障なくいつもの笑顔でお仕えなさっているのです、私には不思議に思えました。必要な時に、必要なだけ、健康も全て、神様は備えてくださる方だと、しみじみ教えられていました。

百合子先生とお話している時、時折、少しうつむき加減で口をつぐまれていましたが、会話の中でも祈っておられたのだと、後で感じました。なかなか私にはできないことです。

どんな時にも失われないあの晴れやかな、美しい笑顔(利三郎先生の告別式の時だけは、そのお顔から消えていましただけに、胸が痛みました)を思い出すことに、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい」とのメッセージを語りかけてくださいます。

百合子先生のご生涯の根底を貫かれたのは、「生命まで捨てて、罪の贖いをなしてお救い下さった、主イエス様の御愛にお応えしたい」という一念だけであられたと教えられ、励まされ続けています。

山本明彦

百合子先生の思い出

河本米子（前田）

事ある毎に牧師館に駆け込んで、お祈りしていただいた日々が思い出されます。

いつも変わらない穏やかさで、大きく大きく包んで、総てを受け入れてくださった百合子先生。いつも榎本先生の横に座って、ニコニコと信仰薄き者の泣き言を、親身になつて聞いてくださいました（詩篇四・一）。

時には優しさの中にも、毅然と手を大きく拡げて蔽い守るようなアドバイスをなさり、深いご慈愛に安堵させられたものでした。どんな時にも主に信頼して生まれ、身をもって数々の尊いお証しを残してくださいました百合子先生。言い尽くせないお恵み、唯唯、感謝でいっぱいでございます。

娘達にも電話で尋ねて、一言ずつ記させていただきました。

稀に見る穏やかなご婦人。

桁外れのおおらかさは、人一倍すごい信仰からきたものなんでしょうな。（長女潔子の主人。長女に語った感想）

長女 山本潔子

牧師館は目茶目茶忙しそうだったけど、おくびにも出さないで、ゆったりとなさってた。でも、存在感一杯だったし、先生のおられる所いつもご一緒でした。ピリピリ神経質の反対側だった百合子先生。こんな生き方できたらいいな、と思つてました。

次女 中川 恵

幼い頃、よく牧師館に遊びに行つた。

いつも手作りのプリンがあつて、ご馳走になるのが楽しかったです。ちよつと焦げたカラメルの懐かしい匂い。

姿勢正しく厳格な榎本先生の傍で、いつもニコニコ優しい笑顔の百合子先生。おらかなあの笑顔で、誰もが皆、癒されたんだよね。

三女 河本 真理子

かわいいおばあちゃま、の印象です。

からだがきついと、機嫌良くない事も、腹立たしい問題もあつたでしょうに、いつでもゆつたりと包み込んでくださる雰囲気に、私はすっかり甘えておりました。

お手製のプリン、懐かしいな。

百合子先生の思い出

秦　　夕　　ネ　　ノ（前田）

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。

すべての事について、感謝しなさい」

前田教会に転会させていただいた頃の事でございます。

牧師館にお伺いいたしました、先生は留守で、百合子先生とお交わりの時を持たせていただき、とてもうれしゅうございました。いつも穏やかな笑みを満たしてお話のできたこと、物静かなお方だと、時折声を出して笑われますので、私は心碎けて、幼い時から入信まで、本当に神様の見えな御手の内にあつたこと、くすしき事の数々を、いろいろ話は尽きませんでした。つい調子に乗っておしゃべりして恥ずかしくなり、ごめんなさいと申し上げたことでした。

「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものを目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」

百合子先生は、「人それぞれ異なった道を主が共にいてお導きくださるので、本当に感謝ですよ。ちつとも恥ずかしいことありませんよ。秦さん、私も同じですから」と、心碎けてお答えくださった優しさは、心豊かにさせられました。そして、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とありますから、神様の幹に連なるものとして、導き手であり、完成者であられる方にお委ねして行きましようね」と、温顔微笑んでおっしゃった優しさは、今も懐かしく思い、とても感謝しております。

人の心を暖かく包んで、愛の心をもって接してくださるお姿は、脳裏に刻まれて深く印象に残っております。その御足の跡に従いたいと、常に思わされております。

百合子先生が御召天されて、やがて三年になりますが、あの日、元旦礼拝後の記念写真などを共に過ごし、午後の聖会が済んで帰る時、あの曲がり角でお別れた時、いつもと変わらずにこやかに笑みをたたえつつ「お気をつけてください」と、手を振って車椅子で帰られた、あのお姿は私の心から消えることはありません。

やがて相まみえる時の近くあることを偲びつつ、簡単ですが、思い出のひとつこまをしたためさせていただきました。

榎本百合子先生の思い出

正野百合子（前田）

前田教会の牧師夫妻は、私達の理想のカップルだから、私達夫婦を見るのではなく、教会のご夫妻を見習いなさいと、姑から言われたことがあります。そのとおり先生は奥さんに優しく、奥さんはいつもニコニコされていて優しく、ほほえましいご夫妻でした。

年を取られて奥さんの歩行が困難になられてからは、いつも手をとって散歩され、足が弱らないようにと労っておられました。先生がなくなつてからも「いつも感謝しております」と、主に信頼されて過ごされた百合子先生でした。

一月二日の朝の聖会の前に訃報をお聞きし驚きました。昨日までお元気で聖会に出られ、記念撮影の時もにこやかにさされていきましたので、信じられない思いがしましたが、神様が使命が終わつたから帰りなさいと召されたのだと思えました。

奥様は前田教会にはなくてはならない存在でした。信仰の面では厳しい先生によく仕えられ、信者一人ひとりによく気を配つて、話を聞きやさしくしてくださいました。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタイ五・九）

牧師館に行つてお茶を飲む人ほど恵まれるという、謬もできたくらいです。牧師館訪問が毎月あつていましたので、そのうち行つてみようと思つていましたが、いろいろな都合で行かなかつたのが残念です。

今年の暮れ（十二月二十八日）の長男の結婚式にも快く出席してください、祝福してくださいました百合子先生ありがとうございました。

これからもお二人を模範として一歩でも近づけるように祈つて行きたいと思えます。

思い出

廣田千穂子（前田）

百合子先生に初めてお目にかかりましたのは、昭和二十七年

の春だったと思います。仕事を終えて、夕方廣田と牧師館をお尋ねして、私共の結婚についての相談で伺いました。

ちょうど夕飯時で、百合子先生は誠さんをおんぶされ、三人のお子さんは食卓に着いておられました。百合子先生はニコニコと、「さあ、どうぞ」と、優しい眼差しで私共を招いてくださり、暖かな雰囲気緊張も緩み、先生からいろいろとご指導を戴きましたことは忘れられません。

和義先生が、その頃の夕食のご様子をお話になられますが、その時の場面が鮮明に浮かんでまいります。

土曜日、会堂の掃除に出させていただくようになって、榎本先生と一緒にのお茶のひと時は、皆さんと共に大切な楽しい時間でした。

時折、榎本先生が大きなお鍋を抱えられて階段を上がっていらつしやる時は、百合子先生の故郷、五島の地獄うどん、百合子先生の絶妙な御だしに、皆さんニコニコ顔で会話も一段と弾みました。

両先生から心に深く刻まれる信仰の歩みを導いていただき、感謝でいっぱいでございます。

平成十年十一月一日の礼拝後、十一月の信徒会例会を我が家で開いていただきました。榎本先生、百合子先生、遠い所

をおいでくださり感謝でした。信徒会が終わったあと、廣田の受洗五十年を感謝してのひと時を持たせていただきました。



広田兄宅での信徒会

百合子先生からの最後のプレゼント

尼 田 隆 己(前田)

百合子先生には、俵雄君の友人として、高校生の頃から本
当に可愛がつてもらいました。その後、信者として歩む時も、
常に笑顔で接していただき、その生活態度を通して、主に有
る家庭の根本を示していただきました。尽きない感謝をお捧
げいたします。

百合子先生の葬儀を通して、恵まれました事をお証しさせ
ていただきます。前夜式の俵雄兄の挨拶で、「父の時も、母の
時も、最後を一緒にいてやれなかった。悔やまれますが、先
日の聖会でのお話に『わたしがおこなえば、だれがこれをと
どめることができよう』、そうだと神様が言なつて下さっている
のだ、と感謝して委ねる事ができた」、こういう信仰に立って
いる事をお証ししていました。

私も約五年前に母を一人で逝かせてしまい、それがどうし
ても残念で、自分を許すことができませんでした。利三郎牧
師の召天を通して、再び信仰を与えられた後でも、母のこの
事は心の底にじつと抱え、むしろ大切にして、あたかもそれ
が母との絆をつなぐ事で有るかのように入れて、自分を責め

ていました。そして自分もその様な死に方を願っていました。
この辺の事に思いがいきますと、いつも絶望で苦しくなりま
す。ところが今回、百合子先生の召天を通して、「そういう思
いでいる事は、『全ての事を統べ治める』という神様を信じて
いない事だと示していただきました。そうだ！神様が許して
起こった事なのだ。私達を神の子と呼んで下さる神様がなさ
った事なのだ。とすれば、私達に一番良い事をしてしてくれて
いるのだ。この神様を信じて、苦しみを握りこまないで、離し
て、任せれば良い、委ねれば良い、委ねるといふ事がどんな
事なのか、今回悟ることができました。大切な大切な母の事
で、やつと安心が与えられました。心の大きな刺が抜かれま
した。もう一度、神様を信頼し、感謝できるようになりまし
た。

これも百合子先生が、新年礼拝を終わって、会堂の玄関で
写真を撮った時、笑顔で「尼田さん……」と微笑んでくださ
って、その笑顔を最後に、突然私達の目の前から消えてしま
った感じです。実に鮮やかで、またそれだけに、突然何処か
から現れて来そうな気がしますが、最後の最後まで私に
大切なメッセージを残して下さったと、驚きと尽きない感謝
をしています。

榎本百合子師の思い出

安 東 倫 子 (前田)

〈夏期学校〉

今から三五年前、八幡前田教会と大濠公園教会の合同夏期学校に参加させていただいた時、私は会計をさせていただいた。初日、現地でのこと、申し込みの人数と金額が合わなかった。責任を感じていろいろと悩み、遂に奥様に申し上げました。奥様は笑顔で、「それでよいのですよ」と答えがあり、私もほっとした。

雨天になり、外で遊ぶ楽しみを奪われた子供達に、何か美味いものでもと、奥様の発案で博多寿軒の「かしわ飯弁当」が注文された。会計からすると、どう考えても、あの参加費では全員へのかしわ飯弁当は買えないのに？今考えると、奥様の言われる「天国そろばん」なるものがあつたかしら……。奥様の子供達への愛と信仰とを知らせていただいた。

〈会堂掃除〉

三五〜三六年前、毎週土曜日の夕方、青年会の兄姉が三々

五々集まり、会堂の掃除をしていた。遅く来る人のために、窓ガラス拭きなど一箇所を残しておいた。掃除が終わると、奥様の手作りのおやつが出てくる。それを楽しみに会堂掃除には、遅くなくても参加していた。食パンの耳の入った蒸しパンや庭のピワも出た。ある時はイチジクも出た。イチジクは食糧事情がよくない時代に、奥様が食事代わりにされたと伺った。このように牧師館の食卓上がるものを、私達のために準備しておいてくださっていた。

〈教師会での食事〉

ある年の教師会で、常夜鍋が出された。私は前日に奥様からお話があり、早めに牧師館に伺い、お手伝いをさせていた。NHKの「今日の料理」の本を参考にされ、また実践されていた。そして、料理を始める前には、必ずお祈りをされていた。そして、料理は美味しかった。

〈新婚時代〉

咲子姉と私達が結婚したのは昭和四七年、咲子さん達が一カ月半早かった。それで、よく心に掛けてくださった。ある時、咲子さんと「婦人の友の講演会があるので行きませんか」と、チケットを戴いた。「帰りに、魚町の宇佐屋のうどん

を食べていらつしやい。美味しいですよ」。母の愛の細やかさを知った思いがした。

〈福岡大濠公園教会にて〉

昭和五十年、前田教会が新しくなった二カ月後、夫の転勤で福岡へ。当時は利三郎先生が大濠公園教会と兼牧されていて、火曜会にはご夫妻で福岡に来られていた。昼夜二回、集會が持たれていた。私達の二人の子供達も夜の集會に出て、「ゆりこせんせい、せんせい」と、自分の成績表のことまで話していた。いつも笑顔で、うなずいて聞いてくださったので、何でも話していた。優しい「大お母さん」という印象であった。

〈東京にて〉

昭和五九年に、夫の転勤で東京へ行った。渋谷教会で礼拝を守らせていただいた。渋谷では、前田教会出身の兄姉が集い、集會が持たれていた。私達にとって、東京で榎本先生ご夫妻に、特に私には信仰の母に会えると楽しみにしていた。千葉の富津の青堀教会での特別集會にも導かれた。ある時は、先生ご夫妻と一緒にホテルに泊まらせていただいた。大変お世話になった。

〈京都にて〉

平成四年八月、夫の転勤で京都に住んだ。京都の清和教会の隣りに、佐伯産婦人科医院があり、奥様の親戚の方が居られるので、訪問してくださいとお話があった。お訪ねして、榎本先生ご夫妻の近況をお話申し上げた。その方はお別れに、「百合ちゃんによろしくね」と伝言があり、その事をお伝えしましたら、電話の向こうで女学生のような声が弾んでいた。また、京都が大変お気に入りの様子であった。ある時、体調を崩されて、「癌」かもしれないので最後の旅行と思いい立ち、京都へ行かれた。後で笑い話となったとか。

奥様の好物とお聞きしていたので、「生八橋」をお持ちしましたら、思わずポロリとこぼされた。人間味が溢れていた。百合子奥様の証しは、ご自分の失敗談を通して、御言に立ち返るということ、笑いながらお話される姿は和やかで、従う姿勢を示された。いつも笑顔を絶やさない。健康のバロメーターは、笑顔の状態で分かった。

牧師館のお茶を飲むほど恵まれるという諺があるが、美味しい物を戴き、お祈りしていただいて、私共の今の力が与えられ、深く感謝している。



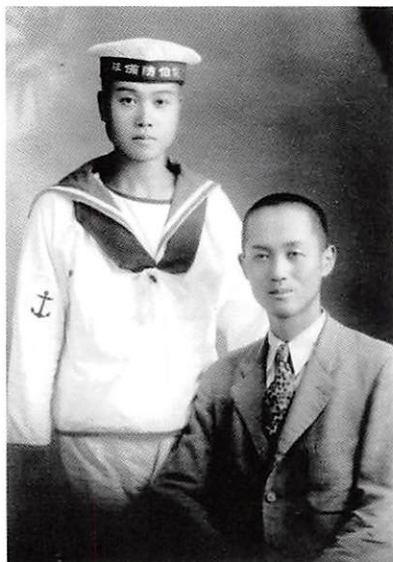
思い出の写真集



先生の思い出



1953年(昭和28年)夏、東京にて



出征した弟(佐六)と共に



1958年(昭和33年)頃



1975年(昭和50年)頃
青堀教会特別集会

1976年(昭和51年) 新年聖会



1977年(昭和52年) 新年聖会



1983年(昭和58年)
新年聖会

1979年(昭和54年)
新年聖会



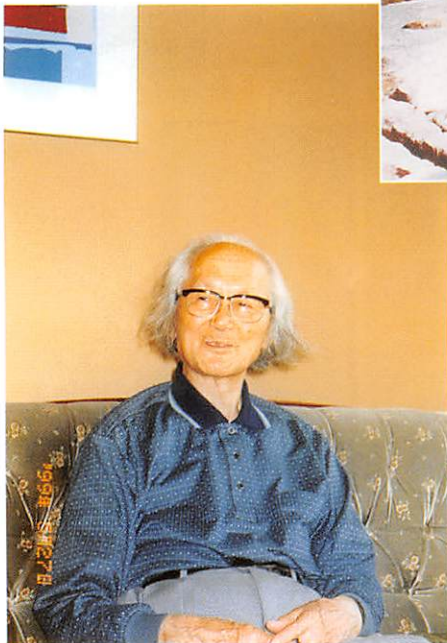
2002年(平成14年) 新年聖会(最後の聖会御用)



洗礼式で祝祷をなさる先生



先生の兄弟たち
(武史、孝吉、佐六、先生)



1999年(平成11年)

百合子先生の思い出



3歳頃、御両親と



1歳前後の先生



女学校入学前



稚児姿の姉弟



1953年(昭和28年)冬(38歳)



結婚前



1997年(平成9年)
82歳誕生日お祝い

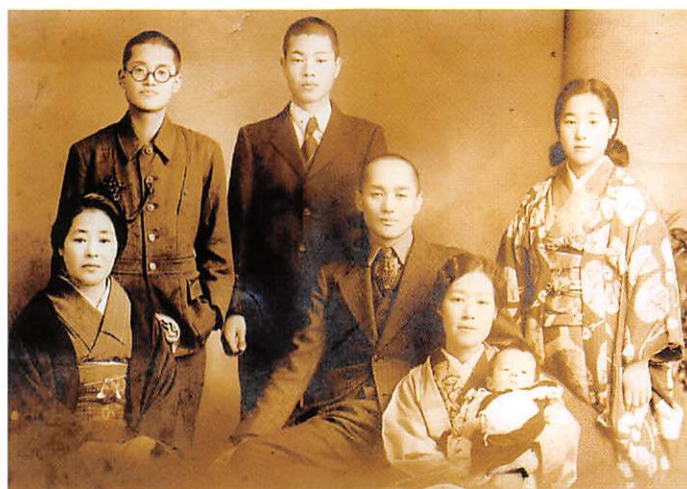


1999年(平成11年)

お二人の思い出



結婚間もないお二人



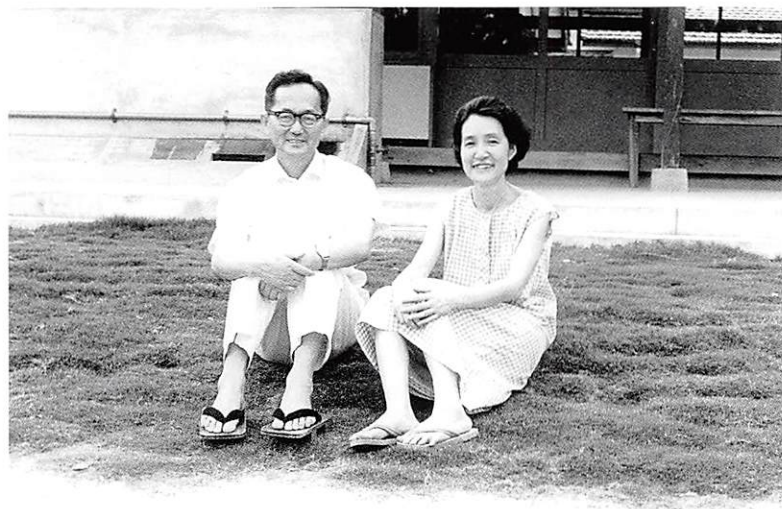
1942年（昭和17年）
百合子師の弟（順亮）、出征記念



1953年（昭和28年）



1962年(昭和37年)
1月4日



1971年(昭和46年)頃 夏期学校(津屋崎教会)でのひととき



1965年(昭和40年) 結婚25周年記念



1970年(昭和45年)
2月26日 佐世保
結婚30周年記念
(先生60歳 奥様54歳)

海外旅行の思い出

1978年（昭和53年）
ナイアガラの滝にて
鈴木兄弟御一家と



1978年（昭和53年）
ニューヨーク
国連本部前にて

1980年（昭和55年）
パリ
ベルサイユ宮殿にて



国内旅行の思い出



1973年(昭和48年)

岡山 後楽園にて



1987年(昭和62年)
婦人会旅行の折
雲仙 宮崎旅館にて





1976年(昭和51年) 新年



末永邸にて



1990年(平成2年)
萩の海岸にて
(結婚50周年記念)



1991年(平成3年)



1996年(平成8年)
雲仙遊歩道



1997年(平成9年)
百合子師
82歳誕生日御祝

1998年(平成10年)
河内ダム



1999年(平成11年)
湯布院郊外





1997年(平成9年)
上五島浜の浦(散歩中)



2000年(平成12年)
牧師館でくつろぐお二人



2001年(平成13年)
百合子師
86歳誕生日御祝
(八幡ロイヤルホテル)

御家族の思い出



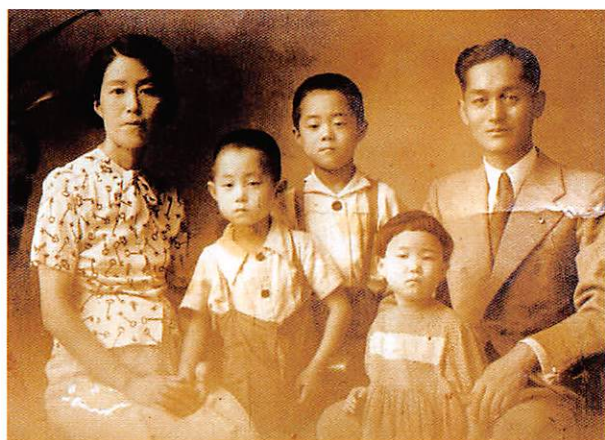
1942年(昭和17年)
和義先生誕生



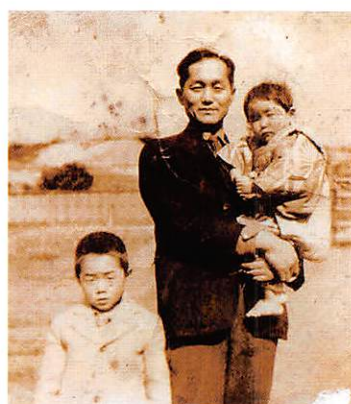
1946年(昭和21年頃)
河本兄宅での礼拝後



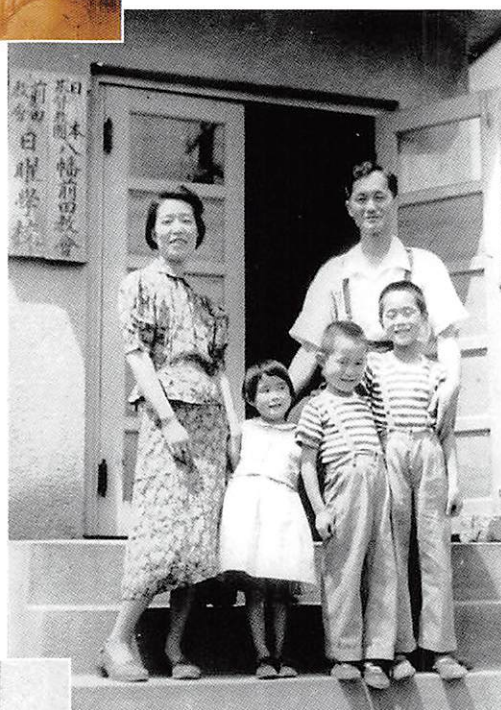
のぞみが丘時代



1948年(昭和23年)頃



のぞみが丘時代



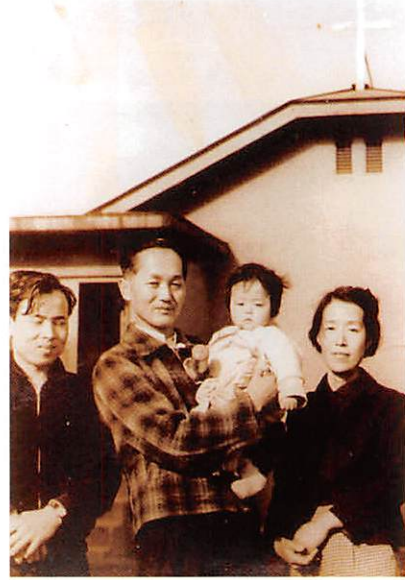
1948年(昭和23年)頃



1951年(昭和26年)、誠さん誕生



1952年(昭和27年)頃



1952年(昭和27年)頃

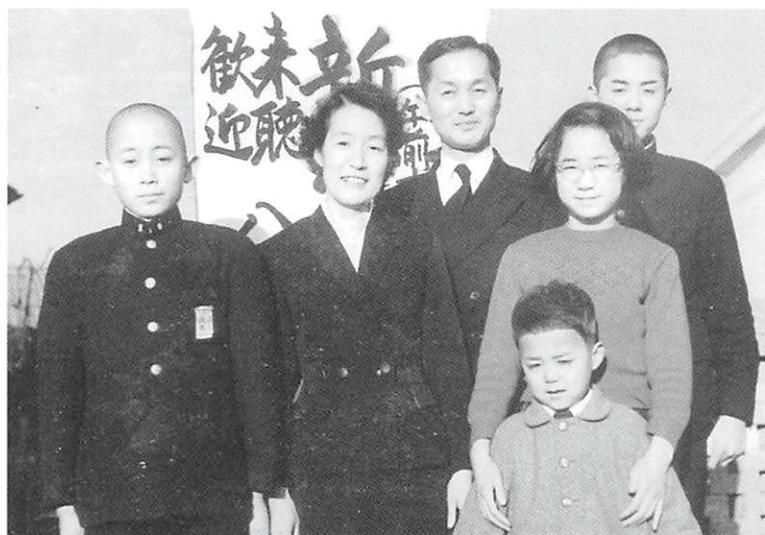


1955~1956年(昭和30~31年)頃

1957年(昭和32年)頃



1956年
(昭和31年)頃



1958年
(昭和33年)頃



1961年(昭和36年)
クリスマス



1966年(昭和41年)頃 和義先生が大学院生



1970年(昭和45年) 初孫誕生



1973年(昭和48年)



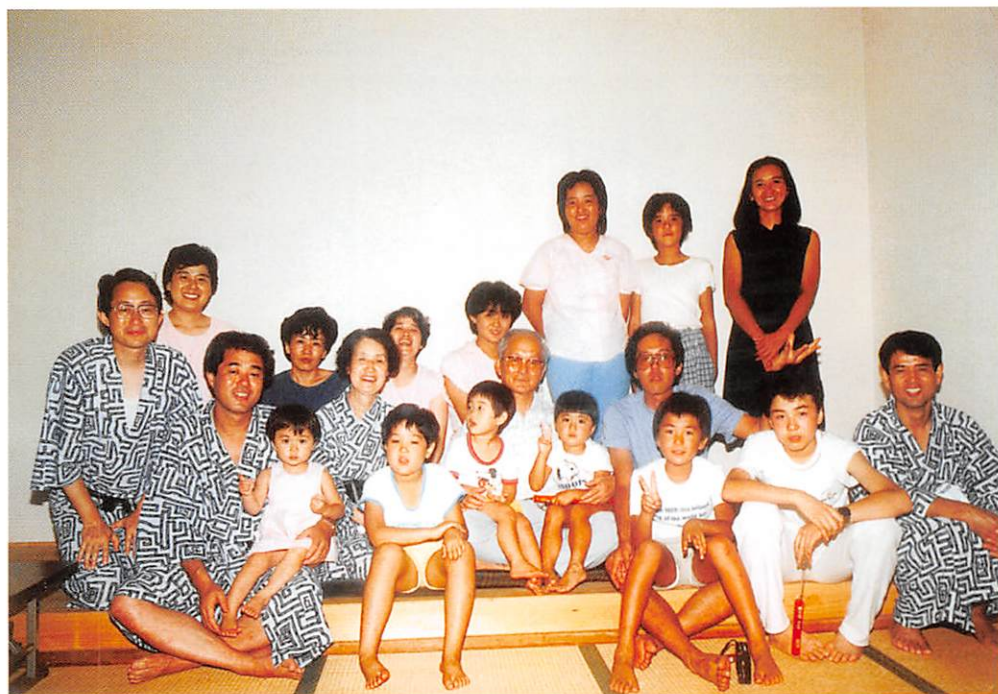
1974年(昭和49年) 旧牧師館前で



お孫さんたちに囲まれて



1991年(平成3年) 新年



1985年(昭和60年)7月 生前告別式(先生の喜寿を祝って)



1999年(平成11年)結婚60周年記念

編集後記

- ◎ 榎本利三郎先生が主の御許に帰られてはや四年、百合子先生が召されて三年が経ちました。早くから、記念誌をという願いはありましたが、ここに漸く発行することができて感謝です。
- ◎ 記念誌発行の呼びかけに、早い時期に多くの方から思い出の原稿を送ってくださいましたが、諸般の事情で遅れましたことを、お詫び申し上げます。
- ◎ 当初は教会誌「ぶどうの木」の特集で、と考えていましたが、榎本先生ご夫妻が命を懸けて証してくださいましたと主の御業をできるだけだけ記念し、これを後世に残す必要を感じて、一冊の本としてまとめるとにしました。
- ◎ このため、できるだけ資料を収集し、写真も可能な限り掲載しました。こうして写真を並べてみるだけで、その時々のご夫妻の足跡が偲ばれます。
- ◎ この記念誌が多くの方に読まれて、先生が歩まれた信仰に倣うものとなり、主が崇められてくださるよう祈ります。(S)

編集責任者

基督伝道隊 八幡前田教会

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本和義

発行者

基督伝道隊

八幡前田教会

北九州市八幡東区前田一―一〇―三

福岡大濠公園教会

福岡市中央区鳥飼二―二―二六

戸畑教会

北九州市戸畑区小芝二―一―一三

発行年月 二〇〇六年(平成十八年)四月

印刷製本 北九州印刷株式会社